
新生太陽の勇者 ファイバード・サーガ～破壊生命体襲来～

ポーラスター

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

新生太陽の勇者 ファイバード・サーガ〈破壊生命体襲来〉

【Nコード】

N6034T

【作者名】

ポーラスター

【あらすじ】

1996年、巨大宇宙生物が関東地方に隕石と共に飛来し、未曾有の惨事を引き起こした。

自衛隊によって辛くも駆逐されたが、その代償は市の消滅という大いなるものだった。

時が流れ2009年初冬。桜高軽音部のベ이스ト、秋山澪に恋心をいだく火鳥勇士郎は、彼女との距離を縮めたいが為にツレと共に桜高の文化祭へと足を運ぶ。だが、その先には想像を超える運命が待っていた……。

オリジナルアレンジされた勇者達と漣を中心にいけいおんのキャラ達が織り成す、恋アリ、バトルアリ、人間ドラマアリの作品です。

第1話 「勇者降臨」(前書き)

一部の勇者シリーズとけいおん!の二次小説です。ですが出てくる勇者達の設定が原作とは異なっており、パトレイバーのイングラムが超AIをもっていたり、立川で暴れている某謎の生物をモチーフにした巨大エイリアンが敵だったりします。

一部残酷な描写もあつたりします。

その他足りなかったり、甘い描写もあると思います。

不快と思われた方は退室していただいてもかまいません。

第1話 「勇者降臨」

バード・サーガ

新生太陽の勇者 ファイ

命体襲来

破壊生

プロローグ

西暦1996年。日本列島の関東地区に隕石が落下した。市街地に甚大な被害を与えただけでなく、その隕石の内部から未知の巨大破壊生命体が出現し、人々を捕食・蹂躪しながら未曾有の惨事を引き起こす。

それは人類史上かつて無い震災すら勝る、最悪な惨事であった。

街の人々が女子供関係なく殺戮されていく光景はまさに地獄絵図に等しかった。

喰われる人々……。

辛くも自衛隊の特殊爆弾によってその生命体は駆逐されたが、その特殊爆弾によって一つの都市が消滅するという代償を払う事となった。

後にこの地球外特殊生命体は、「C 01」と呼称される。

Cとはクリーチャーの頭文字の事である。

この事件を期に、自衛隊は激しく非難を浴びることとなり、防衛庁は特殊生物への対策権を警視庁に譲渡。そして警視庁は、超AI完全対応型戦闘警備システム、ジェイデッカーとそのサポートを担当する同システム、レイバーの開発に着手する。

時期を同じくして大手鉄道民間企業、「旋風寺コンサル」も誇れる技術力を持って、特殊生物の対策協力に乗り出し、同じく超AIを搭載したマイトガインを旧知の大手企業「(株)KOTO BUKI」と合同開発することに成功する。

各組織が対特殊生命体対策に奮闘するも、その10年間に特殊生物の事件は起きることはなかった。

しかし、それからさらに3年後の2009年初冬。再び地球に地球外のモノが飛来しようとしていた。

隕石が一つ、大気圏の摩擦熱を帯びながら地球に落下していく。

その話題を聞きつけた人や、学校の生徒で体育館はひしめくほどに混雑している。

男子グループの一組が、体育館を目指す。

火鳥 勇士郎 「やつぱ華やかだよなー、女子高は。ウチの男子校とは大違いだぜ。」

伊橋 蓮 「勇士郎。お前が惚れたっていうJK、ここの軽音部のコなんだろう?」

三島 俊 「一体どんなコなんだよ?」

早瀬 光 「軽音部の他の女子もどんなコなんだろうな?楽しみだぜ。」

勇士郎 「ま、まー、見てみりゃわかるってよ!」

彼らが言うように勇士郎という工業高校へ通う少年は、桜ヶ丘女子高の一人の生徒に恋をしていた。

きっかけは、去年の桜ヶ丘女子高の学園祭だった。

勇士郎の姉が桜ヶ丘女子高の吹部として最後の演奏会が学園祭で催されていた。

最後という事もあって弟として見に行っていたのだ。

その演奏会の後に軽音部のライブがあった。

勇士郎は、はじめはついで程度の感覚で見えていこうとしていた。

だが、幕が上がると同時に勇士郎は、4人いる軽音部内のベイスストの1人に一目惚れをしたのだ。

最も恋の影響を受けたのは彼女がボーカルで歌った瞬間だった。

その歌声や、ベースのテクニク、綺麗さとカツコよさを併せ持つ凛としたルックス。彼女の全てに勇士郎は心を奪われた。

今回は、そのベイスストの女子との距離を縮める為に学園祭へ友人達と赴いたのだ。

俊 「勇士郎はどうやってそのコとの距離縮める気だ？」

勇士郎 「……わかんねー……。」

俊 「なんじゃそりゃ。」

蓮 「そーいやあ、タベ丹沢の方に隕石が落下したじゃねーか。そっちも行って見たかったよー。」

俊 「行ったところでケーサツや軍人に追い払われるだけさ。それにチヨット遠いし……。」

光 「てつきりはじめは、地震かと思っただぜ。ベットの下に急いで入っちゃった。」

蓮 「おめー、ビビリだなー。」

光 「うっさい！」

そんな会話をしながら廊下を進んでいくと、やがて体育館の入り口が見えてきた。

勇士郎 「結構混んでるなあ……流石に注目されているだけある。」

勇士郎いわく、人混みの激しさが軽音部の注目度を示していた。

俊 「あの中におまえの愛しのコがいるんだな。で……どうするんだ？」

勇士郎 「と、とりあえず演奏聴いていきたいから、見てくぜつ。」

蓮 「今の時点で赤くなっててどうすんだよ。」

幕が上がり始め、スタンバイしていた彼女たちの姿が徐々に舞台上に姿を現していく……軽音部のメンバーが1人増えていた。ツインテールの小柄なかわいらしいコだ。

勇士郎の意中の少女は、その新メンバーの左側に立っている。

幕が上がっていくに従い、拍手が体育館に響き渡り、やがて幕が上がりきると会場はしーんとなる。

勇士郎達もこのタイミングで体育館の中に入った。

光 「うわ・・・思った以上すげー人。とても座れん。」

蓮 「とりあえず立ち見するしかねーな。で、どのコなんだよ
勇士郎？」

勇士郎 「あの黒髪のストレートのコだ・・・。」

蓮 「めっちゃルックスがイーじゃんか?!」

光 「てかみんなカワイーコばつかだ・・・俺はショートカ
ットのギターのコがタイプだな！」

蓮 「ドラムのコ、俺と同じで前髪にカチューシャやってるじ
ゃねーか!! 気があつたりして」

俊 「おい、ライブ始まるぜ。おめーら静かにしろっ。」

蓮・光 「へい、へい・・・。」

ショートカットのギターのコによるMCが始まる。

ショートカットのギターの桜高生 「みなさんこんにちは! 放
課後ティータイムです! なんかー、昨日の夜は隕石が落ちたとかで、
みんなも色々と不安な思いをした夜だったと思うんですけど、そん
な不安もどっかへ飛ばしちゃうおうと思います! みなさん一曲目、聴
いてください! 『ふわふわ時間^{タイム}』!」

ドラマーの桜高生 「1・2・3・4!」

ドラマーの1・2・3・4のタイミングで演奏が始まった。ド

ラム、ギター、キーボード、そしてベースの音が合わさり一つの曲が奏でられる。

タイトルは「ふわふわ時間」。勇士郎が去年初めて聴いた彼女たちの曲だ。

勇士郎（去年聞いたあの曲……。）

俊「本格的じゃん……！」

MCをやったギターのコと勇士郎が惚れているベースのコのツインボーカル。

また勇士郎は歌声に魅了される。誰しも好きなコの声を聞くのは、ましてや歌声を聴くのは心地がいいものだ。

俊「完全オリジナルの曲か……スゲーなあのコ達……。」

俊も彼女らが奏でるプロ顔負けのサウンドに驚愕する。

蓮「ヤベーな、マジ。」

光「ああ。とても俺はできねーや。てかギターのコの声マジかわいい……俺、惚れそうっ！」

俊「おまえも恋が芽生えたか……。」

光「悪いか?!」

俊「いいや。いいんじゃないね？頑張ってみろや勇士郎と。」

光 「そう言うお前はどつなんだよ？」

俊 「べ、別に。」

光 「とか言っただけになっただけいるんだな？」

俊 「さーな……。」

勇士郎 「やっぱ……綺麗だ……ベースの。」

一方、場所は変わり、立川の警視庁管理地。本日新たな特殊部隊が発足しようとしていた。

その名も「M・P・D・BRAVE」。

防衛庁の後釜として創設された、警視庁の対特殊生命体対策部隊だ。

部隊の隊員は隊長とオペレーター隊員2名、ジェイテッカー、ガンレイバー、ショットレイバーで構成されている。

他の部隊との相違点は、運用されるメカも隊員として見なされている点である。

人格を持つゆえに人員として認められているのだ。

ちなみに、レイバーズの名称は彼らにプログラムされている専門の武器からとられている。

拳銃と格闘専門がガンレイバー、射撃系の援護専門がショットレイバーだ。

部署の拠点は、物理的に本部に置けない為に立川の広大な土地に置かれた。

青空が広がる中、発足に伴う式が立川本部で行なわれていた。

M・P・D・BRAVEの隊長、要誠人が勇ましく警視総監に向かい部隊挨拶をする。

要 誠人 「本日より、我々6名はM・P・D・BRAVEに着任すると共に、いかなる特殊生物の事件も、市民の安全の為に断固とした意志で立ち向かう事をここに宣言致します！」

ピツと敬礼し部隊挨拶を決める要達。

立ち会っている警視庁関係の警察官達から拍手がなりはじめる。

レイバーズの2機も敬礼をしているが、ジェイテッカーは「ロダー」というトレーラーモードのままだった。

冴島十蔵警視総監 「これより、M・P・D・BRAVEの要役、ジェイテッカーの変形を皆さんに披露したいと思います……要警部。」

要 「はいっ！ジェイデッカー、ブレイブアップだ！」

ジェイデッカー 『了解！』

Jローダーのヘッドライトがジェイデッカーの音声に連動して光る。

そしてJローダーが青白い光りを噴射しながら車体を起こし、空中へと上昇していく。

Jローダーが各部分を変形させ始める。

アーム部分やレック部分に変形しロボットの面影を形成していく。

ウィング部分も形成されていく。

ツインアイカメラの頭部が出ると完全に変形、ジェイデッカーは叫びながらキメる。

ジェイデッカー 『ブレイエエイブアップッ！ジェイデッカーッ！ー！』

警視庁関係の警察官や報道陣達 「おおおおー！」

驚きと歓喜の音が響くと、警察官や報道陣達に向かって着地しながら改めて、ジェイデッカーとレイバーの2機が挨拶をする。

ジェイデッカー 『改めて挨拶させていただきます！私が本日、M・

P・D・BRAVEに配属されましたジェイデッカーであります。今後とも特殊生物による事件、それ以外の犯罪にも立ち向かう所存です。どうぞよろしくお願い致します！」

続いてレイバー達が敬礼をしながら挨拶をする。彼らもまた音声に連動してカメラが光る。ちなみにレイバーズはゴーグルタイプのカメラだ。

ガンレイバー 「ジェイデッカーと共に配属されました、レイバーズです！」

ショットレイバー 「我々2名は、ジェイデッカーの補佐を勤めると共に、あらゆる事件に立ち向かう事をここに誓います！」

創設式が終わるとここから彼らの仕事の始まりだ・・・しかし現実にはすぐにまともな仕事はなかった。

各員がそれぞれの仕事の持ち場につくも、先程の式が嘘だったかのようにだらける。

仕事といえば、雑用の処理しかなかった。オペレーターの葉山洋介が愚痴をこぼす。

葉山 「はあ・・・着任早々これしかないんですか・・・隕石落ちたんでしょ？なんで我々の方に出動要請がないんですか？」

愚痴をたらず葉山にセカンドオペレーターの吉崎レイナが叱咤する。

吉崎 「しょうがないじゃない。落ちたのは隣の神奈川県だっ

たんだから、神奈川県警の管轄よ。ほら！雑用の処理もやるべき立派な仕事！さつさとやる！」

葉山 「は、はい・・・スンマセン・・・。」

吉崎 「ジェイテッカーやレイバーズはしっかり仕事してるよ？」

渋々と雑用を処理し始める葉山。どこか頼りなさそうな一面を持つ。

対して吉崎は、綺麗な上に優秀だが多少男勝りしているしっかりとした女性だ。

要とジェイテッカー、レイバーズ達は自分達が普段の仕事をする場所や寝泊りする施設の整理をしていた。着任仕立ての為にまだメンテナンスドック内の機材類等は未整理のままである。

要 「悪いな、お前たち。まだこういった雑用的な仕事やデーター処理的な仕事しかない。モノ足りないと思うかもしれないが、ガマンしてくれ。」

ジェイテッカー 「隊長、自分はそんなことは思っていない。それに自分達なら、人では持ち運びが困難な機材も、運べる範囲までは容易くできますからね。ですが、一つ疑問が。」

要 「なんだ？」

ジェイテッカー 「隕石が落下したという情報がありますが、我々への出動要請はないのですか？」

要 「確かに昨夜、関東地方の山間部に隕石が落ちた。だが、隕石は神奈川県の間部に落下したそうだ。隣の県警と自衛隊の管轄になるからな。それにクリチャー関連の情報も入ってはいない。」

シヨットレバー 「ま、今はできる仕事をやりましょう!」

ガンレイバー 「平和が何よりっすよ。あ、この機材どうします?」

要 「あゝ・・・それはそこでいい。それにしてもお前たち・・・本当に人間のようだ。すごい。」

ジェイテッカー 「お褒めの言葉、ありがとうございます。ですが、まだまだです。これから得ていかなければならないデータは山ほどありますから。」

要 (これが超AI・・・ほとんど人の感情そのものだ!!)

一方、旋風寺コンツェルン・マイトガインパドック。

ここではロールアウト間近のマイトガインが眠っていた。

JRと肩を並べるほどの大手鉄道会社故にマイトガインのモチーフは列車だ。

両肩は新幹線、300系のぞみと400系つばさを模しており、ボディはメカ的にアレンジされているが、数少なくなったSLを模している。

このマイトガインの機構は超AIを搭載しながらも、パイロットも搭乗して操縦するというジェイテッカーとは異なる機構を備えていた。

最終メンテナンス中のマイトガインの許へ、パイロットである旋風寺コンツエルン御曹司、旋風寺舞人がやってくる。

旋風寺舞人 「これが、俺が乗り込むマイトガインか。」

マイトガイン整備士 「これは、舞人さん!!」

舞人 「もうすぐでロールアウトなんだな。」

マイトガイン整備士 「はい!ご覧のとおり着々と最終調整を進めています。」

舞人 「俺はこのマイトガインでクリーチャーを討つ・・・!!」

マイトガイン整備士 「しかし、御曹司でいらっしやる舞人さんが何故最前線で危険な役柄を?」

舞人 「俺は、自らの意思で志願したんだ。俺自身は人々の為に戦いたい!!誰かが危険を犯してクリーチャーと戦うのならば、この俺が戦う!!人の上に立つ者は常に最前線に立つべきだと俺は考える!!」

舞人は、固い決意の眼差しをマイトガインに向ける。

再び桜ヶ丘高校。学園祭も終わり、時間帯的にも日が落ちて夜になっていた。

だが、それでもここの学園祭は終わらない。

学園祭最後のイベントのキャンプファイヤーがあるのだ。

軽音部のメンバーもキャンプファイヤーを見ながら今日の反省をしていた。

勇士郎が惚れている軽音部の少女、秋山澪がキャンプファイヤーを見つめながらぼつりとつぶやく。

秋山 澪 「きれいだなあ……。」

田井中 律 「いやー……ひどい演奏だったな。」

その横でドラマーの律がダメだし反省する。

彼女らからしてみれば今日のできはグダグダだったようだ。

さらにその横からツインテールのおさげが特徴的な小柄のギタリスト、中野梓が先輩のギタリスト、平沢唯と同じくダメ出しを迫る。

中野 梓 「唯先輩のせいですっ！」

平沢唯 「ひいひい!？」

梓 「出だしのリフできてないし、歌詞忘れるし……ギターのソロも滅茶苦茶だったですよ！」

唯 「ううう……風邪で練習できてなかったんだもん……」

梓 「それも唯先輩の自業自得です！」

後輩にダメ出しをくらいながらくだぐだな唯を見ながら漣がつぶやく。

漣 「クスッ……なんかこの感じ久しぶりだな。」

律 「そーだなー……そうわれりゃこのノリも久しぶりだな。軽音部ここにありってか。」

キーボードの琴吹紬がこの光景をにこにこ見つめている。

ちなみに彼女は(株)KOTOBUKIの社長令嬢である。

更にその光景を影から勇士郎達が見ていた。

結局のところきっかけを作りそびれて今に至るまでズルズルと来てしまったのだ。

勇士郎 「……無理っ。」

俊 「だな……諦める。今行ってもあからさまに不審者だ。ただでさえ野郎なのによ。」

光 「結局現実的な結果になったな。ま、俺も同類だけど……」

蓮 「俺もそろそろバイトの時間だ。行かなきゃなあ。」

俊が勇士郎の方に手をぽんと置き、せめてものアドバイスをする。

俊 「まあ、普段の放課後でもいいんじゃないか？どうせ帰宅部だし。」

勇士郎 「そ、そうだな。今行きや确实玉砕だ……そうするか……。」

勇士郎達が桜高から引き返そうとしたその矢先、突如として巨大な地震が発生した。

ゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴオオオオオオオオオオオオオオオオオ……！！！！！！

勇士郎 「うお！？！地震？！……」

俊 「でけーぞー！！これー！！……」

光 「マジで動けねー！！……」

蓮 「くうううううう！！でけええええっ！！……」

音部の漣達もいた。

俊が目の前にいる女子たち全員に全力で叫ぶ。

俊 「みんな、とにかく校門側へ逃げろ！！ここに居ちゃみんなやられる！！とにかく校門側へ逃げんだ！！！」

なんとか俊の声に応えてくれる女子達。代表するかのようになんとか俊に叫ぶ。

律 「ああ！！わかった！！立て、漣！！いくぞ！！！」

漣 「あ、ああ・・・！！！」

急いでその場を離れようとする、漣と律。だが、メンバーの数がまだ立っていないでいた。

漣 「律！まだ唯達が！！！」

律 「え！？！」

漣 「ここは任せろ！！先にいけっ！！！」

走ってきた漣が、漣達に走りながら叫んだ。

律 「わ、わかった！！！」

漣 「大丈夫か！！？立てるか！！？とにかく校門の方へ逃よう！！！」

・・・

漣と律 「え・・・きゃあああああああ!!?」

2人を食わんと迫り来るクリーチャー。だが次の瞬間、二人を思いつきり勇士郎が両手で押した。

勇士郎 「うおおおおおおお!!!!」

漣と律 「!!!」

どんっ・・・ドガアアッ!!!!

勇士郎 「ぐはあああっ・・・!!!!」

ドゴガアア・・・ボワアアアアアア・・・

漣と律は勇士郎に押され九死に一生を得るものの、勇士郎は思いつきりクリーチャーに吹っ飛ばされ、キャンプファイアの火の中へと頭から突っ込む。

頭部を強打し、体が燃え上がる。体は燃えているにもかかわらず動かない。

律 「うそ・・・あの男子、私達をかばって・・・!!!!」

漣 「うっ・・・!!!!」

目を瞑りながら視線をそらす漣。ただでさえ痛々しいビジョンが苦手な彼女にとってこの光景は耐え難いものだった。

俊・蓮・光 「勇士郎おおおおおっ!!!」

誰がどう見ても即死だった。

蓮 「あいつ・・・好だった子をかばって・・・バカヤロウがああ!!!」

しかし悲しんで入れなかった。再度暴れるようにクリーチャーが這いずり回っている。絶望すら許されない空間。

恐る恐るゆっくりとまぶたを開ける漣。

だが、開けたタイミングが悪かった。

最悪なビジョンが漣の瞳に映し出される。

逃げ遅れている女子達を捕らえ、ガブンツと一口で捕食するクリーチャー。生徒達の血が吹き出る。

さらに触手を伸ばして怪我をして動けない女子生徒を掴み取り、触手の先端にある口がガシユガシユと肉を食いちぎりながら捕食する。

女子生徒 「ヴいやああああああっ!!!」

悲痛な悲鳴を上げながら死んでいく・・・。

見た事も聞いた事もない死んでいく同級生の光景と悲鳴。目を覆う事すらできずに涙を流しながらその場に崩れ落ちる漣。

超えてはいけない精神の限界を超えてしまったのだ。

絶望に次ぐ絶望……だがその時、奇跡が起きようとしていた。

プラズマ状の輝く一つの球体が、突如として空から現れ、炎の中で息絶え行く勇士郎に舞い降りた。

蓮 「あれは?!」

律 「今度はなんなんだ?!?」

プラズマ状の球体は、勇士郎と一体化した。

薄れゆく勇士郎の意識に話しかける意思。

? (私は君のその勇氣ある行動に感動した。)

勇士郎 (あ……あんたはいつたい……だれだ……?)

? (私の名は、ファイバード。宇宙警備隊の者だ。)

勇士郎 (う、宇宙警備隊?!なんだそれ!!?)

ファイバード (ブレイブ宇宙警察機構の中にある宇宙警備部隊だ。だが、我々はエネルギー生命体である為、その他の惑星内の事件に対応する時は、なんらかの機械や物に融合しなければ力が発揮できない。基本は異星生命体に融合するのは規制されているが、

今回ばかりは異例の措置を執ろうと思う。()

勇士郎 (異例の措置って・・・?)

ファイバード (君と融合する。そうすることで君の命を救うことができる。それと同時に、デストリアンと闘う力を君に与える事もできるんだ!)

勇士郎 (デストリアン?!あの怪物の事か?!)

ファイバード (そうだ。あらゆるモノや生命の命を破壊する、謎の宇宙破壊生命体。近年この太陽系にも現れ始めたんだ。私は奴を追って来たのだ。既に犠牲者が出てしまったのが非常に悔しい限りだ!)

勇士郎 (・・・だったら俺と今すぐ融合してくれ!!! あいつをブツ倒してえっ!!! 罪もない女の子達を食いやがったデストリアンが、ムカついてたまらねえっ!!!)

ファイバード (よし!私の力を与える!!!名はなんていうんだ?)

勇士郎 (勇士郎。火の鳥と書いて火鳥勇士郎!!!)

ファイバード (勇士郎!共に闘うぞ!!!)

キュアアアアアアア・・・ヴァゴオオオオオオオオオオオオオオオオオッ!!!ギュゴオオオオ・・・ギュオオオオ・・・

倒れていた勇士郎が立ち上がり、光を帯び始め、キャンブファ

イアーで燃えていた炎が、勇士郎をまとうように呼応して猛りはじめる。勇士郎を燃やしていた炎が逆にエネルギーへと転換されていく。

俊 「勇士……郎……??！」

ゾドドドドドオオオオオ!!!

蓮 「またこっちに来やがる!!!」

再びクリーチャーことデストリアンがリターンしてもものすごい速さで漣と律に迫る。今度こそ捕食されるのは必死だった。

律は即行でその場を逃げるが、漣が恐怖の余り、涙ぐんでその場へたりこんでしまう。

律 「ばか!!!何へたり込んでんだ!!!」

振り返った律が連れ戻ろうとするが、迫るデストリアンのスピードは、尋常ではなかった。

漣 「もう、いやだ……。」

律 「漣おおおおっ!!!」

絶体絶命。だが、次の瞬間、光の球体がデストリアンに突っ込んだ。

ドゴガアアアッ!!!

ズズズゴオオオオオオ・・・

大蛇のような巨大なデストリアンの体がスライドしながら校庭の方へと吹っ飛ぶ。

光をまとった勇士郎が飛び蹴りをくらわせたのだ。ありえないパワーだった。

漣 「え・・・???!」

目の前に起こるミラクルな事態に驚愕する漣。

スライディングしながら着地した、勇士郎が漣に駆け寄る。

勇士郎 「大丈夫!? 怪我はない?! た・・・立てる?!」

勇士郎は、漣に手をかざすも好きな女の子を前にしているため、この状況下でもやや緊張してるようだった。

漣は涙を瞳に浮かばせたまま首を振る。

勇士郎 「そ・・・そうか。じゃあ、つかまってて。」

漣 「・・・!」

キュオンツ!

勇士郎は勢いで漣をお姫様抱っこすると、律達がいる所へ低空を走るように高速で送り届ける。

澪は下ろしてもらおうと、恥ずかしげな声で勇士郎から視線をずらして一言礼を言う。

澪 「あ……ありがとう……。」

勇士郎 「あ、いや、俺はその……助けてあげたかったから……君の事……。」

勇士郎も恥ずかしさを隠せずにテンパリだす。お互いに赤面していた。

その後ろからガバツと澪に抱きつく律。

律 「みお〜！よかったああああ。あんた、ホントサンキュー！！なんでそんなパワーあんのかなんてどうでもよくなった！！」

澪 「律う……。」

澪も律の肩に泣き崩れる。緊張が半分解けたカンジのようだ。その後ろから俊達がやってきて勇士郎に駆け寄る。

光 「勇士郎……お前……ど、どうしたってんだ?!」

勇士郎 「話は後だ……みんなを下がらせてくれ。俺がみんなを守る……!」

俊 「あ、ああ！リョーカイ！みんな下がれ！校門まで逃げろ……!」

律 「え?!あの子はどうするの?!」

蓮 「あいつ本人が言ってるんだ。それに見ただろ？あいつの力……心配ねーよ。」

みんなを下がらせると勇士郎は、デストリアンの方へと振り向き、怒りの眼差しで睨みつける。

勇士郎 「絶対に許さねえ……!!!!」

ファイバードと一体化した事により、ファイバードの知識が自動的に勇士郎の頭の中に入ってくる。

何をすべきかが伝わってくるのだ。空中に向かって光を放ちながら勇士郎は叫んだ。

勇士郎 「ファイアアアアジエエエエツツツ!!!!」

空の彼方から一瞬で、白と青がメインカラーのジェット機が現れた。それは勇士郎に目掛け飛んでくる。

そしてそれは空中で変形をし始めた。機首が折れ、それを期に各部が次々と部分変形をはじめ瞬く間に腕、脚や頭部が現れ始める。

両腕が万歳状態から下へ下ろされると腕から手首が現れ、校庭へと着地した。

勇士郎 「はぁあッ……!!!!」

シュオツ……ギユアアアアアアアアアアア

・・・

勇士郎は気合を入れながらジャンプすると、地面から20cmの低空を変形したロボット目掛けて高速で駆け抜けていく。その際にフェニックスのようなオーラが勇士郎をまとう。そして光球となりロボットの胸部へと飛び込んで一体化した。

両眼にライトグリーンの光が灯り、完全起動する。

ファイバード 「チエエエエンジン！！ファイバアアアアアア
ッッ！！」

俊・蓮・光 「なにiiiiiiiiiiiiiiii?!!」

漣 「……………!!」

悲しみと絶望に満ちてしまった桜高校でデストリアンと対峙するファイバード。

今、ここに悲しみと絶望を砕く太陽の勇者が降臨した。

つづく

次回予告

桜高に突如として出現したデストリアン。それを駆逐せんと降臨した太陽の勇者ファイバード。
そしてその勇者と融合した勇士郎。陰と陽の非日常が邂逅する時、勇者の制裁が下される。

次回、新生太陽の勇者ファイバード・サーガ 第2話 「フレイ

ムソード」

その炎は悲しみを砕く。

第2話 「フレームソード」

ファイバードとなった勇士郎とデストリアンが対峙する。

もしかもしかと口にも頭部にも該当するのモノを動かすデストリアン。体中に生えている無数の脚の先端にある口も小刻みにパクパクさせている。

ファイバード 「これ以上の犠牲は出させねえ！！俺が貴様を駆逐するっ！！！！」

ガバツと口を開くデストリアン。イソギンチャク状の口の裏から無数の牙が連なっている。

グワツッ！！

デストリアン 「ミシヤアアアアアアアアアアア！！！！」

蛇のように頭をもちあげて、ファイバード目掛けて突進する。

ファイバード 「こっから先は行かせねえっっ！！！！」

ファイバードは、かわすこともできたがあえてかわさなかった。後方には俊や溥達がいるからだ。

ガキイイイッ……

両手でイソギンチャク状の触手器官を握り、渾身の力でデストリアンを受け止める。

ゲゲゲ・・・

この光景を避難した俊達が見守る。

俊 「ロボットになっちまいやがった・・・。」

光 「勇士郎がロボットと合体！？？てかマジで何が起こってんだ？！..！」

蓮 「でもあいつ、ちゃっかり守ってくれてるぜ！..！やっぱり勇士郎の奴のまんまだ！..！」

ファイバード 『うおおおおおっ！..！』

ドゴガアアアアッ！..！

その状態からファイバードは思いっきり地面にデストリアンの頭部を叩きつける。

地面が砕け、地響きが広がる。

だがデストリアンは、這いずりながら再び攻撃の態勢をとろうとする。

今度は口をつばめながらファイバードに頭突きを繰り返す。

ドガアアアアッ

ファイバード 『がつ!』

吹っ飛ばされるファイバード。校庭に地響きがさらに広がる。

デストリアンの左右に生えている触手が伸び始める。

伸びた無数の触手が、ファイバードに連続で殴りかかる。

ドガガガガガガガガガガガガガガガガッガガガガガ

...

両腕でガードしながら耐えるファイバード。

ファイバード 『くそっ・・・!!!』

校舎もあり、まだ逃げている生徒たちの姿もみられる・・・思うようにファイバードは戦えない。

そのとき、後ろの部分の触手が逃げる生徒の方へと伸び始める。

捕食する気だ。

容赦なく女子生徒達を掴み取りにかかる。

女子生徒達 「きゃあああ!!!」

ファイバード 『させるかあああ!!!!!』

ドガアアアンツ！！

ファイバードのパンチが触手を掻い潜ってデストリアンに炸裂し、その衝撃で触手の進行が止まる。

女子生徒達は難を逃れた。

そして、ファイバードは空中へ拳をかざし叫ぶ。

ファイバード 『フレイム・ブレスター！！』

拳から、輝くエネルギーが上空へと放たれる。

エネルギーが消えていった先から一瞬で戦闘機のようなマシン、フレイム・ブレスターが飛来した。

フレイムブレスターは、ファイバードとの合体を敢行する。

胸部には太陽の翼、頭部は鎧兜のようなヘッドユニットが身を包む。

これこそがファイバードの真骨頂、武装合体である。

ファイバード 『フォームアップッ！』

口許にフェイスガードが装備され、フレイムキャノンの砲身が背部に折りたたまれる。

そして、胸部中央のサンスライサーのレンズ部にフェニックスのエンブレムが浮かんだ。

ファイバード 『武装合体、ファイツバードッ！！！』

合体の直後に背部の機首部分から、刀身がオレンジ色に発光している剣が取り出される。

フレイムソード。ファイバードの必殺剣だ。

ファイバード 『フレイムソードッ！！』

再びデストリアンの無数の触手が迫る。

ファイバード 『ハアアッ！！』

ズバッ！！ ザシュウッ！！

迫った触手がフレイムソードで切断される。

紫の血を噴出しながら地面に落ちていく。

デストリアン 「ギギギギギギイイイッ！！」

デストリアンは、懲りずにファイバードを攻撃するが、次々と触手を切断されていく。

ザシュンッ！！ ズバンッ！！ ズシュウッ！！ ザンッ・

・・・

ファイバードは、片手に握り締めたフレイムソードを振るい、迫る尾の攻撃に斬りかかる。

ファイバード 『しゃああっっ!!』

ズバシューアアアアッ!!!!

横薙ぎの斬撃がデストリアンの尾を斬り飛ばし、尾の部分が校庭に落下する。

デストリアン 「ギユギイイイイイッ!!」

ファイバード 『ハアアアアアッ……!!』

ザシューンッ!! ズギャンッ!! ズサシューンッ!
! ズギヤシュー!! ズバアアッ!!

デストリアン 「ギユギヤギヤギヤアアッ……!!」
「!

フレイムソードの斬撃がデストリアンに強烈なダメージを与えていく。

多くの少女達の命を踏みじった事への怒りの感情がフレイムソードに宿っているかのように斬撃のラッシュが続く。

ファイバード 『くたばれええええ……っ!!!!』

ズギヤシューンッ!! ズバシャアアアッ!! ズツシャアアアッ!!

デストリアン 「ギユギユウギユイイ!!」

全身をズタズタにされ、更に激しいダメージを受けるデストリアン。

ファイバードは、足の裏のブースターで空中へと高くジャンプすると、空中からのとび蹴りをデストリアンに見舞う。

ファイバード 『だああっ!!!』

ドアアアツ……ドガアアアアアン!!

ズズズウウウウン!!

デストリアン 「ギユイイイイイ……!!」

デストリアンの大蛇のような巨体が運動場をスライドするように吹き飛ばす。

着地するとファイバードは、フレイムソードを正面にかざす。

ファイバード 『フレイムソード……チャアアアアジアップ!!!!』

ファイバードの額にある太陽のようなエンブレムが輝きだし、フレイムソードの刀身から天に向かって一線の光が奔る。

刀身が炎を纏い始め、激しく燃え滾る。さらにはフェニックスのようなオーラがファイバードを包んだ。

ファイバードの全身を薄黄色の光の球体が包み、デストリアン

戦闘が終了すると、胸のフェニックスのエンブレムが消え、フレイム・プレスターが分離して再びノーマルのファイバードになる。ファイバードの胸部から地上に光りが放たれる。その光りの中から現れたのは勇士郎だった。

自分の手のひらを見ながら勇士郎は呟く。

勇士郎 「これが……ファイバードの力……。」

そして再びファイヤージェットに変形し、上空のどこかへと飛んでいった。

その光景の一部始終を俊達の後方から軽音部のメンバーは見ていた。

漣 「スゴイ……！！！」

律 「すっげー！！なんかファイバードとか叫んでたけど、メチャカッコイーじゃんっ！！！」

唯 「それよりも部室はだいじょうぶなの？ぎー太達は？？ふえええええ……。」

梓 「唯先輩の言う通りですよ！！今の怪物のせいで校舎が壊されたんですから！！大切な楽器達が心配ですっ！！！」

絢 「けれど今戻るのは危険だと思う……。」

それを聞いていた俊達が乗り出ようと試みる。

俊 「楽器が……？そうか……よし！俺達で取りにいこうぜ！」

蓮 「でも、校舎の中が俺達じゃわからんぜ?!」

俊 「それもそうだよな……くそっ、どうすりゃいい!?!」

唯 「ええええん……ぎー太ああ……。」

唯が泣きはじめてしまう。愛着ある楽器が心配する故に当然の事だった。

光 「ぎーた?!」

唯 「うん……あたしの大切なギターだよ……ギターだからぎー太って呼んでるの。」

光 (やべえ……ますますかわいい……)

唯 「そーいえば顧問のさわちゃんの姿がないけどまさか……。」

漣 「まだ校舎の中?!それに和のどかの姿もないよ……。」

唯 「和ちゃん……そうだよ、和ちゃんもないよう……。」

律 「やっぱりまだ校舎の中か……?」

梓 「お願いですっ……無事でいてくださいっ……!!」

この状況に路頭に迷う俊達や軽音部、桜高女子達の一行。

そのとき燃え盛る炎をバックに勇士郎が俊達の許へと歩いてくるのを紬が確認する。

紬 「あ！あれは先程の人ではなくて？」

俊 「勇士郎!!」

俊達が勇士郎に駆け出していく。

勇士郎 「みんな無事だったか!？」

俊 「ああ……だが、まだ教師や生徒達が崩れた校舎の中にいるかもしれない。」

光 「それに軽音部の楽器も……彼女らにとってはとても大切な家族みたいなものなんだ!!」

蓮 「おまえ、それはいいすぎだろ。ギターのコに惚れてんのか？」

光 「うつさい!!」

状況を把握した勇士郎は、再び校舎の方へと体を向ける。

光 「勇士郎まさか……校舎へいくのか？」

勇士郎 「ああ！もうしばらく待っててくれ！」

キュオンツ！

再び光を纏いながら勇士郎が崩れかかっている校舎へと高速で駆け出していった。

俊 「ファイバード……とか叫んでたよな……あいつ。」

蓮 「でもまあ、現実こんなことになっちまってんだ。うけいれようぜ？」

光 「ファイバードだろうがサンダーバードだろうが、勇士郎は勇士郎だ……。」

律 「ところで、あんたたちさ……。」

律が、蓮に直接に尋ねてくる。

蓮 「ん？」

男子3人は、「ケー番交換成るか?!」と思った。だが……。

律 「さつきからずっと思ってたんだけどさ、なんで当然のように男子がいるわけ？」

蓮 「う……それはだな……。」

一時的に「偽。」の視線で見られる3人。

俊 「今走っていった奴が、告りたい女の子がいるってことで付き添いできてたんだよ。」

俊がきりだすと細がうれしそうに反応する。

細 「まあ・・・素敵なことじゃない。うふふふふ。」

梓 「でも、不法侵入じゃないですか!!」

蓮 「って言われてもなー・・・。」

漣 「で、でも、この人たちがいてくれたから今、私達はこうしていただけるんだぞ？今更そこを突っ込むのはどうかと思うぞ、律。」

唯 「そーだよ。漣ちゃんの言うとおりだよ！この人たちがいなかったら律ちゃんや漣ちゃんはもうここにいなかったのかもしれないんだよ？」

梓 「確かに漣先輩や唯先輩の言うとおりかも知れないです・・・。」

律 「・・・それもそうか。悪いっ変に疑ったりして。」

蓮 「いやっ、まあ、なんだ・・・その、いってコトよ!」

この時細は律と蓮の妙な共通点に気づいていた。

紬 「あら？二人とも前髪にカチューシャしてるじゃない？」

律&蓮 「え？」

唯 「あ！ホントだ！！」

紬 「カチューシャ同士お付き合いしたらどうかしら？」

律 「ムギー！話がぶつとびすぎだぞ！！」

蓮 （で、でも俺的にはちょっと嬉しかったりしてな……。）

マイトガインのメンテナンスストックでは、いよいよマイトガインがロールアウトしようとしていた。

マイトガインの胸部中央のSLの先端部が上にスライドする。すると腹部あるコックピットハッチが現れた。

舞人がそこへ乗り込み、シートに座る。

舞人 「いよいよ現れたか！！クリーチャー！！」

ハッチが閉まり、SLの部分が再び元の位置にもどる。

コックピット内の計器類やモニターが作動し、コックピット内をモニターの光が照らす。

舞人 「よし……。オルググリーン。さあ、初陣だ！！マイ

トガイーン!!!」

その時、旋風寺家の執事から通達が入る。

旋風寺家執事 「大変でございます！お坊ちゃま!!!」

舞人 「どうした!？」

旋風寺家執事 「先程現れた新たなクリーチャーなのですが、
マイトガインの開発に協力して下された、(株)KOTOBUKI
のご令嬢、細様が通っておられる学校を襲撃していたとのこと
です!!!」

舞人 「なんだって!!!？細嬢は無事なのか?!」

旋風寺家執事 「安否は今のところ不明でございます!ですが、
謎のロボットが現れ、クリーチャーを斃したとのこと
です。」

舞人 「謎のロボット???!」

旋風寺家執事 「はい。」

その頃、警視庁に緊急事態が発令され、M・P・D・BRAVE
Eにスクランブル要請が出される。

クリーチャーによる事件は、M・P・D・BRAVEでは管轄
関係なく展開される。

スクランブルサイレンが鳴り響く中、いよいよジェイデッカーとレイバースが出撃していく。

要、吉崎、葉山の3名が、二軸バギー装甲通信指揮車・Jバギーへと乗り込む。

要がナビシートで指揮、吉崎が後部でオペレーターを担当、葉山がドライバーを勤める。

要 「これより、M・P・D・BRAVEは初の初陣をとる！各員引き締めて望め！」

各員 「了解！」

要 「M・P・D・BRAVE、出撃！」

桜が丘の南方面の地区、桜ヶ丘南。

この区域にもデストリアンが出現していた。

ムカデタイプとは異なり、ゴツイ体の二足歩行するタイプであった。

上半身に無数の眼球があり、全身を覆いつくすイボ状のもの、両腕の先には鎌のような手首がある。

大口を開けながら、強烈な口臭を放ちながら住宅街を突き進む。

デストリアンの眼下には、逃げる人々が疎らに居る。

デストリアンは、鎌状の手首を振ったり、足踏みしながら人々を叩き潰す。周囲に血が飛び散る。

そして体勢を低くして、死体を捕食していく……蹂躪に次ぐ蹂躪が続く。

そのデストリアンの向こう側にも別のデストリアンが出現する。

首のないマンモスのような毛で覆われた巨大な体。楕円形の口に牙。額にあたる部分には、小さな赤い眼が6つ並ぶ。4足歩行タイプのデストリアンだった。

同時多発出現。

周囲にサイレンが響き渡る中、2体が破壊活動を開始しはじめた。

この情報は、急行中のM・P・D・BRAVEに伝達される。

吉崎 「要隊長！先程現れたクリーチャーですが、既に殲滅されたとの情報が入りました。」

要 「何！？自衛隊は出撃していないはずだが……。」

吉崎 「それが……謎のロボットによって殲滅されたという事です。」

要 「謎のロボットか……気になるな。」

葉山 「そうっすよね……造っていれば公表するはずす

もんね。」

ジエイデッカー 「我々の他にもロボットがいるというのか・・・?!」

吉崎 「?!っ・・・たった今入った情報です!!今回最初のクリーチャー、C 02が出現した地点から南下した地点で、C 03、C 04が2体同時出現した模様!!」

要 「何!?!」

ジエイデッカー 「2体同時?!」

ガンレイバー 「くっ、まずいな。」

ショットレイバー 「手分けしてやるってコトか?」

要 「ジエイデッカーに先行指示を出したいところだが、今はとにかく現場への急行を優先する!」

葉山 「了解っ!」

ジエイデッカー&レイバーズ 「了解!!」

マイトガインは、殲滅目標だったクリーチャーがファイバードに殲滅された為、起動保留状態となっていた。

そこへ、先程現れた2体のクリーチャーの情報が入る。

旋風寺家執事 「お坊ちゃま！！新たなクリーチャーが2体出現したとのことです！！」

舞人 「また新たなクリーチャーが？！こんな短期間で2体も現れるとはな……。」

旋風寺家執事 「いかがなさいますか？！」

舞人 「無論、出撃だ！！マイトガイン、起動！！」

レバーを動かし、マイトガインを起動させる。

ギユウイン！

マイトガイン 『勇者特急、マイトガイン！定刻より若干遅れて起動！！』

舞人 「……まあ、確かにな。」

マイトガイン 『データ照合……君が私のパイロットを勤める旋風寺舞人か？』

舞人 「そうだ！よろしく頼むぞ！！マイトガイン！！」

マイトガイン 『ああ！！』

ドック内放送 「マイトガイン起動確認！ドックエレベーター作動！！ゲートハッチ開け！！」

出撃に向けてドック内の各機械が作動していく。

地下からエレベーターで上昇し、地上へと出るマイトガイン。

そびえ立つ巨体をライトアップされた光が照らす。

お台場と同じく、海上に造られた人工都市が眼下に広がる。鉄道の路線があちこちに確認できる。

舞人 「マイトガイン、発進！！ロコモライザーへ変形だ！！」

マイトガイン 「おお！！」

空中へ飛び立つと巨大な機関車のマシン、ロコモライザーへと変形し始める。

マイトガインの長距離航行モードである。

変形しきると、ブースターを全開で飛び立っていった。

再び桜ヶ丘南。先行した警察の特殊部隊がC 03とC 04に対して銃撃を行っていた。

タタタタンッ！！ バラバラバラララッ！！ ダダダ
ダダダダンッ！！

マシンガンの銃弾がC 03に射ち込まれていくが効果は今ひ

とつのような。

C 03 「ガアアアアアッ！！」

ドガギヤアアッ！！

振りかざされた鎌状の手首が特殊部隊の隊員たちごとコンクリートを砕く。

その時数発の弾丸がC 03に撃ち込まれる。

ダカ、ダカ、ダカアアッ！！

C 03 「ギヤガアアアッ！！」

ガンレイバー 『待たせちまったな！！M・P・D・BRAVE到着だ！！』

ガンレイバーが撃つたりボルバークンの弾丸だった。

ヴォシュン！！ ヴァシュン！！

ドオドオゴオンッ！！

C 03 「ギユウウウツ・・・！！」

ショットレイバー 『これ以上の被害は出させないぜ！！』

ショットレイバーの放ったショットガンの弾丸がダメージを与える。

だが怯むことなく、C 03は腕を振り上げてレイバースに襲い掛かっていく。

C 03 「ゴオオオオオオツ!!!」

ショットレイバー 「怯まねえ?!」

ガンレイバー 「任せろ!!」

ガキイイイッ!!

ガンレイバーがC 03に組みかかり、互いの力と力が拮抗する。

ガンレイバー 「このイボ野郎……!!」

Jバギーでは、周囲の状況を把握しての指揮が開始され、要が気合十分に指揮を執る。

要 「レイバースは、C 03の足止めを、ジエイデッカーはその間に進行するC 04を攻撃・殲滅!その後引き続きC 03を殲滅だ!!」

ジエイデッカー&レイバース 「了解!!」

上空よりジエイデッカーが飛来する。右手には専用ウエポン、Jバスターが装備されている。

ジエイデッカー 「あれがクリーチャーか……実に禍々しい

容姿をしている。市民の命をこれ以上奪わせはしない！！ジェイデッカー、これより目標、C 04を殲滅する！！」

ジェイデッカーがJバスターを構えると同時に、Jバギー内でJバスターセーフティー解除プログラムが作動される。

吉崎 「Jバスター、セーフティーロック解除開始……………」

Jバスターの銃口がC 04に向けられ、Jバギー内では解除プログラムが進行する。

吉崎 「Jバスター、セーフティーロック解除、Jバスター、アクティブ！！」

ジェイデッカー 『セーフティー解除確認！』

デイギイインツ！！

C 04に向かってレールガン状の弾丸が、Jバスターの銃口から放たれた。

つづく

次回予告

同時多発するデストリアン。日常の街が混沌の中へと引き込ま

れる中、その混沌へとジェイデッカー達が初の出撃をした。初陣の中でデストリアンへの怒りの感情を懐くジェイデッカー。苦戦を強いられるレイバーズ。そのとき、上空よりもう1人の勇者が降り立つ。

次回、新生太陽の勇者ファイバード・サーガ第3話「初陣の共闘」

忌まわしき空気を正義の嵐が粉碎する。

第3話 「初陣の共闘」

ジエイデッカーが放ったJバスターのレールガンが、C 04の側面に直撃する。

ディギヤアンツ！！

C 04 「ギョゴオオオ！！」

覆われた毛の表面が爆発する。しかし、ダメージを受けながらもそのまま市街地へと進撃していくC 04。

それに対し、ジエイデッカーはホバリングしながらC 04の側面へJバスターを撃ちつつける。

ジエイデッカー 『市街地へ向かう気か?! そうはさせん!!』

ディギン!! ディギン!! ディギン!! ディギン!! ディギン!! ディギン!! ディギン!!

ディガアン、ディガン、ディガン、ディガン、ディガン、ディガン、ディガアアンツ!!

C 04 「ゴオオオオオオオ・・・!!」

Jバスターの連発によりさらにダメージを受け、苦しむような

うめき声をあげる。

それでも歩を進めようとするC 04。

ジエイデッカーはホバリング状態から下降してC 04の正面へと回り込む。

ギョオンッ!!

そして、至近距離からJバスターを乱射。

ジエイデッカー 『何としてもここで食い止めるっ!!』

デイギン!! デイギン!! デイギン!! デイギン!! デイギン!! デイギン!!
ギン!!

ドオドオドオドオドオオオ!!

C 04 「ゴギョギョウウウッ!!」

顔面が爆煙に包まれ、さらに苦しげに唸る。

だがそのとき、苦し紛れにC 04が反撃へと移る。

縦長の楕円形の口の中から、舌とも触手ともつかない長い器官が飛び出す。

デュギョオッ! ドガアアッ!!

ジエイデッカー 『ぐあー!!』

ドオオオオン！！

ジエイデッカーの胸部にそれが直撃し、後方へと吹き飛ばされ地面に倒れこんでしまう。

Jバギー内では、吉崎が戦況を報告する。

吉崎 「ジエイデッカー胸部、後部バックパック及びウイングにダメージ！トータル損傷率、7%。戦闘に支障ありません！」

要がジエイデッカーへ通信で呼びかける。

要 「ジエイデッカー！無事か？！」

ジエイデッカー 「ええ・・・油断しただけです！お気遣い申し訳ありません！」

要 「相手は未知の生命体だ！どんな攻撃が来るかわからない！いかなる状況でも警戒するんだ！」

ジエイデッカー 「了解！」

要の曰く、C 04はさらなる攻撃を繰り返す。

長い器官の先端から液体状のものを起き上がったジエイデッカーに向かって発射した。

ビュデュッ！

ジェイデッカー 『何!?くっつ……!!』

ウイングスラスタを噴射させながら上昇し、これをかわす。

飛んでいった液体は、建造物を一瞬で溶かした。

強力な硫酸だった。

中っていればいくら特殊合金製のジェイデッカーでも一溜まりもなかっただろう。

C 04は、上昇したジェイデッカーに何度も硫酸を発射する。

旋回しながらかわしていくジェイデッカー。だが、その傍らで住宅等の建造物が無残にも溶かされていく。

ジェイデッカー 『市民の住まいが!!おのれ!!クリーチャ
ー!!』

超AIの思考に怒りの感情が燈る。

再度Jバスターを構え、怒りを籠めて撃ち続けるジェイデッカー。

ジャキン!! デイガン!! デイガン!! デイガン!! デイガン!! デイガン!!

ドオドオドオドオギャギャギャガッ!!

C 04 「ギユウウウウウツ!!」

一方のレイバース。ガンレイバーがC 03に向かってとび蹴りを繰り返す。

ガンレイバー 「だりやあああ!!」

ドカアアアツ!!

ズガアアン!!

ガンレイバーは着地すると同時に、右手に握っていたガンリボルバーを構え、倒れこんだC 03に向かって銃口を向ける。

ガンレイバー 「くらいな!!」

ガアン!!ガアン!!ガアン!!

ドオオ、ドオオ、ドオオオツ!!

C 03 「ゴオオオオオ!!」

ガンリボルバーの弾丸が、C 03のイボ状の皮膚に着弾する。

だがC 03は再び立ち上がり、口を大きく開口させて咆哮する。

C 03 「ボオオオオオオオ!!」

ガンレイバー 「ちっ!!しぶとい野郎だ!!」

ガアン！！ガアン！！ガアン！！

ドガン！！ドガン！！ドガン！！

確かに全弾命中して多数ある眼球が破壊されているが、致命傷にはなっていないようだ。

ガンレイバーの後方からショットレイバーが援護射撃に出た。

ショットレイバー 『コイツならどうだ！？』

ショットガンの弾丸をリロードしてC 03に向かって撃ち放つ。

ヴオオンッ！！ ジャキン！ ヴオオンッ！！ ジャキン
！ ヴオオンッ！！ ジャキン・・・

ダギャガッ！！ スドギャッ！！ ヴアガギャッ！！

C 03 「カアアアアッ！！」

若干C 03は怯んだように見えた。ショットガンの弾丸によって潰れた眼球からは、白い液体が流れている。

ガンレイバー 『よし！！今だ！！』

ガンレイバーがC 03に向かって飛び掛る。

しかしこれを狙っていたかのように鎌状の腕を振り上げて、C

03はガンレイバーに強烈な一撃を与える。

ザギヤンツ!!

ガンレイバー 『ぐあああああ!!』

ドカアアアンツ……

ガンレイバーの右腕の付け根部分のジョイントが切断され、地面をスライドしながらガンレイバーが崩れ落ちる。

ショットレイバー 『ガンレイバー!!』

吉崎 「ガンレイバー、右腕を切断されました!! 損傷率30%!!」

葉山 「右腕?! 金属を切断されたのか?！」

要 「くっ……!! ガンレイバー!! 応答できるか?!!」

地面に右肩のジョイントを抑えながら痛みを耐えるガンレイバー。超Aエロボットは、外傷等からも痛みを感じてしまうのである。

ガンレイバー 『……ホント……油断大敵ツスね……』

要 「とにかく戦闘が無理ならその場から離脱するんだ!! ショットレイバー!! 最大限で援護を!!」

ガンレイバー 『りよ……りょう……かい。』

ショットレイバー 『無論です!!』

ヴォンツ!! ジャキ! ヴォンツ!! ジャキ! ヴォンツ!! ジャキ!

ショットガンをくらいながらも、徐々にショットレイバーに迫るC 03。

ショットレイバー 『くっ!! 殲滅できん!!』

要はこの状況からジェイデッカーを呼び出す事を選択する。

要 「ジェイデッカー!! レイバーズが窮地に立たされている!! 一旦C 04から離脱して、大至急C 03を叩いてくれ!!」

ジェイデッカー 『了解!! 待ってる、レイバーズ!!』

ギユオオオオオオオオツ……

旋回しながら、C 03がいるポイントへとフルスラスターで向かうジェイデッカー。

要 「吉崎! Jバスターのモード変更できるか?!」

吉崎 「待つてください…… Jバスター、エネルギー充填率88%と確認。グレネード・モード移行可能です!」

要 「よし! モードをグレネード・モードへ移行!!」

吉崎 「了解！Jバスター、グレネード・モード……ア
クティブ！」

ジェイデッカー 「モード変更確認！！これよりクリチャー
を殲滅する！！」

ジェイデッカーがホバリングしながらレイバースの展開ポイン
トへと舞い降りる。

ジェイデッカー 「ショットレイバー！ガンレイバーは無事か
！？」

ショットレイバー 「ガンレイバーはなんとか離脱できた。俺
も弾が切れて危なかった。」

ジェイデッカー 「後は引き受ける！！後退するんだ！！」

ショットレイバー 「了解だ！！」

ショットレイバーが後退するのを確認すると、ジェイデッカー
はJバスターの銃身を左手で支えながら構える。

ジェイデッカー 「Jバスター、ロックオン！！」

ピピピピピピ……

ジェイデッカーのビジョンではC 03を完全にロックオンし
ている。狙いに狂いは無い。

ジェイデッカー 「Jバスター・グレネード！！シュートッ！

ていたロボットか!!」

葉山 「話には聞いてたっすけど……めっちゃカッケー!!
スゲー!!」

吉崎 「私語は慎んで!」

葉山 「はい……。」

マイトガインが戦闘を開始する。

舞人 「よし! ナイスな一撃だ!! いくぞ!! マイトガイン!
!」

マイトガイン 『うおおおお!!』

ガギャアアアンツ!!

C 04 「ギユウウツ!!」

C 04 に接近し、左フックを繰り出すマイトガイン。連続で、
右フックを炸裂させる。

ゴオオオオオンツ!!

C 04 「ギョオオオツ!!」

舞人 「マイトガイン、ナックルラッシュいくぞ!!」

マイトガイン 『了解だ!! はああああっ!!』

ゴオオン、ガギャン、ゴガアアンツ！！ ドオガアン、ゴオオオンツ、ダガギヤアンツ！！

鋼鉄の拳の連打がC 04の顔面に炸裂していく。

C 04 「ギョオオオオツ！！」

目玉がつぶれ、内部の骨も所々が陥没し、カタチが崩れる。

マイトガインの繰り出すパンチの威力は、戦車のキャノン砲に匹敵する威力を持つ。

更なるラッシュが続ぎ、アッパーやストレート、ボディーブロー、フック等のパンチがC 04にダメージを与えていく。

ゴガアアツ、ドオゴオオンツ、ズガアアツ、ゲオゴオオンツ！！ ドオゴガアアアツ！！

C 04 「シュギヤアアアアツ！！」

叫びながら突如と反撃に転じるC 04。長い器官がびゅっと伸び、マイトガインを突き飛ばした。

ドオオオオオオンツ！！

舞人 「ぐああああ！！」

マイトガイン 「ぐっ！！！！」

ズウウウウン……

舞人 「くそ！油断した！！」

マイトガイン 『来るぞ！！舞人！！』

C 04の長い器官の先端から、硫酸弾が撃ち出される。

硫酸弾がマイトガインの左肩、のぞみの部分に着弾する。

ブチャアンツ……ジュウウウ……

若干だが、装甲が熔け始めた。

マイトガイン 『まずい！！あの液は、私の装甲すら熔かすよ
うだ！！』

舞人 「くっ！一旦距離を置くぞ！！」

マイトガイン 『ああ！間合いをとったほうがよさそうだ！！』

C 04を見つつも後方へジャンプしながら下がるマイトガイ
ン。

舞人 「この距離なら……シグナルレーザーだ！！」

マイトガイン 『シグナルレーザー！！』

ビギユイイイイッ！！

ズギャガアアンッ！！

C 04 「ギユウゴオオオオッ！！」

マイトガインの額のシグナルからライトグリーンのレーザーが放たれた。

体毛と肉片が飛び散る。

C 04 は、一瞬怯むものの、再度硫酸弾を乱射する。

舞人 「くっっ！やるじゃないか！！クリーチャーめ！！」

マイトガイン 『これではなかなか止めをさせない！！』

デイギャン、デイギャン、デイギャン、デイギャン！！

ズズズズウウウウンッ！！

C 04 「ヒョオオオオオッ！！」

その時だった。空中からレールガンが降り注ぎ、C 04 に直撃する。

マイトガイン 『?!これは・・・???!』

舞人 「もしや!!?!」

夜空へ見上げるとジエイデッカーの姿があった。

ジェイデッカー 『こちら、M・P・D・BRAVEのジェイデッカー!!! 援護するぞ!!!』

舞人 「ああ!!! ありがたい!!!」

マイトガイン 『あのロボットは?』

舞人 「あれは、警視庁が開発したジェイデッカーだ! マイトガインと同じく超AIを搭載しているそうだ。」

マイトガイン 『言うなれば私の仲間か!!!』

舞人 「まあそんなとこだな。いくぞ!!!」

マイトガイン 『よし!!! ジェイデッカー!!! 私は、旋風寺コンツェルンのマイトガインだ!!! よろしく頼む!!!』

ジェイデッカー 『こちらこそ、よろしく!!!』

2機がC 04に立ち向かっていく。

ジェイデッカー 『私がJバスターで射撃し続ける!!! その間に止めを!!!』

マイトガイン 『わかった!!!』

Jバスターのレールガンが注がれる中、マイトガインが、C 04に突っ込んでいく。

事前に待機していた特殊衛星班の車両から多数の特殊衛星班員が出勤し作業に取り掛かり始める。

その中、Jバギーから降りた要がマイトガインへと歩み寄る。

要 「これが、旋風寺コンツェルンのマイトガイン……。」

マイトガイン 『そのとおりです。あなたは？』

要 「俺は、要誠人。警視庁所属特殊部隊M・P・D・BRA
BEの隊長を務めている！」

すると、マイトガインのハッチが開き、舞人がワイヤーを使って要の所へと下りてきた。

舞人 「俺は、旋風寺コンツェルンの、旋風寺舞人だ！！共に正義の為に戦う者同士、ここはひとつ握手をかわそう！」

要 「ああ！」

サイレンが鳴り響き、パトランプが光る夜の街中で握手をしながら向かい合う二人。

ゴオオオオオオオオオオ……ズシン……

そこへジェイデッカーも着地した。

ジェイデッカー 『殲滅任務完了しました。』

要 「ああ。初の戦闘、ご苦労だった。2体相手によくやった

！」

ジエイデッカー 「はっ！ありがとうございますお言葉！ですが、1体は彼が斃したんです。」

マイトガイン 「ジエイデッカー。さっきは助かった。」

ジエイデッカー 「当然の事を、成すべきことをしただけだ。」

マイトガイン 「何はともあれ、クリーチャーを最小限の被害で叩けたんだ。感謝する。」

ジエイデッカー 「こちらとしても助かった！！」

2機の超AIロボットは金属の手で握手を交わす。

舞人 「ジエイデッカーも確か超AIを搭載していたんだよね？」

要 「ああ！そのとおり。人間と同じように自ら考え行動することが出来るロボットだ。」

舞人 「同じロボットが、同じ運命を背負って立ち向かう・・・
・何か運命的だな。」

要 「ああ・・・そういえば俺たちの声も何か似ているな。」

舞人 「そう言われればそうだな・・・ははは、何もかも同じか。」

要 「ははは・・・では、我々は事後処理があるからな。そろそろ失礼する！」

舞人 「ああ！また次の戦場だな。」

要 「よし！ジエイデッカー、Jローダーに変形してクリーチャーの残骸を科警研に搬送してくれ！」

ジエイデッカー 『了解！負傷したガンレイバーはどう帰還するんです？』

要 「専用のトレーラーで回送することにした。問題はない。」

ジエイデッカー 『そうですか！了解しました！それでは引き続き搬送任務に移ります！ではっ。』

要 「ああ！頼む！」

Jローダーに変形すると作業中の衛生班のところへと赴いていく。

その更に向こうでは、ショットレイバーが、負傷したガンレイバーを担いでトレーラーまで運んでいる。

周囲では警察官やレスキュー隊員の各々のやり取りの音が聞こえてくる。

この光景を見ながら舞人も撤収を開始する。

舞人 「よし、俺たちも撤収しよう。後は会社の事後処理班が

やってくれる。」

マイトガイン 「……戦いは始まったんだな。」

舞人 「そうだな。またいつ攻めてくるか解らない。それに皆さんの安否も気になる。戻るぞ。」

ロコモライザーへと変形し、その場を後にする舞人とマイトガイン。

それを見上げる要。

人々の忌まわしい夜に收拾がつく中、勇者達はそれぞれの帰路へとつく。

つづく

次回予告

デストリアンの再来から翌日。被害に直面したそれぞれの面々がそれぞれの時間を過ごす。あらゆる思いが去来する中、新たなエネルギー生命体が降り立つ。

次回、新生太陽の勇者ファイバード・サーガ 第4話「宇宙警察」

その存在は正義を執行する者か

第4話 「宇宙警察」

クリーチャーことデストリアンの脅威が襲来しての翌日。

舞人は、ケータイで紬の安否の確認を取ろうとしていた。

舞人 「もしもし、旋風寺コンツェルンの舞人だ。 紬嬢とは繋がるか？」

琴吹家執事 「これはこれは！！舞人様でいらっしやいますか！少々お待ちください。」

旋風寺家、琴吹家は、初代の社長（舞人や紬の祖父の代）同士が旧知の中にあり、古くから提携をしている。

琴吹家が運営する（株）KOTOBUKIは、音楽関係のビジネスを主軸に、楽器の生産や販売、高級飲食店・喫茶店の経営等幅広い分野のビジネスを展開させる大企業である。

だが、その一方で極秘裏に旋風寺コンツェルンとの共同開発で超AIの開発に着手してきたのである。

このような環境故、舞人と紬は幼い頃からの接点を持っていた。

紬 「もしもし？舞人君？」

舞人 「あ！紬さん！大丈夫？！紬さんの通う学校が怪物に襲撃されたって聞いて、心配だったんだ！！」

紬 「ありがとう、心配してくれて。私は大丈夫よ？」

舞人 「そうか！よかった！」

紬 「ただ……。」

舞人 「ただ？」

紬 「目の前であんなことが起こってとても恐かった！それに同級生の子達も沢山……！！」

紬の声はいつになく震えていた。あのような目にあっては無理もなかった。

軽音部のメンバーの前でも見せたことのない一面だった。

紬 「うつ……うつうつ……。」

舞人 「紬さん……だけどこれからは俺とマイトガインが紬さんや市民を守る！！だからもう泣かないで。」

紬 「……さっき聞いたわ……動いたのね……マイトガイン。」

舞人 「ああ！マイトガインは大成功だった！！そして大勝利さ……！！」

紬 「舞人君は恐くないの？やっぱり男の子だから平気なの？」

舞人 「そうかもしれない！恐くはないよ。むしろ正義のヒーローが燃え滾ってくる！！何か使命感的なモノに躍動されるような……。」

紬 「舞人君は強いよね。昔からヒーローになるって、よく言っていたものね。」

舞人 「まさか本当にこうしてヒーローになれるなんて思っても見なかったけどね。」

紬 「うふふふふ。本当に。」

舞人 「あ！笑った！！紬さんは笑顔がやっぱり似合うよ！」

紬 「え？でも電話越しじゃ見えないわよ？」

舞人 「俺には見える。ほのかに笑っている紬さんがね。そうだ！これから紬さんのところへお見舞いにいきたくったんだ！！いいかな？」

紬 「本当に？嬉しい！ありがとう！是非来てください。」

舞人 「それじゃあ、待ってて！」

襲撃を受けた桜高と南桜ヶ丘では警察による現場検証が続いていた。

警察が現場検証するかたわら、桜高では、日曜日であるにもかかわらず生徒と保護者が多数見られた。

臨時の緊急集会が開かれていた。

事実、校舎の一部が崩壊し、生徒や教職員の一部に死傷者が出てしまったからである。

その光景を見て現場検証に来ていたM・P・D・BRAVEの葉山が不謹慎極まりない発言をする。

葉山 「学校か、ここは女子高だけどなつかしいなー・・・もう一回高校生やりたいや。」

吉崎 「葉山君！！不謹慎なアホ発言は慎んで！！」

葉山 「わっ！スイマセン！！けど懐かしさの余りつい・・・吉崎さんのJK時代はどうでした？」

吉崎 「馬鹿たれええええ！！」

バシントツ！

葉山 「あたあああ！！」

二人を見ていた要が忠告に入る。当然であることは言う間でもない。

要 「おい！二人とも何夫婦漫才やってるんだ！！ちゃんと現場検証に取り掛かれ！！」

吉崎&葉山 「はい！！す、スイマセンでした！！」

吉崎 (隊長に夫婦漫才って言われた……………このバカ葉山……………)

要 「もうじき緊急集会が終わる。吉崎、ここの生徒に聞き込み調査してくれ。例の謎の所属不明のロボットを目撃している生徒が多数いるはずだ。ここは女子高だからな。女子で、OGの君なら違和感はないだろう。」

吉崎 「了解しました！」

要 「ただし慎重に態度や言葉を選べ。何せクリーチャーによって死傷者が出ているからには心の傷ができてしまっている生徒も少なくないだろうからな。」

吉崎 「りよ、了解！」

その向こうではショットレイバーが崩れた校舎の瓦礫撤去にあたっていた。

ショットレイバー 『しかしヒドイ。学校がクリーチャーに襲撃されるとは。』

瓦礫の撤去はロボットにとって最も活躍できる得意分野である。

シヨットレイバー 『だが、一体何者なんだろうな？ここに現れたクリーチャーを斃したロボットつてのは……？』

緊急集会が終わって生徒達が出てくる。

それぞれが暗い表情を浮かべている。

友人を失いすすり泣いている少女。起こった悲劇に漠然と落ち込んでいる少女……。不の空気が立ち込めていた。

聞き込みを試みた吉崎はこの空気に耐え難いものを覚える。

吉崎 (う……。耐えれない！とても聞けない！)

? 「あれ？ひょっとしてレイナ？」

吉崎 「え……。あああつ！サワチャン！！」

もじもじしている吉崎に突然話しかける声。

それは、桜高の吹奏楽部と軽音部の顧問を務めている教員、山中さわ子だった。

幸いにもデストリアンが出現した位置から離れたところにいたため難を逃れていた。

吉崎は思わず大きめな声で叫んでしまう。

さわ子 「ホント久しぶり……。！何年ぶり？もう7、8年ぶりになる？」

吉崎とさわ子は高校時代同じクラスの友人同士だった。

吉崎 「もうそのぐらい経つの？」

さわ子 「ホント早いわよね・・・時間が過ぎるの。」

吉崎 「目指していた教師に成れたんだ。」

さわ子 「まあね・・・レイナこそ警察官に成れたんだね。」

吉崎 「うん。スゴイ部署だけど・・・。」

さわ子 「スゴイ部署??どんな所なの？」

吉崎 「ロボットと一緒に怪物と闘う部署。昨夜が初陣だった。

・・・。」

さわ子 「ロボット・・・怪物・・・。」

髪をかき上げながら視線を横にずらし、哀しく、切なげな表情を浮かべるさわ子。

吉崎 「サワチャン・・・?」

さわ子 「その怪物のせいで・・・生徒達が・・・犠牲になったわ・・・。」

さわ子の声は震えていた。

吉崎 「……………」

再開を喜ぶのもつかの間。再び空気が沈む。

二人の脳裏には12年前のC 01襲来の報道がフラッシュバックしていた。

さわ子 「……まさか自分達の身の廻りでこんなことが起きるなんて想像もしなかった。」

さわ子の声が震えていた。

吉崎 「サワチャン……………」

さわ子は再び吉崎に視線を向けると吉崎が聞きたかったことを喋り始めた。

さわ子 「でも……謎のロボットが現れてあれ以上の悲劇は起こらなかった。それどころか怪物を一刀両断してくれたのよ。そのロボット。」

吉崎 (そうだった!!それに関しての聞き込みをしていたんだ!!)

さわ子 「ひょっとしてレイナの部署のロボットだったの?」

吉崎 「ううん、全く違うの。アタシ達は桜ヶ丘南で展開していたから。その謎のロボットについての情報収集を上司から頼まれているのよ。他に見た人とかいない?」

さわ子 「見た生徒は大勢いるけど・・・みんな詳しい事は何も。」

吉崎 「そう・・・。」

さわ子 「私そろそろいかなきゃ。またあとで会えない？ここでケー番交換は不謹慎だから。」

吉崎 「じゃあ、校庭に来てくれればいいよ。まだ現場検証中で当分いると思うから。」

さわ子 「わかった。それじゃあとでね。」

吉崎 「うん。無理しないでね。」

さわ子 「お互い様よ。」

その日の午後、勇士郎達は街中にある高台の山頂に来ていた。

市内が一面に見渡せる所で、夜ともなれば眼下に夜景が広がるスポットだ。

勇士郎達はコンビニやファーストフード店に行っただけで食しながら語っているのだ。

蓮 「しかし、昨日はマジでヤバイ体験したよなあ……。」

光 「ああ。でもよ、よく俺らが助ける行動に出れたよな？嘘みたいだぜ。」

俊 「ここは何と言っても勇士郎の一声があったからこそぞらる？」

勇士郎 「俺は咄嗟的にやれることをやりたかったただけだ。目の前で女の子が死んでいくのを黙って見ているわけにいかねーだろ？それに、何よりも軽音部の秋山さんを守りたかった。」

蓮 「そりゃ誰だって好きなコは守りたくなるだろうが……死んだら意味ないぜ？」

光 「あのときはマジで死んじまったかと思った。」

俊 「確かに。あんなバケモノに吹っ飛ばされて、キャンプファイヤーの火の中に頭から突っ込めば誰だって死んじまう。」

蓮 「そうだよなあ。奇跡だ、キセキツ!!！」

蓮の言うとおりであった。ファイバードが降臨しなければ勇士郎も犠牲者の1人となっていたかもしれないのだ。

俊 「なあ、勇士郎。」

勇士郎 「ん？」

俊 「ぶっちゃけ、どんな感覚なんだ？ファイバードになって

よ？」

「勇士郎 「なんともいえねー。ただ言えるのは、ファイバードの知識が俺の脳内に自然に入ってくる感覚がある。だから、フレイルム・プレスターを召喚したり、フレイルムソードを出したりしたんだ。」

蓮 「ってことはさ、あのバケモンが何なのか解るってことか？ 確かアイツを追ってきたんだろ？ ファイバードは？」

勇士郎 「ああ・・・だが、ファイバード達にも隕石内に潜んでいる破壊生命体ということしか判明していない。未だ謎に包まれているみたいだ。」

蓮 「達？ ってことは他にもいるのか？」

勇士郎 「ああ。ブレイブ宇宙警察機構ってというのがあって、その一員がファイバードなんだ。他にも仲間がいるが、今は別の銀河系に出向いているみたいだ。」

光 「いずれにしても俺達のツレの約1名が、ミラクルヒーローになったってコトだけは確実だな。」

勇士郎 「もっといいネーミングねーのかよ？」

蓮 「『太陽の勇者』はどうだ？ 合体した時の胸のところの翼のカンジが太陽っぽいからよ。」

俊 「いいんじゃないか？ 太陽の勇者、ファイバード。闇をかき消す太陽の光・・・てな。」

勇士郎 「なんか最後クサイな、ソレ。」

光 「キセキって言えば、いよいよ女の子達との繋がりができた事もキセキだよな！」

蓮 「おうおう！ソレソレ……って喜ぶたい所だが、あんな目にあつたあのコ達を思うとなあ……嬉しさ半分、複雑さ半分だよな。」

俊 「本来なら今頃、女の子達と遊びに行つてたんだろうがな。カラオケとかシヨツピングとかよ。」

勇士郎 「ああ。せつかく知り合えたのにもどかしいよな。」

俊 「いつそお前だけでもメールしてみたらどうだ？元々は勇士郎のコトで本来は出向いたんだからな。」

勇士郎 「な、何いッ！？で、できねーよ！ー！」

俊 「うぶだなあ、全く。彼女もきつと心が傷ついているはずだ。命の恩人が声かけてやるのは悪い事じゃないと思つぜ。」

勇士郎 「う……。」

蓮 （よっしゃ！メールすっかな！）

光 「俊、ナイスアドバイス！」

俊 「お前らも便乗するか……。」

蓮と光は揃いも揃ってメールを打ち始める。

勇士郎 「俺は・・・電話しよう。」

俊 「おいおい、いきなりそれはだな・・・。」

勇士郎 「ま、前に本で女の子は声を聞いたほうが安心するって見た事あるからだ！」

俊 「それは好きなヒトの声だろ？」

勇士郎 「・・・。」

その頃軽音部のメンバーは、各個人の家に行った。

律は嫌な気分の余韻を紛らわす為にひたすらRPGのレベル上げをしている。

律 「はぁ・・・思い返すと最悪な事と最高の事が両方おこったよなぁ・・・。」

律いわく、確かにそうだった。最悪な状況下の中、今まで縁がなかった男子勢と知り合えたのだ。

律はケータイを手に取りメールの着信をしてみる。

男子達からのメールは入っていない。

律 「はぁ・・・ん!？」

・・・

溜息をつきながらケータイを閉じようとしたその時、メールが入ってきた。蓮からだった。

律 「おおお!!キタ!!・・・蓮って奴からか・・・!!」

同じ前髪カチューシャスタイルをしている為か、律は妙に嬉しかった。

蓮も同じ理由からメールを送ったのだろう。

漣の部屋では、漣がベットでうずくまっていた。片隅にはエリザベスこと、漣のベースが置かれている。

彼女の脳裏には目の前で死んでいく同級生達の姿がフラッシュバックしていた。

漣 「う・・・っ!!」

フラッシュバックするたびにきゅっ と強く瞳を閉じる。

漣 「なんであんなことになったんだ!!なんで・・・!!」

そのとき、漣のケータイが鳴り始めた。

・・・

漣 「電話?律か?」

ベットから降りて、ケータイを手に取ると勇士郎からの着信である事に気づく。

漣 「え！？火鳥クンから？！ど、どうしよう……えと……うんと……。」

同級生の異性からの電話初めての電話に漣は焦りと緊張と恥ずかしさを混ぜたような感情に見舞われる。

恐る恐る電話に出る漣。出だしからどもってしまふ。

漣 「も、モ、もしもし？」

勇士郎 「ももももしもし？かか、かとりだけど！」

勇士郎も同級生の異性と電話で会話するのは初めてであった。漣以上に激しくどもる。

勇士郎 「き、昨日の今日だから、あのあと結構落ち込んでたし、俺、その……心配で、さらに……助けた時ベース……あれ？あ、違う、心配で俺が……うっつ。ゴメン！！」

うぶさの余り、主語述語が滅茶苦茶になる勇士郎。言ってることが段々訳解らなくなってしまう。もう初にして終わったと思った。

勇士郎 （あ……終わった。やっぱメールすればよかった。）

だが、耳元から聞こえてきたのは漣の笑い声だった。

漣 「ぷっ……あははははははっ！」

勇士郎 「え?!」

漣 「あはははは……あ、ゴメン！火鳥クンがなんかオモシロかったからつい笑っちゃった。」

勇士郎 「え?!?!」

漣 「だってつい昨日の火鳥クンと全然違うから。でもなんか安心した……私以上に緊張しちゃってた火鳥クンの声聞いてさ。」

勇士郎 「あははは……あ、秋山さんも緊張していたの?!」

漣 「もちろん。同級生の異性からの電話なんて初めてだったから……昨日はみんなを助けてくれてありがとう。和やさわちやんも、私のベースも見つけてくれたし。」

勇士郎 「お、俺も助けるコトに夢中だったからさ。うん。」

漣 「……私達は、火鳥クンがロボットになれること、秘密にしておくよ。」

勇士郎 「そ、そお？ありがとう。でも、今のところはいいけどいつまでも秘密にするのはキツイかな？警察の方にもロボットあるみたいだし、そのうち共闘するんだろっな……その際に正体追及されるかも。」

澪 「警察のロボット・・・それなら、今日学校に来てたよ。警察官と会話してた。スゴイよね？今のロボットの技術って・・・でも一番スゴイのは火鳥くんだったよ。」

勇士郎 「俺の方は地球外の技術だからね・・・。」

ケータイで澪と会話する勇士郎。段々と緊張がほどけてきているようだ。

一方光の方は、まだ返信は来ていなかった。

蓮 「お！律から返信来た！」

光 「こねー・・・おわった・・・あ、うそ。まだ終わってない！」

俊 「おいおい・・・まだ5分も経ってないぜ。」

一方送信相手の唯は、愛ギター「ぎー太」を抱きしめながら寝ていた。

唯 「ぎー太あゝ・・・よかつたあむにやむにや・・・。」

寝言を言いつつも寝続けている唯。

その時、平沢家の上空にまた新たなエネルギー生命体らしき光が舞い降りてきた。

家の外では妹の憂が従兄の平沢勇と勇の愛車、エクスGTを洗車していた。

勇は就職先が親戚の唯達の家から近いということもあって、居候として唯達の家に住み込ませてもらっているのだ。

勇 「そうか・・・確かに俺もニユースで見たけど大変だったな。それでしばらく学校休みか・・・あ、ここ水かけていいぜ。うーさみー、さみー・・・。」

憂 「うん。お姉ちゃんと同級生の人たちや先輩達が犠牲になつてね。直接見てたわけじゃないからピンとこないんだけど、お姉ちゃんや友達がその場に居合わせちゃってね・・・。」

勇 「それで唯は、部屋にこもりつきりか？」

憂 「昨日帰ってきたときはいつものお姉ちゃんじゃなかったけど、心配になってさっき見たらギター抱きながら幸せそうに寝てたから大丈夫だよきつと。」

勇 「そつか。ならいいんだけどな・・・あとはからぶきして終わり！もういいぜ憂。寒い中手伝つてくれてサンキュー。ほれっジューズ代。唯の分も買つといてやれ。釣りは小遣いでいいぞ。」

憂 「ありがとう！勇兄ちゃん。」

憂に千円札を渡すと、愛車をからぶきし始める。

そのときだった。上空から飛来したエネルギー生命体がエクスGTと一体化した。

キュアアアアアアアアアアアア・・・！！

勇 「な、なんだあ!？」

憂 「きゃあっ!」

眩い光に包まれる勇の愛車。光が収まるとエクスGTが喋りだした。

エクスGT 『ここが地球か!なるほど、いい星だ。綺麗な空気で満ちている!~!』

勇&憂 「しゃ、喋ったあ?!~!」

憂 「ちよつとお姉ちゃん起こしてくる!」

憂は、急いで唯をズリ起こして車庫まで連れてきた。

唯 「もおゝ・・・寝てたのにいゝ・・・。」

憂 「だってクルマが喋ったんだよ?!」

唯 「ううううう・・・。」

勇 「相変わらずだな、唯は・・・で、あんたは一体何なんだ?!」

エクスGT 『私は、エクスカイザー!破壊生命体、デストリアンを追ってきた宇宙警察だ!』

勇 「なんだってええ!?!?」

憂 「嘘っ?!」

唯 「むにゃむにゃ……………」

エクスカイザー 「既に追っていた個体の反応がなくなっているが……………また新たなタイプが来るようだ!!」

勇 「何がなんだか……………」

唯 「あ…………メールだあ!」

勇 「唯は緊張感がねーな……………」

またもう一つの勇者が新たに地球に降臨した。

一方、時を同じくして、別の二つの隕石が地球に飛来しようとしていた。

それは、吸い寄せられるように成層圏を突き進む。

その突き進む先には、日本と韓国があった。

つづく

次回予告

関東・神奈川南部に落ちた隕石。その内部より3種のデストリアンが姿を現す。

同時に韓国・ソウルにも隕石が落下。新たなデストリアンが出現した。

韓国を目指して飛び立つ勇士郎。迎撃の為に出撃するジエイデッカー達とマイトガイン。

防衛ラインを突破しようとするデストリアンに立ち向かうエクスカイザー。

それぞれの勇者達が宇宙の災厄と対峙する。

次回、新生太陽の勇者 ファイバード・サーガ 第5話 「4大勇者、出撃」

勇者の力が大地を統べる。

する人々。

前日のデストリアンと比較しても小型だが、明らかに種類の類が違う。

それは、惨殺するだけで人を捕食していない点である。

まるで自分達のテリトリーに入ったものを攻撃していくかのよう
うに、人々を惨殺していくデストリアンの群れ。

だが、それだけではなかった。

隕石の中から今度はクモのようなタイプのデストリアンが現れる。

ガサガサと這い出てくると、人々や街に溶解液を飛ばしながら
おぞましい速さで8本の脚を素早く動かしながら、都市部の方面へ
と向かい始める。

さらには、団子虫を巨大させたようなタイプまで出現。

更なる惨事を巻き起こしながら、市街地をゆっくりと突き進む。

すぐにM・P・D・BRAVEにスクランブル要請が出され、
チームに警視庁からの通達が入る。

冴島 「聞こえるかね！？要君！！つい先程神奈川県南に落
下した隕石からクリーチャーが出現した！！大至急現場に急行した
まえ！！尚、対処に難がある為に、陸上自衛隊にも対処を要請した
！！！」

要 「了解！！M・P・D・BRAVE、直ちに出勤します！」

ショットレイバー 『ショットレイバー、了解！』

葉山 「ういっす！！」

科警研に停車中のJローダーにも通信が入る。

ジェイデッカー 『クリーチャーの出現を確認！！これより急行する！！』

Jローダーからロボットモードへと変形するジェイデッカー。

ジェイデッカー 『ブレイブアップ！！ジェイデッカー！！』

ウィングスラスター全開で飛び立っていく。

現場検証中の桜高の校庭では、吉崎とさわ子がケータイの番号とアドレスの交換していた。

吉崎 「・・・よしと。それじゃ、スクランブル要請入ったからいくね！」

さわ子 「うん、がんばって！！レイナ！！」

その場から急いで駆け出し始める吉崎。

一方、旋風寺コンツェルン・マイトガイன்பaddockでもサイレ

ンが鳴り響いていた。

マイトガインに乗り込む舞人。だが、彼らしくもなく個人的な愚痴をこぼす。

舞人 「こんな早いタイミングで!!?くそ!これから細さんの所へお見舞いに行く矢先だったというのに!!」

マイトガイン 『女性にうつつをしている場合ではないぞ!!舞人!!!』

舞人 「わかっている!!いくぞ!!マイトガイン!!」

マイトガイン 『了解だっ!!!』

平沢家でも勇のクルマ、エクスGTと融合したエクスカイザーが変形を開始する。

ガキイン! ギュオン・・・ゴオオン!! ギュウイン

!!

エクスカイザー 『チエエエエエエンジ!!エクスカイザー

!!!』

勇 「うおおおおお!!カッター!!俺の相棒がさらにカッコよくなっちゃった!!」

憂 「きゃあああ!すごい!すごいよ!お姉ちゃん!!」

唯 「ふもおおおお!!」

エクスカイザー 「これが私、エクスカイザーの本当の姿だ。」

勇が妙な点に気づく。その妙な点とは、変形したエクスカイザーのサイズ自体が、元々のエクスGTの大きさと比べて明らかに巨大化している点であった。

勇 「んあ？俺のクルマのサイズ自体がデカくなってるように見えるんデスケド……。」

エクスカイザー 「ああ、これは戦闘モードの状態だ。変形する時のエネルギーで若干巨大化する。戦闘が終って変形すれば元の大きさに戻る……それで君達の名は？」

勇 「え？ひ、平沢勇！そのクルマの持ち主だ！まだローン残ってるけどな。で、この二人は俺の親戚の従妹達だ。」

唯 「は、はじめまして！平沢唯です！」

憂 「妹の憂です！」

エクスカイザー 「よろしく！勇、唯、憂！では、私はこれから戦いに向かうー！」

すぐさまにGTモードに変形して現場へと急行するエクスカイザー。

唯 「いつてらっしゃい、ロボットさん！」

勇 「ボコボコになって帰ってくるなよ。」

唯 「すごい……昨日助けてくれたロボットみたい。」

勇 「へ!?!」

唯 「あはは……なんでもない(いけない!内緒にして
つて言われてたんだ……)。」

一方、勇士郎は澪との電話での会話を続けていた。だが、突然
会話が止まる。

勇士郎 「じゃあ気持ちが悪くなってきたらカラオケでも……
ん!?!?!」

澪 「……………あれ?もしかして、火
鳥君?」

ファイバードの能力によって、勇士郎はデストリアンの出現を
直感する。

勇士郎 「ごめん、また後でかけなおす!」

澪 「え?!」

勇士郎 「それじゃ!」

澪 「ああ、じゃあまた後で………一体、どう
したんだ?」

携帯をしまう勇士郎。そして空に向かって叫ぶ。

勇士郎 「ファイアー……ジェエエエエツツ!!!」

ファイアージェットが飛来する。だが変形はせずに、山の斜面の上でホバリング状態となる。

蓮 「いくのか!？」

勇士郎 「ああ!!! 韓国にいつてくる!!!」

光 「韓国ウウ!??」

俊 「日本じゃないのか?!」

勇士郎 「確かに奴らは日本に飛来したけど、もう一つが韓国に飛来したんだ。」

俊 「ま、行って来い!!! 勇士郎!!!」

勇士郎 「ああ!!!」

シュオンツ!

光を纏いながら空中を走り抜けて、ファイアージェットに乗り込む勇士郎。

計器類を操作し、レバーを握る。握ったレバーを前に押し出すと、スラスタ全開で飛び立っていった。

海岸付近では依然として惨殺が繰り返えされている。

その現場に陸上自衛隊の攻撃部隊が到着する。

陸上自衛隊員A 「あれが、新たに出てきたクリーチャーか！」

陸上自衛隊員B 「はっ！既に多くの一般市民が犠牲となつて
いる模様！！」

陸上自衛隊員A 「直ちに攻撃に掛かる！！C 07への攻撃
部隊にも通達しろ！！」

陸上自衛隊員B 「はッ！」

陸上自衛隊員A 「撃ちかた用意・・・攻撃、開始！！」

戦車隊 「目標、C 07！！攻撃開始！！」

ドオドオドオドオドオドオドオドオドオドオドオドオオオオ
オオ・・・

二点同時に陸上自衛隊による攻撃が開始される。

その地点から北上した地点では、マイトガインと合流したジエ
イデッカー達が迎撃に向かう。

現場付近へと向かうJバギーから要が指示を出す。

要 「ジエイデッカー！相手は前回同様2体だ！！マイトガイ
ンと連携して個々に叩く！！団子虫型のC 07は現在自衛隊の戦
車隊が攻撃中だ！！先に速度の速いクモ型のC 06を叩け！！シ

ショットレイバーは支援を頼む!!尚、南下したポイントでも自衛隊が交戦中との事だ!!」

ジェイデッカー 『ジェイデッカー、了解!!』

ショットレイバー 『ショットレイバー、了解!!』

ぞぞぞと気味の悪い動きで進行してくるC 06。

ジェイデッカーが目標の速度に合わせてJバスターを構える。

ショットレイバーも走りながらショットガンを構える。

マイトガインは迎え撃つ形で、射撃体勢に入る。

舞人 「このまま迎撃だ!!シグナルレーザー、マイティーキヤノン、ディスチャージレーザースタンバイ!!」

マイトガイン 『了解だ!!』

吉崎がJバスターのセーフティーロックを解除する。

吉崎 「Jバスター、セーフティーロック解除。Jバスター、アクティブ!!」

ジェイデッカー 『了解!!』

ディギン、ディギン、ディギン、ディギン、ディギン、ディギン、ディギン!!

ズドオドオドオドオドオドオドオギヤアアアツ!!!

「バスターのレールガンが放たれ胴体に直撃し、表面がえぐれていく。」

C 06 「キイイイイイッ!!!」

走りながら、ショットガンを撃つショットレイバー。

バスンツ!!!ジャキ・・・バスン!!!ジャキ・・・バスンツ!!!

ドオガアアツ!!!ドオガアアツ!!!ドオオオオオツ・・・!!!

ショットガンの弾丸が脚に着弾していく。

そして、マイトガインが正面から射撃系の武装を連射する。額のシグナルレーザー、腹部上部からマイティーキャノンの高出力ビームが撃ち出される。そして、両肩の内側のライトレンズからもデイスチャーレーザーが発射される。

舞人 「くるぞっ!!!フルブラストアタック!!!」

マイトガイン 「発射っ!!!」

ヴイドウギユイイイイイイインツツ!!!

ドウギヤガガガガガガガガガガガゴオオオオオオ
ン・・・

C-06 「キイイイイイイイツッ!!!」

マイトガインの攻撃が脚や顎、下腹をボロボロにする。これによつてC-06の速度が収まった。

更に3機の連携攻撃が続く。

C-06が放つ溶解液をかわしながら、ショットレイバーがショットガンで牽制する。

ビュバツ!

ショットレイバー 「中るか!!!」

シュダツ!!! バスン、ジャカ、バスン!!!

その上からジェイデッカーとマイトガインがC-06の胴体部分に射撃する。

マイトガイン 「胴体を狙い撃て!!!」

舞人 「奴の胴体だ!!!」

ジェイデッカー 「ああ!!!」

ヴィギユギユウドオアアアアアアアアッ!!!

ディギン!!!ディギン!!!ディギン!!!ディギン!!!ディギン!!!ディギン!!!

ディガギヤドオドオドオドオガガガアアンツ!!!

胴体部分の表面が激しく爆発する。

C 06もこの攻撃に対して反撃に出る。

ビュドオオツ!! ヴュドオオツ!!

2機は、左右に分かれて、放たれてきた溶解液をかわす。

旋回しながら、ジェイデッカーとマイトガインは攻撃を続ける。

ジェイデッカー&マイトガイン 『うおおおおおおお
お!!!』

その時、この戦場の片隅を走る車両をショットレイバーが確認する。

ショットレイバー 『隊長!!! 市内を走る車両を確認!!! この
ままですとC 07の付近に接近してしまいます!!!』

要 「何!? 避難勧告に従わなかったのか!!! 直ぐに追っ
てく
れ!!!」

ショットレイバー 『了解!!!』

走り出すショットレイバー。だが、追う車両は並大抵のスピー
ドではなかった。

ショットレイバー 『何キロ出してるんだ!!? スピード違反もいいトコだぞ?! 逮捕だ!! 逮捕!!!』

そしてついにC 07のところまで来てしまつう。

C 07は、自衛隊の攻撃を物ともせず進撃していた。

ショットレイバー 『その車両!!ここは避難勧告区域だ・
・。。。。』

そのとき、ショットレイバーの目の前で車両が飛び上がる。その車両はエクスカイザーだった。

空中でエクスカイザーに変形する。

エクスカイザー 『チエエエエンジ、エクスカイザー!!!』

ショットレイバー 『何い!??あんなロボット、データにな
いぞ!!!??』

更にエクスカイザーは空に向かってエネルギーを放った。

エクスカイザー 『キングローダー!!!』

エネルギーを放った先からは、巨大なトレーラーマシンが姿を
現す。

空中でそれは変形を開始し、ハッチオープンでホバリング
する。

エクスカイザー 『とうっ!!』

エクスカイザーは、変形したキングローダーの内部へ飛び込む。そしてハッチが閉まり、ライオンの顔が胸部に現れる。手首が現れ、新たな頭部が現れると口許にフェイスマスクが装着される。

キングエクスカイザー 『巨大合体！キングエクスカイザー！』

キングエクスカイザーはC 07の目の前に降り立つ。

キングエクスカイザー 『どんな命にも尊重すべきものがある！！だが、命を当たり前のように砕く貴様達の命だけは尊重できない！！この宇宙警察キングエクスカイザーが貴様達を駆逐する！！』

ショットレイバー 『宇宙警察!??』

C 07 「キュイイイイイイ!!」

C 07の甲羅の穴の部分から触手のようなものが8本程姿を現す。その先端から、ビームが放たれる。

ビビビビビギユイイイイイイツッ!!

背部のスラスタバーニアで瞬時にこれをかわすキングエクスカイザー。

キングエクスカイザー 『中らん!!』

ドオガオオオオオッ!!

C 07 「ギユイイイイイ!!」

ビビビビビギユウウイイイイツッ!!

ドオドオドオドオガガアアアアアッ!!

C 07の放つビームが街を破壊していく。

キングエクスカイザー 『このままでは街が!!』

その時だった。

ドオドオオ!!

C 07 「キユイイイイイ?」

ショットレイバーの放った弾丸がC 07に着弾した。キング
エクスカイザーに向かってグットサインをおくるショットレイバー!

ショットレイバー 『せめてこのくらいはな。』

キングエクスカイザー 『この星の戦士か!!感謝する!!よし!
し!カイザアアビイイイムッ!!』

ドウピギユイイイイインッ!!

ライオンの両眼が発光し、虹色のビームが放たれる。

ドオガアアアアア!!

C 07 「キュギャアアアアアアアアアア!!」

ビームが着弾して爆発した部分の甲羅の表面にヒビが入る。

C 07の面前で仁王立ちをして構えるキングエクスカイザー。
カイザービームを連発し続ける。

キングエクスカイザー 「これ以上は行かせはしない!!」

ビギユイイイイイ!!・・・ビギユイイイイイ!!・・・
・ビギユイイイイイ!!

ドオギユガアアア、デイギャガアアアツ、ズギユガガアア
アアアアアツ!!!

C 07の甲羅が徐々に砕け始める。キングエクスカイザーは
カイザービームを撃ち続けた。

ビギイイイン!!ビギユイイイイイ!!ビギイギユイ
イイ!!ビギユイイイツ!!

ズズズズズズズウウウウン・・・

その頃、ジェイデッカーとマイトガインが止めを刺す段階に入
っていた。

吉崎 「Jバスター、エネルギー充填率、95%!グレネード
モード・アクティブ!!」

キングエクスカイザーは、右脚から必殺剣、カイザーソードを取り出して右手に握り締める。

胸のライオンの口の中が発光しはじめるとその正面にカイザーソードをかざした。

キングエクスカイザー 『はあああ……サンダーチャージアップッ！！！！』

ヴィギイイイイイイイ！！！！

胸のライオンがスパークし始め、激しいエネルギーを帯び始める。そして、そのエネルギーが、ライオンの口内に凝縮され、カイザーソードの刀身に放たれた。

ヴィキュアアアアア！！！！

エクスカイザー 『サンダーフラッシュッ！！！！』

ヴィギユイイイイイイイイツツ！！！！

長い刀身を両手に握り締め、切先を天に向けるとサンダーエネルギーの柱が天を突き抜ける！

そのままカイザーソードを渾身の力で振りおろす。

キングエクスカイザー 『はあああああッ！！！！』

ギユアアアアアアツ……ヴァギャシャアアアア

戦闘に突入するも、その巨体はファイバードを苦戦させる。

だが、想い人の存在がファイバードの脳裏に過ぎる時、反撃への突破口を見出させる。

次回、新生太陽の勇者ファイバード・サーガ 第6話「フレイムストーム」

炎の嵐は災厄を焼き尽くす。

第6話 「フレイム・ストーム」

ビル群が破壊され、無残にも崩れ落ちていくソウルの街並み。

韓国軍の戦闘機がこの元凶に対して挑む。

だが、あつけないほどまでに叩き潰され墜落していく。

元凶は、日本で現れたタイプよりもさらに巨大なクリーチャー
ことデストリアン。

巨大なムカデのような胴体からはえる、腕とも脚ともいえる六
本の強靱な筋肉を持った腕。

数十本もある前に突き出た牙。

蔓が固まったような頭部から生える触角、埋め込まれた10個
の眼球。

背部は強固な鱗におおわれている。

C O 8 「ゴゴゴアアアアアア！」

バギャガアアアッ！！

二本の腕を同時に振り、韓国軍の戦闘機を破壊する。

韓国軍兵 「くっ！！これはかつて日本に出現した地球外生命体なのか……ぐおおー！！」

ドガアアアアアア！！

戦闘機部隊は全く歯が立っていなかった。犠牲者が出るばかりだった。

C 08はさらに破壊の限りをつくす。

突き進みながらコンクリートを砕き、ビルを外壁もろとも叩き潰す。

周囲には、巻き込まれた一般市民の変わり果てた遺体があちこちに点在している。

その光景は、かつて日本で起きた惨状に酷似していた。

この悪夢の都市内から脱出する為に一台の四駆車のクルマが郊外へ向かって走っていた。

だが、不運にもC・08に目をつけられてしまう。

地面を破壊しながら激進してくるC・08。

男性市民A 「やべえ、やべえ、やべえ！！追いつかれるぞ！！！！」

男性市民B 「くそっ！！何だっってこんな事にいいいい！！？

？」

アクセルを全開で踏み込むものの、追いつかれるのも時間の問題というほど相手が速かった。

C - 08 「ゴオオオオオオオオオツツ！！！！！」

轟々たる咆哮が背後から響く。

女性市民 「もう、いやああああ！！！！怖いよおおおっ！！！！」

強烈な腕での攻撃が地面や建造物を砕き続ける。

置き去りにされているクルマをかわしつつ、狭い路地へと入り込む四駆車。

男性市民 A 「おい！！どんな狭いトコいったって意味ないぜ！！！！アイツは何でも破壊していきやがる！！！！」

男性市民 B 「今は是が非でも逃げるしかねえええええ！！！！」

女性市民 「だめ！！追いつかれちゃう！！！！」

背後に巨大な鍵爪が迫る。

だが、次の瞬間だった。C - 08にミサイルが直撃する。

ディガガガアアアアアンツツ！！！！

C - 08 「ガギユオオオオオ?!?!」

そのミサイルの攻撃は、C - 08の進行を一時的に止める。

男性市民A 「助かった!!まだ軍の戦闘機がいたんだな!!」

女性市民が窓から空を見上げると、ミサイルを放ったのが軍ではないことに気づく。

女性市民 「ちがうよ!!あの飛行機が撃つたのよ!!」

男性市民B 「飛行機って……確かに戦闘機にしちゃ派手なカラーだな。」

上空を駆ける飛行機……それは、日本から駆けつけたファイアージェットだった。

勇士郎 「ソウルの街がこんな姿に……!!くそ!!デストリアンのヤローっ!!!」

勇士郎は、眼下のC 08を睨みながらハッチを開けてソウルの街へと落下するように飛び降りる。

そして、降下しながら光を帯び始めた勇士郎が叫ぶ。

勇士郎 「ファイアージェエエツトツッ!!!」

それに呼応し、飛んでいたファイアージェットが降下しながら変形を開始する。

機首が折れ、後部が真っ二つになり脚へと可変していく。

前部が腕に変形し、頭部が現れる。

変形した両腕部が下ろされ、手首が現れる。

勇士郎 「はぁぁ・・・っ!!」

ファイバードに変形しきつたのを確認すると、勇士郎は光を帯びたまま胸部の中央へと飛び込み融合する。

両眼にライトグリーンの光が灯り、完全起動するファイバード。

ファイバード 『チエエエエエンジン!! ファアアイバアアアアドツ!!』

勇士郎がファイバードになると同時に、空中からC・08に向かってとび蹴りをくらわせる。

ファイバード 『はぁぁぁぁ!!』

ガアアアアアンツ!!

C・08 「ゲガアアアツ!!」

C・08の右肩にくらわせた蹴りの反動を利用して、地面に着地するファイバード。

ファイバード 『ダイナバスター!!』

両腕に装着されているバルカン砲・ダイナバスターをかざし、
C-08に向かって発砲する。

デイガガガガガガガガガガガガアアアア！

デイギャギャギャギャギャギャガガガガアアアンツ！！！！

C-08 「ガアアアアアアツ！！！！」

ドゴガアアアアツ！！！！

ファイバード 『くっ！！！！』

爆煙の中からC-08の豪腕がファイバードを襲う。

ジャンプしてこれをかわすが、その際に左からのフックをくら
ってしまふ。

ドガアアアアツ！！

ファイバード 『がはっ！！！！』

ズズズウウン・・・

吹き飛ばされたファイバードが地面に激突する。

そこへ容赦の無い豪腕がファイバードを潰そうと襲い掛かって
くる。

ドガギヤアアアアツ！！

寝返りながらこれかわし、再びジャンプしてダイナバスターを放つ。

ディガガガガガガガガガツ！！

それをモノともしないC-08が、ファイバードの胸部を鷲掴んで地面にへし抑える。

ガギヤツ！！

ファイバード 『しまったっ……！！！！』

ズギヤゴオオオツ！！！！

ファイバード 『ぐあああああああ！！！！』

ぎりぎりファイバードのボディーを地面に押し込んでいくC

-08。

ギギギギギ……

ファイバード 『うおおお……！！死ぬ……のか・

……！！！！』

ボディーがきしみはじめる。このままでは絶体絶命は必死だった。

さらに深く埋められるファイバード。余りに余る苦痛により意

識が消えかかる。

その時、勇士郎の極限の意識の中で溼の姿が過ぎる。

勇士郎 そうだ・・・俺、やっと秋山さんと知り合えたんだ・・・
ずっと好きだった秋山さんに・・・だからさ・・・こんなと
こで・・・

ファイバード 『死ぬるかあああああ!!!!』

ガシャガシャッ!! ドシュシュシュシュゴオオオオ
オオオオツ!!!!

両膝に装備されたフレアミサイルのハッチが開き、ミサイルが
一斉発射される。

ドオガガガガギヤガアアアンツツ!!!!

C 08 「ギユウゴオオオオツ!!!!」

ミサイルの全弾がC 08の巨軀に直撃し、これによって怯み
をみせた。

この隙を逃さず、空中へと舞い上がるファイバード。溼への想
いが反撃のチャンスへと繋がる。

空へ手をかざしエネルギーを撃ち放つ。

ファイバード 『フレーム・プレスター!!!!』

ズギャギャギャギャオオオオオオッ！！！！

C 08 「グゴゴゴオオオオアッ！！！！」

ファイバードがその流れでC 08の強靱な鱗に覆われている背部に回りこんだ。

ファイバード 『チャージショット！！』

キュイイイイイ……

フレイムキャノンの砲口にエネルギーが充填されていく。

だがあくまでチャージショットするためのエネルギーであるため、チャージアップではない。

ヴィギュイイイイイイッ！！！！

ヴァギャカアアアアアアアアアアッ！！！！

チャージされたフレイムキャノンの火線がC 08の背部の鱗を粉碎する。

C 08 「グゴゴゴオオオオオオ？！！！！」

攻撃の反動で前に倒れこむC 08。

ファイバードはこの隙にフレイムキャノンに収容し、フレイムソードを背部から取り出す。

ファイバード 『フレイムソードッ！はあああっ！！！』

右手に握り締めたフレイムソードを振りかざしながら、背部に突撃する。

再び背を起こしたC 08の背部にフレイムソードの斬撃が入る。

ザシューウウウウンッ！！

ビュバアアッ！

紫の血が吹き出る。

振り向きざまにC 08はファイバードに裏拳を繰り出す。

ドゴガアアッ！！

ファイバード 『ぐおおっ！！』

吹き飛ばされるが、両足でスライドしながら持ちこたえた。

再びC 08の反撃が始まる。突撃しながら4本の豪腕でファイバードに殴りかかる。

C 08 「ゴゴガアアアアアアッ！！！」

ググググオオオン……

ファイバード 『フレイム・フィールドッ!』

フレイムソードを正面で横にかざしてバリアーフィールドを形成させた。

ドガガガアアンツ!!

C 08の攻撃は直撃しているものの、フレイムフィールドによって衝撃が遮断されている。

その状態からフレイム・フィールドを解除し、フレイムソードの一刀でC 08の右手首を2本斬り落とす。

ヒュフォンツ、ザガシユウウンツ!!

ブシユウウンウウ・・・

ファイバード 『このまま斬り込むっ!』

C 08の懐に入り込んで飛び上がると左腕の付け根に向かっていく。

ファイバード 『しゃあああっ!』

ザガガガガシユウウンツ!!!

ビュバアアアアツ・・・

2本の左腕をフレイムソードの斬撃が付け根から斬りおとした。

C 08 「ギユギユゴヴォガガガガッ！！！」

前で苦しみの咆哮あげながらもがくC 08。

その際にファイバードは、後方へと一旦身を引いて十分な間合いをとる。

そして、ファイバードが額に光を放ちながらフレイムソードを正面にかざした。

ファイバード 『フレイムソード・・・チャアアアアアアアアッ！！！！！』

フェニックスのオーラがファイバードを包み、両手に握られたフレイムソードの刀身が炎をたぎらせる。

その場を移動する事無く、フレイムソードを横へ斬り払うように刀身を前へと突き出す。

シュフィンッ・・・！！

ファイバード 『フレイム・ストームッ！！！！』

ファイバードの叫びと共にフレイムソードの先端から炎のエネルギー過流が撃ち出された。

ギユヴィヴァアアアアアアアアアアアアアアアアアアア！！！！

ディギユゴガアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアア

ツツ！！！！

撃ち放たれた炎のエネルギー過流がC 08の巨躯を爆炎を上げながら激しく粉碎させた。

フレイム・ストーム。

刀身から強力な炎の渦を撃ち放つ、チャージアップ時のフレイムソードの技の一つだ。

爆炎の中に浮かぶファイバード。フレイムソードを収容し、再びファイヤージェットへと変形しその場を飛び去っていく。

一方、再び日本。海岸線で続いていた戦闘は、駆けつけたM・P・D・BRAVEのメンバーとキングエクスカイザーによって収束していた。

自衛隊員、警察官達が佇む中に立ちそびえるキングエクスカイザーとジェイデッカー、マイトガン達。

ショットレイバー 『……で、宇宙警察って言うていたが、あんたは一体？』

ジェイデッカー 『警察……！そうか！我々も同じ警察組織の者だ。共に警察同志。ここはひとつ握手を交わそう！』

キングエクスカイザー 『ああ！改めて言おう、宇宙警察機構所属の宇宙警察エクスカイザーだ。破壊生命体、デストリアンを追って来た。』

キングエクスカイザーとジェイデッカーの両警察勇者が握手をかわす。

ジェイデッカー 「この日本という国の警察組織、警視庁に所属する超AIを搭載しているロボット、ジェイデッカーだ！よろしく！」

ショットレイバー 「同じく警視庁のショットレイバー。他にも俺と同系統のガンレイバーがいる。よろしくな！」

舞人 「旋風寺舞人。この国の大企業、旋風寺コンツェルンの御曹司。正義の嵐を呼ぶナイスガイだ！」

マイトガイン 「……同じく旋風寺コンツェルンという民間大企業のマイトガインだ。」

エクスカイザー 「よろしく！！舞人、マイトガイン！！！」

彼らの足元へ「バギー」が到着する。

ハッチが開き、要達が出てくる。

キングエクスカイザー 「あなた達は？」

要 「このロボット達が所属する特殊部隊、警視庁直属対特殊生物機動隊M・P・D・BRAVEの隊長、要誠人だ。よろしく！」

キングエクスカイザー 「よろしく！誠人隊長！」

続いて吉崎と葉山が挨拶する。

吉崎 「部下の吉崎レイナです。戦闘オペレーターやっています。」

葉山 「同じく葉山洋介！このJバギーのドライバーをやっている！よろしくっす！！」

キングエクスカイザー 『よろしく！レイナ、洋介！』

そこへ警視庁のヘリコプターが舞い降りる。すると中から警視庁警視総監、冴島十蔵が出てきた。

要 「これは！冴島警視総監殿！！」

マイトガインとキングエクスカイザー以外の各員が冴島に敬礼をする。

冴島はマイトガインとキングエクスカイザーを見上げると一言述べた。

冴島 「……………カッコイイじゃないかっ！！！！」

要 「はあ……………た、確かにそ、そうですね！！」

舞人 （この人とは趣味が合うかもな。）

吉崎 （……………それだけ？）

葉山 （ぜったい家いたらマジ ガーZとかゲッ ーロボと

かが滅茶苦茶飾ってあるぞこの人・・・！！！！）

冴島 「こちらが旋風寺コンツェルンが誇るマイトガインか！同じく実にカッコイイ！！うむ。」

舞人 「あなたとは趣味が合いそうだ。冴島さん。」

冴島 「では、今度ロボットと正義のカッコよさを語り明かそう！！！」

舞人 「是非ともよろこんで！！！」

マイトガイン 『け、警視総監殿、本題は一体・・・??』

冴島 「・・・うおっほん！！で、このロボットが先程報告された謎のロボットかね？」

要 「はい！たった今、彼とのコンタクトを取ってありました！！！」

冴島はエクスカイザーに視線を向ける。

冴島 「そうか・・・私は警視庁警視総監の冴島十蔵だ。」

キングエクスカイザー 『はじめまして、警視総監殿。私はエクスカイザー。宇宙警察機構所属の宇宙警察です！！』

冴島 「そうか！宇宙の者か！！うん、実にカッコイイ！！ま・・・ゴホン！本題はというと、君をM・P・D・BRAVEのメンバーに欲しいということだ。我々は君を信じて受け入れる

姿勢でいる。何故ならコトは地球レベルの問題だからだ。怪しいだの何だのいう暇があるなら宇宙の正義の意志を信じたい！」

要 「では、このエクスカイザーの件は……。」

冴島 「無論、正式なメンバーに申請しよう！！警視総監自らが言っているのだ！！案ずるな！！」

要 「はっ！ありがとうございます！！」

キングエクスカイザー 『警視総監殿……ありがとうございます
が、私の場合、ある一般家庭の車両と融合している為にこちらから離れるわけにはいかないんです。』

冴島 「車両?!」

キングエクスカイザー 『こういうことです……とおっ!』

そういうとキングエクスカイザーのハッチが開き、エクスカイザーが飛び出す。

ズシン……ギャキイインツ!

そしてエクスGTに変形した。大きさも元々の車両のサイズになっっている。

冴島 「……成る程！カツコイ……いや、そういうことか！なら行動の制限を免除するカタチではどうだろうか？君はいついかなる場合でも行動が自由だという事だ。現場が近ければそのまま向かってもらっても、離れすぎれば他のメンバーに一任

するもよし……もちろん車両の持ち主のプライバシーも保障する……どうかね？」

エクスカイザー・GTモード 『いいでしょう！それならば問題ありません！組織に参加させていただきますよ！』

冴島 「そうかね！！今後ともよろしくたのむぞ！！諸君！」

M・P・D・BRAVE一同 『はっ！』

エクスカイザー・GTモード 『はい！！改めてよろしく！！』

舞人 「もちろんだ！共に奴らを叩く！！」

マイトガイン 『了承した！！』

こうしてM・P・D・BRAVEにエクスカイザーが加わることとなった。

その日の夜のニュースでは早くも今回の一連の事件が報道されていた。

律がテレビを見ながら漣に電話をかけていた。

律 「漣、今テレビ見てる？なんかカトリクンが韓国行ってたみたいだぞ。」

漣 「え?!」

漣は自分の部屋のテレビをつける。すると韓国でのファイバー

ドの戦闘の映像が報道されていた。

漣 「ホントだ……。」

律 「な？あのとときのロボットだろ？韓国にもあの怪物が現れたんだってさー！」

漣 「あ……。！だからあの時電話やめたんだ！」

律 「へ？電話？」

漣 「あ……。えーと……。実は今日、火鳥君から電話があったって電話していたんだ。」

律 「おお！やりましたな！漣さん！」

漣 「う、うるさいな！ただ電話しただけだ！」

律 「照れない、照れない まあ、実は私も蓮て人とメールしてたんだ。いやーやつぱ男のコとメールするのは新鮮だな！」

漣 「……。昨日の今日なのに律は平気なのか？あんな事が起こっても……。」

律 「確かに平気じゃいられないよ。ホントはね。目の前で死んでいったコ達見ちゃったんだからさ……。でもいつまでも塞ぎこんでたってしかたねーじゃん。」

漣 「なあ、律。軽音部はこれからどうする？」

律 「しばらく自粛するしかないよ。でもいつかタイミング見計らってライブやるぜ！こうやって暗いことが起きつつづけているからこそ音楽の力が必要だからさ。」

漣 「そうだな。律の言うとおりだ。それまでに練習しておかなきゃな。練習場所はムギに頼んでみよう。確か音楽関係の会社の令嬢だし……。」

律 「そうだな。何があっても軽音部は止まらないぜ！！」

漣 「くすっ……なんか火鳥君や律と会話していたらあの程度は落ち着いてきた。」

律 「しばらくは学校休みになっちまったし、今は精神的な部分を癒しておこうぜ。」

漣 「ああ！」

元々軽音部のメンバーがひた向きであることもあり、短期間で前向きな姿勢を見せ始めていた。

時同じくして、勇士郎も昼間にいた山に降り立つ。眼下に広がる夜景を見て改めて住む人々の重さを感じていた。

その時、今まで聞こえなかったファイバードの声が勇士郎に聞こえてきた。

ファイバードの意思 勇士郎。

勇士郎 「ファイバード！？今まで聞こえなかったのに……」

?!」

ファイバード あえて何も話さなかったのさ……どうだ？実際に戦ってみて。後悔とかは無いか？

勇士郎 「もちろん！俺自らが選んだ事だしな。後悔なんてない！むしろもつと行動して他が為に、そして仲間や秋山さんが危なくなつた時にまた力になりたい！！」

ファイバードの意思 そうか。それならいいんだ。まだデスクリアンとの闘いは始まったばかりだ。またいつ飛来するかわからない。

勇士郎 「ああ。俺は戦う！！セカイの痛み止めるまでは……！！」

ファイバード 君のその勇氣には本当に感動する……そうだが、戦う仲間が他にもこの地区に来ている。いずれ共闘する事となるだろう。エクスカイザーと言う私の先輩にあたる人だ。

勇士郎 「エクスカイザーか……。」

エクスカイザーも帰宅し、平沢家の車庫に入っていた。

勇 「じゃあ、これから事件の度に出向いちまうのか？」

エクスカイザーGTモード 『ああ。可能な限り出向く。勇に無理の無い範囲でな。』

勇 「……ま、いつか。こうして無事に帰ってきてくれた

し。ニュースでもやってたぜ。そーいや他にも仲間がいるんだな。韓国にも似たようなロボットが現れたんだと・・・ほれ。」

エクスカイザーにケータイのニュース画像を見せる勇。そこにはファイバードの姿があった。

エクスカイザーGTモード 『これは?!ファイバードじゃないか!!!』

勇 「知ってるのか?!やっぱ仲間?」

エクスカイザーGTモード 『ああ。近くに来ているのは感じていたがな。宇宙警察機構の宇宙警備隊に所属する、いわば私の後輩だ。』

勇 「へー・・・ま、わかったわ。戦いは始まったばかり。

これからよろしくしとくぜ、エクスカイザー。」

エクスカイザーGTモード 『ああ、改めてよろしくな!勇!』

しばしの休息につくエネルギー生命体の2大勇者達。しかし戦いは始まったばかりである。

予断を許さない状況がつづく中、また新たな隕石が地球へと向かう。

つづく

次回予告

デストリアンの事件発生から数週間。わだかまりが癒えない中、学生達は期末テスト期間をむかえる。テスト二日目に備え、市内の図書館でテスト勉強にうちこむ勇士郎たち。だが、桜ヶ丘上空にデストリアンの隕石が容赦なく飛来する。事件のフラッシュバックでパニックを引き起こす澁。勇士郎は澁を仲間に任せ、戦闘に身を投げ込む。

次回、新生太陽の勇者 ファイバード・サーガ 第7話 「桜ヶ丘^ちに舞い降りるモノ」

容赦ない災厄は降り続く・・・

第7話 「桜ヶ丘（まち）に舞い降りるモノ」

クリーチャーことデストリアンが再来し。未曾有の惨事を再び関東地区に巻き起こした。

その爪あとは決して軽いものではない。

警察や軍関係者は事件の事後処理に追われていた。

そんな中、科警研に持ち込まれたデストリアンの残骸の一部の調査結果を要が確認に出向いていた。

要 「調査した結果はどうでした？」

科警研研究員 「ええ。調べた結果、体の細胞組織全てが未知のモノでできていました。確かにたんぱく質らしき物などはありましたが、少なくともこの地球上にはないものです。」

要 「確かに奴らは隕石の内部から出てきました。地球外のものであるのはわかっています。問題は何故隕石の内部で生存しているのか？何故多種多様なタイプがあるのか？ということですが・・・」

科警研研究員 「我々の方としてもそこまでは説明できません。ただ通常ではともありえないことだけは言えます。自然に生存していくのは考えにくいです。」

要 「とくと、人工的なものということにもなるんですか？」

科警研研究員 「……地球外知的生命体の存在が裏にあるかもしれない。今後とも研究を重ねていく所存ですのでよろしくお願ひします。」

要 「はい、こちらこそよろしく。では、失礼します。」

科警研をあとにする要。パトカーを運転しながらつぶやく。

要 「……地球外生命体か……ま、正義の地球外生命体ならうちの部署の別働隊にいるけどな。」

その正義の地球外生命体ことエクスカイザーがいる平沢家。G
Tモードのエクスカイザーが車庫に止まっている。

そこへ制服姿の唯が来る。

12月後半ということもあり、冷え込んだ朝となっていた。

唯 「ううゝ寒い、寒いゝ……おはよう、エクちゃん！」

エクスカイザー 「エクちゃん？」

唯 「そ エクスカイザーだからエクちゃん」

エクスカイザー 「はははは、唯は明るいな。学校はしばらく休みじゃなかったのか？」

唯 「それがさ、今日からテストがあつて、期末テストだけは今までやった二学期分やるんだつて。ああ、テストやだよだ。」

エクスカイザー 「でも、こうやって学校へ行けたり勉強できたりすること自体、幸せなことだ。生きているからこそできることなのだから、嫌がつてはいけない。」

唯 「朝から説教〜?」

憂 「エクスカイザーの言うとおりだよ、お姉ちゃん。」

後ろから憂もエクスカイザーに便乗する。

唯 「憂までー……。」「

憂 「早くいこう、お姉ちゃん!遅刻しちゃうよ?」

唯 「うん!それじゃ、いつてきまーす。」

憂 「いつていきます。」

エクスカイザー 「ああ!いつてらっしやい……。ん?」

急ぎ足で迫り来る音に気づくエクスカイザー。

勇 「だあああああ!!遅刻するウウウ!!」

大急ぎでエクスカイザーに乗り込む勇。

スターターキーを回すと爆音を吹かしはじめる。

ヴオヴオンヴオン！ヴァオオオオン！！

唯と憂 「うるさーい！」

エクスカイザー 「近所に迷惑だぞ！勇！！」

勇 「ええい！！俺は走り屋だああ！！いつくぜえええええ！！」

ヴオヴオヴオヴオヴオギユウルウツ、ヴオオオオオオ・

・

一瞬タイヤをスピンさせ、ものすごい勢いで車庫から飛び出して職場へ向かう勇。

憂 「もう・・・勇兄ちゃんはクルマ乗ると性格が変わるんだよね。」

唯 「ホント変わり様がすごいよね・・・。」

その頃の漣は、教室でテスト勉強の最終確認をしていた。

漣 (うーん・・・まあ・・・大丈夫だな！自信はあるっ！)

そこへクラスメートの和わかが来た。

彼女は、先の唯の幼なじみでもある。

和 「おはよう！漣！」

漣 「あ、おはよう！和。」

和 「ねえ、テスト勉強はかどれた？」

漣 「まあ、なんとかね。和は？」

和 「あんなことがあった後だからね……いつもに比べるとはかどれなかった。」

デストリアンの襲撃事件より三週間余りの今日。生徒達の心のワダカマリが癒えきるにはまだ時間が不十分であった。

漣の場合は特に重症になると思われたが、軽音部のメンバーや、命を救ってくれた勇士郎の存在によって短期間で心の傷が癒えてきていた。

ファイバードが放つプラスエネルギーを直に受けたのも、その要因かもしれない。

漣 「今回はそんな感じの子達がほとんどだと思つ。だからもてる実力を出し切れればいいんじゃないかな？」

和 「そうね。それに今までやった二学期分ていうから、それなりにできる確信はあるわ。」

漣 「テスト期間が終われば冬休みだし、もうチョットがんばろう。」

和 「うん。お互いがんばろ！」

その頃、勇士郎達も期末テストに臨もうとしていた。

蓮 「だー……かつたりー。」

光 「終わったらゲーセンイコーゼ。」

俊 「明日もテストだろが。まー、俺はよゆうだけどな。」

蓮 「どこからくるんだ、そのよゆうっぷり?!」

俊 「普段の努力だ。ていうか、いつそのあと軽音部のメンバーと図書館いったらどーだ?」

光 「おお!さすが俊!!」

蓮 「いーかもな、それ!な!勇士郎!!」

勇士郎は照れながら誤魔化す。

勇士郎 「あー、パス!!!カエツテヤツタハウガハカドルカラ
!!!」

ズイと顔を近づける蓮。

蓮 「どの口が言ってたんだ?!本当は澁ちゃんに会いたいんだ
ろがつ!!」

勇士郎 「バカっ!声がでかい!!」

近くに居たクラスメートのメンバーが聞いてしまう。

クラスの男子 「お?! 漣ちゃんて誰だよ勇士郎!!」

漣 (うあー・・・やっちまった。)

勇士郎 (このバカヤロー!)

その日のテストが終わり、軽音部の部室では二年生メンバーがこっそりとティータイムをしていた。

そこへ堂々とミルクティーを飲む教師、さわ子の姿もあった。

さわ子 「ふう・・・満たされる。」

律 「何が?!」

漣 「なんて幸せそうな顔・・・。」

さわ子 「もちろん私の心よ。ただでさえあんな事があって落ち込んでいたんだから。」

律の脳裏にあの日の出来事が思い浮かぶ。

律 「そつか・・・確かにな。部室は落ち着くよ。ホントここが無事だったのは不幸中の幸いだよな・・・。」

絀 「テスト期間中は部室使用禁止なんですよね? いいんですか?」

そう言いつつもちゃっかりとお茶を注ぐ紬。

さわ子 「いーの、いーの！ばれなきゃ！私も現役時代散々使っていたんだから！」

その時、漣と律のケータイにメールが入る。

・・・

律 「メールだ・・・お！」

漣 「私もだ。」

唯 「どーしたの??」

律 「蓮君達が図書館でテスト勉強しようぜって来たぜ！」

漣 「ああ。私もそんなメールが火鳥君から来たぞ。」

・・・

唯 「あ・・・私も・・・光君だ！」

即座に反応するさわ子。

さわ子 「あなたたちいつの間にか彼氏を!!!?私をさしおいてっ!!!!!」

律 「だあああ!まだそこまで発展してないから!!!」

さわ子 「まだって何!?まだって!!!?」

ヒートアップするさわ子へ漣がクルーダウンをかける。

漣 「えーと・・・先生、この男子はあの怪物が襲ってきたときに助けてくれた男子達なんです。」

さわ子 「え?!あ、そうなの!?以前言っていたロボットの?!!」

絀 「言ってみれば命の恩人さんですよ。」

律 「そ、そーいうことだっ、さわちゃん!」

漣 「まあ、ロボットになるのは火鳥君だけなんだけどな。」

絀 「ロボットの男の子なら私にも知っているコがいるわよ?」

律 「そうなのか?!」

絀 「ええ。マイトガインのパイロットをやってるコで、幼なじみなの。」

律 「ママママ、マイトガインッ!!?あのテレビのニュースや新聞に出てた?!!!ってことは、旋風寺コンなんかの御曹司と知り合いつてことか???!」

絀 「ええ。私の父が運営する会社と提携して造ったロボットよ。マスコミが来て今もチョット忙しくなってるけれど・・・。」

律 「でたっ!!父の運営する会社!!(ホント、ムギはどういう家に住んでるんだ?!!)」

さわ子 「へー……!!!!」

驚愕の余りお茶を溢しまくるさわ子。

律 「ああ!!さわちゃん、溢しまくってるっ!!」

さわ子 「ま、まあ、私の友達も、警視庁のジエイデッカーがいる特殊部隊にいるわっ。そのコも桜高出身で、あなた達の先輩なのよ。」

律 「マジで!?!」

唯もこの会話に便乗して来た。

唯 「はいはい!私の家にもロボットいるよ!!」

漣 「え?!?!どういうことだ?!」

律 「ひょっとして、一昔前のロボット犬か?ま、それはそれでスゴイけどな。」

唯 「違うよ。居候している従兄のお兄ちゃんが乗ってるクルマだよ。エクスカイザーっていうロボットに変形するの!」

一同 「……………?」

啞然とする一同。

律は冗談かと思つて笑い出す。

律 「あはははははは！一般家庭のクルマがロボットになれるわけないじゃん！！いくら会話の空気に乗ったからって・・・はへへへ！ジョーダンにも程があるって！」

唯 「嘘じゃないもん！本当に私や憂の前でロボットになったんだもん！！宇宙から来たエネルギーの生き物が従兄のお兄ちゃんのクルマに乗り移ったんだもん！！」

言っている内容は普通に考えればジョーダンではあるが、唯の表情は真剣だった。

これを聞いた澪も勇士郎の一件を思い出し賛同する。

澪 「本当・・・かもな。火鳥君も似たようなこと言っていた。」

唯 「ふんすつ！」

律 「うーん・・・そーか。となると私と梓だけロボットの繋がりがいないのか・・・ってふつーねーよ！！！」

唯 「りつちゃん、1人ノリ突っ込み！！」

その後、軽音部のメンバーは勇士郎達と合流し図書館へ来ていた。

既に、唯や律、光や蓮の四人は飽きてるモードになっていた。

蓮（やっぱだりー。いくら律ちゃん達といれるからって勉強
っつーのがなえるわー。）

律（うーん・・・あーきーた〜・・・。）

唯（ケーキたべたい。）

光（やっぱ唯ちゃんかわいい・・・。）

仕舞いには4人揃ってベースボールのようなビリヤードのような球技(?)を消しゴムとシャーペンで始めてしまう。

ピュンピュンと机の上を飛び交う消しゴム。

漣（こいつらには集中力のかけらもないのか・・・っ！）

勇士郎（あはははは・・・。）

俊（しゃーねーやつらだなーったく。）

紬（うふふふふ。）

結局はかどらない4人を置いて勉強に集中する勇士郎達。

一服時。図書館の外にある自販機の前でたむろうメンバー達。

蓮と律がゲーセンに行きたがる。

蓮 「やっぱりゲーセンいこーぜっ！！ゲーセン！！」

律 「そーだ、そーだ！ゲーセンだ！！」

それに便乗するように唯がケーキを食べたがる。

唯 「ケーキ食べたーい。」

光 「お、俺ケーキがウマイ喫茶店知ってるよ！」

唯 「ホントー！？わーい！いこー、いこー！」

唯の得意なスキンシップがへーぜんと光に炸裂。光のうでをぐいぐいと引っ張る。

幸せ気分いっぱい光。にやけながら、くにゃんとなっっている。

光 (あー……もう死んでもいい……)

テスト期間中にもかかわらず、遊ぼうとする4人に漣が叱咤する。だが、本人のいる前で勇士郎の苗字を呼ぶのが恥ずかしいためか、若干どもる。

漣 「お前らな！せっかくか、か、火鳥君が勉強誘ってくれたのに遊びに行くなよな！！」

律 （恥ずかしいのを全身全霊で抑えてるな。）

俊 「そーだぜ。テスト期間が終わってからにしるよ。蓮も勉強に誘ったんだろーが。」

4人 「ううう・・・。」

シヨボーンとなる4人。勇士郎がなだめるように言う。

勇士郎 「ま、まあ・・・テストが終われば冬休みがあるんだし、その時に遊びに行けばいいんじゃないかな。」

蓮 （ん・・・？てか言い出しっぺは俊じゃねーか！！）

そのとき、上空には、大気圏を突破した隕石が落下しようとしていた。勇士郎にファイバードの直感がはしる。

勇士郎 「！！！」

急に上空を見上げて表情を変える勇士郎。先程の穏やかなオラが一変していた。

急変した勇士郎に漣が若干緊張気味に尋ねる。

漣 「ど、どうしたの？火鳥君？」

勇士郎 「……デストリアンが来る!!」

漣 「え!!?」

既に街の上空に隕石が見えた。だが、隕石は落ちる事無く空中で爆発する。

バギヤアアアアアアッ!!

一同 「うあああ!!」

そして、爆発の中から新たなデストリアン、C 09が姿を現す。

ズズズウウウウウン!!!

轟音と共に着地するデストリアン。

シヨベルカーのアームのような頭部。その先にあるクチバシ。屈折部の眼。二足歩行の強固な脚。両腕には大鎌が生えている。

C 09 「キョギヤアアアアア!!」

バギヤガアアア!!ズガシャアアア!!ガボオオンツ!

!!

咆哮しながら、破壊活動を始める。

大鎌で建築物を薙ぎ払い、クチバシでビルを突き砕く。

更には、足元に緊急停車した列車をクチバシで加え、列車ごと人々を飲み込む。

律 「ま、またあんなのが・・・！！！！」

唯 「こわい！！！！エクちゃん来てええ！！」

唯の声が届いたかのように、勇の会社に駐車されていたエクスカイザーが急行する。

エクスカイザー 「デストリアンが現れた！！？唯が危ないのか？！！！！」

ギユガギャツ、ブオオオオオオオツ！！！！

細 「今日は舞人君、海外へ行っているのに・・・！！！！」

漣 「い、いやああああああ！！！！」

突然叫びながら頭を抱えて崩れる漣。桜高襲撃事件の忌まわしい記憶がフラッシュバックし、彼女をパニックにさせていた。

勇士郎 「秋山さん？！！」

律 「漣！？そうか！！あのときの記憶が甦っちまったんだ！！！！」

勇士郎 「あの時の記憶？！！」

律 「あの時の怪物が桜校を襲った際、生徒が食われる瞬間を
漣は見ちまっているんだ!!」

勇士郎 「そんな!!!!……秋山さん!!」

勇士郎は無意識にそつと漣の両肩に手を置いた。

勇士郎 「大丈夫。もう、秋山さんにあの時の悲劇は見させは
しない!!」

漣 「ううう……ううう火鳥……君。」

精神が不安定になっているためか、漣は恥ずかしさを見せる事
無く、すぐるように勇士郎の胸元へと頭をよせる。

勇士郎 (うおおおお!!?あ、あ、秋山さんが俺のトコに
!!!!)

律 「こんな時にイチャつくなあああああ!!!!」

勇士郎 「わかってるって!!秋山さんを頼む!!田井中さん
!!!!」

律 「ああ!!いこつ!!漣!!」

わずかにうなずきながら律の手を握って立ち上がる漣。

勇士郎は、漣の身の安全を律に委ねると、すくつと立ち上がった
て叫んだ。漣との距離感が縮まった(多分)ことにより、歓喜の気
合が入る。

勇士郎 「よっしゃああ!!!みんな下がれ!!!」

蓮 「おちょーしもん!!!」

光 「逃げよう!唯ちゃん!!!」

唯 「うん……(早く来てエクちゃん……)。」

俊 「行つて来い!!!太陽の勇者!!!」

勇士郎 「ああ!!!」

そして、勇士郎は上空へ叫びながら光を放つ!

勇士郎 「ファイアー……ジェエエエエツツ!!!」

召喚されたファイアージェットが上空から降下してくる。

各部分変形をはじめ、ファイバードモードへと変形していく。

ファイバードへ完全に變形し、地面に着地する。

それを確認した勇士郎は、気合を入れる。

勇士郎 「はあああ……っつ!!!」

地面から20cmほどの低空の上に乗るように軽くジャンプし、
低空を高速で駆け抜けていく。

シユオンツ……ギユオオオオオオオオオオオ
・

更に加速し、勇士郎にフェニックスのオーラが宿る。

勇士郎 「っしやあっ!!」

その状態から光りの球体と化してファイバードの胸の中央へと飛び込み、融合合体を果たす。

両眼に光が灯り完全に起動する。

ファイバード 『チエエエエエンジン!!ファイバアアドッ!!』

律 「待ってましたああ!!」

蓮 「やっぱカッケーなあ!」

光 「ファイバードっ!!」

俊 「ふっ……。」

C 09と対峙したファイバードが、両腕のダイナバスターで応戦する。

ファイバード 『ダイナバスター!!』

ディガガガアアガガガアアア……

ズズズズズウウウツ!!!

C 09 「カギヤアアアツ!!!」

一声上げると、C 09がファイバードに接近しはじめる。ダイナバスターを撃ち続けるがこのC 09も平然と進撃を開始する。ダイナバスターはあくまで牽制用武器のようだ。

接近するC 09に向かってファイバードが突撃する。

ファイバード 『いかせねえよっ!!!』

だが、強烈なクチバシの一撃が胸部に直撃する。

ズギヤアアアツ!!!

ファイバード 『ぐおおおっ!!!』

吹き飛ぶファイバード。

そこから更に長い頭が伸びて、クチバシの顎がファイバードの左肩を捕らえる。

ガキイイイッ!!!ギギギギギギ...

ファイバード 『ぐああああ...!!!』

もの凄まじい強靭な顎の力でファイバードを啜えて、持ち上げる。

蓮 「あいつなにやってんだよ?! やられてんじゃん!」

律 「み、澪には見せない方がいいな……。」

澪は、依然としてうずくまっている。

俊 「あいつ、秋山さんには悲劇は見せないって言うておきながら……!!」

そのまま放り投げられ、近くの高台の丘に激突する。

ブウンツ……ズガアアアツ!!

ファイバード 『ぐはっ!!』

そこへ接近し、クチバシでファイバードを突きまくるC 09。

ズガン!!ズガン!!ズガン!!ズガン!!ズガン……

ファイバード 『がは!!ぐうっ!!がっ!!うおっ!!ぐはあ……』

ファイバードのこのピンチに、エクスカイザーが駆けつけた。

GTモードからエクスカイザーモードへと変形。若干な巨大化をする。

エクスカイザー 『チエエエエンジ!!エクスカイザー!!』

見ていた唯が、ぱあつと明るくなる。

唯 「ああ！ーやつと来てくれたんだ！ーがんばれー！！」

律 「あれが唯が言ってた・・・本当にクルマから変形しちまった・・・ってかクルマのサイズが元よりデカクナッテル！」

唯 「言つたとおりでしょー！！」

律 「ああ・・・。」

光 「すげえッ！！」

エクスカイザーが、ジェットブーメランでC 09を牽制する。ブーメランという名がついた武装だが、どちらかといえばミサイルに近い武装だ。

エクスカイザー 『ジェットブーメラン！！』

ディッシュウウウッ！！

ズディギャン！！ズギヤガアン！！

C 09 「キイイイイイ？！」

エクスカイザーの方へと振り向くC 09。一瞬の間ができた。

更にジェットブーメランを撃ちこむエクスカイザー。

ディッシュゴ、ディッシュゴ、ディッシュゴオオオッ！！

ズガガガギャガアアアアツ！！！！

C 09 「ギョゴオオオオ・・・！！！！」

エクスカイザー 『今だ！！ファイバード！！フォーム・アツ
プだー！！』

ファイバード 『あれは・・・エクスカイザー？！はいつ！！』

上体を起こし、高台の丘へとジャンプするファイバード。空へ
手をかざし、フレイム・ブレスターを召喚する。

ファイバード 『フレイム・ブレスター！！』

フレイム・ブレスターが飛来し、ファイバードと合体する。

ファイバード 『フォームアツプ・・・武装合体、ファ
イバードツッ！！』

ファイバードとエクスカイザー。

2大エネルギー生命体の邂逅が反撃のシグナルを灯す。

つづく

次回予告

再び桜ヶ丘に襲来したデストリアンに苦戦を強いられたファイバード。エクスカイザーの参戦の下、反撃へと転じる。激しい反撃の激戦を繰り広げる2大勇者。二つの力が一つになるとき、奇跡の力が発動する。次回、新生太陽の勇者 ファイバード・サーガ 第8話 「ギヤザウエイ・アタック」

「これこそ勇者の合さる力か。」

第8話 「ギャザウェイ・アタック」

C 09 が武装合体を成したファイバードに長いクチバシを突きつける。

ファイバードはこれを受け止め、ガツシリとクチバシをホールドする。

ガツ！

ファイバード 『もうくらわねーよ！！』

C 09 「キユギョオオオツ?!」

ホールドしたままファイバードは、膝に装備されているフレアミサイルのハッチを展開させ、一斉に発射させる。

ドドドドドシュシュシュシュシュウウウツ!!

ズキヤガガガガガガアアアアンツツ!!

C 09 「キョオオオオオオツ!!」

胸部に全弾が命中し、悲鳴を上げながら体制を崩して怯むC 09。

エクスカイザーも、再度スパイクカッターを駆使してファイバードを援護する。

エクスカイザー 『スパイクカッター!!』

シュガガガガガッ!!

ズガガガガガン!!

両腕から連続で撃ち出されるカイザーカッターの刃がC 09のボディーに食い込みながら爆発する。だが、牽制程度の威力は隠せない。

C 09は、鎌を振り回しながら、今度はエクスカイザーに攻撃をかける。

C 09 「カアアアアアアッ!!!!」

間合いを取りつつこれをかわしていくエクスカイザー。

エクスカイザー 『ハッ!!』

だが、ジャンプした時の隙をつかれ、クチバシによる攻撃がエクスカイザーにおよぶ。

ガギヤガアアアアア!!

エクスカイザー 『しまったああっ!!!!』

ズガアアアッ!!

建造物に突っ込むエクスカイザー。それを見ていた唯が、心配そうに叫ぶ。

唯 「ああ！エクちゃああん！！」

律 「エクちゃんて……。」

瓦礫をおこしながら立ち上がるエクスカイザー。

エクスカイザー 『油断したようだな……む！！』

ズガアアアアツ！！

クチバシが、エクスカイザー目掛けて襲い掛かる。

ジャンプでこれをかわしながらエクスカイザーは、ジェットブーメランを撃ち出す。

エクスカイザー 『くっ！！』

シュドオガツ！！シュドオガツ！！

ズドオガガドオオオオツツ！！

そのとき、C 09の背後からファイバードが、フレームキャノンを見舞った。

ファイバード 『フレームキャノン！！』

デিশュウツッ！！デিশュウツッ！！デিশュウツッ！！

ズギヤゴ、ダガガゴゴオオツ、ズキヤカアアアンツッ

！！

C 09 「キユゴオオオオツ！！？」

ダメージを受け、若干ふらつくC 09。

すかさずファイバードは、フレイムソードを背部から取り出す。

ファイバード 『フレイムソードッ！！』

C 09は再びファイバードの方へと振り返りながら鎌を大きく振りはらった。

ファイバードもフレイムソードを振り下ろす。

ファイバード 『だあああっ！！』

フレイムソードと鎌が激しくぶつかり合う。

ガキイイイイインツッ！！

刃と刃が交錯する中、もう一方の鎌を振り払う。

ヒュオオンツッ！

これをかわし、一旦下がりがりながら間合いをとるファイバード。

フレイムソードの切先をC 09に向けて構える。

ファイバード 『はあああっ!!』

間合いを見切り、再びC 09に斬りかかる。

C 09 「キュギョアアアアッ!!」

C 09も大振りの鎌を振りかざす。

ガキヤキイイイイイインツ!!!!

再び刃と刃が激突する。

グググググ...

ファイバード 『こいつ、間合いを読んでいやがるのか?!』

ファイバードはかすかに感じとった。デストリアンにも知性があるモノが存在するということを。

ギャキイイインツ!!

互いに刃を捌く。そして再び互いに振り払った刃を激突させる。

ギャキイイイイイインツ!!

ファイバード 『うおおおっ!!』

その際にエクスカイザーは両腕をかざして空に向かってエネルギー

ギ-を放つ。

エクスカイザー 『キングローダー!!!』

放たれたエネルギーの先からキングローダーが召喚される。

キングローダーが空中に放たれたエネルギーロードを走る。

キングローダーが変形を始め、機体を起こしてハッチを展開させる。

開かれたハッチの中へと飛び込んでいくエクスカイザー。

エクスカイザー 『とっつ!!』

エクスカイザーがキングローダー内に収まると、ハッチが閉じられてライオンの顔が現れた。

両腕が飛び出し、新たな頭部が現れ、フェイスガードが装備される。

キングエクスカイザー 『フォームアップ!!! 巨大合体、キングエクスカイザー!!!』

唯をはじめ一同もこの光景を見て驚愕する。

唯 「ふおおおおお!!! すごおおおおい!!!」

光 「うひょー!!! こっちもカツコイー!!!」

律 「ありゃあ、スゲーや……。」

蓮 「うおおお！！勇士郎以外にもいたんだな！！」

俊 「正に勇者だな！！」

紬 「マイトガインとどっちが強いのかしら？」

鉄の巨体を着地させると、ファイバードに叫んだ。

キングエクスカイザー 「ファイバード！！フォーメーションだ！！！」

刃を激突させていたファイバードはこれを捌いて、キングエクスカイザーに応える。

ファイバード 『っ……はあああっっ！！』

ギャキイイイインツ！！

ファイバード 『了解ですっ！！』

再びフレイムキャノンを展開させ面前のC 09に向かってフレイムキャノンを連発する。

デイギユイイツッ！！デイギユイイツッ！！デイギユイイツッ！！デイギユイイツッ！！

デイズギャガガアアアアンツ！！！！

同時にC 09の背後からカイザービームを連発するキングエクスカイザー。

ビギユイイイツ！！ビギユイイイツ！！ビギユイイイツ！！
！ビギユイイイツ！！

ドオドオドオドオゴゴオオオンツ！！！！

C 09 「ギユギユウゲイガガガガ……。」

前後からのエネルギービームによる攻撃がダメージを与え、C 09の強固な肉体を削っていく。

ファイバードは、フレイムキャノンを収容して懐に踏み込み、再度斬りかかる。

ファイバード 『でやあああっ！！！！』

ズシャアッ！！ギャシュンツッ！！

胸部に斬撃を浴びせると、一歩下がり、片腕をフレイムソードで斬り飛ばす。

ファイバード 『しゃあああっ！！！！』

ズバアアアアアンツ！！

C 09 『グゴオオオオオオツ！！！！！！』

その間にも背中にはカイザービームが注がれ続けている。

苦し紛れに、杭を打ち込むようにしてクチバシを真上から突き下ろしてくるC 09。

ズゴオオオオオオツッ!!!

ファイバード 『ちっ!!!』

後方へと下がり、これをかわすファイバード。

地面に突き刺さった長い口の器官をフレイムソードの一刀で竹を斬るように寸断する。

ファイバード 『いい加減にしるおおおっ!!!』

ズバシャアアアアンツッ!!!

C 09 「ヴオオオオオオツツ……!!!!!!」

口の器官を切断され、声にならない声でうめくC 09。

ファイバードはC 09の真上を飛び越えるようにジャンプし、キングエクスカイザーの許へと着地する。

キングエクスカイザー 『よし!止めだ!!!ファイバード!!!
ギヤザウエイ・アタックだ!!!』

ファイバード 『はい!!!フレイムソード、チャアアアアアジ
アアアップツッ!!!!!!』

キングエクスカイザー 『サンダーチャージアアアップツッ！』

フレイムソードの刀身がチャージアップされ炎剣と化し、フェニックスのオーラがファイバードを包む。

キングエクスカイザーの胸のライオンに稲妻のようなスパークがほどばしり、ライオンの口内にサンダーエネルギーがチャージされ、前にかざしたカイザーソードにエネルギーを注ぎ込む。

今、2大勇者の必殺技がデストリアンを撃ち砕く。

フレイムソードの炎剣の切先をC 09に向けて構えるファイバード。

そしてその斜め後方からキングエクスカイザーがサンダーフラッシュを繰り出す。

キングエクスカイザー 『サンダー・フラッシュツッ！』

ギューイイイ……ヴィヴァガアアアアアアアアアアアアアアアアアアツッ！

巨大なエネルギーの剣が天に向かって突き進む！

そのタイミングで、ファイバードが低空を突き進みだす。

球体のエネルギーを帯びながら、激しく燃え滾るフレイムソードを構えて突き進むファイバード。

それは要の姿だった。

要 「エクスカイザー！事態は收拾したのか？！」

エクスカイザー 「事態は收拾させた！後の問題は事後処理と
いうところか……。」

要 「情報によると謎のロボットと共闘していたそうだが……」。

エクスカイザー 「ああ。確かに共闘していた。だが、戦闘が
終わると彼はどこかへ飛び去ってしまった。」

要 「そうか……今回も新たな情報は得ずか……。」

要が唯に気づく。

要 「ん？彼女は……？」

エクスカイザー 「ああ。私のドライバーの従妹だ。いわば家
族と言ったところか。」

要 「そうか。はじめまして！警視庁特殊機動部隊M・P・D・
BRAVEの要です！」

唯に敬礼を送る要。

唯も敬礼で要に返した。

唯 「ひ、平沢唯ですっ！好きなものはパフェとケーキですっ

！よろしくおねがいます！」

要 「ははははっ、オモシロいコだ。よろしく！」

要の向こうでは、ジエイデッカーやレイバーズが瓦礫の撤去作業をしていた。

ようやく復帰したガンレイバーが愚痴をこぼす。

ガンレイバー 「はぁ・・・復帰して戦闘があると思いきや瓦礫の撤去作業とは・・・。」

ジエイデッカー 「文句を言うな、ガンレイバー。こうした瓦礫の撤去の作業も壊れた街を復興させる一歩となる。」

ショットレイバー 「俺たちはクリーチャーと戦っただけが仕事じゃないんだからな。」

ガンレイバー 「あいよ、わかってるよ・・・ん？」

1人の作業員がガンレイバーを手招きしながら呼ぶ。

作業員 「すんませーん、あっちのほうの瓦礫の撤去なんです
が人手が足りないんで手伝ってもらえませんか？」

ガンレイバー 「え？俺？解りました、すぐに行きますよ・・・
・てことでここはよろしく！」

ジエイデッカー 「ああ。任せた。」

唯は、事後処理作業中のジエイデッカー達を見て、さわ子の言っていた事を思い出す。

唯 「ああー！！思い出したアー！！」

エクスカイザー 『どうした？唯？』

唯 「うちの部活の顧問のさわちゃんがさ、ジエイデッカーのいる部隊に友達がいるって言ってたの思い出したー！！」

要 「！」

それを聞いた要は唯一思い当たる吉崎を連れてくる。

吉崎 「このコがですか？」

要 「ああ。ま、しばらく話しているといい。俺は持ち場に戻る」！

吉崎 「はじめまして！アタシは吉崎レイナよ。サワチャンの教え子さん？」

唯 「ううん、さわちゃんは私のいる軽音部の顧問をしてくれます。」

吉崎 「へえ！自分がいた部活の顧問やってるんだ！なんか運命的ね！」

唯 「えーと・・・吉崎さんも桜高の卒業生って聞いているけど、軽音部入っていたんですか？」

吉崎 「ううん。私は運動部だった。サワチャンとはクラスがずっと同じだったのよ。今はどんなカンジなの？」

唯 「あははは、毎日のように部室でティータイムしてますよ。」

吉崎 「ティータイム？」

唯 「ケーキを食べながら紅茶を飲んでるんです。学校の規則無視してでもやってるんです。」

吉崎 「はー・・・あのコはなにやってんだか・・・。」

その頃、勇士郎は、漣を律と蓮とで送っていた。

律が漣の肩を支えながらなだめる。

律 「漣、どう？落ち着いてきた？」

こくっとうなずく漣。だが、その表情には今だ涙を浮かべていた。

その隣を歩く勇士郎。声をかけること以外できない現状がはがゆかった。

勇士郎 「まだ、涙が出てる。ほら、ハンカチ。」

そつとハンカチを差し出す勇士郎。漣もそれを手に取り涙を拭く。

しばらくの沈黙の中歩き続けると、律がきりだす。

律 「ありがとうな、送ってくれて。」

勇士郎 「あ、いや、当然の事をしたまでっていつか、そうしたかったたっていうか……。」

蓮 「舌かんでるぜ？なーにてんぱってんだ？」

勇士郎 「うるせーなあ……テンパッてないって。」

律 「ふふふ……そろそろ漣の家だ。」

勇士郎 「ここらへんなんだ？」

律 「私の家も近いんだけどな。」

蓮 「あ、そうなんだ。寄ってっついていい？」

勇士郎 「お前ずーずーしーゾっ!!！」

律 「別にいいけどな。送ってくれたし。カップめんぐらいだしてやるよー!!！」

勇士郎 「いいの?! てか、テス勉は？」

蓮 「マジで!? 腹減ってたんだ実は……。」

勇士郎 「……。」

最後に漣を送り届ける一行。

勇士郎が律に支えられながら家に入る漣に声をかけた。

勇士郎 「秋山さん！」

漣 「！」

勇士郎 「その……俺、上手く言えないんだけど、やっぱり秋山さんは笑顔が似合ってる！それに学園祭の時、歌もうまかったし、いいメロディーだった。胸に響いた……また演奏聞きたい……だから元気出して……。」

蓮 （なんつークセー事言ってた！？！それじゃ半分告つてるようなモンじゃねーか！！！ヤベーぞ！！）

蓮の心配をよそに、パニックになって以降笑わなかった漣が笑った。

漣 「……………そうだよな……私……軽音部だもんナ。音楽で沈んだ世界を明るくしなくちゃって言ったもんナ。ふふ……。」

律 「漣……………ふふっ、ホントあいつらって不思議な野郎達だ……いい意味でな。その通りだ、漣。私達には音楽が、軽音がある。私らにできる事をしよーぜ！」

漣 「ああ……。」

沈んでいた澁の心が再び浮上し始める。

ファイバードのプラスエネルギーが声に変換されて澁の耳に入ったのかもしれない。

桜高軽音部に使命感が改めて沸き始めた瞬間だった。

ドアが閉まるまで勇士郎は澁を見届けた。

つづく

次回予告

デストリアン再来事件から、約一ヶ月が流れる。世間はクリスマスシーズンを向かえ、各々のメンバーがクリスマスの聖夜を過ごす。クリスマスパーティーを開く勇士郎達。紬と聖夜のパーティーナイトを過ごす舞人。骨休めに飲みに繰り出す要達。だが、デストリアンは容赦なく多摩とお台場に飛来する。

M・P・D・BRAVE、マイトガインが出撃する中、クリスマスの空気を壊したくない勇士郎は、一高校生としての葛藤を懐く。エクスカイザーは広い心でその葛藤を受け入れるのだった。

次回、新生太陽の勇者 ファイバード・サーガ 第9話 「聖夜の聖戦」

今宵だけは君と過ごしたい……。

第9話 「聖夜の聖戦」

デストリアン再来から約一ヶ月。クリスマスシーズンが到来し、世間は賑わいをみせていた。

勇士郎達も唯の家に集まって、クリスマスパーティーをするこ
とになっていた。

デストリアン襲来以降、浮き沈みが激しくなっている空気を少
しでもどうにかしようとして蓮と律が提案したのだ。

寒い夜の中、まず律の家に向かう勇士郎達。

唯の家出クリスマス・イヴを過ごせる事もあり、光のテンショ
ンがいつもよりも高揚する。

光 「あー！信じらんねー！唯ちゃんといヴを過ごせるのかあ
〜！〜！ヤッホー！〜！」

俊 「はしゃぎすぎだぜ。落ち着けよ。」

光 「うるせーな！いいじゃねーか！」

俊 「まあ、確かに好きなコと過ごせるクリスマス・イヴほど
イイモノはないよな。」

そういう俊に蓮が突っ込む。

蓮 「俊はいねーのかよ？あんまりそういう話しねーけど。」

俊 「……！！！」

一瞬動きが止まる俊。蓮は見逃さなかった。

蓮 「いるな……？！誰だ？！」

俊 「……誰もいるなんて言っただろ。」

だが、そう言いつつも明後日の方向を見ながら言っている。

俊は明らかに隠そうとしている。光も突っ込む。

光 「もったいぶるなよ。軽音部のコか？」

俊 「ああ、うっせーな！軽音部のコだよ！！！」

案外時間を延ばさずコロツと吐いた。

勇士郎 「だ、誰なんだ？！」

この時点で既に軽音部の5人メンバーの内の3人を勇士郎達が好き、もしくは気になっている。

下手な話ライバルが出現する可能性もあった。

俊 「あ……。」

光 「あ？あつて誰だ？」

勇士郎 (まさか……秋山さんなのか?!俊!??)

蓮 「あつて……まさか!?!?」

勇士郎 (!!!)

俊 「……梓つてコだよ。あのツインテールの。」

蓮 「なんだああ!!ビックリさせんなや!!漣ちゃんかと思つたじゃねーか!?!」

勇士郎 「ホントだぜ。ハラハラしちまつたじゃねーか!そうか!あのイツコ下のコか!」

光 「ツインテール?ツインテールか……ツインテール……」

蓮 「なんだ?唯ちゃんにツインテールヘアになつてもらいたいのか?」

次の瞬間、ツインテールと聞いた光が、ズレた発言をした。

光 「……なんか怪獣でいたよな?」

勇士郎・俊・蓮 「……そつちかよ!!?!?」

帰ってきたウルトラマンより

一向は律の家に到着する。するとそこには既に漣と梓が来ていた。

梓 「あ！漣先輩、火鳥さん達がきましたよ。」

漣 「あ、ホ、ホントだ。えっと……。」

漣は恥ずかしい為か、第一声の聲が出せずにもじもじしてしま

う。
漣よりも先に梓が一声を出した。

梓 「皆さんこんばんわ！」

漣 「おう！今日は楽しくいこうぜ！嫌な事は忘れてさ！」

俊 「まあ……クリスマス・イヴなんだしな……。」

光 「そうそう！」

梓 「はい！」

勇士郎は、一声を出せなかった漣に声をかけた。

勇士郎も緊張していた。

勇士郎 「あ、秋山さん（私服姿初めて見た。やっぱり可愛いな……）。」

漣 「あ、火鳥君（メールや電話じゃ何とか普通でいられるけどやっぱり実際に会うと緊張しちゃうよな・・・）。」

勇士郎 「待たせちゃった？」

漣 「ううん。私達もさつき来たばかりだから。」

勇士郎 「そっか。」

漣 「こ、今夜は楽しもうね。」

勇士郎 「うん！」

梓 （なんかいい感じの空気が・・・。）

俊・蓮・光 （・・・・・・。）

その時、ガツチャとドアが開き、律が出て来た。

律 「お待ちどー！！おお！皆集まってますなー！早速行くとしますか！ー！」

光がふとメンバー内に糸がないことに気づく。

光 「なあ、蓮。もう1人のムギってコは？」

蓮 「んーと確かな・・・。」

律 「ああ、ムギなら例の事情によって来れないってさー。」

光 「例の事情？」

律 「ムギの家が経営している会社関係のパーティーがあるんだってさ。」

そのパーティー会場では、多くの（株）KOTOBUKIの関係会社の人々が出席していた。

その中には舞人の姿もあった。 紬の許に赴く舞人。

舞人 「紬さん。」

紬 「あら、舞人君。」

舞人 「今宵はパーティーに招いてくれてありがとう。イヴの夜をあなたと過ごせてとても光栄だ。その衣装、とても紬さんに似合っている。目が眩んでしまいそうだ。」

紬 「まあ……。」

うつとりとなる紬。普通であればこのような事を言われれば、売り言葉に買い言葉で済みますか、ドン引きするかのどちらかだが、この二人の感性は特質で互いにマジのやりとりである。

舞人 「今、とてもいいメロディーのBGMが流れている。どうかな？ダンスでも？」

絀 「もちろんよろこんで……。」

そして、舞人がリードする形でダンスをはじめる。

大企業の御曹司と令嬢のダンスに、周囲にも静かなざわめきがおこる。

それを見ていた絀の父親もうんうんと見ている。

琴吹社長 「うむ。流石は舞人。我が娘を導いてくれている。彼なら任せて安心だ。何せ死んだあいつ（旋風寺コンツェルン先代社長）の息子だからな。この私が認める、絀に最もふさわしい相手だ！！」

やや感涙気味である。

ダンスをしながら二人の空間で会話する舞人と絀。

舞人 「学校のほうはどう？まだわだかまりはあるのかな？」

絀 「うん。でも軽音部のみんなは明るくなってきてるわ。」

舞人 「軽音部か。時間があれば今度絀さん達の演奏を聞いてみたい。」

絀 「もちろん……あ！」

少しつまずいて転びそうになる絀。舞人はすぐに彼女を支えて体制を持ち直す。

舞人 「おっと！転んでしまつては紬さん自身が台無しだよ。せつかく美しいんだから。」

紬 「ありがとう、舞人君。」

舞人 「今宵のパーティーは始まつたばかりだ……。」

場所が変わつてM・P・D・BRABE本部。

ここには要達の姿はなく、ジェイテッカー達がドック倉庫内で待機していた。

ガンレイバー 「今日は隊長達は不在か。もし事件が起こつたらどうするんだ？」

ジェイテッカー 「有事の際の指揮は、私に一任されている。今日は飲み会だそうだ。」

ショットレイバー 「我々機械は疲れることはないが、隊長達は、生身の人間。たまにの息抜きも必要つてコトさ。」

ショットガンの手入れをしながら言うショットレイバー。

ジェイテッカー 「ところでレイバーズは一ヶ月前のクリーチャー再来の事件についてどう考える？」

突然切り出すジェイテッカー。

ガンレイバー 「え??？」

シヨットレイバー 『一体どうしたんだ、突然？』

ジエイデッカー 『いや、一ヶ月前の事件、実は被害を防ぐことも出来ていたのではないかと思ったのさ。神奈川県警が「混乱を避けるために」を口実に、クリーチャーの掘った地中の空洞をあえて公にしていなかった話・・・知っているな？』

ガンレイバー 『俺達の初陣の日か。ああ。県警上層部が伏せていたコトだよな？』

シヨットレイバー 『そのせいで多くの桜高生や街の人々の命が・・・・。』

ガンレイバー 『なんかムカつくよな、県警上層部！』

ジエイデッカー 『・・・・。隕石が墜ちた痕に地底に向けて三つの巨大な空洞があったそうだ。警戒宣言をすれば生徒達も自宅待機になっていただろう。』

ガンレイバー 『悔しいぜっ！！くっそー！！』

関東エリア警察関係の上層部の裏ではそのことに関して論議していた。この事は極秘のために世間には出回ることがない情報だった。言わば神奈川県警の判断ミス、あるいは意図的な隠蔽である。

彼らの会話に、整備技術顧問の藤堂が入る。

藤堂 「クリスマスだったのに物騒な会話してるな。」

ジエイデッカー 『藤堂技術顧問・・・・。』

ガンレイバー 「おやっさん……クリスマスは堪能しないんすか？」

藤堂 「もうそういう歳じゃないしな……で、隣の県警上層部を非難していたようだが？」

シヨットレイバー 「俺たちが相手にした最初のクリーチャーが掘った空洞を、県警が伏せていた一件ですよ。」

藤堂 「そのことか……確かに警戒宣言を出さなかった事には遺憾だな。そのせいで未来を担う少女たちの尊い命が犠牲になった。」

ガンレイバー 「いたたまれないっすよ……。」

藤堂 「ただの隕石落下事件として処理するつもりだったらしい。だから最初は俺たちへの要請は出さなかったようだ。県警の上層部が警視庁に手柄を持っていかれるのを拒んだのだろうな……。」

シヨットレイバー 「手柄って……そういう問題じゃあ……。」

藤堂 「上層部はこの世界もドロついているのさ……だが、冴島の旦那は別格の例外だ。旦那こそが真の警察官としての鏡だ……そう言っても過言じゃない。」

ジエイデッカー 「冴島警視総監……。」

その時だった。ドック倉庫内にスクランブルが発令された。ク
リーチャーことデストリアンの出現である。

スクランブル警報 『こちら警視庁！こちら警視庁！東京都多
摩北部、及びお台場上空にて隕石発！クリーチャー出現されまし！
繰り返す……』

藤堂 「おいでなすつたようだな。」

ガンレイバー 『一箇所は近くだが、もう一箇所がお台場！？
どうするんだ？！』

ジエイデッカー 『お台場近辺には、旋風寺コンツェルンのパ
ドックがあつたはずだ！！出撃可能か連絡を！我々はまず近辺のク
リーチャーを叩く！M・P・D・BRAVE、出撃！！』

レイバース 『了解！』

紬とのひと時を愉しんでいた舞人の耳にもこの事が告げられる。

旋風寺コンツェルン社員 「失礼します！舞人さん実は……」

舞人 「なんだって！！？すぐに出る！！！」

紬 「舞人君？」

舞人 「正義のヒーローの出撃さ！また戻るから待っていて！
紬さん！！！」

そして、舞人はマイトガインのパドックを指すべくその場を後にした。

戦闘コスチュームに着替えた舞人が、マイトガインを起動させる。

舞人 「マイトガイン、起動!!」

起動と共にマイトガインの意思が目覚める。

マイトガイン 『今宵のクリスマスにもクリーチャーか?!』

舞人 「ああ!せつかくの紬さんとの時間を妨害された!!この代償は高くつかせてやる!!」

マイトガイン 『あまり女にうつつをぬかさなよ・・・舞人。』

舞人 「な・・・わかっているっ!!出るぞっ!!マイトガイン!!」

マイトガイン 『ああ!!クリスマスを壊す輩は我々が排除してくれる!!』

ギユウイイイイ・・・ガシャンッ! ギウドオオオオオオツ!!

舞人 「チエエエエエンジ!!ロコモライザー!!」

ゲートがオープンし、マイトガインが飛び立つ。そして、ロコモライザーへと変形した。

平沢家の玄関でも、勇士郎とエクスカイザーが察知する。

勇士郎 「……………!!!」

エクスカイザー 『!!!』

だが、今回だけは流石に躊躇した。ここで出撃してしまえば、せつかくのイヴの空気を壊しかねない。

葛藤する勇士郎は、テレパシーで事情をエクスカイザーに説明する。

勇士郎 すいません！今日はこの空気を壊したくないんです！出撃できないです。秋山さんには今日だけでもデストリアンの事忘れて欲しいから……………!!彼女のこと好きなんです、俺……………。

エクスカイザー ファイバード……………いや、勇士郎……………
そうなのか……………わかった。

今回ばかりは高校生としての勇士郎の心境を考慮し、黙認するエクスカイザー。ジェイデッカーやマイトガインに今回の一件を一任する事にしたのだった。

聖夜の中、戦闘が開始される。ポイントに到達したジェイデッカーとレイバーズがC 10に向けて先制攻撃をかけた。

空中からジェイデッカーが片手に構えたJバスターで、ずんぐりとした体系のC 10に攻撃を仕掛ける。

C 10の頭部は、まるでウルトラセブンに登場したゴドラ星人のようだ。

ディギインッ！！ディギインッ！！ディギインッ！！ディギインッ！！ディギインッ！！

ズズズズズズウウウウンッ！！！！

C 10「ギギギイイッ！！」

JバスターのレールガンがC 10に着弾し、小規模の爆炎が上がる。

頭部の上にある口を開けて咆哮するC 10。

その前方より、ガンレイバーとショットレイバーが射撃する。

ガンリボルバーとショットガンの弾丸がC 10の蒼い皮膚の表面で爆発していく。

ガン！！バsgアッ！！ガン、ガン、ガアアンッ！！バsgアアンッ！！ガン、ガンッ！！バsgアアッ！！

ジェイデッカー「正面から弾丸を撃ち込み続ける！！この山間部近辺で蹴りをつけさせるんだ！！」

ガンレイバー「おっしやあ！了解！！」

ショットレイバー 『了解!!』

ガアン!!ガアン……ガチンツ、ガチンツ!

ガンレイバー 『ちっ!弾切れかよ!!』

ショットレイバー 『任せろ!!』

ガンレイバーが弾を切らす。その間にもショットレイバーがショットガンを撃つ。

ヴアスウンツ!!ジャカ……ヴアスウンツ!!

ジェイデッカーもJバスターを撃ち続ける。

デイギイッ!!デイギン、デイギン、デイギンツ!!

ガンレイバーが電磁警棒を取り出し、C 10に突撃を敢行する。

ガンレイバー 『てりゃあっ!!』

電磁警棒をC 10の肉体に突き刺し、高電流を流し込む。

ズンツ……ヴィギイギイギイツ……!!

C 10 「ギユギイイツ!!」

苦し紛れに暴れるC 10をそのまま蹴り飛ばす。

ガンレイバー 『おりゃあ!』

ドガアアッ!!

山の斜面に激突するC 10に、ジェイデッカーが正面に回りこんでJバスターを撃ち込む。

ギユオツ・・・ジャキン!!

ジェイデッカー 『よくやった!!ガンレイバー!!』

デイギャン!!デイギャン!!デイギャン!!デイギャン・

・・・!!!

ズドオドオオッ!!ズドオガガアアッ!!

C 10 「ギユギツギギガガアアッ!!」

Jバスターの直撃を受け続けて表面の肉が若干削られている。

ジェイデッカー 『よし!エネルギー充填率良好!!グレネー

ドモード!!』

マニュアル操作でグレネードに移行させるジェイデッカー。

左手を添えながらJバスターを構える。

ジェイデッカーの視点内のロックオンカーソルがC 10をロックオンする。

戦闘用のコスチュームに着替えた舞人が、レバーを握って気合十分に叫ぶ。

舞人 「今宵の聖なる夜を乱すクリーチャーめ!!この旋風寺舞人とマイトガインが神に代わってキサマを斃す!!いくぞ!!マイトガイン!!」

マイトガイン 『おお!!』

舞人 「シグナルレーザー!!」

ビギユイイイイイツ!!

ズギヤゴオオオツ!!

C 11 「キュイイイイツ!!」

倒れこんでいるC 11にシグナルレーザーを繰り出すマイトガイン。青い火線がダメージを与える。

これに対し、C 11は立ち上がって触手で攻め込もうとする。だが、マイトガインはその猶予を与えない。

舞人 「マイティー・キャノンツ!!」

ギユドオアアアアアツ!!

ロコモライザーのヘッドライトレンズから放たれたマイティー・キャノンのビームが、C 11に撃ち込まれ爆炎を上げる。

ドオゴガアアアアアアアツツ!!!

C 11 「ギギギギキョツ!!!」

一瞬体制を崩すC 11。だが触手を伸ばしてマイトガインを攻撃する。

ヒュオツ! ビュシユルルルルツ!!

ドガカアアアアアツ!!

マイトガイン 『うお?!!!』

舞人 「くっ!!」

ドガゴオオ、ドギヤゴンツ、ドオドオドオドオゴオオオン
ツ!!!

触手による攻撃がマイトガインを見舞う。

それを期に連続で攻撃をかけてくるC 11。

ガガンツ!!! ドオガガガンツ!!! ガガガガンツ!!!

マイトガインは、これに対してガードで防御の姿勢を維持する。

マイトガイン 『くそっ! 反撃のタイミングが……!!』

舞人 「ひるむな!!! カウンターアタックいくぞ!!!」

マイトガイン 『了解だ！！だが、間合いが長いぞ！！』

舞人 「もう一度マイティーキャノンで吹っ飛ばす！！そして一気に懐に入り込む！！マイティーキャノン！！」

そう言いながらマイティーキャノンの出力を上げる舞人。

マイトガイン 『はあっ！！』

ビギユドオオオオオオオオオオオツ！！！！

ズドオガアアアアアアアアアアアアアアアアツ！！！！

出力を上げて撃ち出されたマイティーキャノンのビームが、C11を吹き飛ばし、地面に崩れこませる。

舞人 「今度はこっちが攻め込む！！」

マイトガイン 『突っ込むぞ！！舞人！！』

走り出して、C11に突っ込んでいくマイトガイン。

その間にC11が起き上がってしまったがお構い無しに突っ込んでいく。

マイトガイン 『おおおお！！』

ドオゴオオオオツ！！

ライトアームのボディブローをC11にぶち込むマイトガ

イン。得意の格闘戦の間合いに持ち込んだ。続けて左アッパーを繰り出す。

ガアアアアッ！！

再び右ボディブロー。

ドオゴオオオッ！！

C 11が怯み始める。このチャンスは逃さない。舞人が、ナツクルラツシユを繰り出させる。

舞人 「怯んだ！！今だ！ナツクルラツシユ！！」

マイトガイン 『くらええええっ！！』

ドオゴオオオッ！！ガゴオオン！！ズガゴオオン！！ガン
ガンガアアアッ！！ドオオオオオッ！！ゴゲウウンッ！！

パンチの嵐がC 11の肉体を見舞う。

マイトガインは、連続パンチを繰り出し続けた後に強烈な一発の一撃をくらわす。

ガゴオオオッ！！ドゴオオ！！ダガアアアッ！！ドゴガン・・・
ズドオガアアアアッ！！！！

思いつき正拳突きでブン殴られて再度吹き飛ぶC 11。

舞人 「止めだ！！マイトガイン！！スパーク・ボンバー・・・

び散る。

マイトガイン 「目標殲滅確認！これより本日の運行を終了するー！！」

聖夜を騒がした戦闘が終了し、再び紬の所へと舞人が戻る。だが、今二人のいる場所は、マイトガインが変形したロコモライザーの中だった。モニター越しではあるが、夜空には一面の星が聖夜の夜に広がっていた。

ロコモライザーは、聖夜を航行し続ける……。

舞人 「今夜は、また一悶着があったけど今はこの時間を大切にしたい。どうだい？聖夜を彩るこの星達は。」

紬 「舞人君ありがとう。とっても素敵なクリスマス・イヴになったわ。」

舞人 「そう言ってくれてくれるだけで十分すぎるほど嬉しい。」

聖夜に広がる星々を見てうっとりする紬。

紬 「本当に綺麗な星達……。」

舞人 「最も綺麗な星は今俺の目の前にいる……紬さん、貴方だ。」

紬 「舞人君……。」

舞人 「好きです、紬さん……。」

聖夜の中、東京湾を駆けるロコモライザーの中で、一つの愛が生まれようとしている。

マイトガインは空気を読みつつ航行する。

マイトガイン (ホント、お前はナイスガイだな。舞人！)

澄み渡る星々が二人を祝福するようにいつまでも輝き続けていた。

つづく

次回予告

クリスマスの夜。それは誰もが楽しく過ごしたい時間。大切な時間。素敵な時間。だから私達はあなたたちに、このメモロデーを届ける……。

次回、新生太陽の勇者ファイバード・サーガ 第10話「聖夜に響くメモロデー」

勇士郎君たちに会えてよかった。

(ナレーション：秋山 澪)

漚 「ゆ……唯……なんて大胆な!!!」

律 「あんた達、いつの間にそんなかんけーに……!!!」

梓 「唯先輩……!!!」

憂 「お姉ちゃん、スゴイ……。」

男子一同 （光てめえええええええ!!!なんつーいい思いを
!!!!!!）

唯の大胆すぎる行動に圧倒される一同。

だが、唯は何事も無いように言う。

唯 「へ?別にそんなんじゃないって……光君の髪の毛、
サラサラしててさわり心地いいよ?憂も触ってみる?」

憂 「えええ?!」

流石に面識がなかった男子の髪の毛を触るには抵抗があった。

だが、そう思いつつも憂は、光の髪の毛を触ってみた。

憂 「あ……ホントだ!さらさらだ。」

姉妹に揃いに揃ってちやほやされる光。

俊 （光のやつ、嬉しそうに気絶してやがる。）

梓 「やっぱ姉妹だなー、憂と唯先輩。」

蓮 (マジなぐりて〜。)

律 「やれやれ・・・天然は恐ろしいぜ・・・。」

漣 「そうだな(私には絶対できない・・・)。」

勇士郎 (もし、秋山さんにああやってやられたら俺どっになっ
ちまっつんだろー・・・。)

憂が立ち上がり部屋を出ようとする。

憂 「まだ他の料理あるから持ってくるね。」

勇士郎が手伝おうと立ち上がり、梓と俊も便乗する。

勇士郎 「俺手伝うよ。」

梓 「私も手伝います。」

俊 「俺も何か手伝おうか。」

憂 「ありがとう。」

4人は部屋を出て料理を取りにいった。

それを見ていた漣が、ふと感じた。

漣（火鳥くんて・・・優しいんだな・・・。）

その頃のと達は、クリスマスの飲み会を開いていた。

吉崎の友人達とバーでカクテルを飲み交わしている。その中には桜高軽音部の顧問のさわ子の姿もあった。要と向き合う形で座っている。

その傍らでは酔っ払った葉山がはしゃいでいた。

葉山 「でさー、俺はね、ドライバーやってんだよ！バギーのドライバー！でね、俺はカクテルなんだー！！ギャハハハハ・・・」

吉崎の友人達（うわー・・・イケメンだけどウザッ！！）

もはや言っている意味が不明である。吉崎が思わず殴る。

吉崎 「落ち着け！！ここは居酒屋じゃない！！」

ゴスツ！

葉山 「ほげえっ?!」

それを見ていた吉崎の友人の1人が吹きだす。

れた事を心よりお見舞い申し上げます……。」

さわ子 「ど、どうも……。」

さわ子はやや苦笑い気味で応えた。要も好ましくない事を言ってしまったことを謝罪する。

要 「失敬……このような場で言うべき事ではなかったですね。」

さわ子 「いえいえ、いいんです。」

カクテルをしばらく飲み続ける中、さわ子が要にきりだした。

さわ子 「要さんは、どうして警察官になられたんですか？」

要 「かつてのクリーチャー襲撃の際に決心したんです。その当時はまだ中3でしたが。」

さわ子 「じゃあ、中学からの夢を叶えたんですね？すごいじゃないですか！」

要 「それほどでもありませんよ。とにかくどんなカタチであれ、クリーチャーと闘う道に身を投じたかったです。」

さわ子 「なんかそついうのって、素敵だと思いますよ。」

要 「ありがとうございます。そついつさわ子さんも素敵だと思いますよ。教師の仕事。」

そう言いながら若干はにかむ要。それを見たさわ子がほわっとなる。

さわ子（ああ……はにかみ王子ならぬ、はにかみ警官……）

その頃、ジェイデッカーは隊長代理として周囲にパトライトが光る中、事後処理任務にあたっていた。

ジェイデッカーは、最近のデストリアン多発状況に疑問を懐く。

ジェイデッカー 『ガンレイバー、妙だと思わないか？』

ガンレイバー 『妙？』

C 10の残骸を入れたコンテナを抱えながらガンレイバーは答えた。

ジェイデッカー 『ああ。かつてのブランクが12年……今回は長くてもほんの数週間以内。早ければ数時間後だ。』

ガンレイバー 『確かに出現周期が急激的過ぎるな。共通しているのは隕石だよな？未知の小惑星帯が地球に接近中とか？NASAで予測できないのか？』

ジェイデッカー 『NASAへの要請は既にしてあるようだ。だがそれよりも増して思う事がある。』

ガンレイバー 「ひよっとして「何故日本で多発するのか？」か？」

ジェイデッカー 「その通りだ。国外にも落ちているがいずれにしてもこのアジアエリアに凝縮されている。」

そこへ作業途中のショットレイバーも加わり、意見を出した。

ショットレイバー 「それについてだが、思い当たる節がある。関東近辺に起こっていることからC 01が落下したポイントに吸い寄せられているのではないだろうか？」

ガンレイバー 「もしそれが事実なら・・・合点がいくぜ！」

ジェイデッカー 「そうだとしたら・・・さらなる疑問符が浮かぶ。クリーチャーが隕石内に入っているならば何者かが意図的に地球に送り込んでいるのかもしれない。」

ショットレイバー 「悪の地球外知的生命・・・!!」

ガンレイバー 「そんなまさか・・・!!」

ジェイデッカー 「現にエクスカイザーの例もある。彼は幸いにも我々同様正義の意志だが、その逆の存在も在り得る事も否定できない。」

聖夜の夜空を見上げる3体勇者警察。

その向こうにあるモノは何なのかは現時点では全く不明である。

平沢家の車庫でもエクスカイザーが同じ事を考察していた。勇は連れ達との飲み会があり、留守にしていた。

エクスカイザー（ブレイブ宇宙警察機構からの通達はないか・
・・・デストリアンの短期間における度重なる来襲。いつまで続く
ものなのか・・・。）

家の中では、勇士郎達がケーキを食べながらプレゼント交換をしていた。

勇士郎 「あー、ケーキ美味しいなー。」

光 「さすが唯ちゃんの妹さんだ〜。」

憂 「本当ですか？ありがとうございます。」

律がニヤけながら光に突っ込む。

律 「な〜、さすがって言ったな？憂ちゃんと唯は全然正反對なんだぜー。」

光 「へ？」

唯 「もー！りっちゃんたら〜！！私だってケーキ作っただ

よっ!」

律 「ほあ、イチゴ乗っただけじゃないんだな?」

唯 「うん!イチゴ乗っけてホイップクリームを乗せました!
!ふんすっ!」

律 「去年とほとんど変わってねー!」

梓 「でもホントおいしい・・・まぐもぐ。」

俊 「ああ、いけるいける!」

ケーキを食べつつ律がプレゼント交換に切り出す。

律 「それじゃ、プレゼント交換といきますかっ!」

蓮 「ああ!はじめっか!」

ランダムでグルグルプレゼントが回されていく。そして止まったところでプレゼントが開かれる。

蓮がまずプレゼントを開ける。するとそこからは「ボーボボ」のサービスマンの顔が飛び出してきた。

びょーん・・・

蓮 「・・・なんじゃこりゃあああ!」

かつての某刑事ドラマの登場人物のように反応する蓮。

俊は梓のその言葉に少しホツとする。

梓のプレゼントはだらつくまのぬいぐるみだった。

俊 「俺のだ。蓮も女の子に当たること考えてだなー……」

┌

律 「よし、帰ったらつくろーっと。」

俊 「な……。」

漣 「律ってけっこー男の子が好きそうなのが好きなんだ。」

俊 「へー……。」

蓮 「ほー……。」

憂 「えーと……あ！かわいい鏡だ！」

光 「それは……俺のだよ。」

唯 「あ！これは憂のだ！」

光 「じゃあ俺は……ひげちよび人形……?!」

唯 「あ……てきとーに買った私の。」

光 (ま……いつか。唯ちゃんの買ったやつだし)

澁 「自分のだったりして……あ！かわいい！じゃあこれは……。」

勇士郎 「俺のだよ、ソレ。」

澁には勇士郎が買ったかわいらしいアクセサリーが当たった。そして……。

勇士郎 「……お！」

澁 「私のだ。」

勇士郎には澁が買った赤のスニーカーが当たった。

勇士郎 「カッコイイスニーカーだな……。」

澁 「なんかみんないい感じに当たったね。」

勇士郎 「そうだね……こういうこともあるんだな……。」

しばらくの間クリスマス会が続けられた後に解散となった。

冷え込む帰り道の中、澁が勇士郎に振り返る。

澁 「あ、あのさ……明日の夜なんだけどみんな時間あいてる？」

勇士郎 「蓮がバイト終わればみんな暇になるけど、何？」

漣 「まあ、来て見ればわかるからさ……。」

勇士郎に場所の地図を手渡す漣。

漣 「それじゃあ、みんな送ってくれてありがとう！また明日
！」

律 「じゃーなー！」

勇士郎 「うん、じゃあね！」

蓮 「じゃーなー！」

光 「ああ、唯ちゃん……この寂しい気持ちは何？」

俊 「いーじゃねーか。また明日会えるんだから。確かに今までいた好きなコと解散するのは寂しいけどな。な？勇士郎？」

勇士郎 「ああ。でも前ほどじゃない。前に比べれば信じられないくらい距離が縮まってる。」

俊 「そー言われてみればそうだよな、俺達。」

蓮 「まー明日も会えるみたいだしな。」

勇士郎 「ああ。」

翌日、クリスマス夜の夜。この日も澄み渡る空気の中満天の星空が浮かんでいた。

漣に指定された桜ヶ丘の人けのない高台の空き地に勇士郎達はやってきた。

俊 「ここが漣ちゃんが言っていたところか？」

勇士郎 「ああ。秋山さんが言っていた所はここだ。地図もここって書いてある。」

蓮 「何もねーじゃん・・・？」

光 「ん！？なんかトラックがあるぜ?!」

空き地の中央には4台トラックが止まっていた。

ソレを見たたん、勇士郎達は直感した。

ゲリラライブだ。

こここそとトラックの側面に移動する勇士郎達。

すると、トラックのウィング・ボデーが開き、放課後ティータムのメンバーが勢ぞろいで姿を見せた。漣が、恥ずかしさを堪えつつも4人にマイク越しにMCをする。

漣 「一ヶ月前に私達は今、目の前にいるあなた達4人に命を救われました。それと同時に、多くの哀しみと恐怖も経験しました。だけど、その中で火鳥君はその恐怖と闘ってくれた。そして撃ち碎

いてくれた。いつしか心の傷も短いうちに癒えて、勇気を与えてくれた。今私達がこうして立ち直れたのはあなた達4人のおかげです。だから、クリスマス tonight、あなた達に恩を返します！聞いてください！『ふでペン〜ボールペン〜』！」

律 「1、2、3！」

律の合図と共に演奏が始まる。

あの日に聞いて以来の彼女の歌声が、4人に伝わる。

漣のボーカル。勇士朗がその歌声に魅了される。

唯と梓のツインギターの強調的なサウンドが間奏を奏でた。光と俊は見入っていた。

律と紬のキレのいい音のマッチ。蓮は完全に見とれていた。

そして1曲目の演奏が終わった。

勇士郎 「……………すごい。」

4人の拍手が空き地に鳴り響く。

トラックの運転席でも拍手をしている男がいた。舞人だった。

舞人 (すごいな、紬達の奏でるメロディーは……………まさに魂の芸術だ。)

今回は勇士郎達へのサプライズということもあり、影のヒーロ

ーに徹していたのだ。

その後も彼女達が作った曲の6曲が流れ、クリスマス・サプライズライブは終了した。

そして勇士郎の中でファイバードが勇士郎の意識に語りかけてきた。

ファイバード 彼女達の歌声はとても心に響いた。感動だ。これが地球の音楽・・・これは命の声だ。

勇士郎 (ファイバード・・・！ああ！俺も魅了されてんだ。秋山さんの歌声に・・・。)

ファイバード 彼女の、いや彼女達の奏でる音楽からは強いプラスエネルギーを感じさせる。私自身の持つプラスエネルギーが共鳴している。

勇士郎 (そうなのか?! スゴいな・・・秋山さん達。)

ファイバード ああ。彼女達は彼女達なりの方法で闘おうとしている。我々とは違う方法で。

勇士郎 (恩返し以上のモンだよな・・・。)

勇士郎に微笑む澁。勇士郎も微笑みを返す。

聖夜に響き渡った彼女達のメロディーは勇士郎達の胸に響き続けた。

つづく

次回予告

デストリアン襲来から約4ヶ月の月日が流れる。その間のデストリアンの襲来は途絶えたままだった。だが、4ヶ月のブランクを経て再び再来する。甲府市と幕張ベイエリアが混沌と化す中、桜ヶ丘にも再び禍々しい存在が飛来する。これらに対してそれぞれの勇者達が立ち向かう。

次回、新生太陽の勇者 ファイバード・サーガ 第11話 「同時多発襲来、再び」

デストリアンのなんと禍々しき事か……。

第11話 「同時多発襲来、再び」

デストリアンが再来して4ヶ月程の月日が流れ、季節も春になつていた。

4月半ばになろうとしていたが、去年末のC 10とC 11が襲来して以降、デストリアンの襲来は途絶えていた。

M・P・D・BRAVEの本部においては、これまでの事件のデータをまとめていた。

吉崎 「やっぱりどれもこれも……隕石内部から出現してきた。普通に考えても生物学的に考えにくいわね。隕石の内部で生態系を保つなんて……。」

パソコンの画面上にこれまでのデストリアンの写真やデータ、残骸が映し出されている。

吉崎 「そして……最も疑問なのが、何故出現箇所が日本に集中しているのか？それも関東地区の一部だけに……。」

さらに出現地のデータを引っ張り出す吉崎。

何処も関東地区に集中していた。神奈川県、東京都のいずれも北部に集中している。

吉崎 「何故ポイントが……。」

データ検索した一部のポイントに吉崎は注目する。

ポイント。一番初めのデストリアンが駆逐されたポイントである。即ち、D 01を駆逐する為の特殊兵器によって消滅した、八王子市北西部を示す。

尚、最初のデストリアンの隕石が落下したポイントは、ポイントと呼ばれ、あきる野市に存在する直径2kmに及ぶクレーターの事を指す。

自衛隊が開発した特殊兵器により、半径4kmが蒸発・消滅したポイント。このエリアは、10年以上経過した今も封鎖されている。

吉崎は、これまでのデータとポイントを照合する。

吉崎 「……なんともいえないケド……確かに八王子市の周辺で起きてる……。」

自然用であり、不自然。状況としては地球規模の問題であるはずだが、実害は日本の関東地区のみ、あるいはその周辺地域に隕石の落下が確認されている。

吉崎 「うーん……考え過ぎかしら？」

データ詮索中に突如としてスクランブル警報が出される。

ドック内で軽いメンテナンスを施されていたジエイデッカー達

も、メンテナンスを中断せざるを得なくなる。

ジエイデッカー 「スクランブル?!?!」

藤堂 「久々においでなすったようだな。」

スクランブル通信 「こちら警視庁!こちら警視庁!山梨県上空及び千葉県上空に隕石確認!デストリアンの可能性あり!大至急現場へ急行されたし!繰り返し!埼玉・・・」

吉崎 「こんな時に!!」

周囲をパトロールしていた、要と葉山にも通達が耳に入る。

要 「葉山!大至急もどるぞ!!」

葉山 「はい!!」

その間にケータイで舞人に連絡を取る要。

有事の時に連絡が取れやすくなるように、直接本人とケータイの番号をを交換していたのだ。

要 「舞人!今どこにいる?!」

舞人 「旋風寺の本社にいる!!デストリアンの事だな!!?!千葉上空の隕石をこちらでも確認している!!こっちは任せろ!!」

要 「ああ!任せたぞ!!」

4ヶ月の間に、クリーチャーと呼ばれていたデストリアンは、要の意見により警視庁の特別会議にて、デストリアンと呼称することに統一されていた。

よって改定以降のデストリアンは、「D」と出現番号で呼称されることになった。尚、それ以前のデストリアンの呼称は、「C」として区別される。

そして、更に警視庁はNASAと連携して衛星軌道上にデストリアンらしき隕石が確認された場合、ネットワークを通じて情報を提供するようになっていた。

マイトガイன்பドックでは、舞人とマイトガイんが出撃準備にかかっていた。

航行効率を考え、ドック入りした際はロコモライザーに変形した状態で収容されていた。

舞人 「マイトガイん！！起動！！」

システムが起動し、マイトガイんの超AIが全てのシステムをバックアップする。

舞人 「久しぶりの戦闘だ！！油断は禁物だぞ！！」

マイトガイん 『ああ！わかっている！！いくぞっ！！』

ゲートが開かれ、ロコモライザーが離陸していく。

M・P・D・BRAVEのチームも遠征用のジエイデッカー専

用大型輸送機、Jトランスポーターで出撃していく。

操縦するのは、航空自衛隊から派遣された2名のパイロットだ。

2名のパイロットの内の1人、霧島が操縦し、もう1人の鹿島がサポートする。

言うなれば機長と副機長のようなものだ。

霧島 「では、現地に向かいます!!」

要 「よろしくお願いします!!」

霧島 「Jトランスポーター発進!これより離陸する!」

鹿島 「了解!離陸開始!」

同時に離陸するレイバース専用輸送機内では、レイバースが収容されていた。実に窮屈そうである。

尚、こちらの輸送機はJトランスポーターからの遠隔操作で操縦されている。

ガンレイバー 『くそ〜!せまいな〜!!』

ショットレイバー 『文句言うな。現地に着くまでの辛抱だ。』

Jトランスポーターには、JローダーとJバギーが搭載されている。

Jローダー 『実に4ヶ月ぶりだ。今だ謎は解明されていないが、今は市民を守ることが先決だ！』

山梨県甲府市上空。隕石が爆発し、デストリアン、D 12が飛来する。

蛇のような長い首が生えたゴツイ筋肉質の肉体に、イモ蟲のような頭部。三本のカギ爪の両腕。強力な2本の脚。

着地と同時にあらゆる建造物が破壊され崩壊していく。

口からは、緑色の硫酸弾を吐きあらゆるモノを溶かす。

首を伸ばし、眼下を逃げ惑う人々を捕食し始める。

口に含まれた人間は硫酸に解かされ赤い泡と化す。

カギ爪で建造物をなぎ倒す……瞬く間に被害が拡大していく。

一方の千葉県幕張ベイエリア上空でも隕石が爆発。D 13が飛来し、幕張の高層ビルを破壊する。

カニの胴体から毛むくじやらの2本の脚が生えたような容姿のデストリアンだ。

土煙が巻き上がる中、両腕のはさみをふりまわして幕張のビルを破壊する。

瓦礫の下敷きになっていく人々。さらにはD 13がたらず泡によつて瓦礫やクルマ、人々がドロドロに解けていく……。

桜ヶ丘。この日、勇士郎は蓮と共に、漣と律とで遊びに出かけていた。

無論この時点で勇士郎はデストリアンの襲来を感知していた。だが、更にもう一つの隕石がここ桜ヶ丘上空に迫っていることに気づく。

漣 「勇士郎君？どうかした？」

漣の問いかけに勇士郎は真剣な眼差しで答えた。

勇士郎 「またデストリアンが桜ヶ丘に来る……！！！」

漣 「え？！また？！」

蓮 「マジか?!」このとこ音沙汰なしだったじゃねーか！」

律がケータイのニュース情報にデストリアンの警戒宣言が出さ
れているのを確認する。

律 「なんか千葉と山梨にも来たみたいだぜ！ほら！」

漣と蓮にケータイを見せる律。

漣 「また、あんあなことが……!!」

漣の脳裏に過去二度に亘って遭遇したデストリアンがフラッシュバックする。以前のようにパニックにはならなかったが、嫌気な表情を浮かべる。

律 「とりあえずさ、出くわす前に非難しようぜ！火鳥君はどつするんだ？」

蓮 「やっぱ行くんだよな？」

勇士郎 「ああ！またあとで連絡する……！」

漣 「あ……。」

さっそうと走り出す勇士郎。

引きとめようとした漣は言葉を出すタイミングを逃してしまつ。

律が漣を見透かしたように言う。

律 「……漣さん、心配なんですな。火鳥クンのことがっ

」

漣 「べ、別に友達を心配するのはフツーだろっ……！た、ただでさえ危険な目に会つんだからっ。」

漣の顔は若干赤くなっていた。

律 「そーいえばタベ電話ではしゃいでたよーな……。」

漣 「わー！！喋るなーっ！！」

律 「きししし 照れない、照れない！」

漣 「うるさい！！」

ゴンッ

律をグーで殴る漣。律の頭にたんこぶができる。

律 「ううー。」

蓮 「おおぅ……。。」

漣の意外な一面を垣間見る蓮。思わずたじろいてしまう。

漣 「まったく！さ、さあ、早く非難するぞー！」

ずんずんと先頭を突き進む漣の後ろで、蓮が律にちよいちよいと手招きする。

律 「ん？どした？」

律の耳元でこしよこしよと話す蓮。

蓮 「なあ、律。ひょっとして漣ちゃんは勇士郎のこと……。」

「！」

律 「さあ〜ねえー……ご想像にお任せしますっ。」

蓮 （気になるう〜……だが、あのそぶりからして十中八九……。）

安全な場所を探してその場を後にする澪達。

だが、まだこの時点では警戒宣言は出されていなかった。まだNASAの監視衛星が捕らえていなかったのだ。

D 13は、幕張から東京都に向かって北上しながら突き進む。
D 13が去った後は、瓦礫と溶けた人、溶けた車両等が残された。

忌まわしいカニと獣人の下半身をくっつけた様なバケモノに鉄槌が下す者が上空より現れる。舞人が駆るロコモライザーだ。

舞人は、コックピット上部のレバーを前にスライドさせ、ロコモライザーを变形させる。

舞人 「ロコモライザー、フォームチェンジ！」

ロコモライザーが变形していく。畳まれていた両舷のつばさとのぞみが上に持ち上がり、腕へと變形し、手首が出る。

ロコモライザーの前部が折れ曲がる。

後部がそれに伴って回転しながら割れ、脚となり、前部からマイトガインの頭部が現れた。

舞人 「マイトガイン、変形完了!!」

マイトガインのツインカメラが光り、D 13の面前に着地した。

マイトガイン 「銀のつばさにのぞみをのせて、灯せ平和の青信号!勇者特急マイトガイン、定刻どおりただ今到着!!」

D 13の前に正義の巨人が立ちふさがる。

D 13 「ギユギイイツ!!」

巨大なハサミを振り被ってマイトガインに襲い掛かる。

マイトガイン 『ふんっ!!』

ガアアアアンツ……ドオゴガアアアンツ!!

だが、マイトガインはこれをレフトアームで受け止め、カウンターパンチを食らわせる。

後ろへとふらつくD 13だが、毛むくじやらの脚でふんばり、再度ハサミでの攻撃を敢行する。

舞人 「マイトガイン!ナックルラッシュ!!」

マイトガイン 『了解だ!!殴り砕く!!!!』

コントロールレバーを動かし、マイトガインを前進させる。

鋼の拳が振り下ろされるハサミを跳ね返し、それを期に連続で鋼の拳がD 13に襲い掛かる。

ガゴオンツ!!ドガゴオツ!!ドガアンツ!!ガキイインツ!!ゴオオオンツ・・・

硬い皮膚に打ち込まれていくマイトガインのパンチのラッシュ。

だが、このパンチの一瞬のタイムロスについて、D 13はマイトガインの両腕をハサミで掴み取る。

ガキン、ガキイインツ!

マイトガイン 『何!?!』

ブシユウウウウ・・・

マイトガイン 『くっ・・・これは?!』

その時、口から溶解泡がマイトガインに向かって噴き出された。特殊合金製の装甲が所々腐食しはじめる。外部面異常を知らせるアラームがコツクピットに鳴り響く。

舞人 「クソツ!!外部装甲が!!マイトガイン!!この泡をくらったら厄介だ!!間合いを取って射撃戦で行くぞ!!!!」

マイトガイン 『よし!! わかった!! 射撃戦に移る!!』

ヴィヴィギユギユアアアツ!!

ドオドオドオガアアアアアアアアツ!!

D 13 「キイギユイイイイ!!」

マイトガインは、至近距離からマイティーキャノンとマイティーデイスチャーゼーザをD 13の顔面に撃ち込んで怯ませ、その隙に間合いを取る為に後方へとジャンプ。射撃戦へと変更する。

マイトガイン 『ターゲットロック・オン!! シグナルレーザーツ!!』

ライトグリーンのレーザー光が額から奔り、D 13の頭に直撃する。

!!!
ビギユイイイイイッ……ズガアアアアアツ!

D 13 「キユギヤアアアツ!!?」

ビギユイイイッ、ビギユイイッ、ビギユイイッ、ビギユイイイッ!!!

ドオドオドオドオガガアアアアアアアツ!!!

D 13 『キギイギギイイイッ!!』

連続でシグナルレーザーを喰らい、表面で激しい爆発が起こる。ふらつき始めるD 13。尚もマイトガインは攻撃の手を緩めない。

マイトガイン 『効いている！！ならば、フル・シューティングだな！！』

舞人 「少し待て！全ての射撃武装の威力をMAXに調整する．．．．．よし、いけるぞ！！フル・シューティングッ！！」

舞人は、ビーム系武装のエネルギーをMAXに調整する。シグナルレーザー、マイティーキャノン、鎖骨に相当するグリーンのライトレンズから、マイティーデイスチャージレーザーが、一斉発射される。

ヴィギユデイデイドオギユアアアアアアアアッ！！！！

ズドオギヤゴゴオオオオオオオオツツ！！！！

全ての射撃武装の火線がC 13の頭部、上半身に直撃。頭部の甲羅が砕け、体内の泡の成分を噴出しながら爆発を起こした。

一方、甲府市ではD 12が破壊活動を続けていた。

ビルに芋虫状の頭部を突っ込み、逃げ遅れていた人々を捕食。さらにはそのビルをなぎ倒し、残っていた命を瓦礫の中へと沈ませ

る。

その惨状の中、ジェイデッカーが先行して飛来する。

空中で変形を開始するジェイデッカー。

ジェイデッカー 『ブレイヴ・アップ！！ジェイデッカーッ
！！！！』

鹿島 「Jバスター、投下します！」

Jトランスポーターから、Jバスターが投下される。それをキヤッチして装備するジェイデッカー。

吉崎 「Jバスター、アクティブ！！」

ジェイデッカー 『これより戦闘任務を開始するっ！！』

Jバスターの銃口から放たれるレールガンの弾丸。レールガンの弾速もアップしている。

デイギインッ！！ デイギイン、デイギインッ！！

ズウウンッ、ズズウウウウウンッ！！

D 12 「ギユギユウッ！？」

ジェイデッカーの方へと長い首を向けるD 12。ジェイデッカーがJバスターの銃口をD 12に向けながらホバリングしている。

ジエイデッカー 『なんという惨状だ！！街がこれほどにも・
・おのれデストリアンめ！！』

デイギン、デイギン、デイギイインツ！！ デイギンツ、
デイギンツ、デイギンツ！！！！

ズデイギャガゴギャガガアアアツ！！！！

D 12 「グギユグググウウウツ！！！！」

怒りの感情を籠めながらJバスターを撃ち込むジエイデッカー。
警察として、これほど虐げられた市民と街を見るのはいたたまれな
かった。

近隣の中学校の運動場では、ホバリングしながらJトランスポ
ーターとレイバー専用輸送機が着陸を開始する。

霧島 「これより着陸態勢に入る！」

鹿島 「了解！Jトランスポーター、姿勢制御！ホバリング着
陸開始！」

着陸すると、ハッチが開いてJバギーとレイバーズが運動場に
展開する。

ガンレイバー 『よっしゃっ……行くとするかっ！！』

ショットレイバー 『撃ち砕くぜ……！！』

ギュウイン……ガシ、ガシイン……

レイバースを固定していたローダーからレイバース達が起き上がり、D 12へと急行していく。

葉山 「Jバギー、出します!」

ギュオツ!!

Jバギーも目標の近くへと急行していく。

ディギインツ、ディギインツ、ディギインツ、ディギイインツ!!

旋回射撃をしながらD 12へとJバスターを撃ち込んでいくジエイデッカー。D 12も溶解液を飛ばしながら応戦する。

ビュギョツ……ドウビョツ……ヴァチュンツ!

ジエイデッカー 「間合いが難しい!あれがJバスターに中れば、手の打ちようがなくなる!」

無造作に吐き出されてくる溶解液をかわしていくジエイデッカー。溶解液の射程距離はかなり長く、上空へ上がったとしても射程距離に入ってしまうほどだ。

レイバースとJバギーが駆けつけ、戦闘指揮がはじまる。

要 「レイバース!左右からD 12に射撃して気を引かせる!」レイバースが隙を作ってくれている内にジエイデッカーは上空

から射撃するんだ!!」

ジエイデッカー&レイバース 「了解!!」

安全圏内でJバギーが停車する。

吉崎 「レイバース、目標と接触します!!」

ガンレイバーとショットレイバーが左右に分かれて、ガンリボルバーとショットガンを構える。

ガンレイバー 「さーで、久しぶりだ!どっちに気を向く?!」

ガン、ガン、ガアアンツ!! ガン、ガン、ガアアンツ!!

ショットレイバー 「奴がどちらに向こうと、ジエイデッカーが有利に戦闘できる状況に事を運ばばいい!!」

バスウンツ!!ジャキツ・・・バスウンツ!!・・・ジャキツ・・・バスウンツ!!

ドオドオドオドオドオドオガゴオガアアンツ!!!!

D 12 「ギギギギギギョツ!!!？」

ガンレイバーとショットレイバーの放った弾丸がD 12の側面で爆発する。

左右に首を振って、レイバースに気を向けるD 12。するとガンレイバーに向かって溶解液を吐き出してきた。

ガンレイバーはこれをかわしながらガンリボルバーをリロードして走り出す。

ガンレイバー 『そうだ！！そう来てくれ！！』

その間にもショットレイバーが弾薬をリロードし、ジェイデッカーが上空へと舞い上がる。

走りながらD 12に向けてガンリボルバーを撃ち込むガンレイバー。皮膚面が爆発する。

ガアン！！ガン、ガン、ガアアン！！

ドオゴオ、ドオドオドゴオオオンツ！！

D 12 「キュウイイイイッ！！」

間をおかずに上空からJバスターの弾丸が降り注ぐ。Jバスターを真下へと構えたジェイデッカーが、狂い無い射撃でD 12に直撃させる。

デイギインツ！！デイギンツ！！デイギンツ！！デイギイン！！デイギンツ！！

デイギヤドオドオドオドオドオゴガガンツツ！！

頭部や体の上面に直撃して表面が爆発する。長い首を上空へと持ち上げるD 12。だがその時、背後から間合いを取って迫ったショットレイバーが、近距離からショットガンを撃ち放つ。

バスウンツ！！ジャキ、バスウンツ！！ジャキ、バスウンツ！！

ズドオヴァゴガアアアツ！！

D 12 「ギイイイイツ！！？」

ショットレイバー 『いい手応えだ！！』

背後へ首を向けると今度はその側面からガンレイバーのとび蹴りが入る。

ガンレイバー 『だりゃああああ！！』

ドオガアアアツ！！

吹っ飛んで、道路に崩れこむD 12。

市内を再び走り出したJバギーから、要が止めの指揮を出す。

吉崎 「連携成功！予想以上です！D 12を完全にジエイデッカーから引き離しました！」

要 「止めをさすぞ！！」バスターをグレネードモードへ移行させる！！」

吉崎 「了解………移行完了！！」バスター・グレネード、アクティブ！！」

ジエイデッカー 『移行確認!!!』バスターロック・オン!!!』

倒れこむD 12に斜め上の上空から銃口を向けるジエイデッカー。ジエイデッカーのカメラアイが目標をロック・オンした。

ジエイデッカー 『バスター・グレネード、シュートツツ!

!』

ヴィギユガゴオオオオツツ!!!

ズヴァドオゴオギャガアアンツツツツ!!!!

プラズマ弾が炸裂し、胴体もろとも爆発しながら砕け散るD
12。

ジエイデッカー 『駆逐完了!これをもって戦闘任務を終了するっ!』

要 「よくやった!!!この後は、山梨県警の協力の下、事後処理任務に移行する!!!」

ジエイデッカー&レイバース 『了解!』

だがその時、吉崎は警視庁からの緊急通信を捉える。

吉崎 「そんな・・・!!!」

葉山 「どうしたんすか?」

吉崎 「神奈川県北東部にも隕石が落下!!!デストリアンが出

現したとのことですよ!!」

要 「なんだって!?!くっ仕方がない!!事後処理はレイバ―ズと県警に一任、ジエイデッカーは、デストリアン殲滅任務を最優先とする!!舞人とマイトガインに連絡をとって協力の要請を!!」

ジエイデッカー&レイバ―ズ 「了解!!」

その連絡を航行中のロコモライザーの中で受け取る舞人。

舞人 「こちらでも警視庁からの要請を受けて現地に向かっていゝ!!!!どんな固体かは未確認だが、共に闘おう!!」

吉崎 「了解!いつも協力してくれてありがとう!感謝するわ。」

舞人 「それはお互い様さ。」

桜ヶ丘に再び襲来したデストリアン。

金属のような銀の甲殻皮膚をもったデストリアンが桜ヶ丘の街を強襲する。

ドクロ骸骨から、昆虫のような単眼が二つ生え、左右に分かれたクワガタの顎のよう口。カマキリに酷似した体のつくりだが、腕は鎌ではなく針のように長く鋭利な槍だ。

そのデストリアンの破壊行為の光景を市街地の外れの高台から見る透達。

律 「また……私達の街が壊されく……。」

蓮 「なんでここばかりなんだよ……!!」

漣 「勇士郎君……。」

漣が切なげな表情で勇士郎の名を口にしながら空を見る。それに連動するように雲が太陽の光を遮った。

そのころの当事者は、デストリアンの許へと駆け抜けていた。

光を纏いながら低空を走る勇士郎。目線には新たなD 14が映っている。

勇士郎 「デストリアン……!!」

つづく

次回予告

再度発生するデストリアン同時多発。だが、甲府と幕張のデストリアンは狼煙に過ぎなかった。

再び災厄が飛来する桜ヶ丘。しかし、出現したのは2体の同じ個体と以前に駆逐されたC 03のアナザータイプだった。翻弄されるファイバード。襲われる唯と和。その混沌へ、マイトガイン、ジエイデッカー、そしてキングエクスカイザーがカオスダイブする。

次回、新生太陽の勇者ファイバード・サーガ 第12話 「バトルフィールド桜ヶ丘・前編」

再び桜ヶ丘の日常が崩れ去る……。

第12話 「バトルフィールド桜ヶ丘・前編」

勇士郎が、D 14の前に到着する。

既に多くの市民が被害にあっていた。

大きく立ちはだかり、槍状の腕の先端から弾丸のような威力の液体を飛ばす。

ビルに着弾し、ビルが碎ける。

両眼を動かしながら近隣の建物を突き砕く。

その光景に怒りを露にする勇士郎。

勇士郎 「き・・・貴様あああああっ！！！！これ以上、桜ヶ丘を破壊されてたまるかああああっ！！！！ファイアージエエエエエエエエエッ！！！！」

叫びながら上空に光を全身から解き放つ勇士郎。ファイアージエエツトが舞い降り、ファイバードへと変形して地上へと着陸する。

勇士郎 「はあああっ・・・！！」

気合を入れて、空中へ軽くジャンプして低空を駆け抜ける勇士郎。

フェニックスのオーラを纏い、光の球体と化してファイバードの胸部中央に飛び込む。ライトグリーンの両眼が光り、完全起動するファイバード。

ファイバード 『チエーンジッ！ファイバードッ！！！』

D 14 に対して間をおかずに掴みかかるファイバード。

ガキイイインツッ！！！

ファイバード 『これ以上、この桜ヶ丘の人々を傷つけさせないっ！！はあああああっ！！！！』

ファイバードのフットバーニアが点火する。D 14を郊外へと追いやるべく、D 14に掴みかかったまま上昇していく。

ファイバード 『でやあああああっ！！！！』

D 14 「ギキツギキキギキイイイツ？！」

始めから飛ばすようなファイバードの攻勢に怯むD 14だが、クワガタのような顎でファイバードの頭を挟んだ。

ガキンツッ！！

ファイバード 『ぐおっ！！！』

そのまま頭部を砕こうとギリギリと顎を挟みつけてくる。激痛がファイバードを襲う。

ファイバード 『ぐあああああ……このヤロウ
ッ！……！』

ドガアッ！

D 14 「ギギギッ！！」

人蹴りを浴びせ、一旦間合いを置く為に市街地の道路に着地するファイバード。D 14は、市内の川の方面に落下した。

不気味な動きで素早く上体を起こし、体制を立て直すD 14。ファイバードを見るなり槍状の鎌をかざした。

D 14 「……！！！」

ビュドオッ！！

鎌の先端から液体弾が発射される。非常に速い弾速だ。

ファイバード 『ちっ！……！』

首を横に傾けてこれがかわすファイバード。後方にあったビルに直撃し、ビルが崩れ去る。

連続でD 14は液体弾を発射していく。ジャンプしながらかわしていくものの、それによって街の被害がかえって拡大していく。実に皮肉だ。

そのとき、突如としてD 14が飛び上がる。

ドンッ……

一瞬でファイバードの背後をとるD 14。槍状の鎌をファイバードに突き刺すように攻撃する。

ドガギヤアアッ!!

ファイバード 『ぐはっっ!!!!』

背後から不意を突かれて突き飛ばされたファイバードが対岸沿いの市街の建造物を崩して倒れこむ。

その間にも、うつ伏せに倒れたファイバードの面前に移動して腕の先端を背中に突き刺す。

ガシユンッ!!

ファイバード 『ぐああっ……!!!!』

容赦なく攻撃が続く。

ガシン!!、ガシン!!、ガシン!!、ガシントゥ……

ファイバード 『ちいつ……がはっ……くそっ!!!!』

次の一撃が入る直前にファイバードは転がりながら攻撃をかわした。そして起き上がり、アッパーの一撃を加えた。

ファイバード 『だああああっ!!!!』

ゴガアアッ!!

D 14 「ギッ!!」

D 14 はヨロつきながら踏ん張ると、至近距離から両腕をファイバードに突き出す。

ヒュオッ!!

ファイバード 『しゃあっ!!』

ガシイイッ!!

ファイバードは両腕でこれを受け止める。踏ん張った両足が、コンクリートにめり込んだ。

ギリギリと互いの力が拮抗する。

ファイバード 『郊外へ持ち込みたいところだが・・・無理があるみたいだな・・・!!』

ビギャンッ!!

ファイバード 『何!??』

その時、背後からも液体弾が飛んで来た。もう一体の同種のデストリアンがいたのだ。色は異なり、銅色である。

D 14 を突き放してジャンプするファイバード。距離を置いて

て着地する。

ファイバード 『同種のデストリアンが2体!!?くそ!!!』

これまでにないパターンに翻弄されるファイバード。あの俊敏さからして、フレイム・ブレスターを召喚する猶予も与えてはくれないだろう。

2体はファイバードに向かって、液体弾を撃ち始める。やむえずにガードしながら耐え凌ぐ。

ファイバード 『くっ!!打つ手無しか・・・!!!』

少し離れた市街地でもデストリアンが活動していた。外見からして、ジエイデッカー達が初めて戦ったデストリアン、C 03に酷似している。だが以前の個体が茶色に対し、このタイプの皮膚の色は紫だ。

闇雲に一般市民を両腕の鎌のような爪で虐殺しながら徘徊する。

これから逃げる市民。そのなかにショッピングを愉しむはずだった唯と和の姿があった。

C 03アナザー 「ボオオオオオオッ!!!」

ずんぐりとした図体に似合わない速さでC 03アナザーが咆哮しながら追いかけてくる。

和 「唯!!もっと速く走るのよ!!追いつかれる!!!」

唯 「そんな事言っても……私、速く走れないって……」

和 「唯……!!」

息を切らし始めている唯。運動が苦手な彼女にとって今の状況は酷だった。和が必死になって唯の手を握りしめて走る。

こんな所で大切な幼なじみを失いたくない。和は必死で走った。唯も体力の可能な範囲で必死に走る。

だが、それに相反するように唯の体力が減っていく。

唯 「はっ、はっ、はっ……もうだめ……和ちゃん……先に逃げて……」

和 「何バカなコトいつてるの?! そんなことできないわよっ!!」

徐々に唯の走るペースが落ち込んでしまう。それでも和は唯の手を握り走る。

和 「こんな所で死にたくないでしょ……今は走って!!」
唯 「!!」

唯 「和ちゃん……あっ!!」

和 「え?!」

ズサアッ……

その時、唯がひび割れたコンクリートのわずかな段差に足をとられて転んでしまう。転んだ拍子に和から手を離してしまった。

和 「唯!」

唯 「ううー……いたあーい……」

手と脚をすりむいて、道路に横たわる唯。急いで和が戻って起こす。

和 「唯!大丈夫?!ほら!立って!」

唯 「痛いよう……うう……」

その時だった。和はぞっとする。唯の背後にC 03アナザーが立っていたのだ。表情が変わった和に唯が問いかける。

唯 「……和ちゃん?」

和はそう言う唯をぎゅっと抱きしめる。

唯 「あうっ……和ちゃん……ひいっ!」

ゆっくりと背後を振り返る唯。一瞬にして恐怖に変わる。

和 (もう死ぬ……二人とも殺されてしまう……!)

唯 「恐いようっ!和ちゃん!」

着地したマイトガインがファイバードに呼びかける。2大勇者はここで初めての邂逅を果たす。

マイトガイン 「大丈夫か?!」

ファイバード 「ああ!助かった!」

マイトガイン 「見たところ同じ同志と見るが、お前は一体何処の所属なのだ・・・?」

舞人 「以前、桜ヶ丘とソウルに現れた謎のロボットだろ?名は一体・・・?」

ファイバード 「俺の名はファイバード。デストリアンを追って来た宇宙警備隊だ!」

マイトガイン 「宇宙警備隊・・・もしや警視庁のエクスカイザーの仲間なのか?!」

ファイバード 「ああ!彼は、先輩にあたる・・・。」

2体が会話する中、D 14が狙いを定める。これを確認していた舞人が注意を促す。

舞人 「会話に勤しんでいる場合じゃないようだ・・・!くるぞっ!」

舞人がそういった矢先に2体のD 14が攻撃を開始する。一斉に2体がファイバードとマイトガインに飛び掛る。

D 14A、B 「ギギギギイイイツ!!」

斜め上空から飛び掛ってくる2体のD 14。ファイバードとマイトガインはそれぞれ対空射撃を行い応戦する。

ファイバード 『ダイナ・バスターツ!!』

マイトガイン 『シグナル・レーザー!!』

ズギヤギヤドオゴゴオオオオツツ!!

弾丸とレーザーが2体を直撃する。だが、着弾時に生じた煙を抜けて槍状の鎌で襲い掛かる。

ドドオガギヤアアアアアアツ!!

ファイバード 『うぐつ……!!』

マイトガイン 『何いつ!!?』

舞人 「ぐあああつ!!」

突き飛ばされて倒れこむファイバードとマイトガイン。更なる攻撃が続けて見舞われる。

鋭い鎌状の腕が、倒れこんだマイトガインにガンガンと突きつけられる。一撃一撃のダメージが、今まで戦った個体と比べ大きい。コックピット内にも警戒アラームが鳴り響く。

ズガン!!ズガン!!ズガン!!ズガン!!ズガン……

舞人 「くそっ！これまでの奴とは違うぞ！！一撃のダメージがでかい！！」

マイトガイン 『そ……そのようだ！！ぐああっ！！』

ファイバードは揮われた槍状の腕に斬り払われて、ダメージを受けている。

ズガアアッ！！

ファイバード 『がはっ……！！』

マイトガインの胸部に槍が突き刺さる。

ズギヤガッ！！

マイトガイン 『ぐおおっ……彼はこんな奴を相手にしていたというのか?!!!』

偶然か否か、ファイバードが相手にしてきたデストリアンと、マイトガイン、ジェイデッカーが相手にしてきたデストリアンは、何故か格違いのモノであった。

マイトガインは、今回の戦いで初めて格が上のデストリアンと対峙したのだ。

2機が苦戦を強いられる中、上空からの援護射撃が一時的な隙を作った。

デイギャガン、デイギャガンッ！！

D 14A、B 「ギギギギッ?!?!」

ファイバード 『援軍?!』

上空からは、ジエイデッカーが駆けつけていた。Jバスターの銃口からレールガンが2体のD 14に向かって撃ち放たれる。

ジエイデッカー 『こちらジエイデッカー!!これより援護する・・・あれが、謎のロボットなのか?』

舞人 「今だ!!マイトガイン!!」

マイトガイン 『感謝する!!はああああっ!!』

ドオガアアアッ!!

アッパーで蹴散らすマイトガイン。これに便乗するようにファイバードは天空に腕をかざしてフレイム・ブレスターを召喚する。

ファイバード 『フレイム・ブレスター!!』

上空より召喚されたフレイム・ブレスターがファイバードと合体する。

ファイバード 『フォーム・アアアアップ!!武装合体、ファイバアアドッッ!!』

反撃の狼煙が撃ち放たれた。

数分前の市街地。唯と和を襲った轟音……だが、その轟音は二人を潰した轟音ではなく、C 03アナザーを突き飛ばした音だった。

駆けつけたGTモードのエクスカイザーがC 03アナザーを突き飛ばしたのだ。

ドオオオオオン……ズガガガガアア……!!

着地しながらスピターンし、唯の許へと駆けつけて止まるエクスカイザー。中からドライバーの勇が飛び出す。

勇 「大丈夫か!？」

和 「勇さん!私は大丈夫だけど、唯が転んじゃって……。」

唯 「ううう……痛いよ……ふううううう……。」

勇にしがみつく唯。その体は恐怖の為か震えていた。唯の頭にそっと触れてなでる勇。

勇 「そうか恐かったんだ……無理もねえ。けど……もう大丈夫だぞ、唯。」

エクスカイザー 「今はこの場を離れるんだ!さあ、私に乗ってくれ!」

エクスカイザーはC 03アナザーのエネルギー変革を感じ取っていた。突如として巨大化する。C 03アナザー。

エクスカイザー 『勇達はここに残るんだ！！奴が何故かはわからないが巨大化した！！一刻も早く斃さなければならぬ！！』

唯 「わかったよ。ここでまってるから迎えに来てね。」

エクスカイザー 『ああ。』

向きを変え、再びデストリアンとの戦いに赴くエクスカイザーを勇が引き止める。

勇 「待つてくれ！！俺も行く！！」

エクスカイザー 『なんだって？！それは危険だ！！勇！！』

勇 「いいや・・・危険上等。俺も闘いを間近で見てみてえ。つーか俺自身がヤツと闘いてえ。これ以上大事なモンを破壊されるのはガマンならぬ。」

唯 「勇兄ちゃん・・・。」

和 「確かに気持ちは解りますけど・・・。」

エクスカイザー 『・・・わかった。一つだけ方法がある。来い、勇！！』

勇 「オーライツ！！じゃ、いいコにして待つてゐるんだぞ！！」

エクスカイザー 『とう!?!』

キングローダーに收容されると、両腕から手首が飛び出し、頭部の顔がフェイスマスクを装備する。そして胸にライオンの顔が浮かび上がる。

キングエクスカイザーとなったエクスカイザーは、正面で見上げる勇に叫ぶ。

キングエクスカイザー 『勇!そこに立っているんだ!?!』

勇 「おう!?!」

胸を張って立つ勇にキングエクスカイザーは、額からスポットライトのような光りを照らした。

すると勇は浮かび上がっていく。まるでUFOによる誘拐のような感じだ。

勇 「うおお!?!これは?!」

キングエクスカイザー 『これから勇と私で融合合体する!?!』

勇 「融合合体……!?!」

勇の脳裏に恐怖に怯えていた唯や和、いつも料理を作ってくれている憂、世話になっている彼女達の両親の姿が浮かぶ。

勇 『おっしやあっ!?!』

キングエクスカイザーと融合合体を果たす勇。また1人の勇者がここに爆誕する。

キングエクスカイザー 『融合巨大合体！！キングエクスカイザー！！』

勇はキングエクスカイザーと同化し、ビルから見下ろすような視点に狂喜する。

勇 (うおおお！！スゲーっ！！本当に融合合体しちまいやがった！！！！)

キングエクスカイザー (興奮している場合じゃない！くるぞ！！)

こちらに気づいたC 03アナザーが大口を開けて向かってくる。

キングエクスカイザー 『行くぜえっ！！デストリアン！！』

勇と融合したことによって口調が勇の口調になるキングエクスカイザー。

背部のスラスターを点火させてC 03アナザーに突っ込むキングエクスカイザー。巨大なボディが巨軀を突き飛ばす。

ドオオオオオオ・・・ガギャアアアンツ！！

C 03アナザー 「ボオオオオツ???!」

C 03アナザー 「ボウオオオオオオツ!!!」

ガブンツ!!

キングエクスカイザー 「ぐああああああ癒えええええ
!!!」

おぞましい口臭と噛み付かれた力がキングエクスカイザーを襲う。初めての戦闘故に、勇は上手くキングエクスカイザーとシンク口しきれずにいた。

ズギヤガアアアンツ!!!

C 03アナザー 「ヴオオオオオオツ!!!」

口内にカイザービームが撃ち放たれた。思わずキングエクスカイザーから離れ、もがき苦しむC 03アナザー。

その隙にキングエクスカイザーは強烈なパンチを繰り出してダメージを与える。

キングエクスカイザー 「だりゃああああつ!!!」

ドオゴガアアアンツ!!!

ふらつくC 03に腕をかざし、手裏剣のような武器・カイザーショットを放つ。

キングエクスカイザー 「カイザーショット!!!」

ガシユドオツ!!

ズバシユウツ!!

C 03アナザー 「ボギユオオツ!!」

左の二の腕より下を斬り落とす。緑の血液が道路に滴る。だが、もう片方の腕で斬り払いに掛かってきた。

ズガアアアアツ!!

キングエクスカイザー 『ぐおおおおっ……この……カイザーブラストツ!!』

ダメージを受けながらも踏ん張って、ライオンの口から放たれるカイザーブラストのカウンターショットを見舞った。

ヴァギユアアアアアアアアツ!!

ズドオオオオオオオオオツ!!

後ろへと吹っ飛ばされるC 03アナザー。止めのチャンスが来る。

キングエクスカイザー (よし!そろそろカイザーソードで止めを刺すぞ!!)

勇 (カイザーソード……ああ!!)

一方のファイバードもソードを取り出す。

ファイバード 『フレイムソード!!!』

フレイムソードの刀身をD 14にかざすファイバード。オレ
ンジに輝く刀身が斃すべき獲物を捉える。

もう一方のD 14にファイティングポーズで間合いをとるマ
イトガイン。空中からJバスターを構えるジエイデッカー・・・桜
ヶ丘に再び勇者達の勇姿が燃え上がっていた。

つづく

次回予告

フレイム・プレスターの召喚が反撃の狼煙になるがごとく形勢が
変動するファイバード。一方で、マイトガインとジエイデッカーが
初の格上の相手に苦戦を強いられる。だが、辛くも斃すことに成功
する。

満身創痍の2体の超AI勇者たちは、ファイバードの闘いを見守
る。

その闘いの中、武装合体したファイバードに追い詰められたD
14は、苦し紛れに逃亡、そして溲達に襲い掛かるのだった。

次回、新生太陽の勇者ファイバード・サーガ 第13話 「バト
ルフィールド桜ヶ丘・後編」

怒りの炎剣は悪しき存在を逃さない。

第13話 「バトルフィールド桜ヶ丘・後編」

空中からジェイデッカーがJバスターで射撃し、マイトガインを援護する。

デイギンツ！！デイギンツ！！デイギンツ！！

ズガンツ！！ズガンツ！！ズガアアアンツ！！！！

Jバスターから放たれたレールガンがD 14Bに命中する。
マイトガインは間を置かずに、パンチをD 14Bに撃ち込む。

マイトガイン 『はあああっ！！！！』

ドオゴオオオオンツ！！

D 14B 「ギギユウウツ！！！！」

後ろへと体制を崩しそうになるが、腕を振ってマイトガインを攻撃する。

ヒュオンツ・・・・バギイイイツ！！

舞人 「ちいっ！！こらえろ！！ナツクルラッシュだ！！」

マイトガイン 『ぐっ・・・・おおおおお！！！！』

この一撃をこらえてマイトガインがナックルラッシュを繰り返した。重量級のパンチがD 14Bに打ち込まれていく。

ドオゴオツ、ドオガツ、ゴオンツ、ガアアンツ、ゴガアツ、ドオオオツ、ゴオオオツ、ズガオンツ！！

D 14B 「ギユギイググググ……！！」

マイトガインのナックルラッシュに耐え凌ごうと防御するD 14B。この隙にジェイデッカーは背後に回り、「バスターを打ち込む。

ギユオオオオオ………ディギンツ！！ディギンツ！！ディギンツ！！

ズウンツ、ズンズウウンツ！！！！

直撃するものの、伝わる手応えが硬い。

ジェイデッカー 「なんていう硬い皮膚だ！！まるで手応えがない！！」

D 14Bは、ナックルラッシュを耐え凌ぐと、両腕を突き出してマイトガインを突き飛ばす。

ガオオオオオオンツ！！

舞人 「ぐうっ！！」

マイトガイン 『うおおおっ……!!!!』

地面に地響きを立てて倒れこむマイトガイン。道路が砕けて若干の地割れが生じる。

D 14Bは、ジェイデッカーに振り返りながら液体弾を撃ち放つ。

ビュバンッ!!

ドオオオオオッ!!

ジェイデッカー 『ぐああっ!!』

液体弾の直撃を受けて落下し、ビルに激突するジェイデッカー。この攻撃により、「バスターを手放してしまい、同時に銃身が破損してしまう。

ジェイデッカー 『くそっ……バスターが……!!』

倒れこむジェイデッカーに素早い動作でD 14が襲い掛かる。仰向けになったジェイデッカーの上から槍状の鎌を突き刺すように着地する。

ギヤズウウウウウンッ!!

ジェイデッカー 『がはああああっ……!!!!』

そのまま何度もジェイデッカーに突き刺しの攻撃を繰り返すD 14。遠隔通信しているJトランスポーター内で現状を報告する

吉崎。

吉崎 「Jバスター破損!!ジエイデッカーの胸部損傷率43・57%!!両肩及びウィングの損傷率共に30%!!」

要 「Jバスターが破損?!まずいな・・・ジエイデッカー!聞こえるか!?まずはその場を離脱して体制を整えるんだ!!」

だが、ジエイデッカーは完全にD 14Bに押し付けられており、離脱は困難だった。

ジエイデッカー 「隊長・・・だめです!!身動きが・・・!!」

その時だった。立ち上がったマイトガインがマイティーキャノンをD 14Bに向かって放つ。

ドオヴィイイイイイツ!!

ズガギヤアアアアアンツツ!!!

マイトガインの方へと振り向くD 14B。

舞人 「ジエイデッカー!!無事か!?!」

ジエイデッカー 「なんとかな・・・。」

悪戦苦闘するジエイデッカーだが、この時に一瞬だけ踏み倒す力が弱まるのを確認する。

ジェイデッカー 『力が弱まった?!今だ!!!』

ズドオオオオオオツ!!

ウイングスラスタ全開で離脱するジェイデッカー。

再びジェイデッカーに注意が向けられる。ジェイデッカーに向かつて鎌をかざすD 14B。

舞人 「やらせるか!!マイトガイン!!ダイナマイト・メテオだ!!!」

マイトガイン 『了解だ!!!』

ドオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオ

背中のバックパックから青白い炎が全開で噴射され、マイトガインの巨体を空中へと舞い上がらせる。

斜め上上空へと上昇し、蹴りを繰り返す体勢となるマイトガイン。

コックピットでは、舞人がレッグユニットのパワーゲインをMAXに調整する。

舞人 「くらええええええ!!ダイナマイト・メテオツ!!!」

マイトガイン 『でやああああああああっ!!!!!!』

ドを構えたファイバードを目視する。

ジエイデッカー 「……あのロボット……例の謎のロボットなのか?!」

マイトガイン 「ああ。名をファイバードと言うそうだ。彼はエクスカイザーの後輩にあたるらしい。」

ジエイデッカー 「会話したのか?……確かに、彼も我々と違うロボットだ。内部から生体反応がキャッチできる……む?!」

ファイバードをサーチし、彼の大まかな分析をするジエイデッカー。だが、エクスカイザーと異なる部分がある事に気づく。

舞人 「どうした?ジエイデッカー。」

ジエイデッカーのカメラアイが、エネルギー生命体の反応とは別に、人間の生体パターンを捉えたのだ。

ジエイデッカー 「彼は……人間?!どうということだ!?!」

マイトガイン 「人間!?!」

舞人がマイトガインの捉えたデータをモニターで分析する。

舞人 「たしかに人間のようだ……だが何故人間の生体反応がファイバードから?それもファイバードの体全体からだ。だが、今は何よりも彼の戦いを見させてもらおう!!勇者としての戦い方に何か学べるモノがあるはずだ!!」

疑問符がよぎる頭を現状に切り替える舞人。今は勇者の戦い方を少しでも客観視したかったのだ。

マイトガイン 『支援しなくてもいいのか？』

舞人 「どの道、今の技で両脚にかなりの負担が掛かった。満足な戦闘はできない。」

マイトガイン自身も両脚の違和感を覚えていた。舞人に便乗するようにジェイデッカーが言う。

ジェイデッカー 『舞人の言うとおりだ。私もJバスターを失っている。今はファイバードの戦いを見守ろう。』

舞人達はファイバードの戦闘を見守る。

ファイバードとD 14Aが互いの刃を交える。フレイムソードの刀身と槍状の鎌が火花を散らす。

ギヤイイイインッ!!

ファイバード 『……………しゃああああっ!!』

シャウンッ!!

D 14Aの鎌を捌くファイバード。そこから横薙ぎの斬撃に繋げる。

ズバアアアアアンッ!!

ドオゴオオオッ！！

ファイバードの斬り払いに吹っ飛ばされるD 14A。胸部にはフレイムソードの刃による斬り傷が確認できる。

D 14A 「ギギギギギイ……。」

ビュドオッ！！

腕をかざして液体弾を発射するD 14A。ファイバードは相手を睨みつけながらかわして斬り掛かる。

ファイバード 『中らねえよっ！！』

ズバキヤアアアッ！！

D 14A 「ギユギイイイツ！！」

フレイムソードの袈裟斬りの斬撃が、硬い皮膚を損傷させる。

そこから反撃に転じたD 14Aがファイバードに鎌を突き刺そうと攻撃するが、これもかわされる。

後ろへと飛びながら攻撃をかわすと、ファイバードは胸の中央に装備されたリング状の斬撃系武装、サンスライサーを左手で取り外してD 14A目掛けて投げた。

ガキンッ！

ファイバード 『サンスライサーッ!!』

ヒュフォアアツ……ズバシャアンツ!!

右腕の鎌がサンスライサーによって先端から半分が切断された。

舞い戻ってきたサンスライサーを再び装着すると、ファイバードは再度フレイムソードで斬り掛かる。

D 14Aも攻めの姿勢になり鎌を揮う。

バキヤアアアアンツ……!!

フレイムソードの斬り払った一振りだが、D 14Aの鎌を弾き返す。そして両手でフレイムソードを握り締め、横一文字の左薙ぎの斬撃で本体を斬りつける。硬い皮膚が砕けて内部の柔らかい皮膚が露になった。筋肉の筋のようなものが確認できる。

バギヤシャアアアアンツ!!

D 14A 「ギツギギイイツッ!!」

砕けた皮膚の破片が飛び散っていく。D 14Aは、先程までの優勢から一気に劣勢に立たされた。

すると、背中 of 羽を広げ、桜ヶ丘の上空へと飛び立つ。

奇しくも向かった方向は、溇達が安全と思って非難していた高台がある場所だった。

ファイバード 『この期に及んで逃げる気か?!?!逃がすかよ
!?!』

ファイバードもフットバーニア全開で飛び立つ。

飛び立つD 14Aであったが、漣達を見つけたのか高台付近
に着陸してしまう。

律 「ん……?お、おい、怪物がこっちに来るぞ!!」

それを確認した律が声を上げた。

漣 「マジかよ!?!?…そんな…!!!!」

漣もまさかと思った。ここに来るはずがないという確信のない
確信を懐いていたモノが一変する。

漣 「う……い、嫌だ……こ、恐い!!」

再び漣が混乱しそうになる。目を強くつむって顔を背ける。

やはりこのような状況下に置かれるとどうしてもあの日の恐怖
やトラウマが過ぎってしまう漣。

そんな漣の手を親友の律が引っ張る。

律 「いくぜ!!!漣!!」

漣 「律……私……私……!!!!」

蓮 「ヤツがここに来るのも時間の問題だ！今は逃げることで
け……。」

ズウウウウウウンッ！！！！

蓮が漣をなだめようとしていた矢先に、D 14Aが高台の斜
面に着地してしまう。

クワガタの顎のような口の中央からイソギンチャクのような器
官を出し、3人を捕食しようと試みる。

ぎちゃああああ……

漣 「きゃあああああ！！嫌だあああああっ！！！！」

律 「漣っ！！すくんでる場合じゃないぞ！！」

へたりこむ漣の腕を引っ張ろうとする律。

蓮 「チキシヨウがつ！！喰うなら俺をくええええええ！！！！」

蓮が二人をかばうように立ちはだかる。迫る捕食器官。

律 「蓮！！あんた何バカなこと……！！」

蓮 「なーに、勇士郎のヤツが来てくれるさ！！それにこんな
所で死ぬならな、せめて二人を生かして死にてーよ！！」

律 「蓮……！！」

その時だった。漣の脳裏にクリスマスのサプライズライブの
ことがよぎった。お互いに勇気を分け合ったあの日の夜が。

漣（最後まで望みは捨てない・・・勇士郎君はきっと助けて
くれる・・・！！）

漣は叫んだ。

漣 「ゆ・・・勇士郎くうううううううううんっ！！」

ファイバード 『・・・おおおおおおおおおお
おおっ！！！！』

ガドオオオオオオオオオオオオオオオ！！！！

それに呼応するようにファイバードがタツクルしながらD 1
4 Aに突っ込んできた。

吹っ飛ばされるD 1 4 A。それに目もくれずに高台にいる漣
達に声をかけるファイバードこと勇士郎。

このシチュエーションはあたかも桜高での戦いの時のようだっ
た。

ファイバード 『3人とも無事か！！？』

漣 「ギリギリだったんだよ！！ちきしょおおお！！」

そう言いつつも何気に漣は嬉しそうであった。

律 「うああああ・・・マジで寿命縮まった!!」

一気に気が抜ける律。

漣 「勇士郎君・・・!!」

ホッとすると同時にファイバードに微笑む漣。

ファイバードの勇士郎もその表情を見てほっとする。クリスマス
のサプライズライブの時に見せたあの笑顔に似ていた。

ファイバード 「秋山さんは、その笑顔が一番似合ってると思
うよ・・・。」

漣 「え?!あ・・・う・・・。」

赤面し、言葉が詰まる漣。恥ずかしさ全開だ。律が漣の肩に腕
をまわしてからかう。

律 「だってさ、漣っ。ムギの知り合いのトコのバイトで特訓
した成果じゃないの?よかったな!。」

漣 「り、律!!」

律 「ライブで緊張するのを克服する為に、頑張ってたもんな
ー!」

蓮 「そうなのか?」

ファイバード 『秋山さん……。』

律 「ああ！漣は極度の恥ずかしがり屋でさ、その克服の為にバイトしてたのさ！そしたらこんな完璧な笑顔できるようになったんだ。」

漣 「ちよつと律！それ以上は言うなよ？！」

律 「ああ〜わかってるって！」

ファイバード 『だけど、去年行った桜高の文化祭のときから秋山さんはいい笑顔ができていた。』

漣 「え?!」

ファイバードのこの言葉に対しコシヨコシヨと律に振る漣。

漣 (もう、半分告つてると思ってもいーんでしょーか……
コレ。)

律 (さあ……それはどうだろ?)

現時点で律は勇士郎の想う人が漣だというのは、漣からのたびたびの相談により知っていた。

D 14A 「ギイイイイイイツ!!!!」

吹っ飛ばされていたD 14Aが叫び声を上げて起き上がる。
その声の方向へと首を向けるファイバード。

ジェイデッカーは申し訳なく感じ帰還を断ろうと思ったが、こ
こは要の厚意を受け入れた。

ジェイデッカー 『はっ！失礼します！！』

要 「あ、ちょっと待て！その前に聞きたいことがある。謎の
ロボットについてだ。」

ジェイデッカー 『その件でしたら彼の方が知っているはずで
す。どうやら先輩にあたるらしいんです。』

要 「彼？」

ジェイデッカー 『エクスカイザーですよ。』

通常モードへと変わったエクスカイザーと勇が和を家まで送り届
ける。

和 「今日はどうもありがとうございました。」

勇 「いいってことよ！とんだ日になっちまったが、二人とも
無事で何よりだ。」

エクスカイザー 『ああ。命あってこそそのものだからな。』

唯 「じゃあねー和ちゃん！」

和 「うん！また明日学校だね。ありがとう！エクスカイザー。」

エクスカイザー 「ああ！」

勇 「じゃ、帰って憂のメシでも食うかー！！」

唯 「おー！」

和の家から走り出すエクスカイザーを見送る和。

和 「ふふふ・・・エクスカイザーかあ・・・スゴいな・・・
唯ん家は。それにしても・・・勇さん、カッコよかったな・・・。」

マイトガインはすでに帰還し、ロボットモードでドック入りしていた。レッグパーツのオーバーホールの為だ。実はジェイデッカよりもマイトガインの脚の内部構造の方が深刻だった。

コックピット内でマイトガインと会話する舞人。

マイトガイン 「しばらくは休暇か・・・。」

舞人 「そうだな。これだけの巨大なパーツをオーバーホールすると日数がどうしてもかかるからな。」

マイトガイン 「その間にデストリアンが出現した場合はどうするんだ？ジエイデッカーも修理に入るそうだが……。」

舞人 「その時はファイバードとエクスカイザーに任せるさ。それに見させてもらったファイバードの戦いからいいヒントを得た！」

マイトガイン 「ヒント？それはなんだ？」

舞人 「新兵器の開発だ！剣の武装がモノを言うコトを感じさせられた！！」

マイトガイン 「剣か！！いい案かもしれん！！」

舞人 「明日にでも技術部に提案申請するさ！！」

勇士郎達も黄昏の中、帰路についていた。

今日は蓮がバイトの為、律を送り届けた後に漣と二人きりで帰宅していた。

漣の家は、律の近所故に歩く距離は知れていたが、勇士郎は少しでも長く漣という時間が欲しかった。

漣 「あ、あのさ、一昨年の桜高の文化祭来たんだよね？」

勇士郎 「あ、う、うん。一昨年、姉貴が最後の吹部だったか

ら見に行っただけどさ、そのとき一緒に軽音部の演奏も見て行っ
たんだ……。」

漣はある意味での戦慄を感じる。パンツ丸見え事件が脳裏を過
ぎる。話を逸らしてしまふ。

漣 「お、お姉さんいたんだ、勇士郎君……。」

勇士郎 「今はアーティスト目指して東京へ行ってるけどね。」

漣 「へえ……凄いなお姉さん。」

勇士郎 「秋山さんも凄いなと思うよ。アーティストになれるん
じゃないかな？」

漣 「え……そ、そんなことないって……。」

勇士郎 「秋山さん声もいいし、なんたってベースがウマイし
……。」

漣 「え……えっとそうかなあ……。」

恥ずかしがる漣。異性にこういわれると内心嬉しくて仕方がな
かった。

このままでは聞き出せない。パンツ丸見え事件の時に勇士郎が
いたのかがどうかが。

漣 「ね、ねえ……それで文化祭のライブ最後まで見ていっ
た？」

勇士郎 「えーと・・・確か途中で光のヤツから呼び出しあつて抜けちゃったんだよな。」

漣 「あ・・・そーなんだ・・・。」

勇士郎 「それがどうかしたの？」

漣 「ううん！なんでもない・・・。」

心底ほつとする漣。家まで送ってもらつと振り返つて最後に礼を言う。

漣 「きよ、今日はホント・・・ありがとう。また助けてくれて。」

勇士郎 「あ・・・いや、俺は守りたいものは何が何でも守り抜くつて決めてるからさ・・・。」

漣 「か・・・かこ、カッコよかつたよ！勇士郎君！じゃあ、またね！」

勇士郎 「あ、うん・・・。」

自分の言った言葉の恥ずかしさの余りに、急いで家に入つてしまつ漣。勇士郎はカッコイイと言われ嬉しさいっぱいになっていた。

勇士郎は狂喜の一声を叫ぶ。

勇士郎 「信じられねー。カッコイイって・・・よっしゃあ

あっ!!」

一方の漣もドア越しにドキドキしていた。

漣 「カツコイイって言っちゃった……!!」

ぎこちない恋心は黄昏の空へと溶け込んでいった。

つづく

次回予告

再び平穩が戻る桜ヶ丘。軽音部のいつもの放課後。要とのデートの約束に胸をはせるさわ子。だが、一方で漣にストーカーという影が迫る。それを知った勇士郎は即、漣の警備に出向く。ストーカーと対峙する勇士郎に、要が介入。二人の勇者が初の対面を果たす中、デストリアンは無情にも飛来する。勇士郎は要の前でファイバードとなる。

次回、新生太陽の勇者ファイバード・サーガ 第14話 「ストーカー・バスター」

恋が歪みに変わる事こそが愚かしきことか……。

第14話 「ストーカー・バスター」

昼下がりの桜高。軽音部の部室ではいつものようにメンバーがティータイムをしていた。

唯 「ふあー・・・あったかい。やっぱり部室はいいよー・・・」。

日の当たりがいいこの教室は実に居心地がいい空間だ。唯がへにゃーんと机にはりつく。

さわ子も幸せそうにミルクティーをすする。さわ子にとって素の自分が出せる限られた空間でもあるのだ。

さわ子 「はあ〜おちつくー」。

律 「ああー・・・なんかやることねーかなー」。

梓 「だったら練習しましょうよ・・・」。

律 「そう言いつつケーキ食っても説得力ないぜ？」

梓 「う・・・食べたらず練習するもん!ぶう〜」。

先輩達がのほほんと過ごし、後輩がバンド練習を催促する。いつもの軽音部の光景である。

傍らでは漣が歌詞作りに没頭していた。

漣 「うーん……こんな感じか……。」

紬 「どんな感じなの？」

紬が漣の作った歌詞を覗く。最近紬が作曲した歌、「ハニー・スウィート・ティータイム」の歌詞作りをしていたのだ。

紬 「……………」

漣 「もうちょっと変えたほうがいいかな……？」

紬がほわーっとなつてにこやかに答える。

紬 「素敵……これでいきましょう！私の曲のイメージとぴったり！」

漣 「そ、そうか？」

梓 「楽譜はもうできているんですか？」

そのやりとりを見ていた梓がはりきりだす。

紬 「ええ、もうできているわよ。」

梓 「じゃあ、早速やりましょうよ！」

漣 「そうだな。早速やろう！他にも新曲作ったしな。」

漣がそういつもの唯と律はいつものように駄々をこねる。

唯 「ええ〜眠いー。」

律 「紅茶もつと飲みたいー。」

梓 「先輩達!!！」

唯 「ひゃい!」

律 「しゃーねーやるかー。」

軽音部のグダグダ感は日常茶飯事だ。だが、彼女達が一度メロディーを奏できれば全てが結束することができるのだ。

それぞれが持ち場の位置につくと試しに音を出す。

律 「じゃーいくぞー。」

律の合図と共に演奏が始まった。だが、楽器のみでの練習の為、歌はまだない。

さわ子 「はあ〜・・・懐かしいな・・・。」

その光景を見ながらさわ子は現役時代の頃を思い出していた。

現役当時は桜高軽音部の黄金期ともいえる時代だった。

懐かしさに浸っているとメールの着信がさわ子のケータイに入

ってきた。

さわ子 「だれだろ・・・あ！誠人さん！」

思わず口に誠人の名を出してしまうさわ子。

それを聞きとった律が演奏をやめて問い詰める。

律 「誠人サン?! え!? 誰々?? 彼氏?!」

律を筆頭にメンバーが次々とさわ子に詰め寄る。

梓 「い、いつの間に・・・。」

唯 「さわちゃん先生おめでとう！」

紬 「ぜひ詳しく聞かせてください！」

漣 「おいおい！まだ彼氏とも言っていないうちからだな・・・。」

さわ子 「う・・・あなた達は練習してなさい！」

練習が終わっていつものように帰路に着くメンバー。

だが、漣はいつになく不安げな表情でいた。

律 「どうしたんだ？ 漣？」

漣 「実はな．．．ここ一ヶ月間ずっと後をつけられてるんだ．．．。」

律 「へ？！まさかストーカーってやつか？！でもなんで今まで言わなかったんだよ？」

漣 「だって．．．会話聞かれてたりしたら怖いし．．．いつもこの時間帯についてくるし。」

律が漣の背後を気にする。するとパーカーを着た怪しげな男が電柱の影からこちらを窺っているのを確認できた。気のせいかな薄ら笑いをしているようにも見える。

律 「マジでそんな感じの奴がこっちを見てる．．．。」

漣 「だろ？！家の近くまで来ると不思議と姿を消しているんだけど．．．。」

律 「ユーレイ？ だったり．．．！」

漣 「やめろよ！！」

その日の帰り、さわ子は要に食事を誘われて待ち合わせの場所へと赴いた。

さわ子が、県境付近の駅のターミナルで待ち合わせていると要がクルマでやってきた。

プツとホーンで合図する。

さわ子 「あ！来た！」

さわ子が助手席に乗り込むと、要は立川方面へと向かう。

要 「さわ子さん、待たせた？」

さわ子 「そんなことないわよ。私も来たばかりだから。」

要 「ならよかった。これからいくお店はうちの部署の近くなんだけど、結構美味しくて一押しなんだ。以前から行ってみたいくてね。」

さわ子 「そうなの？誘ってくれてありがとう。」

要 「こっちこそ。来てくれてありがとう。」

さわ子 「やっぱり警察の仕事は大変なの？」

要 「まあね。特にうちの部署は最近また現れ始めたデストリアンとの戦いで忙しかったからな。だが、他の部署とは違ってロボットの部下が残業の処理をしてくれるからこうして時間を作ることができた。」

さわ子 「へえ・・・それって以前学校が襲われた翌日に来ていたあのロボットですか？」

要 「ああ。あいつはショットレイバーっていう超AIを搭載しているロボットの一種だ。忠実に任務をこなしてくれる真面目な

いいヤツだ。」

さわ子 「超AI?」

要 「ロボットに搭載された自立思考回路のことさ。心を持っているロボットと想ってくれればいい。」

さわ子 「すごいなあ……。」

当事者のレイバーズは、彼ら専用の巨大な椅子に座って巨大なパソコンでデータ処理をしていた。

ショットレイバー 「またしても甚大な被害がでてしまったな。」

ガンレイバー 「ああ。せめてこれからはJトランスポーターのパイロット以外に自衛隊がもつと動いて欲しいものだぜ。」

ショットレイバー 「だが、かつてのC 01の事件でデスクリアン事件を軍から警察に委ねられている。」

ガンレイバー 「それってただ責任を警視庁に投げ渡したただけじゃないのか?」

ショットレイバー 「そうかもしれんが……。」

確かにガンレイバーいわく、防衛庁は一つの街を失わせてしまった代償を警視庁に譲渡し逃げたのだ。

だが、マスコミも民衆もわかりきっていた。故に当時はそれによって更なる批判を受けたのだ。

ガンレイバー 「ま・・・今とやかく言っても仕方ないか！」

勇士郎の自宅。漣とメールでやりとりしていた。

勇士郎 「え・・・マジかよ・・・。」

内容はやや深刻な内容だった。

「律以外誰にも言っただけ・・・私ストーリーにつけられているみたいなんだ（> <）今、部活の帰りで律といるんだけど、後ろの方から誰かついてくるんだよ。こわいよ（> <）もしよかつたら × 駅のところまで来て欲しい・・・。」

勇士郎 「いくしかねえっ！！！」

ストーリー。内容からしてほっとけない。すぐさまに勇士郎はチャリに乗って全力で駅に向かった。

勇士郎 「ファイバードが宇宙警備なら、俺自身はせめて秋山さんをストーリーから警備してやるぜ！！！」

そのときファイバードの意思が語りかけてきた。

ファイバード (勇士郎、ストーカーとはなんだ?)

勇士郎 (ファイバード! ストーカーってのは好きになった特定の人に付きまとう犯罪行為なんだ。)

ファイバード (人を好きになるのはいい事ではないのか?)

勇士郎 (行過ぎた恋の感情は時として人を歪ませてしまうこともあるんだ。最悪の場合、殺人事件に発展しかねない!)

ファイバード (殺人……この星の人々は何故同じ種族を殺すのだろうか……?!)

勇士郎 (それは人類の永遠の課題かもな……。)

ファイバード (……。)

メールを送信すると漣と律は歩き出す。同時に背後の人影も歩き出した。

律 「やっぱり本当にストーカーみたいだぞ……。」

漣 「ああ……。」

律 「私とわざと分かれてみようか? もしかしたら私かもしれないし……。」

漣 「ばか!! そんな無謀な事なんかできるか!!」

律 「だよな・・・とりあえず駅までいくか。」

漣 「もし律だったとしてもどうするつもりなんだ？」

律 「もちろん、返り討ち」

漣 「……………」

幸いにも今いる場所は車通りも多く、安全といえば安全だ。

駅で勇士郎と合流すると2人の家まで勇士郎が警備する形となる。

チャリを転がしながら漣と律にあわせて歩いていく勇士郎。

漣 「ホントにゴメンネ。急に呼び出しちゃって。」

勇士郎 「いや、全然かまわないって。こんなメールもらったらほっとけないよ。」

律 「やっぱこういう時って男子がいてくれると心強いよな。それになんたって火鳥君はファイバードだもんな!!」

勇士郎 「田井中さん、声大きいって。」

漣 「そうだぞ律!そのことは秘密なんだから!」

律 「はいはい……………」

だが、尚も背後の人影は追跡してきた。若干ふりむいて勇士郎

はその人影を睨む。

勇士郎 「……………」

すると場所をかまわず人影が不審行動に出る。

不審な男 「おおおおああああああ！ぼくのヒメをオオオオオオオ！！！」

漣 「えええ！??何!!?」

律 「ヤバイぞ!!」

既に男の手にはナイフが握られている。一気にヤバイ空気が流れる中、勇士郎が受けて立つ。

勇士郎 「きやがれ!!ストーカー野郎!!」

不審な男 「ああああああ!!」

不審な男はナイフを突き出して勇士郎に突っ込んでくる。かわせば彼女達に被害が渡る。

勇士郎は、男に向かって突っ込む。

勇士郎 「だりゃああああ!!」

バキヤアアアツ!!

不審な男 「ぐえええっ!!」

ファイバードの力を20%に止めてとび蹴りをストーカーにブチかます。

吹っ飛んで歩道をスライドしながら倒れこむ。

そこへ偶然にも現場に居合わせた要がクルマを止める。

要 「なんだ？こんな路上でケンカか？！すまない、さわ子さん！！ちよつと止める！！」

さわ子 「わかった・・・え？あれは？」

クルマを止めて駆けつける要。警視庁の警察手帳を出して勇士郎に迫る。

要 「警察だ！！こんなところで喧嘩をするな！！」

漣達が事情を説明した。

漣 「違います！！あの男に襲われそうなところを守ってもらったんです！！」

要 「あの男？！」

要が振り返ると男が再度叫びながらナイフを突き出して突っ込んでくる。

不審な男 「君が好きだったのにうらぎったなあああああ！！」

要が勇士郎達を下がらせる。警察として市民を守る要。

要 「君達は下がれ!!はあっ!!」

ガッ・・・ドオオオツ!!

不審な男 「がああああ・・・ひめえええ・・・」

鮮やかにストーカーの男を取り押さえる要。正にプロの成せる技だ。

要 「銃刀法違反、及び現行犯で逮捕する!!」

男に手錠をかけて身柄を拘束すると、すぐに桜ヶ丘管轄の警察署に連絡を取る要。

漣 「こわかったあ・・・。」

律 「はあ・・・気が抜けた・・・。」

勇士郎 「本当に危なかった!!駆けつけて正・・・。」

さわ子 「やっぱりあなたたちだったのね!!」

さわ子が駆けつける。

律 「さわちゃん?!何で?!」

漣 「どうしてこんなところぞ?」

さわ子 「それよりも何があったの?！」

漣 「それが……。」

漣が事情を説明しようとした矢先、勇士郎が走って駆け出し始め、漣達の前を横切っていく。

漣 「あ！勇士郎君!!！」

勇士郎 「逃げろ!!ここに隕石……デストリアンがくる!!！」

漣 「ええ?！」

律 「また?！」

さわ子 「?!！」

それどころではなかった。まさにココに来ようとしていたのだ。

要のところにも同様のスクランブル通信が入る。

要 「何だつて?!こんな時に!!よし!!戦闘はレイバースに一任する!!葉山もサポートを頼んだぞ!!今現在、現行犯で不審者を逮捕したところだ!!管轄の警察と合流するまで待機しなければならない!!！」

レイバース 『了解!!任務承ります!!』

葉山 「ういつす!! よつしゃ!」バギーを「トランスポーターに搭載するぜ!! お前らも乗るんだ!!」

ガンレイバー 「へいへい。」

葉山 「なんだよ、その返事は?!」

ショットレイバー 「隊長、後はお任せください! それではゆつくりとダイナーを……。」

要 「え?! ショットレイバー?」

いつの間にか気遣いをしてくれるようになったレイバーズの超AIに改めて驚愕する要。だが、ダイナータイムの前にやるべき任務がいくつか発生してしまった。

迫りくる隕石……そして例によって上空で爆発する。無数の破片が落下する。

ズガアアアアアアアアアッ!!

要 「くそっ!! なんてことだ!!!!」

さわ子 「きゃああああ?!」

身柄を拘束した状態で見舞われる惨事。事件が同時に重なってしまっ。

勇士郎が立ち止まって上を見上げる。既にデストリアンの巨体が落ちてこようとしていた。

要 「みんな逃げるんだ!! お前も来い!! いくら犯罪者とはいえ人間だ!! 死なせるわけにはいかない!!」

ストーリーカーの男を引っ張りながらさわ子達を誘導する。このとき、勇士郎がいないことに気づく。

要 「彼はいったいどこへ行ったんだ?！」

澪 「あ・・・警官さん・・・あの人は・・・。」

要 「いた!! 何をしているんだ!!? おおおい!! 逃げるおっ!!」

澪が説明しようとするが、その間に要の視線の中に勇士郎を捉えてしまう。

ズズズウウウウウウッ!!

D 15 「ガバババババアアアアッ!!」

三つの赤い眼、楕円形の頭部と牙の生えた裂けた口、何十本も枝分かれした触手のついた腕、ずんぐりとした下半身。また新たなデストリアンが襲来する。

澪 「勇士郎くううううん!!」

デストリアンの着地に完全に勇士郎は巻き込まれた。土煙が夥しく舞う。

要 「ああ……なんてことを……デストリアンめ！！」

その時だった。光を帯びた勇士郎が空中高く舞い上がった。D
15の頭を踏み台にして更に高く舞い上がる。

要 「な……！！？彼は一体！！？」

漣 「ああ……警察の人に見られた……！！」

律 「あちゃー……間が悪いって。」

さわ子 「なんなの?!あの子?!」

そして空中で光を撃ち放って叫ぶ。

勇士郎 「ファイアー……ジエエエエツツツ！！！」

光が飛んでいった先からファイアージェットが召喚され、D
15に突っ込んでいく。

ギョオオオオオ……ドオカアアアアツ！！

D 15 「ガバアアアアツ?!」

吹っ飛ばされるD 15。D 15を吹っ飛ばしたファイアー
ジェットがファイバードへと変形していく。それに呼応し、勇士郎
は光を再び帯び始める。

ファイバードに変形しきると道路へと着地する。

律 「火鳥君も腹くくったんだな……。」

さわ子 「あなた達が言ってた命の恩人て彼だったのね……。」

律 「まあね……だけど……。」

漣 「警察の人に見られちゃったんだよ。どうしよう……。」

さわ子は平気な顔で言う。

さわ子 「それなら心配ないわよ。彼の所属にも似たロボットがいるみたいだから。宇宙から来た謎のロボットのロボットがね。その辺は理解してくれると思うわ。」

漣 「そうなの？へえ……警察にもいたんだな……。」

律 「ていつかあれが……彼氏??」

さわ子 「さ、さあ!!早く非難するわよ!!」

要 「さわ子さん!!先に避難しててください!!」

さわ子 「はい!ほら!!2人とも行くわよ!!」

漣と律の腕をひばって非難しようとするさわ子。漣が振り返りつつ心配そうな眼差しでファイバードを見る。

漣 「勇士郎君……!!」

D 15 「ガバアアッ!!!」

バキヤカアアアンツ!!

腕を振り下ろしてムチのように攻撃するD 15。コンクリートが砕けて周囲に駐車されていた車両が破壊される。

更に横に振り、ムチ状の多重触手をファイバードにブチあてる。

ビュオツ……バキイイイイイツ!!

ファイバード 『ぐあああつ!!』

更に縦横無尽に腕を振って攻撃を加えてくる。連続で攻撃を受けてしまうファイバード。

バキヤアッ!!ドオカアアッ!!バキヤオオオンツ!!デ
イドオキヤアッ!!

ファイバード 『ぐおおおお!!』

更にそこから触手を伸ばしてファイバードを絡め取って縛り付ける。

ヒュオツ……ビシュルルルルウウ……ギ
キギキギギイイ……

ファイバード 『しまった……ぐああああ!!』

ギリギリとファイバードを締め付けるD 15。その時だった。

シュババババツ！！

突如として触手が切断された。駆けつけたエクスカイザーのス
パイクカッターが触手を切断したのだ。

エクスカイザー 『ファイバード！！』

ファイバード 『エクスカイザー先輩！！』

エクスカイザーが加勢に加わる。エクスカイザーは腕をかざし
てジェットブーメランを撃ち放つ。

エクスカイザー 『ジェットブーメラン！！』

ドシュドオドオシュウウウツ！！

ズガガガアアンツツ！！！！

ジェットブーメランが数発撃ち出され、D 15に直撃する。

エクスカイザー 『今だ！！ファイバード！！』

ファイバード 『はい！！フレームソード……チャアア
アアジアアアアップツ！！！！』

フレームソードを取り出すと同時にチャージアップするファイ
バード。フェニックスのオーラが発生し、燃え滾るフレームソード
を構えて突撃する。

エクスカイザー 『彼らは私の事を把握してくれている。フアイバードに関しても心配はいらない。』

要 「俺は君を一般市民としてではなく、1人の勇者と見なそう。勿論この事は警視總監に伝えなければならぬが、人の器が人知を超えているといつてもいい程の方だ。心配は要らない。」

エクスカイザー も勇士郎を見てうなずく。

勇士郎 「じゃあ俺は今まで通り……。」

要 「ああ。今まで通りにデストリアン駆逐に貢献してくれかまわない。俺はこの場を借りて礼を述べたい！！これまでのデストリアン駆逐に貢献してくれて感謝する！！これからも共に闘おう！！！」

勇士郎 「ええと……恐縮っす。」

思っても見ない展開に縮こまる勇士郎。すると後ろに居た漣がふと言った。

漣 「勇士郎君。」

勇士郎 「え？」

漣 「よかったね。」

勇士郎 「あ、ああ……うん。へへへ。」

微笑む漣がいつも以上に可愛く見えた。顔を赤くしながら要達

に失礼する勇士郎。

勇士郎 「そ、それじゃあ、俺、彼女達送ってかなきゃならぬ
いから今日はココで失礼します!!」

漣 「ありがとうございます。」

要 「ああ!! 気をつけてな。」

すると律が要の隣にいたさわ子をからかう。

律 「それじゃあ、さわちゃん、デートの続きがんばってー!
」!

さわ子 「!! ちょ、ちょっとおお!!」

顔が真っ赤になるさわ子。その場を後にする勇士郎達。何かと
騒がしい夜が終わり、サイレンが鳴り響く中、再び平穩を取り戻す。

だが、デストリアンの真意が明らかになっていない以上、真の
平穩は戻らない。

根本が根絶される日まで勇者達の闘いが終わることはない。

つづく

次回予告

開発途上のロボットの暴走を食い止めたレイバース。そこに居合わせた1人の少年がレイバースに心を躍らせる。いつの時代もロボットは少年に夢を与える存在なのか……。その後日、デストリアンとは別の新たな巨大生物が地下から姿を現す。

次回、新生太陽の勇者 ファイバード・サーガ 第15話 「少年とロボット」

その憧れはいつかは遠き日に・・・

ブロッケンが、路上の車両を踏み潰してビルを殴り砕く。この時点で不幸にもその場に居合わせた一般人が犠牲になっていく。

その行為はデストリアンさながらだった。

ガンレイバーが、ガンリボルバーを構えて応戦を開始する。

ガンレイバー 『このヤロウ!!止まれっつんだよ!!!』

ガアン!!ガアン!!ガアンツ!!

ドカン、ダカン、ダキヤアアンツ!!

ガンリボルバーの弾丸が表面で爆発しながらブロッケンのボデーに着弾する。

だが、動きは止まらない。

ガンレイバー 『しぶといヤロウだ!!チクシヨ!!!』

ブロッケンの側面上からショットレイバーがショットガンで射撃する。

ショットレイバー 『任せろ!!!』

ヴァスウウンツ!! ジャキ・・・ヴァスウウンツ!!

ヴォダギヤアツ、ヴァギヤガアツ!!

着弾時に爆煙が上がり、若干ブロッケンがふらつく。

その隙にブロッケンの頭部に照準を絞るガンレイバー。

ガンレイバー 「コイツは新開発の弾丸だ!!くらえ!!」

ガアンツ、ガアンツ!!

ドゴオン、ドガオンツ………ヴォバギヤンツ!!

着弾し、ブロッケンの頭部にめり込んだ弾丸が爆発。頭部から煙を上げてブロッケンが道路に倒れこんだ。メインのCPUが破壊され機能を停止したのだ。

ズウウン………

ガンレイバー 「ふう………手間とらせやがって………ある意味デストリアンより性質が悪いぜ!!」

ショットレイバー 「だが、我々も一歩間違えればこうなっていたのかもな………」

ガンレイバー 「ああ。俺たちは運が良かった………それだけだ。」

この戦闘を見ていた小学生の少年がいた。

少年 「わああ………めっちゃカッコイイッ!!スッゲー!!」

レイバーズの活躍が少年にはものすごくカッコよく映ったようだ。

少年は駆け足でレイバーズの許へと行くが、途中で警官に止められてしまう。

警官 「君っ！！ここは危険だ！！今すぐ下がりなさい！！」

少年 「ええ〜・・・ロボットが滅茶苦茶カツコよかったから見に來ただけなのにな〜。」

警官 「だめだよ！さ、早く行きなさい！！」

少年 「ちよつとくらい良いじゃん！！」

警官 「ダメなものはダメ！！」

少年と警官のやりとりをふと見るガンレイバー。なにやら少年がわーわー言っているようだ。

ガンレイバーはズシン、ズシンと少年と警官のところへと赴く。

ガンレイバー 『一体何があつたんだ？』

少年は見上げながら狂喜する。

少年 「うっわー！！カッチョイイツ！！」

警官 「この少年が下がれといっても言うコトを聞かなくて・・・。」

ガンレイバーは少年に注意を促す。

ガンレイバー 『君、だめだろ？ちゃんとお巡りさんの言う事聞かなきゃよ？』

少年は残念そうに応える。

少年 「だって、カツコよかったから……もつと近くに行きたかったんだ……。」

ガンレイバー 『ええ?! かつこいって、俺達の事か?!』

少年 「うん!! カツコよかったんだもん!!」

ガンレイバー 『いやあ……まいったなあ……。』

そこへショットレイバーと共に要がやってきた。

要 「どうしたんだ？ガンレイバー？」

ガンレイバー 『あ、隊長！実はっすね……。』

事情を聞いた要は話のないように笑いながら納得した。

要 「はははは！そういうことか！確かに解らなくもない。男の子なら誰だってそう思うだろ？」

警官 「まあ……そうですね……。」

ショットレイバー 『喜ばしい事でもあるな。』

要は少年の頭にポンと手を置き、柔らかく注意を促した。

要 「だが、やはり守るべき事は守るんだ。戦場はいつも危ない場所だ。市民が危ない目に会わないためにも我々が注意をしているんだよ。もし、このレイバースと共に闘いたいなら、まずは警察官を目指すんだ。」

少年 「うん！わかったよ、警察のお兄さん！！」

少年は帰宅すると、その話ばかりを口にしてはしゃいでいた。

少年 「それで凄くカッコイーんだよ！！レイバースが！！俺もいつか警察官になる！！」

少年の父 「なら、もっと勉強しなきゃな。警察官になるのは大変だぞ。」

少年 「じゃあ、俺、もっと勉強がんばるぜ！！」

律 「ただいまー。」

父 「おー、お帰り。」

律 「勝汰、あんた何さつきから騒いでんの？」

律が帰宅し居間に入ってきた。実はここは律の家で、少年は勝

汰という律の8コ下の二人目の弟だった。

勝汰 「ねーちゃん、聞いてよ実はさ……。」

一部始終を聞かされた津は、ついこの前のストーカー事件のことを話題に出した。

律 「それでな、その要って人が一瞬でバババツてそいつを取り押さえちゃったわけ！ちなみにその要って言う警察のお兄さん、私の部活の顧問の先生と付き合ってる（実際はその手前）みたいだぜ！」

それを聞いた勝汰は、更にはしゃいだ。

勝汰 「マジで?!ねーちゃんすっげー!!」

律 「別に私が凄いわけじゃないんだけどナ……。」

律はいつそのことファイバードやマイトガン、エクスカイザーとも繋がりがある事を喋ろうと思ったが、さらにやかましくなると思っただけであえて言うのをやめた。

勝汰 「レイバーズヤツホー!!」

翌日、律はいつもの放課後を過ごしながらその話題を出してデイトタイムに勤しむ。

律 「……………って言うわけ……………ズ……………にがつ！」

ズツとロイヤルティーを飲む律。苦めだったようだ。

さわ子はミルクティーを飲みながら答える。

さわ子 「なるほどね……………やっぱり男の子はそういうのが好だからねえ。」

律 「まー、女の私もそういうの結構好きなほうなんだけどね……………で、それからというもの『俺は警察になってレイバースと一緒に闘うんだー!!』ってうるさくてうるさくて……………」

さわ子 「くすくす。カワイイ元気な弟さんでいいじゃないの。」

律 「ところで話が変わるけどさ、さわちゃんは要さんとどんな感じなの？」

さわ子 「な、何を突然?!」

唯 「気になる〜。」

紬 「私、スゴク知りたいです！」

唯と紬が興味津々になってズイツと近寄る。梓も知りたい視線をさわ子に浴びせている。

さわ子 「う……………」

漣も便乗するように拍車をかける。

漣 「あ……私も気に成るな……。」

メンバーに包囲網をしかれるさわ子。もはや答えるしかない。

さわ子 「……まあ、いい感じかな？また今度デートするんだけど……まだ付き合う前の段階のデートなの……。」

律 「まだ付き合ってたんだ？」

漣 「私はもう付き合っているかと思った！」

さわ子 「物事には順序つてものが必要よ？あせりは禁物！」

漣 「でも、私はあの先生にはぴったりだともうよ。警察官ということもあってなんかいい感じの人だったし……。」

梓 「先輩達二人はその人のことを知っているんですか？」

梓の問いにこの前のストーカー事件の話題が浮かぶ。

漣 「この前、私がストーカーに狙われていたところを勇士郎君と一緒に助けてもらったんだ。」

律 「カッコよかったんだぜー？一瞬でストーカー野郎をシユバツて取り押さえたんだ。」

梓 「そんなことがあったんですか！でもストーカーって……
・なんか恐いです。」

澪もその時の記憶が甦るが、今はストーカーの恐怖感よりも勇士郎の勇敢さの方が印象が勝っていた。

さわ子がそれに関して、要から聞いた取調べの後日談を話す。

さわ子 「要さんから聞いた話なんだけど、そのストーカーはずっと澪ちゃんの事を好きだったみたいで、気づいたらストーカーになっていたらしいのよ。」

梓 「よく聞く典型的なストーカーですね。」

その話の中、紬が新しいケーキをみんなに配る。

紬 「はい、みなさんどうぞ。」

唯 「わーい。ケーキ ケーキ」

唯は話よりもケーキに夢中のようにだ。

さわ子 「まあ……おいしそうっ！しあわせー……。」

律 「で？話途中だぜ？」

ケーキを食べながら続きを話し出すさわ子。

さわ子 「それでね、好きになるに連れて『あのコは俺の姫』っていう思考回路になっていって、自分の頭の中で物凄く独占して思っていたんだって。だけど、接点もないし、歳も歳で結局報わ

れないと思いつめた結果、『手に入らないならいつそ襲って心中しよう』って考えて、約一ヶ月間尾行しながら襲うタイミングを見計らおうとしていた……。それで事件に至ったってわけなのよ。」

細 「まあ……。怖いわ。」

律 「こわー……。」

それを聞いてしまった澁は改めて恐怖を覚え、目を白くして震えてしまう。

澁 「……………」

そのとき、梓が切り出す。

梓 「でも、ポジティブに言い換えれば、それだけ澁先輩が魅力的な人に見えるんじゃないですか？」

澁 「え?!そ、そうなのかな?」

梓の言葉に恥ずかしげに戸惑う澁に梓がにこやかに答えた。

梓 「そうですね。そういう点はもっと自信持ってもいいと思いますよ?。」

律 「梓、何ゴマ揃ってるんだ?」

律が割り込むように梓に口を挟む。梓は否定しながら自分の意見言う。

梓 「別にゴマ搦ってる訳じゃないですよ！私が素直に感じて
る事言っただけです！！」

律 「澪からは何もでないぜ？」

梓 「ぷうー！」

澪 「さ……気を取り直して、そろそろ新曲の練習するぞ！」

梓 「はい！やりましょう！！」

律 「うへーい……。」

その日の帰り道。澪と律、梓で帰路を歩く。

歩を進めながら律が寄り道を提案する。

律 「そういえばさ、もうすぐ修学旅行じゃん？ちょっと寄り
道してさ、服買ってかない？」

澪 「急に何を言い出すと思えば……今度の土曜日にすれば
いいだろう？」

律 「いーじゃんかー、たまにの寄り道くらい。」

梓 「私も……ちょっとだけ寄り道したいです。」

珍しく律と意見が合致する梓。梓がそう言い出したためか漣も寄り道することにした。

漣 「そうか？まあ、たまにならいいか。」

街へと赴く漣と律。街の路上で偶然にもゲーセン帰りの勝汰を見かける。

漣 「ん？律、あれ勝汰君じゃないか？」

律 「あ！ホントだ。」

梓 「弟さんですか？」

漣 「ああ。律の8コ下の弟だ。」

梓 「結構離れてるんですね。」

律 「もう1人聡っていう上の弟もいるけどな。」

梓 「三人姉弟……。」

こちらに気づいた勝汰が向かってくる。

勝汰 「ねーちゃん！」

律 「勝汰！何やってるんだ？」

勝汰 「何ってゲーセン行ってたんだ。まあ今から帰るところだからさ……。」

ゴオオオオオオンッ！！！！

その時、地面を突き破って2体の肌色の巨大生物が姿を現した。蟻のようだが表面がスベスベしており、足も4本で頭も蛇のような形状の頭をしている。だが、目はカタツムリのようになっている。

謎の生物 「クカカカカッ！！」

律 「またデストリアンってやつか？！」

漣 「でも、隕石なんて落ちてきてないぞ！！」

梓 「なんかキモチワルイ・・・！！」

勝汰 「うわーすげー・・・。」

律 「関心してる場合か！！逃げるぞ！！」

勝汰の手を引っ張って逃げる律。漣と梓も続くように逃げる。その後方で巨大生物に喰われていく人々。

顎を開閉させながら人々を噛み砕く。別の箇所からは大型の個体が出現する。

この事件は直ぐにM・P・D・BRAVEに通報が行き届き、出撃命令が出される。

Jトランスポーターに搭載されたジェイデッカーと専用輸送機に搭載されたレイバースが現場へと向かう。

要 「今回の巨大生物は、デストリアンとは異なるものだ！！
なんだかの生物兵器の可能性が高い！！現在、桜ヶ丘北の街で3体
が出現した！！レイバースは降下後、小型の2体に集中してかかれ
！！ジエイデッカーは大型を駆逐するんだ！！」

ジエイデッカー&レイバース 「了解！！」

霧島 「レイバース専用機のハッチを開放！」

鹿島 「了解。ハッチ開放！」

鹿島がリモート・コントロールで、専用輸送機のハッチをオープンさせた。

ガンレイバー 「降下するぜ！！」

ショットレイバー 「降下開始！！」

レイバースが現場付近で降下を開始する。パラシュートユニットを作動させて道路にレイバースが着陸し戦闘体制に入った。

吉崎 「レイバース、降下及び着陸確認！これより戦闘に入ります！！」

続いてJトランスポーターのハッチがオープンし、Jローダーが投下される。

霧島 「Jローダー、投下！！」

鹿島 「了解。ハッチオープン！Jローダー、投下！！」

Jローダーが投下され、空中でジエイデッカーに変形する。

ジエイデッカー 「ブレイブアップ！！ジエイツデッカー！！！！」

この瞬間を勝汰が見ていた。

勝汰 「うあああ！！変形した・・・あああ！！ジエイデッカーだ！！スゲー！！スゲー！！」

はしゃぐ勝汰を律が引っ張る。

律 「わかったから早くしろ！！」

鹿島 「Jバスター、投下します！！」

ジエイデッカーは、修復が完了したJバスターを受け取り、大型の個体へと向かう。

そしてJトランスポーターは近隣の中学のグラウンドに着陸する。

葉山 「Jバギー、出します！！」

そこから現場に向かってJバギーが走り出す。走るJバギーの中でオペレーターが開始される。

吉崎 「ジエイデッカー、大型の個体へと接近！Jバスターア

クタイプー!!」

M・P・D・BRAVEの戦闘が始まる。再びバトルフィールドと化す桜ヶ丘。

ジェイデッカー 「あれか!生体反応分析……確かに生体パターンがデストリアンとは違う。だが、人々を襲う忌まわしい存在に変わりはない!!ん……!!?」

その時、ジェイデッカーは、俄かに人間と酷似した生体パターンを読み取った。だが、あからさまに人間ではない為、似たパターンなのだろうと自己判断する。

ジェイデッカー 「まさかな……生体パターンが似ているだけだろう。」

Jバスターを構えるジェイデッカー。銃口が大型の謎の生物に向けられ、銃口から火を吹く。

ディギンツ!!ディギンツ!!ディギンツ!!

ディギヤガ、ディキュア、ズキュカアアッ!!!

大型の謎の生物 「キュカカカカアアッ!!!」

ホバリングしながら、ゴリ押し戦法で大型の謎の生物の体の随所にJバスターを撃ちこんでいく。

ディギンツ!!ディギン!!ディギン!!ディギンツ!!

ズン、ズン、ズズウウンツッ！！

大型の謎の生物 「コカカカアアッ！！」

蛇のような口を大きく開口させ、口から黄色い液体を吐き出す。

ビュッ！！

着弾した建造物が溶けはじめ。案の定それは硫酸系の攻撃だった。

だが、これまでの戦闘でデータによりこの攻撃パターンはジェイデッカーには通用しなかった。

ビュバツ！！ ビュドツ！！

ジェイデッカー 「中らん！！こういう攻撃には慣れてる！

」！

照準を頭部に絞り、ジェイデッカーは「バスター」を撃つ。

デイギンツッ！！デイギンツッ！！デイギンツッ！！

ドオドオドオゴオオオンツッ！！

大型の謎の生物 「クキヤオオオオ！！」

一方レイバースは、最初に姿を見せた個体と対峙する。ビルの陰からスツと身を出して謎の生物にガンリボルバーを発砲するガンレイバー。

ガンレイバー 『食らいな!!』

ガアン、ガアン、ガアアアッ!!

ドオッドオッドオオオッ!!

謎の生物 A 「キュアアアアッ!!」

ショットレイバーもビルの陰から姿を見せる。2体目に向かって新装備のリニアランチャーを撃つ。

弾丸が直線軸上に高速で撃ち出されるリニアガンだ。

ショットレイバー 『撃ち砕くっ!!』

ジャキ・・・ディシュガンッ!! ディシュガンッ!!

ズギヤゴオンッ!! スキヤドオゴオオッ!!

謎の生物 「カアアアア・・・!!」

リニアガンの弾丸が謎の生物の体を粉碎。謎の生物は痙攣しながら息絶える。

もう一体にガンレイバーが、粉碎弾を装填したガンリボルバーを撃つ。

ガンレイバー 『あばよ、化けモン!!』

ガアアアアンツ！！

ヴァチャンツ！！

グチャツとなつて表面の皮膚が陥没する。そしてさらに放った弾丸が内部で爆発し、木端微塵となる。

ヴォヴァアアンツ！！

吉崎 「レイバース、目標駆逐！」

要 「よし！そのままジエイデツカーの援護に回れ！！」

レイバース 『了解！！』

ジエイデツカーが戦闘をしているポイントにレイバースが向かう。

ジエイデツカーは優勢と思われたが一変する。

巨大なジャガイモのような腹の上部から二門の生物的な砲身が姿を現す。すると発光弾状のエネルギー弾を連発しながら発射し、ジエイデツカーに撃つ。

ディギヤギヤギヤギヤンツ！！ ディギヤギヤギヤギヤンツ！！

ドオドオドオドオオオオンツ！！！！

ジエイデツカー 『ぐおおおおー！！』

ビルに激突しながら落下するジェイデッカー。

吉崎 「ジェイデッカー被弾！！損傷率25%！！」バスターは無傷です！！」

要 「一旦離脱して体制を整える！！」

ディギャギャギャギャンツ！！

尚もジェイデッカーを狙い撃つ大型の謎の生物。

ジェイデッカー 「くっ！！ダメです！！離脱できる状態では・・・ぐはっ！！油断した！！まさかこのような武装をしているとは！！！！」

要 「レイバーズは？」

吉崎 「直ぐに合流できる位置にいます！！」

レイバーズ 「任せろ！！！！」

駆けつけたレイバーズが、大型の謎の生物の側面へと発砲する。

ディギャガンツ！！ ガン、ガン、ガアンツ！！ ディ
ドオガアアアンツ！！

ズドオドオドオドガゴオオオツツ！！

大型の謎の生物 「カアアアアア？！！」

ジエイデッカー 『移行確認!!』

照準を大型の謎の生物の頭部へと絞る。

ジエイデッカー 『Jバスター・グレネード……シュー
トッ!!』

キュイイ……ディシュツガアアアアアアアアッ
!!!!

ズキュドオガグオオオオオオオオオオオッ!!!

高速で撃ちだされたエネルギーグレネードが、頭部を粉碎しながら身体を爆砕させた。

ジエイデッカー 『目標駆逐!! 戦闘終了、通常モードへ移行
する!!』

吉崎 「目標駆逐完了。戦闘終了後、事後処理任務に移行しま
す。」

葉山 「一体なんだったんだ? あれ?」

吉崎 「わかんないわよ。デストリアンじゃない事は確かみた
い。」

葉山 「じゃあ、怪獣?」

吉崎 「怪獣って……あんだね……そんな事言ったらデス
トリアンも怪獣の一種だと思うけど……。」

葉山 「おお！確かに。」

吉崎 「ばか！！」

黄昏にそびえるジェイデッカーとレイバーズ。

ガンレイバー 『結局何モノだった？あの生物は？』

ジェイデッカー 『解らない。今までのデータに該当しない、デストリアン以外の生物だ。隊長いわくなんだかの生物兵器の可能性も否めない。』

ショットレイバー 『つまり、別の敵……しかもバックにいるのは人間……ということか？』

ジェイデッカー 『新たな敵が出現したということだ。これからは奴らとも闘っていく事となるだろう。』

彼らの活躍を見ていた勝汰はますます彼らに魅了された。

勝汰 「うっひゃああジェイデッカー、初めて見たあ！！マジかっけー！！そして強ええ！！！！ビーム最高！！！！」

律 「落ち着け勝汰！！もう帰るぜ！！」

漣 「服買うつもりがとんだ災難になったな……。」

律 「全くだぜ……ま、勝汰にとっては大スペクタクルなひと時になったみたいけどな。」

梓 「凄い喜んでますね。」

勝汰は、夕日に雄々しくそびえる勇者達を満面の笑みで見つめている。

勝汰にとっては、いかなる危険に遭っても彼らの存在が恐怖を凌駕していた。

勝汰 「俺、絶対警察官になるー！」

律 「あー、もう解ったから帰るぞー！」

漣 「服は？」

律 「土曜にしよう？なんか疲れた……。」

漣 「お前、自分から言い出してそれはないだろー。」

梓 「結局災難に遭いに行っただけじゃないですか！ぷうー！」

律 「ああーわかった、わかった、カフェ寄ってくださいー！カフェッー！」

勝汰 「ジエイデツカアアッー！！！」

律 「落ち着けてのー！」

つづく

次回予告

桜高三年生達は修学旅行を向かえ京都に出発した。一方、舞人も新兵器、「動輪剣」の開発協力を得る為、京都技研の本社へと出張する。修学旅行を愉しむ軽音部メンバーと和。そんな中、京都技研の関連会社にあったブロッケン4機が突如暴走を開始する。京都府内を破壊して廻るブロッケン。これを阻止すべくマイトガインが出撃する。

次回、新生太陽の勇者ファイバード・サーガ 第16話 「嵐を呼ぶ修学旅行」

京都の街に嵐が吹き荒れる。

第16話 「嵐を呼ぶ修学旅行」

警視庁に呼ばれたM・P・D・BRAVEのメンバーが、冴島警視總監と先月に出現した謎の生物についての特別会議をしていた。

冴島 「今回現れた謎の生物は、デストリアンのような地球外のモノではないことが科警研の分析によって正式に判明した。いずれにせよ自然界に発生する事は皆無な生物であることは間違いないようだ。」

葉山 「隕石が墜ちて、あるいは空中爆発して出現するデストリアンに対して、なんの前触れなく現れましたからね。」

吉崎 「けれども人を食べる点は同じよ・・・やつらは。」

要 「レイバースだけでも斃す事ができた。相手がデストリアンの時ではそうはいかなかったが。」

冴島は話を進める。

冴島 「今のところ、謎の生物の生態組織の情報しかなく、誰が何のために放ったのか皆目検討がつかないのが現状だ。だが、このような事件が起こったからには再度このような事件に見舞われる事になる可能性も否めない。そこで、これらに対しM・P・D・BRAVEは旋風寺コンツェルンと連携して対処する方針を採る。」

要 「それで一つ質問が。」

冴島 「なにかね？」

要 「謎の生物はデストリアンとの識別の為に呼称名が必要と思われませんが、まだ決まっていないのですか？」

冴島 「むう……現時点、決まっていない。」

葉山 「正体不明ですから……アンノウンはどうです？」

冴島 「そ、それでは仮面 イダーア トに出てきた怪物の呼称名とかぶってしまう!!」

葉山 (なんじゃそりゃああ?!)

要&吉崎 (……………)

警視總監の奇抜な発言にメンバーは垂全をくらってたじろいてしまう。

悩んだ挙句に冴島が強引に決めた。

冴島 「……………むう……………ようしっ!!ダイードのヘテ ダンにちなんで、バイオダインに決定!!!!」

一同 (いいんだろうか……………???)

旋風寺コンツェルンの社長室では、舞人が仕事に打ち込みながら
細と電話で会話していた。

ケータイを片手に、もう片方の手でノートパソコンのキーボードを打つ。

舞人 「そうか、明日修学旅行なんだ。」

細 「うん。私達の学校は京都に行くことになってるの。」

舞人 「修学旅行かあ……俺も高校生だったら来年行けていたのにな……京都か……俺も近々仕事で京都に出向くんだけ。」

細 「（そっか……舞人君、まだ17歳なのよね。）向こうで会えるといいなあ。」

舞人 「そうだね……しばらく会えていなかったから俺も会いたい。ゴメン、細さん。」

細 「いいのよ。舞人君が大変なのは私もわかってるから。なんたって嵐を呼ぶ勇者だから……。」

舞人 「細さん……。」

細は、舞人と旧知の仲だけあり、舞人の多忙さは十分わかっていた。

紬 「今度また会えるとき、食事にでもいこ？」

舞人が言おうとした言葉を紬が先に言う。一つ上のお姉さんとしてのリードか。

舞人 「……ありがとう、紬さん。今の言葉で俺は更に熱くなれた！！君の存在そのものが俺の力だっ！！！！」

紬 「私も舞人君の事、好きだから……。」

舞人 「うおおおおおおお！！！！」

神業のような速さでキーボードを打ち始める舞人。瞬く間に仕事が処理されていく。

紬のケータイ越しに舞人の熱い叫び声が響いてくる。

紬 「あ、あれ？舞人君？もしもし……。」

舞人 「紬さんっ！！好きだあああああ！！！！」

好きな人に好きといわれ、燃える舞人。二人は交際中のため至極当然の言葉ではあるのだが……。

紬は舞人が照れ隠して叫んでいるのは見抜ききっていた。

紬 「もう……照れちゃって……カワイイなあ……。」

翌日。桜ヶ丘高校の3年生一同の修学旅行の日。

桜高の3年生の生徒・職員をのせて線路を走る700系新幹線。マイトガインの左肩にあたる、のぞみの後継車両だ。JR東海の路線と平行して、もう一つの路線がはしっているが、この線路は旋風寺コンツェルンの車両が走る線路である。

車両内の座席では、唯と律が中ではしゃぐ。

律 「やつほー！！修・学・旅・行っ！！」

唯 「オーイエーイツッ！！」

座席の上でピョンピョン跳ねる2人を漑と和が注意する。

漑 「あんまりはしゃぐなよな！みっともない！！」

和 「唯も少しは落ち着きなさい……。」

紬 「ふふふふ」

律 「おい！！富士山だ！！富士山！！でっけーなあ！！」

唯 「本当だー！！おっきー！！あ……。」

スナック菓子がボロボロと床に落っこちてしまっ。

和 「もう……しょうがないわねえ……。」

漣 「お前らは小学生か!! はあゝ…… やっぱりこの二人の面倒は大変だな。頑張ろっつ和!」

和 「そうね…… お互い頑張りましょ。」

窓に張り付く唯が、線路の向こう側にも別の線路があることに気づく。

唯 「あれえゝ? 向こうにも線路が通ってるよゝ?」

律 「あれは旋風寺コン何とかの路線じゃないか? 結構有名じゃないん?」

唯 「あ、そなの? 知らなかった。」

律 「テレビにも出てるじゃん……ん?! なんだあれ!???」

旋風寺コンツェルンの路線上に明らかに不自然な列車が走っているのを律が確認する。

律 「うわっ?!?! その後ろには空飛ぶ新幹線が?!?!」

紬もふと窓を覗き込む。するとそこには、700系新幹線と平行的に走るロコモライザーの姿があった。ロコモライザーに追従するように一定の間隔を保ちながら引退寸前の、のぞみと引退したつばさが上空を飛んでいる。

紬 「あれは……ロコモライザーだわ!」

律 「え？」

唯 「なにそれ？」

紬 「マイトガインになる大きな列車の名前よ。その後ろから来ているのがガインライナーとウイングライナー。マイトガインの両腕に変形するの。」

唯 「ムギちゃん詳しいー!!」

律 「そっか。ムギ、前にも言ってたもんナ。旋風寺と昔から仲いいって。」

紬 「うふふふ（そっか、昨日舞人君、京都に行くって言ってたものね。）。」

ロコモライザーのコックピット内。コントロールレバーを握りながら、線路を突き進んでいくメインモニター映像を見ながらマイトガインと会話する舞人。

舞人 「オーバーホールも終わって合体機構も増設させた。脚の調子はどうだ？強化チューニングパーツを組み込んだらしいが……。」

マイトガイン 「すこぶる快調だ！問題はない！しかし、今までの変形機構でよかつたんじゃないのか？機構効率もよかつたしな……。」

舞人 「あえて合体機構を設けたのさ！ロボットは合体した方

がカツコイイだろ?!」

マイトガイン 「そういう問題なのか・・・?!」

舞人 「まあな!・・・仕事の話に変わるが、今日は、京都技研との新兵器の開発の話を付けに行く。この前に俺が提案したアレについてだ。」

マイトガイン 「だからといって私で出向いてよかったのか? リムジンや専用ヘリでもよかつたんじゃないのか? S Pも就くようだしな。」

舞人 「部下達とは現地合流するよう話してある。いつ何があるかわからない。だからこうして国内出張に出向く際、ロコモライザーとライナーズで行く事にしたんだ。」

マイトガイン 「なるほどな。確かにな。最近、開発中のロボットが暴走したり、デストリアン以外の生物が確認されたりしている。どこでなにが起こるかわからないな。」

舞人 「ああ。」

マイトガイン 「ところで舞人。」

舞人 「なんだ?」

マイトガイン 「隣のJ R路線の車両に幼嬢が乗っているぞ。サイドモニターカメラで確認した。」

舞人 「なに?!」

サイドモニターを見る舞人。ズームアップさせると、確かにこちらを見ている紬が確認できた。

舞人 「っ、つくづく俺は運命に味方されているようだ……」

舞人に気合が自動的に入り、ロコモライザーとリモートコントロールのライナーズを加速させる。

舞人 「目指すは京都!!!いざゆかん!!!ロコモライザー、スピードMAX!!!!」

ギョオオオオツツ!!

マイトガイン 「おい!舞人!!!のぼせすぎだ!!!!」

物凄い加速力で700系のぞみを抜き去っていくロコモライザー。律が目玉をでかくして驚愕する。

律 「はやつ!!!!」

唯 「すごい……新幹線より速いんだ……あ、後ろの飛んでる新幹線も一緒に動いた。」

律 「はやつ!!!!」

紬 (もう、のぼせやさん……)

車両越しに紬はなぜか舞人の深層心理を見抜く。以心伝心とも

いづべきか。

一行は無事に京都に着く。班別行動で澁たちは金閣寺を訪れていた。

澁 「すげー……金色に輝いてるぞ。」

唯 「あれって本当の金なのかな？」

律 「そうみたいだぜ。ちょっとくらいはがしてもバレナイかもな！」

紬 「でも今あるのは新しく立てられたものらしいわよ。」

律 「へエー……。」

和が、近くにいた人にカメラを渡し、写真を撮るように頼む。

和 「あ、すみません。ちょっと撮ってもらっていいですか？」

通行人 「あ、いいですよ。」

和 「みんな、写真撮るよ！」

5人はピースしながら写真を撮ってもらう。それから近隣の各名所を回り、清水寺に到着する。

清水の舞台といわれる有名な清水寺の本堂から唯と律が見下ろす。

律 「うわあああ……たけええ……」

唯 「ふおおおお!!高いい!!すいこまれそうっ!!」

和 「そんなに身を乗り出したら本当に落ちるわよ!!やめなさい!!」

唯 「ふいいい……」

母親のような口調で唯の首根っこを引っ張る和。

紬 「そういえば!ここのお寺の中に縁結びの神社があるらしいのよ。いってみない?」

漣 「そうだな。いってみるか!」

紬が、清水寺の地主神社の事を話す。縁結びの神社として知られている有名な神社だ。舞人と恋愛中の紬や、勇士郎にほのかな恋心を懐いている漣にとっては興味がわく名所だ。

律が漣に付け入ってからかう。

律 「おお……勇士郎くんですか?漣さん?」

漣 「う、うるさいな!!」

ゴン!

律にお約束のゲンコツをしたところで、一行が地主神社へと向かった。

桜工運動場。体育の授業中、腹筋する俊の足を抑えていた勇士郎が、俊の上半体が起きたタイミングでクシヤミをブチかます。

勇士郎 「はつくしよいいいい!!!!」

俊 「うわ!!きたねっ!!!!」

二つの守護石があり、目を閉じたまま片方の石から反対側の石へと歩くというものだ。無事に一回で歩ききれば恋が成就するといわれている。二度三度となると成就まで長引いてしまい、人のアドバイスを受けて辿り着くと、人の助けによって恋が成就するといわれている。

言い出した紬が先に歩き始める。目を瞑ったまま無事に難なく歩ききる事ができた。

紬 「やった!次は、唯ちゃん!」

唯 「私はいいよ。もうギー太と結ばれてるもん!」

澪&律 (かわいいそうに・・・光君・・・)

勇士郎から光の恋話を相談されてた2人にとつていたたまれなさが残る。

体育の授業中、腹筋中の蓮の足を押さえていた光が、蓮が上体

を起こしたタイミングでクシヤミをかます。

光 「ヴァクシイイツツ!!」

蓮 「ぐぎゃあ!!?きたねーな!!顔にぶつかかったじゃねーか!!バカヤロウ!!」

光 「あゝ・・・わりー!わりー!」

続いて和が続く。

唯 「あれ?和ちゃん好きな人いるの?」

和 「ま、まあね・・・。」

唯 「ええ?!初耳だよお!!」

和 「とにかく集中したいから・・・。」

そう言って歩き出す和。二度目に歩いて成功する和。実は、勇に助けられて以降、彼に対してほのかな恋心を懐くようになっていたのだ。

和 「なんとか二度目で渡りきれたよ。」

唯 「ねー、教えてよう。」

和 「ごとういう話はまた寝る時にね。その時に話すから。」

続いて遷かと思われたが、律が続く。実は蓮に対してなんと口

で説明したらいいのかわからない想いを懐いていた。

漣 「え！？律が?!」

律が顔を赤くしながら恋を否定する。

律 「て、適当にやってみただけだからな！」

紬 「律ちゃん……。」

うつとりする紬に本心を見抜かれつつ、二度三度と失敗し、四度目で成功する。

律 「さあ……漣だぜ。」

漣 「蓮君だな……律？」

律 「!!!？」

桜工運動場。

蓮 「バシユラアアッ!!!」

光 「ぐはあああ!!!お前もじゃねーか!!!」

蓮 「これでアイコだっ！」

そして漣が歩こうとしたその時、近くで轟音が響く。

グオオオオオソッ!!!

漣 「何?!」

律 「ひよっとしてまたか?!」

和 「なんだかよくわかんないけど、とりあえず……あれは何?!」

和が指を指した方向には赤いロボットが街を破壊しながら進撃していた。

それは最近になって暴走問題を起こしたブロッケンだった。漣たちは後一步のところまで非難を始める。

漣 「あとちょっとだったのに……。」

和 「漣!逃げよう!!」

漣 「……うん!」

絢が走りながら舞人に電話をかける。

絢 「もしもし?!舞人君!!大変なの!!」

舞人 「ああ!!たった今出張先で連絡が入った!!今すぐいくから待っててくれ!!」

旋風寺社員 「舞人さん!!現地警察に話をしたら、マイトガインの出勤を要請してきました!!」

舞人 「そうか！ーじゃあね、紬さん！ー俺はこれから嵐を起
こしにいくぜ！ー」

紬 「あ……。」

律 「こんな時に誰と話しているんだ？」

紬 「私のナイト様よ。」

律 「はあ？！ー」

舞人は、京都技研本社ビルから出て、腕に付けた小型の通信機
でロコモライザーを呼び出す。

舞人 「ロコモライザー！ー」

マイトガイン 『む！！緊急通信受信！！』

京都駅の特別レーンに停泊していたロコモライザーが街に向か
って飛び立つ。連動して、ライナースもロコモライザーについてい
くように飛び立っていく。

京都技研の社長が出撃間近の舞人を引き止める。

京都技研社長 「舞人さん！！これはわが社の一大事です！！
つい先程、提携先からクレーム処理の協力の為に預かっていたロボ
ット、ブロッケンが、府内のわが社の各工場にて突如暴走をはじめ
たようなのです！！」

舞人 「なんだって？！ー」

京都技研社長 「被害が拡大する前に抑えてください！！破壊しても構いません！！私が責任を持ちます！！！」

舞人 「わかりました！！！」

そして、京都技研本社の表道路に着陸。舞人がコックピットに乗り込む。

舞人 「よし！！マイトガイン！！空中合体だっつ！！！！」

マイトガイン 『了解だ！！』

舞人 「レッツ・マイトガイン！！」

そしてロコモライザーとライナーズが京都府の上空で合体を敢行する。

BGM レッツ・マイトガイン

3機が菱形上に空中で並ぶ。

ロコモライザーの後部が真っ二つに割れ、各部のジョイントが可動。マイトガインの足へと変形していく。そして下半身がねじれて反転する。

ライナーズが左右に分かれてマイトガインの左右の腕へと変形をしていく。

ライナーズの接合部に向けて、縦になったロコモライザーの接

合部からレーザーセンサーが放たれ、左右のライナースがドッキングして両腕となる。

ロコモライザーの先頭部が前に折りたたまれ、それに連動して内部のコックピットも正面を向く。

舞人 「マイトガイン！！テイク・オフ！！」

両手首が飛び出し、蒸気が噴出。ボディーは完全にマイトガインの形となる。

頭部が現れ、両眼のカメラアイが発光する。ボディーのいたるところから蒸気が噴出し、拳をぶつけ、正拳突きを決めて、近辺にいたブロッケンの前に着地する。

ズシイン……

マイトガイン 『銀のつばさにのぞみをのせて、灯せ平和の青信号！勇者特急マイトガイン、定刻どおりただ今到着！！』

舞人 「よし！！一氣にいくぞ！！マイティー・フルブラスト！！」

マイトガイン 『はあっ！！』

ビュディガアアアアアアアッ！！

気合を入れたマイトガインからシグナルレーザー、マイティーキャノン、マイティーディスチャーレーザーが一斉射される。4本のエネルギービームの火線がブロッケンの胸部に直撃し、装甲が

粉碎されて爆発する。

ズドオゴガガガアアアアンツ!!!!

マイトガイン 『あつけないな……。』

舞人 「いいや、まだだ!!まだ府内に3機の反応がある!!」

マイトガイン 『わかっている!破壊するのみだ!!』

舞人 「飛ぶぞ!!」

マイトガイン 『おお!!』

ブロッケンが点在する地点に向かって飛び立つマイトガイン。
京都府内の3個所でブロッケンタイプのロボットが破壊活動を行なっていた。

ビル街で、ビルを殴り倒しながら暴れる2機のブロッケン。近くには京都タワーもある。

そこへマイトガインが降り立つ。

マイトガイン 『これ以上の被害は出させん!!正義の鉄槌を受けるがいい!!はあああ!!』

ガゴガアアアアンツ!!

マイトガインのパンチをくらって吹っ飛ばす1機のブロッケン。

だが後方からもう1機がマイトガインに向かってパンチを繰り出す。

ガアアンツ………ドオガゴオオオツ！！

レフトアームでこれを受け止め、レフトレッグで強烈な蹴りを浴びせて吹き飛ばす。

先に吹っ飛ばされたブロッケンが起き上がる。これに対し、フアイティングポーズを構えて向かい合うマイトガイン。

舞人 「いつものいくぜ！！ナツクルラツシュ！！」

マイトガイン 「ナツクルラツシュ！！くらええっ！！」

ゴオオンツ！！ドガアアツ！！ガゴオオツ！！ダガギヤアンツ！！ゴオガアアアツ……

突っ込んでくるブロッケンに、ナツクルの嵐を叩きこんでいくマイトガイン。瞬く間にブロッケンの装甲が陥没し、バチバチと電気がスパークし始める。そして強烈なストレートが頭部に入る。

ズドガアアアアアンツ………バキャン、ズシュウウウウン………

頭部が破壊され、全ての制御が不能となり道路に倒れこむブロッケン。そのまま舞人はスパーク・ボンバーを打ち出す体制に操作する。

ビルに蹴りを入れてビルを蹴り砕く。

ズガゴオオオオツッ!!!

瓦礫が下へと墜ちていく。逃げ惑う人々の中に紬達の姿があった。

律 「最近、こういうこと多くないか?!」

漣 「気のせいだと思いたいけどな!」

唯 「ひいいいん!」

和 「唯!しっかり!」

紬 「早く来て……!!舞人君……!!」

その時、ブロッケンが紬達の姿を捉えてしまう。地響きを立ててこちらへと進撃してくる。

ズン!!ズン!!ズン……

一同 「わあああああ……!!」

紬 「舞人くうううん!!!」

いつかの漣のように想う人の名を叫ぶ紬。それに答えるかのごとく、タツクルしながらマイトガンが突っ込んできた。

ズドオガアアアアアッ!!

ビルに激突し、ビル群を粉碎しながら倒れこむブロッケン。土煙が道路を統べる中、紬達の前でマイトガインがファイティングポーズを構えて立ちそびえる。

舞人 『紬さん!!怪我はなかったか?!』

外部スピーカーで紬に声をかける舞人。

紬 「ええ!みんな無事よ!!」

舞人 『よかった!!見ていてくれ!!俺とマイトガインの勇姿を!!いくぞマイトガイン!!!!』

マイトガイン 『ああ!!一気に蹴散らすぞ!!舞人!!!!』

バックパックから青白い炎を噴出させて空中へと舞い上がるマイトガイン。

それを見上げる紬は、ほわ〜とうっとりしていた。

律 「こりゃ勝汰にいい土産話になるぜ……。」

漣 「本当だな……。」

舞人は、ライトレグのエネルギーゲインをMAXに設定し、マイトガインの必殺技を繰り出す。

舞人 「必殺!!メテオ・ダイナマイトツツ!!!!!!」

紬 「舞人くうん……。」

今まで味わった恐怖や合いたかった気持ちを存分に舞人に出す
それを一心に受け止める舞人。

マイトガイン 『やれやれ……見せつけてくれるな、舞人。』

」

唯 「ムギちゃん、大胆!!」

律 「お前もな、唯。」

唯 「へ?なんのことお?」

律 「なんでもないつ。なあ、漣いつそのこと勇士郎クンにあ
あやってみたらどうだ?」

漣 「で、できるわけないだろ!!不用意にそんなことしたら・
……嫌われちゃうよ……。」

律 (以前それっぽいことしてたんだけどな……当の本人
はすごいよろこんでたみたいだけど。)

紬の姿を見て、再び清水寺に赴こうとする漣。律も和も漣の気
持ちは察する。

漣 「清水寺……もう一回だけいくぞ。」

律 「……はいはい。付き合ってあげましようかね。」

漣 「和……ちょっとだけ律と清水寺にもう一回行って来るから待ってて。」

和 「わかった……丁度マイトガインが目印になってるからここで待ってるわ。」

漣 「いくぞ律。」

律 「はいよー。」

漣と律が清水へ戻る中、紬は舞人の胸の中で甘えていた。

紬 「……幸せってこういうことを言うのかな？」

舞人 「きっとそうだよ。俺もここにある今が幸せだ。」

つづく

次回予告

謎の生命体の掘った穴に神奈川県警が調査のメスを入れる。するとそこには謎の研究施設が姿があった。科警研では謎の生命体の驚くべき事実が明らかになっていた。その事実には要と葉山は驚愕する。そんな中、東京都の町田区に謎の生命体の新種が現れるのだった。次回、新生太陽の勇者 ファイバード・サーガ 第17話 「驚愕の生体兵器」

その生命、哀れかつ、危険。

第17話 「驚愕の生体兵器」

生体兵器と思われる生物の出現。京都でのブロッケンの暴走。デストリアン以外の特殊事件の捜査に 警察組織は追われていた。

謎の生物が掘り進んできた穴に、タンク型のカメラ搭載メカで捜査のメスを入れていく。暗い地下空洞が延々と続く。

警察官 「既に潜らせてから20km以上は進んでいます。」

県警刑事A 「なかなか見えてこないな・・・。」

カメラに映し出される映像モニターを見る捜査官達。

県警刑事B 「ほとんどが暗闇・・・ん？光？」

1人の刑事が、モニターの奥に現れた光に注目する。すなわち空洞の外へと繋がった事を指す。

警察官 「これは・・・！？更に進めます！」

県警刑事A 「ああ！！」

そして捜査カメラロボットが光が指していた場所へと出る。すると何処かの研究施設の映像が映った。

県警刑事 A 「研究・・・施設・・・なのか？」

警察官 「そのようですね・・・恐らくはこの周辺のどこかの地下だと思われませんが・・・。」

県警刑事 B 「そんなことは判りきっている。何か変わったモノはないか？」

カメラの映像が乱れ始め、砂嵐映像が時折映り始める。

ザザザ・・・ガッ・・・ガシヤッ！！ジッ・・・

突如として映像が切れる。何者かにロボットを破壊されたようだ。

警察官 「切れた？！何者かに破壊されたようです！！」

県警刑事 A 「施設か・・・どうやら睨んだとおりヤツは生体兵器かもな。」

県警刑事 B 「至急桜ヶ丘より25km圏内の地下を調査！！警視庁及び各捜査班に伝達だ！！」

県警刑事 A 「ならこの空洞から突入させた方が早いんじゃない。。。」

確かにそうだった。だが刑事はあえてその方法を選ばなかったのだ。

県警刑事 B 「確かにその方法が一番手っ取り早い。だが、も

しヤツがその間に向かつて来たらどうする？多くの警察官が犠牲になっちまうー！」

この情報が冴島の許へと通達される。警視総監室に電話が鳴り響く。

冴島 「はい、こちら警視庁……何?!……そうか……よし、こちらでも手を打とう！」

受話器を一旦置き、冴島は警視総監室の窓の外を見つめる。

冴島 「……やはり睨んだとおり……生体兵器の可能性が高くなった！施設から出てきたとなるとなんだかの組織が絡んでいるのは間違いなさそうだ。」

M・P・D・BRAVEのメンバーに情報が優先されて通達される。

事件のデータ処理をしていた吉崎が通達情報を受け取った。

吉崎 「はい、こちら警視庁直属M・P・D・BRAVE……」

冴島 「吉崎君か？ たった今、例の謎の生物の捜査にあたっていた神奈川県警から通達があつてな。生物が掘り進んできた空洞の先に謎の地下施設を見つけたとの事だ。」

吉崎 「地下施設?!」

冴島 「そうだ！ なんらかの組織絡みの事件という可能性が高

まった。桜ヶ丘から25km範囲内の地下を捜査して欲しいと
事だ。」

吉崎 「ですが、我々だけでは……。」

冴島 「無論、警察署との連携の下で行なってもらおう。頼んだぞ！」

吉崎 「了解しました！」

一方、要と葉山は、科警研を訪れていた。新たに判明した事があつた為だ。

葉山が、巨大な死体をまじまじと見る。

葉山 「うわ〜グチャグチャっすね……。」

要 「やはりデストリアンとは別物のようだな。」

科警研の研究員が、要達に説明する。

研究員 「この生物は、肉質、細胞等全てデストリアンとは異なっています。以前にも説明がされていると思いますが、地球外の細胞組織であるデストリアンに対し、こちらの生物は明らかに地球に存在する細胞組織で構成されています。ただ、元々が何の細胞か判らないほどまでにDNAが激しく操作されていました……。」

要 「それで、新たに判明したというのは……？」

研究員は何故か顔を引きつらせながら更に説明した。顔を引き

つらせたのには理由があった。

研究員 「そのことですがっ……更に分析したところ……もとの細胞がっ……!!」

要は研究員が言う前に直感で解ってしまう。だが葉山は「？」の状態だ。

要 「まさか……?!」

葉山 「……??？」

研究員 「人のものである事が判明しました……!!!!」

驚愕の捜査結果だった。DNA細胞が人と同じ。すなわち元は人間だったモノだ。

葉山 「に、人間??！」

要 「……つまり、実験台にされた人がいるということですね……。」

そうとしか言いようがなかった。やりきれない空気が漂う。

研究員 「はい……何かの組織によって!!」

人を原型を留めないほどまでの細胞改造をされた生体兵器。その事実を要は冴島に伝えた。

要 「冴島警視總監、科警研で驚くべき情報が得られました。」

冴島 「一体何だったのだ？」

要 「あれは、人を改造した生体兵器の可能性が高いことが判明しました！！」

冴島 「何だと?!人を改造?!?!」

冴島は確かに当初から生体兵器の可能性を睨んでいたが、人を改造したバケモノとは思いにもよらなかった。受話器を震わせる冴島。

要 「激しい遺伝子操作の結果、ああなったようです。」

冴島 「一刻も早い組織の摘発が必要だな!!」

要 「同感です!!」

冴島 「あの生物をBLWブルウと呼称する!!」

要 「ブルウ・・・ですか？」

冴島 「バイオ・ロジカル・ウェポン・・・すなわち生体兵器の英語のイニシャルだ。」

所変わって京都。桜高修学旅行二日目。

さわ子 「本日は自由行動です。夕方の6時までには旅館に戻っ

てください。尚、先日のロボットの事件で立ち入り禁止になっている場所が幾つかありますので注意して行動してください。それでは各班に別れて解散してください。」

につこりと微笑みながら生徒達に指示するさわ子。

漣たちは嵐山をめざす。

細 「最初は嵐山ね。」

漣 「そうだな……。」

漣は、先日の事件の時に舞人に思いつきり甘えていた細を思い出す。

漣 (いいよな、ムギは。あんなに大胆に抱きつけちゃうんだからな。ま、付き合っていれば当然といえば当然だけど……。)

細 「羨ましいの？漣ちゃん？」

漣 「?!?!私は何も言っていないぞ?!?!」

細 「いつかできるようになるわよ。勇士郎君と。」

漣 「!!?!?」

生徒達と別れた後、教職員達も各名所を廻る。その間にさわ子のケータイに要から電話が入る。

さわ子 「もしもし、どうしたの？」

要から電話をもらい若干嬉しげだった。

要は、科警研の外から電話をかけていた。パトカーの中では葉山が1人でコーヒースーツで一息ついている。

要 「京都の方でロボットの暴走があったから心配になってね。」

さわ子 「その事だけど、私達教員や生徒達も全員無事で大丈夫だったわ。」

要 「そうか、無事でいてくれてよかった。」

さわ子 「ふふっ、心配してくれてありがとう。」

要 「こっちでも色々あってね。心配になったのさ。」

さわ子 「色々かぁ・・・今度はいつ会えれそうですか?」

要 「正直言って判らない。けど、俺としてもなんとか会えるようにしたい。」

さわ子 「あ、無理に私に合わせなくてもいいです・・・要さんが警察官で大変なのは承知してますから。」

要 「なんかデジャヴだな。前にもこんな会話した覚えがある・・・でも本当に会える時間は作ります。その時には・・・。」

まさにその時、無線に緊急通達が入る。

無線通信 『警視庁より通達！！東京都内、町田区に謎の生命体が出現！！尚、本日よりこの生命体をBLWと呼称する！！繰り返す・・・・・・・・・・。』

緊急通達の声は冴島の声だった。止むを得ずに要はさわ子との会話を中断する。

要 「くっ・・・・・・・・！！ごめん、さわ子さん！緊急無線が入った！！」

さわ子 「いいのよ。また変なのが現れたの？」

要 「ああ！！これから出撃する！！」

さわ子 「気をつけて！」

東京都内で突如として出現したBLW。タイプは2種類のモノが出現していた。

町田区の境では警察が通行止めのエリアを設けて、交通整理にあたる。

一種は、前回出現したアリののような小型タイプ、BLW 01が複数。もう一種は、頭部の形は変わらないものの、二足歩行タイプのモノが出現していた。腕は四本あり、鎌爪のようにになっている。

ビルを殴り、車を歩きながら潰す。

新型BLW 「クカキヤアッ！！！！」

BLW 01 「クケケケツ!!」

咀嚼音にも似た関節音を立てながら多数のBLW 01が跋扈する。

餌食となつていく人々。

市民 「うわああ・・・ぐぎゅおおっ・・・!!!」

警察が出動し、直ちに立ち入り禁止区域が設置される。

M・P・D・BRAVEのメンバーも出撃していく。Jトランスポーターの中へとJローダーとJバギーが搬入され、レイバース専用の輸送機にもガンレイバーとショットレイバーが搬入される。

要 「全員揃ったな!!! M・P・D・BRAVE、出撃する!!!」

霧島 「これよりJトランスポーター、発進する!!!」

鹿島 「了解! Jトランスポーター、発進!!!」

Jトランスポーターが加速して離陸。現地へ向かって飛び立つ。

再び現地。警察が展開する中、BLW 01が警察の対特殊生物車両と戦闘を開始する。新たに関東地区の警察に配備された自衛隊の装甲車を改造した車両だ。機動性を得る為に3軸車から2軸車に改造されている。運用目的はM・P・D・BRAVEの援護だ。

砲塔が周り、レール機銃が撃ちだされ攻撃が開始された。

ディギギギギギンツ！！ ディギギギギギンツ！！
ディギギギギギンツ！！

ドウババババダアアツ！！ ドオドオドオドオバア
アアアツツ！！

BLW 01 「クキヤカカカカカッ！！」

各車両が、一斉に射撃を開始する。アリタイプのBLW 01
には有効のようで、瞬く間に駆逐されていく。だが、二足歩行の新
型BLWに対しては威力が不十分のようだ。

新型BLW 「クキユゴアアアアツ！！！！」

警察特務隊員 「小型タイプには有効のようだ！！だが・・・
！！」

進撃してくる新型BLW。瞬く間に接近されてしまう。

新型BLW 「キヨギヤアアアツ！！」

ガシャガアアアツ！！ ズズズガアアアツ！！

特殊車両を蹴り飛ばして進む新型BLW。周囲にはまだ駆逐さ
れていないBLW 01がガサガサと動き回っている。

現場に到達したJトランスポーターからJローダーが投下され
ると同時にレイバーズの輸送機も降下を開始する。

空中で「ローダー」が変形を開始、ジェイデッカーとなった。

ジェイデッカー 「ブレイブアップ!!! ジェイデッカー!!!」

「トランスポーターから「バスター」が落とされ、それをジェイデッカーがキャッチする。

「トランスポーターがその間に市街地の道路へとホバリングしながら少しずつ降下。着陸して、「バギー」が出撃する。

葉山 「「バギー」、いきます!!!」

葉山のドライブの下、「バギー」が混沌とした都内市街地を走る。

吉崎 「レイバース、降下確認!!! ジェイデッカー、「バスター」、アクティブ!!!」

要 「よし! 体制は整ったな!!! 戦闘を開始する!!!」

ジェイデッカー&レイバース 「了解!!!」

吉崎がフィールド情報を分析する。

吉崎 「現在、市街地には新型のBLW1体と前回レイバースが仕留めたタイプのBLW 01が7体が展開中。」

要 「そうか! ジェイデッカーは新型を、レイバースはアリタIPのBLW 01の駆逐にあたってくれ!!! 尚、今回から対特殊生物車両の援護がつく!!! 有効に連携してくれ!!!」

レイバース 『了解!!』

ジエイデッカー 『了解、これより戦闘任務に移行する!!』

それぞれが目標対象のポイントに向かい始めた。

ビル群の壁に隠れてガンレイバーがガンリボルバーを構える。道路をガサガサと進撃してくるBLW 01が2体。すかさずガンレイバーは身を出し、ガンリボルバーを放つ。

ガンレイバー 『当たれやあつ!!』

ガアン、ガアン、ガアン、ガアンツ!!

ドオオツ!! ドオオツ!! ドオオツ!! ドオガギヤ

アンツ!!

ドオドオドオドオヴァンツ!!

BLW 01 「キャキャキュウツ……。」

弾丸が2体に着弾し、内部で弾丸が爆発。肉片を散らしながらBLW 01を死に至らしめる。

ガンレイバー 『楽勝、楽勝』

一方、3体のBLW 01と特殊車両が戦闘に入っているポイント。レールガンの射撃が飛び交う。

デイギギギンツ！！ デイギギギンツ！！

だが、レール弾丸をガサガサと俊敏な動きでかわし、車両の面前に入り込んで車両を噛み砕く。

バキヤアアツ！！

警察特務隊員 「くそ！！攻撃しつつ後退だ！！」

レールガンを撃ちながら後退していく特殊車両。ショットレイベーがその背後から接近する。

ショットレイベー 『こちらM・P・D・BRAVE所属、ショットレイベー！！これより目標を駆逐する！！』

警察特務隊員 「おお！！来てくれたか！！」

ショットレイベーはリアランチャーを構え、瞬時に3体を順々にロックオンする。

ショットレイベー 『ロック・オン！！撃ち砕く！！』

デイキュゴオンツ！！ デイギュドオオンツ！！ デイド
ウカアンツ！！

ヴォバガツ！！ ドオゴオツ！！ ヴアガゴツ！！

破裂するかのようになりニアランチャーの銃弾で爆発するBLW
01。文字通りショットレイベーは目標を撃ち砕いた。

シヨットレイバー 『BLW 01、3体駆逐！！引き続きジエイデッカーの援護に廻る！！』

小規模の瓦礫を踏み越えながら走るJバギー。ジエイデッカーの戦闘域付近で停車する。

吉崎 「レイバース、BLW 01を5体駆逐。ジエイデッカーの援護に廻ります。ジエイデッカーは戦闘車両の援護を受けつつ交戦中！！」

特殊車両の支援攻撃が新型BLWに打ち込まれていく中、ジエイデッカーはJバスターを構え、目標にレール弾丸を撃ちこんでいく。

ジエイデッカー 『ジバスター、ロックオン！！』

ジエイデッカー 『ジバスター、ロックオン！！』

ジエイデッカー 『ジバスター、ロックオン！！』

ジエイデッカー 『ジバスター、ロックオン！！』

ジエイデッカー 『ジバスター、ロックオン！！』

ジエイデッカー 『ジバスター、ロックオン！！』

BLW 03の左右にいたBLW 01をJバスターで吹き飛ばす。全身が木端微塵になる2体のBLW 01。照準をBLW 03に切り替えて、連発しながらJバスターを撃ち込む。

ジャキンツ・・・ディギイン、ディギイン、ディギイン、
ディギイン、ディギイイインツ！！

ディギヤギヤドドゴオオオオツツ！！

新型BLW 「キュアアアアツ！！！」

Jバスターのレールガンが直撃し、激しくもがくBLW 03。
予想以上に苦しんでいるようだ。

ジエイデッカーが更にJバスターを撃ち込もうとした時、突如
として新型BLWがジャンプし、ジエイデッカーに襲い掛かった。
4本の腕がジエイデッカーを路上に押し倒す。

ビュバツ・・・ドオオオオオオツ！！！！

ジエイデッカー 『ぐおおおおあつ！！』

吉崎 「ジエイデッカー、BLW 03に押し倒されました！
！損傷率9・34%！！」

ググググとジエイデッカーを押し続けるBLW 03。

ジエイデッカー 『くつ・・・ぬおおお！！』

ギユゴオオオオオオオオ・・・！！

ジエイデッカーがウィングから青白い炎を噴射しながら、スラ
スター全開でBLWもろとも上空へと舞い上がる。

ジエイデッカー 『はああっ!!!』

ガアアンツ!!

BLW 03を突き放し、地面へと落下させる。

ズズズズウウンツ!!

落下させられても、BLW 03がゆっくりと起き上がる。だが、起き上がった面前にはレイバースの姿があった。ガンレイバーとショットレイバーがそれぞれの銃を構える。

ゲオン! ジャキンツ!

ガンレイバー 『くらいな!!!』

ガアンツ!! ガアン、ガアン、ガアンツ!!

ディガキヤアンツ!! ディゴドオオツ!! デイドウ
キイイインツ!!

ドオゴガギヤガゴオオツツ……!!

BLW 03 「ケキヤアアアツ!!!」

一気に撃ち込まれた弾丸によって体制を崩すBLW 03。ジエイデッカーがこの隙にJロッドを
右脚の側面から取り出し、右手に装備する。スタンガンと同じ要領で相手に強力な電撃をくらわせる警棒だ。無論、電撃の威力は半端

ではない。

吉崎 「Jロッド、アクティブ!!」

ジェイデッカーは振りかぶりながらBLW 03に降下しながら接近して、一気にJロッドを叩きつける。

ジェイデッカー 『おおおっ!!』

ギユオツ・・・バキヤゴオオオツ!!

吹き飛ばされ、再び道路に倒れこむBLW 03。そこから起き上がって再度ジェイデッカーに飛び掛る。

だがジェイデッカーは飛び掛ってきたBLW 03にJロッドを叩きつけて、もう一度吹き飛ばす。

ジェイデッカー 『無駄だっ・・・!!』

バキヤシャアアアツ!!

コンクリートにめり込みながら叩きつけられるBLW 03。性懲りもなく、再度立ち上がる。

立ち上がったBLW 03にジェイデッカーがJロッドを殴りつけて、JロッドをBLW 03の体に強く押し込む。

ガゴオオツ!!

ジェイデッカー 『超高電流送電っ!!!!』

ヴィギャババババババシューウウウウツツッ！！！！

赤や青、薄黄色の光が、一瞬の間でランダムに光った。

全身が焼け爛れ、白い煙を上げながらBLW 03が倒れこむ。

ジェイデッカーはサーチアイで、対象を分析。生体反応無しと断定する。

ジェイデッカー 『目標、生体反応消滅！！駆逐完了した！！』

一応の事態が收拾。駆逐されたBLW 03は損傷は激しいものの、原形をとどめているサンプルとして、Jローダーに乗せられ、科警研へと搬送されていく。

要 「……………デストリアンにBLWの出現。一体この国……いや、地球はどうなる？」

事後処理班の作業を見つめながら要が独り言のように呟く。

人類を狙うかのように飛来するデストリアン。その最中、その人類の一部によって生み出された生体兵器の出現。混沌が加速する。

勇士郎達が、高台の山でたむろしていた。コンビニで買ったデザートや菓子を食いながら高台の斜面に座る一行。

光 「昨日の京都のロボットの暴走ニュース、マジで唯ちゃん
が心配になってメールしたぜえ。」

勇士郎 「ああ。俺も秋山さんが心配になってソッコで電話
した。」

蓮 「ホントだよな。リッチちゃんも無事だったようで・
・。」

俊 「みんな無事だったらいいからな。何よりだ。マイトガイ
ンが事態を片付けたんだってな。」

光があらさまに唯を意識した言い回しでプロツケンの事件を
口にした。だが、光に限らず、勇士郎や蓮、俊も心配していた。

光 「久しぶりに長くメールしちゃったぜ。」

俊 「スゲーうれしそうだな。いつそデートでもしたら
どうだ？」

光 「付き合ってもないうちからか?!そういう俊だって梓ち
ゃんとはどうなんだ?？」

俊 「ま・・・現状維持だな。」

蓮がケータイのニュースを見てBLWの事件の事を話題に出し
た。

蓮 「おい!またよくわかんねー生物がでたんだってさ!警察
はBLWとか言う名前で呼ぶ事にしたみたいけど・・・デストリ

アンじゃないのかよ？コレ?!」

勇士郎 「ああ・・・デストリアンなら感覚で来るのがわかっていたはずだからな。全く違う奴だ。一体何なのか、俺自身が知りたいカンジだ・・・。」

蓮 「デストリアンじゃなかったら・・・なんだ??？」

光 「地底から現れたって言うから・・・地底怪獣の類か？」

俊 「警察はなんかの生体兵器だって言ってるみたいだぜ？どの道、戦う相手が増えちまったな。」

勇士郎 「生体兵器か・・・ま、なんだっていいさ。出くわした時には闘うだけだ!!俺の意思で、ファイバードとして・・・。」

寝そべりながら空を見つめる勇士郎。ゆっくりと流れる雲がながれていく。

勇士郎 「そうさ・・・俺は闘うんだ・・・世界の痛みと・・・。」

つづく

次回予告

修学旅行から帰ってきた湊達と学校帰りの時間を過ごす勇士郎達。一方で謎の施設に警察の特殊部隊が突入する。それから間もなくし

て、立川にBLW 01の群れが出現。この事態にM・P・D・B
RAVEは直接出撃する。千葉駅周辺にもBLWの集団が出現した。
さらには上空よりデストリアンの隕石が飛来間近まで接近。勇士朗
とエクスカイザーが急行するのだった。

次回、新生太陽の勇者 ファイバード・サーガ 第18話 「重
なる災厄」

空と地下よりソレはやってくる。

第18話 「重なる災厄」

漣達が修学旅行から戻り、学校帰りに徐々に勇士郎達と会う約束をしていた。夕方にも近い昼下がりの午後の日差しが心地いい日だった。

漣 「あ！来た来た！」

勇士郎 「まった？」

漣 「ううん。私達もさっき来たところだよ。」

桜ヶ丘高校の近くにある高台の市立公園で待ち合わせをしていたのだ。

勇士郎達4人の中に新たに1人が加わっている。律が蓮に聞く。

律 「あれ？もう1人誰？」

蓮 「ああ、コイツは俺のバイト先の後輩だ。」

蓮が紹介した後輩君は、梓よりも少し背が高いというほど身長が低い。

後輩 「ちわっす……川田涼っす。」

少々照れくさそうに挨拶する涼。

蓮 「なーに照れてんだ？」

涼 「え、だって先輩……俺、あんまり女の子と喋った事
ないんで……。」

蓮 「そっか、どっちかつーと涼坊は草食系だもんナ。」

涼 「えへへへ……えーと……その……。」

しどろもどろな涼。その仕草に軽音部メンバーの母性本能が少
しうずく。

律 「なんか……見てると世話したくなってくるって言う
か……。」

紬 「ふふ、かわいいコ」

唯 「ホントだあ。なんか男の子なのにカワイイ」

漣 (う……なんだか母性本能がくすぐられるような……
・妙な気分。)

涼 「え？あ？う……えへへへ。」

軽音部のメンバーにちやほやされクニャンとデレデレになる涼。

蓮 (こいつ……チビなことを逆手にとったな。)

だが、梓が唯一鋭い一言を涼に突き刺す。

梓 「なんかもつとシャキツとして欲しいですっ！見てるとだ
らしない感じですよっ！」

梓にそういわれると涼はしゅんとなってしまう。

涼 「ふうふう……。」

律 「梓、初対面の奴にそこまで言わなくてもいいだろ？」

唯 「そうだよ。かわいそうだよ。」

漣 「ちよと言いきすぎじゃないか？」

梓 「う……ごめんなさい。」

確かに初対面の相手に言い過ぎではあった。だが、涼はしゅん
となりつつもすぐに立ち直る。

涼 「大丈夫っス！よく言われるコトツスから！」

とりあえず公園の芝生に座って、勇士郎達は土産をもらつ。京
都名物の八橋だ。

漣 「はい、みんなで食べてね！八橋！ちゃんと保冷してある
から。」

勇士郎 「ありがとう！」

蓮 「サンキュー！」

光 「うまそうっ!!！」

俊 「京都はやっぱこれだよなー。」

蓮 「涼坊も食べ。」

涼 「あ、いただきますっ！」

唯がさらに土産を取り出す。

唯 「まだあるんだよ・・・へへ・・・。」

ゴソゴソとカバンから中身を取り出す。すると一文字の平仮名のキーホルダーが出て来た。

唯 「はい、あずにゃん」

梓に「ぶ」と書かれたキーホルダーが手渡された。

梓 「『ぶ』・・・?」

他の平仮名を唯、漣、律、紬がそれぞれ持って出し合った。

唯 「じゃん!!！」

梓 「け・い・お・ん・ぶ・・・ああ!そういつことか!!！」

けいおんぶ・・・彼女達はいつでも仲良しだと言うコトを現し

ていた。

唯 「私達はいつでも仲良しだよ あずにゃん！」

梓 「唯先輩……。」

勇士郎達はその時、漣達が羨ましく思えた。

勇士郎 「いいよなあー……部活って。」

光 「ホントだよなあ……なんかやつときゃよかったか？」

そんな会話をする勇士郎達に、漣が同じような土産を手渡す。

漣 「私からも勇士郎君達にお土産あるんだ……はい。」

4つの紙袋に入ったお土産がそれぞれ手渡される。

男子メンバー 「????？」

俊 「……！ああ、そういうことか！出し合おうぜ。」

俊が何が入っているか逸早く察する。紙袋から出すと片仮名の文字が入っていた。

それらを出し合う勇士郎達。

勇士郎 「ファ・イ・バー・ド……ファイバードか！！」

漣 「うん。勇士郎君達とファイバードのおかげで今こうして

いられるからさ……まだ闘いは続いていくんだろっケド、これからも頑張ってね！」

勇士郎 「ありがとう、秋山さん。」

涼 「へ？え？う？？」

蓮 「そっか、涼坊は初耳だからな。実はな……。」

涼は初耳で訳が解らない。蓮が説明をすると納得してくれた。

涼 「そんなことがあったんすか？！ズゲーッス！！」

梓 「でも本当に怖かったです。あの時は……。」

涼 「そんなに怖い出来事だったの？」

梓 「……………うん。」

梓の脳裏に当時の出来事が、C 02が出現した光景が浮かび上がる。

いたたまれなくなる気持ちになりかけた時、俊がフォローするかのように口を開く。

俊 「ま……その怖い出来事を勇士郎の奴が見事に叩き斬ってくれたんだ。過去がうんぬんじゃなくて、生きていられる今があればいいんじゃないか？」

梓は俊の言葉に我に帰る。

梓 「そ、そうですね。あ、そうですね！」

俊 「？」

梓が思い出したように切り出す。

梓 「来月の第3土曜日に桜高特別ライブをやるんです！あの出来事から半年以上経つって事で桜高復活祭があるんですよ！！校舎も新築されますし！」

俊 「へえっ！ライブやるんだ！？」

笑顔で梓が答える。

梓 「はい！もう、今からでもやりたいくらいですよ！」

律 「そういえばそうだった！！それも今日言おうとしてたんだっけ！！」

光 「じゃあ、練習してたほうがいいんじゃないか……。」

調度正面に居た唯が光に答えてくれた。光は嬉しげな気分にもまれる。

唯 「今日は、息抜きだよ。お土産も渡さなきゃいけなかったし、みんなにも久しぶりにあそびたかったし」

光 （唯ちゃん……。）

漣 「それでなんだけど、もしよかったら勇士郎君達4人をゲストに招こうと思うんだけど……。」

思ってもみない漣の言葉に勇士郎達は驚く。

勇士郎 「え?!ゲスト?!」

俊 「って言っても俺達は勇士郎みたいな大した事してないしな……。」

梓 「でも、誘導してくれただけでもかなり違いましたよ?」

俊 「そ、そうか?」

梓の笑みを含めたちょっとした返答が、俊を少し赤くさせる。

漣 「どう?みんな……。」

漣が勇士郎達の意見を伺うと、蓮が威勢よく答える。

蓮 「勿論いいぜ!な?光?」

光 「おおっ!!なんっただって俺たちヒーローじゃん」

俊 「自分で言うな!!」

勇士郎 「ははは。もちろんOKだよ、秋山さん!」

漣 「ありがとう。顧問の先生にも伝えておくよ。」

その頃、BLWが出て来た施設に警察の特殊部隊が突入を開始していた。

特殊部隊隊員 「突入うううっ!!!」

勢いよく突入を開始する特殊部隊。瞬く間に施設内の者達を取り押さえていく。検拳に至るまでの時間は容易い物だった。

この一報が冴島の元へと届く。

冴島 「何?!例の施設の検拳に成功した?!.....うむ、そうか!!逮捕した施設の人間の取調べが終わり次第得た情報をまた回してくれ!!」

受話器を置き、冴島は警視総監室で1人呟く。

冴島 「以外に早期解決となるかも知れんな.....この一件ふう.....デストリアンにBLWの出現.....今のところ二種類が同時に現れてはいないが.....それも時間の問題か.....」

冴島いわく、現時点においてはデストリアンとBLWの出現はダブってはいない。だが、逆に考えれば、いつ二種類の特殊生物が現れても不思議ではなかった。

それとほぼ同時刻。京都府警もブロッケン暴走事件に関する容疑者を確保していた。

取調室においてのやり取りが続く。

京都府刑事 「じゃあ、お前はんが今回の首謀者なんやな?!」

容疑者 「ああ！！そうや！！わいが、ブロッケンのデータにハッキングしてやってやったんや！！せいせいするがな！！これはわいをリストラさせた会社への報復やでっ！！ギャハハハハッ！！ザマーミロって感じやわ！！」

京都府警 「ふう……………」

溜息をついて首を振る刑事。職を失われた元社員の報復を籠めたハッキングによるデータ破壊によってブロッケンは暴走していたのだ。念のため、桜ヶ丘でのブロッケン暴走事件やBLWについても問う。

京都府警刑事 「……………東京近郊であったブロッケンの暴走や昨今騒がしている生体兵器、BLWに関してはどうなんや？これもお前、からんだるんかい？」

容疑者 「流石にそれはないわ。住まいもちゃうし、いくら恨みあるさかに関連会社まで報復するんは逆に面倒極まりあらへん！！それに生体兵器なんていう代物は全く無関係や！！」

どうやらBLWとの関連は全くの別の事件だったようだ。だが、事件に告ぐ事件が引き起こっていく。帰宅ラッシュが近い千葉駅周辺の街並みに突如として轟音と砂煙が舞う。

グオゴオゴオオツ……………

ビルが倒壊し、道路側へと傾く。近くを走っていた車が次々に瓦礫の下敷きとなる。そして、瓦礫と化したビルの地下からは、アリのようにはらわらわらとBLW 01が出現しはじめる。

数としては、10体以上はいる。そして、BLW 02がと0の2体が千葉駅周辺から出現。咆哮しながら暴れまわる。

BLW 02 「コカカカカアアツ!!」

更には、M・P・D・BRAVEの本部がある立川市内にもBLW 01の群れが出現。直ちに警視庁から出撃要請が出される。

冴島 「BLWが立川と千葉に出現した!!我々は立川に現れた固体を叩く!!」

要 「了解です!!千葉のBLWは・・・?!」

冴島 「こちらの対処は、旋風寺に要請した!!君たちは、立川のBLWに専念してくれ!!」

要 「了解!!M・P・D・BRAVE、出撃します!!」

ゲートが開き、パトライトを光らせながら黄昏時の立川市内へ直接出撃していくJローダーとJバギー。後続する形で両肩のパトライトを光らせながらレイバーズが走る。

一方、旋風寺コンツェルンのパドック。マイトガインに遅れて建造されていた新たなサポートロボット2機がロールアウトを兼ねて出撃しようとしていた。

京都に滞在中の舞人が出撃の許可を下す。

舞人 「・・・そうか・・・そちらにも生体兵器が・・・」

「！！よし！！トレーラー特急とコマンド特急を出撃させる！！」

メカニック・スタッフ 「了解！！よし！！舞人さんの許可が出た！！トレーラー特急、コマンド特急、共に出撃だ！！！！」

ゲートがオープンし、レールの上を巨大なトレーラータイプの列車と、タンクとも装甲車ともつかない独特な形状のタイプの赤い列車が千葉へと出撃していく。

実は彼らも超AIを搭載したロボットなのだ。ちなみにデザインは、冴島警視總監プロデュースによるものである。そのため、本来予定していたデザイン、名前とは大きく異なる。

東京湾の海上に奔る路線を二両の特急が駆け抜けていく。

それとほぼ同時刻、NASAの監視衛星が衛星軌道上を突入していく不審な隕石を捉えていた。

そしてそれは奇妙な軌道で大気圏へと突入していく。あたかもアジア圏への落下を意識するような軌道を描いて墜ちていった。

冴島が危惧していた事態が現実のものとなろうとしていた。

デストリアンとBLWの同時多発事態である。

そしてそれは、BLW 01が発生している立川の上空へと飛来する軌道上にあった。

警視庁にNASAからの通信が入り、その事がM・P・D・B RAVEに通達される。

立川の街を走る」バギー。後続して」ローダー、レイバーズが
続く。

吉崎 「大変です！！NASAの監視衛生が、立川上空を目指
す軌道で墜ちてくる隕石を探知した模様！！数分後にはここへ・・・
！！」

葉山 「マジっスか?!?!」

要 「遅かれ早かれそうだった事態が発生してしまったか!!
」

予見はしていた。だが、現時点では発生したBLW 01の駆
除で手がいっぱいであった。

現場へと到達し、要の指揮の下M・P・D・BRAVEが戦闘
態勢に入る。

要 「この前の会議でも言ったとおり、BLWの駆逐を最優先
とする！！まずは街に発生したBLWの駆除にあたる！！奴らが展
開しているエリアを三つに分けて駆逐任務を遂行する！！吉崎、フ
ールドミッションデータをジェイテッカー達に送信してくれ！！」

吉崎 「了解！フィールドデータ、送信します！」

フィールドデータがジェイテッカー達に送信されると要がミッ
ションの指揮をする。

要 「ジェイテッカー、レイバーズ！散開して任務にあたるぞ

！ジエイデッカーはAポイント、ガンレイバーはB、ショットレイバーはCポイントで展開してくれ！」

「Jローダー 『了解！』」

ガンレイバー 『了解っス！！』」

ショットレイバー 『了解……ですが、数的にも弾薬が足りません。弾薬の補充はどうするんです？』」

Jローダー 『Jバスターに関しても何処で装備をすれば……？』」

要 「その点については、専用のトレーラーを向かわせる。所定の位置で装備・補充してくれ。だが、危険に見舞われそうな場合は、トレーラーの安全確保の為にトレーラーを移動させる事を念頭に置いてくれ！」

「Jローダー&ショットレイバー 『了解！！』」

要 「各機、散開！！」

要の合図で、それぞれが別れ始める。Jローダーが空中へと舞い上がり、ジエイデッカーへと変形する。

ジエイデッカー 『ブレイブアップ！！ジエイデッカー！！』」

レイバーズは立川の街を駆け抜ける。

黄昏の桜ヶ丘市立公園で仲間達といた勇士郎も久々にデストリ

アンを察知した。

勇士郎達と軽音部メンバーが公園内の芝生の斜面で夕焼けを眺めながら語らっている中、すくつと勇士郎が立ちたがる。その表情は例によって鋭い眼光だった。逸早く漣が察する。

勇士郎 「……………!!!!」

漣 「……………勇士郎君、ひょっとしてまた来るの…………？」

勇士郎 「うん……………デストリアンが来る!!」

涼 「ふえ?!」

勇士郎の言葉に理解が出来ない涼。この勇士郎の能力についても蓮が涼に説明する。

蓮 「テレビのニュースで出てるあの怪物だ。そいつの隕石が近づくと勇士郎は、ファイバードの能力で逸早く察知できるんだぜ!」

光 「勇士郎出撃いつ」

唯 「おーいえーいつ」

光 (唯ちゃんが俺のノリに乗ってくれたあ……………!!)

拳を突き出してノる光に便乗して唯も同じポーズでノる。これに内心で狂喜乱舞する光。

対してクールな俊は、何処へ襲来するのかを立つ勇士郎を見上げて問う。

俊 「何処へ来るんだ？ココに来るのか？」

勇士郎 「いや、東京の方だ。」

黄昏を見つめながら勇士郎が答える。そして黄昏に溶け込む太陽に叫ぶ。

勇士郎 「ファイアー……ジエエエエエツツ!!!!」

全身から放たれた光が、太陽の方へ放たれた。そして太陽の彼方からやってくるようなカタチで召喚されたファイアージェットが勇士郎の許へと飛来する。

一同の上空間近でホバリングするファイアージェット。

涼 「す、すす凄いやっ!!!!」

律 「間近でみるとやっぱデカイなー!!」

梓 「ホント、凄いです……。」

唯 「ふおおおおお!!!!」

紬 「ロコモライザーと同じくらいに大きい……!!」

勇士郎 「じゃあ、みんな……行ってくる!!!!」

漚 「うん！気をつけて！」

ホバリングの吹き荒れる風の中で漚の髪が綺麗になびいている。

俊 「派手にやってこい！」

ファイアージェットの機体中央部のハッチが開き、飛び上がってコックピットに乗り込む勇士郎。

計器類を操作し、映し出されたモニターの景色を鋭い眼差しで見つめる。レバーを押し込んでファイアージェットを加速させた。

勇士郎 「ファイアージェット、テイクオフ！」

ギョドドオオツッ！！

絀 「きゃっっ！」

バーニアから青白い炎を噴射させて東京方面へと飛び立つ。

巻き起こる風に、髪を押さえる男子勢と髪と制服のスカートを抑える女子勢。

唯がふとエクスカイザーのことを思い出す。黄昏の街並みの方へ振り向く唯。

唯 (あ……!!ということとはエクちゃんも……!!)

仕事が表示で終わり、帰路についていた勇。車内のラジオでBW関連のニュースが流れる中、エクスカイザーがデストリアン襲

来を促す。

エクスカイザー 『勇！！デストリアンが向かっている！！このまま向かうぞー！！』

勇 「なんだってえ？！つて……おいおい！！」

突如渋滞を回避して路地裏へと走るエクスカイザー。さらにはビルの壁をも走っていく。

勇 「おわ？！おわああああ？！！！！」

無茶苦茶に道なき道を疾走するエクスカイザーに驚愕する勇。

勇 「ぐおおおおお……！！！！」

エクスカイザー 『安心しろ！！事故ったりはしない！！』

勇 「そーい問題じゃねーっ……うおおお！！！！」

再び同時多発の襲来が関東地区に重なる。そして勇者達が立ち向かっていく。

ファイアージェットのコックピットのメインモニターに落下する隕石が映し出される。

勇士郎 「……デストリアン……！！！！」

コントロールレバーを押し込み、ファイアージェットをさらに加速させながら勇士郎は隕石を睨んだ。

つづく

次回予告

千葉駅周辺に跋扈するBLWの集団。これらを駆逐せんがために、旋風寺コンツェルンの新たな勇者が到着する。その名もストライクボンバーとフレアダイバー。新たな2体の勇者の力が千葉駅周辺に立ち上がる。ジェイデッカー達が奮戦する一方で、2体の勇者はBLWを圧倒して蹴散らしていく。

次回、新生太陽の勇者 ファイバード・サーガ 第19話 「新たな勇者特急」

平和の為、ありったけの力をかざす。

第19話 「新たな勇者特急」

千葉駅周辺にBLW 01が跋扈する中、千葉駅に走る旋風寺が保有する線路上にトレーラー特急とコマンド特急が到着し、青白い炎を上げながら2両が上空へと舞い上がる。

ドドオオオオオオオオオオ・・・

舞い上がった列車がそれぞれの形態へとフォームチェンジする。

トレーラー特急 『フォームチェンジ!! ストライクボンバー
ッッ!!!!』

コマンド特急 『フォームチェンジ!! フレアダイバアアア
アッ!!!!』

ストライクボンバーとフレアダイバーに変形し、2機は千葉駅周辺の道路へと着地する。

ズズウウンッ!!

ストライクボンバーは、ホワイトとシルバーのツートンカラーのボディーをもつ格闘一辺倒の戦闘スタイルで戦う超AI搭載型機である。

開発時のコードネームは「トライボンバー」。本来であれば新

幹線と列車を模したロボットであった。

もう一方のフレアダイバーの開発コードネームは「ガードダイバー」。レスキュー車群を模したロボットであった。

だが、この2機のデザインは大きく変更される。理由は本年度の1月頃に遡る。

2機の変形機構とベースとなる中身の素体機構が出来上がる目前、冴島と舞人が、ロボットを熱く語るために会っていた。

回想

舞人 「冴島さん、これが現在開発中のマイトガインのサポートロボットのデザインです。」

冴島に手渡されるトライボンバーとガードダイバーのデザイン画。一度は冴島が感心し褒め称えた。

冴島 「ほおっ！！素晴らしい！！実にカッコイイ！！」

舞人 「名前はトライボンバーとガードダイバー。新幹線とレスキュー車両を模したデザインになってます。」

冴島は手に取り、笑みを浮かべながら眺める。だが、しばらく眺めた後、冴島の感性のカンが働く。

冴島 「……………むう?! 待てよ……………トライボンバー……………
・マイトガインとコンセプトがダブってしまうのではないかな?
?」

舞人 「……………そう言われると……………かもしれません……………
・格闘スタイルで闘うロボットとして設計されてますから……………
。」

冴島 「ガードダイバー……………カッコイイ! 確かにカッ
コイイ! だが……………もつと……………武装を施した
い! ! !」

舞人 「えええ?! ですが、あくまでサポートですから……………
」

冴島 「舞人君……………この2機……………改めて私にデザイン
させてもらえないかね?! !」

舞人は冴島のとんでもない発言に驚愕するが、舞人に見つめ返す燃える熱い眼光に承諾してしまう。

舞人 「えええ!! ?……………わ、わかりました
! ! 一任しましょう! ! !」

冴島 「わはははははは! ! ! ! !」

舞人 「……?????」

そして……その結果、ロボットのネームとデザインが一新された。

トライボンバーは、ホワイトカラーがメインになり、トラス
オーマールのコボイのような容姿になる。

ガードダイバーは、ガダムXのガダムレパルドDのボディに、アンテナが欠けたガダムEEDのバスターガダムの頭部をつけたような容姿に変貌。射撃一辺倒の戦闘スタイルになり、メインカラーもやや濃い目の赤となる。

名前もそれぞれストライクボンバー「直撃爆発」とフレアダイバー「火中に潜る」という意味に変更された。

舞人 「……あの……サライズとタラト
の許可は……?????」

冴島 「斬新な宣伝になると言われた!!」

舞人 (この人は……計り知れないっ!!!!!!)

そして現在……その2機は初陣を迎える。舞人の指示はない
為、独自の判断で闘わねばならない。

フィールドサーチ機能で、フレアダイバーが周辺のBLWの状

況を分析する。

フレアダイバー 『千葉駅周辺には14体のBLW 01、BLW 02、03共に一体ずつ徘徊している。』

ストライクボンバー 『そうか・・・初陣早々数が多いな!!』

フレアダイバー 『射撃戦に特化している私がBLW 02を相手にする!!』

ストライクボンバー 『なら、俺は自ずと03の方だな!!雑魚は手当たり次第駆逐していこうぜ!!』

フレアダイバー 『そうだな!!』

ストライクボンバー 『いくぜっ!!』

ドオオオオオオオッ!!

ストライクボンバーはダッシュしながらBLW 03を目指し、フレアダイバーは背中のバックパックから青白い炎を噴射させながらBLW 02の近辺へ飛び立つ。

走るストライクボンバーの前に、3体のBLW 01が現れる。緑の溶解液を吐き出しながら攻撃してくる。

ビュドオッ! ビュビュドオッ!!

ストライクボンバー 『おっと!中らんぜ!!』

軽快にかわして3体のBLW 01に接近、攻撃に掛かる。

ストライクボンバー 『でりゃあああつっ!!』

ドオグシャアアアツ!!! ビュバチユウツ!!

斜め上からとび蹴りを食らわして1体を蹴り潰した。ピンクの体液が飛び散る。そこから飛び上がり、真上から鉄槌を下すように垂直に2体目を蹴り潰す。

ストライクボンバー 『てりゃあつっ!!』

シュドオツ・・・ズブシャアアアアンツ!!

3体目に振り向き、ストライクボンバーは瓦割のように鋼の右拳を殴りつけてBLW 01の体を粉碎する。

ストライクボンバー 『どおりゃあああつっ!!』

ズドオグシャアアアアンツ!!!

ゆっくりと立ち上がるストライクボンバー。拳の表面からピンクの体液が滴る。

ストライクボンバー 『まずは3体!!スピーディーにいくぜ
っっ!!』

一方のフレアダイバー。バックパツクの噴射を停止させて着地すると、そこにはガサガサと5体のBLW 01が徘徊していた。逃げ遅れた人々を口に含んでクチャクチャと捕食している。

面前のBLW 01を一掃すると、BLW 02を目標して再び飛び立つフレアダイバー！。

一方の立川ではジェイデッカー達が奮戦する。

Aポイントでガンレイバーが、ガンリボルバーを発砲しながらBLWに発砲する。

ガン、ガン、ガアアンツツ！！

ガンレイバー 『なんて数だ！！対処のしようが……！！』

そう言いながら、補充トレーラーの弾薬を手に取り、新たに弾丸を装填する。そしてBLW 01の群れに撃ちこむ。

ガンレイバー 『でりゃっ！！』

ガン、ガン、ガン、ガアアアンツツ……

Bポイント。弾薬を補充したショットレイバーがショットガンで応戦しつづける。

ヴァスウンツ！！ ジャキン！ ヴァスウンツ！！

ジャキン！ ヴァスウンツ！！

比較的 안전한位置に停車するJバギーの中で指揮が展開される。

吉崎 「新たなデストリアン、2体飛来!! Cポイント付近です!!」

要 「くつ……!! ジェイデッカー、デストリアンに対しての応戦は可能か?！」

ジェイデッカー 「それが……BLWへの対処で……一杯です!!」

要 「くそつ……何か打つ手は……?!」

その時だった。エクスカイザーから緊急通信が入った。

エクスカイザー 「要隊長、聞こえるか?! エクスカイザーだつ!!」

要 「エクスカイザー!! どこにいる?！」

エクスカイザー 「もうすぐ現地に到着する!! それに……ファイバードも向かっている!!」

要 「彼が、勇士郎君が来てくれるのか?！」

エクスカイザー 「ああ!!」

再び千葉。ストライクボンバーが、残りのBLW 01を駆逐する。

ストライクボンバー 『はあああつ!!!』

グシャアアアアンツ!!

左右の手で鷲掴みにした残り2体のBLW 01を地面に一気に叩き潰して殺す。

そのタイミングを見計らったかのように、BLW 03が襲い掛かる。

BLW 03 「クキヨクカカカアアアアツ!!!」

ストライクボンバー 『!!!』

バキイイイツ!!!

カギ爪の攻撃が炸裂し、倒れこむストライクボンバー。さらに押し倒すようにしてBLW 03が組みかかる。

ズシイイイツ!!!

ストライクボンバー 『ぐあッ!!!.....このヤロウツ!!!』

だが、2本の腕を握り掴んで、BLW 03をとめえ投げのよ

うに投げ飛ばす。

グオオオオンツ……ズシャアアアアツ!!!

BLW 03 「クキユコオオオ……!!」

投げ飛ばされたBLW 03だが、素早く立ち上がった。

ストライクボンバーはゆっくりと立ち上がると、BLW 03
に向かって歩を進める。

ストライクボンバー 「格闘戦は、俺の十八番なんadena……
いくぜ!!」

走り出すストライクボンバー。一気に右の拳をBLW 03に
打ち込んだ。

ドオゴガアアアツ!!!

重い一発が胸部に入る。そしてマイトガインのナックルラツシ
ユのように鉄拳を連続で打ち込んでいく。フック、アッパー、スト
リートと激しい殴打のラツシュが開始される。

ストライクボンバー 「おらおらあああつ!!!」

ドオゴオオツ、ドオグゴツツ、バキヤゴオオツ、ズドオガ
アツ、ゴドオオオンツ、ドオガアツ、ズガドオオオツ、ゴガアア
ツツ……

鉄拳ラツシュが続いた後に強烈な正拳突きがBLW 03を吹

マイトガインのスパーク・ボンバー同様の必殺技だ。だが、完全格闘特化型の為、威力は若干こちらの方が上だった。

ストライクボンバー 『後は・・・フレアダイバーか。』

フレアダイバーは、フレアキャノンとフレアブラスターを連動させながら、残りのBLW 01を一掃する。

ビギユイン、ビギユインッ！！ デイダララララアアアアアッ・・・ビギユインッ！！

デイギャゴドオドオゴオオオオッ！！！！

原型を止めない程に破壊。だが、一息つく間も無く、BLW 02の放つ高速プラズマ弾がフレアダイバーを襲う。

バシユシユシユシユシユドオオオッ！！！！

ドオゴオオオオオオッ！！！！

フレアダイバー 『ぐああああああ！！！！』

吹っ飛ぶフレアダイバー。重戦車のように迫るBLW 02。高速弾がフレアダイバーを見舞う。

ドオドオドオドオドオゴゴゴゴゴオオオオオ・・・

爆煙でフレアダイバーの姿が見えなくなる。その時、爆発の中からフレアダイバーが飛び出す。

そして、フレアダイバーの真骨頂たる武装が展開する。両腰に装備されたシリンダー型の砲門が前を向く。右がレーザーガトリング、左がビームナパーム弾になっている、ツイン・バスターシリンダーである。

砲身からBLW 02に向かって撃ち放たれる。

フレアダイバー 『ツイン・バスターシリンダー!!!』

ヴイドウルルルルルウウウウウウ!!! ヴイギ
ユゴオン、ヴィギユゴン、ヴィギユゴオオンツ!!!!

ドオゴギヤガガガガガドオドオドオドオゴオオオオオ
オオオオオツ!!!!

強烈な火力の攻撃がBLW 02を見舞う。断末魔の叫びが響く。

BLW 02 「カカカカアアアアアアアアアアツツ!!!」

地上に着地すると、フットホバーでダッシュしながら旋回攻撃に転じる。腹部左右に隠された二門のレーザーガトリング砲、ブレスト・ファランクスもツイン・バスターシリンダー、フレア・ブラスターと連動して撃ちだされる。

ギユオツ・・・ヴオドウルルルドオドオドオドオゴゴゴゴ
ゴゴゴヴァヴァヴァアア!!!

・・・ズズズズゴオオオ・・・

BLW 02の巨体が碎けて粉碎された。

フレアダイバー 「くっ・・・エネルギー10%までダウン・・・結構な副作用だな・・・。」

千葉の一件は収束に向かう。旋風寺の事後処理班がこのタイミングを見計らって到着する。

事後処理班A 「どうやらあの2機、成功のようだな。」

事後処理班B 「ああ。マイトガインの負担も大分軽減されるだろうな。」

この事の連絡が舞人に伝わる。

舞人 「そうか・・・！！ストライクボンバーとフレアダイバーは成功か！！よくやったと彼らに伝えておいてくれ！！ああ・・・後は任せる！！」

ケータイを切ると、舞人は京都技研の社長と新兵器についてのやり取りを続ける。

舞人 「・・・失礼。話の続きですが、こちらがおおまかな設計図となっております。名は動輪剣。コンセプトとしては、エネルギーを帯びたソードにしたいんです。」

京都技研社長 「ほお・・・これはまた斬新な設計ですね。いやぁ・・・流石は旋風寺さん。」

舞人 「エネルギー技術に長けている京都技研さんならお任せできるものと思った次第です。」

京都技研社長 「いいでしょう！うちの技術部に話をつけましょうー！」

舞人 「そうですか？！ありがとうございます！！」

マイトガインの新兵器、動輪剣の開発が施行される道筋ができた。歓喜の表情を浮かべる舞人。

その頃、立川にファイバードとエクスカイザーが駆けつけた。

エクスカイザー 『チエエエエンジンジツツ！！エクスカイザーー！！！！』

変形したエクスカイザーの横に作業着姿の勇が立っている。

勇 「どうするんだ？エクスカイザー。一気にいくのか？！」

やや遠くで暴れているD 16Bを睨みながらエクスカイザーに問う勇。

エクスカイザー 『そうだな・・・周囲には生体兵器が君臨している。生身では勇が危険だ。一気に融合巨大合体でいくぞ！！』

勇 「オーライっ！！」

不敵にニヤける勇。斃す自信満々のようだ。

一方、ファイバードこと勇士郎は、ファイヤージェットで牽制攻撃をかける。ロックオンカーソルが、D 16Aを捉える。

勇士郎 「ターゲット、ロック・オン！！フレアミサイル、ファイアーッ！！！！」

ドドドドシュシュシュウウウウウウウウウウ！！

！！

大量に放たれたフレアミサイルが、D 16Aに向かう。

つづく

次回予告

立川に2体のデストリアンが飛来する。これに対し、ファイバードとエクスカイザーが立ち向かう。

勇者と忌まわしい存在の激しい剣撃が繰り広げられ、その周辺では、BLWとの戦闘が展開される。立川の街が激戦地に変貌していく……。

次回、新生太陽の勇者 ファイバード・サーガ 第20話 「激震の立川」

立川の痛みだけでも俺は止める。

第20話 「激震の立川」

ファイヤージェットから撃ち放たれたフレアミサイルが、D
16Aに全弾が直撃する。

ズギヤドオゴゴゴゴオオオオツツ！！！！

D 16A 「ガギヤガガアアアツ！！」

爆炎がD 16の表面上を覆った。その頭上を飛び去るファイ
ヤージェット。

ハッチが開き、勇士郎が外へと身を投げて叫ぶ。

勇士郎 「ファイアー・・・ジエエエツツツ！！！！」

真近くにいたファイヤージェットがファイバードへと変形する。
ファイバードの胸部へと勇士郎が飛び込む。

ファイバード 「チエエエエンジツツ！！ファイツバアアドツ
ツ！！！！！！」

意思を灯したファイバードが、D 16Aと対峙する。

両腕の先端から生える、刀にも似た形状の一本の爪を構えるD
16A。爪を振りかざしてファイバードに襲い掛かる。

D 16 「シャギヤアアアアツ!!」

ファイバード 『!!』

ブウウンツ・・・!!

横へそれながらこれをかわすファイバード。だが、縦横無尽に攻撃が襲い掛かる。

D 16 A 「グルルルウ・・・!!!!」

シュンツ、シユオンツ、ブオオオツ、ギユオンツ、シユフアンツ・・・

ファイバード 『ちつ・・・!!ダイナバスター!!』

ダガガガガアアアアツ!!

ドドオドオドオゴオンツ!!

正面から牽制するファイバード。煙幕に包まれたD 16 Aとの間合いを取る為に後方へと下がる。

だが、煙幕を突き抜けながらD 16 Aがファイバードに飛び掛る!

D 16 A 「シュギヤアツ!!」

ファイバード 『速い・・・!!』

グワツと振られた爪がファイバードを突き上げる。

バキヤガアアアツツ!!!

ファイバード 『がぁぁぁあつっ……!!!!』

ズゴオオオオオオオ……

ビル群に激突し、崩れ去るビルにファイバードは埋もれてしま
う。

瓦礫を押しつけて立ち上がるファイバード。だが、既に頭上か
らD 16Aが襲い掛かって来ていた。突き刺すように降下するD
16A。

ドオガギヤアアアアアアツツ!!!

鋭利な一本爪が激しく地面に突き刺さる。砕かれた瓦礫が四散
する。

間一髪でジャンプしてかわしたファイバードが、反撃に出る。

ファイバード 『だりゃぁぁあつ!!!!』

ギユオツ……ドオゴオオオオツツ!!

拳を振りかぶってD 16Aに反撃するファイバード。鋼の拳
が、D 16の頬に直撃した。

だが、踏ん張りながら左腕を大きく振るうD 16A。ファイバードの胸部を斬り払う。

バキヤアアアツツ!!!

ファイバード 『ぐがあああつ……おおお!!』

ディダガガガガアアアアツツ!!!

ドオドオドオドオギヤアアアアアアツツ!!!

ファイバードも踏ん張りながら至近距離から両腕のダイナバスターを撃つ。威力は知っているが、零距离射撃ゆえにそれなりのダメージを与える。

D 16A 「ギユウウウウツツ……!!!」

若干怯むD 16A。そこへさらにファイバードの拳が打ち込まれる。

ドオゴガアアアツツ!!

再び踏ん張り、体制を保つD 16A。両者は睨みあつようにファイティングポーズで対峙する。

一方、エクスカイザーと勇。エクスカイザーがキングローダーを立川の上空に召喚する。

エクスカイザー 『キングローダーアアア!!!』

上空より飛来したキングローダーが、空中で合体形態へ変形。

呻きながらカイザービームを耐えるD 16B。

耐え切ったD 16Bは、左片方のみに生えたショーテル状の爪をふりかざして、咆哮しながらキングエクスカイザーに迫る。

ファイバードと戦闘中の個体に比べ、ずんぐりしている巨躯が地響きを奏でる。キングエクスカイザーに接近すると、左腕を振り下ろす。

D 16B 「ガアアアアアアッッ！！」

ヒュオオオオッッ！！

キングエクスカイザー 『ふんっ！！』

ガキイイイイイッッッ！！！！

右腕でこの攻撃をガードするキングエクスカイザー。左腕をかざし、カイザーショットを見舞う。

キングエクスカイザー 『カイザーショットッッ！！！！』

ガシユオオオッッ！！

ザガシユガッッ！！

D 16B 「ゲギエラアアッ！！」

D 16Bの胸部を裂きながら、カイザーショットのカッターが食い込む。

唾液を飛ばして苦しむD 16B。その隙にキングエクスカイザーはカイザーソードを右脚から抜く。

キングエクスカイザー 『カイザーソードッッ!!』

カイザーソードを両手に握り締めて、D 16Bに切先を向ける。だがその時、カイザーソードに便乗するかのごとく、突如としてD 16Bのショール状の爪が巨大化。斬艦刀のようなスケールとなる。

D 16B 「ギョゴオオオッ!!」

大きく爪を振り下ろし、キングエクスカイザーを叩き斬ろうとする。

キングエクスカイザー 『爪が巨大化?!!!』

ガゴオオオオオッ!!!!

刀身と刀身が激突。両者の力が拮抗する。

キングエクスカイザー 『フンッ……!!』

ガギャゴオオオッ!!

カイザーソードがD 16Bの爪を押し上げるように捌く。

2体が間合いをとりながら睨みあう。

一方で、ジェイテッカー達がBLWの駆除に奮戦する。

迫るBLW 01の群れからバツクしながら移動するJバギー。

葉山 「くそっ!!こいつらあつ!!」

要 「このまま後退だ!!このポイントに居続けねばやられる!!」

吉崎 「まだ周囲に多数健在!!」

高速で後退していくJバギーに迫るBLW 01の群れ。そこへ後方から来たショットレイバーが射撃する。ショットガンの弾丸に砕かれていくBLW 01。

ヴァスンツ!!ジャキン、ヴァスウウツ!!ジャキツ、
ヴァスウウツ!!

ヴァドオオツ、ヴァドオガアツ、ズヴァギヤンツ!!

ショットレイバー 『隊長!!今のうちに後退を!!』

ヴァスンツ!!ジャキ、ヴァスンツ!!ジャキン、ヴァシ
ユウツツ!!

要 「すまない!ショットレイバー!!」

ガンレイバーは、ガンリボルバーの新たな弾丸を補充用のトレ
ーラーで補充する。

ジャキンツ！

ガンレイバー 『一体、何体いるってんだあ?!』

自分に搭載されたセンサーでフィールドを検索するガンレイバ
ー。

ガンレイバー 『まだいやがるか・・・!!』

ビルの角からガサガサと姿を見せるBLW 01。ガンレイバ
ーが発砲する。

ガンレイバー 『出やがったな!!』

ガアアンツ!! ガンツ、ガンツ、ガンツ、ガアアンツ
!!

生体センサーに捉えたBLW 01をJバスターで駆逐してい
くジェイデッカー。

デイギイン、デイギイン、デイギイン、デイギインツツ!!

ドオオドオオドオオオオツ!!!

破裂するように粉碎されるBLW 01。

ジェイデッカー 『このポイントのBLWは駆逐したか・・・』

サーチアイでフィールドを分析するジェイデッカー。調度ファ

イバードの戦闘エリア付近にいる事が割り出される。

ジエイデッカーは援護に廻るべく、要の許可を得る。

ジエイデッカー 『隊長！これより、ファイバードの援護に廻ります！！』

要 「ああ！！任せた！！レイバースは引き続き駆逐を続行だ！！」

レイバース 『了解！！』

狂ったように縦横無尽に両腕の爪で攻撃するD 16A。ズタズタに攻撃を受けるファイバード。

D 16A 「ギャグウウウツ！！」

ドオガアツ、ダガギヤアアツ、ズシャゴオオツ、ギャシャアア、ガガギヤアアツ！！！！

ファイバード 『がはっ……！！！！！！』

ズガアアアツ！！！！

アッパーをくらい、ビルに激突するファイバード。さらにD 16Aは、背をファイバードに見せ、頭から背中にかけて一列に生える鋭利なトゲをバツクアツクで突きつけた。

ズギヤガアアアアアツツ！！！！

ファイバード 『があああああああああああああ
』！』

ビルと共に崩れるファイバード。ファイバードに振り向き、爪を突き刺そうと試みるD 16A。

デイギン、デイギンッ！！

ズガゴオオオオッ！！！！

D 16A 「！！！！？」

その時、ジェイデッカーが放ったレールガンがD 16Aに着弾する。ジェイデッカーに振り向くD 16A。

ジェイデッカー 『立てるか？！！ファイバード！！！！』

ジェイデッカーの声に応えるようにゆっくりと立ち上がるファイバード。

ファイバード 『あ……ああ！！フレーム………ブレスタアアアッ！！！！』

拳を天にかざし、フレーム・ブレスターを召喚。ファイバードと合体する。

ファイバード 『フォームアップッ！！！！』

フェイスガードが装備され、フレームキャノンが置かれた。

ファイバード 『武装合体っ、ファイツバアアアドッッ！！！！！！』

ファイバードの合体直後、ジェイデッカーにD 16Aが襲い掛かる。

バキャゴオオオオオツツツ!!!

ジェイデッカー 『ぐはあああああつつつつ!!!』

ジェイデッカーの胸部に鋭利な爪の突きが直撃、破壊される。

ズズウウウ!!!

吉崎 「ジェイデッカー、胸部損傷!!!胸部損傷率、80%!

!!!」

葉山 「ヤバイじゃないツスカ!!!」

要 「ジェイデッカー、聞こえるか?!!!」

ジェイデッカー 『ぐ……!!!だ……大丈夫です!!!

戦闘継続出来ます!!!』

その時、フレイムソードの一刀がD 16Aの背を斬り裂く。

ファイバード 『はああああつ!!!』

ズギヤアアアアツツ!!!

D 16A 「ギイイイイイ!!!?」

ファイバードが振るうフレイムソードの刀身と、D 16Aが振るう爪が間高い音をたてて、激突しまくる。

ギャガキイイイイイイイツツツ！！！！！

互いの渾身の一刀が激突。小刻みに互いの刃が震える。ファイバードは押し切りながらこの状況を捌く。

ファイバード 『だあああああつっ！！！！』

キャギャアアアツ！！

後方へジャンプしながら間合いをとるファイバード。胸のサンライサーを取り外して、D 16Aへと投げる。

ファイバード 『サン・スライサー！！！！』

フュフオオオオオツ・・・・・・・・・・ザギャアアアツ！

！！

D 16A 「ヴァキャゴオオツ！！」

サンスライサーが爪を切断する。だが、D 16Aは怯む事無く、ジャンプしながら体を丸め、回転しながらファイバードにニードルアタックを繰り返す。

ファイバードはかわす事無く、迫る回転体をフレイムソードの一刀の許叩き伏せる。

ファイバード 「攻めこそが・・・最大の防御っ!!」

ギユファンツツ・・・ズダギヤゴオオオオオオオオオオオオオオオオオオツツツ!!!

思いつきり地面に叩きつけられるD 16A。コンクリートが激しく陥没する。

再び体制を建て直し、手放したJバスターを装備するジェイデッカー。

銃口を崩れこむD 16Aに向けられる。

ジェイデッカー 「ターゲット・・・ロック・オン!」

吉崎 「ジェイデッカー、再び体制を整えました!」バスター、グレーネード・モードに移行します!!」

ゆつくりと上体を起こして立ち上がったD 16Aをサーチアイが捉える。

ジェイデッカー 「移行・・・確認っ!!」バスター・グレーネード、シュートツツ!!!」

ディシュガアアアアアアアアアアアアアアアアアアツツ!!!

ドオゴドウギヤアアアアアアアアアアアアアアアアアツツ!!!

D 16A 「グアガアアアアアツツ!!!」

D 16AはJバスター・グレネードの直撃を受けながらも、踏ん張りながら持ちこたえた。

再びキングエクスカイザー。拮抗していた剣撃後の空気が寸断される。

キングエクスカイザー 『はあああ・・・あああああっつ！』

ドオガアアンツ！！

気合を入れて打ち上げるようにD 16Bの爪を捌く、キングエクスカイザー。同時に体制を崩すD 16B。

その瞬間を逃さず、キングエクスカイザーはカイザーソードを振り、フレイムショットを刀身の切先から撃ち出す。

キングエクスカイザー 『吹っ飛びな！！フレイムショットツツ！！！！』

ギユウゴオオオオオオオ・・・グオゴゴオオオオオオオオツ！！！！

文字通りに吹っ飛ぶD 16B。これによってサンダーフラッシュの十分な間合いが出来る。

キングエクスカイザー 『サンダー・チャージアアアアップ

ジエイデッカー 『Jバスター・グレネードが効かないとは・
・！！』

ファイバード 『支援感謝します！！後は俺に任せてください
！！』

ジエイデッカー 『ああ！！頼む！！』

ファイバードも止めを刺しに掛かる。額のエンブレムが輝き、
フェニックスのオーラを宿す。

ファイバード 『フレームソード・・・チャアアアアジアア
アアアアアップツツ！！』

球体エネルギーを帯びながら、激しく突撃していくファイバー
ド。チャージアップされたフレームソードの斬撃が、D 16Aを
ぶった斬る。

ファイバード 『でやあああああああッ・・・フレイ
ム・スラアアアッシュツツ！！』

ズギヤシャアアアアアアアツツ！！！！

斬り口から夥しい炎が噴出され続けると大爆発を起こし、肉片
を散らしながら粉碎される。

ギユドオゴゴオオオオオオオオオオオオオオオオオオ・・・

ヴァガギヤドオグオオオオオオオオオオオオオオオオ
ツツツツ！！！！

爆炎をバックにフレイムソードを背中に收容するファイバード。
フェニックスのエンブレムが消え、戦闘が終了する。

それとほぼ同時にBLW 01の群れも駆逐され、事態が一応
の收拾をみせた。

ガンレイバー 『ふうーっ！！やっとなりかたか！！』

ショットレイバー 『だが、再び地下から現れる可能性もある
！！』

警察や、レスキュー隊が立川の街に展開する。数多くのパトラ
イトが光る。その中で3大勇者が立ちそびえる。

ジェイデッカー 『ファイバード、君がいなければ正直危なか
った！！エクスカイザーも加勢感謝する！！』

ファイバード 『DESTRIANの駆逐は、俺のやるべき使命で
すから。』

キングエクスカイザー 『我々は同じ使命を持つ仲間だ。』

しかし、今回の一件によって、DESTRIANが強化されている
事にわかに感じさせられてきていた。ジェイデッカーがその事を
口にする。

ジェイデッカー 『今回のDESTRIAN……Jバスター・

グレナードが効かなかった……もしかしたらなんだかの強化が施されてきているのだろうか……?」

ファイバード 「強化……?!」

キングエクスカイザー 「何ともいえないが……宇宙警察機構からは未だにデストリアンに関する情報は得ていない……。」

未だに謎のデストリアンの存在。そしてその強化疑惑……実態がわからない事態が不気味さをかもしだす。

だが、彼らは闘う。闘い続ける事が、今できる事の最善策なのだ。

つづく

次回予告

梅雨シーズン真っ只中。軽音部メンバーの唯は、過剰なまでに楽器のコンディション維持に気を配っていた。梓は身体を張って水から楽器を守った唯を見直す。

その日の学校帰り、漣と律、梓は勇士朗たちと街で会い、カフェ店でのひと時を過ごそうとする。

だが、外の道路の下から新たなBLWが姿を現し、人々を捕食し始める。雨が降り続ける中、勇士朗は飛び出していく。

次回、新生太陽の勇者 ファイバード・サーガ 第21話 「降りしきる雨の中で」

惨状に雨が打ち続ける……。

第21話 「降りしきる雨の中で」

季節は梅雨シーズン真っ只中へと移っていた。

ポツポツと振り続ける雨。朝の教室の窓の外を見つめる漣。

漣 「はあく……梅雨かあ……。」

律 「毎日雨ばかりでやになるなー。」

漣 「……あ!」

律 「んあ?どうした?」

突然思いついたように言う漣。

漣 「いい歌詞思いついたっ!」

早速、フリーペーパーに歌詞を書いていく。

律 「またムズかゆくなりそうな歌詞ができそう……。」

スラスラと歌詞が進んでいく。

律 「でも流石に復活祭までに曲を完成させるのは厳しいぜ?」

澪 「わかってるって……。とりあえず浮かんだから書いてるんだ。」

そこへずぶ濡れになった唯が入ってきた。

唯 「みんなおはよう……。」

澪 「な?!いくら雨だからって濡れすぎだろ!!」

紬 「風引いちゃうわよ?!」

何があつたのか唯は全身がずぶ濡れになっていた。

紬が持っていたタオルで唯の頭をふく。

紬 「おかゆいところはありませんか?」

唯 「ありませーん……ってムギちゃんそれ美容室だよ。」

「

律が腕組しながら唯に尋ねる。

律 「こけたのか?!お約束なのか?!」

唯 「えへへへ……ギターが濡れないようにかばって来たらこっとなっちゃった。」

澪 「もう……しょうがないな唯は……ビニールに巻いて来ればよかつただろう。」

唯 「ホントだねえ……澪ちゃん頭いい。」

澪 「いや、フツーは思いつくだろうっ!」

とりあえず濡れた制服を部室におく事にする。

唯 「ういーっくし!」

紬 「早く着替えないと風引いちゃうわよ!」

律 「復活祭を目前に風邪ひかれたら困るぜえ……。」

唯 「ふももも……。」

澪 「でも、着替えの制服なんてないし……ジャージだって今日持ってきてないしな……。」

その時律が部室の奥から、さわ子お手製の服の数々を引っ張ってくる。

律 「あるじゃん、あるじゃん……軽音部の負の遺産が……!」

澪 「そうか!その手があったな!」

早速それらの衣装から選ぶとる唯。だが、コアラのきぐるみだった。

澪 「何故それを着る??!」

唯 「へ？」

律 「おお?!これ着てみる!これ！」

律が薦める衣装を着てみる唯。制服をカッコよく扱った衣装で、ある意味で違和感はない。

律 「おおー……まるで某ガールズロックバンドみたいだ
!！」

律がその姿をケータイカメラで撮って、写メを送った。

律 「送信っ！」

唯 「ふえ?誰に送ったの？」

律 「さあ……。」

桜工。勇士郎達が教室でたむろしていると、蓮のケータイが鳴った。

)・・・

蓮 「ん?だれだ？」

ケータイを開くと律が写メを送ってきた事を確認する。

「光君にみせてあげて!!」

蓮 「ん?……おお、なるほど!」

俊 「何1人で納得してるんだ？」

蓮 「いや、律ちゃんがこの写メ見ろってな……ほれ、
光っ！」

写メを直視する光。たちまち狂喜乱舞する光。

光 「うひょおおっ!!!」

俊 「何がうひょーだ！」

勇士郎 「なんかスキヤ ダルみたいだよな……ライブで使
った衣装か？でもなんで？」

俊 「大方、雨で半端ない濡れ方したんだろ？それで着替えた
んじゃないのか？」

この俊の一言で光が更に暴走する。

光 「濡れる……濡れる……唯ちゃんが……濡れ……
きゅばあああ!!!」

俊 「うるせーっ！なにがきゅばーだ!!」

蓮 「何想像してるんだか……」

勇士郎 「そういえば今度の土曜日、俺たちゲストで呼ばれる
んだよな？」

俊 「ああ。やっぱり舞台上で何か喋るんだろうな……。」

蓮 「舞台上立ってか……緊張するよなあ……。」

勇士郎 「また、秋山さんの歌が聞けるんだな。」

再び桜高。ギターを置きに梓達が部室にやってきた。薄暗い部屋に不気味に置かれていた濡れた制服にビビル。

梓 「うあ！なにこれ！？」

憂 「ずぶ濡れの制服……？」

純 「なんかコワッ！！」

梓 「なに……嫌がらせ？」

純 「何かの呪いだつたり……桜高七不思議??」

憂 「変な事言わないでよ！純〜。」

梓 「ま……嫌がらせよ！嫌がらせ！許せない！！」

その日の放課後。まだ雨は止まなかった。梓が降り続ける雨を見つめて言つ。

梓 「雨……止む気配がないですね。」

漣 「そうだな。ま、おかげで新しい歌詞ができたけどな。」

梓 「そうなんですか?! 見せてください!」

漣 「ああ、いいよ。」

梓が歌詞の書かれたフリーペーパーを手にとってみる。

梓 (例によつて……とつてもメルヘン……)

綴られた歌詞を読みながら梓は唯をほめた。

梓 「それにしても、唯先輩! 体を張つてギターを守るなんて見直しました! 今朝不気味に干してあつた制服の意味がわかりましたよ!」

漣 (不気味……?)

唯 「えへへ……もつとほめて!。」

梓 「ギターは雨に濡れてそのままにしておくとかビが生えてきちゃうんです! だから、唯先輩のギターを大事にする気持ち、もつと見習わなきゃって思います!」

ほめられた唯が、梓に抱きつく。軽音部ではもう見慣れた光景だが、当事者の梓は拒否的だ。

唯 「んんーあずにゃーん」

梓 「ぢにゃー!」

復活祭の練習中、唯がぎー太の違和感に気づいた。

唯 「ん……？音が変……？」

すると梓がその事について説明する。

梓 「ギターのネックは水分を含むと曲がってオクターブチューニングが狂っちゃうんです。」

唯 「そうなんだ……確かに半音の半分の半分ずれてる……。」

梓 「チューナー使わずに解っちゃうんですか！！？」

唯 「うん、そだよ。あずにゃん直して。」

梓 （絶対音感の持ち腐れ……。）

その日の帰り、漣、律、梓の3人で帰路を歩く。

漣 「やっぱり心配だな……ベースを学校へ置いてくると……。」

律 「明日学校へいったらなかったりして……。」

漣 「変な事言っな！律！！」

梓 「ムッたんが心配……は！」

律 「ムツタン？ははーん……梓も名前つけたんだな？」

梓 「うう……別にいいじゃないですか！あれ？あれは……」

律の後方に勇士郎達が歩いているのを確認する梓。律もそのほうへ振り向く。

律 「へ？」

漣 「勇士郎君たちだ！おーい！」

歩いていた勇士郎が振り向く。

一行は合流して、カフェに立ち寄る。

漣 「勇士郎君たちも今帰り？」

勇士郎 「まあね……学校の教室ですつとたむろしてただけだど……。」

律 「私たちとやってる事一緒じゃん！」

蓮 「でも律ちゃんたちは部活やってるっしょ？」

律 「まあ……毎日練習してるけどな……。」

梓 「それはココ最近じゃないですか！それまでほとんどティータイムしかしてなかったじゃないですか……！」

律 「うるさいなー、陰じゃしてたもーん！」

梓 「ぷうー！」

俊 「まあ、まあ……。」

その時、外の道路で轟音が鳴り響いた。

ゴゴゴゴオオオオオンツッ！！！！

それと同時に店内にも地震のような衝撃が伝わる。

女子たち 「きゃあああー！」

男子連中 「うおおお?!」

衝撃が収まると、外に奇怪な叫び声がこだまする。

? 「グケアアアアアアアアツ!!!」

だが、俊は外の声よりも梓に気遣いを見せる。

俊 「だ、大丈夫か？」

梓 「はい……ちょっと紅茶が掛かっちゃいましたけど。」

俊 「ああ……ほら、これでふきな。」

タオルを取り出して梓に渡す俊。お互いに若干赤くなっている。

梓 「あ、ありがとうございます……。」

律 「なんだ？またデストなんかかあ？」

蓮 「わかんねー。大丈夫か？」

律 「あー、平気！平気！」

漣の手を握って彼女をおこす勇士郎。

勇士郎 「秋山さん、大丈夫？」

漣 「うん。ありがとうございます。今は一体何?!」

勇士郎 「わからない……デストリアンじゃない！」

漣 「え?!」

その時、外を見ていた光が声を上げる。

光 「なんだありゃあ!??」

勇士郎は思わず降り続ける雨の中へと飛び出す。

漣 「あ！勇士郎君!!」

勇士郎 「あれは……!!?」

外に出た勇士郎は巨大生物を目視する。その姿は、肌色の肌、がに股のカエルのような体、頭にカタツムリのような目が生えた巨

大生物だった。

そう。デストリアンではない、生体兵器・BLWの新種だった。楕円形の口から長い舌が飛び出る。粘着性の強い舌が、人々をからめとる。

グチュバツ!! バクンツ!!

勇士郎 「な・・・?! くそ!! ファイアーージェエツトツツ
!!!!」

雨雲の彼方からファイアーージェットが飛来する。ファイバードへと変形。道路に着地する。

勇士郎 「はあぁっ・・・!!」

ギユアツ!!

勇士郎がフェニックスのオーラを帯びて一気にファイバードの胸に駆け抜けて飛び込む。

ギユオオオオオオオオ・・・キユイイインツ

ファイバード 『チエエエエエエンジンツ!! ファイバアアアアアアアドツツ!!!!』

BLW 04 「グケケケケツ!!」

ファイバード 『はあぁあぁっ!!!!』

ガゴオオオツツ!!

BLW 04 「ゴゲヤアアアアアツツ!!」

パンチを繰り出してBLW 04を殴り飛ばすファイバード。
そして、足元のカフェにいる漣達に叫ぶ。

ファイバード 『ここは危険だ!!早く別の場所へ!!』

漣 「うん!みんな、いくぞ!!」

漣が珍しく、先頭に立って一同を避難させる。

周囲の市民たちも急いで逃げ始める。

その中、走って逃げるサラリーマンが、梓にぶつかりながら走り去っていった。

どんっ!

梓 「あうっ!」

ばしゃっ

倒れた拍子に、水溜りに倒れてしまう。俊が急いで梓を起こした。

俊 「おい、大丈夫か?!まったく・・・あのリーマン野郎・・・!」

梓 「私は大丈夫ですよ……。」

俊 「でもよ……ずぶ濡れじゃねーかつ。」

俊が梓を起こしながら、持っていたもうひとつの大きめのタオルを梓に手渡す。

俊 「とりあえずこれでふいて！今は安全なところへ行こうぜ！」

梓 「はい！」

雨の中戦闘状態となるファイバードを見つめる律。

律 「弟がみてたらさぞ大喜びだろうなあ……。」

蓮 「なーにのんきな事言ってたんだ！行くぜ！！！」

律 「あー、はいはい！」

律はこのシチュエーションに慣れてきたのか、若干の余裕を持っていた。

光 「勇士郎……！！！」

光がファイバードに振り返りながら再び走る。それを確認したファイバードは、BLW 04にパンチを繰り出す。

ファイバード 『よし！みんな逃げたか！！さあ、いくぜ！！』

カエルもどき！！！！』

グアツ……ドガアアアツ！！

BLW 04 「ゲゲアアアツ！！」

踏み込んで頬に鋼の拳を叩き込む。後方に突き飛ばされるBLW 04。だが、大口を開けて、長い舌でパンチのように攻撃を仕掛ける。

ビュグアツ！！

ドオゴガアアアツ！！

ファイバード 『ぐあっ！！くっ！！おお！！』

ドオガアアアツ！！

踏ん張りながらもう一発パンチを顔面に打ち込むファイバード。

その時、長い舌がファイバードを捕らえて締め上げた。

ビュビュルツツ！！ ギュバシツ！！

ファイバード 『くそっ！！』

ギギギギギ……

ファイバード 『ぐおおお……！！！！』

そのまま舌を使ってファイバードをビル街へとブン投げる。

ゴアアアツ！！

ファイバード 『っ……！！！！！！』

ドオガギヤアアツ……ゴゴゴゴオオ……

ビル街に落下し、瓦礫に埋もれるファイバード。そこへ更に驚異的な跳躍力でBLW 04が舞い降りる。前脚がファイバードの胸部をへし押さえるカタチで着地する。

ガダギヤアアアアアアアアアアツ！！！！

ファイバード 『がはああああ……！！！！！！』

重力によって倍加された衝撃がファイバードを直撃する。BLW 04は、そのままガンガン踏み続ける。

ドオガンツ！！ドオガン！！ガゴオドオオ！！ガアアンツ！！ドオオオツ！！！！

ファイバード 『がはっ！！ごふっ！！ぐごはあっ！！がっつ！！！！』

その光景を漣が痛々しい想いで見つめる。

漣 「ああ……勇士郎君っ……！！！！」

だが次の一撃を鷲掴みで阻止するファイバード。そのままBL

W 04を蹴り上げる。

ガッ！ ドオギャガッ！！

B L W 04 「ギユゲアアツッ！！」

ズズウウウ・・・

吹っ飛ばされ地面に落ちるB L W 04。そのタイミングでフレイムブレスターを召喚する。

ファイバード 『フレイム・ブレスター！！』

雨が降り続ける雨雲から、炎の戦闘機が飛来する。飛来すると同時にフレイムキャノンが火を吹く！

ヴィギュイイインッ！！ ヴィギュイイインッ！！

ドオギャゴゴオオオオオツッ！！！！

B L W 04 「キョギャアアツッ！！」

苦しむB L W 04をよそに、フレイム・ブレスターがファイバードと合体する。

ファイバード 『フォームアップ！！武装合体、ファイツバアアアアドツッ！！！！』

B L W 04は、武装合体を成したファイバードに舌で攻撃をかけるが、これを左手で鷲掴まれる。

ガッ!!

ファイバード 『フレームソードッ!!』

ズヴァシュガッ!!

BLW 04 「ギユギユウギョガギョゴゴゴッ!!」

背中から取り出したフレームソードで舌を切断する。激痛に暴れまわるBLW 04。

暴れるBLW 04を叩き伏せるように、フレームソードで滅多斬りに斬りつける。

ファイバード 『でやああああ!!』

ズシュガッ!!ザシュンッ!!ザギャガッ!!ズバアアアッ!!ズシャアアンツッ!!

BLW 04 「ゲゲゲゲウウツ!!」

がに股の前脚の鍵爪を振るい、ファイバードに反撃するが、あっさりとフレームソードに寸断される。

ズバシャアアアアッ!!

ファイバード 『フレームソード・・・チャージアアアアアッ!!』

すると隣の席の隣の立花姫子が話しかける。

姫子 「愛してるねー。まるでギターが彼氏みたい。」

唯 「えへへへ。そーなんだよあ〜。」

姫子 「いいなあ〜熱中できるものがあつて……。」

部室に一目散に漣が入ってきた。一晩置いていた漣のベース、「エリザベス」の安否が心配で仕方がなかったのだ。無事に置かれていたエリザベスにホッと撫で下ろす漣。

漣 「はあ〜よかった。唯が盗まれたらどうしようとか言うから、あんな目に遭いつつも心配になつてたんだよな……。」

漣はエリザベスを抱きよせて、頬をよせてすりすりする。

漣 「エリザベスウ……。」

愛着たつぷりのエリザベスを抱擁する漣。かわいらしい一面である。そんな一面を律と紬、梓が揃ってみていた。

律 (にやにや)

紬 「漣ちゃん、かわいいところあるのね〜。」

梓 「漣先輩……なにやってるんです?」

漣 「ぎゃあああああああ……!」

つづく

次回予告

生体兵器・BLWを保有していた組織の取調べが終わり、驚くべき事実が判明する。

そんな中、黄昏時を運行する旋風寺線の線路上の地下からBLWが出現する。この事態に紂は巻き込まれてしまう。

総本社に戻る途中だった舞人は、この事態に対しバトル特急・ストライクボンバーとフレアダイバーを出撃させた。

次回、新生太陽の勇者 ファイバード・サーガ 第22話 「黄昏の鉄道を襲う影」

2体の勇士がマイトガイン（勇者）に代わって嵐を巻き起こす。

第22話 「黄昏の鉄道を襲う影」

BLWが出現してから約一ヶ月余り。

警視庁に摘発されたBLWを創っていた組織のメンバーの取調べがようやく終了する。

冴島がそこから得た取調べの情報を要達に通達する。

冴島 「ようやく摘発した例の組織の取調べが終わった。」

要 「そうですね!」

冴島 「この組織は表向きにはケミカルコーポレーションという薬品会社であるが、その裏では、裏社会との繋がりがあり、人道外れた生物研究をしていたようだ。誘拐した市民を実験台にしてな」

要 「なんてことを・・・!!!!」

冴島 「そこから更に行き過ぎた結果、生体兵器の研究に行き着いたというわけだ。」

要 「成る程・・・ですが、今回の一件で組織は壊滅。事態は收拾するわけですね?」

冴島 「だが、決して清々しいものではない。これはある意味で人類が生み出した最悪の災害となるだろう……。」

冴島の重い口調。要は事態がいい方向へは進んでいないことを察する。

要 「どういことですか？」

冴島 「組織そのものは事実上崩壊した。だが、崩壊を予見した彼らは、この関東地区を中心にBLWを無作為に日本列島の地下に放ったそうだ……。」

要 「なんですって！！ということ……！！！」

冴島 「新たなバイオ生物災害が発生する事を意味している。既に先日、新たな種のBLWが相模原の桜ヶ丘周辺の市街地に出現している。この生物は主に3種類のものしかなかったようだ。恐らく突然変異を起こしたタイプが、今回の04だろう。情報によれば、火鳥クンが駆逐してくれたようだ。更にそれとは別に、繁殖能力のある個体を放っているらしい……！！！」

要 「デストリアンが飛来し続ける中で更にこのような……！！！」

冴島 「繁殖能力のある個体は依然正体・所在共に不明だが、何処かの地中に潜んでいる事は確かなようだ。以前にも言ったが、こちらのほうがある意味深刻だ。今後とも優先的にBLWを叩いてもらう！」

要 「はい……」

この事実が舞人にも伝えられる。舞人はロコモライサーで総本社へ帰る道中だった。

舞人 「そんな事態にこの国は見舞われたのか!!」

要 「そうだ！ある意味ではデストリアンよりも厄介だ!!」

舞人 「悪が残した産物・・・なんて忌々しい存在だ!!」

要は彼らが元は実験体にされた人間である事は伝えなかった。若さゆえにその事実を知れば、戦闘に差し支える事を予見した為だ。

要 「とにかくこれからも奴等は関東地域、あるいはその周辺に出現するだろう。有事には頼む!!舞人!!」

舞人 「もちろんだ!!俺達の正義、貫いてみせるぜ!!」

その日の夕方。紬がいつも通学で利用している旋風寺路線。

紬が列車に乗り帰路に着く。

紬 (もう少しでライブね・・・舞人君は仕事で見にこれないけど・・・)

舞人にメールを打とうとする紬。だが、充電し忘れていた為に電池が切れてしまう。

絀 (いけない! 私ったら充電するのを忘れていたわ!)

その時だった。突如として巨大生物が出現する。

ドオガアアアアアッ!!!!!!

絀 「きゃあああ!!」

路線の地下から出現した為、線路が破壊され、通過していた電車が無残にも破壊される。

その生物は危惧したとおりのBLWの変種、BLW 05だった。巨大な筋肉質の体に、異様に巨大な腕。強力な鍵爪。肌色の皮膚に、頭部はBLWに共通するカタツムリ状の目が確認できる。さらに出現した穴からBLW 01の群れと、02が出現する。

相模原と横浜間で起きたこの惨劇は瞬く間に舞人に伝えられる。

舞人 「わが社の路線上にBLWが?!ここから向かうには今しばらくの時間が掛かる……!!今すぐバトル特急隊を向かわせてくれ!!」

旋風寺コンツェルンのドックからトレーラー特急とコマンド特急が発進する。

ドック内放送 「トレーラー特急、コマンド特急発進準備に移行。ゲートオープン準備。」

ゲートがオープンし、路線上にトレーラー特急とコマンド特急

が配置につく。

ストライクボンバー 『トレーラー特急、出るぜ!』

フレアダイバー 『コマンド特急、出ます!』

二両のバトル特急が現地に向かって発進していく。

一方現地では、デストリアンのごとく、破壊行動を続けるBLW。重戦車のごとく街を突き進むBLW 02。プラズマ弾を撃ち出しながら関節音を出して進む。

BLW 05は周囲の列車や駅を叩き潰しながら暴れる。

BLW 05 「ゴゴガアアアアアアッ!」

BLW 05が過ぎ去った後には、脱線した車両が倒れている。その車両の中には、あるう事が、紬が乗っていた。彼女は気を失って倒れていた。

それからしばらく時間が経過した後に紬は意識を取り戻す。

紬 「う……ん……一体何が……」

気を失っていた紬が目を開け周囲に意識を向けると、電車が潰され、乗客のほとんどが死亡していた。潰された事で、皮肉にも出口が確保されていた。この車両で生き残っているのは紬だけのことだった。

紬 「ひどい……!!!!なんで……こんな事に……痛い

「!

復活祭数日前に紬を見舞う悲劇。横転の際に負った怪我が痛みを伴なわせる。

紬 「と、とにかく早く出なくちゃ……うんしょ……。」

ズドオゴオオオオオツ!!

紬 「きゃああ!!」

地震のような衝撃が襲う。思わず、舞人の名を口にする紬。

紬 「ああ……舞人君!!」

その時、BLW 01が紬のいる車両へと迫っていた。咀嚼音のような音をたてて接近する。

駅の周辺には、10体のBLW 01が跋扈していた。

紬 「ここに居ただけじゃ危険だわ!!早く逃げなきゃ!!」

潰された事によって出来た空間から走って抜け出す紬。後方からは紬を認識したBLW 01が追う。

こんな所で死ぬわけにはいかなかった。復活祭の為にも。放課後ティータイムの為にも。そして彼氏の舞人の為にも……紬は必死に走る。

だが、線路の走りづらい地形に足をとられ転んでしまう。

紬 「あ！」

ダシヤッ

紬 「ううっ……！！！」

BLW 01 「クケキヤアアア……。」

口を開いて迫るBLW 01。絶体絶命。

紬 「いやああああ！！！」

その時、ギリギリでストライクボンバーとフレアダイバーが到着する。

ストライクボンバー 「チエエエエンジッ！！ストライクボンバー！！！」

フレアダイバー 「チエエエエンジッ！！フレアダイバーッ！！！」

変形すると、ストライクボンバーが紬を捕食しようとしていた個体を着地と同時に踏み潰す。

ストライクボンバー 「でやあああああっっ！！！！！」

グシヤアアアンッ！！

紬 「きゃああああ！！！」

ギョオツ・・・デイガダダダダダダダダガガアツツ
！！

ドオドオドオドオオオオツツ！！

右腰に装着されているツイン・バスターシリンダーのガトリングシリンダーの銃身が持ち上がり、銃口がBLW 01たちに向けられる。

フレアダイバー 『ガトリングシリンダーッッ！！』

グイドウルルルルルルルルルルルルルルルルウウウウツ

ッ！！

デイギヤガガガドウゴゴゴゴオオオオオツツ！！

ガトリングシリンダーから撃ち出されるビーム弾に、次々に駆逐されるBLW 01。

駅周辺のBLW 01を一掃すると、フレアダイバーがBLW 02に向かう。バックパックから炎を噴射して飛び立つフレアダイバー。

細の安全を確保すると、ストライクボンバーが、BLW 05に向かって走り出す。が、その面前にBLW 03が地下から姿を現した。

ドキヤコオオオオツツ！！

ストライクボンバー 『おつとお？！』

ここから踏み込んで十八番のナツクルラツシユをブチかます。

ストライクボンバー 『いくぜ!!!ナツクルラツシユッ!!!』

ドオゴオツ!!!ガゴンッ!!!ズドオガッ!!!ドオゴガンッ
!!!ドオオオツ!!!ゲオゴツ!!!

ストライクボンバーの拳がBLW 03の肉体を打つ。強烈さの余りに肉体が陥没しはじめる。

BLW 03 「クケアツ・・・!!!」

ストライクボンバー 『まだ倒れんなよ!!!もつと打ち込むぜ
っ!!!』

ドオゴン!!!ゴガアアッ!!!ドオツ!!!ズドオツッ!!!グ
ドオゴツ!!!

一旦パンチを止める。

ストライクボンバー 『これでも喰いな!!!腹減ってんだろ?
』

ストライクボンバーは、脚に装備されたドラム缶状の爆弾、ス
トライクボムをBLW 03の口に押し込んだ。

ストライクボンバー 『ぶっ飛べ!!!ダイレクト・クラッシャ
ーッ!!!』

ズドオゴツ ヴァギユドオゲガアアアアアアアア

ツツ！！！

押し込んだ爆弾に思いっきり拳をぶち込むストライクボンバー。頭部もろとも木端微塵に砕け散る。

一方、フレアダイバーは、BLW 02にフルオープンアタックで攻撃をかけていた。

フレアブラスター、ガトリングシリンダー、ナパームシリンダー、ブレストファランクス、中央のブレストガードユニットからフレアキャノンが火を吹く。

デイドウドオドオドオドオオオオドウインドウイン
ドウイン！！ドオドオドオオ・・・

ドオギヤゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴオオオオオ・・・

BLW 02 「キュアアアアツ！！」

断末魔の悲鳴をあげるBLW 02。

フレアダイバー 「もう少しでエネルギーが充填される。もつともその前にやつの肉体がもつかな？どの道撃ち砕くまでだ！！」

ドオドオドオギユダラララララドオドオドオドオドオオ
オガガガガガドオオオオ・・・

皮膚がスタボロの状態になるBLW 02。頭部の形状も崩れかけている。フレアダイバーはホバーダッシュして旋回しながらフルオープンアタックを続ける。360°からの射撃を受けて、瀕死

ストライクボンバー 『こいつはこの前のやつの変種か?!だが、ぶっ飛ばすまでだ!!』

巨体を起き上がらせると、巨大な腕で攻撃を繰り返す。豪腕がストライクボンバーに激突する。

ドオギャゴオオオオツツ!!!

ストライクボンバー 『ぐおおお!!』

ガードして持ちこたえるが、反動はすさまじい。その時、後方からフレアダイバーがツイン・バスターシリンダーで攻撃をかける。

フレアダイバー 『加勢する!!』

ドオドウルルルルルルルルルルルウウウウ、ドウヴアゴツ、ドウヴアゴツ、ドウヴアゴオオオオツ!!

ズズズズグオオオオオツ!!

ストライクボンバー 『ああ!!サンキュー!!どおりゃああっ!!』

ドオゴガアアアッ!!

パンチを打ち込むストライクボンバーだが、BLW 05も豪腕をふるって再度反撃する。これによって吹っ飛ばされるストライクボンバーとフレアダイバー。

BLW 05 「ギユギイイイイ!!」

ドオドオガアアアツ!!

ストライクボンバー&フレアダイバー 『ぐああああ!!』

地面に倒れこむストライクボンバーとフレアダイバー。

ストライクボンバー 『くっ!!やるなあ・・・フレアダイバ
ー!!ダブルフォーメーションいくぜ!!』

フレアダイバー 『ああ!!』

2機が起き上がり、BLW 05を挟み撃ちにする形で展開す
る。

BLW 05の正面で、再びストライクボムを手にとってファ
イティングポーズをかまえるストライクボンバー。後方からもフレ
アダイバーが標的をロックオンする。

フレアダイバー 『いくぞ!!ストライクボンバー!!』

ストライクボンバー 『おっしゃああ!!』

ストライクボンバーが、BLW 05の懐へとグツと踏み込む。

ストライクボンバー 『ダイレクト・クラッシュャーッ!!』

フレアダイバー 『フルバースト・アタックッ!!』

「!!さつきから連絡ができない!!」

マイトガイン 「舞人……。」

その時、ストライクボンバーから連絡が入った。

ストライクボンバー 「舞人!!こちらは片付けた!!それと居合わせた姉嬢は、俺が安全な場所へ避難させた!!安心してくれ!!どうやら携帯の電池が切れて連絡ができなかったそうだ!!」

舞人は歡喜に満ちる。

舞人 「そうか!!ナイスだ!!ストライクボンバー!!これで差し支える事無く横浜へ向かえる!!さあ急ぐぞ!!マイトガイン!!」

マイトガイン 「ああ!!」

学校帰りに漣達と遊んでいた勇士郎。帰路につく途中でデストリアンを察知する。

勇士郎 「……!!」

光 「お?また来るのか?!奴等が!」

勇士郎 「ああ!!行ってくる!!」

律 「大変だよな〜毎回!」

漣 「無事に帰ってきてね……?」

勇士郎 「うん！！大丈夫！！」

駆け出す勇士郎。その姿を漣が勇士郎の背を見ながら送り出す。

漣 「今度の復活祭の時は何も起こらないといいんだけどな。」

律 「まあな……でもこればかりはある意味自然現象だし……。」

漣 「自然現象か……。」

黄昏の空を見つめる漣。その向こうに異様に輝く流れ星を見る。

漣 「あ、流れ星……。」

光 「お！ホントだ！」

だが、それはデストリアンの禍々しい流れ星だった。

つづく

次回予告

横浜に2体のデストリアンが襲来した。街を破壊しつくすこれらに、ファイバードとマイトガン達が立ち向かう。だが、従来のデストリアンに比べ明らかに強くなっていた。

漣や紬が闘いに身を投じる想い人を想う。その向こうで勇者達は

思いも寄らない苦戦を強いられるのだった。

次回、新生太陽の勇者 ファイバード・サーガ 第23話 「横
浜SOS」

黄昏の下で悪循環がうごめく。

ギユヒユヒユヒユルツ……ドオガゴゴゴオオオオオオツ！！

さらに触手の先端で人々を捕らえ、掃除機で物を吸い上げるように人々を呑み込んでいく。

ギヤチュゴツ

市民 「ぎゃぐうぐう……！！！！」

ギユチュルルルル……

無残な光景が横浜の街に広がっていく。

さらに腐った抹茶のような色の個体も姿を現す。頭部にはヒレ状の突起物が左右に分れ、目はゴーグル状で赤く光っており、口らしきものがない。筋肉質の敵つい身体に両肩から生えた巨大な角のようなニードルが目立つ。

D 17と同等の巨大さを誇るD 18。巨体と怪力で破壊の限りをつくす。

D 18 「ゴオゴオオオオツ！！」

もはや賑わいを見せていた街の姿は何処にもない。

桜ヶ丘。いつも仲間達とたむろする高台の場所へ、漣達と別れ

た勇士郎がやってくる。上空へ向かって勇士郎が叫ぶ。

勇士郎 「ファイヤージェエエエツツツ!!」

黄昏の上空からファイヤージェットが飛来し、山の斜面の上でホバリングしながら止まる。

機体中央部のハッチが開き、勇士郎が乗り込む。各計器類を操作し、表示されたモニター画面を見つめる。全ての計器がオールグリーンを示す。

勇士郎 「ファイヤージェット、テイク・オフ!!」

レバーを押し込むと、バーニアから青白い炎を噴射しながら加速、その場を飛び立っていく。

ギュゴツツ!! ドォアアアアアアアツ!!

勇士郎 「今度は横浜か・・・!!」

高速で過ぎ去る面前のモニターに映る景色。黄昏の空を勇士郎が鋭い眼差しで見つめる。

レバーを更に押し込んでファイヤージェットを加速させる。

ギュゴオオオオオオツツ!!

一方で、ロコモライザーも現場へと急行する。サイドアーマー部には巨大な剣が実装されている。

そう、完成した動輪剣である。後方からはライナーズが追従する。

舞人 「横浜までこのまま一気に行く！！目標との距離がおおよそ500mのところで合体フォーメーションをとるぞ！！」

マイトガイン 『わかった！！ん？！フレアダイバーから通信が入った！！』

フレアダイバー 『俺たちもそちらへ急行する！！合流して援護する！！』

舞人 「そうか！！だが、デストリアンは手強いぞ！！」

フレアダイバー 『了解！！』

路線上一気にロコモライザーが加速していく。一方でストライクボンバーとフレアダイバーも特急モードに変形し、新横浜駅へと急行。マイトガインとの合流を図る。

その姿を紬が見送る。少し強めの風が紬の髪をなびかせる。

紬 「舞人君……！！」

そこへ旋風寺のエージェントが紬の許へ訪れ、紬を送迎する為に車へ案内する。

旋風寺エージェント 「旋風寺コンツェルンの者です。紬様、このたびは大変な災難でした。我々の方でご自宅へ送迎致します。

「べじじじちちら入……。」

紬 「すみません、ありがとうございます……。」

紬は用意された車に乗り込む。車が走り出すと、流れる黄昏の景色に目を向ける。

紬 「キレイな夕焼け……。」

川沿いの土手に寄り道しながら漣、律、梓、光、俊が歩いてい
る。向こう岸の街が夕焼けに溶け込み、きれいな景色をつくってい
る。

梓 「今日の夕焼け……キレイですね……。」

俊 「そうだなア……吹いてくる風もいいしな……。」

光 「まだ梅雨明けしてないのにこの前の気候が嘘みたいだぜ。」

ベースとカバンを提げながら漣が立ち止まって黄昏の空を見つ
める。風に吹かれなびく髪が美しくも見える。

律 「漣？どうした？おいてくぞー。」

律が呼び止めると漣がみんなに呼びかける。

漣 「なあ、ちょっとだけ座っていかないか？」

一同は土手にしゃがみ込んで一息つける。

光 「ふいー……ああー唯ちゃん……なんでいつもいな
いんだ。」

俊 「なんだいきなり?!」

梓 「光さんは、唯先輩が好きなんですか?!」

梓は何だかんだで知らなかった。

律 「知らなかったのか?よく相談持ちかけられるんだ。」

光 「いや……。」

でれつとする光。

梓 「でも、唯先輩はギターにくびっただけですよ?」

光 「それはわかってるけど……それでも好きなんだよう
っ!」

俊 「何、涙目になってんだお前??」

光 「はうあっ!!泣いてない!!」

梓 「なんかオモシロイ人ですねー、光さん。」

漣 「唯は私達とは家が逆方向だからな……しょうがないよ。」

「。。。」

律 「いつそ遊びにいこうぜ?! 私達も付き合っからさ! その
ほうが手っ取り早いつて!」

光 「お、おう!」

そこへ川原を彷徨っていた子猫が俊の許へと来る。

俊 「おお!子猫!」

「にゃ〜、みー、みー」

俊は子猫を抱くやいなや、へにゃへにゃになる。

俊 「どこからきたんでちゅか?かわいいーなー、おまえ〜!あ
ははは!」

「にゃ〜」

俊 「梓も抱いてみるか?」

梓 「はい!」

俊が梓に子猫を渡す。梓は満面の笑みで抱きかかえる。

「にゃあ〜」

へるへる。。。

梓 「わゝホントかわいいです!! きゃはは、ぺるぺるしてくるっ」

「みー、みー」

梓 「あははは、かわいい〜」

俊 「ホントだな! まるで梓みたいだな。」

梓はムスツとなる。俊にも猫呼ばわりされたからだ。

梓 「も〜・・・俊さんまで私を猫呼ばわりですかっ!」

俊 「いや、別に悪い意味で言ったわけじゃないぜ? 梓もそれだけ可愛らしいってことだ。」

梓はこの一言で赤くなる。子猫も返事するように鳴く。

「じゃ〜」

俊 「おまえもそう思うか? こいつ!」

梓 「もう! このコつたら・・・きゃはっまた舐めてきた!」

俊と梓が揃って子猫とじゃれる。律と光がソレを見ながらボソッと呟く。

律 「ネコがネコとじゃれてる・・・。」

光 「いいーなー俊は・・・。」

漣 「くすつ……。」

この光景に笑みを浮かべながらも漣は思う。

漣 (こんなに平和な風景が目のあるのに、勇士朗君は闘っているんだよな……今。)

黄昏の空からふと横浜方面の空へ目を向ける漣。蒼く染まっっていく空が目映る。

その視線の先の彼方では、ファイヤージェットが2体のデストリアンに向かってフレアミサイルを撃ち放つ。

ドオシユシユシユウウウウウウ……ドオドオドオドオドオゴオオオン!!!!

デストリアン共 「ギュギャガガアアッ!!」

爆煙に巻かれる2体のデストリアン。

その隙に勇士朗はファイヤージェットから飛び降りる。

勇士朗 「ファイヤー……ジェエエエエツツツ!!!!」

至近距離にいたファイヤージェットがファイバードへと変形をはじめ。ファイバードに変形したファイヤージェットが横浜に降り立つ。

勇士朗 「でやあっ!!」

光の球体となった勇士郎が、フェニックスのオーラを纏って高速でファイバードの胸部に飛び込む。

ファイバード 『チエエエエンジツッ！ファイバアアドツッ！！！』

ファイバードが起動した矢先に、D 18が、ゴーグル状の目から瞬間発光レーザーを放った。おもむろに直撃を受けるファイバード。

ヴィギユガッ！！

ズガアギャドオオオオオツッ！！！！

ファイバード 『がああああああ！！！！』

吹っ飛ぶファイバード。道路をスライドするように吹き飛ばされる。そのまま容赦なくD 18は、3本の太い爪をファイバードに突き刺す。

ギャゴオオオオオツッ！！！！

ファイバード 『ぐほおおおおっ・・・・・・・・！！！！』

一方のD 17はそのまま北上するように進撃していく。新横浜駅を横断。線路や地表を破壊していく。その西の方角からは口コモライザーが接近していた。

マイトガイン 『見えた！！デストリアンだ！！！！』

舞人 「よし！！レエエツツ！！マアアイトガインツツ！！！！」

BGM レッツ・マイトガイン

ロコモライザーが線路から飛び立ち、ライナースと共に菱形を形作って空中に並ぶ。

ロコモライザーの後部が真っ二つに割れ、各部のジョイントが可動し、マイトガインの脚を形成していく。そして下半身が反転してねじれる。

ライナースが左右に分れて、それぞれがマイトガインの腕へと変形していく。

機体を立ての状態へと動くロコモライザー。それに平行してライナースの接合部に向け、レーザーセンサーが放たれ、左右に付いたライナースの接合部にリンクさせる。そしてドッキング

ロコモライザーの先頭部が前に折りたたまれる。連動してコックピットも動く。

舞人 「マイトガイン、テイク・オフッ！！」

左右両手首が飛び出し、蒸気が噴出。ボディーは完全にマイトガインのカタチになる。

頭部が現れ、両眼のカメラアイが発光する。鋼の拳を衝突させて正拳突きを決めた。

D 17の面前に着地するマイトガイン。登場時の決め台詞を吐き飛ばす。

マイトガイン 『銀のつばさにのぞみをのせて、灯せ平和の青信号！！勇者特急マイトガイン、定刻どおりただ今到着！！！！』

D 17 「キュゲアアアアアアアア！！」

舞人 「牽制する！！フルシューティングッ！！」

マイトガイン 『了解だっ！！フルシューティングレーザーッ！！！！』

ヴユギユデイガガアアアアアアアアアッ！！！！

ズダダダキヤガアアアアアアアアアッ！！！！

一斉に撃ち出されたマイトガインの射撃武装がD 17のウツボ状の身体に直撃する。爆炎が上がる中、D 17はマイトガインに牙の触手を飛ばして襲い掛かる。

ビシユルルルル！！ ビシユシユシユシユシユシユルルルッ！！！！

ドオガギヤガガガガアアアアッ！！！！

マイトガイン 『何だどっ？！！・・・くおああああ！！！！』

舞人 「うああああ！！！！」

ズドオオオツ!!!

鋭利な触手の牙がマイトガインにダメージを与えて吹き飛ばす。さらに触手の顎がマイトガインを捕らえ、投げ飛ばす。

ガガガガッ!!

マイトガイン 『・・・っ!!しまったああっ!!!!』

舞人 「ぐうっ!!!!」

ギユオアアアア・・・ドグオオオオオツ!!!!

思いつきり投げ飛ばされ、激しい衝撃がマイトガインと舞人を襲う。ビル街に倒れこむマイトガインの中では、激しすぎる衝撃の為、舞人は気を失ってしまっていた。

マイトガイン 『ぐおおお・・・っ!!!!予想以上に手強い!!!!舞人!!無事か?!!・・・!!舞人?舞人!!!!』

マイトガインの呼びかけに気を失った舞人は答えられない。その時、援軍が来た。

ストライクボンバー 『チエエエエンジッ!!ストライクボンバー!!!!』

フレアダイバー 『チエエエエンジッ!!フレアダイバー!!!!』

マイトガイン 『ストライクボンバー！！フレアダイバー！！来てくれたか！！』

ストライクボンバー 『ああ！！それが俺たちの成すべき仕事なんでな！！』

フレアダイバー 『支援は俺たちに任せろ！！』

マイトガイン 『ああ！だが、舞人が今受けた攻撃で気を失ってしまった・・・攻撃時のエネルギー制御が出来なくなっている。』

ストライクボンバー 『なんだって？！』

フレアダイバー 『つまり止めをさせないということか・・・？！』

マイトガイン 『ああ。だが、闘う！！』

そう言うとマイトガインは、動輪剣を手にする。エネルギー制御ができていない為本領発揮とは言い切れないがそれでも刀身をD17にかざす。

マイトガイン 『いくぞっ！！』

移動する車の中で紬は嫌な予感を覚えた。

紬 「なんだろう？胸騒ぎがする……!!」

紬は携帯を取り出し、車内の充電装置に繋いだ。そしてワンセグを開く。するとヘリからの横浜での実況中継が報道されていた。

紬 「舞人君……!!」

一方、漣も不穏な感覚を覚えていた。

漣 「なんだろう？この不安感……勇士朗君……!!」

ぎゅっとエリザベスを抱きしめる漣。

再びファイバード。熾烈なまでの猛攻が続く。豪腕の攻撃で吹き飛ばすファイバード。

ドオゴガアアアアツッ!!!!

ファイバード 『ぐふぐおお……!!!!くそっ!!更に格が上がつている……!!!!』

更に破壊光線の直撃を受ける。

ギユドオゴツッ!!!!

ドオドウガゴオオオオオオオオツッ!!!!

ファイバード 『!!!!』

言いようのない激痛がファイバードを襲う。胸部が破損し、そ

のまま気を失う。両眼から光が消えてしまう。今までの戦闘の中で最も窮地に立たされることになった。

今までにもピンチになる事はあったが、気を失うほどではなかった。致命的だったのは破壊光線の直撃に他ならない。デストリアンの格は明らかに強くなっていた。

D 18は、ファイバードの頭を鷲掴みにし、地面に叩きつける。

グガシャアアアアンツツ!!!!!!

ファイバード 『……………』

地面に埋められるように倒れこむファイバード。微動だにしない。

一方の舞人も依然として気を失っている。それでも連携をとりながらマイトガイン達は戦闘を続行し続ける。

マイトガイン 『フレアダイバーは、射撃で援護し続けてくれ!!!少しでもダメージを蓄積させるんだ!!!ストライクボンバーは私と共に触手を掻い潜って突破口を開く!!!本体へ攻撃するぞ!!!』

フレアダイバー 『了解!!!』

ストライクボンバー 『よっしゃあ!!!』

フレアダイバーが、もてる全ての火力をD 17に向かって撃ち出す。

フレアダイバー 『フル・オープンシュートッ！！！』

グイドゥルルルルルルディギユド、ディギユド、ディギユドドダダダダガアアア……！！！！

ズズズズズズキヤキヤゴゴゴゴゴゴドオドオゴゴゴオオツ……！！！！

D 17 「ガガガアアアアアアッ！！」

フレアダイバーの援護射撃の攻撃がD 17に撃ち注がれる。触手を縦横無尽に動かして接近しようとするマイルトガンとストライクボンバーを突き放つ。

ビュシュルルルッ……ドオドオガガアアアアアッ！！！！

マイルトガン 『うぐうっつ！！！』

ストライクボンバー 『がああああ！！』

ズズズズウウウッ！！

コンクリートの上に倒れこむマイルトガンとストライクボンバー。

ストライクボンバー 『こ……これがデストリアン……！
！！BLWとは格が違う！！！！』

マイトガイン 『ひるむな！突破口を開くぞ！！』

ストライクボンバー 『ああ！！』

マイトガインが、動輪剣を右手に握り締めてストライクボンバーと共に突撃する。

マイトガインに触手が迫る。触手に向かって動輪剣を振りかざす。

マイトガイン 『はあああつ！！動輪剣！！！！』

ズガキヤアアアツ！！

動輪剣の刀身が触手を弾き飛ばす。だが、「斬る」には至らない。

ストライクボンバーにも触手が噛み付こうと迫る。これを鋼の拳で思いっきりブン殴る。

ストライクボンバー 『でりゃあああツ！！！！』

ドオガゴオオツ！！！！

触手の頭の部分が地面に叩きつけられる。だがすぐに別の触手が襲い掛かる。

ガブシャアアアンツ！！！！

ストライクボンバー 『ごおおおお！！！！』

マイトガイン&フレアダイバー 『ストライクボンバー！！！！』

触手に噛み付かれたまま持ち上げられるストライクボンバー。

そのまま地面に叩きつけられる。

ドオガゴオオツツ！！！！

ストライクボンバー 『がはッ！！くっそがああッ！！！！！！』

怒り任せに立ち上がるストライクボンバー。マイトガインが一旦引かせる。

マイトガイン 『一旦引け！！間合いをとって体制を立て直す！！！！フレアダイバーは攻撃を続けていてくれ！！！！』

ストライクボンバー 『あいよ……！！！！』

フレアダイバー 『了解！！！！』

マイトガイン 『まさか、舞人が気を失っただけで劣勢になるとは……！！！！』

ストライクボンバー 『俺たちも満足に闘えん……先のBLWとの戦闘でエネルギーを使ったからな……回復には時間がいるところだったが、そうは言ってられなかったからな……。』

マイトガイン 『くつ……！！！！舞人……！！！！』

ファイバードも意識を取り戻してはいなかった。その間にもエクスカイザーが横浜を目指し、爆走する。

ブアゴオオオオオオオ……！！

エクスカイザー 『待っている！！ファイバード……！！』

つづく

次回予告

苦戦を強いられ続ける勇者達。一向にファイバードと舞人は意識を回復させなかった。

駆けつけたエクスカイザーもキングローダーを召喚できずに窮地に立たされる。

そんな中、紬の一通の電話が舞とを目覚めさせ、勝利への兆しを差し込む。

気を失い続けたファイバードも溼の歌声を感じとる。

次回、新生太陽の勇者 ファイバード・サーガ 第24話 「苦闘に響く女神の声」

想う気持ちか反撃への力となるのか……。

第24話 「苦闘に響く女神の声」

2体のデストリアンの攻撃に苦戦を強いられる状況が続く。

3体掛かりで挑んでも攻撃を跳ね返されるマイトガイン達。パイロットの舞人が気を失っているがために動輪剣のエネルギーシステムのコントロールができず、劣勢状態を余儀なくされる。

サポートへ廻るストライクボンバーとフレアダイバーも先の戦闘でエネルギーを使い、回復に時間が掛かっている。

一旦相手との距離を十分に空け、体制の持ち直しを試みる。

マイトガイン 『とにかく舞人が目を覚ましてくれなければ・・・！！舞人！！目を覚ませ！！舞人！！！！』

マイトガインは自分の中で気を失っている舞人に必死に呼びかける。だが、依然として気を失っている。

その間にもフレアダイバーはD 17への射撃を休める事無く続行する。

ヴイドオドオドオドウイン、ドウウイン、ドオウイン、ドオドウルルルウウウ！！！！

ズデイギャガガガガドオドオドオドオゴオオオオ

オオオオンツッ！！！！

フレアダイバー 『くそ！！コレがデストリアン……！！
なんてタフな身体だ！！』

触手が次々と繰り返し襲い掛かる。ストライクボンバーは触手の頭を殴っては弾き、殴っては弾く。

シユウウウウ……ドオゴオツ！！ ヴァガッ！！ ド
オオオツ！！

ストライクボンバー 『くそつたれ！！殴っても殴っても起き
上がりやがる！！』

D 17は、蛇のような頭部が鎌首を持ち上げて、口から火球
のようなエネルギーを撃ち飛ばす。

ドオデイギユゴオオオオオツッ！！！！

ストライクボンバー 『ちいい！！』

マイトガイン 『これでは埒が空かない！！！！』

マイトガインとストライクボンバーはジャンプしてこれをお
わす。街に業火が昇る。

ズギヤシユガアアアアアツッ！！！！

そして、D 18に追い詰められたファイバードも依然として
気を失っていた。胸部への大ダメージが相当響いているようだ。

ディギユゴオオツ！！

ギャダガアアアアアアアツツ！！！！

エクスカイザー 「ぐああああああ！！！」

隠れたビルもろとも吹き飛ばされるエクスカイザーとファイバード。D 18が放った破壊光線が二人の勇者を襲った。

激しく地面に激突するエクスカイザー。全身に激痛が奔る。

エクスカイザー 「があ……ぐっ……！！！」

悪循環の戦闘に見舞われる勇者達。その中継の様子を車内のケータイ充電器につなぎながらワンセグで絀が見ている。

絀 「舞人君達……がんばって！！勇士朗君達も……！！！」

見ていた絀は、いても経っても居られずにワンセグを中断し、舞人に電話をかけた。絀自身は、直接エールを送りたい一心だったが、この電話が事態の流れを変える。

コックピット内に舞人のケータイが鳴り響く。

着信音は絀からの着信とわかるように設定されている。この着信音が舞人の耳に入った為か、落ちる意識の中で絀の姿を舞人は見る。

絀が振り向き、満面の笑みで舞人に笑いかける。その直後、舞

人は意識を取り戻した。

舞人 「ん・・・紬・・・さん？」

気がつくときケータイが鳴っていた。すぐに紬だとわかったためにすぐに出た。

舞人 「も、もしもし・・・紬さん？」

紬 「舞人君！今、ワンセグでマイトガインのテレビ中継を見ていたの！そしたらマイトガインが、舞人君がやられていたから・・・せめて私からメール送ればなって・・・。」

舞人 「そうか・・・ありがとう。紬さん！そのキモチ、熱く受け止めるよ！！」

紬 「勝って！！舞人君！！」

舞人 「ああ！！もちろんだ！！！！また後でかけ直すから！！」

紬 「うん！！」

マイトガインが今の会話を聞き、舞人が意識を取り戻した事を察する。

マイトガイン 「舞人！！意識が戻ったのか？！！」

舞人 「ああ！！あれしきの事で気を失ってすまない！！一気に斬りこむぞ！！動輪剣、エネルギーチャージング！！」

舞人が、動輪剣の刀身に発生させるエネルギーのコントロールを開始する。動輪剣のツバの中央部の車輪が高速で回転し始める。すると刀身がオレンジイエローに光りはじめた。

舞人 「動輪剣、エネルギー充填率、60、73、86・・・94%!!十分なエネルギーが満たされた!!このまま触手を斬り飛ばす!!それに続いてストライクボンバーとフレアダイバーは左右から攻撃を本体に注ぐんだ!!」

ストライクボンバー 『了解だっ!!』

フレアダイバー 『了解!!』

動輪剣を振りかざし、迫る触手にマイトガインが突っ込んでいく。

マイトガイン 『せやああああっ!!』

フュフオアン・・・ザズシュウンツ!! ズシュバアアアンツ!!

本体の正面から生えている触手2本が切断される。左側からストライクボンバーが攻撃に掛かる。そこに触手が阻もうとする。

フィシユルルルウウウ・・・

ストライクボンバー 『とおおっ!!』

これをジャンプでかわし、そのまま本体にとび蹴りをくらわせる。

ストライクボンバー 『だりやあああつ!!!』

ドオガドオオオオツツ!!

体制を持ち直し、そのままナツクルラッシュに繋げる。

ストライクボンバー 『これまでのウツプンだあああつ!!!』

ドオゴガアツ!! ドオオツ!! ゴグオオオツ!! ド

オガンツ!! ゴオオオツ!!

D 17 「ギキヤキヤカアツ!!!」

右側ではフレアダイバーが、持てる火力の全てを右側面にブチ込む。

フレアダイバー 『まだ耐える気か?!くらえええつ!!!』

ヴイドウルルルルウウウドウヴィン、ドウヴィン、
ドウヴィン、ドオドオドオオ!!!

ズキヤドオドオドオドオドオドゴゴゴゴオオオツ

!!!

ダメージが蓄積したためか、D 17の表面が破損しはじめる。そして正面からマイトガインが右手に握り締めた動輪剣で斬り掛かる。

マイトガイン 『はああああつ!!!』

周囲に肉片が飛び散りながら、粉碎した本体が炎上する。それをバツクに動輪剣を収容するマイトガイン。

この時、舞人がモニターでD 18とエクスカイザーが戦闘しているのを確認する。

舞人 「まだデストリアンが・・・?! ストライクボンバー、フレアダイバー!! 事後処理は任せる!! マイトガイン、援軍にくぞっ!!」

マイトガイン 『ああ! 無論だ!!』

桜ヶ丘の川原。 漣達は復活祭の時に歌う歌を歌おうとしていた。

光 「ホントにいいの? 今聞かせてもらっちゃって?」

漣 「うん。それに・・・勇士朗君が今も闘っていることを思うと・・・。」

俊 「歌いたくて仕方ない・・・か?」

漣 「ま・・・そんなところかな? 律、梓?」

律 「ほい。」

梓 「OKですよ。」

梓の横では俊が子猫を抱えている。

漣が二人に窺うと、それぞれが演奏を始める。ちなみに律は自分のひざをドラム代わりにして叩いている。漣と梓とで前奏する

漣の声が闘うファイバードをイメージした歌を奏でる。

漣の歌声が川原に広がる。だがこの声は思いもよらないところまで響いていた。勇士朗の意識にまで届いていたのだ。

勇士朗 (う……うた？何で歌が聞こえてくるんだ……？)

勇士朗 (それにこの声は……秋山さん!?!?)

ヴィギュインツ!!

ファイバードに眼光が再び灯る。そして立ち上がり、空に腕をかざす。

ファイバード 『フレイム・ブレスターッ!!!!』

高速でフレイムブレスターが飛来、ファイバードと合体する。

ファイバード 『武装合体、ファイバアアドツッ!!!!』

背部からフレイムソードを取り出し、D 18へ突撃する。

ファイバード 『フレイムソードッ!!!!』

ジェットブーメランで応戦していたエクスカイザーがファイバードの復活に気づく。

ドオシユ、ドオシユ、ドオシユウウウウ……ズガギヤ
ゴオオツツ!!!

エクスカイザー 『ファイバード!! 気がついたのか?!!!』

ファイバード 『はい! 後は俺が引き受けます!! でやああああああ!!!』

ザシユウウウンツ!!

フレイムソードを振りかざしながら突撃し、一振りの一刀の斬撃がD 18に入る。

D 18 「ギユギイイイツ!!」

ヴユギユドオオツ!!

ファイバード 『フレイム・フィールド!!』

ギャヴァゴアアアツツ!!!

D 18 は破壊光線を至近距離からファイバードに放つ。だが、ファイバードは瞬時にフレイム・フィールドを張る。これによって発生した大爆発に吹っ飛ばされるD 18。

ファイバード 『フレイムソード……チャアアアアジアアアアアツツ!!!』

フレイムソードを収容すると、ファイバードの胸のフェニックスエンブレムが消える。ファイバードの完全逆転により事態は収拾した。

マイトガインが駆けつけたときには既にデストリアンは消滅していた。そしてファイバードの姿もなかった。エクスカイザーが一人爆発跡地に立っていた。

舞人 「事態は収拾していたのか……！！！」

マイトガイン 『そのようだ……ん？あれはエクスカイザー……！！！！』

エクスカイザーの許に着地するマイトガイン。

エクスカイザー 『マイトガインか。ファイバードがカタをつけてくれた……。事態は収拾した。あとはいつもの事後処理班に任せよう。』

マイトガイン 『そうか……。またファイバードの世話になったな……。』

薄暗くなる空を見つめるマイトガイン。

舞人 「……。そうとわかれば撤収だ！帰るぞマイトガイン！！
紬さんにも電話をかけ直したいしな！！」

マイトガイン 『……。彼女の存在は、この闘いに必要だな。私の呼びかけにも目覚めなかった舞人が、紬嬢のひとつの電話で勝利につながった……。愛の力でもいいのか？』

舞人 「マイトガイン……そうだな。彼女の存在は俺にとって特別なエナジーだ!!!マイトガインの言うとおり、愛の力が勝利へのカギになりえる!!!本当に紬さんには感謝したい!!!」

桜ヶ丘を目指して舞い戻るファイアージェット。コックピット内では、何故濤の歌が突然聴こえてきたのか不思議な気持ちでいた。それと同時にどこか嬉しげな気持ちもあった。

勇士郎 「どうして秋山さんの声が聴こえたんだろう……?」

その時ファイバードの意思がその疑問に答えた。

ファイバード (勇士郎。恐らく彼女の声から発生するプラスエネルギーと君を想う彼女の想い、そして私自身が持つプラスエネルギーの波長がなんだかのカタチでシンクロしたんだろう……)

勇士郎 「秋山さんが俺を想ってくれている……なんかスゲー嬉しい。奴らもなんか強くなっていたけど、その想いがあれば……俺は闘える。」

ファイバード (ああ!!!決して奴らに負けるわけにはいかない!!!)

眼下に神奈川県夜景が夕闇のなかに広がる。ファイヤージェットがその上をかつ飛んでいく。

桜ヶ丘（帰る場所）へと・・・。

つづく

次回予告

いよいよ開催される桜高復活祭。勇とエクスカイザーも唯達を送りながら学校へと向かう。

勇士朗達も到着し、初めての軽音部の部室でティータイムを堪能する。

だが容赦なくデストリアンは落ちてくる。コレに対して勇士朗を気遣ったエクスカイザーは、単独で戦闘を引き受け出撃するのであった。

次回、新生太陽の勇者 ファイバード・サーガ 第25話 「復活祭！」

その勇者、やはり絶大なる者か・・・。

第25話 「復活祭！」（前書き）

歌詞の掲載について、親サイトさんから嚴重的な忠告を受けました。掲載歌詞は全て削除しました。

私の軽率な行動を嚴重注意してくださった親サイトさんへこの場を借りてお詫び申し上げます。

二次創作はやはり著作権に触れることと紙一重の物です。一歩オーバーしてしまうと今回のような事になりかねません。今一度よく考えた上で作品作りに励みたいと思います。

第25話 「復活祭！」

横浜での戦闘から数日後。桜高復活祭がいよいよ催される。

朝、平沢家では、勇がエクスGTのエンジンをアイドリングさせながら唯のしたくを待っていた。

勇 「相変わらず唯は支度おせえなあ……。」

エクスカイザー 「いつもそうなのか？」

勇 「昔から……何かとよくやらかしてスゲー世話が焼けるんだよね……でも不思議と悪く思えねーんだよね。ま、そんなところも含めてカワイイ従妹なんだ。」

エクスカイザー 「確かに彼女からは不思議なまでの陽のオーラを感じる。」

勇 「陽か……そういえば桜高の事件の後も立ち直りが早かったなあ……あんな事があつたにもかかわらず、わずか数日でいつもどおりになっていた。」

エクスカイザー 「ところで勇、今日はライブと言っていたが、ライブとはなんだ？」

勇 「ライブってのは舞台上に立って歌なり、トークショー

なり、大勢の人たちに披露する事なんだ。今日は唯のライブの日なんだよ。あの事件から半年余りが経過した事やその日からの復活を兼ねてライブやるんだ。」

エクスカイザー 「歌か・・・確かに歌は聴く者に大きなエネルギーを与えるからな。」

エクスカイザーと会話しながら待っていると、玄関のドアが開き、唯と憂が出てきた。

憂 「お姉ちゃん早く、早く!」

唯 「ふいいい!」

エクスカイザーに駆け込む唯と憂。後部座席に乗り込むと唯が一言押した。

唯 「へはあゝ・・・ねえ、勇兄ちゃん、和ちゃんも送ってってくれる?」

勇 「え?ああ、別にいいぞ。」

憂 「お姉ちゃん、ぎー太忘れてるよ!!」

唯 「ふおおお!!ぎー太あゝ!!」

再びエクスカイザーから飛び降りてぎー太を取りに戻る唯。

勇 「全く・・・早く取ってきな。」

憂 「お姉ちゃん……。」

エクスカイザー 「はははははは。」

出発すると、エクスGTは、近所の和の家に寄る。玄関から和が出てきた。

それを確認したエクスカイザーはガルウィング式のドアを開く。助手席に乗っていた唯が外に出る。

和 「おはよう唯。」

唯 「おはよう〜！和ちゃん、前に座って良いよ〜。私は憂と座るから〜。」

和 「え?!！」

唯が勇の隣を和に薦める。これには和も戸惑う。戸惑う和の耳元でコシヨコシヨ話す唯。

唯 (ちゃんと勇兄ちゃんの横に乗せてあげるって言ったじゃん)

和 (でも、いきなりソレは……勇さんだって。)

勇 「ん？早くしろよ〜？」

唯 「ほら！いっしょ！」

和 「う、うん……。」「

若干恥ずかしそうなそぶりを見せる和。唯はそのまま憂の横に座る。

和は、助手席に乗り、顔を赤くしながら勇にあいさつする。

和 「よ、よろしくお願いします。」

勇 「あいよ。じゃ、いくとするか……。」

シフトノブを1速に入れ、アクセルを空ぶかししながらエクスGTを発進させる勇。

ふと和は勇の横顔を見た。走りモードに徹しているためか鋭い眼光で前を見ていた。その横顔がより和にはカッコよく映った。

和 (勇……さん。)

桜高の校門前で律が勇士朗たちを待っていた。

律 「さつき、今に着くつてメールきたんだけどな……
お！キタキタ！」

蓮 「ういーっす！待ったか？」

律 「ちよつとな。みんないるな？」

勇士朗 「ああ、ホント半年振りだな。ここへ来るのは。」

光 「早いな〜・・・半年って。」

俊 「あの時の光景が嘘みたいだな・・・。」

律がメンバー確認すると、1人涼が加わっていた。律が「あれ？」という顔をする。蓮が一言言った。

蓮 「ああ、1人涼坊が加わった。あの時のメンバーにはいなかったけどいいよな？」

涼 「ういっす！この前ぶりっす！」

涼が律にへこへこ頭を下げる。

律 「お〜、この前梓にキツイ一言を言われたちっちゃいやつか！」

印象の受け方のしょぼさにたじろく涼。

涼 「そ、そうっす！」

律 「別にいいぜ。とりあえず私達の部室に来なよ。」

律に案内されながら一行は部室に向かった。

文化祭さながらの雰囲気は校内に広がっている。一般公開もさ
れ、一般客の姿も既に見受けられる。

倒壊された校舎も一新され、見違えるように雰囲気が変わって

いる。

軽音部のメンバーもライブの準備に取り掛かる。

待ち望んだ復活ライブに梓も張り切る。

梓 「いよいよですね！復活ライブ！！」

漣 「そうだなあ。ここまでも色々あったけど、こうしてライブがやれるのは気持ち良いな。」

部室で機材を運ぶ準備をしていると律と勇士朗達が入って来た。

律 「みんなー、ゲストが揃ったぜー！ムギ！お茶っ！」

BLWの事件で軽く負傷した紬だったが何の問題も無く、いたって平気なようだ。笑顔でお茶を淹れる準備をする。

紬 「はいはいー！」

初めて入る軽音部の部室。勇士朗たちにとってはこういうイベントでもなければ、入る事はできない空間だ。

漣が笑顔で勇士朗に挨拶する。

漣 「おはようー！」

勇士朗 「あ、ああ。おはようー！」

澁 「今日は来てくれてありがとう。」

勇士朗 「俺からもありがとう。こんな俺達をゲストに呼んでくれて……。」

澁 「だって勇士朗君達は私達、桜高生の恩人だから……。それにいつも私達を守ってくれてるし。何度助けられたんだろう……？ ホントにいつもありがとう。」

勇士朗 「へへへ……なんか照れくさいや。機材運ぶの大変そうだよな？ 手伝おうか？」

澁 「大丈夫。私達で運ぶから。それに今日は勇士朗君たちはお客さんだからさ……。」

勇士朗 「そ、そっか……。」

澁 「どうぞ席に座っていいよ。お茶とケーキが出るから。軽音部（こゝ）の名物みたいなものだから。いつも放課後ここでお茶とお菓子を食べながら部活やってるんだ。」

勇士朗 「そうなんだ……あ！ だから放課後ティータイムなんだな！」

澁 「そう（だけど、顧問の先生が勝手につけちゃったのが本当なんだよなあ……）！」

勇士朗と澁のやり取りを見ていた梓が嬉しげな感情になる。

梓 （澁先輩、勇士朗さんと話しているとすごく嬉しそう。前

はもの凄く恥ずかしそうだったけど、今は前に比べると少しは馴れたのかな？)

勇士朗のメンバーが紬に出してもらったお茶とケーキを食す。
がつつくように食う光ると蓮。

光 「うめー！」

蓮 「ああ！こんなウマイケーキは初めてだー！」

俊 「おまえら散らかして食うな！」

勇士朗 「本当ウマイなー、これ！」

紬 「ふふふふ」

彼らのやりとりを見て紬はニコニコしている。

光が唯が居ない事に気づく。

光 「そういえば唯ちゃんは？」

紬 「そろそろ来る頃だと思っけど・・・。」

その時、ドアが開き唯が飛び込んできた。

唯 「遅れましたあー！！！」

光 「唯ちゃん！」

漚 「遅いぞ〜唯！みんな来てるぞ！」

梓 「そうですね！今日は特に特別な日なんですから！！」

唯 「ごめん．．．へへへ。じゃあまずは．．．。」

だきっ！ぎゅむー．．．すりすり

梓 「ぎにゃあああああ！！」

唯 「んん〜．．．あずにゃああん．．．。」

梓 「や、やめてください唯先輩！！みんないるんですよ！？」

唯のいつもの儀式だ。梓は気にしているが、勇士朗たちは微笑ましく笑う。

勇士朗 「はははは．．．平和だな．．．ん．．．！！！」

だが、今日という日にデストリアンを感じてしまう勇士朗。エクスカイザーも桜高の駐車場で感じ取る。

エクスカイザー 『む！！デストリアン．．．！！！！』

勇士朗は再び躊躇する。その時エクスカイザーからのテレパシーが勇士朗に伝わった。

エクスカイザー (ファイバード、今日は近くにいるな?)

勇士朗 (エクスカイザー先輩!)

エクスカイザー (デストリアンが迫っているがどうする? 戦いに行けるか?)

勇士朗 (俺、今日は桜高のライブのゲストで呼ばれているんです! 仮に戦闘が長引くとせっかく呼んでくれた軽音部のメンバーに……)

エクスカイザー (そうか……ならば戦闘は私が引き受けよう!! 今日軽音部の為に尽力するんだ!!)

勇士朗 (すみません!! お願いします!!)

桜高の駐車場から飛び出していくエクスGT。その間にデストリアンの隕石が相模原の西方面の郊外へと落下していく。走りながらコレを確認するエクスカイザー。

エクスカイザー 『近い!! あの方角は郊外の方だな!!』

一気に飛ばすエクスカイザー。立川のM・P・D・BRAVEもNASAからの情報を得てその方角へと向かう。東京の上空をJトランスポーターが飛ぶ。

要 「NASAからの情報に寄れば、関東の西側に落ちるとの予測だそうだ! おおよそ例によって相模原の西と予測される!! 現地に到達後、Jローダーとレイバースは投下し、そのまま戦闘任務に移行してくれ!!」

ジェイデッカー 『ジェイデッカー、了解!!』

レイバーズ 『レイバーズ、了解!!』

要 「尚、ジェイデッカーに関してだが、胸部の修復の際に」
バスターの威力を強化した。今まではレールガンが通常モードだっ
たが、今回からビーム弾を通常モードで使えるようにした。有効に
使用してくれ!!」

ジェイデッカー 『了解しました!!使いこなして見せます!!』

Jトランスポーターが加速し、相模原を目指し飛んでいく。

デストリアンの隕石が、相模原郊外へと落下していく。奇しく
もC 02、03、04を含んでいた隕石とほぼ同じ軌道で落下し
ていく。だが、途中で爆発。相模川にデストリアンが数対落下する。

ズズズズザアアアアアツツ!!!

更に、そのデストリアン、D 19はC 02と非常に身体の
作りが似ていた。だが、色は漆黒の体色をしており、蛇のような縦
長の瞳を持った目を中央に一つ確認できる。

落ちた4体は、街を目指して大蛇のように動きはじめる。

D 19群 「ギュシユギュアアアアツツ!!!」

咆哮しながら徐々に進んでいく。その間には住宅地が立ち並ぶ。

次の瞬間、D 19はエクスカイザーの目の前で突如として合
体を始めた。

グチュグチュと気色の悪い音をたてながら合体していく4体。
1体を中心に2体が両腕となり、もう1体が尾となった。

エクスカイザー 『なんだと?!合体した!?!?』

D 19 「ゲギルウウウ!!!」

腕をバツと突き出し、エクスカイザーに襲い掛かる。

グワツ………ドゴガアアアツ!!!

エクスカイザー 『くっ………!!ぬお………!!』

ズギヤガアアアアツ!!!

攻撃の手を緩めないD 19。伸縮自在の意思をもった両腕が
エクスカイザーに襲い掛かる。

ドオガゴオオオオ!!!ズギヤガアアアアアツ

!!!

エクスカイザー 『おのれ!!!このままでは手が出せない……

!!!』

地面を砕くD 19の両腕。直撃を食らえばヒトタマリもない。
さらに尾となった部分も伸び、グワツとエクスカイザーを突き飛ば

す。

グオアアアツ!!

エクスカイザー 『しまった・・・!!!!』

ズドオオオオツ!!!

エクスカイザー 『ぐああああ!!!!』

地面に叩きつけられるエクスカイザー。全身に激痛がはしる。

D 19 『ギユギヨギヨオオオオオ!!!!』

ズギヤガアアアアツ!!!

エクスカイザー 『が・・・!!!!!!!!』

大口を開いた右腕がエクスカイザーを押しつぶす。そのまま持ち上げ、徐々に体内に取り込もうとする。ボディーがきしみ始める。

グギヨゴツ! グギギギギ・・・ゴガツ!!!

エクスカイザー 『ぐああああ・・・!!!!!!!!』

ドウヴィイイン、ドウヴィイインツ!!!

ズギヤゴオオオオツ!!!

D 19 『ゴオオオオオツ・・・!!!!!!!!』

突如としてD 19のボディーに直撃するレモンイエローのビーム。ジェイデッカーだった。

この攻撃で掴んでいたエクスカイザーを落とす。

ズン・・・

エクスカイザー 『ぐ・・・。』

ジェイデッカー 『エクスカイザー!!!』

ドウヴィイイ、ドウヴィイイ、ドウヴィイイツ!!

ズズズズウウツ!!!

片腕でJバスターを構え、新たなビームモードで攻撃をかけていくジェイデッカー。苦しむように咆えるD 19。更にその後方から降下したレイバーズが射撃をかける。

ガンレイバー 『おらおらあっ!!』

ガアン!! ガアン、ガアン、ガアンツ!!

ドオ!!! ドオドオドオゴオツ・・・・・・ズズズズゴオオオオオツ!!!

D 19 「ガシユウウウウツ!??」

着弾したガンリボルバーの弾丸が表面で爆発する。

ショットレイバー 『これより支援する!!』

デイドオゴオオオオンツ!!! デイドオゴオオオオツ!!!
デイドガアアアアンツ!!!

ズゴゴゴゴオオオオンツ!!!

D 19 「ゴガアアアアアアツ!!!」

リニアランチャーの弾丸が表面を砕く。D 19は、レイバ
ズに振り向く。その隙にジェイデッカーが、倒れこむエクスカイザ
ーを抱え、一旦離脱する。

ジェイデッカー 『エクスカイザー、大丈夫なのか?!』

エクスカイザー 『あ・・・ああ。危うく取り込まれるところ
だったが・・・。』

そのまま地上へと着地する2体。

ジェイデッカーがエクスカイザーの安否を気遣う。

ジェイデッカー 『本当に大丈夫なのか?! 戦闘が厳しければ
後は私が引き受けるが・・・。』

エクスカイザーはゆっくりと体を起こす。

エクスカイザー 『ああ!!! 大丈夫だ!!! キングエクスカイザ
ーになれば問題は無い!!! さあ、早くレイバースの所へ!!! レイバ

ガンン！！ ガアン！！ ガアン！！ ガアン！！ ガアン！！
ン！！

デイドゴオオオツ！！ デイドゴオオオツ！！ デイ
ドオゴオオオオツ・・・！！

ズズズズズウウドオドオドオグゴオオオオ・・・

D 19 「グググググウウウ・・・！！！！」

ジェイデッカー 『撃ち続ける！！銃身が焼きつくまでに！！』

ガンレイバー 『おらおらおらああ！！』

ショットレイバー 『弾薬がその前にもつのか・・・？！！』

苦しみ紛れに三つの頭が大口を空ける。すると破壊光線が撃ち
出された。

グワツ・・・ ヴィギユギユウギユドオオオオ！！！！

ジェイデッカー 『何！？？かわせええええ！！！！』

レイバーズ 『おう！！！！』

ズギヤドオガゴゴオオオオオオオオオオ！！！！

間一髪でかわしきる。直撃した破壊光線が住宅地もろとも地面
をえぐった。D 18のような瞬間的な光りによるものではなく、

ビーム系の火線が撃ち出されるタイプであったことが、かわしきた理由だった。

再度破壊光線が無作為に撃ち出す。尻尾から放たれた破壊光線が、Jバギーに向かって突き進む。

ジエイデッカー 『しまった!! 奴の破壊光線がJバギーに!!』

レイバース 『隊長おおおおおっ!!!!』

吉崎 「超エネルギー急接近!! かわしきれない、いやあああああ!!!!」

要 「葉山あああああ!!!!」

葉山 「うおおおおお・・・!!!!」

ズガギヤアアアアアアアアアツツ!!!

大爆発。だが、Jバギーは無事であった。Jバギーの前にはキングエクスカイザーがそびえ立っていた。

葉山 「へ??」

吉崎 「助かった??」

要 「・・・は!! エクスカイザー・・・!??」

キングエクスカイザー 『無事か?! 要隊長殿。』

直撃を受けたが、キングエクスカイザーの強固なボディには些末なことであった。

要 「ああ！！無事だ！！すまない、エクスカイザー！！」

キングエクスカイザー 「あとは私が引き受ける！！カイザー
ブラストツツ！！！！」

ヴィギユドオオオオオオオオオオオツツ！！！！

胸部のライオンの口から強力なサンダーエネルギーのビームが撃ち出される。カイザーブラストの直撃を浴び、D 19の鎌首を持ち上げた尾の頭部が一気にぶっ飛ぶ。

ズギユウドオオオオオオオオオオオツツ！！！！

D 19 「ギギギイイイイイ！！？」

D 19 がキングエクスカイザーに振り向く。その時点でキングエクスカイザーはバックパックバーニア全開で急接近していた。そのまま激しく右の拳で殴打する。

ゴオオオオツツ・・・・・・ドゴガアアアアツツ！！

D 19 「ギギ・・・・！！」

吹っ飛ぶD 19。吹き飛んだD 19を睨みながらカイザー
ソードを取り出す。

キングエクスカイザー 『カイザーソードッ!!』

右脚から取り出したカイザーソードを右手で振りかざし、D
19に突っ込む。

起き上がったD 19が破壊光線を迫るキングエクスカイザー
に撃ち出す。

ヴィギユドオオオオオオオ!!

ズギュガアアアアアアアアア!!

ジエイデッカー 『キングエクスカイザー!!!!』

レイバース 『あああ……!!!!』

直撃を受けて巻き起こる爆煙。だがキングエクスカイザーはそ
れを突き抜け、カイザーソードの斬撃をD 19に浴びせた。

キングエクスカイザー 『おおおお!!!!』

ズギヤシャアアアアアアア!!

D 19 「ギョギヤアアアア!!」

右腕が切断され、紫の血が吹き出る。さらに右薙ぎにカイザー
ソードを振るい、胴体の肉半分を斬り飛ばす。

ヒュファオツ……ズヴァシャアアアアアアツ!!

D 19 「ギュゴゴゴゴ……！！！！」

肉半分でつながった胴体の斬り口から滝のように血が流れる。至近距離からカイザービームを撃ち放ち、更なる大ダメージを与える。

キングエクスカイザー 『カイザービームツツ！！！！』

ヴィギユドオオオツ！！！！

ズドオギャアアアアツツ！！！！

D 19 「ヴィギャアアアアアツ！！！！」

間合いを取ってD 19から離れるキングエクスカイザー。カイザーソードを前にかざし、サンダーエネルギーを刀身に注ぎ込む。

キングエクスカイザー 『はあっ！！！！』

ヴィキュアアアアツ！！！！

サンダーエネルギーを充填させたカイザーソードを片手でかざし、刀身を空へと向ける。

キングエクスカイザー 『サンダアアアアアアア・フラアアアアアツツツツ！！！！』

ヴィギユオオオオオオオオオオオ……！！！！

刀身からサンダーエネルギーが上空へとはしる。そして一気に

のか……デストリアン……いつか必ず正体を暴き、根絶させてみせる……！！！！』

勇士朗達もゲストの席で黙祷をしていた。エクスカイザーと同じ思いを胸に。

勇士朗 (デストリアン……必ず根幹を駆逐してやる！！
！ファイバードの力で……！！！！救いきれなかった多くの命達の為にも……！！！！)

つづく

次回予告

復活祭が終了し、季節も梅雨明けする。

ぶつ通しで練習してきた疲れもあり、いつもよりも早めに切り上げて帰宅する軽音部メンバー。

1人帰路を歩く唯に光からの誘いのメールが届く。

勇士朗達と別行動し、イチオシ喫茶店で唯とのひと時を愉しむ光だが、その帰りの道中、突如出現した新たな固体のBLWと遭遇してしまう。BLWの放った溶解液から唯をかばう光。

瀕死の重傷を負い、薄れる意識の中想いを唯に告げるのだった……。

次回、新生太陽の勇者 ファイバード・サーガ 第26話 「光、恋の行方の果てに」

唯、かなしみの涙^{なみだ}を流す。

第26話 「光、恋の行方の果てに」

梅雨が明け、夏本番と季節が移る。

復活祭も終わり、ひと段落がついた。

軽音部メンバーはいつも通りの放課後を過ごす。

律 「はあ〜ひと段落着いたな〜。」

唯 「ふもお〜。」

唯と律がいつものようにだらけている。

梓 「もー！練習しましょよ！練習！！」

律 「いーの、いーの。今までぶっ通しでやってきたんだからさ……。それにケーキ食いながら言っても説得力無いぞ？」

梓 「うう……。」

漣 「しょうがないな〜……。今日は切り上げるか？」

梓 「漣先輩……。」

漣 「あと少しで期末テストもあるし、その前に息抜きしてお

くのも必要だからな。」

梓 「そ、そうですよね!」

漣は梓にとって尊敬している先輩だ。律の意見に反し素直に漣の意見に賛同する。

紬 「それじゃあ今日は帰宅しましょう!私も用事がありますから。」

漣 「ああ。」

一行は帰宅する事になった。いつもどおり校門でそれぞれの帰路に別れる。

紬 「それじゃあ皆さん、また明日!」

律 「おう!」

漣 「じゃあな!」

唯 「ばいばい!」

梓 「お疲れ様です!」

紬は迎えに来ていた琴吹家のリムジンに乗り、その場を後にしていった。

律 「ムギはスゲーなく相変わらず……いつもリムジンだったっけ?」

漣 「この前の生体兵器事件で電車が使えなくなってるからだろう？」

梓 「復活祭の時にまた隕石が来たみたいですし……。」

唯 「それは家のエクちゃん^{うち}がやつつけてくれたんだよ！」

律 「だから何事も無かったのか！」

漣 「ホント……あの日からあいつた事件が起きすぎだよなあ……。」

梓 「ホントですよね……。」

一行が別れ、1人帰路を歩く唯。そこへ一通のメールが届いた。

）……

唯 「ほえ？誰だろ……？」

ケータイを開くと、光からのメールだった。

唯 「光君だ！えつと……今から前に言ってた喫茶店にいかない？……ふおおお！ケーキっ ケーキっ」

光からの誘いに喜ぶ唯だが、光よりも喫茶店のケーキの方に意識が傾いていたのは言う間でもない。

唯からOKのメールをもらうと、途端に光は、はしゃぎだす。

光 「よつしゃー!!唯ちゃんと喫茶店に行けるう!!しびれるう!!あこがれるう!!」

俊 「ジ ヨか!!?」

蓮 「ホントにいいのか?一人で?俺らは律達と行動するけど。」

光 「ああ!念願の放課後デートだあ!!」

俊 「本人はその気ないんだろーがっ。」

光 「そ、そんなのわかってるって!じゃ、行ってくるぜー!」

勇士朗 「大丈夫かよ光のやつ・・・。」

俊 「まあ、あいつはウブだからなあ・・・。」

メンバーとは逆方向に向かいます光。例の喫茶店は唯の帰路の途中にあったのだ。

待ち合わせていた街の一角で唯と合流する光。

唯 「光君!」

光 「ごめんね、唯ちゃん。急に誘っちゃって。」

唯 「ううん、誘ってくれてありがとっ!早く食べにいこう!ケーキ、ケーキ!」

光 (ああ……このシチュエーション……夢のようだ……)

早速その喫茶店に行き、店内でケーキと紅茶を堪能する。この喫茶店は余り目立たない所にあるのだが、店内の品々はかなりのもので、喫茶店としては穴場のような店である。

一切れのケーキを口に運ぶ唯。

ぱくっ

唯 「おいひー！」

一口食べただけで幸せそうな声で喜ぶ唯。光はこの状況に喜ぶ。

光 「へへへ……ここー押しの店なんだ。」

唯 「もぐもぐ……ごくん……光君もケーキ好きなの？」

光 「ま、まあね。喫茶店が好きだからさ、俺。店の雰囲気っていつのかな？」

唯 「へえー男の子でもいるんだね……ぱく。」

唯と向き合いながら喫茶店で過ごす光。今の光にとってはこれ以上の幸せはなかった。

光 (ああ……嬉しすぎてどうかなりそう……。ああ……)

・夏服の唯ちゃんかわいいい〜……………)

夏服の桜高の制服姿の唯に惚れ惚れする光。

唯 「いつもムギちゃんが出してくれるケーキもおいしいけど、
ここのお店のケーキも最高だよ！紅茶もおいしいし！今度から寄る
うっ！」

光 「喜んでくれてよかった！」

唯 「それにしても……………」

光 「え？」

唯 「やっぱり光君は、髪さらさらだね〜。このさわり心地大
好き！」

急に話を変えた唯は光の髪に触れて、なでなでする。光は歓喜
の余りに変な声を出してしまう。

光 「うきゅーっ！！！」

唯 「へ?!何今の声?!うきゅーだって！カワイイ!!！」

光 「か、かわいい?!!!！」

唯 「もう一回やって、もう一回やって!!！」

光 「う……………うきゅー!!！」

喫茶店を後にした光と唯。てくてくと二人並んで歩く。傍から見ればカップル同然のようだ。

唯 「本当に送ってくれるの？」

光 「う、うん。誘ったの俺だし、長々喋ってたら遅くなっちゃったし。」

唯 「気にしなくていいのに……でもありがとう。」

唯の笑顔に頬を赤く染める光。

だがその幸せな時間は突如として崩れ去る。道路を挟んで反対側の建造物が突如崩壊。新たなBLWが出現する。

ゾドドドドゴゴオオオツツ！！

BLW 06 「コキュガアアアアツ！！！」

白い甲殻を纏ったカニのような身体にハサミに八本の脚が生えている。中央にはBLWのタイプによくある、カタツムリ状の目がついた縦の楕円形の頭部が確認できる。

巨大なハサミを振るって暴れる。

ドオガアアアアアアツ！！！！

周囲の建造物や車両を破壊。縦横無尽に暴れまくる。

光 「マジでヤベー!!」

唯 「怖い・・・!!」

更に振るったハサミで砕かれた残骸が飛んでくる。その直撃を受けた通行人たちの身体が砕ける。

光 「俺にも・・・勇士朗みたいに闘えれば・・・!!」

その時、目の前に瓦礫が降ってくる。

ドドドドオツ!!

光 「うお!!」

唯 「ひゃああああ!!」

後数メートル前に進んでいけば直撃を受けていた。立ち止まってしまう二人。だが、更に側面の建物に直撃した溶解弾のとはっちりが二人に降りかかる。

ヴァチャアアンツ!!

光 「唯ちゃん!!」

咄嗟にこれから唯とギー太を覆うようにかばう光。微量の溶解液が光に降りかかった。

光 「ぐあああああああ!!」

言いよつた。その場に倒れこむ光。微量
とはいえ人のサイズには致命的な量の溶解液が中つたのだ。

唯 「……光君……？……光君！！！」

光 「ゆ……唯ちゃん……と……ギー太は無事……
？」

唯 「私とギー太は大丈夫だよ！！でも光君が！！！」

光 「俺……し……死ぬ……かも……。」

段々と呼吸が苦しくなる。同時に意識も薄れる。

唯 「やだよ！！またケーキ食べに行きたいよ！！！」

光 「お……おれ……唯ちゃんの事が……好き……
……だった……。」

唯 「え？！！！」

光は死を確信し、想いを打ち明けた。その間にも身体が溶解液
に蝕まれていく。

光 「あの日……文化祭の時に……一目見て……
惚れ……た……ぐッ！！！」

唯 「光君……！！！」

呼吸が乱れ始める光。もはや光の命は風前の灯であった。

光 「はあ．．．はあ．．．ぐがあつ．．．はあ．．．
ゆ．．．唯ちゃん．．．。」

震える手で、唯の頬につたう涙を拭う光。

唯 「やだよお．．．死んじゃだよお．．．。」

震える声で頬に触れている光の手を握る唯。涙がとめどなく流れる。

光 「唯ちゃんは．．．笑顔が一番．．．似合ってるから．．．泣かないで．．．。」

唯 「うつつ．．．うつつうう．．．。」

シュシュゴゴオオオオオオ．．．

ズギヤドゴゴオオオオンツツ！！

BLW 06 「ゴギキイイイイ！！！」

その時、遠距離射撃の攻撃がBLW 06を見舞った。ジェットブーメランの弾丸だった。

後方からエクスカイザーと仕事帰りの勇が駆けつける。

勇 「おおおおー！！！」

エクスカイザー 『勇！！唯がいるぞー！！』

勇 「なんだって?!.....本当だ!!唯!!!」

勇の声に振り向く唯。勇は唯の傍へと駆けつける。

勇 「大丈夫か!?!」

唯 「勇兄ちゃん!!光君が!!光君があ!!」

勇 「だ、誰だよ光君て?!彼氏か??うわっ!!ひでえな!
!エクスカイザー!!」

光の溶けた身体を見るなりエクスカイザーに呼びかける勇。

エクスカイザー 「ああ!!わかっている!!」

腕を光にかざし、修復光線を放つエクスカイザー。光の身体が
瞬く間に治っていく。

光 「.....あれ?お??おお!!治ったあっ!!」

唯 「光君!!」

思わず喜びの余り光をぎゅっと抱きしめる唯。

光 「え?え???!」

唯 「光君.....ありがとうエクちゃん!!」

光を抱きしめながらエクスカイザーを見上げながらお礼を言う

唯。笑顔の中の頬に涙がつつたう。

エクスカイザー 『当然の事をしたままでだ。さあ、危険だから下がるんだ。』

勇 「早く彼氏と逃げろ。ここは俺とエクスカイザーで引き受ける！」

笑みを浮かべながら流れた涙を拭う唯。

唯 「うん……いこつ光君！！」

光 「う、うん（え??俺いつの間にか彼氏になってる……???!）！」

いつの間にか彼氏とされた光は、戸惑いと歓喜の感情を混ぜながら唯とその場を離れる。

二人が逃げ切るのを確認すると、エクスカイザーが両腕を空にかざし、キングローダーを召喚する。

エクスカイザー 『キングローダーッ！！！！』

上空からキングローダーが召喚され、合体モードへと変形する。

エクスカイザー 『とおっ！！』

変形したキングローダーに飛び込み、内部に収容される。胸部にライオンフェイスが浮かび上がり、両手首が飛び出す。頭部にフェイスガードが装備され、勇の前に降り立つ。

勇 「カイザーフュージョン!!」

額から光線が勇に向かって放たれ、光線を介して勇が額に吸い込まれて融合する。両眼にライトグリーンの目が光り、キングエクスカイザーが動き出す。

キングエクスカイザー 『融合巨大合体!!キングエクスカイザー!!!』

キングエクスカイザーが、BLW 06に向かって飛び立つ。

キングエクスカイザー 『おおおお!!』

BLW 06の両腕のハサミを激突と同時にホールドする。

ガゴオオオオオンツツ!! ギギギギギギ・・・

BLW 06 「キヨキヨキヨガアアア!!」

キングエクスカイザー 『はあああつつ!!!』

ガゴゴオオツツ!!!

気迫と共にBLW 06の量腕をもぎ取るキングエクスカイザー。だが、その時、BLW 06の胸部から、ワーム状の腕が飛び出しキングエクスカイザーに襲い掛かった。

ギユグワツ・・・ドオオオオオツツ!!!

この攻撃を強靱なボディで受け止め、反撃に転じるキングエクスカイザー。

キングエクスカイザー 『フンッ！！カイザービームッッ！！』

ヴィギユイイイッッ！！

ドギヤゴオオオオッッ！！！！

至近距離からカイザービームの直撃を受け、ワーム状の腕が吹き飛ぶ。

BLW 06 「キユギヤゴオオオッ！！」

今度は頭部が伸び、キングエクスカイザーの左腕に噛み付く。

ガブシイッ！！

キングエクスカイザーに噛み付いたまま離さないBLW 06。溶解液を流し込み、アームパーツを溶解させようとする。

キングエクスカイザー 『ちっ！！カイザーソードッッ！！！！』

右腕で右脚から飛び出したカイザーソードを握り締め、一気に横薙ぎの一線で斬り払った。

ズギヤシャアアアアアアアッッ！！！！

BLW 06 「キョケケケケッケエエエッ！！！！」

光 「うん……ファイバードもスゲーけど、エクスカイザ
ーもスゲーや！」

しばらく会話が止まる。吹く風が二人の耳元をかすめていく。

その沈黙を唯が消した。

唯 「光君……ありがとう。私とギター太を守ってくれて。
これで助けてくれたの二度目だね。」

光 「え?!あ、ああ何ていうか必至だったし、咄嗟に動いた
んだ!」

唯 「……光君が死にそうになったときに言ってたコト・
……嬉しかったよ。」

光は、ドキツとする。だがあえてココは冷静になる。決して付
き合つとは言っていない。それにギター太と軽音部の事があるのだ。

唯 「私、初めてだよ。男の子に好きって言われるの。」

光 「そ、そうなんだ……で、でも唯ちゃんはギター太が・
……。」

光がそう言うと、唯は首を振る。

唯 「ギター太は、ギター。光君は光君……両方好きだよ。
へへへ。」

光 「唯ちゃん……って言うことは……。」

唯 「光君となら・・・付き合ってもいいよ?」

光に唯が微笑む。満面の笑みが広がる光。遠くでサイレンが響く中、桜ヶ丘の片隅で新たなカップルが誕生した。

二人の顔を黄昏の夕日が照らしていた。

光 「凄い爆発音したけど終わったのかな?」

唯 「いこ?従兄のお兄ちゃんに頼んで送ってってあげる。」

光 「え?あ、うん!」

二人は再び勇とエクスカイザーの所へと歩を歩み出した。

つづく

次回予告

夏休みも近づき、期末テスト期間に入る勇士朗達。そんな中、光との交際を始めた唯は、近所のおばあちゃんへの恩返しとして演芸大会の出場を決め、梓の協力を得て期末試験との両立を図っていた。夕方の河川敷で練習に励む唯と梓。そんな二人に光と俊、はたまたおばあちゃんが差し入れを持ってくる。黄昏時の中に平和がまどろむ。

だが、ほぼ同時期に商店街へ赴いていた勇士朗達の携帯に緊急隕石速報のメールが届いた。

次回、新生太陽の勇者ファイバード・サーガ 第27話 「夕餉の上の眼光」

夕餉の時間が破壊される・・・。

第27話 「夕餉の上の眼光」

夏休み間近に迫り、期末テスト期間が始まっていた。

勇士朗達はかつたるそつに図書館でテス勉強する。

蓮 「があ〜……………だあり〜。」

光 「やってらんねー。」

蓮と光がだるそうな口調でテス勉強する。

勇士朗 「まあ、コレを越えりゃあ、夏休みが待ってるぜ？も
う一踏ん張りだ。」

俊 「そうだぞ。高校生活最後の夏休みだ！」

蓮 「うおー……………」

光 「うー……………でもコレを潜り抜ければ夏休み、唯ちゃん
とデートいける〜。」

光の何気ない一言で一同は「ん？」と一同は光を見た。

勇士朗 「なんだって……………？」

蓮 「まさか……。」

俊 「付き合ってるな……?!」

光 「うごおお!!」

蓮は動揺する光に迫る。

蓮 「付き合ってるんなら早く言えよ!!ええ??!!で、どこまでいったんだ?!Aか!?Bかあ?!」

光 「わけわかんねーこと言ってるじゃねー!!」

俊 「おい!!ここは図書館だぜ!!静かにしろよな!!」

勇士朗 「後でまた聞かせてくれ。今は勉強に集中しようぜ。」

図書館を後にした勇士朗達。歩きながらコンビニで買ったホットドックやらから揚げを食う。

勇士朗 「で?どうなんだ?唯ちゃんとは?」

光 「そりゃもう……きゅばああ!!」

蓮 「意味わからん!!」

勇士朗 「……ま、順調みたいだな。」

俊 「そういう勇士朗は淺ちゃんとはどうなんだ?最近?」

勇士朗 「え?! ああ、いたって平行線か? けど、この前の戦闘の時に秋山さんが闘う俺に歌ってくれたんだろ?」

俊 「ああ。遠くで闘っているお前の為にな……。」

勇士朗 「ひょっとして俺と秋山さんは……両想いなのか……???」

俊 「それはおまえ自身が確かめるんだな。」

蓮 「そうそう!」

勇士朗 「なんだそれ? やけに意味深じゃねーか? やっぱりそうなのか?!」

勇士朗達の歩いてる反対側の歩道には、漣と律が歩きながらサ―ティーワンのアイスを食べていた。律が気づき、勇士朗達に声をかける。

律 「ん? あっちの道路にいるの勇士朗君達じゃないか?」

漣 「あ! 本当だ!」

律 「おーっす!」

律の声に、勇士朗達も気づく。

勇士朗 「秋山さんに田井中さん!」

俊 「噂をすれば何とかだな。」

漣達がいた方の歩道に渡って合流する勇士朗達。会話しながら歩を進めていく。

漣 「勇士朗君達はどう？テス勉はかどってる？」

勇士朗 「ぼちぼちってトコかな？さっきも図書館でテス勉してたけど。」

漣 「私達は学校の図書室でやってたよ。」

そこへ律が思い出したかのように唯と光のコトを突っ込んだ。た。

律 「そうそう！唯とようやく付き合えることできたんだよね
光君！！おめでとさん！！」

光 「えへへへへ〜・・・。」

漣 「あれだけギター命じゃ光君の事は眼中にないものと思っ
ていたけど、そうじゃなかったみたいだな。」

光は嬉しそうな表情で照れている。

俊 「所で当の唯ちゃんや梓は？」

光 「唯ちゃん達だったらテス勉かねて近所の演芸大会にも出るっていうことで二人して練習中なんだよ。」

勇士朗 「へえ〜。」

俊 「テスト期間中によくできるもんだな……。」

光 「なんか近所の世話になってるおばあちゃんに恩返ししたいとかで出るんだってさ。優勝者には温泉旅行だって……。」

勇士朗 「えらいところあるんだなー。」

その日の夕方。桜ヶ丘のとある河川敷。唯と梓が練習に励んでいた。

唯 「ふいー……ちよつと休憩しよ！休憩！」

梓 「そうですね……一息入れましょう。コンビニ行きます？」

唯 「そうだね。そうしようあずにゃん！」

二人が河川敷の階段から立ち上がろうとしたとき、道路側の方から光と俊が降りてきた。

光 「おーい！差し入れ持ってきたぜー！！」

唯 「ああ！光君だ！やつほー！」

梓 「俊さんも?!」

唯達の所へ差し入れを持って降りてくる光と俊。手にはコンビニ

二の袋を提げている。

袋から差し入れのデザートと紅茶を取り出す。

光 「はい、紅茶とデザートのカッキー！」

唯 「わあ！ありがとうございます！光くん！！よいしょ！」

二人揃って階段に腰掛けて座り込む。

俊も持っている差し入れを若干照れくさそうに梓に渡す。ミルクティーとゴールデンチョコパンだ。

俊 「ほら・・・梓にも。」

梓 「ああ！ありがとうございます！！！」

嬉しそうに差し入れを受け取る梓。俊と一緒に階段に座る。

梓 「そういえばお二人共、付き合い始めたんですね？おめでとつございます！！！」

梓がゴールデンチョコパンの袋を開けながら笑顔で光に言う。

光&唯 「いや〜照れるな〜・・・。」

梓 「・・・息、ぴったりですね・・・。」

俊 「ホントだな・・・。」

すると今度は唯が梓に突っ込んで来た。

唯 「ところであずにゃんはいつ付き合っの？」

梓 「はい???誰とです?????」

俊 (!!!!!!!)

唯 「それはもちろん、しゅ……………」

おばあちゃん 「唯ちゃああん。」

俊の名が飛び出そうとしたとき、唯を呼ぶおばあちゃんの声が河川敷に届いた。声の方角に顔を向ける唯。俊にとってはある意味九死に一生を得た気分だった。

俊 (うおおおおお……………こんな所で言う事じゃねーよ……………てか本人がいる前で言うな……………!!!恐ろしいぜ……………クイーン・オブ・天然!!!!)

唯 「おばあちゃん！」

光 「え?唯ちゃんのおばあちゃん？」

唯 「ああ、直接のおばあちゃんじゃないよ。前に話した昔からお世話になってるお隣のおばあちゃんだよ。」

光 「あの人がそうなんだ。」

おばあちゃんが唯達のと頃へと歩み寄り、手に持っていた紙袋

を唯に渡す。

おばあちゃん 「頑張ってるみたいだね……はい……肉じやがコロツケ。」

唯 「わあああ！ありがとう、おばあちゃん！！」

おばあちゃん 「この子達はお友達？」

唯 「うん、そだよ。あずにゃんと俊君。」

俊 「はじめまして。」

梓 「はじめまして……。」

唯 「あずにゃんも演芸会に出てくれるんだよ。」

おばあちゃん 「そうなの？ありがとね……。」

梓 「あ、いいえ。私としても唯先輩から話を聞いて出てみたくなっただ……。」

そして光の腕を引っ張り、唯がおばあちゃんに光を紹介する。

唯 「あこの男の口は……私の彼氏だよん！！」

照れくさそうに挨拶する光。

光 「あははは……どうも、光です。」

するとおばあちゃんは、感激しはじめた。

おばあちゃん 「まあ……!!唯ちゃんもそういう年頃になったのね。がんばってね。唯ちゃんはとつてもいい子だから大丈夫よ……。」

光 「う、ういつす（大丈夫って……何が?）!」

その頃、勇士朗は漣、蓮、律とで商店街に居た。

漣 「新しい服欲しいな……今年最後の軽音部の合宿があるし。」

勇士朗 「合宿?!軽音部って合宿するんだ!何かスゴイな。」

律 「何せ漣は合宿の発案者だからな。毎年ムギン家の別荘で練習してるんだ。」

蓮 「へえ〜!!」

勇士朗 「秋山さんが部長やってたほうがよかったんじゃないか……?」

律 「なんだよそれ?!」

漣 「最もだけど、今更……って話になっちゃうなあ。」

勇士朗 「そっか。」

漣 「誰かは練習そつちのけで遊ぶ事しか考えてないけどな・
・。」

律 「きゃっはー！ごめんなさーい」

蓮 「別荘かあ・・・やっぱりお嬢様は違うなあ・・・。」

商店街を後にし、住宅地内の路地を歩く4人。夕焼けの太陽が住宅地を照らしている。

漣 「勇士朗君達もよかつたら合宿に来てみない？」

勇士朗 「え?! いいの?!」

律 「ムギなら多分OKしてくれると思うぜ？」

蓮 「俺も行ってみてーなー、別荘!」

その時だった。4人のメール着信が一齐に鳴る。同時に勇士朗の顔色も変わる。

・・・

勇士朗 「・・・!!」

律 「なんだ?・・・緊急隕石速報メール?!」

隕石落下を予期・警戒するメールサービスだ。すなわちデストリアン襲来を差す。

勇士朗 「行ってくる!!」

そう言いながら駆け出す勇士朗。

蓮 「おう!!」

律 「いつてらっしやいな!!」

漣 「がんばってね!!」

漣の表情にはもう不安気な表情はなかった。勇士朗は必ず帰ってくると思いきったからだ。

蓮が桜ヶ丘の北方面上空に隕石を見る。

蓮 「あれか……!!」

D 隕石は、桜ヶ丘の北隣、緑ヶ丘に飛来・空中爆発する。そして20が姿を現す。

ズズゴゴオオオオオオツツ!!!!

着地と同時に轟音をならして、新興住宅地を破碎する。

頭と肩が繋がった獣人のような体。毛むくじゃらの灰色の体毛。爛々と光る眼。禍々しい巨体は、手当たり次第に家々を破壊する。

夕食時の各家庭が悲惨な被害を受ける。

D 20 「ゴオオオオオツ！！！！」

ヴァガギャアアアツッ！！

薙ぎ払われていく住宅の残骸の中に無残な姿となった住民たちが飛び散る。

D 20 「ガアアアアア・・・！！」

猫背姿勢で、北東の方角に進むD 20。所々で市民を鷲掴みにして、口の中へとり込む。

住民達の悲鳴が響く。バックの夕焼けがD 20と重なり、光る眼がより不気味に強調される。

D 20 「ゴオオオオ・・・。」

その時、後方の方より小型のミサイルがD 20を目掛けて飛んできた。

シュゴオオオオオオ・・・スゴガアアアアツッ！！

D 20 「ガアアアツ？！！」

駆けつけたエクスカイザーが放ったジェットブーメランだった。

エクスカイザー 『デストリアン！！人々の夕餉の団欒を破壊するとは、断じて許さん！！』

叫ぶエクスカイザーに豪腕が襲い掛かる。

ゴオオツ!!!

ドグオオオオオオツ!!!

エクスカイザー 『くっ!!!スパイクカッター!!!』

シュガツ、シュガガツ!!!

攻撃をかわしながらスパイクカッターを撃つエクスカイザー。
スパイクカッターがD 20に突き刺さり爆発する。

ズキヤキヤゴオオツ!!!

D 20 「ガガガゴオオツ!!!」

だが、怒り任せに縦横無尽に怪力の豪腕を振るまくる。その
内の一撃がエクスカイザーにヒットする。

ゴドオゴオオオツ!!!

エクスカイザー 『がはあああつ!!!』

吹っ飛ばされ住宅街に突っ込むエクスカイザー。

ズガアアアアアア!!!

エクスカイザー 『ぐはっ……!!!おのれ……!!!』

気合を入れて再び低空を駆け始め、フェニックスのオーラを宿しながらファイバードの胸部に飛び込む。

ファイバード 『チエエエンジツツ・・・ファイバアアドツ・
・フレイム・ブレスター!!!』

そして腕を天へかざしエネルギーを撃ち出す。フレイムブレスターが召喚される。ファイバードと武装合体を敢行する。そしてそれと同時にフレイムソードを抜き取った。

ファイバード 『フォーム・アツプツツ!!!武装合体、ファイバアアドツツ!!!』

オレンジ色に輝くフレイムソードを振るい、D 20の側面から迫る。

ファイバード 『はああアツツ!!!』

ズバシユウウツ!!!

D 20 「ゴオオオオツ???!」

突然の奇襲に不意打ちを食らわせられるD 20。エクスカイザーに集中しすぎてファイバードに気づけていなかったのだ。攻撃を受けると同時にエクスカイザーを手放す。

エクスカイザー 『がああつ!!!ぐおお・・・!!!』

ファイバード 『エクスカイザー先輩!!!』

エクスカイザー 『わ、私はいい！！奴を駆逐する事に集中するんだ……！！！！！！』

ファイバード 『だけど……！！！！』

エクスカイザーは何とか身体を持ち上げて立ち上がる。胸部にクラック（ヒビ）が見受けられる。

エクスカイザー 『……とにかく奴を駆逐する事に専念しろ……！！！！』

ファイバード 『わかりました！！！！』

フレイムソードの切先をD 20に向けるファイバード。

ファイバード 『デストリアンツ！！貴様を駆逐する！！！！』

そう叫ぶと一気に攻め込む。D 20も闘争本能を出しながらファイバードに向かってくる。豪腕をふるって殴りかかるようにする。

ゲオオオツ！！！！

ギユワツと振るわれた拳をかわし、D 20の胴体にフレイムソードで逆銅を撃ちこむ。

ファイバード 『っ……！！！！』

ズガギヤアアアアツ！！！！

梓 「同じく、中野梓です。」

唯 「二人揃って……ユイ！」

梓 「アズ！」

唯 「でーす！！それでは聞いてください！』ふでペンボールペン〜』！」

演芸会用にアレンジされたふでペンボールペン〜が演奏される。ギャップの余りに律がガクツとなる。

律 「そうきたかー！」

漣 「見てることちが恥ずかしくなってくる……。」

勇士朗 「あははは……。」

曲が流れると同時に嬉しそうに手拍子を叩くおばあちゃん。実の孫のようにかわいがってきた唯の成長によるこんでいる様子だ。

光 「はあ……やつぱりかわいいや……唯ちゃん。」

演芸会が終了し、惜しくも温泉旅行をもらえなかった唯達は、参加賞の品をおばあちゃんに手渡す。

唯 「さんかしようでしたー！！！」

おばあちゃん 「ええ?! 私に???唯ちゃんがもらえばいいの

に……。」

唯 「私、おばあちゃんに恩返ししたかったんだよ！だからこれはおばあちゃんに！」

おばあちゃん 「そうかい……ありがとね。それじゃあ受け取っておくよ……。それにどうだい？今から家で食べていくかい？まぜご飯が炊いてあるんだよ。もしよかったらお友達も誘って……。」

唯 「ほんとにー?!じゃあ、みんな呼ぼうよ！あずにゃん！」

梓 「そ、そうですね！」

黄昏の空の下、おばあちゃんの家には滅多にない大人数が入り、団欒のひと時を送る。

度重なる災厄の合間に流れる平穏を勇士朗は噛み締めていた。

漣 「どうしたの？ぼーっとしちゃって？」

勇士朗 「いや、平和だなんてね……。」

つづく

次回予告

BLWが埼玉県に多発出現した。これに対し旋風寺勇者特急隊とM・P・D・BRAVEが出勤し、対処に当たる。新たに現れる

BLWにマイトガンとジェイデッカーの強化兵器が真髄を見せてける。

次回、新生太陽の勇者ファイバード・サーガ 第28話 「剣と銃の真価」

その真価は、超A.I.ロボの力に比例するのか・・・。

第28話 「剣と銃の真価」

夏本番の埼玉県・さいたま市。太陽が照りつける暑い気候の中、BLWが跋扈する。

BLW群 「クケキャキャカア!!!」

BLW 02、03が、それぞれ2体つつ出現し、計4体が破壊の限りをつくす。

更には、大宮駅を砕きながら新たなBLW、BLW 07が出現。典型的にはBLW 05に酷似しているが、あばら骨が肉を突き破ってむき出しになっており、両肩と背中から牛の角のような突起物が生えていた。3本指の手の巨大な爪が特徴的だ。

ぐわっと下に手をかざして、通行人を驚掴みにして握り砕く。そしてそれを口の中に入れ込む。

かつてない大惨事に見舞われる所沢市。もはやそこに今までの日常はない。

そんな中、駅の線路とその上空から旋風寺コンツェルンの勇者特急隊が駆けつける。

動輪剣を引っさげたロコモライザーとライナーズ、トレーラー特急、コマンド特急がそれぞれ変形を開始する。

ストライクボンバー 「チエエエエンジンッ！！ストライクボンバー！！」

フレアダイバー 「チエエエエンジン！！フレアダイバー！！」

舞人 「よし！マイトガイン、合体するぞ！！」

マイトガイン 「了解っ！！」

舞人は、ロコモライザーをマイトガインに変形させる装置を作動させる。

舞人 「レッツ！！マイトガインッ！！！！」

BGM 「レッツ・マイトガイン！！」

舞人のその合図とともに、ロコモライザーが変形を開始。同時にライナーズも左右に着き、左右の腕に変形し始める。

両腕の接続部からレーザーセンサーが出され、それに導かれるようにドッキングする。

舞人 「マイトガイン、テイク・オフッ！！」

両手首が飛び出し、各部から蒸気が噴出する。胸部が折れ込み、その上部から頭部が現れる。

両眼のメインカメラが光ると両腕の拳をぶつけて正拳突きをキメル。

BLW 07の面前に降り立つマイトガイン。言葉を解さぬ化け物に対して名乗りをあえてあげる。

BLW 07 「クゴカカカカツ!!」

マイトガイン 『銀のつばさにのぞみをのせて、灯せ平和の青信号!!勇者特急マイトガイン、定刻通りただ今到着!!!』

BLW 07 「カキヤアアア!!」

間髪入れずに腕を振りかざすBLW 07。マイトガインはこの攻撃をレフトアームでガードする。

ガゴオオツ!!

マイトガイン 『いきなり掛かってきたか!!はああっ!!』

気迫をこめて巨腕を弾き返すマイトガイン。舞人はこの間に指しを出す。

舞人 「このBLWは、俺とマイトガインで引き受ける!!残り1体の個体をストライクボンバーとフレアダイバーで叩いてくれ!!」

ストライクボンバー&フレアダイバー 『了解!!』

一方、同県市内の別のエリアにもBLWが出現していた。

浦和区にて、M・P・D・BRAVEとBLWの攻防戦が展開されていた。

レイバーズがBLW 01の集団と戦闘状態にあった。

ガンレイバーがガンリボルバーを撃ち放つ。

ガンレイバー 『でりゃあっ!!!』

ガンツッ!! ガンツッ!! ガン、ガン、ガン、

ガンツッ!!

一発、一発を確実に中てていくガンレイバー。使った薬莖を落とし、リロードする準備に移る。

その間に着弾した弾丸が、爆発した。

ドオドオドオヴアチュガガアアアンツッ!!!

ガンレイバー 『楽勝、楽勝 次ぎ行くぜっ!!!』

ショットレイバーがその後方でリニアランチャーをぶっ放す。

ショットレイバー 『撃ち砕くっ!!!』

デイドオゴオツ!! デイドオゴオツ、デイドゴオオオン

ツ!! デイドゴオオオンツッ!!

ズダギヤアアツ!! ドオドオズウウツ!! ドオガキ

ヤアアアアツ!!

高速で撃ち放たれるリニアランチャーの弾丸が、BLW 01を粉碎させる。

ショットレイバー 『目標駆逐!』』

街に這い回るBLW 01にJバスターで攻撃をかけるジェイデッカー。撃ち出されるビームがBLW 01を1体、1体撃破していく。

ドウヴィイイイイッ!! ドウヴィイイイ、ドウビイイイッ!! ドウヴィイイイッ!!

ズダキヤア、ズヴァドオオオ、グドオガアアッ、ヴァズガアアッ!!

ジェイデッカー 『埼玉県内の二箇所にもBLWが出現……今までに出現例がない地域だ!!』』

ホバリングした状態から再び低空を進むジェイデッカー。その前方から、BLW 03がアスファルトを突き破って姿を現す。

ドグオガアアッ!!

ジェイデッカー 『何?! くっ!!』』

自らの機体を減速させ、Jバスターの銃口をBLW 03に向けている。

ズドオオオッ!! ズドオ、ズドオオオオッ!!

ズドオガ、ドオドオギャアアアアンツツ！！！！

BLW 03 「クケケケケアアアアツツ！！！！」

JバスターのビームがBLW 08のボディーに着弾する。皮膚の表面が抉れ、中の肉が露出する。

ビーム仕様になったJバスターの威力は確実に上がっていた。ジェイデッカーは撃ち続ける。

ドオオオオオ！！ ドオオ、ドオオ、ドオオ、ドオオオオオツツ！！！！

ズウドオツ、ズズズドオガ、ドヴァチャアアアツ！！

傷口にビームをピンポイントにシユートさせ、BLW 03の身体を破壊、更には頭部にビームを放ち、口内に直撃・粉碎させた。ドオオンと倒れこむBLW 03。

吉崎 「ジェイデッカー、周辺のBLW 01及び出現したBLW 03を駆逐しました！デストリアン戦の時よりも凄い威力を発揮しています！！」

要 「ああ！そのようだ。やはり武装強化は正解だ！！」

ジェイデッカー 「BLWにはこれほどの威力を発揮するのか……。」

Jバスターの威力の上昇に目を見張るジェイデッカー。そのま

ま残存BLWの駆逐にかかる。

ドオオオオオオオ・・・

再び大宮駅周辺。立ち入り禁止区域が地元警察に布かれる中、勇者特急隊が戦闘を展開させる。

BLW 02を2体同時に相手するフレアダイバー。撃ちだされる速射光弾をかわしながら、ツインバスターシリンダーとブレストフアランクスを連射・連発させる。

ドオドオドオドオドオパパパパパツ・・・・・・ズズズズズズズウウウウウツツ！！！！

フレアダイバー 『2体同時か・・・・！！少々厄介だが、粉砕させるまでだ！！』

ドウヴアダラルウラララララララドオオ、ドオオ、ドオオ、ドオツ！！！！

ズドオドオドオゴゴゴオオオツツ！！

BLW 02A 「キヤクカアアアツ！！」

一方でストライクボンバーが奮戦する。左右から攻め入るBLW 03を同時に相手にせねばならない。

ストライクボンバー 『2体同時上等！！おおおつ！！』

ドオガゴオオオツ！！ ドオオオオオオオツ！！

ヒュフオツ・・・ザガシャアアアアアアアツッ!!!

BLW 07 「クケアアアアアアアツッ!!!」

胸部にヒットし、突き出たあばら骨と肉を斬り裂く。

ふらつくものの、踏ん張りながら左腕でマイトガインに殴りかかる。

ダゴガアアアツ!!

マイトガインはジャンプでこれをかわす。拳が地面を砕いた。

間合いを取りながら着地し、舞人は射撃系統の武装を操作する。

舞人 「・・・シグナルレーザーで牽制する!!!」

マイトガイン 『シグナルレーザー!!!』

ヴィギユイイイイツ!!

ズキヤアアアアツ!!

BLW 07 「キヤギユウウ?!」

頭部に直撃し、爆煙に包まれる。その隙に接近し、片手で右斜めの斬撃を見舞う。

マイトガイン 『だあああ!!!せやあああつつ!!!』

舞人 「あ、ああ……なんとかな……。」

ズン……ズン……ズン……

マイトガイン 『むっ!!!くそっ!!!』

倒れこんだマイトガインに、BLW 07が迫る。そして叫びながら豪腕をマイトガインに直撃させる。

BLW 07 「カアアアアアア!!!」

ドゴガアアアアアッ!!!

マイトガイン 『がはあああっ!!!』

舞人 「うおおおお!!!」

近辺ではフレアダイバーとストライクボンバーが戦闘を継続していた。フレアダイバーは既に1体を駆逐し、2体目の駆逐を敢行していた。持てる重火器をぶっ放しながらダメージを与え続ける。

ヴイドウルダダダララララララアアドウヴァゴ、ド
ウヴァゴ、ドウヴァゴオオッ!!!

ズキヤララララドオドオドオドオドオドオオオッ

!!!

BLW 02B 「カキヤアアアッ!!!」

ストライクボンバー 『だりやあああつ!!!』

ドオガゴオオツ!!

一度殴ると連続でナツクルラッシュを敢行。ボコボコに殴りまくる。

ストライクボンバー 『どおりや、おら、せや、だりやあああ
あ!!--!』

ドオゴオオオ、ドオオオ、ズドオオ、ダゴガアア、ズドオ
ンツツ!!--!

グツと右に拳を振りかぶり動きを止めるストライクボンバー。
拳がスパークし始める。

ストライクボンバー 『ライザークラアアアツシュツツ!!』

一気に打ち込まれるストライクボンバーの右拳。 B L W 0 3
Bの胸部を粉碎し爆砕させる。

ズヴァラギャゴオオオオオオツツツ!!

再びマイトガイン。殴り続けられていたが、一瞬の間をついて
バーニアを噴射させスライドしながらその場を離脱する。十分な間
合い圏内に着地するマイトガイン。

舞人 「一瞬の油断でかなりのダメージを負ってしまったな・

パージされた動輪剣のエネルギーがBLW 07の身体を爆砕させた。

爆炎の中に立ちそびえるマイトガイン。シュインツと腰に動輪剣を装着する。

マイトガイン 『目標撃破!!これにて本日の運行を終了する!!』

一方、浦和区。ジェイデッカー達が奮戦する。大半は駆逐したものの、突如変異したBLW 03にビームを撃ちつづける。頭が二つ生え、人の腕のようなものが左右に3本、計6本生えている。

これに左右からレイバースが援護射撃する。

ガアン、ガアン、ガアアンツツ!!

ガンレイバー 『こいつ・・・突然頭と腕が生えてきやがった?!!!』

デイドオゴオオンツ!! デイドオゴオオンツ!!

ショットレイバー 『BLWが突然変異・・・?!!!』

ヴィギユドオオオツ!! ヴィギユドオオオツ!! ヴィギユド、ヴィギユドオオオオ!!

ジェイデッカー 『これが突然変異の実態なのか?!!!』

攻撃を受け続けダメージが蓄積していくBLW 03。苦し紛れにジェイテッカーに飛び掛る。

BLW 03変種 「ギユケエエエツツ!!」

ジェイテッカー 『何?!だが直撃させればいい・・・!!』

ヴィギユドオ、ヴィギユドオツ!!

ズズドオオオオオツ!!!

BLW 03変種 「ギユゲアツ!!」

飛び掛ろうとしたBLW 03がJバスターのビームに撃ち落され、道路に落下する。

だが、瞬時に立ち上がり、二つの頭が口を開く。すると得意の溶解液を撃ち放ち始めた。

ヴィドオ、ヴィドオツ!! ヴュヴユドオツ、ヴュヴユドオツ!!

ヴァヴァヴァジュウウウ・・・ジュジュジュウウ・・・

ジェイテッカー 『ぐお・・・!!装甲が・・・!!』

吉崎 「ジェイテッカー、溶解液による攻撃を受けました!!左腕、右肩、右側胸部、前部腰アーマー部に着弾、装甲が若干溶解!!戦闘に支障はありません!!」

要 「ジエイデッカー、一旦距離をとれ！！レイバースは後方から援護射撃だ！！」

ジエイデッカー&レイバース 『了解！！』

ジエイデッカーがウイングスラスターを使って一旦後退。その隙にBLW 03の背部にレイバースが射撃する。

ガアン、ガアン、ガアン、ガアン、ガアンツツ！！！！

デイドオゴオオ！！ デイドオゴオオ！！

ズズズズドオドオドオゴゴオオオオツ！！！！

BLW 03変種 「ギャゲエエエツ！！！！」

後ろへ振り向き、レイバースに注意を向ける。

その隙にジエイデッカーはJバスターを左手を添えながら構え、銃口をBLW 03に向ける。

ジエイデッカー 『隊長！！』

要 「ああ！！吉崎、Jバスターをキャノンモードに移行だ！！レイバースは左右に後退しろ！！」

吉崎 「了解！！」バスター・キャノン、アクティブ！！」

レイバース 『了解！！』

吉崎がモードを変更し、Jバスターがキャノンモードに切り替わる。

ジエイデッカー 『移行確認!! Jバスター・キャノン・・・ロック・オン!!!!』

ジエイデッカーのロック・オンカーソルがBLW 03を捕らえる。そして、エネルギーチャージが開始される。銃口にエネルギーが充填していく。

ヴィギユイイイ・・・

吉崎 「Jバスター、エネルギー充填率120%!! いけます!!」

ジエイデッカー 『シュートツツ!!!!』

ズヴァドオオオオオオオオオオオオオオオオオオ!!!!

ドオヴァシャアアアアアアアアアアアアア!!!!

ズギヤドオオオオオオ!!!!

一気に撃ちだされた高出力のビーム過流がBLW 03の肉体を破碎させる。本体は蒸発し、残された一部の肉体が地面に落ちる。

吉崎 「周囲に特異生体反応無し、目標の駆逐を確認!!」

ジエイデッカー 『目標駆逐完了!! これより通常モードに移行する!!』

戦闘が終了し、M・P・D・BRAVEと旋風寺勇者特急隊が合流する。

要 「舞人！本日の協力、感謝する！！」

舞人 「こちらこそ！それに戦闘を引き受けるのは、こちらとしても義務があり、当然の事をしたままでですよ！！」

要 「そうだったな。舞人達も特殊生物に対向する為の任務を任されている身だったな！」

それぞれのサポートロボットが事後処理作業に取り組み中、互いのリーダーロボットが今回の件を談話する。

マイトガイン 「しかし、今まで現れていなかった県に出現するとは……。」

ジェイデッカー 「牙島警視總監殿が言っていたようにバイオ生物「災害」として処理していく他ないのか？」

サーチアイでこれまでのBLWの出現箇所を確認するジェイデッカー。同じくマイトガインも確認する。

ジェイデッカー 「出現箇所が北上している……。」

マイトガイン 「確かに……。」

要 「もしかしたら既に組織が放った個体達は既に駆逐済みで、現在現れたのは『クイーン』と呼ばれる繁殖機能がある個体によるものかもしれないな。」

舞人 「だとすれば・・・現在埼玉県内の地下のどこかに『ク
ーン』がいるのか?!」

要 「わからない。あくまで推測だ。後日、冴島警視總監にう
かがってみる。」

ジェイデッカー 「人が作り出し、その人によって改造された
元・人間の生体兵器が人を苦しめる・・・・・・皮肉なものだ。
」

マイトガイン 「ああ。ましてや我々はその改造された犠牲者
をこの手で駆逐している・・・実に複雑な気分になる・・・。」

その日の夜。仕事を終えた要は、さわ子と神奈川県のとある夜
景スポットに出向いていた。涼しい夜風が、二人を包む。

さわ子 「綺麗ねえ・・・それに風も涼しい。」

要 「そうだね・・・今日は確か友達の結婚式だったんだよね
?」

さわ子 「うん。参加したのは二次会の方だけだったんだけど、
軽音部だった頃のメンバーが結婚することになってね。それで当時
のバンドを再結成してライブやったんだあ。」

要 「へえ・・・確か・・・ヴォーカルとギターやってたんだ
よね?さわ子さんは・・・。」

さわ子 「ま、まあね……あはは(これ以上は聞かないで
〜)。」

要 「俺もさわ子さんの歌……聴いてみたいな。」

さわ子 (ひ〜……それだけはだめなの〜要さんの懐く私
のイメージが崩壊するう〜)

さわ子はやむえず話題を強引に変える。

さわ子 「ところで……今日も現れたのよね？ニユースで
見たケド。」

要 「ああ……そうだよ。今日も闘ってきた。」

さわ子の方からBLWの話を持ち出した。すると要の雰囲気
が変わりはじめる。

さわ子 「こんなに綺麗な夜景の下にああいう生き物がつこめ
いてると思うと……なんか怖い。」

要 「さわ子さん……。」

さわ子は、要を見つめ問う。

さわ子 「いつになれば安心できる日々になるのかな……？」

要 「わからない……奴らは嘲笑するようにならなくと出現する
……。」

さわ子 「要さん……。」

要 「だが、いくら嘲笑されようとも、俺達は全力で闘う！それに守りたい存在も見えている！！市民は勿論の事、君の存在も守りたい！！」

さわ子 「え……？」

要は胸中を明かしていく。

要 「任務中、いつも頭の片隅で君のことが心配になる。もし、任務中に君に危険が及んだらどうする事もできない……そう思うと……切なくなってくる！！」

さわ子 「でも……え？あ？？」

さわ子はどちらに転がるか不安になる。告白へ繋がるのか、これ以上は付き合えないということになるのかが。あらかじめ守りたいと言っている故に後者に転がることは無いと思うのだが。

要 「それほどまでに君の存在が、俺の中で大きくなっている……。」

要は意を決して想いをさわ子に告げる。

要 「君さえよければ……その……俺と付き合っただけいい！！シンプルな言い回しでごめん！！だが、これが……俺の気持ちだっ……！！」

さわ子 「え？あ？え？？も、もちろんOKです！！わ、私も

要さんの事に惹かれていました!！」

要 「さわ子さん・・・ありがとう!！」

さわ子 (きゃあああ!!--逆に告白されちゃったあああ!!--信じられな!いつつ!!--)

満面の笑みを浮かべる二人。眼下に夜景が広がる中、また一つのカップルが誕生した。その二人を空一面に広がる星達が祝福しているように見えた。

つづく

次回予告

夏休みが始まり、軽音部のメンバーは合宿の打ち合わせを始める。

その後に勇士朗達のメンバーのそれぞれが彼女達と過ごす。それぞれがそれぞれのカタチで距離が自然に縮まっていく。だが、それでも忌まわしい星は降ることを止めない・・・。

次回、新生太陽の勇者 ファイバード・サーガ 第29話 「縮まる距離」

これまでの日々が絆か。

梓 「いつも言ってますけど、遊びに行くんじゃないんですよ？」

唯&律 「うへーい……。」

漣 「そういえば、火鳥君達も行きたがっていたなあ……。」

紬 「みんなでたくさん集まって楽しくなりそうね！」

嬉しそうに手を合わせながら紬が言う。

そこへ梓が一つ提案を出した。

梓 「一つ提案ですけど、夏フェスに行くのはどうです？たまにはプロの演奏聞くのもいいと思いますよ。」

漣 「夏フェスか！いいな、それも！一度行って見たかったんだあ！」

律 「だけど、チケット取るの今からじゃ難しくネ？」

梓 「そ、それもそうですね……。」

漣 「やはりそうなってしまつか……。」

律 「それならやっぱり合宿にしようぜ！蓮達も行きたがっていたしなー！それじゃあ……今年は川にしようぜー！」

唯 「かわかわー！！」

唯がきゃっきゃつとはしゃぎながら便乗する。

漣 「でも、まだ山の方にムギの別荘があるとは言っていないぞ？そのへんはどうなんだ？ムギ？」

漣の質問に絢がさりげなく答える。

絢 「ありますよ？」

律 「はい、決定ー！！」

唯 「オーイエー！！」

その日の帰り、漣が勇士朗とケータイで合宿のことを話していた。

漣 「・・・そう、それで今年は山にあるムギの家の別荘で合宿することになったんだ。」

勇士朗 「へえ・・・でもどの道あいつらも喜ぶだろうなあ・・・本当に俺達も行っていいの？練習の邪魔になったりしない？」

漣 「大丈夫だよ。練習見ても遊んでもいいからさ。」

勇士朗 「なんか悪いなあ・・・あははは。どうせなら何か手伝おうか？夕食とか掃除とか？」

漣 「ええ、大丈夫だよ。私達でやるからさあ。」

一回漣は部員以外の人に雑用をやってもらうのは悪いと思って断るが、律儀にも勇士郎が押しつけて申し出る。

勇士郎 「でもせっかく連れてつてくれるなら、何か手伝いたいな……。」

漣 「……それなら……お願いしちゃおうかな？」

漣は勇士郎の言葉に甘えさせてもらった。

勇士郎 「へへ……今、打ち合わせの帰りなんだよね？今から遊べたりできるかな？」

漣 「え?! そうだなあ……うん、大丈夫だよ!」

突然の勇士郎からの誘いに一瞬戸惑うものの、嬉しげに漣はOKした。

漣の内心は嬉しい気持ちに満たされる。

勇士郎と漣は駅の周辺で待ち合わせして落ち合う。勇士郎の目にはポニーテールのヘアースタイルの漣が映る。普段見慣れていないヘアースタイルに新鮮味を感じるとともにドキっとなる。

漣 「あ! こっちだよ!」

勇士郎 「あ、秋山さん(やべっ、マジでカワイイ!!)!!」

駆け寄る勇士朗。二人は街中へと繰り出す。

勇士朗 「ごめん、言い出しっぺの俺が遅れちゃって……。」

漣 「いいよ、全然気にしてないから。」

ショッピング街でのひと時を愉しむ二人。思えば二人きりで出かけるのはこれが初めてだった。

勇士朗 (……改めて間近で見ると……秋山さん、やっぱり綺麗だな……。)

初めの頃、関わりを持てる可能性ほぼゼロから始まった勇士朗の恋。だが、今まさに憧れだった思い人である漣が目の前にいる。こうしてデートができている(まだ付き合っていない故、仮デートだが)。

漣 「ねえ?この服とか似合うかな?」

女の子モノの夏服を持って勇士朗に問いかける漣。ボーっとしていた勇士朗がはっとなる。

勇士朗 「う、うん!なんか秋山さんの可愛さが引き出されるって言うか……。」

漣 「え……あ……。」

二人揃って照れくさそうに焦ってしまっ。

その頃、市内のアイスクリーム専門店、サーティーワンでは俊と梓、光と私服に着替えた唯の姿があった。

唯 「アーイースウー、アーイースウー……。」

光 「あーいーすー、あーいーすー……アイス……アイス……アイス……アイス……アツイツス！あーいーっす、アイイイイツスッ！！」

俊 「訳解らん！！ヘタレラップか??！」

唯 「光君おもしろーい……えい！」

ぶにゆ

人差し指を光のほっぺたに突き刺す唯。

光 「なんだよう……えいやっ！」

ぶに、ぶにゅっ

両サイドから唯のほっぺたに指で突く光。

唯 「ふもー。」

俊 「なんだこのやりとり……。」

梓 「やっぱりこのお二方、少しずれてますね……。」

俊 「まー、今に始まったことじゃないが……。」

店員 「お待たせいたしましたー！」

店員が注文していたアイスを差し出す。それぞれ受け取って歩
きながらアイスを食べる。

唯 「おいちー！」

光 「ああ、おいちーなー。」

光と唯の後ろから俊と梓が二人のやりとりを見物。

俊 「天然と天然・・・ベストカップルといえばベストカップ
ルか・・・。」

梓 「なんか正反対の人の方がいい気もしますけど・・・。」

俊 「本人同士が同意した上で付き合ってるんだからそれ以上
とやかく言うことはないけどな。」

梓 「それもそうですね・・・。」

そう言いながら、アイスをぺろぺろと舐めはじめ梓。俊の視
点から見るとかわいらしく見えて仕方がなかった。

俊 (うつ・・・かわいい・・・)

その時、互いの視線が合ってしまう。下からみつめる梓が質問
する。

梓 「どうしたんですか？」

俊 「あ……いや、何でもない。」

梓 「？」

一方、律は夕食の献立の買出しに出かけていた。その最中に、バイト帰りの蓮と偶然会う。

蓮 「あ……律っちゃん！」

律 「おー、蓮！奇遇だなあ！」

珍しく1人の律に質問する蓮。

蓮 「今日は1人なのか？」

律 「ああ、今日は私が献立作ることになったから買出しに来たんだ。蓮はバイト帰り？」

蓮 「ああ。へえ……律っちゃんて料理作れるんだなー。」

律 「なんだよ、失礼だな！！」

蓮 「あー、ワリー！おてんばなイメージが強いもんでな！何作ったりするんだ？」

律 「まー色々作ったりするけどな。今日はハンバーグでも作ろうと思って・・・どうだ？食べてくか？」

蓮 「え?! いいのか??」

律 「ああ! バイトで働き疲れていると思うしな!」

蓮 「さんきゅー!!」

律 「じゃー、早速買い物に付き合ってくれ!」

蓮 「お、おう!」

空が暮れていく時間帯になり、ショッピングを終えた勇士朗と漣が帰路を歩く。

漣 「今日はありがとう。楽しかったよ。」

勇士朗に微笑む漣。何故か普段よりも増してかわいく見える。

勇士朗 「俺も楽しかった! でも二人で遊ぶのは初めてだったよね?」

漣 「そ、そうだな。いつも律や梓がいたし・・・。」

二人とも照れくさい雰囲気に包まれる。

漣 「ちょっとだけ寄り道していかない?」

勇士朗 「ああ、いいよ。」

二人は市内の河川敷を歩く。二人を時折吹き付ける風が包む。

漣 「勇士朗君・・・以前私の歌声が聞こえたって言ってたよね？その時この河川敷で歌ってたんだ。」

漣が河川敷の土手を見下ろす。なびくポニーテールの髪がいい画に映る。

勇士朗 「そうだったんだ・・・くすっ、でもマジである時は助けられた。マジで危なかったから・・・。」

その時、厚木方面上空に流れ星のようなモノを漣が確認した。同時に勇士朗がデストリアンを感知する。

漣 「あ、流れ星！」

勇士朗 「っ・・・！！デストリアン！！」

漣 「え?!じゃあ・・・あの流れ星は・・・!!」

その時、二人のケータイに隕石警戒のメールが受信される。

勇士朗 「例によって奴らだ!!秋山さんは先に帰ってて!」

漣 「いいよ!私はここで待ってる!」

勇士朗 「え?!・・・うん、わかった!!ファイヤージェ

エエエエツトツッ！！！！」

漣のその言葉に驚く勇士朗。だが、迷う事無くファイヤージェットを呼び出す。河川敷に飛来し、地面から1mほどをファイヤージェットがホバリングする。

中央のハッチが開き、内部に乗り込む勇士朗。計器類を操作し、レバーを押し込む。

キュイイイ・・・ドオアアアアアアアアアアアッ！！！！

漣 「うっ！！！」

そしてブースター全開で飛び立っていく。巻き起こる強風が漣の髪とスカートをなびかせる。

漣 「勇士朗君・・・。」

厚木市。上空より飛来した隕石が爆発。D 21が飛来した。楕円形のごつごつした円盤物の下から3本の脚と2本の鋭利なハサミがついた腕が生えている。円盤物部には6つの眼とD 18の触手と酷似した口の器官が見受けられる。

D 21の口の器官が伸び、帰宅ラッシュ時の厚木市内の人々を襲う。掃除機でゴミが吸い取られるようにして人々が捕食されていく。大きく振られまくる刃物状のハサミが建造物を潰しまくる。

さらには振られたハサミに巻き込まれた市民が寸断されていく。

D 21の眼下では人々の悲鳴が響き渡った。

その地獄の絵図と化した厚木市上空にファイヤージェットが到着。ハッチから飛び降りた勇士郎が叫びながら降下する。

勇士郎 「ファイヤージェエエエエツツツ!!!」

その声に応えるようにファイヤージェットが変形していく。

ファイバードに変形したファイヤージェットが市内の地上に着地するとそれを目掛けて勇士郎が光を帯びて駆け抜ける。そしてファイバードの胸部に飛び込む。

ファイバード 『チエエエエエンジツ!!!ファイバアアアアドツツ!!!』

フットブースターでD 21に目掛けて一気に地上から10m上を駆け抜けるファイバード。

ファイバード 『しゃあっ!!!』

ギユゴツ・・・ドオオオオオオツ・・・!!

破壊の限りをつくししながら北上するD 21。

ドオガアアアアツ!!!ズドオオオオオ!!!

D 21 「ギギギギイイイツ!!!ギ・・・!??」

そこへ高速で駆け抜けてきたファイバードが、道路側へ倒れこむように真正面からタックルで突っ込む。

ファイバード 『でやあああああっっ!!』

ドオツゴオオオオオ!!

D 21 「ギギゲギユウウウツツ!!?」

一気に吹っ飛び道路に倒れこむD 21。その前方でファイバードが立ちはだかる。

ファイバード 『これ以上の破壊はさせない!!このファイバードが貴様を排除する!!』

すぐさまに起き上がるD 21。その大きさはファイバードの2倍はある。ハサミを振るいファイバードを吹き飛ばす。

ズガアアアアアッ!!

ファイバード 『ぐうっ!!』

空中で一回転しながら体勢を直して着地する。そしてエネルギーを拳から撃ち出して、フレイムブレスターを召喚する。

ファイバード 『フレイムブレスター!!』

上空からフレイムブレスターが飛来。ファイバードに合体する。

ファイバード 『フォームアップ!!武装合体、ファイバード

ツツ！！！！！』

武装合体を実行すると、ファイバードはフレイムソードを背部から取り出して抜き取る。オレンジに光る炎剣が輝く。

ファイバード 『フレイムソードツツ……でやあああ！！』

一気に振りかぶってD 21に斬り掛かる。振るわれたフレイムソードとD 21のハサミが激突する。

ガギャアアアアアツ！！

ギギギギ……

拮抗する力。二つの刃は一瞬捌き合い、再び激突する。

シュキンツ、ガキヤイイインツ！！

更に捌き合い、何度も互いの刃を交える。

ギヤイン、ギャシュイン、キキャンツ、ガゴオオツ、ギャイン！！

ファイバード 『くうっ……せやあああ！！』

ギャアアアアアツ！！

ファイバードが、力強く斬り払って捌ききる。だがD 21は、跳ね上がった腕を思いっきりファイバードに叩きつける。

ギャゴオオオオオオツツ！！

ファイバード 『うおツ……くそツ！！』

フレイムソードで受け止めるものの身動きが制限されてしまう。

D 21はまだ片腕が残っていた為、有利な側に振られている。もう片方のハサミの薙ぎ払いがファイバードに炸裂する。

ギユゴツ……ズガギヤアアアアンツ！！

ファイバード 「ぐはああ！！！！」

横のビルに激突して崩れこむファイバード。崩れこんだファイバードにハサミの殴打が連発する。

ガグオゴオン！！ ドガゴオオ、ドオガゴオオ、ガガゴオオオ！！ ドオガアア！！

ファイバード 『がああつ……！！！！』

ハサミがファイバードを襲う。だが、勇士朗の意識の中には待っていてる溼の事が頭にあつた。

ファイバード 『待つてくれている人がいる……！！！！こんな所でテメエにやられるわけにはいかねえんだよ……！！！！』

ハサミに耐えながら上体を起こし、フレイムキャノンを展開させて、本体に撃ち込む。

額が輝き、フェニックスのオーラがファイバードに宿り、フレ
イムソードの刀身が炎を宿す。

エネルギーを帯びて飛び立つファイバード。燃え滾るフレイム
ソード。

ファイバード 『はあああつ……フレイム・トラストオ
オオオオ！！！』

ズギヤドオドオドオドオドオドオオオオオオオオオオ
！！！！

上に向かって繰り出された強烈なフレイムソードの突きがD
21の本体を粉碎させる。突き抜けたファイバードが、夕日に照ら
される。

その下で炎を吹き出しながらD 21が爆砕した。

ギユゴゴゴゴオオオオオオ……ズギヤグオドオ
ギヤガアアアアアアッ！！！！

体育座りしながら土手に1人座り込む澁。黄昏の空を見ながら
思いふける。そこへ、突如轟音が近づく。その方向へと首を向ける
澁。

ファイヤージェットだった。それを見ると哀愁を漂わせていた
表情が一変して笑顔になる。

澪 「勇士朗君！」

戦闘を終えた勇士郎が再び澪の所へ舞い戻る。勇士郎が降りると、ファイヤージェットは上昇して何処かへ飛び立っていく。

勇士郎 「ただいま……。」

澪 「うん、おかえり……。」

二人は、何事もなかった時のように歩き出す。

勇士郎は澪に何故待つてると言ったのか聞き出したかった。彼女の想いの真意を知りたいが故に。勿論、本音は待っていてくれて嬉しい気持ちでいっぱいだった。

勇士郎 「ゴメン……待った？」

澪 「ううん……私こそゴメン。突然待っててなんて……。」

勇士郎 「いや、俺としても……なんか嬉しかったし……。」

二人は恥ずかしさの余り、しばらく無言で並んで歩く。その途中で勇士郎が沈黙を破った。

勇士郎 「でも……秋山さんがそう言ってくれたおかげでまたピンチを切り抜けられた……ありがとう。」

漣 「……わ、私は勇士朗君と一緒に帰りたかった……
1人で帰るのは淋しいから……。」

勇士朗 「秋山さん……。」

漣 「あ、もう名前で呼んでもいいよ。私のこと名字で呼ぶ人
そんなにいないし……。」

勇士朗 「え？じゃ、じゃあ漣ちゃん……？」

漣 「くすっ、なんだか勇士朗君に呼ばれると新鮮味があるな
……。」

勇士朗 「そ、そう？へへ……。」

二人は頬を赤くしながら帰路を歩く。ふと勇士朗が空を見上げ
ると、一番星を見つける。

漣も同時に一番星を見つけて声に出した。

漣 「あ！一番星！」

あたかも、また一步距離が縮まった二人を見守っているかのよ
うだった。

つづく

次回予告

さわ子と要は夏フェスの会場へと出向く。同じ頃、勇士朗達は軽音部メンバーの合宿へと同行していた。メンバーは、早々のうちから仲間達と川ではしゃぐ。

遊び終えた後、漣達が練習している間に夕食の準備をする勇士朗達。だが、その最中地震と共におぞましき咆哮が響いた。

次回、新生太陽の勇者 ファイバード・サーガ 第30話 「巨怪の鳴く頃に・・・」

その姿は見るものを恐怖させる・・・。

第30話 「巨怪の鳴く頃に・・・」

とある県で開催される夏フェスの会場。数多くのプロのバンドアーティストを中心にライブが随所で二日間行なわれる夏の音楽の大イベントだ。

その会場にさわ子と要の姿が見受けられた。

さわ子が、要の腕を引っ張りながら会場の入り口を目指す。

さわ子 「さあつ、誠人君！ここからは戦場よ！！」

要 「ええ？！せ、戦場？！」

これまでのさわ子とは全く違うキャラに動揺する要。ちなみに彼はこの二日の為に休暇を取ったのだ。

さわ子 「そうよ！しっかり心構えて！！」

要 「ああ、わ、わかったよ・・・。」

たじろきながらも内心元気いっぱいなさわ子といられる時間が幸せなものと捉える要。

各会場内でライブが始まる。観客達の熱気は勿論の事、圧倒的なまでの巨大な音響が響き渡る。

要 「す、すごい迫力だ・・・！俺、初めてだよ、こういう会場に来るのは！」

さわ子 「でしょ？私は毎年来てるのよ。ほら、もっとのつてのつて！！」

要 「ああ・・・。」

ぎこちなくリズムに乗る要。対してさわ子は馴れたものでリズムカルに乗る。

その頃、勇士朗達は軽音部の合宿に同行していた。案の定、始めから遊びモードに入る。

川ではしゃぐ唯と律。光と蓮も便乗してはしゃぎまくる。

律 「きゃっはー！きっもちー！！」

唯 「水、冷たいねー！！」

光 「唯ちゃんの水着かわいい〜。」

唯 「そ〜？えへへ〜似合ってる？」

光 「似合ってる、似合ってる！胸もあるし！」

唯 「もう！光君のえっちっ！！！」

ばしゃあああん！！

唯が顔を赤くしながら思いつきり川の水を光の顔面にぶっ掛けた。

光 「きゅぱあああ！！」

蓮 「おりゃおりゃ！！」

ぞぼぞぼばあああああん！！

それに便乗して蓮が3人に水を掛けまくる。

唯&律 「きゃー！！」

この光景をパラソルの下で見物する勇士朗達。

紬はケータイで舞人とメールで会話している。

俊 「本当はしゃぐの好きだなー。」

梓 「俊さんは混じったりしないんですか？」

俊 「基本ははしゃいだりするのは性に合わないんだ……。」

梓 「そうなんですか……でもせっかくですし泳ぎましょうよっ。」

梓が立ち上がり、俊を川に誘う。

俊 「お、おう……。」

俊は梓に誘われて川に向かいだした。

紬はこの光景をホンワリと見ていた。

紬 「梓ちゃん積極的ね……。」

漣 「そ、そうか？」

紬 「ええ！私ももつと見習わなきゃ！」

漣はいつしかの修学旅行のときを思い出す。

漣 「いや、十分ムギは積極的だと思うぞ。」

紬 「そうかな……ところで二人は泳がないの？」

勇士朗 「え？」

漣 「どうしようかな……？」

勇士朗は立ち上がって漣を泳ぎに誘う。

勇士朗 「いこうか、秋山さん！」

漣 「あ……うん！ムギも入ろうよ？」

紬 「ええ！そうするわ。」

周囲にセミや鳥の音が響く中、メンバー全員が川に入ってはしやぎ始めた。

勇士朗はふと漣の水着姿に目を移す。

勇士朗 (うおっ……あ、秋山さんて結構スタイルいいなあ……胸もでかい……)

男の視線としては、かなり刺激的に映る漣のスタイル。漣が勇士朗の視線に気づく。

漣 「どうしたの……？」

勇士朗 「あ、いや、その、秋山さん水着似合ってるなーって……」

漣 「本当？」

嬉しげに微笑む漣。勇士朗の視点で可愛さ綺麗さが増す。

勇士朗 「うん、似合ってる……」

ばしゃああああん!!

勇士朗の顔面に突如水が激しくぶつかかる。蓮だった。

蓮 「おうおう！勇士朗！！セクシーな漣ちゃんにみとれてんじゃねー!!」

漣 「ええ?!」

勇士朗 「な〜に〜?!!!」

顔が真っ赤になる勇士朗。漣も恥ずかしげな気持ちになる。

律 「胸のポリウムこっちに分けんかい!!」

ばしやああああ!!

漣 「っ……りい〜っう……」

律も便乗して漣に水をぶっかけた。漣は律に睨みをきかせる。

光&唯&紬 「それぞれええ!」

ばしやばしやばしやあああああ

天然三人組が水を巻き上げまくる。それに巻き込まれる俊と梓

俊 「ぬおおお!!」

梓 「きゃー、冷たいです!」

さらに蓮が勇士朗に水を掛けまくる。

蓮 「おりゃああ!!」

ざばああ!!

勇士朗 「このヤロウツ!!」

どばどばおおおおおおおおお!!

蓮 「うわ!ばか!!ぎゃわああああ!!」

通常ではありえない大量の水が蓮にぶっかかる。ファイバードの力をムキになって出してしまったのだ。

勇士朗 「あ、わりい……。」

蓮 「あほおお!!」

周囲は一瞬唖然となったが、たちまち笑いがたちこめる。

一方、再び夏フェス会場。大いに盛り上がった後、一息入れる為に焼きそばを買って食べる要とさわ子。

要 「しかし……凄い迫力だな。なんかこう……初めは圧倒されてしまっていたけど、のつてくるとテンションが上がる感じがすごいわかる!アーティストのサウンドがたまらない!」

さわ子 「でしょでしょ?これ食べ終わったら私のイチオシのバンド見にいきましょう!」

要 「ああ!それにしても、こづいつとこで食べる焼きそばは、うまく感じるな!」

さわ子 「私は誠人君とこうしていられるだけで幸せ！」

要 「ははは・・・なんか照れるな・・・そう言われると・・・」

二人はさわ子のイチオシバンドの会場へ出向く。そこはパンク系のロックバンドの会場で、さわ子にとっては現役時代に回歸する気分だった。

さらには付き合ったからには素の自分をさらけ出すというさわ子の覚悟の上でもあった。

重低音の激しいギターやベースのサウンドが鳴り響く。ヴォーカルの声のサウンドが激しい歌詞を響かせる。

さわ子 「キヤッほおおーッ!」

激しくヘッドバンしまくるさわ子。要は圧巻されてしまう。

要 (こんなさわ子さん・・・初めて見る・・・ふふ、でも絶妙なギャップがあつて悪くない。それにしても・・・キツイ!)

ギョギョウとサンドイッチ状態になる要。今日の彼は全てが初体験の状態だった。

散々遊んだ後、軽音部メンバーは練習を開始する。練習中のサウンドが鳴り響く中、勇士朗達は別荘内のエプロンを着用し、夕飯を作り始める。

勇士朗 「とりあえずカレーでもやるか。」

俊 「じゃあ、飯炊いてと……。」

光 「んじゃ俺はシーザーサラダでも作るかな。」

蓮 「じゃあ、俺ハンバーグ作るわー。」

それぞれが献立作りに取り掛かり始める。

蓮が熱心にハンバーグを作る準備をし始める。

勇士朗 「蓮てハンバーグ作れるんだな。」

蓮 「まあな。この前律っちゃんの家で夕飯呼ばれた時に作り方教えてもらったんだよ。」

俊 「おいおい……すっかり仲いいなお前ら。」

蓮 「か、勘違いすんなー。」

といつつも少し赤くなっている。

蓮 「そういえば律っちゃん、弟が2人いてな、2人とも結構俺になついてくれてよー、やっぱり姉弟だけあって全然人見知りしないぜー！」

勇士朗 「へー。弟か〜。」

蓮 「1人は小学生で結構離れてるけどよ、もう1人は中学生でそいつと結構馬が合うんだわ。なんかマジで俺の弟みたいだぜ。」

光 「いつそ結婚すれば？そーすりゃ兄弟になれるじゃん？」

蓮 「あのかな……。」

俊 「けどまさか……この中で一番つぶだと思った光が一番早く軽音部メンバーと付き合えるとはなあ……。」

光 「なんだよう……早く俊も梓ちゃんに告ればいいじゃないか。俊だったらいい感じになると思うけどな！」

俊 「そうか……？」

男同士の恋話を展開させながら夕食を作る一行。それからしばらくして、少し強めの地震が起こる。

勇士朗 「うお！」

蓮 「まさか……デストリアン？」

勇士朗 「いや、マイナスエネルギーは感じない……。」

光 「じゃあ……例の生体兵器？！」

俊 「わからんが……！！！」

この地震で、聴こえていた演奏も止まり、軽音部メンバーがざわめきを立たせていた。

蓮 「なんだありやああ???!」

漣 「こ、怖い・・・!!」

その姿を見た漣が恐怖にすくむ。漣以外のメンバーもその姿にぞくつとしたものを覚えた。

勇士朗はすぐさまに一同を下がらせる。

勇士朗 「みんなは下がれ!!俺が相手になる!!」

俊 「頼んだぜ!!勇士朗!!さ、とりあえず別荘の中に入るうぜー!!」

一同が別荘に入るのを確認すると、勇士朗はファイヤージェットを召喚する。

勇士朗 「ファイヤー・・・ジェエエエツツツ!!」

光りを放った先からファイヤージェットが飛来。ファイバードへと変形して川原に着地する。

エプロンを脱ぎ捨て（おい）、エネルギーを帯びながら高速で駆ける勇士朗。光りの球体となって胸部に飛び込む。

ファイバード 『チエエエエエツツ!!ファイバアアアアア
アドツ!!!!』

謎の巨怪の前に立ち上がるファイバード。指を指して謎の巨怪に向かって叫ぶ。

ズガアアアアアアアツ!!

ファイバード 『がはあああ!!』

鋭利な爪の斬り上げをくらい、吹っ飛ばされるファイバード。
山に激突する。

ドオゴオオオオオ・・・

ファイバード 『くっ・・・何?!』

フウドオツ、フウドオツ・・・ガギャアアアツ!!

ファイバード 『がぐう・・・!!』

謎の巨怪の両腕が伸び、ファイバードの首を両手で掴みかかる。
ギリギリと締め付けられるファイバード。

ギギギギギギイイ・・・

ファイバード 『ぐがあっ・・・!!』

そのままジリジリと接近する謎の巨怪。ファイバードは、謎の
巨怪の両腕を引き離そうと握り締める。

至近距離まで接近すると謎の巨怪は巨大な口を開けファイバー
ドを取り込む。

謎の巨怪 「ヴォガアア・・・。」

ファイバード 『……………!!』

ガヴァシュツ!!

ファイバードの上半身の半分が口の中に取り込まれる。ギリギリと噛み千切るうとする謎の巨怪。

ファイバード 『ぐっ……おおお……!!』

決死の抵抗で口をこじ開けようとするファイバード。この光景を別荘から見ていた漣は別荘を飛び出し、叫ぶ。

漣 「勇士朗君!! 食べられちゃダメえええええ!!」

漣の声に反応したのか謎の巨怪は漣の方を見た。ゾクツとなる漣。恐怖の余り動けなくなる。

漣 「え……こ、怖くて……動けない……。」

ファイバードを吐き出すと、別荘を指して謎の巨怪が進行し始める。漣と漣が飛び出し漣を中に入れようとする。

漣 「中にはいつてる!!」

漣 「う……マジ不気味な怪物だぜ……さ、入ろうぜ!!」

だが、確実に謎の巨怪は近づいてくる。その背後で立ち上がったファイバードは、フレイムブレスターを召喚する。

ファイバード 『フレイムブレスター!!』

放たれたエネルギーの先からフレイムブレスターが飛来、ファイバードと合体する。

ファイバード 『フォームアップツ……武装合体、ファイバアアアドツツ!!』

即座にサンスライサーを手に取り、謎の巨怪に投げつける。

ファイバード 『サンスライサーツ!!』

フュフオアアアツ……!!

ズギャガアアアツ!!

謎の巨怪 「ゴガアアアツ??!!」

片腕が吹っ飛ぶ。戻ってきたサンスライサーを再び装着し、続けてフレイムキャノンを放つ。

ファイバード 『フレイムキャノン!!』

ディシユイイイイン、ディシユイイン!! キュアアア・
・ヴイドオゴオオオオ!!

ズキャン、ドオガギャア!! ヴアゴドオオオオオオオオ
オ……ズガゴオオオオ!!

三発目のチャージショットで吹っ飛ぶ謎の巨怪。

律 「結局なんだったんだ？アレ？？デストリアンでも生体兵器でもないんだろ？」

すると紬がそれについて思い出したように話す。

紬 「そういえば！この別荘の周辺には大きな怪あやしの伝説があるのを思い出したわ！」

律 「怪？」

紬 「昔、子供ばかりが消えてしまう事件があつて、その近くの森の主が子供達を食べていたって言う言い伝え。お地藏さんの力で封印したそうだけど……。」

律 「じゃ、じゃあ……あの化けモンがソレなのか?!！」

漣 「ひiiiiiiii!!こわいッ!!！」

梓 「じゃあ……もし、勇士朗さんがいなかったら……。」

律 「うおおお……今頃になって怖くなってきた!!！」

唯 「ふもふもふも……。なんのはなしー？」

律 「いやー、相変わらず平和な奴だな〜唯っ。」

唯 「ほえ？」

一方、夏フェスの一日目を終えたさわ子と要は2人でテントの中で寄りそう。

要 「今日は疲れた。いろいろ駆け回ったからなあ……でも、とっても新鮮な気分だ！」

さわ子 「ねえ……誠人君。パンクな私……どう思った？」

要 「え？パンクな私？そうだな……最初は驚いたけど、また普段とのギャップもあって……そんなさわ子さんも好きだ！」

さわ子 「そう？よかったあ！嫌われちゃうかと思って恐かったのようっ！」

要 「嫌いになんかならないさ。安心して。」

さわ子 「……ふふっ」

要はそつとさわ子の肩を寄せる。さわ子も要に顔を向け、さりげなくキスをねだる。要もそれに答える。周囲から聞こえてくる演奏を聴きながら2人はキスを交わした。

つづく

次回予告

BLWの繁殖体の捜査に関する会議が開かれた。だが、賛否両論となった会議の結果、捜査は見送りとなってしまふ。

一方で勇とエクスカイザーは、唯と憂を光や友達との約束場所へ送り届ける。だが、それから間も無くしてエクスカイザーがデストリアンを感じた。

奇しくも憂達のいるプールに襲来するデストリアン。そしてデストリアンは憂を捕らえる。この不幸な事態に憂は死を覚悟せざるをえないのか・・・?!

次回、新生太陽の勇者 ファイバード・サーガ 第31話 「憂の覚悟」

死が憂を捕らえてしまう前に・・・。

第30話 「巨怪の鳴く頃に・・・」(後書き)

いよいよ30話目に入りました。いよいよというより、気がつけばが相応ですかね・・・。なんとなく気づいた人もいるかと思いますが、今回の敵のモチーフは、

「死神トトロ」です。都市伝説の噂が広まり描かれてしまったと思いますが、血文字書きで「となりのトトロ」と書かれた横に描かれた超コワイトトロです。

都市伝説の死神イメージをここいらで吹っ飛ばす意味合いで製作しました。

本当のトトロはカワイイです。

第31話 「憂の覚悟」

避暑準備の為、紬は舞人と共に東京都内のショッピング街に訪れていた。夏本番という事もあり、キラキラと太陽が照りつける。

2人は手を繋ぎながらショッピング街を歩く。舞人は、一応世間にとつては有名人に近い為、サングラスを着用している。

舞人 「ホント、暑いな！こつも太陽が照り付けていると、紬さんの肌が焼けてしまう！」

紬 「日焼け対策はしてあるから心配しなくても大丈夫よ？」

舞人 「そうかい？紬さんのその美しい肌が焼けてしまうとと思うと心配になっちゃった！」

紬 「もう、舞人君たら！」

舞人 「ははは・・・今年は何処に避暑しにいくんだい？」

紬 「今年もフィンランドに行くつもりよ。舞人君は来ないの？」

舞人 「ああ、ごめん。BLW関連の事件に備える為に、国内からでるわけにはいかなくなっちゃった・・・。」

・。。。
」
　　「そう・・・今年は舞人君と避暑地で過ごしたかったな・

いつになく淋しげな表情を浮かべる。

舞人 「紬さん・・・そうがっかりしないで。俺達は何処にいても繋がっているさ！」

紬 「舞人君・・・やっぱり避暑地に行くのはキャンセルする。私は舞人君といたいから！」

舞人 「え?! いいのかい?!」

紬 「ええ!あとでお父様に話しておくから!」

ぎゅっと舞人の手を握る紬。2人は高級ブランドショップへと足を運んだ。

一方、警視庁本部。埼玉県内でのBLW繁殖体の捜索についての会議が行なわれていた。

冴島 「・・・であるからして、今回の事件から仮説ではあるが、繁殖能力を持った個体が地下を移動し、現在埼玉県内にいるのでは?という可能性が浮上した。これについて近日中に警視庁指揮の下、埼玉県警と連携し、埼玉県内地下の本格的な捜索を実施する。これについて異議はあるか?」

すると1人の警察官が異議を申し立てる。

警察官A 「はい！それについては現時点では仮説に過ぎません。今回の一件でいきなり県を上げての捜索はどうかと思いますが……。」

するとそれに乗るようにならぬ上層部クラスの警察官が賛同する。

警察官B 「私も同じ意見だ！まだもう少し状況を見てみたらどうかね？それからでも遅くはないはずだ。」

すると要が仮説意見を主張する。

要 「確かに現時点、仮説ですからそのように反対する意見も出て当然です！ですが、可能性はあると思います！一刻も早く市民の生活を安心させる為にも、本を断てる可能性があるのならやるべきだと自分は考えます！」

警察官C 「だからとて、デストリアンの一見もある。両立はできるのかね？M・P・D・BRAVEはよくやっているようだが……。」

それからしばらく賛否両論の意見や皮肉を加味した意見が飛び交う。

結局、現時点での捜索は見送りとなった。会議を終え、要がM・P・D・BRAVEの本部へと戻り、一息つける。

要 「ふう……全く……牙島警視總監以外の上の連中は何もわかつちやいない……。」

ブラックコーヒーを片手に、ジェイデッカー達のドックへと移動する。

会議に疲れきった様子の要に話しかけるローダーモードのジェイデッカー。

ジェイデッカー 『隊長、会議はどうなったのですか？』

要 「賛否両論の意見が飛び交った結果、埼玉地下搜索は見送りになった。」

「ぐくつと缶コーヒーを飲む要。

ジェイデッカー 『そうでしたか・・・少々悔しいものですね。これまでの間に、数多くの人々が犠牲になってきている・・・とかくいつて長引かせている場合ではないというのに・・・。』

要 「全くだ・・・冴島さんは今回の会議でもよくやってくれていた。だが、多数決ばかりはどうにもならない・・・。」

ジェイデッカー 『・・・よく我々は、事後処理の瓦礫の撤去等をさせてもらいますが、その時に亡くなられた市民の遺体を多く見てきました。これからもそうなのでしょうが・・・こんな日は一刻も早く終わらせなければなりません。私は隊長が唱えた仮説に賛同します。』

要 「ジェイデッカー・・・。」

午後の頭の時間帯。勇とエクスカイザーは、唯と憂をそれぞれの待ち合わせ場所へと下ろし、その帰りの道中を走る。

勇 「ま、憂は友達とプールってわけだが、まさかあんときの男子高校生がマジで彼氏になるとは……。」

エクスカイザー 『どうした？勇。ヤキモチなのか？』

勇 「いや、そんなんじゃないが、昔は世話やかしてばっかで目が離せなかった唯も、そんな歳になったのかなーってな。」

エクスカイザー 『まるで実の兄のようだな。』

勇 「そうだな。実際は従妹だが、俺も実の妹のように思う。それはそうと……俺も彼女欲しいなあー……。」

勇に想いを懐く和は、澪と共に夏期講習を受けていた。共に努力家なのだ。

アクセルを開けて、加速させる勇。その時だった。エクスカイザーがデストリアンを察知する。

エクスカイザー 『ム……!!』

俊と律とで遊んでいた勇士朗もデストリアンに気づく。同時にケータイが鳴る。

勇士朗 「……!!」

律は俊の恋ばなを聞いていた。

律 「・・・じゃあ梓と今度思い切ってデートすればいいじゃん！私や蓮も協力するからさー。」

俊 「あ、ああ。いきなり2人きりは向こうも緊張するだろうしな。」

律 「唯かつぶるじゃあ・・・なんか不安だからな・・・。」

俊 「ああ、納得だ！この前は唯ちゃんの近所のおばあちゃんに命拾いしてもらったからな！」

律 「は？まーいいや、勇士朗！あんたも漕をがんばり・・・あれ？？いなくなってる！！！」

律が勇士朗に話をふつたが既にいなくなっていた。

俊がケータイの速報に気づく。

俊 「いなくなるわけだ・・・隕石警報が出た！」

デストリアンは奇しくも憂達のいるプールの上空に襲来した。隕石が爆発し、フナ虫が二足歩行になったようなデストリアンが出現する。着地と同時にプールに入っていた人々が踏み潰された。しだいにプールの水が赤く染まっていく。

両端から出た豪腕と昆虫のような6本の腕。うごめく触覚。閉する鋭利な牙が並んだ口。実に巨大で、ファイバードやエクスカイザーの1.5倍はある。

昆虫のような腕が悲鳴を叫ぶ人々を容赦なく捕らえ、鋭利な牙が並ぶ口に運ぶ。捕食を開始した。

憂 「いやあああああ!!」

純 「ちよつとおお!!!冗談でしょ?!?!こんなオオ!!!」

憂と純がパニックに陥る。だが、比較的このような状況を体験してきた梓は、恐怖感を懐きながらも冷静に二人に呼びかける。

梓 「とにかく逃げようっ!!!怪物から離れよう!!!」

プールから出て3人は走り出した。背後の方から聞きがたい悲鳴と咀嚼音が聞こえてくる。

憂と純は、今にも泣き出しそうな表情で走る。

梓 (ああいう目に遭うときがあつた分だけ今の私を冷静にさせてくれてるんだ・・・私がすっかりしなくちゃ!!!)

その時だった。昆虫のような腕が伸び、憂を捕らえる。悲鳴を叫ぶ憂。

憂 「やあああああああ!!!」

梓&純 「うiiiiiiiiiiii!!!」

その頃、光とデートしていた唯が、食べていたアイスを落とす
てしまう。

唯 「ああ〜！アイス落としちゃった……。」

光 「さつき買ったばかりじゃん！もったないなー。じゃあ、
俺のあげる。はい。」

唯 「えへ、光君、ありがとう。それにしてもなんだか胸騒ぎ
が……。」

光 「胸騒ぎ？」

唯の胸騒ぎは的中していた。D 22の口へと運ばれていく憂。
その下で途方に暮れる梓と純。

どうする事もできない。憂は、死を覚悟した。

憂 「……さよなら……梓……純……勇兄ちゃん・
……お姉ちゃん……私、お姉ちゃんの妹に生まれてよかった
よ……お姉ちゃん……。」

開口する口。鋭利な牙が並ぶ。憂の頭が牙に触れる。

憂 「ひっ……!!!」

その刹那 。

梓 「これが、唯先輩が言つてたエクスカイザー……。」

エクスカイザー 『私とファイバードが来たからにはもう安心だ。』

憂 「うん！ありがとう、エクスカイザー！」

梓 「ファイバード……。??あ！あれは……。勇士朗さん？」

上空を駆けるファイヤージェット。Uターンして一気にD 2に突っ込む。

ギユオオオオオオオオオオ……。ドオガギヤアアアアアアンツツツ！！！！

D 22 「ギユゴゴオオオオオオツツ！！！！」

吹っ飛ぶD 22。勇士朗が飛び降りて叫ぶ。

勇士朗 「ファイアー……。ジエエエエツツ！！！！」

変形を開始するファイアージェット。瞬く間にファイバードに変形し、地面に着地するファイバード。落ちてきた勇士朗が光を纏って低空を駆け抜ける。フェニックスのオーラを宿しながらファイバードの胸に飛び込む。

勇士朗 「てやああッ！！」

両眼に光りが灯ると、即座に腕を天空へとかざし、エネルギー

を撃ち放つ。

ファイバード 『フレイムブレスター!!』

エネルギーが撃ち放たれた先からフレイムブレスターが飛来、ファイバードと合体する。

ファイバード 『フォームアップ……武装合体、ファイバアアドツ!!』

それに続き、エクスカイザーもキングローダーを召喚する。

エクスカイザー 『キングローダーアアアアアアッ!!』

空にエネルギーを撃ち放つと、キングローダーが召喚される。空を翔けながら、ドッキングモードへと変形する。

開かれたハッチの中へとエクスカイザーが飛び込む。

エクスカイザー 『とうっ!!』

ハッチが閉じ、ライオンの顔が胸部に浮かぶ。エクスカイザーの頭部が現れ、フェイスガードが装備される。

そこへ勇が走ってやってきた。

勇 「うおおおおお!!俺を忘れてるぜえええ!!」

エクスカイザー 『勇……?!そうだったな!!』

憂 「勇兄ちゃん?!」

勇 「憂!!!早く友達と逃げろ!!!」

憂 「う、うん!!!」

梓 「いこつ、憂!!!」

キングエクスカイザーの前に立つ勇。キングエクスカイザーの額から光りが放たれ、勇が叫ぶ。

勇 「カイザーフュージョン!!!」

光りを介してキングエクスカイザーの頭部に勇が取り込まれる。
光る両眼。

キングエクスカイザー 『融合巨大合体、キングエクスカイザー!!!』

憂 「え・・・?勇兄ちゃんが?!」

純 「吸い込まれちゃったけど?!」

梓 「憂のお兄さんも闘うんだ・・・!?!」

その頃、襲来の報告を受けた舞人が、執事に状況を問い質していた。

舞人 「・・・それで、デストリアンが襲来したと聞いたが、状況はどうなんだ?!」

旋風寺家執事 「エージェントの報告によりますと、現在、フアイバードとエクスカイザーが交戦中との事です。今回も戦闘はよろしいかと・・・引き続き紬嬢との時間をご堪能くださいませ。」

舞人 「そうか！何かと彼らには助けられている・・・幾度か共に闘った事があるが、いずれは共に語り合いたいものだな・・・わかった、ありがとう！俺は紬さんとの時間を堪能する！」

通信を切り、再び席に戻る舞人。久々に会えたのだからもつと紬といたい気持ちでいっぱいだった。

舞人 「ごめん、ちょっと総本社から電話が入ってね・・・。」

紬 「どうだったの？デートは大丈夫なの？」

心配そうに舞人に覗き込む紬。

舞人 「大丈夫！デートに支障はないよ！」

紬 「そう?!よかったあゝ。てつきりデートが中断するかと思っただけでハラハラしてたんだあ。」

舞人 「俺もだよ。さあ、食事の続きだ。」

2人は高級ホテルの中にある、高級レストランへと足を運んでいた。テーブルの上には高級な魚料理が並ぶ。一般庶民からしてみればかなりの痛手の額の料理だが、二人にとってはポケットマネーの内にすぎない。

絀 「ふふ フランス料理はやっぱりおいしい。舞人君はよくこのお店に来るの?」

舞人 「そうだね。東京では俺のイチオシのフランス料理店なんだ。」

二人はポワソン（魚料理）を優雅に食す。ゆったりとした時間が二人を包む。

ふと絀が外の景色を見る。すると落ちる隕石を見てしまう。

絀 「え……?!」

舞人 「ん?どうしたんだい?」

絀 「隕石……!」

舞人 「なんだって……?!?!?」

次の瞬間に隕石警戒メールの受信でケータイが鳴ると、同時に激しい轟音が響いた。店内に地震のような衝撃が走る。

ゴオオオオオオオオオオオオ!!!

絀 「きゃああああ!!」

舞人 「な……!!!!」

東京都内のど真ん中へと隕石が墜ちた。ビル群が破砕し、大きく地面が陥没する。激しく巻き上げられた土の中から、新たなデス

トリアンが出現する。

D 23 「ギヤギギギギイッ！！！！」

目のない楕円形の頭部から生えた足。裂けた口から覗く牙。そしてその身体は逆立ちしたかのように持ち上がっている。まるでウルトラ怪獣のツインテールのものである。上の部分はグレイエイリアンのような頭部が二つ付いている。不気味なまでに無表情で微動だにしない。下の部分が意思を持っているようだ。さらにその上部には長く鋭い槍状のものが2本生えている。

気色の悪い極端な動きで前進するD 23。あるうことかそれは舞人達のいる方へと前進してきていた。

同時に今度は、BLW 02の変種が出現。長い首になり、昆虫のような腹が縦方向に巨大になっている。生体砲身も巨大になっていた。

BLW 02変種 「クコキヤカココオオオオツッ！！！！」

デストリアンに警戒するBLW。生体砲身からエネルギー砲弾を放つ。ついに両者が激突する。

キュゴアアアアアッ！！

ズギヤデイギアアアアアア！！！！

D 23 「ギヤシヤラララアア？！！！！」

D 23の上部に直撃する。D 23は、グレイ状の二つの頭部が口を開け、瞬発タイプの光線を放つ。

キュデイデイオンツ！！

ズキヤドオオオオオオオオオオオ！！！！

ホテルの外では2体が激突を開始する。その光景は怪獣映画さながらのようだ。

舞人 「久しぶりのデートが……！！くそっ！！細さん、この中においては危険だ！！急いでここから逃げよう！！」

細 「そうね！！また食べに来ればいいのだから！！」

舞人はとりあえず5万円をテーブルの上に置き、細と共に外へと出る。

細の手を離さずに握り締めて、舞人は混乱の東京の街を走る。その時、D 23が放った破壊光線が舞人と細がいたホテルの建物を破壊。激しい爆発と共に碎け散る。

キュヴィンツ……ズドオヴァギヤラアアアアツ！！！！

細 「ああ！！さっきまで私達がいたホテルが……！！」

舞人 「ホテルの中の人たちが……おのれデストリアン！！」

BLW 02変種 「クカアアアアッ!!」

ドオゴオオオオオ!

大きく振られた変種のBLW 02の腹が、舞人達の近くにあつたビルを破壊する。瓦礫の破片や、砂煙が巻き起こる。舞人は絀を抱きしめながらこれらからかばう。

絀 「舞人君ツ……!!」

舞人 「絀さん……くっ!!」

アスファルトやコンクリートの粉塵が舞人と絀を被う。目を瞑って耐える二人。砂煙はしばらくして止んだ。

舞人 「大丈夫？」

絀 「うん、大丈夫よ……怖いけど……。」

舞人は絀が怯えているのは十分認識していた。そして絀の髪に被った粉塵をはらう。

舞人 「せっかくの美しい絀さんの髪が台無しだ……。」

絀 「ありがとう……舞人君も被ってる。」

絀も舞人の髪にかかった粉塵をはらった。さらには舞人の衣服もはらう。

絀 「ほら、後ろ向いて。」

舞人 「そこまでやってくれなくても……。」

紬 「いいから！いいから！」

紬は何故か自分の服よりも舞人の服をキレイにしたがった。はらい終わると舞人は紬に振り向く。

舞人 「あ、ありがとう。紬さん、手が震えている……。怖い気持ちが伝わってくる。俺が勇気を分けてあげるよ。」

紬 「うん。お願い……。」

舞人は紬に唇を重ねる。キスしあう二人。キスを解くと、舞人は新東京駅で待機していたロコモライザーを呼び出す。

舞人 「よしっ……。そろそろ呼ぼうか……。ロコモライザーッ！！」

通信電波を受信したロコモライザーことマイトガインが舞人の許へと向かう。

マイトガイン 『緊急通信?!何か騒がしいと思えばやはりそうだったか!!今行くぞ!!舞人。』

飛び立つロコモライザー。同時にライナーズも飛び立つ。

舞人は紬を抱き寄せる。

舞人 「もうすぐロコモライザーが来る!!もう少しの辛抱だ

「!!」

紬 「ええ!!」

上空からロコモライザーが飛来し、舞人と紬の所へと着陸する。その間にもデストリアンとBLWが交戦しあう。

舞人はこの時躊躇する。紬を街に残すかマイトガインに同乗してもらうかが。一瞬悩み通して、後者を選ぶ。

舞人 「紬さん!!ロコモライザーに乗ってくれ!!この場所に残すよりも安全だ!!またいつ地下から敵が出てくるか判らない!!」

紬 「私が?!.....うん!いいわよ!!私、前から思ってたの!!闘ってる舞人君を見てみたい!!」

舞人 「紬さん!!」

マイトガイン 『早く乗れ!!舞人!!紬嬢!!』

舞人 「ああ!!さあ、乗って!!」

紬 「え、ええ!!」

舞人はコックピットに紬を同乗させると、合体システムを作動させた。

舞人 「レーツツ!!マイトガインツツ!!」

つづく

次回予告

紬を乗せて戦闘に入るマイトガイン。デストリアンとBLWの攻撃に苦戦する。一方でファイバードとキングエクスカイザーがD22と奮戦する。その戦闘の中で、勇士朗と勇が初めての邂逅を果たす。

「マイトガインが苦戦を強いられる中、ジェイデッカー達が到着し、勇者特急隊とM・P・D・BRAVEチーム二手に別れての戦闘を展開する。」

デストリアンに尚も苦戦する舞人に、紬はもらった勇気を返す。

次回、新生太陽の勇者 ファイバード・サーガ 第32話 「紬搭乗！」

二人の愛が再び力を示す……。

第32話 「紬搭乗！」

ン

BGM 「レッツ・マイトガイ

舞人の合図と共に紬をのせたロコモライザーが飛び立つ。そしてライナーズがそれに並走する形で横につく。

ロコモライザーの後部のジョイントが変形を開始。半回転し、機体が直立状態となってホバリングする。その左右に、腕に変形したライナーズが付き、ロコモライザーの左右からジョイントが飛び出す。

レーザーセンサーが接合部に放たれ、両腕がそれに導かれるように合体する。

舞人 「マイトガイん、テイク・オフッ！！」

舞人がレバーを引き、マイトガイんの両手首が蒸気を噴出させながら飛び出す。そして胸部が正面へと倒れ、頭部が持ち上がる。

メインカメラが光り、拳同士を激突させて正拳突きを決めた。

激突しあうデストリアンとBLWに割って入るマイトガイん。2体がそちらの方へと振り向いた。

マイトガイン 『銀のつばさにのぞみを乗せて、灯せ平和の青信号！！勇者特急マイトガイン、紬嬢を乗せて定刻どおりただ今到着！！！！』

紬 「わあゝ・・・変形してる時に乗るの初めて！すごい、すごい！！」

状況が解つてか否か、変形最中のマイトガインに乗れたことに紬は感動していた。マイトガインは紬に予備の座席のシートベルトの着用を促す。

マイトガイン 『紬嬢、これより戦闘になります！！ベルトを着用し、衝撃に備えてください！！』

紬 「わ、わかったわ！」

舞人 「しっかり掴まってて！いくぞ！！マイトガイン！！動輪剣だ！！」

マイトガイン 『動輪剣！！』

マイトガインは動輪剣を取り出し、両手に握り締めて切先を2体へ向ける。

舞人は動輪剣のエネルギー制御を開始する。計器類を操作する。後ろからその姿を紬が息を呑みつつ見守る。

舞人 「動輪剣、刀身エネルギー充填開始！！」

動輪剣の刀身が光り始め、エネルギーを帯び始める。だが、そ

ドオゴアアアア!!

マイトガイン 『くっ!!』

舞人 「っ!!」

紬 「きゃあああ!!」

吹っ飛ばされたマイトガイン。ビルに激突する。

ズドオオオン!!

マイトガイン 『パワーが、上がっている・・・?!』

これまでの戦闘データを瞬時にダウンロードするマイトガイン。
BLW 02変種が鎌首をもたげて噛み付こうと構える。その時、
D 23が上部の槍状の部分をBLW 02変種の腹に突き刺した。

ズグシュンッ!!

BLW 02 「クケギヤカカカアア?!」

そのままBLW 02を持ち上げて、勢いよく投げた。ビル群
を叩き潰すように落下するBLW 02変種。

今度はおぞましい動きでマイトガインに接近してくる。起き上
がったマイトガインは動輪剣で迎え撃つ。

舞人 「来るぞ!!」

マイトガイン 『どうやら面前のもの全てが奴の排除対象のよ
うだ!!!』

D 23 「ギャギユガアア!!!」

ギユアツ!!

2本の槍をマイトガインに突き出すD 23。これをマイトガ
インがグツと構えて動輪剣で受け止める。

ガギャイイイイイン!! キギギギツギギイイ……

マイトガイン 『……はああああツツ!!!』

……キヤキイイインツツ!!

互いの刃が捌きあう。何度も突くように攻撃を繰り返すD 2
3。マイトガインは動輪剣で弾き返しながら後退する。

ギユオツ、ギャキンツツ!! ゴオツ、ガシユキイインツ!

! ギユアツ、ガアアン!!

マイトガイン 『攻撃の……隙を……なかなか……与え
ては……くれんな!!!』

ガアアン、ギャイン、キュガキンツ、ガシユインツ、ギャ
キイインツ……

舞人 「押され気味か……!!!チャージ中でうまくエネルギー

ーが充填しきれていなかったか!!」

紬 「舞人君・・・!!」

この時、動輪剣のエネルギーは、54・8%だった。舞人は再びエネルギーを上げようと操作する。

遠方で体勢を持ち直したBLW 02変種が首を伸ばし、一声叫ぶ。そして激突する2体に破壊光弾を撃ち放つ。

BLW 02変種 「キュココアアア!!」

ギルドオアアアツ!!

ズドオガアアアアアアアアアア!!

D 23 「ガグオオオオオ??!!」

マイトガイン 『何い??!!』

舞人 「ぐあああ?!!」

紬 「きゃああああ!!?」

吹っ飛ばされる両者。その時、上空に「トランスポーターが到着し、」ローダーが投下された。

ジェイデッカー 『ブレイブ・アップ!!ジェイデッカー!!』

舞人 「あれは?!ジェイデッカー!!!」

マイトガイン 「来てくれたのか?!」

ジエイデッカーに続いて、レイバースも降下していく。

Jトランスポーター内で吉崎がオペレートを開始する。今回は、Jバギーを出さずにJトランスポーターの機内で指揮を執る。今回のエリアはビルの密集地帯であり、効率的にJトランスポーターが降下するには難しかったのだ。

吉崎 「ジエイデッカー、レイバース、戦闘エリアに突入します!目標はデストリアン1体、BLWの変種が1体です!現在、マイトガインと交戦している模様!」

吉崎の報告を基に舞人に通信を繋ぐ要。コックピット内に要からの通信が入る。

要 「そうか!!聞こえるか?!こちら、M・P・D・BRA
VEの要だ!!」

マイトガイン 「舞人!!要さんから通信だ!!」

舞人 「そう来ると思ったぜ!!こちら舞人!!要さん、援軍に感謝する!!」

要 「お互い様だ。こちらの方でBLWを叩く!!舞人とマイトガインはデストリアンに集中してくれ!!」

舞人 「ああ!!わかったぜ!!」

ファイバードとキングエクスカイザー。両者の拳がD 22の胸部に打ち込まれる。

ファイバード&キングエクスカイザー 『はあああああ！！』

ガドオオオオオンツッ！！

D 22 『ギゲヤアアアアッ！！！！』

ドオカアアアアンツッ！！

ファイバード 『ぐああああ！！』

キングエクスカイザー 『ヤロオオツッ……！！！！』

両腕のパンチで反撃を受けるファイバードとキングエクスカイザー。ファイバードは吹っ飛ばされるが、キングエクスカイザーは持ちこたえる。

キングエクスカイザー 『よくも、俺の可愛い従妹を喰おうとしたな……！！！！ただでは済まないぜ！！カイザーブラストオオオツッ！！！！』

今回の融合巨大合体でエクスカイザーは完全に勇に意識を任せていた。勇の燃え滾る感情がカイザーブラストと共に炸裂する。

ギユドオゴオオオオオツッ！！！！

ズギヤドオオオオオツッ!!!

D 22 「ギギヤオオオオツッ!!!」

近距離からのカイザーブラストで吹っ飛ぶD 22。キングエクスカイザーは、ファイバードに振り返り、倒れた身体を起こす為に手を差し伸べる。

キングエクスカイザー 『ほらよ……』

ファイバード 『ありがとうございます!とここでいつもと口調と声が違うんですが……』

キングエクスカイザー 『ああ、今は俺、平沢勇の意識になってるんだ。今回からエクスカイザーが俺と融合合体した際に、完全に俺に意識を任してくれたみたいだ。』

ファイバード 『平沢……!?もしかして平沢唯ちゃんのお兄さんですか?!』

ファイバードもご存知の通り、勇士朗の意識で闘っている。勇士朗は平沢と聞き、ピンときたのだ。

キングエクスカイザー 『唯の友達か?!話じゃ聞かされたたが、以前に助けてくれたロボットって言うのは君だったんだな!俺は唯の従兄だ。よろしくな!』

ファイバード 『そうなんですか!?よろしく……』

キングエクスカイザー 『だが、喋っている場合じゃねえな……』

。』

会話するキングエクスカイザーの背後でD 22が起き上がる。唾液をたらし、触覚を小刻みに動かしながら顎を開閉している。

D 22 「ギチャアアア……。」

キングエクスカイザー 『さあ、いくぜ!!カイザーソードッ
!!!』

ファイバード 『はい!!フレイムソードッ!!』

それぞれのソードを取り出し、D 22に向かって斬りかかっていく。だが、D 22は二つの斬撃を両腕の硬質部分で受け止める。

ガガキイイイイツッ!!!!

ファイバード 『何!?!』

キングエクスカイザー 『できるな!!!』

ギギギギイ……ガアアンツ、ドオドオガアアアンツ

!!!!

両者の刃を弾き返して、再度豪腕を打ち込んで2体を吹っ飛ばす。

ファイバード 『ぐおあああ!!』

キングエクスカイザー 『ちいつ!! 硬いやろうだっ!!!』

バック転しながら着地して体勢を立て直すファイバード。キングエクスカイザーは僅かに飛ばされるが、難なく着地する。

D 22 「ギギゲギヤアアア!!!」

ギユゴドオオオツ!!!

咆哮しながら、口から破壊光弾を放つD 22。ファイバードはフレイムフィールドでこの攻撃をシャットアウトし、キングエクスカイザーはジャンプしながら、D 22の背後を捕る。

ファイバード 『フレイムフィールド!!!』

ズディギヤゴオオオオツ!!!

キングエクスカイザー 『でやああああ!!!』

挟み撃ちにするかのような配置図となり、ソードをかまえて互いが擦れ違うように薙ぎの斬撃で突っ込む。

ファイバード&キングエクスカイザー 『でやあああああ!

!!!』

D 22 「ギギギツ・・・!!!」

ギヤギヤガシュウウウンツツ!!!

D 22 「ギゴアアアア・・・!!!」

更に裏拳がキングエクスカイザーに振るわれる。カイザーソードで受け止める。

ギャガアアアンツッ！！ ギギギギ、ググググウ……

キングエクスカイザー 『ホント、できる奴だな……！！』

『！』

再び東京。バトルフィールドには、後で出現したBLW 01の屍がいくつも転がっていた。

BLW 02変種が首をもたげ、ジェイデッカーに頭突き攻撃を繰り返す。胸部に直撃する。

ドオカアアアンツッ！！

ジェイデッカー 『ぐおおおおー！！』

吹っ飛ばされながらビルに激突。ビルがへし折れてジェイデッカーがその下敷きとなってしまう。

ガンレイバー 『ジェイデッカー！！このやるツッ！！』

ガアン、ガアン、ガンガンガアアアンツッ！！

ショットレイバー 『撃ちつづけるー！！』

デイドオゴオオン！！ デイドオゴ、デイドオゴ、デイド

オゴ、デイドゴオオオンツ！！！！

ズデイドオドオドオキャツズズズズドオオオオオオツ
！！！！

レイバースの弾丸が、BLW 02変種の側面に集中して撃ち放たれていく。

BLW 02変種 「キュココアアアア！！」

生体砲身がレイバースに向けられ破壊光弾を撃ち放つ。レイバースがいた近辺の地面に着弾し、その爆発の衝撃で、レイバースが吹っ飛ばされる。

ズドオココオオオオツ！！

ギャドオガアアアアアアア！！！！

レイバース 「ぐあああああ！！！」

ジエイデッカー 「うおおおお！！！」

その時、瓦礫を突き破ってジエイデッカーが飛び立つ。Jバスターを構え、BLW 02変種に撃ち込む。

ジエイデッカー 「狙い撃つ！！！」

ズドオオオオオツ！！　ズドオオツ、ズドオオツ、ズドオオオオツ！！！！

マイトガイン 『でやあああああああ！！！！』

ザシユドオオオオオオオオツツ！！！！

D 23 「ゲギギヤギャガアアアアツ！！！！」

苦しみの叫び声を上げるが、すぐさま反撃に移る。口から触手器官を打ち出し、ストライクボンバーを吹っ飛ばす。

ビユデイドオツ！！ ドゴガアアアアツ！！

ストライクボンバー 『ぐおおおお！！！！』

上部のグレイの頭部二つが、破壊光線をフレアダイバーに撃ち放つ。

ヴィギユドオツ・・・・・・ズデイガアアアアアアツ！！！！

フレアダイバー 『うおおおツ！！！！』

そして、マイトガインに振り返り、上部の2本の槍をマイトガインに突き出す。

ズガドオオオオオオオツ！！！！

マイトガイン 『がああああ？！！！！』

舞人 『ちいいいい！！！！』

紬 「きゃあああ？！！」

衝撃がマイトガインのコックピットを襲う。舞人は躊躇していた。やはり紬を乗せるべきではなかったのかと。だがその時、紬はあえてベルトをはずし、舞人の肩に腕をまわす。

紬 「舞人君・・・さっき勇気分けてくれた分、返すわ。」

舞人 「え・・・？ん・・・。」

紬は舞人にもう一度キスをした。舞人は、しばらく時間が止まったかのような感覚になった。

紬 「・・・勇気・・・返したわ。」

舞人 「ありがとう・・・100倍返して帰ってきたよ・・・。さらに衝撃が激しくなるかもしれない・・・さ、シートに座って。」

紬 「うん・・・。」

シートに座り、再びベルトを着用する紬。レバーをぎゅっと握る舞人。一気に気合がみなぎる。

舞人 「ストライクボンバー！！どちらか一方でいい！！奴のグレイのような顔を、ライザー・クラッシュで潰せ！！フレアダイバーは、ストライクボンバーの離脱を見計らって、フル・バーストアタックで全体に攻撃をかける！！」

ストライクボンバー&フレアダイバー 『了解！！』

ストライクボンバーが、ダツシユしながら拳をグツと構えて飛び掛る。右拳にスパークが発生し始める。

ストライクボンバー 「だりやあああ！！ライザー・クラアアアツシユツ！！！」

ズドオヴァギヤドオオオオオオオツ！！！！

右半分のグレイの顔が肉片を飛ばしながら粉碎される。上半部分を壁代わりに蹴つて離脱するストライクボンバー。フレアダイバーが、フル・バーストアタックをかける。全ビーム重火器が一斉に発射される。

フレアダイバー 「エネルギー充填良好！！フル・バーストアタック！！！」

ガイドオルルルルルルルルルルルヴオヴオヴオヴオドオドオドオドオズヴァダツラアアア！！！！

ドオドオドオドオドオドオドオドオドオドオドオドオドゴゴゴゴゴゴゴオオオオオオツツ！！！！

全弾が命中し、表面がズタズタになる。そして舞人が止めを掛けに行く。動輪剣の高エネルギーチャージを開始する。ツバの中央の車輪が高速で廻りだす。

舞人 「動輪剣、エネルギーゲイン上昇！！84・・・97・・・107・・・115・・・126%・・・！！いくぜ！！マイトガイン！！！！」

中……。」

紬 「う、うん。衝撃が凄かったし……でも、それ以上に闘ってる舞人君がカッコよかったわ！いつもこんな中で私達の為に闘ってくれていたんだなって実感できた……。凄いよ、舞人君！」

舞人 「そ、そうか。なんか照れるな……。」

赤くなる舞人。紬は、舞人を抱きしめ、互いのおでこを重ねる。

紬 「舞人君……お疲れ様。」

本日三度目のキス。キスの味は舞人にとってまさにハニースウィートという言葉がふさわしかった。

マイトガイン (さあ……向こうはどうなっているんだ……？！)

マイトガインが神奈川方面へと首を向ける。依然としてファイバードとキングエクスカイザーがD 22と激戦を繰り広げていた。

ファイバード 『おおおおお！！！！』

キングエクスカイザー 『だあああああ！！！！』

D 22 「ギギユゴオオオオオオ！！！！」

ガゴオオオオオオオオオツツ！！！！

つづく

次回予告

ファイバードとキングエクスカイザーは、D 22との戦闘に苦戦していた。悪戦苦闘した末に、2大勇者は再びギャザウェイ・アタックを敢行。そしてD 22を撃破。勇士朗と勇は握手を交わり、改めて共に闘っていくコトを誓う。

それから数日後、勇士朗がいつものように帰宅する。すると家には上京していた姉の姿があった。

勇士朗は姉にこれまでに自分に起こったコトを話すのだった……。

次回、新生太陽の勇者 ファイバード・サーガ 第33話 「姉の帰郷」

変貌した弟に懐く想いは……。

第33話 「姉の帰郷」

ググググ・・・デイカキヤアアアッ!!

ファイバード 『ぐあッ!!』

キングエクスカイザー 『クソがッ!!』

D 22が、両者の拳と剣を鉄鋼のような腕の甲で受け止める。それを瞬時に捌き、拳を押し当てていたファイバードに殴りかかる。

D 22 「グルウガアアアアッ!!!!」

ドオガゴオオオオッ!!

ファイバード 『ぐああああ!!!!』

カイザーソードを押し込んでいたキングエクスカイザーに、至近距離から破壊光弾を放つ。

ギユゴオオオッ!!

ズドオオオオオオオオオオオオオオオオオオッ!!!!

キングエクスカイザー 『ぐううううっ!!!!せやああああ!!

「!!」

ズガギヤアアアアツッ!!!

D 22 「ゲルウウウウ・・・!!!」

D 激しい爆発に耐え、そのまま反撃に移るキングエクスカイザー。
D 22の胸部に斬撃が入った。

だが、D 22は横に殴打してキングエクスカイザーを倒す。

ドオガアアアアツッ!!

キングエクスカイザー 「ぐがああッ!!」

ズウウウウウン・・・

そこへファイバードが、フレイムキャノンを放って牽制する。

ファイバード 「フレイムキャノン!!!」

ビギュドオオオオツッ!! ビギュドオオオオツッ!! ビ
ギュドオオオツッ!!

ズドオドオドオガアアアアアアアツッ!!!

オレンジの火線が胸部に直撃しながら爆発を起こす。

D 22 「ギユガアアアアアア!!!」

だが、爆煙の中から顎を開口させたD 22が破壊光弾を放つ。

ギユドオオオオオオオオ!!!

ズドオガギャアアアアアアアア!!!

ファイバード 『ぐおおあああああ!!!』

直撃を食らって吹っ飛ばされるファイバード。

起き上がったキングエクスカイザーが再度斬撃を入れる。

キングエクスカイザー 『しゃあああッ!!!』

ズガシユウウウンッ!!!

D 22 「ギャグウウッ!!!」

一旦間合いを置く為に後退するキングエクスカイザー。

キングエクスカイザー 『厄介なヤローだな?! ええ?!』

ゆっくりと起き上がるファイバード。

ファイバード 『ぐっ……一気にギャザウエイアタックで

潰しましょー!!!』

キングエクスカイザー 『ギャザウエイアタック……?』

ギャザウエイアタックは勇が融合合体する以前に繰り出したタ

つは天然で変わったトコある子だけどこれからもよろしくしてくれ。それと、初めて学校にデストリアンが襲来したときに唯達を守ってくれたんだよな？マジでサンキューな！！」

勇士朗 「いえ、自分がそう行動したかったから・・・その・・・当然の事をしたまでですよ！」

勇 「ははは・・・これからは共に闘おうぜ！！巨大生物とな！！！」

勇士朗 「はい！！あ・・・ケー番、交換します？」

勇 「おっとそうだな！」

互いにケータイを出して赤外線通信で交換し合う。

勇 「・・・っし！またなんかあつたら連絡クレ！」

勇士朗 「はい！またよろしくお願いします！」

エクスカイザー 『そうか・・・二人が会うのはこれが初めてだったんだな。』

道路脇に止まっていたエクスカイザーが、二人に話しかけた。

勇 「エクスカイザーは知ってたのか？」

エクスカイザー 『ああ。幾度か共に闘ってきている。時には、勇士朗とテレパシーで会話したりするからな。』

勇 「テレパシー?!俺はできねーぞ!?!」

エクスカイザー 「彼自身がファイバードと融合している為に可能なんだ。」

勇士朗 「そうなんです。俺、本当だったら死んでいるはずでした。」

勇 「おお・・・話が解ってくるな。ようはファイバードに融合してもらって救われたって事だな・・・って人間に融合できるのか?!?!」

エクスカイザー 「いや、原則的には禁止されているが、彼の場合は例外の特別措置だった。」

勇 「へえ・・・。」

感心しながら勇士朗を全体的に見る勇。勇士朗は照れくさそうに答えた。

勇士朗 「そのおかげもあって今まで仲間の危機を救うことができてるんです。俺は後悔も何もしません。むしろ感謝しています!?!」

勇 「そうか・・・その歳でそう悟っちゃあ、大したもんだぜ!じゃあ、そろそろ行くか!もう1人の従妹を念のため病院へ送ってくからな。得体の知れない化け物に触れたとあっちゃ、おちおちできねーな。そろそろいくかな・・・。」

エクスG Tの後部座席では、梓と純が付き添いで乗っている。

憂は助手席でうつむいたように座っていた。勇士郎は、一声かける。

勇士郎 「憂ちゃん。生きてて何よりだ！あんな目にあつた直後で混乱しているだろうケドもう大丈夫だよ！」

憂 「勇士郎さん……………」

エクスカイザー 『その通りだ。憂。私と勇もいる……………今は安心して休むんだ。心配はいらないよ。』

憂 「エクスカイザー……………」

梓と純も勇士郎にお礼を言う。

純 「ありがとうございますっ！」

梓 「勇士郎さん、エクスカイザーさん、ありがとうございます。私いつも助けられてばかりで……………」

勇士郎 「そんな……………気にすることないよ。」

エクスカイザー 『ああ。やつらから人々を守る……………当然の事をしたまでさ……………』

勇士郎 「それじゃ、俺、そろそろ戻るからさ、憂ちゃんのそばにいてあげなよ。」

梓&純 「はい！」

そして勇が運転席に乗り込んだ。

勇 「じゃ、いくぜ。またな！勇士朗！」

エクスカイザー 『では行ってくる！』

勇士朗 「はい！」

勇は、アクセルを開けて市内の病院へと向かった。勇士朗も俊たちの所へと戻る。だがアシがないことに気づく。

勇士朗 「俺も戻るかな・・・あ！！ファイヤージェットで来たんだっけ・・・もう、ファイアージェット戻しちゃったし・・・帰るためだけに出すのもアレだし・・・歩いて戻るしかねえか。」

数日後

憂は異常なく無事に退院する。僅かに長引いたのは精神的なものが殆どだった。だが、平沢家の持ち前のポジティブさで殆ど回復していた。

勇と共に我が家へと戻る。

勇 「ただいまー！唯！憂が退院したぜー。」

勇がそう言うと、玄関目掛けて唯が走ってきた。

唯 「うーいー！おかえりー！..！」

憂に抱きつく唯。姉の抱擁とでもいうのか。

憂 「えへへへ……お姉ちゃん、ただいまあ。」

唯はほつぺたを憂のほつぺたに合わせてすりすりする。憂は照れくさそうに喜ぶ。

唯 「心配したんだよお、憂い。」

憂 「もお……お姉ちゃんたら。」

勇は二人のやり取りを微笑ましく見つめる。

勇 (ふう……無事で何よりだな！だが、もしエクスカイザーやファイバードがいなかったら……今頃は……)

もしもの最悪パターンを考えてしまう勇。一瞬目を細める。

唯 「うい、うい。」

憂 「お姉ちゃん、くすぐりたいよお。」

だが、二人のやり取りが再び目に入るとすぐに思考転換する。

勇 (いいや……今この時だ！俺は、大切なものを守る手段がある！！しかし……)

唯 「うい、うい……。」

憂 「お姉ちゃん・・・あつたかいよお。」

勇 (このコ達のやり取りを男に置き換えるとなんとオゾマシイよな・・・。)

勇士朗は、メンバーと遊び終えていつもように帰宅する。すると玄関にある靴が一足増えていた。

勇士朗 「ん？客か？」

居間に入るとそこには姉、火鳥香澄が帰郷していた。赤淵のメガネをしており、雰囲気はどこかさわ子に似ているが、スタイルはさらにスマートで小顔だ。

香澄 「あ！勇士朗。元気にしてた？」

勇士朗 「姉さん！帰ってきてたの?!」

香澄 「まあね・・・はあ久しぶりだなー・・・あんたの顔を見るの。」

勇士朗 「な、なんだよー。」

香澄は、プロのアーティストを目指して東京へと上京していた。彼女にとっては久しぶりの実家だった。

香澄 「はあ・・・今月東京でデビューアルバムのスタジオ収録の予定があつただけけど、変なゲテモノ怪物のせいで色々と予定

が狂っちゃってねー……。急遽休みができて帰郷したわけ……。去年の終わり頃からこんな事件ばっか起こってホント、嫌になっちゃうわー。」

勇士朗 (実の弟がその怪物とやらと闘っているとは夢にも思わないだろうな……。)

親には何も言っていないが、姉には伝えるべきか躊躇する勇士朗。親なら口うるさく言われるだろうが、姉なら歳もそれなりに近いので解ってくれる……。そう勇士朗は感じた。

勇士朗 「姉さん……。実は……。」

香澄 「ん？」

勇士朗は、事実を一部始終話した。ファイバードになった経緯、今までの日々、わかっている範囲のデストリアンの事……。全てを話した。

香澄 「ふーん……。スゲーじゃん!! 勇士朗!!」

勇士朗 「は?! それだけ!? 信じてないんじゃない? 姉さん!」

予想外にラフ過ぎる返答に驚く勇士朗。正直もつと心配して欲しかった。

香澄 「信じてるわよ。大体嘘ならそんな真顔であんたは細かい事まで喋れないって! 嘘ならすぐ笑うし! 仮に嘘ついてても何のメリットも無いし……。」

勇士朗 「う……で、なんで平気なんだよ?!」

香澄は、コーヒをすすりながら一言で済ます。

香澄 「私の弟だからっ」

勇士朗 「答えになってねー!!」

突っ込む勇士朗。はつきり言って理屈がさっぱりわからない。だが、香澄は次の瞬間にはきりつとした表情で喋った。

香澄 「でもね……本当言うっちゃっぱり心配よ。実の弟があるなバケモノと闘うだなんて、フツーは在りえないし……。」

勇士朗 「姉さん……。」

香澄 「ファイバード……だっけ？正直複雑な感じかな……勇士朗の命は助けてもらったけど、同時に闘う運命に引きずり込まれたみたいでさ……。」

勇士朗 「その所は誤解だ。話したとおり俺の意思だ。ファイバードは悪くはない。」

香澄 「じゃあ、死なないって約束っ!!あんた自身で選んだのは解ったけど、死んだら何もならないよ!!」

勇士朗 「ああ、約束するよ。俺は死なねー。」

すると香澄は、すっと両腕を広げた。亜全をくろう勇士朗。

勇士朗 「へ??？」

香澄 「おいで！アツタカイ、アツタカイしてあげる」

勇士朗 「な、なにバカなこと言ってるんだ?! ねーさんっ!!
話の繋がりにからして意味がわかんねー!!」

確かに。だが、勇士朗は赤面していた。

香澄 「なによー! 今まで頑張ってきた弟への姉からのささやかなご褒美よ!! ほら! 来なさい!!」

言っていることと正反対に香澄が自ら勇士朗に接近する。

勇士朗 「だああ!! とか言ってる自分から来てるじゃねーか・・・
うぎゅっ・・・!!」

まるで唯が梓に抱きつくがごとく香澄は勇士朗に抱きついた。
勇士朗の顔が香澄の胸にうづくまる。

香澄 「ゆーくーんっ」

勇士朗 「むもおおおお・・・!!」

こんなみつともない光景はとても透に見せられるものではなかった。

次の日、勇士朗は漣と遊ぶ約束をしていた。駅前のターミナルで待ち合わせる。

勇士朗がつく頃には既に私服姿の漣が先に待っていた。ヘアースタイルは凛としたポニーテールだった。正直可愛すぎて笑みがこぼれそうだった。

勇士朗 「ごめん！漣ちゃん！待たせちゃった？」

漣 「ううん。私も今来たところだから・・・それじゃあ、いい？」

勇士朗 （漣ちゃん、いつ見ても綺麗でカワイイな・・・。）

二人は歩き出す・・・が、思いも寄らぬ事態が起こる。

香澄 「アツいねー、お二人さん！」

漣 「え？」

勇士朗 「な・・・！！！！！」

ターミナルに何故か香澄がクルマで来ていたのだ。漣は一瞬と惑うが、香澄の顔をよく見てみる。

漣 「え？え？」

香澄 「あんたもやるよーになったんだな・・・。」

漣 「え???知り合いなの?!勇士朗君!!！」

頭を抱え込む勇士朗。

勇士朗 「……どーもこーも……前に話していた俺の姉さんだ……!!!」

漣 「あ! そうなの?! 初めまして! 秋山漣です!」

漣は以前聞かされていたコトを思い出す。勇士朗の姉が、プロのアーティスト目指して上京しているということだ。

香澄 「香澄よ。いつも弟がお世話になってまーす!」

漣 「あの、香澄さん、プロを目指してるって聞いてたんですけど……それに私、桜高三年の軽音部員なんですけど、香澄さんも桜高のOGなんですよね?」

香澄 「え?! 私のコト話してくれてたの?! 姉想いねー勇士朗は!」

勇士朗 「何わけのわからないコト言ってるんだか……。」

香澄 「確かに私は桜高のOGよ! 部活は吹奏楽やってたけどね。でもその傍らギターやベースもやってたりしたんだ! でもあれ……?? 今三年で事は……私がいるときいたわよね?? ああ!! 思い出した!! 漣ちゃんて、あのベースのコかあ!!」

漣 「そ、そうです! でも、香澄さんとは……あ! 先輩でいいですか?」

香澄 「好きなほうでいいわよ」

漣 「香澄先輩とはほとんど面識がなかったですね・・・私も当時軽音部は一年しかいなかったから先輩との接点がほとんどなかったんですよね・・・。」

香澄 「でもいいじゃない！こーして接点もてたんだし！！」

漣 「ですよー！」

香澄 「ま、今度メジャーデビューが決まってね！その前に休暇ができたから帰郷したのよ。」

漣 「メジャーデビュー・・・！！おめでとーございます！！音楽の話、詳しく聞かせてもらっていいですか？！」

香澄 「もちのろん、オッケーよ！」

漣の瞳が輝きます。目の前にデビュー！目の前のプロのアーティストがいるのだ。無理もなかった。

勇士朗 「あ、あれ？この流れって・・・??？」

そして急遽、電車で街へ繰り出すはずが、香澄のドライブの下、街から離れた城山湖を目指す。

勇士朗 「で・・・どこ行く気？」

香澄 「城山湖！いままでずっとビルの密集地帯にいたからさー、地元の自然が恋しくなったのよ！あそこは県内の公園50選に入ってるトコだからさ！」

勇士朗 「だからって・・・俺を巻き込むなって！」

香澄 「あら？澪ちゃんは行きたいのよね？」

澪 「はい！滅多にこっちの方へは来ませんし・・・。」

香澄 「好きなだけ自然を堪能させてあげる。」

澪はいつになく目が輝いていた。下手すれば勇士朗そっこのけとも言うべき状況だった。軽く淋しい気持ちになる勇士朗。

勇士朗 「澪ちゃん・・・。」

澪 「あ！香澄先輩、今度よかったらベース教えてもらえませんか？！私、軽音部でベースやってるんです！！！」

香澄 「ま、こっちにいる間はいいよ 教えたげるよ。」

澪 「わああ、ありがとうございます！！！」

現地に着くと、香澄と澪で散策しながら音楽の話で盛り上がる。勇士朗は正直釈然としなかった。だが、目の前にいる澪は輝いている。勇士朗からしてみれば当たり前前の姉だが、澪からしてみればデビュー目前のアーティストが目の前にいることその他にない。

勇士朗も正直、姉がデビューすることは喜ばしかった。だが照れくさくてうまく表現できないでいたのだ。

勇士朗 「ふう……。」

広大な城山湖を見つめる勇士朗。周囲には自然があふれていた。休憩地点に到達すると、手前の城山湖の向こうに相模原市が一望できる所へと来る。

漣 「わぁ……市内にもこんな綺麗な景色を見れるところがあつたんだあ！」

景觀の美しさに感動する漣。香澄は鼻高々と自慢する。

香澄 「まあねー。ふふん。学生じゃ滅多にこっちは来ないでしょ？自転車でもそれなりに距離あるし……。」

漣 「そうですねえ……こっちの方には殆ど行かないなー。」

勇士朗は相模原一帯を見つめる。今までも、そしてこれからも守っていく街。

真剣な眼差しで見つめる勇士朗に漣が顔を覗く。

漣 「勇士朗君？どうしたの？そんな真剣な顔しちゃって。」

勇士朗 「え?!あ、ああ、今までずっとあの街で闘ってきた

んだなってね……。」

澪 「そうだよね……闘ってきたもんね。」

香澄 「これからも闘っていくんでしょ？どう？ある程度は街を守る重さつてのが実感できた？遠くから住んでいる街を見てみて……。」

勇士朗 「その為にここへ？」

香澄 「さあねー？」

澪 「お姉さんは知っているんだ？ファイバードのこと。」

勇士朗 「うん。昨日話したんだ。」

香澄 「……ま、実際に闘っている所を見たわけじゃないけど、何度かテレビでの中継を見たからある程度はピンときてる……。よくやってきてるよ勇士朗。自信、今以上にモットもちな……。」

勇士朗 「姉さん……。」

二人の会話を聞きながら微笑む澪。澪も再び景観に視線を移す。風が三人の頬を通りすぎていく。

夏休みの最中、勇士朗は改めて闘う事への意義を考えさせられた。

香澄 「ところで聞き忘れてたけど、付き合ってたの??二人

「??」

勇士朗 「は??」

漣 「え?!」

勇士朗 「ち、ちがう、ま、まだ付き合ってるわけじゃ……」

漣 「と、友達です!!」

香澄 「もー、二人とも顔に付き合いたって出てるよー。」

勇士朗 「姉さん!!」

漣 「えつとその……あう……。」

勇士朗 「ああ!! 漣ちゃんがテンパリ出しちゃったじゃねー
かあ!!」

香澄 「二人とも顔真っ赤じゃん」

勇士朗 「だああああ、もうっ!!!!」

つづく

次回予告

それぞれが夏休みを堪能する。香澄は歌詞作りに、勇士朗は連

れ達とカラオケ、澪は和と夏期講習、

光と唯はお家デート・・・そんな夏休みの最中、律の上の弟、聡は近所の羅顔神社付近で妙なドリルを拾う。それを調度はちあわせた蓮と律に相談を持ちかける。蓮の提案で神社の境内を散策すると思っても寄らぬ展開が待っていた。

次回、新生太陽の勇者 ファイバード・サーガ 第34話 「
爆誕！！グレンラガン！！」

そのドリル、全てを貫く・・・。

第34話 「爆誕！！グレンラガン」

夏休みの一定期間中、香澄は実家にしばらく居る事となっていた。自分の部屋でノートパソコンと睨めっこしながらキーボードを打ち続けている。

香澄 「うーん……。」

カタカタと素早い音が聞こえては止み、聴こえては止む。香澄は、パソコンで歌詞を打っていた。

香澄 「君と来たあの場所で……今までの想いを……カタチにして……うーん。」

歌詞作りは簡単そうだが容易ではない。頭を抱えては打っている。

香澄 「はー……いい歌詞浮かばないなー……。」

すると部屋をノックする音が聞こえた。

香澄 「なーにー？」

勇士朗 「俺、ちょっと出かけてくる。」

香澄 「あいよー。いってらっしー。」

勇士朗 「うーい。」

勇士朗は自転車で待ち合わせ場所へと向かった。しばらくして香澄は歌詞作りに行き詰まり始める。

頭をかきながら、歌詞作りを放り出して出かけようと行動。クルマに乗って出かけた。

香澄 「……あああ!!私もどっかいこーっ!!」

バタムツ! ギュキキキンツ! ブオオオオツ!

香澄 「せっかくの快晴なんだからどっかいかなきゃあっ!!」

待ち合わせ場所へと着く勇士朗。本日は溼とではなく勇士朗フレンズ達との約束だった。

勇士朗 「おーっす。」

蓮 「よおっ!!」

俊 「おっ。」

涼 「ういっす!!」

蓮、俊、涼が何気なくあいさつする中に、見慣れない女子の姿があった。

姫子 「はじめまして!!」

勇士朗 「あ……はじめまして……。」

その女子は、唯の隣の席の立花姫子だった。蓮が、ぽかんとする勇士朗に紹介する。

蓮 「えーつとな、俺のバイト仲間の立花姫子さんだ。ちなみに遷ちゃんと同じ桜高生だぞ！」

姫子 「よろしく！秋山さんとはクラスも一緒なのよ。」

勇士朗 「あ！マジで?! そうなんだ! ん……?」

すると涼がなにやらもじもじとし始める。その仕草が疑問に思う勇士朗。その仕草を見た蓮がにやけながらその理由を答えた。

蓮 「イシシシっ……実は姫ちゃん、涼坊の彼女さんでもあるんだ! おい! 彼氏!! もじもじしてんじゃねーっ。」

余りにものデコボコっぷりに驚く勇士朗。だが、同時に微笑ましくも思えた。

勇士朗 「ええ?!」

涼 「も、もう蓮先輩!」

姫子 「蓮君! あたしの可愛い彼氏いじめないですよ! ねー? 涼くん」

涼 「えへへへ。」

涼の頭をなでながらかばう姫子。涼は、ふにゃふにゃな表情で
デレツとなる。

蓮 「このやるーっ、俺より先に〜！」

俊 「別にいーじゃねーか。カワイイ後輩なんだろう？大人げね
ーぞ？」

俊が少し痛いことをつく。だが、蓮は反撃する。

蓮 「強気だな〜？今日は誰の為にカラオケ行くんだ〜？？」

俊 「ぐ……てめ……！」

今日は、俊と梓の距離を縮めようという魂胆でカラオケに行く
ことになっていたのだ。発案は、蓮と律だ。

俊 「しかし……お前もいつ進展するんだか??？」

姫子 「え?!蓮君も好きなヒトいるの?!」

蓮 「うっ!〜!」

蓮も俊に反撃された。すると当事者達が到着した。

律 「おーい!おっくれちゃった〜!ごめんごめん!」

梓 「すいませーん!」

俊 「おおっと！噂すれば俺達のパートナー候補が……。」

蓮 「おいおいおい！！！」

姫子 「蓮君って田井中さんが……。」

蓮 「だああ！！そろそろ聞こえるから黙ろつな！！！」

姫子 「ふふふっ、蓮君がねー？」

律 「？何盛り上がってんだ？」

蓮 「いいや、なんでもねー！さあ、行こうぜ！」

その頃、漣と和は夏期講習へと赴いていた。その夏期講習の休み時間に和は、漣に恋ばなを持ちかけた。

和 「ねえ、漣。」

漣 「何？和。」

和 「修学旅行のときチョコッと話したと思うんだけど、私さ、唯の従兄の勇さんが気になるのよ。肝心の唯に話してもすぐにこの話するの忘れちゃうのよね……。」

漣 「この話って……？」

和 「勇さんと私がくっつくようにするって言う話し。やっぱり

り唯じゃ話を取り持つのが不器用だから……。」

漣 「とはいっても他に接点がない……。ま、まあ……。私もいるんだけどね……。好きな人。」

和 「復活祭で呼んだ火鳥君って言う人でしょ？」

漣 「うん……。初めのころに比べたら結構距離が縮まってる感じがする！今でも緊張しちゃうけど、大分自然に話せるようになったよ。」

和 「いいーなー……。でも今は大学に向けての勉強もしくちやいけないし……。」

漣 「た、確かにな……。あははは……。進路か……。唯と律はまだ決めてないんだよなー。」

和 「この前はミュージシャンとか言ってたけど……。」

そのミュージシャンという言葉で急遽香澄のコトを思い出す漣。少しテンションが上がる。

漣 「そうだ！勇士朗君のお姉さん、ミュージシャンやってるんだよ！まだデビュー前だったんだけど、今度デビューするって言うてー！」

和 「そうなの？！いつその事その人に唯達を見てもらうっていつのもいいかもね！」

漣 「あははは！」

一方カラオケに来た勇士朗達は、大いに盛り上がっていた。姫子と涼がデュエットソングを歌う。

蓮（うー・・・涼坊う〜。）

律（案外相性いいかもな。この二人。）

その後、負けじと歌い放つ蓮。その歌唱力は梓や律が圧巻するほどだった。

梓「蓮さん、うんまい!!」

姫子「蓮君、すごい!!」

涼「プロも顔負けっす!!」

律「すげー!!蓮、上手いじゃん!!なんなら今度ヴォーカルやってよ!!」

蓮「ええ?!放課後ティータイムの?!」

梓「でもそれだと学校で練習できないじゃないですか!蓮さんは他校の人ですし・・・。」

すると俊が梓にマイクを渡す。次は梓の番だった。

俊「ほい、マイク。次そうだろ?」

梓 「あ、はい。えへ、ありがとうございます。」

梓が歌う。元々音楽に恵まれていた環境で育った為に、連達に負けず劣らずに上手かった。

思わず見とれる俊。漣の歌に見とれた勇士朗同様、意中の人の歌声は心地がいいものだ。

蓮と律が二人してソフトドリンクをちゅーちゅー吸いながら俊を見る。

蓮 (おーおー、見とれてるなー俊のやつ。)

律 (今日はどこまでくつつけるのやら……。)

梓が歌い終わり、俊にマイクを渡す梓。ハツとなる俊。

梓 「俊さんですよ?」

俊 「お、おう!」

マイクを手になると、俊は十八番の歌を歌う。俊もかなり歌唱力があった。

奇しくも歌っている曲は、梓の好きなアーティストの曲だった。梓もときめいたように俊を見つめている。

律 (お!梓のやつ、ときめいてるな……にしし。)

蓮 (俊も株アップかあ?)

皆が歌うのを見て、勇士朗は、漣の歌声がまた聞きたい気持ちになっっていた。

勇士朗 (はぁ・・・漣ちゃんの歌・・・また聞きたいな・・・)

そうこうしている内に俊が歌い終わる。

俊 「つぎー、お前だぜー。ぼーっとすんなー。」

勇士朗 「あ、ああ。」

勇士朗も次世代ロックバンドの歌を熱唱する。熱いサウンドが響き渡る。次に律が、元気な曲と歌声でムードを盛り上げた。

その間に梓が次に歌う曲をデンモクで検索する。

梓 「俊さん、次これ歌いましょう!」

俊 「お!俺それも得意だぜ。」

梓 「そうなんですか?!いい曲ですよね!。」

偶然にも好きなアーティストが同じだった事が二人の距離の間隔を少し縮めた。

一方、平沢家。今日、唯と光はお家デートしていた。暑いのと

クーラーが苦手な唯にとってこれが一番だと光は思ったのでそうしたのだ。ぶつちやけ光は初めて唯の家に来た。

ちなみにエクスカイザーは、勇が走り屋スポットの遠征偵察に出向いた為になかった。

光 「おじゃまします。」

唯 「やつほー。あがってあがってー。」

ぷらんぷらんと手を降りながら寝そべっていた。

光 「おおう、今日もだらけてるねー……。」

唯の部屋へと上がって、買ってきたコンビニのお菓子やジュース、デザートを食べながら過ごす。

唯 「んー……デザートおいちー。」

えらくお菓子やデザートを食べる唯が心配になる。女の子の体重に関して気遣ったのだ。

光 「そんなに食べて……その……増えちゃったりしないの？」

唯 「私はいくら食べても太らないんだー。」

光 「あ、そーなんだ！」

一通りのお菓子を食べると今度は、戦国BASARA3をやり

はじめた。二人で協力しながら本拠地まで攻めて行く。光は伊達政宗、唯は鶴姫を使う。

光 「せやせやせやあ！！斬斬斬！！！」

唯 「ほいほいほい！ピキヨンピキヨン！！このキャラかわいくって使いやすい！！」

光 「そう？どわああ！！砲撃くらった！！」

唯 「援護してあげる！！」

香澄は、景観のいい道路にクルマを止めてコーヒーを飲みながら一息つける。

香澄 「んー！！いい景色！！地元最高！！いい歌詞浮かびそうだな！！」

暑い日差しが照りつけるが、景観側から吹く風が調度よい涼しさを与えてくれる。

香澄 「涼しいー・・・ん？」

その時、香澄の携帯が鳴る。溲からの着信だった。

香澄 「お！未来の妹からの着信か・・・ぶっ！なんちゃって！もしもーし。」

そう言いながら出る香澄。

漣 「あ、もしもし！あの、いつまで滞在しているか聞きたくて……香澄さんはいつまでこっちにいるんです？」

香澄 「あたしは後3日間いるよ……何？ベース？」

漣 「はい！こっちに来てくれる内に教えてもらおうかなって……。」

香澄 「もち、いいわよ！今からかな？」

漣 「あ、今私、夏期講習中なんで明日にでもお願いします。」

香澄 「なんなら今日から泊まりで教えてあげてもいいわよ！送り迎えやってあげるから！」

漣 「本当ですか！ありがとうございます！」

香澄 「いいーって、いいーって。じゃあ、また終わったら連絡してーじゃねー！」

漣 「はい！」

それは、勇士朗の家に初めて行くことも意味していた。漣は、二重に楽しみな感情になる。

漣 「ふふふ！今度デビューする人にベース教えてもらえるんだあ……それに勇士朗君の家に初めて行くんだ……私！」

その日の夕方。メンバーは解散し、それぞれの帰路に着く。律と蓮が歩いていると、律の上の弟である、聡と出逢った。

聡 「あ！ねーちゃんに、蓮兄ちゃん！」

律 「お！聡！今帰りかあ？」

蓮 「おおつす！！一緒にかえろーぜ！！またハンバーグ呼ばれっけど、よろしくな！」

聡 「へへ！蓮兄ちゃんなら大歓迎だよ！ところでさ・・・今日、近所の神社の近くでこんなの拾ったんだけど何かな？」

聡は「ごそごそと何かを取り出した。するとそれは小さなドリルだった。

蓮 「なんだこりゃあ？！ちつちえードリル。」

律 「おもちゃかなんかじゃないのかあ？」

蓮が手に取り持ってみる。だがプラスチックではなく、あからさまに金属だった。

蓮 「いや、こいつは金属だ。とりあえずその神社に行ってみるか！」

律の家の近所にある大きな神社。羅顔神社。羅顔岩らがんと呼ばれる顔の岩が祀られている神社だ。境内の中を散策するがいたって変わ

ったモノはない。

だが、境内の顔面岩付近でドリルは、鼓動のようなものを発生させ始めた。そして突如と聡の手から飛び立ち、羅顔岩に直撃した。すると、岩が崩れ、中からロボットの頭のようなものが現れた。

律 「ろ、ロボット?!...の頭?!」

聡 「すげー!!勝汰に言ったら喜ぶなー!!」

蓮 「なんか、ファイバードの生首みたいで何とも言えんけど...。っていうかなんで神社にロボットが?!」

その時、突如として轟音が鳴り響く。境内の地面を突き破ってBLWが出現した。

BLW 08 「クケキャアアアアアア!!」

身体はBLW 05のような屈強な身体をしている。だが、頭部は著しく変わっており、頭と鼻に角があり、更には今までのタイプに確認されていなかった鋭利に牙が口内に並んでいた。

律 「でたああああ!!!!」

蓮 「やべええ!!逃げるぞ!!聡!!」

聡 「でも...!!」

その時、BLWの顔面に向かって、ロボットの頭が突っ込んだ。

キュオン……ドコガアアア!!

BLW 08 「キュゴケエエエ?!!!」

そして聡の前に着地した。耳と首からドリルの手と足が飛び出していた。更に喋りだした。

ロボットの頭 『おつす!!おかげで身体が手に入ったぜ!!サンキュー!!俺の名はラガン!!宇宙からやってきた金属エネルギー生命体だ!!この顔のようなボディーは、俺の先祖がこの異星に落ちることとしていったもんだ!!』

聡 「すげー!!!!」

律 「ラガン?!!!」

蓮 「新たな勇者なのか?!」

ドオゴガアアアア!!

律 「きゃああああ!!」

その時、振るわれたBLWのパンチが地面を砕く。その衝撃で飛ばされた律が岩の壁で背中を強打してしまう。

律 「うつ……!!!!」

蓮 「律っちゃん!!!!」

聡 「ねーちゃん!!!!」

ラガン 「こいつ……!!」

B L W 08を睨むラガン。蓮はすぐに律の許へ走る。身体を抱き起こし、蓮は寄り添う。

蓮 「おい!!大丈夫か?!律っちゃん!!」

律 「痛い……ぐう……げほげほ!」

B L W 08は容赦なく二人に手をかけようとする。蓮は思わず律を抱きしめる。

律 「……蓮……げほ!げほ!」

蓮 「っ……ちくしょう!!だが、死んでも律っちゃんだけは……!!」

その時、聡は石を投げて注意を促した。

ガッ!

B L W 08 「??」

聡 「ねーちゃんと蓮兄ちゃんから離れろ!!こいつ!!こいつ!!」

石を投げまくる聡。注意は聡に向けられ、B L W 08が聡に襲い掛かる。

中へのゲートが開く。

ラガン 『グレンを召喚した！！あの中に入るんだ！！融合合体するんだ！！』

迷ってはいらなかった。気合と勇気で聡はその中へと飛び込んだ。

その中は不思議な空間だった。何ともいえない空間だ。あたかも宇宙空間に投げ込まれたような感覚だった。そしてラガンは、下部のみからドリルを出して、グレンの頭上へと突き刺さる。

ラガン 『フォームアップッッ！！！！』

その叫び声と共に、屈強な両腕と両脚が飛び出し、更には鋼の甲冑のようなアーマーが腕と脚の甲に装備された。中の空間内が全体モニターとなって、聡を中心に周囲の映像を映し出し始める。

聡 「すげえ……。」

更にラガンの頭部に三日月のような金色の飾りが浮かぶ。そして覇気と共にその名を叫ぶ。

グレンラガン 『ドリル度胸合体！！グレンラガンッッ！！』

度胸とドリルと勇気の勇者がここに爆誕。BLWと対峙する。

BLW 08 「クゲケエエッ！！」

グレンラガン 『さあ、聡！！お前自身が、思ったように身体を動かして戦え！！殴ろうが蹴ろうがかまわん！！相手をぶちのめすんだ！！！！』

聡 「ああ！！わかった・・・ねーちゃん達から離れるおおおおー！！！」

一気に接近するグレンラガン。鋼のドリルがBLW 08を突き飛ばす。

ズドオゴガアアアアア！！！！

ズズズズドオオオオオオツ！！町の方へ吹っ飛ばすBLW 08。

蓮 「聡のやつ・・・！！まるで勇士朗じゃねーか！！へへへ・・・。」

律 「痛い・・・聡は・・・どうしたんだ？？」

蓮 「あいつ、俺たちの為に戦ってくれてらあ・・・勇氣あるやつだったんだな聡・・・。」

律 「あの子が・・・。」

律の目線上にグレンラガンの背中が映る。夕日の逆光で黒い影となっている。

BLW 08が、グレンラガンに組み付き、角で頭突きを繰り返す。

ガゴオオツ!!

聡 「うっ!!」

ズガアアアアンツ!!

聡 「ぐあああああああ!!」

聡の頭に激痛が走る。グレンラガンの動きやダメージがそのまま聡にトレースされているのだ。

ドオガアアアアンツ!!

聡 「ぐこツ……!!」

ズズズウウウツ!!

殴り返されたグレンラガンが、山の斜面に崩れこむ。そこへ更にBLW 08が突進する。

ドオドオドオドオオオ……ズドオガアアアアン

ツツ!!!!

聡 「ぐわあああああああ!!」

聡の叫び声が響く。弟のピンチを重んじた律が叫ぶ。

律 「聡いつ!!!!」

聡は、叫んだ後、ぐつと耐えた。今、姉や蓮を守るのは自分しかない。

聡 「……くそっつ！！」

グレンラガン 『手をかざせ！！聡！！グレンラガン、ドリライズ！！』

言われたように手をかざす聡。すると、グレンラガンの右手がドリルへと変形する。そしてボディのいたる所からドリルが飛び出す。完全攻撃モード・ドリライズだ。

聡は怒りをドリルに乗せて、BLW 08を思いっきり殴る。いや、突き刺すというべきか。

聡 「このおおおおお！！」

ドオズドオオオオツツ！！！！

更に蹴りを繰り返す。

ドオオオオツツ！！！！

グレンラガンのニーキックが炸裂。BLW 08の身体にドリルが突き刺さり、血が噴出す。そして左アッパーでBLW 08を退ける。

ズドガアアアアアツ！！

BLW 08は、ふらつきながら後退する。BLW 08が上

体を起こすと、グレンラガンは更なる反撃に転じる。

聡 「だりゃああああー!!!」

ズドゴオオオオオツ!!! ヒュオツ……ドオゴオオオオオツ!!!

再度右のドリルで殴打し、蹴りが炸裂。BLW 08につま先のドリルが突き刺さる。

BLW 08 「クグググウウウツ!!!」

持ちこたえるが、そこへ更にドリルを突き出したタツクルが炸裂する。

ドオズドオオオオオオツ!!!

血を噴出して倒れこむBLW 08。

聡 「はあ、はあ、はあ、はあ……」

グレンラガン 『よっし!!!止めだ!!!右手のグレンドリルをチャージアップさせる!!!』

聡 「わかった……」

右手をグツと構える聡。ドリルが高速で回転し始める。更に赤よくな、あるいはオレンジのようなエネルギーがドリルに帯び始めた。

グレンラガン 『ああ！！そつだ！！勝つたんだ！！』

震える手の平を見て、慣れぬ勝利を実感する聡。その姿を蓮と律が見つめる。

律 「勝つたの・・・??」

蓮 「ああ。律っちゃんの弟は、立派な勇者になった！！」

聡はこの夏休みで勇者となったのだ。若干中学生で闘いの世界へと身を投じたのだ。

聡 「俺も・・・勇者つてのになつたのかな・・・??」

グレンラガン 『ああ。そつだ、聞け聡！！俺達のドリルは万物を貫く！！俺達は全てを貫くドリル勇者だ！！』

聡 「ああ！！」

芽生え始める聡とラガンの友情。今、ここに第五の勇者が誕生したのだ。その勇姿を黄昏の空に溶け込ませる。雄々しく、勇ましく・・・。

つづく

次回予告

グレンラガンの力を得た聡。同時にラガンが田井中家に居候することとなった。律はそんな聡を強く心配する。これに対し聡は、

半端な覚悟では無いことを主張する。

別の日。俊と梓がデートする中、新たな変種タイプのBLWが出現。俊はケータイで勇士朗に助けを求めながら梓を連れて逃げる。それと同時に、聡とその友人達の前にも別のBLWが出現。聡はラガンを呼び出し二度目の闘いに身を投じるのだった。

次回、新生太陽の勇者 ファイバード・サーガ 第35話 「

闘う”少年（聡）」

守る存在と力があるからこそ・・・。

第34話 「爆誕!! グレンラガン」 (後書き)

五体目の勇者(番外勇者ともいうべきか?) グレンラガン、大
幅なアレンジを加えて登場させちゃいました!

以前あった、読者の方からのリクエストに答えるべく登場させま
した。いかがでしたでしょうか?感想・意見お待ちしております。

第35話 「闘う」少年（聡）

田井中家。グレンラガンが爆誕して、田井中家に新たな居候が加わった。ラガンが住むこととなったのだ。

無論、ラガンの大きさに家には入れないのだが（入れたとしても床板の底が抜ける危険性もある）、家の庭に居住するようだ。

この事にロボット大好きな勝汰がじっとしている訳がなく、大はしゃぎする。

勝汰 「すっげー！！聡兄ちゃんすっげー！！すっげー！！わーい！！！！」

聡 「あーっもう解ったからおとなしくしろっの！」

勝汰 「だって、家にロボットが住むことになったんだよ！！すげーよー！！」

ラガン 『わははははは！！元気がいい少年だ！ちなみに俺の名はラガンだ！覚えとけよ！！』

勝汰 「うん！よろしくラガン！！」

するとラガンは早速食料を催促し始めた。

ラガン 「ところで飯はないのか?!」

聡 「え?!飯?!つて・・・いったい何食うんだよ?!」

ラガン 「何だっついていい!!この惑星の食料を食っみたいんだ!!」

勝汰 「じゃー、ねーちゃんの作るハンバーグ食べてみなよ!うまいぜ〜!」

ラガン 「じゃーいただくかー!!」

勝汰 「おー!!」

そして、律が帰宅し、夕食の準備を始める。だが、今日はハンバーグではなくカレーを作るつもりでいた。

律 「ええ?!今日はハンバーグの具材はないぞ?!カレーだぞ。」

勝汰 「ええ〜。ラガンにハンバーグ作るって言っちゃっター!」

律 「ハンバーグはまた今度な!」

聡 「別にラガンにしてみたら、地球の食料は何でも珍しいんだからカレーだっついていいだろ?」

勝汰 「そっかー!それもそーだー!」

聡 「お前ってやつは……。」

そしてラガンは初めて地球の食料を食う。律が差し出したカレーにがつつくラガン。

ラガン 『おーおー！うめー！！これがカレーってやつか！！』

余りにももの食いつぶりに姉弟そろって啞然としてしまう。勝汰は満面の笑みでその光景を見ている。

律 「なんつー食いつぶり！」

聡 「てか、お前、ロボットの分際でカレーなんかよく食うな……。」

ラガン 『俺は、金属エネルギー“生命体”だ！！れっきとした生物だ！！飯も食うさ！！』

律 （ん？？じゃあ、唯ん家のエクスカイザーはどうしてるんだ？やっぱクルマだからガソリンなのか？？まーそんなことは置いといてと……。）

ふと律の脳裏に疑問が過ぎったが、あえて言わなかった。それよりも、自分の弟が闘いの運命に飛び込んでいったことに不安を感じていた。

ラガン 『カレーさいごー！！』

勝汰 「さいごー！！あははははー！」

律 「聡、玄関の外行くぞ。」

聡 「え？あ、ああ。」

律 「勝汰はラガンと遊んでな。」

勝汰 「うん！」

ラガンと勝汰が戯れているうちに律は聡を居間誘い、心中の話を持ちかけた。

律 「聡・・・あなた、本当にいいの？」

聡 「なんだよ、突然？」

律 「アレらと闘う意味が解ってるの？」

いつになく真剣な律。聡は姉の心境に察しがつく。

聡 「実の弟が闘うコトになって心配なんだろ？わかってるよ・・・。」

律 「解ってない！！」

聡 「！！」

急に大きな声を叫ぶ律。思わずビクつとなる聡。

律 「・・・私さ・・・友達があんな感じでロボットになって戦う姿を何度か見てきてる。ファイバードって言うんだけど・・・」

。テレビでも何回も見たことあるだろ？胸に炎の翼があるロボットだよ……。」

聡 「え?!あれって、ねーちゃんの友達なのか?!」

律 「まあな。命の恩人でもあるよ……あのファイバードがいなかったら今頃私は遺影になってたな……。」

聡 「ねーちゃん……。」

律 「でも、あの怪物たちと闘うのは本当に命がけなんだ。確かにファイバードは強いけど、その最中危険な目に何度もあつてきてる。実際にあんたも危険な目にあつた……正直つらいんだ。弟の苦しむ叫びを聞くのは……それにまだあんたは中学生なんだぞ?」

聡 「……。」

そして沈黙が続く。庭の方からは、勝汰とラガンの会話が聞こえる。しばらくの後に律が沈黙を破った。

律 「生半可な覚悟や、ただカッコつけたい一心でなるならやめな!悪いことは言わない!」

姉として弟を思う故に強く言い放つ律。だが、聡は想いに半端な気持ちはないことを主張した。

聡 「違う!俺は本気でねーちゃんと蓮兄ちゃんを助けたかった!!!それにラガンは、その時に芽生えた俺の勇気を汲んでくれたんだ!!!俺は闘う!!!」

律 「本気でそう言っているのか？」

聡 「ああー！確かに攻撃を受けた時はぶっちゃけ痛かったけど、少し怖かったけど・・・ねーちゃんや蓮兄ちゃんが危険な目に会うほうがずっと嫌だったー！」

律 「聡・・・あなたは本当に闘う方へ行くんだな？」

聡 「ああー！」

弟の眼差しは燃え滾るような瞳だった。律は不安な想いを懐きつつもその熱き想いを半ば了承する。

律 「・・・聡が、そこまでいうなら・・・もう何も言わない。けど・・・。」

聡 「けど・・・なんだよ？」

律 「死んだら許さないからなー！」

聡 「おうー!ー！」

夕闇の空の下、姉弟は固く約束を交わした。

別の日。この日、ついに勇士朗の家に漣が遊びにやってくる事となっていた。

勇士朗は先日までに部屋の掃除を済ませ、いつでも招き入れる体勢でいた。

勇士朗 「ついに、澪ちゃんが俺の家にやってくるのかぁ……」。

思いはせる中、澪が玄関前に訪れた。玄関のチャイムが鳴り、勇士朗は走って階段を下りる。だが、ワントンプ早く、香澄がドアを開けていた。

香澄 「いらっしやい！澪ちゃん！」

澪 「香澄先輩、お邪魔します！」

香澄 「そんじゃーあたしの部屋においで！」

澪 「はい！」

勇士朗 （なんでそーなる?!）

せっかく気合を入れてやったはずの掃除が半分無意味と化する。すると、澪は勇士朗を逆にさそってきた。

澪 「おはよう！勇士朗君！勇士朗君もベース……やってみない？」

勇士朗 「え?!いいの？」

澪 「うん！一緒に……しよ？」

勇士朗 「う、うん!!」

勇士朗の脳内で恥しがつて言った漣の言葉が、違うアクセントに想像される。思わずファイバードは突っ込んだ。

ファイバード (勇士朗!!何を想像しているんだ!!勇者たるものが不謹慎だぞ!!)

勇士朗 (う……しょ、しょうがないだろ!俺だってイチ男子高校生なんだから!!)

漣 「勇士朗君?」

勇士朗 「あ、うん、じゃあ教えてもらおっかな!!」

香澄 (このエロガキ……変な想像したな?)

姉はすでに弟の脳内を見抜いていた。

部屋では早速ベースの練習が始まる。内容はセミプロ級のものばかりで勇士朗はチンパンカンパンになってしまう。

勇士朗 (……わけわからん!!)

香澄 「……それでここんとこのフレーズは……」

香澄が手本を見せながらベースを弾いていく。漣もそれに倣って引いていく。

やはり漣は上手い。間近で見させてもらうとまた違った感覚に

見舞われる。

勇士朗 (こうしてみるとやっぱりすげーや……。)

冷静に考えてみれば、香澄がこっちに滞在できる日は限られている。その限られた時間を湊はスキルアップの為に提供してもらっているのだ。そう考えれるようになると自然にこの状況を受け入れられる。

その頃、奇しくも唯の部屋では唯が光にギターを教えていた。

唯 「でね?このコードが……。」

唯に直接手で触れてもらいながらギー太の弦を動かしてみる。

光 「うぐぐ……む、難しい……。」

唯 「そうかな?やっぱりきつい?」

光 「指がちよっとね……。でもそれを思うと唯ちゃんはスゲーなってるよ。」

唯 「えへへ……。でも私だって最初からできたわけじゃないよ……。きつと光君もできるよ。」

光 「そう?へへ……。」

恥ずかしそうにかつ嬉しそうに答える唯。そのまま教えてもらい続ける光。柔らかな時間が二人に流れる。

唯 「それで次のコードがね……。」

光 「ふんふん……うぐ。」

指が突っ張る。やはり一筋縄ではいかない。しばらくして勇士朗もこの二人のように教えてもらおうようになる。

漣 「で……この指はこう……。」

勇士朗 「う、うん……。」

二人の指が重なる。この時点で二人とも赤くなっていた。香澄がからかう。

香澄 「うーん……絵になるわ。いい歌詞浮かびそう……っていかお似合いよ！お二人さん」

勇士朗&漣 「……！」

さらに赤くなって絶句する。

勇士朗 「も、もう！！からかうなよな！！」

香澄 「照れない、照れない！」

カラカラと笑う香澄。赤くして内心照れまくる二人。さらに香澄は、余計な気遣いで部屋を出て行ってしまふ。

二人つきりとなった勇士朗と漣。二人っきりのシチュエーションは以前あったが、一つの部屋の空間で二人になるのは初めてだっ

た。

漣 「ゆ、勇士朗君のお姉さんて、気さくで明るい人なんだね。き、きつといいアーティストになれるよ……。」

勇士朗 「そ、そうかなあ……??？」

漣 「そうだよ……あ……!あのさ……夏休みの最後にある花火大会……みんなで行かない?」

勇士朗 「い、いいね!!みんなで行こうか!!」

漣 「うん!」

8月末に高田橋で開催される花火大会に行くことを提案する。夏休みのラストを飾る大きなイベントだ。桜ヶ丘から距離は少し離れるが、自転車ですべて行けばさほど遠い距離ではない。

その事を俊と梓も考えていた。この前のカラオケ以降、初の付き合っ以前の仮デートだ。

俊 「今度みんな花火大会いこうぜ?確か今月の終わりだったよな?」

梓 「花火大会ですか……いいですね!花火大会!行きましょ!」

俊 「そうだな!また勇士朗達にも連絡しておくぜ。」

街中を歩く二人。梓のツインテールが歩くたびに揺れている。

俊 (それにしても梓・・・やっぱりこのヘアースタイル似合ってるな。カワイイ・・・。)

梓 「?どうかしましたか?」

俊 「あ、いや・・・ただその髪型梓らしいなってな・・・。」

梓 「そ、そうですか・・・。」

照れくさそうに言う梓。二人は楽器店へと足を運んだ。店内に入ると、ギター、ベース等の楽器がずらりと並ぶ。

俊 「すげー・・・こついつた店はほとんどこねーからなー。」

梓 「私は殆ど音楽と一緒に育ったみたいなものですから凄く身近に感じますよ。小4からギターやってたんで・・・。」

俊 「小4!?!そりやすげーや。」

すると梓が、目の前にあったギターに釘付けになる。

梓 「わあ〜・・・コンペライン入りの73年モノのムスタング・・・かわいくって目立つなあ・・・。」

ギターにときめいている姿はいいが、専門用語が飛び出しついでいけない。

俊 (うん!わからん!!俺からしてみればかわいいというよ

りカツコイイとしか見えん!!だが、こんな共感性の無いことを言
えば女の子は傷つく……。(

俊は共感性を重視する。

俊 「調度梓が使ってるギターと同系なんだよね?このギター!」

┌

梓 「そうですね。ただこっちの方が私が使っているギターの
先代のギターでプレミアがありますから……。」

俊 「確かに値段も半端ないな……。」

ズドオオオオオオオオ

梓 「なに?!」

俊 「やれやれ……おいでなすつたかよ?!」

店の外で轟音が響く。すると、芋虫の身体が持ち上がったよう
な身体に、ムチ状の手が生えた両腕が
着いているタイプのBLW 09が出現。相変わらずの頭部と肌色
の皮膚をしている。

BLW 09 「クケキヤカカカアア!!」

ヒュヒュフオオンッ!!

ドオドオドオドオオオオオ!!

△手を振るい、建造物を粉碎して前進する。外に出る俊と梓。

俊 「ちっ！！こうなったら・・・！！行こう！！梓！！」

梓 「はいっ！！」

梓の手を引っ張って走り出す俊。もう一方の腕でケータイで勇士朗に電話をかけた。

澪が勇士朗にコードを教える中、俊からの着信が勇士朗に入る。

澪 「それで、次のコードが・・・。」

）

勇士朗 「あ！澪ちゃん、ちよっとごめん・・・もしもし。」

俊 「勇士朗！！今、梓と走って逃げてる最中なんだけどな、街に例の生体兵器が現れやがった！！大至急ぶっ潰してくれ！！場所は国道近くの楽器店付近だ！！」

俊の声は息を若干切らしているようにも聞こえた。

勇士朗 「マジかよ？！わかった！！すぐに行く！！」

バツと立ち上がって澪に事情を話す。

澪 「何かあったの？」

勇士朗 「今、俊から電話があって、街に生体兵器の怪物が出

たらしい！！梓ちゃんも一緒にいるみたいだ！！」

澪 「梓が?!」

勇士朗 「行ってくる!!!」

澪 「あ!!!」

走って家を飛び出す勇士朗。そのただならぬ勇士朗に察する香澄。降りてきた澪に香澄は大胆な発言をする。

香澄 「あの様子・・・ひよつとして怪物でも出たのか？澪ちゃん!!!アタシのクルマに乗って!!!追いかけるわよ!!!弟の戦う姿をこの目で見ておきたいの!!!」

澪 「え?!ちよつと香澄先輩!!!」

香澄が澪を乗せてクルマを出すと、クルマと同じスピードで走っていく勇士朗が眼中に入る。

香澄 「ええ?!」

澪 「あれ、勇士朗君です!!!追ってください!!!」

香澄 「お、OK!!!それにしても、実の弟があそこまで人外になつちゃうなんて・・・。」

さらに、別の箇所ではジェイテッカーが以前駆逐したBLW 03の変異体も出現。偶然にもその現場に、連れ達と遊んでいた聡が居合わせていた。

BLW 03変種 「クキヤケカカカッ!!」

聡 「またかよ……!!」

春川 琢磨 「アレがひょっとして、テレビのニュースに出てくるやつか?！」

鈴木 當哉 「マジで見るとスゲー!!」

聡は興奮する友人、琢磨と當哉に危険を促す。この中で唯一BLWの恐怖を味わった事がある故に故に……。

聡 「感動してる場合じゃないぜ!!早く逃げるぞ!!あいつはスゲー危険だ!!」

琢磨&當哉 「お、おう!!」

聡は、まだラガンのコトを話してはいなかった。走って連れ達と逃げる。だが、後を引くような感じに見舞われる。

聡 (俺は今、闘う力を得たんだ!!なんで逃げている?!今この場をどうにかできるのは俺しかいないんだ!!)

立ち止まって拳をぎゅっと握る聡。

琢磨 「聡?!何急に立ち止まってんだ?!」

聡 「……俺は、闘う!!先に逃げてくれ!!」

聡 「てやあああー!!」

グレンの口が開き、その中へと聡が飛び込む。

そしてラガンは脚をドリルモードにしてグレンの頭上目掛けて飛ぶ。

ラガン 『とおおっ!!』

ラガンとグレンが合体。強靱な両腕と両脚が形成され、巨大化。合体したラガンの頭部に三日月上の飾りが浮かび上がる。

ラガン 『フォームアアアップ!!』

コックピットの空間では、周囲の映像が映し出され、聡がグレンラガンと同期し一体となる。

聡 「グレン、ブレイブ・トレース!!」

グレンラガン 『ドリル度胸合体、グレンラガンッ!!!!』

當哉 「まじかよ……聡のやつ!!?」

琢磨 「変形……いや、合体しちまったよ……。」

グレンラガン 『さあ!!聡!!奴に一泡吹かせるぜ!!』

聡 「おう!!だああああ!!!!」

唸るグレンラガンの拳。聡の意思と共に変種タイプのBLW
03に炸裂する。

ドゴガアアアアッ！！

持ちこたえたBLW 03変種も四本の腕で掌てい突きを繰り
出す。

ドオドオドオガアアアアッ！！

聡 「ぐうっ！！！！」

BLW 03変種 「キュカカウッ！！」

ザダギヤアッ！！

五指を突き立てての一撃が入る。

聡 「がああ！！くっそ！！このヤロオオ！！」

ズドオガアアアアッ！！

怒りの蹴りをBLW 03変種に直撃させる聡。続けて回し蹴
りを繰り出しBLW 03変種を吹っ飛ばす。

ヒュオア・・・グドオガアアアッ！！！！

BLW 03変種 「キュクアアアッ！！！！」

地面に倒れこむが同時に建造物も破壊される。すると不気味な動きでBLW 03変種は飛び上がる。上空から襲い掛かるBLW 03。

ドオズドオオオオオオツツ!!!

聡 「ぐあああああ!!」

押し潰すかのように被い被る。4本の腕で何度も攻撃をしまくる。

ドガンツ、ズドオガアン!! ドゴガン、ガガガンツ!!!

グレンラガン 『ぐう・・・どうした?!先日も調子が悪いぞ?!!』

まだ闘いに身を投じて致命的に日が浅い。戦闘パターンの違いから苦戦を強いられるのも無理は無かった。すると、グレンラガン自身が戦闘を引き受ける。

聡 「だってよ・・・動きが先日の奴と別物なんだよ!!」

グレンラガン 『しかたねーな。俺が手本を見せるぜ!!身体で感じな!!』

聡 「へ??？」

眼光が光り、グレンラガンは一気に上空へとBLW 03変種を蹴り飛ばす。

ドオオオオオオオオツツ！！！！

身体を起こすと、気合と共にドリライズモードを発動させる。

グレンラガン 『はああつつつ！！！！』

ツ！！！！
ガガガガガキイイイインツ！！ ギユウイイイイン

右手首がドリルに変形し、各箇所からドリルが飛び出す。そして倒れこんだBLW 03変種に向かって前方宙返りをしながら突っ込む。背中からBLW 03変種に落ちる。

ドシユオツ・・・・・・ズドオブシヤアアアアンツツ

！！！！

BLW 03変種 「グキヨゲゲゲツ！！！！」

ジユギユズドオドオオオオツ！！！！

BLW 03変種 「グビビビビビ！！！！」

背中のだリルが突き刺さって回りだす。ピンクの血が吹き出る。グレンラガンはその状態から身体を起こし、ローキックでBLW 03の巨体を吹っ飛ばす。

ドオガアアアアツ！！

グレンラガンは底からジャンプし、吹っ飛ばされて地面に横たわるBLW 03変種に、膝爆弾を食らわした。ドリルが突き出て

いる分、相当のダメージが加わる。

ドアアツ……ズブシュドオオオ……!

BLW 03変種 「キャゴオオオツツ……!」

圧倒するグレンラガン。この俊敏かつ、激しい動きに聡は違和感を覚えずにはいられなかった。

聡 「これが……本来のグレンラガンの力……闘い方……
・凄すぎる……!」

グレンラガン 「これぐらいえげつなく、完膚なきまでに叩きのめさなければダメだ……! やられる前にやる……! やられる前にやれ……!」

聡 「やられる前に……やる……。」

一方で、勇士朗は街を駆けていた。エネルギーを帯びながら街を走り抜ける。

やがて、暴れるBLW 09の姿が見えてきた。

勇士朗 「あれか……!」

振るわれるムチにより、瓦礫が吹っ飛ばされている。更に勇士朗は加速する。

便乗するように現れたBLW 01が、梓をかばう俊に迫る。既に背後は瓦礫の山と化しており完全に逃げ道を奪われていた。

梓 「しゅ、俊さん……!!」

俊 「くそッ……梓だけは……!!」

つづく

次回予告

グレンラガン自身に闘う行動が委ねられる。その力は凄まじいものを物語る。爆発的な力でBLWを圧倒する。一方で、BLW 01が梓と俊を窮地に追い込む。果敢にバール一本で立ち向かう俊。勇士朗はそこへ駆けつけ、一蹴りでコトを蹴散らし、俊達を逃がした。

そして現場へ駆けつけた姉と澗の前で勇士朗はファイバードへと成るのだった。

次回、新生太陽の勇者 ファイバード・サーガ 第36話 「
眼前のサン・ブラスター」

香澄の瞳に映るは熱き弟の魂か……。

第36話 「眼前のサン・プラスター」

BLW 03 変種は、痙攣を起こしながら立ち上がる。ぼたぼたと唾液をたらしながらグレンラガンを見る。

BLW 03 「クケキユクウ……。」

グレンラガン 「俺の本気はここからだ。いくぜ！！ゲテモノ大将！！」

地面を蹴り飛ばしてBLW 03 変種に突っ込む。右腕のグレンドリルが炸裂する。

シュダアンツ……ズディガアアアアツ！！

胸部に直撃。そして刺さったままドリルが高速回転。小刻みに肉を抉り取られた肉片が飛び散る。

ギュジュイイイイイイッツ！！！！

BLW 03 変種 「クケキョコカカカアアアア！！！！」

断末魔をお構い無しにズボツと抜き取ると、ドリルと鉄拳の連続の殴打を繰り返す。

グレンラガン 『いいか！？聡！！これが俺の闘い方だ！！！！』

聡 「はあ、はあ、はあ……す、すげーぜ！！身体に感じる感覚が別次元だ！！！！」

グレンラガン 『躊躇するべからず！！完膚なきまでに攻めろ！！！！』

聡 「はあ……はあ……はあ……完膚なきまでに……！！！！」

そして、必殺技を繰り出す体勢へと移行した。

グレンラガン 『止めといくぜ！！グレンドリル、チャアアアア
アジアアアアアップツツ！！！！』

グレンドリルが更に高速で回転し始め、炎のようなエネルギーを帯びていく。

グレンラガン 『俺のドリルが廻って唸る！！！！』

聡 「こ、この街を守れと唸り叫ぶ！！！！」

グレンドリルが激しいエネルギーを帯びながら完全にチャージアップされる。

グレンラガン 『爆熱必殺……！！！！』

ドオアアアアンツ！！

聡 「けどよ……。」

グレンラガン 『もし納得がいかなければ、夏休みはどっかにもって特訓だ!!聡!!』

聡 「特訓!?!」

グレンラガン 『そうだ!!そうすれば俺の動きができるようになる!!』

聡 「特訓か……!!」

その頃、俊は梓をかばいながら窮地に立たされていた。BLW 01がジリジリと迫る。

梓 「俊さん……!!」

梓は怯えていた。いくら破壊生命体の襲来に遭遇してきた身とは言えどここまでの状況になるとそうはいかなかった。目と鼻の先に自分を捕食しようと、パクパク顎を開閉させているBLW 01がいるのだ。ぎゅっと俊の服を握り締める。

俊 「クソツ……ん?!」

ふと俊が足元に目をやるとボールが落ちていた。背後の瓦礫の周囲にはクルマや油が散乱している。どうやら整備工場だったようだ。

俊 「梓、下がれ!!」

梓 「え?!」

バツとボールを取ると俊はBLW 01に向かって構える。

俊 「……梓だけでも逃げる!!」

梓 「そんな!!できません!!」

俊 「……下がれ!!梓を死なせたくねえ!!」

梓 「あ!!」

梓を振りほどき、ボールでBLW 01に殴りかかる。無論威力は知れている。だが何もしないよりはましだった。二人同時に食べられてしまっても、結局は梓が死ぬ。ならばその前に行動する。決死の想いだった。

俊 「おおおお!!」

ドオガアツ!!ドオオオ!!バキヤアツ!!

BLW 01 「クケケケ?!」

俊 「こんちくしょーがああああ!!」

ひたすらがむしゃらにボールで殴る俊。だが、次の瞬間、口の先で体当たりされ俊が吹っ飛ぶ。

ドオンッ！！

俊 「ごがああっ……！！！」

梓 「俊さん！！！」

吹っ飛ばされ瓦礫に背中からぶつかる俊。梓が駆け寄り、思わず俊を抱きしめる。

梓 「俊さん……！！！」

俊 「あ、あずさ……！！！」

俊をぎゅっと抱きしめる梓の体は温かった。だが震えていた。そっと梓の手に触れる俊。

俊 「梓……逃げろって……。」

梓 「俊さんを置いて逃げるなんてできません！！見捨てることなんてできません！！！」

ぎゅっと目を瞑る梓。同時に俊の体をぎゅっと抱きしめる。

俊 「梓……！！！」

容赦なく迫るBLW 01。大口が開く。二人は喰われたと思っ

た。
勇士朗 「せやあああああ！！！」

キュオンツ・・・！！ ドオゴガアアアアツツ！！

BLW 01 「クケエエエエエ？？」

ドオオオオオンツ！！

その時だった。勇士郎が光を纏いながら突っ込み、跳び蹴りで
BLW 01を吹っ飛ばした。

勇士郎 「大丈夫か？！！俊・・・って・・・スマン！！
とりこんでたのか？！」

俊と梓は一瞬ポカンとなる。そして自分達が抱き合っているの
を確認。急いで顔を赤くして離れた。

俊&梓 「え・・・？？？・・・ああああああ！！
！？」

勇士郎 「その調子なら大丈夫そうだな！」

俊 「大丈夫なもんかよ！！てか、こんな状況で取り込めれね
ーっつーの！！俺は吹っ飛ばされたんだぜ！！」

梓 「ええと・・・私はその・・・。」

梓は自分のしてしまった事を恥らいながらテンパッている。

勇士郎 「じゃあ、下がってな。」

俊 「ああ。後は頼むぜ！勇士朗！！」

勇士朗 「ああ！！」

俊は梓の手を取りその場を後にしようとする。すると梓は急に謝り始めた。

梓 「あ、あの、俊さん、さっきはゴメンなさい・・・その、軽率に抱き締めてしまつて。」

俊 「い、いや、いいんだつ・・・今は逃げようぜ！」

梓 「はい！」

二人は駆け出してその場を後にする。それとほぼ同時に香澄と漣が到着する。漣が周囲に目をやると、勇士朗の姿を確認する。その前方約200メートルの地点では、BLW 09が破壊行為をしながら街を進行していた。

漣 「あ！いた！香澄先輩！勇士朗君、あそこにいます！！」

香澄 「勇士朗・・・なんか光纏つてる・・・。」

その時、勇士朗はファイアージェットを召喚した。

勇士朗 「ファイアー・・・ジェエエツトツツ！！！！」

光りを上空に放ち、ファイアージェットが勇士朗を目掛けて飛んで来る。

香澄 「!!!」

機首部分が折れ、腕が持ち上がり、次々と各箇所が変形していく。ファイバードの姿になり、地上へと着地する。

勇士朗 「はあああッ……!!!」

シユダツ……シユオツ……ギユオオオオオオ……

気合を入れ、低空ダツシユする勇士朗。フェニックスのオーラが発生し、そのまま球体エネルギーとなってファイバードの胸に飛び込む。

香澄 「……!!!」

両眼が光り、そこから腕をかざしてフレイム・ブレスターを呼び出す。

ファイバード 『フレイム・ブレスター!!!』

天空へと撃ちだされたエネルギーが消えた先からフレイム・ブレスターが飛来。ファイバードと合体する。頭部に武装ユニットが装備され、フェイスガードが装備される。

ファイバード 『フォーム・アアアアップッ!!!』

両肩のアーマーが左右に倒れ、フレイムキャノンが背部へと置まれる。そして中央のレンズ部にフェニックスのエンブレムが浮か

ぶ。

ファイバード 『武装合体、ファイッツバアアアドッツ!!』

香澄 「あれが・・・ファイバード・・・それでもって私の弟・・・。」

澪 「あれが・・・いつも私達を助けてくれる勇士朗君・・・いえ、ファイバードです！香澄先輩っ!!」

香澄 「ふっ・・・カッコいいじゃん・・・勇士朗。お手並み拝見といこうじゃない・・・。」

腕を組みながら不敵にニヤつく香澄。澪も視線をファイバードに向ける。

ファイバード 『いくぜっ!!』

ゴオオオオッ!!

フットバーニアで低空を加速していくファイバード。一気にBLW 09の側面目掛けて突っ込んでいく。

BLW 09 「?!!!」

ファイバード 『だああああ!!!!』

ドオゴガアアアッ!!!!

タックルがBLW 09を吹っ飛ばす。一気に吹っ飛ばすBLW 09。

ファイバード 『俺が来た以上、好き勝手はやらせないぜ!』

フォツと起き上がるBLW 09。ムチを止める事無くヒュンヒュンさせている。

BLW 09 「ケケカカアアッ!」

一声叫び、BLW 09は、触手をファイバードに向かって伸ばす。

ビュヒュドオオオッ!!

ファイバード 『でやあッ!』

空中へと跳躍してかわす。だが、2本のムチは上へと持ち上がり、跳んだファイバードに直撃する。

フュフオオアアアン・・・ドオゴガアアアッ!!

ファイバード 『・・・っ!』

地上へと落下したファイバードに迫るBLW 09。高速でうごめくムチがファイバードに襲い掛かる。

ビュフュフュフュフュフュンッッ・・・ドドドドド

ドドドドドガガアアアッ!!

ファイバード 『ぐはああああ!!』

立ち上がる猶予を与えずに縦横無尽に振るわれるムチ。ファイバードは、フットバーニアでその場を離脱する。

ドオオオツ!!

体勢を立て直すファイバード。だが次の瞬間、槍状に変化したムチがファイバードを襲う。

フウドオドオガアアツツ!!

ファイバード 『ぐがあああツ!!』

衝撃で後方にスライドするファイバード。尚もBLW 09は迫る。

フウドオドオガアアツ!! ドオドオドオガア!! フユフユフユフユンツツツ!!

ドオガガガガドドドドドドオオオツツ!!

ファイバード 『がああああ・・・つく!!』

ガガツ!!

ファイバードは、ムチの一瞬の動きを捉えて、両方のムチを鷲掴みにした。そして近距離から両膝のフレアミサイルを撃ち出す。

ファイバード 『フレアミサイルツ!!!!』

シユドオドオドオオオオオオオオオツツ！！！！

ギヤドオドオドオドオドオゴオオオンツ！！！！

BLW 09 「キユゴゴコオオツツ！！！！」

爆炎に包まれるBLW 09。ファイバードはムチを握り締め
たままフレイムキャノンを展開させて撃つ。

ファイバード 『フレイムキャノンツ！！』

ガキヤインツ・・・ヴィギユドオオ！！ ヴィギユドオ、

ヴィギユドオオツ！！

ズズズドオオオオツツ！！

その光景を香澄と漣が見守る。

香澄 「途中までハラハラさせてくれたけど、何だかんだで優
勢になってるじゃん。」

漣 「多分、油断していただけです。勇士朗君は負けませんか
ら！！」

その時、まだ周囲にいたBLW 01が数体が背後から香澄た
ちに迫る。漣がその姿に気づいた。

漣 「か、香澄先輩・・・！！」

香澄 「え?!うつ・・・なんだこいつら?!」

BLW 01群 「クケカカアア・・・」

香澄 「早く!!クルマ乗って!!逃げるよ!!」

漣 「だめです!!前からも・・・!!」

5体のBLW 01に囲まれる香澄と漣。その時、ファイバードに向かって漣が叫ぶ。無論、距離が離れている為、聞こえる可能性は低かった。

漣 「勇士朗くううん!!」

何かを直感したファイバードが、感じた方角へ首を向ける。するとそこにはBLW 01に囲まれた漣と姉の姿があった。

ファイバード 『な!?!なんで二人がここに?!!くっ!!』

キュアアア・・・ヴィギュドオオオオツ!!!!

ズドオシャアアアアアアツ!!!!

フレイムキャノンのチャージショットをBLW・09に見舞うと、ファイバードは急いで漣達の許へと駆けつける。

ギュゴオツ・・・

ファイバード 『二人とも伏せて!!』

漣 「勇士朗君！！」

ファイバード 『ダイナバスターッ！！』

ディガガガガガガガガアアアアアッ！！　ダダダダダ
ダガガガガアアアアアッ！！

ドオドオドオドオドオドオギャツガガアッ！！

ダイナバスターによつて瞬時にBLW 01の群れが駆逐される。

ファイバード 『二人とも怪我は？！』

香澄 「ああー、大丈夫ー！あたしら二人とも無事だよ！さん
きゅー！！」

漣 （声・・・届いたのかな？）

ファイバード 『でもどうしてわざわざこんな所へ・・・？！』

香澄 「どうしてって・・・闘う弟の姿が見たくってな・・・。

鼻の頭をかきながら照れくさそうにする香澄。

ファイバード 『姉さん・・・。』

漣 「私も急に連れてこられちゃった・・・てへっ。」

軽く舌をだして恥ずかしそうにする漣。

香澄 「な、なによー。まるであたしが悪いみたいな言い方じやんつ。」

漣 「あ、ごめんなさい……。」

香澄 「あ、いいの、いいのっ」

香澄は、漣の頭を撫でながら言った。撫でられた漣はちょっとだけ照れていた。

漣 「……。」

BLW 09 「カアアアッ!」

その時、後方で吹っ飛ばされたBLW 09が咆哮する。既にジリジリと迫っていた。だがチャージショットが直撃された部分は、陥没して焼け爛れていた。

香澄 「!」

漣 「く、来る!」

ファイバードは、バツと腕を横へかざす。額が輝きだした。

ファイバード 『フレイム・チャアアアアジアアアップッ
ッ!……!』

後日。再び東京へと戻る事となった香澄。

母 「それじゃ、歌手活動がんばりなさい！あんたなら大丈夫だから！」

香澄 「うん。ありがとう、お母さん。」

母 「東京の方でも、最近よく出る変な怪物が出るっていうからね。気をつけるんだよ。」

勇士朗 「じゃあな、姉さん。」

香澄 「おう！こっちに帰ってきて色々あったけど、特にあなたには驚かされたわ。色んな意味でね。」

勇士朗 「だろうな……。」

母 「？」

香澄 「ま……あんたも元気そうよかった。澁ちゃんと仲良くな！」

勇士朗 「あ！ばか！！！」

母 「澁ちゃん?!誰だい?!あんた、彼女できたなら紹介くらいしなさい!!！」

勇士朗 「だああ!!彼女じゃねーよ!!友達だ!!！」

香澄 「じゃーねー！」

勇士朗 「あ！おい！！！」

母 「勇士朗！！紹介しな！！！」

勇士朗 「だからあ！！！」

戻る道中。クルマを走らせる香澄。香澄の中でファイバードの戦う姿がフラッシュバックする。

香澄 （あれが、闘っている時の勇士朗か・・・なんか歌にしなくなってきた・・・おおざっぱだけど歌詞っぽい言葉がどんどん浮かぶ・・・帰ったら歌詞作りするか！！それに、漣ちゃんとの関係も進展するといいいな！）

開けたウィンドウから吹き込む風に髪がなびく中、香澄は、思いはせながらクルマを飛ばした。

夏休みも終わる頃、相模川にかかる高田橋で花火大会が行なわれた。多くの見物客でひしめく中、場所を確保した勇士朗達が打ち上げられる花火を見続ける。勇士朗、蓮、光、俊、涼、漣、律、唯、梓、姫子の10人それぞれがじんべえと浴衣姿で来ていた。

梓 「綺麗です・・・。」

俊 「本当、綺麗だ。」

ふと梓の横顔を見る俊。浴衣がさらに梓の可愛さを引き立たせていた。

俊 (かわいいな……。)

梓もふと俊を見た。

梓 「どうしました？」

俊 「あ、いや、浴衣似合ってるなって……。」

梓 「そ、そうですか？俊さんも似合ってますよ？じんべえ。」

俊 「そ、そっか……。」

この前のことを思い出し、お互いに照れくさくなる。その横では二組のカップルがイチャツク。

涼 「昔は花火の音が恐くて耳ふさいでたんだー。」

姫子 「そうだったの？もう、可愛いんだから。」

涼 「へへへ……でももう大丈夫。」

ドオオオンッ!!

その時、特大級の花火が鳴った。びくつとなる涼。

涼 「ふういっ!」

姫子 「……まだビビッてるじゃない！」

涼 「うう……。」「

姫子 「ふふ」「

涼を撫でながらよりそう姫子。隣では唯光カップルがバナナクレープにがつつく。

唯 「バナナクレープおいし〜。」「

光 「うんうん、うまいうまい!」「

唯が食べながら光を見た。光の頬についたホイップクリームに気づく。

唯 「ほっぺにクリームついてる……。ちゅ……。」「

光 「唯ちゃん……。」「

唯は光の頬についたホイップクリームを直接食べる。デレンとなる光。律が周囲を気にせず大胆行動する唯に突っ込む。

律 「唯!こんなところでキスするな!!!てかイチヤつきすぎだ!!!!」「

唯 「ほえ〜?取ってあげただけだもん!」「

律 「あのな……。」「

天然回答に呆れる律。その時横から蓮が律に声をかける。

蓮 「・・・なあ、律っちゃん。」

律 「ん？どうした？」

蓮はいつになく照れくさそうに言った。

蓮 「なんだ、その、カチューシャない方が、かわいいっつか、似合ってるぜ？」

律は赤面しながらどう答えていいかわからなくなる。つい強がって答えてしまう。

律 「な、何言ってるんだよ蓮！た、たまたま忘れただけだ！」

蓮 「なんだよその言い方ー。」

律 「どんな反応すりゃいーんだよ、もうー！」

律も梓同様、この前の出来事が頭に過ぎってしまふ。ただ素直になれなかった。

漣 「ははは・・・素直じゃないな律は。でもホント、今までのが嘘みたいな時間だ・・・。」

勇士朗 「そうだね・・・闘いを忘れることができる。」

漣 「・・・早く平和な日々が来るといいね。」

勇士朗 「う、うん……それにしても……浴衣姿……
綺麗だよ、澪ちゃん。」

澪 「ふえ?! あ、ありがとう……。」

意を決して素直な気持ちを伝える勇士朗。真っ赤になる澪。澪も素直に伝える。

澪 「ゆ、勇士朗君もかっこいいよ。じんべえ……。」

勇士朗 「そ、そう? マジで?!」

澪 「うん……。」

二人して赤く固まる。その時、連発して打ち上げられる花火が緊張をほぐした。下に向けていた顔をすっと上げる二人。

ヒュヒュヒュウウドオドオドオオオン!! ドオド
オンドドドツドドドドン……

澪 「……………」

勇士朗 「……………」

次々と打ち出される花火。勇士朗と澪は、その光景を見続けた。その夜空の上空ではロコモライザーが飛んでいた。

舞人 「どう細さん? 空からの花火は?」

絀 「わぁ……とても綺麗! こんな素敵な空間をありがとう

！」

舞人 「俺とロコモライザーがいれば、お安い御用だよ！」

紬 「それにしても舞人君、じんべい似合ってるわ！」

今日の二人はあえて庶民的な格好をしていた。舞人は得意げに紬をほめる。

舞人 「でも、その浴衣姿はさらに増して綺麗さ！」

紬 「もう、舞人君たら！ふふ そうだ！手作りのデザート持ってきたんだ！よいしょー！」

紬が専用のバツクを持ち上げてふたを開ける。すると手作りのデザートが姿を見せた。

舞人 「すごい！！上手に作れてる！」

早速、紬はフォークで舞人の口にデザートを運んだ。

紬 「はい、あーん……。」

舞人 「うん……うまい！！！」

紬 「よかったあ！」

次に舞人は大胆な行動に出る。すつと顔を紬に近づける。

舞人 「紬さん……俺、もっと甘いのが欲しいよ。」

紬 「舞人君……ん……。」

自分の手を紬の手に重ね合わせて、顔を寄せる舞人。紬も舞人に顔を寄せる。唇を重ねてキスをする

二人。モニター越しに花火が打ち上げられ続ける。

一方、河川敷では、要とさわ子が寄り添いながら花火を見ている。勇も走り屋仲間達と共にホームコースの山から花火を見る。聡は連れ達と共に少し会場から離れた場所で花火を見ている……。それぞれがそれぞれの場所で花火を見る。夏が残暑を残しながら終わりに近づいていく。

だが、闘いは終わらない。元凶を叩くまでは……。

つづく

次回予告

学校が始まり、それぞれの高校最後の二学期が始まる。一方でM・P・D・BRAVEの吉崎はこれまでの事件のレポートをまとめる。その最中以前気にかけていたポイント、に新たな仮説が浮上する。一方で舞人は、これまでのデストリアン・BLWの事件で破壊された鉄道の修復状況を視察していた。

別の日。勇士朗はついに濁に想いを告げようとする。だがその矢先……。至最大最大の災害がひき起こる。次回、新生太陽の勇者ファイバード・サーガ 第37話 「潜めていたモノ」

人が生んだ元凶が姿を現す……。

第36話 「眼前のサン・プラスター」(後書き)

感想・ご意見、お待ちしております・・・。

第37話 「潜めていたモノ」

夏休みが終了し、各学校では新学期がはじまる。勇士朗達の学校は相変わらずむさ苦しい空気に満ちていた。女子達と縁のある者以外の他の生徒達は何のことはなかったが、軽音部メンバーと過ごすことが多かった勇士朗達は、激しすぎるギャップを感じていた。

蓮 「・・・何だこのギャップは・・・。」

光 「初日から唯ちゃんが恋しいぜ・・・。」

俊 「梓・・・。」

勇士朗 「澪ちゃん・・・。」

俊と勇士朗すらも教室内で想い人の名をこぼす。そうこうしている内に、担任の山田満がやってきた。教室内のだらけた空気が一気にシャキツとなる。何故なら教員そのものがヤザのようなオーラを放っているのだ。ちなみに、影のあだ名は「魔王山田」だった。

山田満 「おお・・・お前ら、夏休みはどうだった？女の子とのめぐり会いはありましたか？ははっ。俺もまー、学生時代色々やりましたっ。ま、んなことどーでもいいわ。宿題提出しろ・・・。忘れたやつはー・・・鉄拳・・・鉄拳・・・鉄拳・・・ははは先生が小学校の頃よくやってました。格ゲーの鉄拳。今でもシリーズ続いてるみたいですがー・・・。」

よくわからないタイミングでのジョークに教室では苦笑いがこもった笑いが起きる。

山田 「えー・・・ジョーダンは終わりだ。集めるぞ。」

皆が宿題を提出する中、一人のチャラ男な生徒がそうそう忘れる。青ざめた顔で申し出る。

クラスのチャラ男 「す、すみません・・・忘れました・・・。

」

山田 「何い・・・??？」

ガシィッ・・・

首根っこを無言で掴み、近くの便所へと連れて行く。

ガタアアアンツ！！ ドオゴガアアンツ！！

生徒一同 「・・・やべえ・・・ざわざわ・・・。」

怒鳴り声も交えて激しい音が響く。数分後。ポコポコになった姿で戻ってきた。

山田 「じゃー続きた。始業式前のHRはじめるぞー。えー世の中厳しいです。こんなの甘ちよらいモンです・・・。お前ら、覚えとけや。」

勇士朗 (相変わらずだな・・・。)

蓮 (おっかねー……)

光 (唯ちゃんたすけてー。)

俊 (恐るべし魔王!!)

対して桜高。さわ子が優しく生徒達に微笑みながらHRを行なう。

さわ子 「みなさんおはようございます。夏休みはいかがでしたか？それでは始業式前にHRをはじめます。夏休みの宿題を提出してください。」

唯 「あ……忘れてた!!」

姫子 「え、忘れちゃったの？」

唯 「うん……あははは……先生!!」

さわ子 「何？平沢さん。」

唯 「宿題、忘れちゃいました!」

和 「はあ……唯ったら……。」

さわ子 「もー仕方ないわねー。今週中までには出しなさい。」

唯 「はあいつ……ほっ……よかったあ〜。」

姫子 「もう、彼氏と遊びすぎてたんじゃないの?」

唯 「うっっ！でも、一応受験の方の勉強してたよ！！」

姫子 「ホントにいゝ？」

唯 「うん！」

一方、立川・M・P・D・BRAVE本部。吉崎がこれまでのデストリアン及びBLWの出現状況・事後処理記録をノートパソコンと睨めっこしながらまとめていた。

吉崎 「……………それにしても関東中狙われすぎじゃない？このデータ……………」

後ろから葉山が菓子を食いながら覗く。

葉山 「そっすよね……………。ここ最近は何より事後処理任務が多かったですけど……………ぼりんぼりん……………」

吉崎 「葉山！菓子を食うな！！」

葉山 「スンマセン！！」

吉崎 「まったくもう！！」

葉山 「それにしてもまた新たなロボットヒーローが現れるなんて……………」

吉崎 「その情報は報告されてるけど、警視総監は『新たな正義が現れたのだ。今はそっとしておくべきだ』とか言ってカタチ的

に黙認してたそうよ。確かにそつちの調査よりもBLWやデストリアンの調査の方が最優先されるべき事項だからね……。」

吉崎はカタカタとキーボードを打っていく。するとある点に気づく。

吉崎 「……ポイント や を避けるようにしてBLWが出現している……何故??」

これまでの出現ポイントを絞ってもポイント と の領域だけには現れていなかった。

葉山 「ひよつとして、まだ最初のデストリアンのいやくなエネルギーが漂ってるんですかね?」

吉崎 「……。」

無言で固まる吉崎。またアホな事を言ってしまったと思い、すぐに葉山は謝る。

葉山 「すみません!!憶測です!!」

だが、吉崎は次の瞬間全く逆の態度を示した。

吉崎 「あんだ、たまにはいい発想するじゃない!確かにそうかもしれない……ということはまだ……C 01は生きている……???!」

葉山 「でも、あれは10年以上前に駆逐したはずでしょう??!」

吉崎 「……でも10年以上も経過しているにもかかわらず、エリアを封鎖しているのも怪しいわ……。」

要 「その可能性……否定はできない！」

入室した要が言い放った。

吉崎&葉山 「隊長！」

歩きながら心中を話す要。

要 「……それに、俺は以前から薄々と思っていたが、デストリアンはポイント、あるいは を目指して地球に飛来しているんじゃないかと思っていたんだ。」

吉崎 「私も以前、薄っすらと思いました！！ですが、仮にそうだとしたら何の為に?！」

葉山 「あー!!もしかして合体とか?!!!」

要&吉崎 「?!!!」

要と吉崎は葉山の坎に凍りついた。

葉山 「え?あ……その……。」

吉崎 「本当、坎がすごいわ、今日のアンド。」

要 「仮にそうだとしたらまた新たな謎が嫌でも浮上するが……」

」。

現時点では仮説に過ぎない。しかしながら、葉山が言い放った可能性が妙な真実さをかもしだす。

反してBLWに関してのカンが外れたことを要自身が反省した。

要 「だが、BLWの件は当てが外れたみたいだ。埼玉に“クイン”が居るといふ仮説は俺の早合点だった。その後も東京や相模原に出現している……。」

吉崎 「隊長……ですが、みてください。」

吉崎がキーボードを操作し出現データの地図を出す。そのデータをみる要。すると東京都から手を伸ばすように出現していた。

要 「この出現状況は……?!」

吉崎 「見ての通り、東京都から触手を伸ばすかのように周囲の県に広がっています。もしかしたら東京都内に繁殖機能を持った個体がいるのかもしれない。」

葉山 「でも、組織の連中が、摘発間に地下に何体も放つてるんですよね？それなんじゃないですか？」

要 「確かにその個体達が出現していた可能性はある。だが、“クイン”の仕業による可能性も否定できない……。」

吉崎 「どちらともいえないけど、どちらの可能性を否定できない……。」

その日の午後。ジェイデッカーとレイバースが本部内で射撃演習を行っていた。日々の訓練で超AIの記憶データに感覚を沁みこませていくのだ。今回より、ガンレイバーの兵装はガンリボルバーから、エネギー・ガンに変わった。

ガンレイバーとショットレイバーがターゲットに向かって射撃する。

レイバース 『はあぁっ!!』

ビガアンツ!! ビガアンツ!! ビガアンツ!!

デイドオゴオオンツ、デイドオゴオオン、デイドオゴオオンツッ!!

それぞれの弾丸が移動するBLWを模した的へと命中する。続けてジェイデッカーがJバスターを構えて射撃する。吉崎が遠隔操作でセーフティ解除する。

吉崎 「Jバスター、アクティブ!!」

ジェイデッカー 『Jバスター、ロックオン!!』

ズドオオオオオツ!! ズドオオ、ズドオオ、ズドオオオオオツッ!!!

撃ち出されるビームがターゲットを粉碎する。

葉山 「すげー!!」

藤堂 「やはり、ビームエネルギーユニットにした甲斐があるなあ・・・弾丸の装填を気にする必要がなくなったから、恐らく戦闘の幅も比較的に広がっただろう。」

葉山 「とはいえ、デストリアンは日に日に強い固体になってきているようですよ、藤堂さん。」

藤堂 「話には聞いている。だから状況を更に見越して、」バスターを凌ぐ兵装を考案だ・・・。」

葉山 「マジスか?!」

藤堂 「ああ。」

要 「・・・更なる武装強化・・・。」

一方で舞人は、以前BLWによって破壊された旋風寺線の線路の復旧工事の視察に赴いていた。

舞人 「現在の復旧作業状況は？」

工事業者 「復旧率は約6割のところですかね。地下の空洞を塞ぐのに手間がかかりましたが。」

舞人 「地下の空洞・・・空洞は調査されたのか？」

作業員 「その件は県警と連携して調査したんですが、これ以

上は危険と判断され調査は中断。そのまま作業に移行しました。」

舞人 「そうか・・・現在、BLWが多発している。そのところの念押しは必要だ。」

作業員 「それにしても、本当嫌な世の中になったものです・・・おちおち寝てもらえませんよ。いつ怪物が出るか・・・。」

舞人 「・・・同感です。」

作業員 「早く何とかかなってもらいたいものです・・・では作業現場へご案内します。」

舞人 （せめてBLWの根源たるものの正体が解ればな・・・。）

現場を視察しながら歩く舞人。以前ここで紬がBLWに襲撃されたことを思い出す。

舞人 （ここで紬さんが襲われたんだな・・・ついこの前は俺も一緒にいることができていたが、この事件の時は1人だった・・・かなりの恐怖だったにちがいない。ストライクボンバーやフレアダイバーの開発が遅れて、あるいは発案されていなかったらと思うとゾッとする・・・。）

ケータイを開き、紬と取ったプリクラの待ち受けを見る舞人。

舞人 （だが、その事件があった時だったな。俺はマイトガイの中で気絶してしまい、紬さんの声によって助けられたんだ・・・。）

紬はその頃、庶民的な買い物に感動しながら他の軽音部メンバーと勇士朗達で放課後の寄り道をしていた。

紬 「わあ〜！すごい！！」

律 「ふふふ！どんなもんだい！」

律がゲーセンのクレーンゲームでバカバカと景品をゲットしていた。

蓮 「律っちゃん、クレーン系マジ上手いな！」

律 「えへへ〜、もつとほめてー。」

蓮 「んー……。」

紬 「あつ！あれもかわい〜！とつてとつてえ！」

紬が指を指す方向には、大きめの景品があった。クレーンの爪の幅を操作して取るタイプだった。

律 「う……。私、アレはちよつと苦手……。」

蓮 「俺はあれ得意だぜ！今度は俺が取つてやるよ！」

蓮が得意気に張り切る。500円投入し、開始する蓮。すると見事投入金額で収まる回数で景品をゲットする。

紬 「すごい、すごい！蓮君も上手いー！」

律 「おお〜・・・やるなあ〜。」

蓮 「へへへ。どんなもんだ ほら！」

紬にとつた景品・だらつくまを渡す。大いに紬は喜んだ。

紬 「わあ〜ありがとう！」

蓮 「お安い御用です・・・紬お嬢様・・・。」

紬 「やだ、何か恥ずかしいわ。」

律は何故かヤキモチのような感情を懐く。

律 （私には取ってくれないの・・・？）

ぶすつと蓮を見る律。蓮はカラカラ笑いながらそれに気づく。

蓮 「はははは・・・ん？どうした？」

律 「なんでもない！」

蓮 （あちゃっ・・・やいちゃったか・・・？って俺らまだ付き合えてねーし・・・むむむ）。複雑っ！）

涼と姫子は二人だけのプリクラを取っていた。ポーズを決めて撮る。

すると姫子は大胆にリードしながらチュープリを求めた。

姫子 「ねえ、涼、チュープリ撮らない？」

涼 「ええ?!でも、チュープリって撮ると別れるっていうジンクスが……。」

姫子 「そんなの迷信!男の子がそんなの気にしちゃだめよ!それじゃ撮ろっか!涼……。」

涼 「姫ちゃん……。」

涼に唇を近づけてキスをする姫子。思わず姫子は涼を抱きしめながらキスをしていた。

姫子 「……。」

涼 「……。」

ぱしゃっ

そしてもう一回撮る。今度はぎゅっと涼を抱きしめてカメラ視線で撮る。

姫子 「涼、かわいいっ」

涼 「うきゅっ。」

ぱしゃっ

撮れた写真にデコレーションし、できあがったプリを二人で見

る。

姫子 「ふふっ、撮っちゃったね・・・チュープリ。」

涼 「う、うん・・・。」

姫子 「なーに今頃赤くなってるの？このコッたら！」

涼 「へへ・・・初めてのキスだったから・・・。」

撮れたプリクラを手に思う涼。

涼 （ああ・・・こんな写真を蓮先輩に見せたらぶっ殺されるな・・・あははは・・・。）

姫子 「・・・解散したら続きしようか？」

姫子は赤くしながら涼に凄まじく大胆な発言を言う。涼は言葉の意味が解ってしまう。

涼 「ふええ??!!うう・・・う・・・俺・・・俺・・・!!!!!!」

ぼしゅうう・・・

気が動転してオーバーヒートを起こす涼。無理もない。

姫子 「ああ!!大丈夫?!!」

一方、俊と梓はギターマニアをやっていた。俊はイイスコアを

出すが、以外にも梓は苦戦する。

俊がやりながら梓に話しかけた。

俊 「やっぱり……実際のギターと違う?」

梓 「そうですね……私の場合、やっぱり違和感が……
うっ。」

俊 「そっか……。」

梓 「う……あ……く……!」

操作感覚の微妙な違いからリズムを外しまくる。結局、梓はゲームオーバーになってしまう。

俊が続ける姿を後ろで見続ける梓。

梓 「俊さんは、こっちの方は得意なんですね。」

俊 「ま、まあな……ゲームの方は……前からやってたんだ……。」

梓 「あの……その……もしよかったら今度本物弾いてみます?ギター!」

俊 「え?!……お、おう……。」

梓の意外なまでの言葉に思わず心が躍った。

梓 「コードが難しいと思いますけど、教えてあげますよ。」

俊 「そっか・・・さんきゅっ・・・よっしゃっ！」

ステージクリアー。もう一方では、勇士朗と光がイニシャルDの最新版で対戦していた。大音量のユーロビートが流れる中、二人とも無言で操作し続ける。尚、勇士朗がEV07、光がGDインプレッサを使う。何れも鍛えたカードデータの車両だ。

次々と迫るコーナーに一瞬の判断とタイミングで適した操作をしていく二人を啞然としながら漣と唯が見守る。

漣 「すごい・・・。」

唯 「ふおおおお・・・。」

テールトゥノーズの攻防。次々と現れるコーナーを勇士朗と光はクリアーしていく。

唯 「ふいー。勇兄ちゃんはこんな世界にいるのかぁ・・・。」

漣 「へ??？」

唯 「居候してる従兄のお兄ちゃん、走り屋さんやってるみたいだよ。」

漣 「実際にこんなやつてるの?!」

唯 「みたい・・・。」

そうこうしている内にギリギリで勇士朗のEVO7がコーナーで抜きに掛かり、勝利を収めた。

光 「ああー!! やられたあー!!」

勇士朗 「はあー!! かったー!! 7勝3敗!!」

10回連続でやり続けた勇士朗と光。二人して汗だくだった。息も若干きらしてる。

唯 「残念だったねー・・・はい。」

光 「ありがと・・・でも大健闘だ! 大健闘!!」

疲れきった光にタオルとお茶を手渡す唯。漣も勇士朗に水を手渡す。

漣 「はい! 買って置いてあげたよ。」

勇士朗 「あ! ありがと! 漣ちゃん!」

ゴクゴクとペットボトルを飲む二人。唯は微笑ましく光を見ている。漣は飲むたびに動く勇士朗の喉仏へと視線が移る。

漣 「・・・・・・・・。」

勇士朗 「?」

漣 「あ! なんでもないよ!」

目線があつた漣は恥ずかしげに誤魔化す。

勇士朗 「????」

別の日の帰り道。勇士朗と漣は夕方の空の下を歩く。漣は進路について勇士朗に話しかける。

漣 「ねえ……勇士朗君は進路……どうするの?」

勇士朗 「俺、就職する……はずだったけど、やっぱり……痛う!舌カンダ!」

漣 「……あははは!勇士朗君おもしろい!」

勇士朗 「いてて……やっぱりやめて警察官になる事にした!警察になつて要さんの部署で共に闘うつて決めた!」

漣 「じゃあ……警察学校に行くんだ……」

漣は少しがっかりした。できるなら同じ大学へ行きたかつたのだ。でも勇士朗は勇士朗の道があるのだ。とやかくは言えなかつた。

勇士朗 「……けどその必要がないんだ!夏休みの間に、警視總監が特例で自ら指名してきたんだ。警察の方針を変えてでも俺の存在が欲しいって……」

漣 「本当に?!そんなことできるの?!やっぱり勇士朗君が

ファイバードだから……?!」

勇士朗 「うん。でも俺に出来る一番のコトだから……ちなみにまだ先生以外は知らない。」

漣 「え?!なんで私だけに言うの……?」

勇士朗 「そ、それは……その……ま、まず初めに知らせたかったから!」

漣 「どうして?」

勇士朗 「……大切な……存在だから……。」

漣 「ええ?!え、と……。」

テンパる漣。勇士朗もテンパる中、意を決して言葉を進めた。

勇士朗 「……もちろん蓮達も大切な存在だ……でも、闘っていくには漣ちゃん存在が必要だから……その、俺、漣ちゃんの存在があったからこそ勝てた経験があったし……。」

勇士朗と漣は互いに心臓をバツクン、バツクンさせる。

漣 「私の……存在が……。」

勇士朗 「うん……。例えファイバードの力があっても、それだけでは乗り切れなかったことがあるんだ……それを後押ししてくれたのが……漣ちゃんのおかげだった。」

澪 「そんな……大げさだよ……私は街の一角の軽音部の高校生に過ぎないし……。」

謙虚な気持ちでふるまう澪。二人同時に息を呑む。そして勇士朗は決意する。

勇士朗 「でも俺は……そんな……みお……。」

グオゴゴゴゴゴオオオオオオ！！

勇士朗 「?!?!」

澪 「きゃああ!?!」

どさあっ

突然の大きな地震の発生にふらつく二人。澪が勇士朗を押し倒すように転んでしまう。

澪 「うう……はっ?!?!」

勇士朗 (うおおお!!澪ちゃん!!胸が……身体が……!!!(?!))

澪 「ぐぐぐぐぐぐごめん!!勇士朗君!!」

あわてて起き上がる澪。二人の脳内はチンパンカンパンにテンパッテしまう……。

勇士朗 「……だ、だいじょうぶ？」

漣 「う、うん！！ホント、ゴメン……。」

勇士朗 「い、いいよ別に……。そ、それにしてもいきなり地震って……。やっぱり地震は忘れた頃にやってくるのかな……。はははは……。」

突然の地震で空気が台無しになってしまった勇士朗。だが、ただの地震ではなかった。地中より間も無くして、BLW 10が出現。今までのBLWとは違い、最も身体がヒトに近いものだった。裸の人間の身体にBLWの頭をつけたような容姿だ。だが、生殖器はついていない。

ドオキヤアアアアンツ！！！！

BLW 10 「クケアアアアアア！！！！」

漣 「きゃああああ？！！」

勇士朗 「何い？！！くツ！！！！」

バツと手をかざして漣をかばう勇士朗。

同時刻。さわ子は、立川へと向かっていた。今日は要とのデートの約束があったのだ。車内ではヘビーメタルな曲がかかっている。

さわ子 「さて……。もうすぐ立川だし、そろそろ優しいBG

Mに切り替えるかな・・・それにしても夕方の地震は大きかったわね・・・。」

BGMを切り替えながら走るさわ子。その時、更なる地震が起きる。

ドオドオドオドオゴゴゴゴゴゴオオオオオオ・・・

！！！！

さわ子 「きゃ！！ハンドルが取られる・・・！！地震？！！」

道路脇に急停車して止まるさわ子のワゴンR。それと同時に、隣接する多摩市が一気に崩落する。

ゴゴゴゴドオドオドオオオオオオオゴゴゴゴゴゴオオオオオオン・・・

轟音と共に地面が陥没。直径2km、深さ500mの巨大な穴が突如として現れた。するとアリの群れのように跋扈するBLWの大群が蠢いていた。

そして、それらの中央にはこれまでにないほどの極めて大型のBLWが姿を現した。

BLW特有の頭部からは長い白髪 of 髪状のものが生え、持ち上がった長い上半身には、ヒトのような腕が何本も生え、女性の乳房のようなものが幾つも連なり、身体はシロアリの女王のようにコロネ状に巨大。身体からはパイプのような産卵器官がいくつもタコの脚のように生えている。更にコロネ状の身体の上にはBLW 02に確認されている生体砲身が10門確認できる。

想像を絶する気色の悪さだ。次々と這い上がってくるBLWの群れ。地震以外何の前兆もない衝撃の事態が街を襲う。

BLWクイーン 「ゲキヨゲゲゲゲゲゲゲゲゲゲキユガアアアアアアアアアッ！！！！！」

つづく

次回予告

ついに姿を現したBLWの繁殖機能態、「クイーン」。勇士朗と澪の身にもBLW 10の脅威が襲う。勇士朗は告白しようとした想いを止め、澪を守る為に闘う。

M・P・D・BRAVEと旋風寺勇者特急隊も多摩市に急行していく。別行動を取っていた要は苦悩を懐きながらさわ子を助けに向かう。単機で急行したジェイデッカーは要に苦悩する必要が無いことを諭す。

一方で予想外の苦戦を強いられるファイバード。見るだけではいられなくなった澪はBLWに叫んだ。だがその勇気の先には……。

次回、新生太陽の勇者 ファイバード・サーガ 第38話 「悲劇に攻め入る怒涛」

絶望すらその怒りは止められない……。

第37話 「潜めていたモノ」 (後書き)

今までの状況から一転、いよいよBLWのボスが出現しました。
感想・意見お待ちします。

第38話 「悲劇に攻め入る怒涛」

突如として崩落した多摩市。そこからは大多数のBLWが出現。うごめく生体兵器達が巨大な穴からよじ登り、活動を開始する。

BLWの01から03の大群。そして02、03の変異種の群れ達が跋扈する。この突如引き起こった災害により、関東地域の至る所で停電が発生する。

上空には事態を聞いて駆けつけたテレビ局のヘリが周回している。

テレビポーター 「ご覧下さい!!!つい先ほど、突如として多摩市が崩落!!!そして次々と生体兵器、BLWが地上へ這い上がり始めました!!!破壊活動を行なっております!!!さらに崩落した多摩市の中央をご覧ください!!!非常に大型のBLWが出現しています!!!非常に、非常に気味の悪い容姿です!!!」

決死のレポートを続けるレポーター。この事態は直ちにM・P・D・BRAVE及び旋風寺勇者特急隊に伝達される。緊急サイレンが鳴り響くM・P・D・BRAVE本部。幸いにも立川では停電は免れていた。

本部放送 「警視庁よりエマージェンシー発令!!!多摩市が崩落!!!その内部からBLWの大群が出現されたし!!!M・P・D・BRAVEは直ちに攻撃せよ!!!繰り返す.....」

この事態の緊急無線を受けた要は、直ちにクルマを止めてさわ子にケータイをかけた。

要 「……ごめん!!緊急事態が発生して、今日のデートはできなくなった!!今何処にいるんだ?!!」

さわ子も駐車したクルマの中で要と会話する。さわ子は気が動転していた。

さわ子 「誠君!!助けて!!恐くて動けないのよ!!」

要 「さわちゃん!!落ち着いて!!今何処に?!!」

さわ子 「今、多摩市のちかくよ!!変な怪物が出てきて恐いのよ!!」

要 「何だって??!!」

さわ子曰く、周囲には既にBLWが徘徊し始めていた。関節音を響かせながらうごめく。

要は凍りついた。以前懐いていた心配事、要と離れた場所でさわ子が巨大生物に襲われるという事が現実となった。要はさわ子に危険が迫りつつあることを認識すると、車内の無線で本部へ即連絡を取る。

さわ子 「こっちくるっ!!」

要 「くっ……!!こちら要!!」トランスポーターを直ちに多摩地区へ向かわせてくれ!!」

その時点では、JトランスポーターにジエイドッカーとJバギーを搬入中だった。吉崎が要の無線に対応する。

吉崎 「現在、ジエイドッカーとJバギーを搬入中です！！隊長は今何処です!？」

要 「現在立川を出たところだ！！俺はこのまま現地へ向かう！！」

吉崎 「戻ってきた方が早いんじゃない。。。」

要 「さわちゃんが危ない！！BLWの群れの近くで動けずにいるんだ！！俺個人で動いた方がいい！！」

吉崎 「ええ?!サワチャンが?!.....わかりましたっ、隊長、行ってあげて下さい!!こっちはこっちで駆逐に向かいますから、隊長はサワチャンを守って!!」

要 「.....恩にきる!!」

要はパトライトを取り付けてクルマを一気に加速させた。一方、舞人も戦闘コスチュームに着替え、ロコモライザーに乗り込む。サイレンがなる中、計器類を操作し、システムをセットアップする。

舞人 「まさかこんなことになるうとは.....!!」

マイトガイン 『いよいよBLWの本体が現れたようだな!!』

舞人 「ああ!!現在多摩市はとんでもない状況だそうだ!!」

ストライクボンバー、フレアダイバー、いけるか?!

ストライクボンバー 『ああ!!--いけるぜ!!--』

フレアダイバー 『いつでも!!--』

舞人 「よし!!--ゲートオープン!!--旋風寺勇者特急隊!!--出撃する!!--」

基地のゲートが開き、それぞれのエレベーターが上昇する。各機が所定の発進口につくと各々に発進していく。別のゲートからはロコモライザーの後を追うように、CPU制御されたガンライナーとウイングライナーが発進、飛び立つロコモライザーの後尾に着く。

舞人 「俺たちが正義の嵐を巻き起こすぜ!!--」

マイトガイン 『紬嬢は?』

舞人 「もう自宅に帰っている・・・どうしたんだ?急にそんなコトを聞いて?」

マイトガイン 『いや、ただ彼女が危険な状況下にあつたらお前の気持ちが鈍ってしまうからな。』

舞人 「その心配はないさ!!--むしろ燃え滾りながら助ける!!--」

マイトガイン 『それはそうと、今回の被害は大規模だ。数もこれまでとは比較にならない。』

舞人 「大丈夫だ！！こんなこともあろうかと、マイトガイン達の出力を現段階よりも数段階強化してもらっていたんだ！！もちろん、動輪剣もな！！」

マイトガイン 『そうか・・・なら、闘えるな！！』

舞人 「ああ！！」

レバーを押し込み、ロコモライザーを加速させる舞人。勇者特急隊が混沌へと出撃する。

その頃、勇士朗はBLW 10から漣をお姫様抱っこしながら逃げていた。いつしかのめぐり会った時のように。

勇士朗 「できるだけ逃げよう！！安全な所へ！！」

漣 「う・・・うん。」

顔を赤くしながら静かに答える漣。後方からはBLW 10がズンズンと迫る。勇士朗は光りを放出し、低空を加速し始めた。一気に安全圏内へと漣を運んだ。

高速で過ぎ去る風景。漣の長い髪がなびく。漣は抱きかかえてくれている勇士朗を見つめる。

漣 （勇士朗君は、私に何を言おうとしたんだろう・・・？私に・・・告白・・・？？ううん、こんな私に告白だなんて・・・！

でも、今までの日々を思うと……やっぱり勇士朗君は……私のこと……だとしたら……私……。）

十分BLWから離れた土手に漣を下ろし、BLWの方角へ向く勇士朗。一言言い残し、一気に加速していく。

勇士朗 「待ってて……。」

漣 「……うん。待ってる！」

キュフォンツ！！

勇士朗は加速しながらフェニックスのオーラを纏い始める。そして叫ぶ。

勇士朗 「ファイアー……ジエエエエツツツ！！！」

フェニックスのオーラが拡散し、ファイアージェットが召喚される。飛行しながらファイバードへと可変していく。ファイバードモードで地面をスライドする。そして勇士朗も更に加速、ファイバードの胸に飛び込む両眼が光り、ファイバードに勇士朗の意識が宿る。

ファイバード 『チエエエエンジン！！ファイツバアアアドツ！

！！』

この時点ではまだ多摩にBLWの大群が現れた事を勇士朗は知らない。今は好きなヒトの存在を守る。それが今できる最善の事だ。ファイバードは、BLW 10に突っ込んでいく。

ファイバード 『いくぜツ!!』

ギユゴオオオオオオ・・・ガシイインツツ!!

互いの手と手がガツシリと組み重なり、力と力が拮抗する。

ギギギギ・・・バキヤアアツ!!

BLW 10 「キヤガウツ!!」

ファイバードは、BLW 10の手を握り潰す。もがきながら握り潰された手を振りほどくと、BLW 10は高くジャンプして舞い上がる。

後方へ下がりが間合いを取ったかのように見えた。だが、その時、潰れた手の平から更に新たな腕が飛び出す。

グボキヤツ・・・

ファイバード 『な・・・!!』

そして素早く襲い掛かった。長くなつた両腕がファイバードの胸部を捉える。

ガシイイ!!

ファイバード 『何?!!!・・・うおおお!!』

グアアアア・・・ドオゴギヤアアンツツ!!

そのままファイバードを持ち上げて地面に叩きつける。両脚から思い切り地面に激突する。

ファイバード 『ぐがッ!!!』

グアア……グッ……オオオオオツ……

土煙が舞う中、両脚の激痛に耐えるファイバード。BLW 10は再び持ち上げ、今度はジャイアントスイングするかのよう。ファイバードを回し始める。だが、途中から両脚は地面に接触したままスライドする。

ズガガガガガガガ……

ファイバード 『ぐう……!!!!』

ばッ……ズドオギャバシユシユウウウツ!!!

ファイバード 『があああああ!!!!』

突如手を離してファイバードを投げ飛ばす。ファイバードは送電線の鉄塔に突っ込む。激しく感電するファイバード。その光景を見ていた漣が痛々しい想いを懐く。

漣 「勇士朗君……!!!!」

BLW 10は攻撃の手を緩める事無く、容赦なく飛び掛り仰向けになったファイバードに殴りかかる。

ズウウウンツ……ドオゴオオンツ!! ガゴオン!

！ ドオガアア！！ ズドキヤア！！

ファイバード 『ガツ……ごふつ……がああ！！』

一方、多摩市近辺上空。Jトランスポーターからジエイデッカーが出撃する。

吉崎 「ジエイデッカー、投下完了！！」

投下されたJローダーがジエイデッカーへと変形していく。

ジエイデッカー 『ブレイブアアアップツ！！ジエイデッカー！！』

さらにJバスターが投下される。それをキャッチし、ウィングスラスター全開で現場へ急行する。

吉崎 「Jバスター投下……Jバスター、キャッチ確認、セーフティ解除！Jバスター、アクティブ！！」

ジエイデッカー 『了解！！これより現場へ急行します！！』

ジエイデッカーの後に、レイバーズの輸送機が続く。その最中吉崎はジエイデッカーに通信する。私的な感情からだった。

吉崎 「ジエイデッカー？現場の近くには、隊長と隊長の彼女がいると思うの。見つけ次第、二人を助けてあげて！もちろん市民も！！」

ジエイデッカー 『……了解！！』

さわ子は車内でうずくまっていた。幸いにもBLWはさわ子に気づいていない。周囲ではパニックになった市民が逃げ惑う。

地響きを立てながら通過していくBLW 03。だが、BLW 01も多く徘徊していた。BLW 03よりも小型で、地面を這うようにうごめく為に発見される率が高い。いずれも人々を捕食して廻る。

この付近まで要が行き着く。だが、安易には接近できなかった。人々がパニックに陥っている上に渋滞も巻き起こっている。選択をミスったことを痛感する。

要 「くツ……！！やはり一度チームと合流した上で来るべきだったか……！！」

だが、ここまで来たらもはや迷っていられない。だがその時、要の目には市民を誘導する警官の姿が目映る。事態が発生して間もない為、おそらくは付近の派出所の警官であろう。

要 「俺は……何をやっているんだ?!」

自分の彼女の事を取り、守るべき市民を二の次にしてしまっていた事の重さが要を苦悩させる。

要 「俺は……警官……市民を守るべき警官……！！！」

葛藤する要。無論、市民優先が義務というものだ。だが、さわ子もその1人。正義感が強い故に突然大きな罪悪感を覚える。

そのときだった。さわ子が要に電話をかけて来た。即、電話に出る要。

要 「もしもし!!今近くまで来た・・・何処で動けないんだ?!!」

さわ子は、震える手でナビを操作し、現在地を割り出す。

さわ子 「け・・・県道20号線・・・多摩の桜ヶ丘の近くよ!!!」

要 「・・・そうか・・・よしっ!!」

要は多摩川を越えきっていた。ならば場所は近い。考えるのをやめた要はクルマを置いて、夢中で走り出した。走りながら電話の向こうに居るさわ子に叫んだ。

要 「さわちゃん、待っててっつ!!」

走りながら通話を切った。その時、上空をジェイデッカーが飛び去っていく。飛び去るジェイデッカーが、要を認識した。

ジェイデッカー 『む!!今、下に隊長が・・・!!』

通過した上空を引き返すジェイデッカー。要もこちらに引き返してくるジェイデッカーを認識する。

要 「ジェイデッカー?!こちらに来る?!!」

ホバリングしながらゆっくりと下降するジェイデッカー。

ゴオオオオオ・・・ズシン・・・

県道に着地するジェイデッカー。パニックになっていた市民達が一斉にジェイデッカーを見上げる。

市民達 「おお・・・ジェイデッカーだ！・・・おお・・・ジェイデッカーか・・・スゲー・・・ザワザワ・・・。」

ジェイデッカーは要に話す前に静かにざわめく人々に避難を呼びかけた。一警察として。

ジェイデッカー 「市民の皆さん！！ここから先は非常に危険な状況になっています！！多摩市及び周辺地域には絶対に近づかないでください！！速やかな避難をお願いします！！」

遠くからはBLWの鳴き声が合唱のように聞こえてくる。人々は速やかにジェイデッカーの言葉に従って非難を始めた。先ほどまでにあった市民のパニック状態は解消されていた。おそらくジェイデッカーの介入によって、落ち着きを取り戻したのだろう。

ジェイデッカーはすつと要に左手を差し伸べる。

ジェイデッカー 「隊長！お待たせしました！話は吉崎隊員から窺っています！彼女さんを助けましょう！！」

要 「ジェイデッカー・・・すまない！！俺は・・・市民を優先すべき警官だというのに・・・！！！」

要は再び罪悪感を感じながらもジエイデッカーの手の平に乗った。ジエイデッカーは穏やかに罪悪感を否定する。

ジエイデッカー 『隊長。隊長も警官である前に1人の人間です。愛する人が危険にさらされて心配になるのは当然です。余り自分を責めないでください。』

要 「ジエイデッカー……。」

ジエイデッカー 『さあ、飛びますよ！掴まっけてください！』

要 「ああー!!」

ジエイデッカーは、要の心中を読み取り、そして汲んだ。ジエイデッカーの超AIは予想を上回るほどの自律回路となっていた。要は改めて驚愕した。

BLWクイーンは、タコの脚のように広がる産卵管を気色の悪い動きで動かして産卵していた。だが産卵というよりも、子宮を直接生んでいるようにも見える。

グココココ……グココココ……グチユゴツ……グチユゴゴ……

産卵管は、穴の内側に確認できるが、数本は穴の断崖の奥へ入り込んでいる。

BLWクイーン 「クケキュウ……。」

大きな溜息をするように呼吸するBLWクイン。その眼下には僕たるBLW 01、02、03がうごめく。彼らは多摩市から滲み出るように行動範囲を拡大していく。

一方、苦戦を強いられるファイバード。BLW 10の腕は、攻撃を続ける間に8本になっていた。

背中から4本、胸部から2本が飛び出していた。多数の手がファイバードを締め上げる。

グギギギギギギ……

BLW 10 「キユケケケケ!!」

ファイバード 『ぐがつ……つがああ……。』

首、両腕、両股、両脚を掴まれ自由が効かない。そこから地面にたたき付け、更に攻撃を加える。

ドオガアアアン!!! ドオドオドオオツ!! ゴオオン、ゴオオオンツ、ゴオオオン!!

完膚なきまでに殴りつけられるファイバード。その強さはこれまでの個体とは違っていた。更に締め上げ、顎が外れたかのよう
に自らの顎を巨大化させる。そしてファイバードを取り込もうとした。

グキヤアツ!! ゴゴゴツ……!!

この光景に耐え切れなくなった澪は、BLWに向かって思わず

叫んだ。

漣 「やめろおおおー!!」

その声に反応してしまうBLW 10。ゆっくりと漣に首を向けた。だが漣は気丈にも叫び続ける。

漣 「なぜお前達は現れるんだ!?なぜ人を食べるんだ!?それ以上勇士朗君を苦しめるなあ!!」

一気に大声を出した漣。BLW 10はゆっくりと歩を漣に近づけていく。

ズン……ズン……ズン……

漣 「……………!!」

その距離は見る見るうちに縮まっていく。ついには安全圏だった場所にBLW 10が踏み込んでしまう。

目の前にBLW 10が立ちはだかる。改めて広がる恐怖がつい先ほどの気丈さを奪う。

BLW 10は、ぐわっと手を伸ばして漣を掴み上げた。

漣 「……………!!!!」

恐怖の余り声にならない漣。ついには気絶してしまう。

BLW 10の背後でゆっくりとファイバードが起き上がり、

ズバギャツ、ズシュガアアツ、ズヴァシユアアア、ズギヤ
ンツ、ズバアアンツ!!

ガードに転じた4本の右腕がズタズタに斬り砕かれ、巨大化した下顎までが斬り飛ばされるBLW 10。ファイバードはBLW 10の首を鷲掴み、一気に右側の腰にフレイムソードを斬り込む。

フユファツ・・・ザドシュウウツ!!!

悲しみから来る怒りがズブズブとBLW 10の肉体を切断していく・・・だがこの間にもファイバード・・・勇士朗は希望を捨てていかなかった。まだ内部に彼女は居る・・・ならば内臓をズリ出せば救出できる希望はある・・・そう信じて力強くかつ冷静さをたぐり寄せて斬り込んでいく。あふれ出す大量の血。

ズシュウウウウウウウウウ・・・ブボゴオ
!ブボゴゴゴツ!

BLW 10 「キュルルルルウツツ・・・!!!」

激痛に苦しみもがくBLW 10。だが、ファイバードは決して離さない。そして半分と少しまで切断すると、フレイムソードを投げて右腕をBLW 10の上半身内部に突っ込む。

ズボゴツ!!

BLW 10 「キュギルルルツルウウウツツ!!!」

ファイバード 『うおおおおお!!!』

ジググググググウウウ・・・ドバゴオオオオ！！

消化器官らしき内臓の一式がズリ出された。ファイバードはBLW 10を殴り飛ばし、この内臓器官を解体しはじめる。

ドオガアアアアンツ！！！！

ファイバード 『澁ちゃん・・・くそ！！何故こんな事に！！畜生・・・！！！！』

ズブズブと焦りを押さえ慎重に解体していく。するとその中に閉じ込められていた澁を発見することができた。

ファイバード 『澁ちゃん！！やつぱりここに・・・！！！！』

だが、まだ喜んではいられない。安否不明の上はまだBLW 10は背後でうごめいている。

ファイバードは立ち上がると振り向きながらBLW 10を睨んだ。そして怒りをこめたフレイムチャージアップを開始する。

ファイバード 『・・・貴様が一番やってはならないことをした・・・砕け散れよ・・・フレイムチャージアアアアアップツツ！！！！！！』

額を輝かせながら右手をかざし、手の平にフレイムエネルギーを帯びる。そしてサンスライサーの中央にフレイムエネルギーを押し込む。

服を、皮膚を徐々に溶かしていた。その時、澪はその激痛の為か急に意識を取り戻して、苦しみ始めた。

澪 「うああああああっ……あああああ！！痛い！！痛い！！！！体中がア！！！！」

突然、普段聞いたこともない澪の悲鳴に気が動転する勇士朗。ファイバードの力を持っているとはいえ、エクスカイザーのような補助能力はない為に、こうなるとどうする事もできない。澪はもがきながら苦しむ。

勇士朗 「澪ちゃん！！！！」

澪 「あああああ！！！！」

その頃、さわ子もピンチの中にあつた。BLW 01の1体がさわ子に気づいたのだ。

BLW 01 「クケクケツ！！！！」

さわ子のクルマの正面でくあああつと顎を開くBLW 01。さわ子は絶叫する。

さわ子 「きゃあああああ！！！！」

車内に響き亘った叫び声。絶叫の直後溶解液が放たれた。

ビチュオツ！！！！

つづく

次回予告

多摩市ではM・P・D・BRAVEと旋風寺勇者特急隊の二点同時の共闘戦が展開される。かつてない規模の敵の数に立ち向かう勇者達。混沌の中で新兵器と出力強化を施した力が炸裂していく。そんな中、さわ子の危機を救ったジェイデッカーは、隊長である要を戦闘には参加させず、1人の男としてさわ子の許に居るように諭す。そしてジェイデッカーは要の許を後にして再び戦闘に向かうのだった。

次回、新生太陽の勇者 ファイバード・サーガ 第39話 「
無双激戦区・前編」

勇者達の力が突き進む・・・。

第39話 「無双激戦区・前編」

さわ子のワゴンRに向かって放たれた溶解液。ボデーとフロントガラスが容赦なく溶けていく。

さわ子 「きゃあああああ！ーいやあああ！ー！」

叫びながらクルマから降りようとした。だが、ドアの部分にまで溶解液が及び、溶けた部分がボデーと一体化してしまっていた。

迫るBLW 01。開口した口がワゴンRごと噛み付く。

ガシャアアアンツ！！

若干潰れるワゴンR。ガチガチと顎を動かし車体をきしませる。

さわ子 「……………わ、私、死んじゃうの……………?!誠君、助けてよおおおお……………うわああああああん!!！」

泣き叫び始めるさわ子。容赦なくBLW 01は顎を動かす。その時だった。

ゴオオオオオオ……………ズウウウンツ！！

グチャアアンツ！！

ジエイデッカーが降下し、足でBLW 01の身体を踏み潰し

ただ。その勢いでBLW 01はワゴンRを吐き出した。

ジェイデッカー 『隊長!!彼女の方はいますか?!』

要 「今のところ見あたらな……ん?!あのワゴンR……
ジェイデッカー!!下ろしてくれ!!」

ジェイデッカーは要を下ろす。要は無残な姿になったワゴンRに駆け寄る。助けようにも溶解液が付着していて、触れることができない。

要 「くっ!!これは……だが……手はある!!さわちやん!!無事なのか?!さわちゃん!!返事をしてくれ!!」

膝を抱え込んでいたさわ子がゆっくりと顔を上げる。

さわ子 「え……?!誠人……君……誠君なの?!誠君!!」

要 「ああ!!俺だ!!今助ける!!ジェイデッカー、頼む!!」

ジェイデッカー 『解っています!今すぐ助けましょう!!失礼します!!』

ジェイデッカーはJバスターを置き、ワゴンRの屋根を怪力で外す。

バキッ!!

ジエイデッカー 『掴まっついてください。車体を寝かします。』

そして車体をゆっくりと寝かした。

ゴオン……

要は無事救出されたさわ子に駆け寄り抱きしめた。

要 「さわちゃん!!」

さわ子 「誠人くん……えぐッ……エグッ……恐かったよぉ……」

要は泣きしゃっくりするさわ子の頭を撫でる。

要 「もう大丈夫だ!!安心して……」

ジエイデッカー 『隊長!!場所的には危険です!!一旦この場を離れましょう!!』

要 「そうだな!!さわちゃん、行こう!!」

さわ子 「うん……」

ジエイデッカーは二人を左手に乗せて飛び立つ。その間にもレイバーズは先に戦闘を展開する。道路に着陸したトランスポーターからも「バギー」が出撃する。

葉山 「出しますよ!!」バギー、発進!!」

ブゴオオオオッ！

走り出すJバギーの車内で吉崎が隊長代理としてモニターと照らし合わせながら指示を出す。

吉崎 「レイバース、聞こえる？現在、多摩市の大半は崩落してしまっている状態よ！崩落した穴の中央には“クイーン”が存在してるけどその周囲にはかつてない数のBLWが展開中よ。うかつには飛び込めないのは必至ね。」

ガンレイバー 「じゃあどうするんだ？打つ手なしか?!」

ショットレイバー 「ここはやはり共闘戦を展開するのが打倒だ。」

吉崎 「そうね。ショットレイバーの言うとおりだね。そろそろ東京湾側の多摩市周辺地域には先刻出撃した旋風寺勇者特急隊が到着する頃よ。私達は多摩市の北側から、旋風寺は南側から攻めていくカタチを取るわ！！警視庁の援護車両も展開するわ！！とりあえず現時点では周辺に跋扈したBLWの駆逐に専念してちょうだい！！」

レイバース 「了解!!」

戦闘を展開し始めるレイバース。ビルの陰から飛び出すレイバースの目の前にはBLW 01の群れたちが跋扈する。ガンレイバーとショットレイバーは一新したそれぞれの兵装を構えた。

ガンレイバー 「うじゃうじゃいやがる!!」

ショットレイバー 「撃ち砕くまでだ!!」

ガンレイバー 「よっしゃああ!!」

ビガンツ、ビガンツ、ビガンツ、ビガンツ!! ビガン、ビガン、ビガンツ!!

デイギゴオンツ、デイギゴン、デイギゴオオツ、デイギゴオンツ!!

ズギヤドオドオドオドオガガアアアツツ!!

新兵装のエネギーガンとエネギーランチャーが火を吹く。一発一発が確実にBLW 01を砕け散らせる。同時に別の箇所でも、警視庁の対特生装甲車両の部隊も展開を開始する。砲塔が展開して、レールガンが撃ち出される。

部隊長 「全車両、撃てえええ!!」

デイギギギギギギギン!! デイデイデイデイデイギギギギギン!!

ズドオドオドオドオオオ!!

多摩市では轟音が響き始めた。それとほぼ同時に旋風寺勇者特急隊が到着する。

舞人 「現場に到着したな!!各機!!戦闘態勢に入れ!!」

マイトガイン 「了解だ!!」

ストライクボンバー&フレアダイバー 「了解!!」

各々の機体の変形を開始する。

ストライクボンバー 「チエエエエンジン!!」

ストライクボンバーが変形すると、トレーラー特急と連結していたコンテナから武装ユニットが飛び出し、ストライクボンバーと合体する。胸部にアーマーが、両肩にはレールガンユニットが、そして右肩にはレーザーランチャーユニットが合体する。

バスターボンバー 「バトルアップ!!バスターボンバー!!」

フレアダイバー 「チエエエンジン!!フレアダイバー!!」

続けてマイトガインも合体を開始する。

舞人 「よし!!レエエエエツ!!マアアイトツガインツ
!!」

BGM 「レッツ・マイトガ
イン」

舞人の合図でロコモライザーが合体モードへと移行する。追尾していたライナーズが左右に付く。

ロコモライザーの後部が脚に変形し反転する。その状態から直立状態になってホバリングする。

左右のライナースが両腕に変形していく。両腕の接合部からレーザーセンサーが放たれ、それに導かれるようにドッキングする。

舞人 「マイトガイン、テイク・オフ！」

上記を噴出しながら両手が飛び出す。胸部が表へと倒れこむ。そして頭部が持ち上がり、カメラアイに光が灯る。マイトガインは、両腕の拳を激突させて正拳突きを決めた。

それぞれが着陸し、うごめくBLWを目の当たりにする。このエリアでは、BLW 02と03の比率が多かった。幾つかの変種も確認できる。マイトガインはお約束の一声を上げた。

マイトガイン 『銀のつばさにのぞみをのせて、灯せ平和の青信号！！勇者特急マイトガイン、定刻どおりただいま到着！！』

BLW達は一齐にマイトガイン達を向く。そして一齐に襲い掛かり始めた。

BLW群 「グケケケアアアア！！！」

舞人 「……マイトガイン、動輪剣だ！！！」

マイトガイン 『動輪剣！！』

動輪剣を取り出すマイトガイン。それに続いて先にサポートチームが迎撃。バスターボンバーが先制する。

バスターボンバー 『レールキャノン！！』

ヴィギイインツ！！ ヴィギイイン！！ ヴィギヴィギ
イイン！！

ズヴァダアアンツ！！ ドオオズドオオオ！！ ズド
オドオガアアアアンツ！！

両肩のレールキャノンが火を噴き、高速で発射されるプラズマ
電磁砲がBLW 03の群れに炸裂する。直撃を受けて、肉片が砕
け飛ぶ。

フレアダイバー 『ツインバスターシリンダー！！』

ヴドウルルルルルルルルルルドオドオヴァドオゴ、ヴ
アゴオ、ヴァグオ、ヴァドオオ！！

ズズズズドオドオドオドオツツ！！！！

身体がバラバラ破碎されていくBLW 02群。その間にエネ
ルギーが高速で充填された動輪剣。舞人の合図でマイトガインは一
気に斬り掛かる。

舞人 「いくぜ！！」

マイトガイン 『はああああ！！』

ザヴァギアアアンツ！！ ズガギヤシャアアアンツツ！
！ ヒュオオオ・・・ズドオギアアアアアア！！！！

両手に握り締めた動輪剣を振るい、BLW 03を斬り払いB

LW 02を一刀両断する。そして変異体のBLW 03に振り向いて動輪剣を突き刺した。そして指した部分から縦に斬り刻む。

ザギヤシャンツツ!!!

舞人 「数は尋常じゃない!!先ほどM・P・D・BRAVEの吉崎隊員から共闘の支持を受けた!!俺たちはこちら側のBLWの群れを叩く!!」

マイトガイン 『共闘か・・・妥当な選択だ!!』

舞人 「ああ!!この数だ相当な持久戦が要求される。心して掛かれ!!」

一方、要とさわ子を安全な場所へと届けるジエイデッカー。要は自分の果たすべき仕事を主張する。

要 「ジエイデッカー!!俺はお前たちの隊長だ!!俺はやはり戦場に行かなければならない!!」

ジエイデッカー 『隊長・・・今のあなたのおすべきことは、さわ子さんの傍に居てあげることですよ・・・彼女は先ほどの被害に見舞われてひどく傷ついてるはずですよ・・・隊長・・・今日は、彼女の為につくしてください・・・あなたはさわ子さんの彼氏なのですから・・・。』

要 「ジエイデッカー・・・。」

要はさわ子にふりむく。要と離れたくない一心の為か切ない表情で涙ぐんでいた。そして要は、もう一度ジエイデッカーを見る。

要 「・・・わかった。ジエイデッカー・・・後はお前に任せ
る!！」

ジエイデッカー 『はい!!!では!!!』

再び飛翔していくジエイデッカー。要はさわ子に振り向きゆつくりと歩む。そして抱きしめた。

要 「さわちゃん・・・。」

さわ子 「誠君・・・。」

要は今日という日は彼女の傍に居てあげようと思う。さらに強く抱きしめた。

ジエイデッカーは再び多摩市上空を飛ぶ。遠方にはBLWクインがうごめいていた。だが、今は周囲のBLWを一掃することが先決だ。ジエイデッカーは戦闘中のレイバーズとの合流を図るべく現地に急行する。その間にも眼下にうごめくBLWに高速で飛びながらJバスターで射撃する。

ギョオオオオオオオン・・・・・・・・!!　ズドオオオ!!　ズドオオオ、ズドオオオオオ!!

ズギヤドオオオ!!　ドオオオオゴオオ!!　ズヴァダアアアン!!

撃ち放たれたビームが、2体のBLW 02とBLW 03単体の頭部に直撃し、一撃で撃破する。ビームエネルギーの威力は更に強化されていた。

更に進むとBLW 02が3体がジェイデッカーに向かって射撃する。

ドウパパパパパパ！！ トキヤトキヤキヤキャンツ！！

これを軽快な機動力でかわすジェイデッカー。Jバスターを構える。

ジャキンツ！！ ズドオオオ！！ ズドオアアア、ズドオアア！！ ドオウ、ドオウ、ドオオオオ！！ ズドオオオツ、ズドオオオ！！

ズギャン、ダギヤガ、ドオギャン！！ ドオドオドオギヤン！！ ズズドオオオ！！

撃ち注がれるビームが、3体の頭部、胸部、腹を射抜く。更に加速し、レイバースの許へと急いだ。

一方でレイバースも奮戦する。足元では援護車両が展開し、レイバースを援護する。後方ではJバギーが停車している。

ディギギギギギギン！！ ディギギギギギギン！！

ドオドオドオドオオオオ！！

ガンレイバーとショットレイバーが撃ちつづける。

ガンレイバー 「数がはんぱねー!!」

ビガンツ!! ビガン!! ビガン!! ビガン

!! ビガンツ!!

ショットレイバー 「撃ち砕くまでさ!!」

ディギドオオツ!! ディギドオオ!! ディギドオ

オオ!!

道路上に跋扈するBLW 01が撃ち砕かれていく。その中でぬっとビルの陰からBLW 02が姿を現す。

ガンレイバー 「でやがったな!!おらおらああ!!」

ショットレイバー 「砕け散れ!!」

ビガン、ディギドオオ、ピアガン、ピアガン、ディディドオオ、ディギドオオ!!

照準をBLW 02に向けて一声発射する。エネルギーの弾丸がBLW 02を砕き散らす。

ズドオドオドオドオゴオオオオ・・・

葉山 「レイバーズの武装・・・格段にアップしてますね!!」

吉崎 「そうね・・・ん?!通信?!」

「バギーに通信が入る。ジエイデッカーだった。」

ジエイデッカー 「こちらジエイデッカー!!間もなくそちらに合流できます!!」

吉崎 「了解!!BLWの数はまだまだだよ!!」

ジエイデッカー 「はい!!」

南側ではマイトガイン達が、無双劇のごとくBLWの群れを蹴散らす。

バスターボンバーがBLW 02の群れにゴリ押し戦法でレールキャノンを撃ちながら前進する。

バスターボンバー 「おらおらおらああ!!」

ヴィギイン、ヴィギイン!! ヴィギンツ、ヴィギンツ、ヴィギイインツツ!!

ズズドオドオデイガギャギャア!!

W 03にライザークラッシュを打ち込む。

バスターボンバー 「はあああッ!!ライザークラアアッ
ッ!!」

ズドオオオオオンツッ！！ ズギヤドオドオドオゴ
オオオオン！！

砕かれたBLW 03の向こう側からは、変異体を含めたBLW 02群が押し寄せる。バスターボンバーは右肩に装備されたバスターランチャーをスタンバイする。

バスターボンバー 『そうだ！！もつとこつちに来な！！』

バスターランチャーの銃口に青白いエネルギーが充填される。次の瞬間にはレーザー光弾が撃ち放たれた。

バスターボンバー 『いくぜ！！バスターランチャーツッ！！』

コオオオオ・・・ディギユゴオオオオオオオオオオオツッ
！！！！

ズギユウドオヴァズドオドオドオオオオオオオオオオオオ
オオオオオオオ！！！！

群れに着弾すると同時に凄まじい爆炎の火柱が吹き上がり、多数のBLW 02を駆逐した。

一方でフレアダイバーも、ツインバスターシリンダーとブレストファランクスをゴリ押し戦法で射撃し続ける。

フレアダイバー 『おおおおお！！』

ズキャズズズドオドオドオドオドオドオドオドオ
オオオオツツ!!!!

そしてマイトガインは動輪剣を振るい、BLW 03を斬り続ける。

マイトガイン 『はああああ!!』

ザギヤアアアアンツ!! ズヴァシャアアアン!!
グオツ・・・ズギヤアアアン!!

上半身と下半身が分断され、2体の上半身が吹っ飛ぶ。もう1体を渾身の力で叩き斬った。

だが、マイトガインは休む事無く次々と迫る敵群を動輪剣の振りの下薙ぎ払っていく。

マイトガイン 『おおおおお!!』

ザシャアアアアアアツ!! ズドオギヤオオオンツ!!
ザシユドオオンツツ!!!!

BLW 03変種 「クキャロゴオオオオツ!!」

舞人&マイトガイン 『?!!!』

その時、BLW 03の変種がマイトガインに飛び掛る。それに応じマイトガインも飛び立つ。

ズギヤゴオオツ！！ ドオギヤガアアア！！ スズズスウ
！！！！

B L W 02変種 「グキキケアアア！！」

ジエイデッカー 「一斉射撃を頼む！！」

Jバスターの射撃により、B L W 02変種の身体の表面が爆発する。続けてレイバーズと援護部隊が攻撃をかける。

部隊長 「りよ、了解！！一斉射撃、撃てええええ！！」

ガンレイバー 「やっぱりそうこなくっちゃな！！」

ショットレイバー 「ああ！！」

デイギギギッギイギギギギギギンツツ！！！！

ビガアン、ビガアン、ビガアン、ビギドオオオ、ビギドオオオ、ビギドオオオ！！

ズズズドオドオドオオオオオオオオオオオ！！！！

B L W 02変種 「キュケケケケアアアアアアア！！」

撃ち注がれる攻撃。ジエイデッカーが、空中でホバリングしながらJバスターをロックオンする。

ジエイデッカー 「吉崎隊員！！」

吉崎 「OK!!!」バスター・キャノン、アクティブ!!!」

ジェイデッカーの呼びかけに応じ、吉崎は「バスター・キャノン」にモードを移行させる。

キュイイイイイ……

銃口にエネルギーが充填されていく。そして強力なビーム過流が撃ちだされた。

ジェイデッカー 「バスター・キャノン、シュートッ!!!」

ズヴァギャアアアアアアアアアアアアアアア!!!

ドオオシャアアアアアアアアアアアアアアア……ズギヤドオオオオオオオオオ!!!

ビーム過流にかき消されて吹き飛ぶBLW 11。だが、戦闘は続く。

ジェイデッカー 「まだまだ戦闘は続く!!!油断するな!!!」

一同 「了解!!!」

要の代わりに戦闘面での指揮を執るジェイデッカー。だが、多摩市周辺は停電を引き起こしていた為に段々と薄暗くなりつつあった。

一方、勇士朗は激痛に苦しむ澪を無意識のうちにぎゅっと抱きしめていた。自らにも消化粘液が付き激痛を伴なう。だが、それ以上に澪に苦しむ澪の姿の方が苦しかった。

澪 「ゆ……勇士朗君……うう!!」

勇士朗 「澪ちゃん……!!」

震える声で喋ろうとする澪。

澪 「勇士朗君……さっき言おうとしていたこと……教え
て……。」

勇士朗 「え……!？」

澪 「お願い……もう……ダメかもしれないから……。」

勇士朗 「何言ってるんだよ!!澪ちゃん!!」

澪はいつかの光と同じ状態に見舞われていた。少しずつ命が蝕まれていく。綺麗でサラサラしていた澪の髪が溶けはじめていく。・次の瞬間澪は意識を失っていた。

勇士朗 「嘘だろ……そんな……まだ俺の気持ち伝えてないのに……なんなんだよ……なんなんだよおおおおお!!」

絶望の感情が勇士朗を襲う。だがその時、勇士朗の中のファイバードが語りかけてきた。

ファイバード (勇士朗!!希望を捨てるな!!まだ手はある!!)

勇士朗 「こんな状態でどんな手が・・・!!」

ファイバード (エクスカイザー先輩ならば彼女の状態を治すことが可能だ!!今すぐ私がテレパシーで通信する!!)

その頃、事態をニュースで知った勇がエクスカイザーと共に県道を走っていた。

勇 「こんな事になっちゃあ、ほっとけないな!!」

エクスカイザー 『ああ!!早く我々も参戦して手を貸さねばな!!む・・・!!通信!?!』

ファイバードの意思がエクスカイザーに届く。

ファイバード (ご無沙汰です!!先輩!!ファイバードです。)

エクスカイザー 『ファイバードか!!久しぶりだ。一体どうしたというのだ?!』

ファイバード (実は・・・)

今おかれている状況を、ファイバードは一部始終説明する。状況を呑んだエクスカイザーと勇は直ちに現地へと向かう。

エクスカイザー 『なんということだ・・・事態は一刻を争

うー！直ちに向かうー！！』

勇 「今すぐいくからなー！！勇士朗ー！！」

ファイバード （（すいませんー！！お願いしますー！！）（

勇士朗は意識が失われた澪を抱きかかえていた。その間にも周囲は蒼く暮れて暗くなっていく。

勇士朗 「エクスカイザー先輩なら今の澪ちゃんを治せるのか？」

ファイバード （（ああー！！とにかく今は彼女の許にいてあげるんだー！！）（

勇士朗 「わかってる・・・ああ、わかってる・・・。」

想いを懐き続けていた存在を抱き続ける勇士朗。その後ろには意思が無くなったロボット形態のファイバードがそびえ立っている。

澪の体温はあるものの、ぐったりとし呼吸も薄くなっていた。その時だった。川原をエクスGTが駆け抜けてきた。

ブオオオオオオオ・・・ギュガアアアアッ！！

エクスカイザー 『勇士朗ー！！』

勇 「勇士朗ー！！」

勇士朗 「勇さんー！！エクスカイザー先輩ー！！」

到着するとすぐさまにエクスカイザーは澪の状態を分析する。

エクスカイザー 『以前の唯の彼氏の時よりも深刻だ！！消化液を体内に含んでしまっている！！一刻も早く治さねば！！』

エクスカイザーは腕をかざして修復光線を澪に撃ち放つ。その間に勇は勇士朗に現在の状況を話す。

勇 「勇士朗。今、多摩市はとんでもない状況下にある。BLWっていう生体兵器の親玉が現れて、街のほとんどが崩落しちまっている！！更に周囲ではその群れがうごめいている。」

勇士朗 「そんな……。」

勇 「だからこそ俺たちが今立ち上がるべきだ！！俺とお前の力があればやれる！！」

勇士朗 「勇さん……同感です！！彼女をこんな目に合わせた元凶を砕きたい！！」

勇 「俺もだ……唯や憂があれ以上の危険にさらされるのはゴメンだぜ！！」

修復光線を浴び続ける澪。その澪に切なげな眼差しを向ける勇士朗。多摩市方面を睨みつける勇……かつてのデストリアン襲来に次ぐ大災厄。それぞれの勇者達がそれぞれのカタチで挑んでいく。

田井中家の庭。この事態を知った勇者が立ち上がる。ラガンは聡とワンセグで状況を確認していた。

ラガン 「……………聡……………俺たちの出番だな!!」

聡 「ああ!!」

夏休みの山籠りを通して成長した聡。少年の眼差しに闘志が滾っていた。

聡 「見せてやるぜ!!俺の力!!」

つづく

次回予告

混沌ひしめく中、溼はエクスカイザーの手によって無事に治療された。同じ頃、大きく成長した聡がグレンラガンと共に戦場を烈火のごとく駆け抜ける。旋風寺勇者特急隊も奮戦する。その最中、唯の住む地区においてBLWクイーンの産卵器官が出現する。そして更に戦闘を続ける全部隊に冴島から撤退命令が下されるのだった。

次回、新生太陽の勇者 ファイバード・サーガ 第40話 「無双激戦区・後編」

混沌で輝くは勇者の意志たちか……………。

第39話 「無双激戦区・前編」 (後書き)

感想・意見お待ちしております。

第40話 「無双激戦区・後編」

多摩市方面を睨みつける勇者一人。この向こうにBLW事件の元凶がいる。今しがた危うく漣を失いかけた勇士朗。怒りの感情が高ぶる。

勇士朗 「この向こうに・・・元凶が・・・絶対に潰す！！」

勇 「ああ・・・・・・お・・・どうやら愛しの彼女の治療が終わったみたいだゾ。」

エクスカイザーの方を見て、漣が無事に治療されたことを確認する勇。勇士朗は漣を彼女と思った勇にまだ付き合っていないことを伝える。

勇士朗 「本当ですか！？あ・・・その、まだ彼女じゃないんです。」

勇 「そうなのか？」

勇士朗 「はい。でも告ろうとした矢先にBLWに襲われて・・・」

勇 「そうなのか・・・そりゃ悔しい限りだな。ほら、行ってやれ！」

勇士朗 「はい！」

漣に駆け寄り寄る勇士朗。改めて近くで見ると漣は以前にも増して綺麗なように見えた。思わず感情が高ぶり、勇士朗は感涙の涙を流す。

勇士朗 「漣ちゃん……一時はどうなるかと思ったけど、本当によかった！！生きてくれて……本当に……！！」

漣 「勇士朗君……。」

エクスカイザー 『勇士朗！無事に彼女は治療できた。心配はいらぬ。』

勇士朗 「ありがとうございます……！」

漣 「ありがとう……ねえ？勇士朗君。さっき言ったこと教えてくれない？」

漣はエクスカイザーにお礼を言うと恥ずかしさを含みながら、改めて勇士朗に問い質した。

勇士朗 「え……？！」

じつと勇士朗を見つめる漣。勇士朗はごくりと緊張のツバを飲む。あの時には言うコトができていたはずが、何故か今は言えなくなっていた。

勇士朗 「お、おれ……その……。」

口ごもってしまう勇士朗。すると勇士朗の中でファイバードが

後押しした。

ファイバード（勇士朗！！お前には勇氣と彼女を想う気持ちがある！！躊躇することは無い。自信を持つんだ！！せっかく助け出せた命だろうか？ここで思い止まればまた後を引いてしまう！！）

勇士朗（ファイバード……。）

BLWクイーンが出現して数時間が経過した。上空には数多くの取材班や警視庁、軍のヘリが飛ぶ。

するとBLWクイーンはその状況下の中、身体に並ぶ生体砲身を上空へと向ける。テリトリーに入った数多くのヘリを排除するのだ。

ヴィギルドオドオドオドオオオオ……ズズズドオギャガガッガアアア！！

次の瞬間にはプラズマ弾が発射され上空を飛んで居た数多くのヘリを撃墜した。

更には左右の多数の腕をビュルツと伸ばし、手刀で撃墜する。

異例の異常事態。この事態に政府は関東地域にC 01襲来以来の特別警戒宣言を発令。総理直々に緊急記者会見を開き、マスメディアがその中継状況を流す。

律が勝汰と夕飯を食べながらテレビから流れる情報に呆然とする。

勝汰 「なんか難しいこと喋ってるけど……。」

律 「……………聡……………!!」

このテレビ中継を見て、先ほど飛び出していった聡の行動に律は確信した。再び闘いに出て行ったことを。さらにはかつて無い大規模な敵に向かって。

その状況下の中、自転車を走らせて東京方面を目指す少年……それは聡の姿だった。刻々と混沌渦巻くエリアに迫っていく。

その真下から聡の速度に合わせてラガンが地下を掘り進む。

聡 「俺にだって出来ることがある!!みんなのために闘うってな!!夏休みの特訓の成果を見せてやるぜ!!」

聡曰く、夏休み中ラガンと共に、人里はなれたとある山中の中で戦闘の特訓をしていたのだ。今まさにその成果が試されようとしていた。

避難していく市民の中を駆け抜けていく。

そしてしばらく走ると、県と都の境付近に入る。すると地表を破ってBLWの群れが出現した。BLW 02と03の姿が確認できる。更にその向こうには、多摩市方面から進行してきた別のBLWの群れが確認できる。

すぐに自転車を降りて、聡はラガンの名を叫ぶ。

聡 「ラガアアアアンツ！！」

ラガン 『おっしやああああ！！』

ドオオオオオオツ！！

地表を破ってラガンが飛び出す。聡の背後に着地し、グレンを召喚する。

ラガン 『出るおおおお！！グレエエエエエンツ！！』

ラガンの額からエネルギーレーザーが撃ち出され、そこからグレンが召喚される。グレンの口のハッチが開き、その中へと聡が飛び込む。

聡 「だあああ！！」

続けてラガンが飛び立ち、下半身をドリルモードにしてグレンの頭部の上に合体する。

ラガン 『てりやああああ！！』

グレンとラガンが合体し、強靱な両腕、両脚が形成され巨大化。合体したラガンの頭部に三日月状の飾りが現れる。

ラガン 『フォーム・アアアップ！！』

ズドオオオオオオオオ！！

その体勢からぐつと右腕をかまえて、右手首を大型のドリルに変形させる。

聡 「ドリライズ！！」

ギユフィイイイイン……ギユギユウギユイイイイイ！！！！

同時に身体の各部から多数の中小のドリルが飛び出す。高速回転するアームドリル。

その直後に別のBLW 03がグレンラガンに飛び掛る。その刹那、強烈なアップーが炸裂する。

聡 「だあああああ！！！！」

シュゴツ……ズギユドオドオギヤアアアアアア

！！！！

ドリルアップーにより縦に粉碎して吹き飛ばすBLW 03。

聡 「俺達のドリルは……。」

グレンラガン 『万物を貫く！！！！』

前方よりBLW 02が、重戦車隊のように攻めてくる。

ドウパパパパパパキヤアアン！！ ドウパキヤキヤキ

聡 「っしゃあああああ！！！！」

グレンラガン 『バーン・ドオリラアアアアッ！！！！』

ズドオシユギアアアアアアアアッ！！！！

身体が木端微塵に分解するBLW 02。止まる事無く周囲からは尚もBLW群が攻め入る。

聡 「っ…………おらおらおらおああああ！！！！」

ズドオシユドオオオオオオオッ！！！！ズドオンッ、ドオシヤアアア、ドオギャガアアア！！！！

アームドリルと左の鋼の拳を駆使してBLW 02群に襲い掛かるグレンラガン。BLW 02の身体が分解されていく。

BLW 02 「キュケクウウ……………」

ゴシヤアア！！！！

生首状態で息絶えるBLW 02。それを踏み碎いて飛び蹴りを繰り返すグレンラガン。

シユドオッ…………ドオガアアアアアッ！！！！

吹っ飛ばされるBLW 03。スライドするように着地し、周囲のBLW 02、03をアームドリルと拳で次々と殴り碎いていく。

ドオオオツ、ズデイギヤアツ！！ ドオドオガアアンツ
！！ ズドシャン、ドオシユドドオオオオツ！！ ギヤドオン
ツ、ズドオガアアアツ、ドオドオドオガアアアアツ！！！！

その最中カエルのように飛び掛る1体のBLW 03。これに
対して回し蹴りで吹っ飛ばす。

シユオツ・・・ドオツガアアアアアアツ！！！！

怒涛の勢いで次々とBLWの群れを相手にするグレンラガン。
変異体のBLW 03が飛び掛る。以前苦戦を強いられた奴だ。

変異体BLW 03 「キュキュケエエツツ！！！！」

聡 「あの時のタイプ！！だけでもう雑魚同然だ！！もういつ
ちよいくぜ！！バーン・ドリラアアアツ！！！！」

ギユゴツ、ズドオギヤドオドオダギヤアアアアアアア
ツ！！！！

W 03の肉体を一瞬で粉碎する。
グレンラガン 「聡！！己の力を信じて突き進むぞ！！！！」

聡 「ああ！！！！」

駆け出すグレンラガン。前方には、BLWの群れがまだ残って
いる。勢いよく数体をふつとばしながら群れに突入する。

ドギユズドオドオガアアアッ！！！　ズドオン、ドオドオガアン、ドギユシヤアア！！！！

直立状態をキープした状態でスライディングしながら止まるグレレンラガン。状況としては360°BLWの群れに囲まれてしまっている状態だった。

この最中、グレレンラガンは鉄人28号FXのようなポージングを取り、静止する。容赦なくBLWの群れが攻めるなり飛び掛るなりして襲い掛かる。その刹那、グレレンラガンの叫びと共に体中のドリルが高速回転しながら一斉にミサイルのように撃ち放たれた。

グレレンラガン 『フルドリルシユートオオオオ！！！！』

ギユドオドオドオドオドオドオドオドオドオドオドオオオオオ

！！！！

ズズズズズズズズズズウズズズズズズシヤシヤシヤシヤシヤシヤアアアアアアッ！！！！

撃ち放たれた多数のドリルが襲い来るBLWの群れに直激し、全てのドリルが直撃したBLWの体内に食い込む。そして次の瞬間、一斉にBLW群が爆発した。

ドオドオドオドオドオドオドオドオドオドオドオツギヤアアアアアアアアアアアアッ！！！！

周囲に降り注ぐ肉片。グレレンラガンが佇む。

グレレンラガン 『気安く近づくとモンじゃないぜ！！！！』

聡 「俺達はどんな逆境も貫く!!!」

まさに武人というに相応しいオーラを放つグレンラガン。再びドリルが形成されると多摩方面へと向かって更に駆け出した。

一方、旋風寺勇者特急隊が戦闘を展開するエリア。各々の勇者達が奮戦する。

変異体を囲むように進行するBLW 02の通常体群れ。それに向かってバスターボンバーが両肩のレールキャノンと右側背部のバスターランチャーを撃ち放つ。

ヴィギイイイン、ヴィギイイイン!! キュコオオ・・・
ドオキユゴオオオオンツ!!!

ズドオドオドオギヤアアアツ!!! ズグシュドオガア
アアアアアアア!!!

ガードしていたBLW 02の群れが爆砕される。その爆炎の向こうから変異体がエネルギー弾を撃ち出す。

ギユドオオオオオオオオ!!! ズガアアアアアアアアア
ア!!!

バスターボンバーはジャンプでかわし、着地する。そしてバスターランチャーを見舞う。

バスターボンバー 「ツメが甘いぜ!!! 吹っ飛びな!!!」

フレアダイバー 『おおおおお!!!』

走りながら迫るBLW 03の群れもビーム弾丸に撃ち碎かれて朽ちていく。

ガイドオドオドオドオオオオ・・・ズズズズシ
ヤアアアアン・・・

その中マイトガインは、大きく動輪剣を揮い、一刀の下に直立歩行し始めたBLW 02の変異体を斬り捌く。

マイトガイン 『はあああああ!!!』

グオオオ・・・ズヴァシャアアアアアアンツ!!!

斜め縦に寸断された身体が崩れ落ちる。一息つける間も無くBLW 03の変異体が飛び掛る。

舞人 「!!!左、来る・・・!!!」

マイトガイン 『でやあああああ!!!』

ズドオオオオオオツ!!! ズドオギャアドオアアアアアアアツ!!!

身体の一点を動輪剣で突き、一旦エネルギーをパージさせ、BLW 03変異体を爆発させる。

舞人 「はあ・・・はあ・・・これだけの持久戦は類を見ない

マイトガインはグツと踏み込んでバツクパツクから青白い炎を噴出して更に突き進む。

ドオオオオオオオオオオオオ！

一方、唯や和の住んでいる地区の近辺において、新たなBLWの動きが見られた。

突如として起こる地震。町中の電線が激しく揺れる。すると地面が割れ、巨大なミミズのようなものが鎌首を持ち上げるように出現した。

だが、ミミズのようなものには意思を持っているようには見受けられなかった。そのまま静止するミミズのようなもの・・・次の瞬間、ゴキユゴキユとうねり始め、先端部から巨大な子宮の塊のようなものが産み落とされた。

それはBLWクイーンの産卵器官だった。

住宅地を押し潰す塊。そのなかから、巨大なタコのようなBLWが姿を現した。触手の先端はBLW 01の頭になっており、ピュルビュルとうねったり伸びたりしながら暴れている。

BLW 11 「キユキユクウウツ！！」

8本ある触手が住宅地を襲い、住民達を捕食。更には避難中の人々をも餌食にしていく。

轟音が避難の支度をしていた唯の家にも響き渡る。

憂 「お姉ちゃん!!早く!!」

唯 「ふおおおお!!」

慌てて避難の支度をする唯。もちろんギー太も一緒だ。両親は共働きの為にいない状態だった。二人が外へ出ると、避難する最中の和と出会う。

唯 「ああ!!和ちゃん!!」

和 「唯!!もう町内の人たちは避難してるよ!!とりあえず地域の避難場所にいこう!!」

唯 「うん!!憂も早く行こう!!」

憂 「うん!!あと勇兄ちゃんとエクスカイザーにも来てもらおうよ!!」

唯 「そうだね!!勇兄ちゃん達にやつつけてもらおう!!」

憂は走りながら勇に電話をかけた。勇士朗の告白に気を使っていた勇は勇士朗と遷から少し離れた場所で待機していた。電話が鳴り、勇は憂からの着信に出た。

勇 「ん?!憂?.....もしもし、どうした?」

憂 「勇兄ちゃん!!家の近所にも怪物が現れたの!!今、お

姉ちゃんと和ちゃんかで避難しているところだけど何処に居るの？
！」

勇は再度訪れた憂達の危機に奮い立つ。

勇 「俺は市内の川原にいる！！すぐに向かう！！多分、町内の避難場所は逆に危険だ！！多分人々を狙ってくるだろうからな！！とにかく怪物から離れるんだ！！」

憂 「わかった！！」

通話を切った憂に和が話しかけた。迫り来る恐怖にはらんで、片思いし続けていた勇と久々に会えるかもしれないという期待が交錯する。

和 「勇さんはなんて言ったの？！」

憂 「来てくれるって！！あと、町内の避難場所は危険で言われた！！怪物は人を狙ってくるからだとか言ってたよ！！とにかく怪物から離れろって！！」

和 「なら、その事を避難所の人達に伝えなきゃ！！行こう！！」

3人は避難所の人達に危険だということを促す為に避難所を目指した。

勇はエクスカイザーと勇士朗にこの事を伝え、勇士朗の許を離れる。

勇 「エクスカイザー！！唯の家の近所にも怪物が現れやがった！！また唯達があぶねえ！！」

エクスカイザー 「なんだと？！仕方ない！！すぐに向かうぞ！！！」

勇 「勇士朗！！今から別の場所に現れた怪物を叩く！！その間、その子の傍に居てやれ！！がんばれよ！！」

勇士朗 「あ、はい！！」

一言エールを送って勇はエクスカイザーと去っていった。改めて漣と向き合う勇士朗。互いの照れくささ、シャイな空気はまだ隠せない。

漣 「……………」

勇士朗 「……………」

多摩市の桜ヶ丘周辺。ジェイデッカーがJバスターを構えながらBLWの群れを狙い撃つ。

ジェイデッカー 「ジェイバスター、ロック・オン！！」

ズドオオオオオ！！ ズドオツ、ズドオオオオオ！！ ズドオアアアアア！！！！

ズギヤギヤドオドオオオオ！！！！

ビームに身体の急所を射抜かれ、次々と駆逐されていく。後方から支援を続けるレイバーズを気遣うジェイデッカー。

ジェイデッカー 『レイバーズ！！戦闘はまだまだ長引く！！
損傷具合はどうか？！』

それぞれが射撃しながら答える。

ガンレイバー 『大丈夫、大丈夫！！イケルイケル！！』

ショットレイバー 『ノープロブレム！！』

ヴィガアン、ヴィガアアン！！ ヴィギディイイン！！
ヴィギディイイイン！！

ジェイデッカー 『そうか・・・よし・・・！！』

ジェイデッカーに向かって狙いを定める2体のBLW 02。
だが、逆にジェイデッカーは急所を瞬時に定めて、Jバスターを撃ち込む。

ジェイデッカー 『ここだ！！』

ズドオ、ズドオツ、ズドオオオオ！！ ズドオズドオオオオオ！！
ズドオオオオオ！！

ズギヤゴゴゴゴゴオオオオオオン！！！！

見事2体に直撃、駆逐する。その時だった。急遽展開する部隊

に冴島から直々に通信が入った。

冴島 「戦闘に奮戦している諸君！！現在の戦闘を一時的に中断させてくれ！！重大な報告がある！！直ちにBLWの群れから離脱したまえ！！繰り返す！！BLWから離脱したまえ！！」

戦闘エリアの全員 「！！？」

二人の頬に風がよぎる。しばらくの静寂の後、勇士朗は口を開いた。

勇士朗 「俺、なかなか言い出せなくて……こんなトコにずっと立たせちゃって、ゴメン。」

漣 「うん……いいよ、私もずっと勇士朗君の言葉を待ってたから……。」

勇士朗 「俺……漣ちゃんの事……ずっと……好きだった！！初めて行った桜高の学園祭の時からずっと……。」

募りに募っていた今までの想いと思い出。勇士朗はついに想いの内を漣に打ち明けたのだった。

つづく

次回予告

勇士朗はついに想いの内を打ち明けた。 漣も自分の思いを打ち明ける。そして互いの想いを確かめ合う・・・その一方で、唯達は危険な状況にさらされていた。迫る危険から逃げる唯、憂、和。彼女である唯の身を心配し、光もかけつける。だが、避難所へ向かう中、和にBLWの魔の手が襲い掛かった。

次回、新生太陽の勇者 ファイバード・サーガ 第41話 「危険からの逃避」

急げ、勇、エクスカイザー。

第40話 「無双激戦区・後編」 (後書き)

感想・意見お待ちしております。

第41話 「危険からの逃避」

ついに勇士朗の思いが漣に伝わった。

勇士朗 「……はつきり言って一目惚れだった。それで俺、次の文化祭の時に声かけようと思って連達を引き連れて去年の文化祭に行ったんだ。けど、その時にあんな事が起こって……でも幸か不幸か、その一件以来憧れだった君と関わっていく事ができた。きっかけは哀しい出来事だったけど……今こうして漣ちゃんといられる事が嬉しい……俺は……君が好きだ!!」

その声に呼応するように強い風が吹く。ほとんど夜に近い夕闇になびく漣の髪。

漣 「……勇士朗君!! 私も……気持ち……お、同じだよ!! 私は一目惚れじゃなかったけど、何度も助けてくれたし……優しいし……それに私を必要としてくれるような感じが感じられた……時々ね……気がついたら私も勇士朗君のこと……好きになつてた!」

勇士朗 「み、漣ちゃん……!!」

漣 「……漣で……いいよ。」

勇士朗 「な、なんか言いつらいな……。」

漣 「ありがとう……こんな私だけ。」

勇士朗 「そんなコトないって……それにもう一つ言っていない事が……。」

漣 「何？」

勇士朗 「君の存在が、俺の闘う力になっていた事……ピンチになったとき、君を想えばそれが力になってそのピンチを切り抜けてくれた……。これからもそうだ。俺にはみおちゃ……。んと……。ごほん！ごめん、今まで呼び捨てにたこと無かったから呼びづらい……。」

漣 「くすっ、気にしないで……。つづけて？」

勇士朗 「うん……。俺には漣の存在が必要だ！」

漣 「勇士朗君……。」

勇士朗 「俺も勇士朗でいいよ。」

漣 「ごほん……。じゃ、私も……。勇士朗……。」

互いに呼び捨てし合う二人。これまでの日々が二人を結び付けてきてくれた。

その奇跡が今この絶望と混沌を交えたような状況下の中に芽生える。暗闇で光る光りのように。

想いを伝え合った二人は、そっと手を取りあった。

勇士朗 「じゃ、じゃあ、勇さんが待つてろって言ったからここで待とうか……あ、親に連絡取ってないよね……今のうちに電話しておきなよ。」

漣 「うん……。」

その頃、唯達は避難所の方へと向かっていた。勇の予測を町の人達に伝えるためだ。

和 「勇さんの言っていた事が本当なら、被害が出る前に伝えなきゃね!!」

憂 「そうだよね!!おばあちゃん、大丈夫かな?!!」

唯 「はあ、はあ……まって……。」

途中で唯がへこたれてしまう。ギターを抱えているゆえに無理も無い。この時、和は以前にもこのような事があつた事を思い出す。

和 （?なんか以前にもこんなことがあつたような気が……あ!初めて勇さんに助けてもらったときだ!!でも何度もあの時のようには……。）

だが、轟音と共にBLW 11が迫り来る。思った以上に進行速度は速かった。

憂 「近づいてきてる!!」

和 「とにかく走ろう!!唯!!頑張つて!!」

唯 「ううう……」

その時、唯のケータイが鳴り響く。光からだった。すぐに唯はケータイに出た。

）

唯 「もしもし!光君!?光君は今どこなの?!

光 「俺、今自転車で唯ちゃん家に向かつてる!今に着くと思
うよ!」

唯 「来ちゃダメエエエ!!」

光 「ええええ?!」

一瞬ガーンとなる光。ブレーキをかけてアンバランスに止まる。突然来ちゃダメと言われれば無理も無い。

唯 「近くに怪物が出たんだよ!!勇兄ちゃんが避難所は危ないって言うから、その事を言おうと今避難所に向かつてるんだよ!!」

すぐ近くで巨大なモノが進行する破壊音が聞こえてくるのを光は聞き取った。確かに唯の言うとおりの状況だということを知る。すぐに進路方向を変えて走り出す光。

しばらく走ると、歩いてる3人組を確認する。速度を緩めて唯か確認する。暗闇でよく解らない。

光 「・・・唯ちゃん？」

唯 「光君?!よかったあああ!!」

光 「もがああ?!」

光に抱きつく唯。光はバランスを崩す。

憂 「光さん、来てくれたんですね？」

光 「うん!!彼女が心配になってね!!ん・・・もう1人は・・・??」

唯 「あ、幼なじみの和ちゃんだよ。桜高の生徒会長さんなんだよ。」

和 「確か、復活祭の時少しだけ会った事あるわね、この人。桜高の危機に生徒達を避難させてくれた4人組の1人よね？」

光 「あ、お、おう!!なんか照れくさいなあ。」

意外と可愛いような綺麗なような和に照れる光。唯がちよっとだけやきもちを懐く。

唯 「光君?!」

光 (やべ!!俺とした事が!!)

憂 「あうー!!」

和 「憂!!」

唯 「光君!! 憂が!!」

光 「え?!」

転んでしまった憂を起こそうとする和。この時、C O3アナ
ザーに襲撃されたあの日の感じがデジャヴする。

和 「憂!! 立って!!」

憂 「うん!!」

すぐに立ち上がる憂。それに伴ってメンバーは再び走り出した。その時だった。

ビュドオオオオオオオオツ!!!

和 「っ……!!!!!!」

憂 「え?!!!」

唯 「和ちゃああん!!!!」

光 「え……!!!!?」

和の側面の家を壊しながら触手が一瞬で憂をかすめて和を飲み込んだ。鎌首を持ち上げるように次の狙いを定める触手。和が飲み

込まれていく動きが触手の腕の部分に現れる。

ギョゴゴゴゴゴ……グゴゴゴゴゴ……

憂 「嘘……和ちゃん……!!!!」

唯 「いや……そんな……嘘だよ……和ちゃあああ
あああん!!」

光 「なんてこつた!!!勇士朗もいねえし!!!」

次の瞬間、エクスカイザーの音が響いた。

エクスカイザー 「スパイクカッターツツ!!!」

シュガガガガツツ!! ザシュガガガドオオオオ!!!

撃ち放たれたスパイクカッターが和を飲み込んだ触手とBLW
11の身体を斬り裂く。

BLW 11 「キユケケケケキイイイ!!!」

もがき苦しむBLW 11を他所に、エクスカイザーは触手を
キャッチして着地する。そしてすぐさまに触手を解体し、和を救出
した。

だが、気を失ったままだ。エクスカイザーは語りかける。

エクスカイザー 「君!!!大丈夫か!!!君!!!」

エクスカイザーは和の身体状態を分析する。和の身体に付着しているのは唾液のみで消化液は検出されなかった。身体的な無事を確認すると再度語りかける。

エクスカイザー 『君！！目を覚ますんだ！！む・・・！！』

グオオオオオオ・・・ヒュドオオオオオオツ！！！！

触手の攻撃が炸裂する。エクスカイザーは瞬時に和を手に乗せてかわす。

再度着地すると、駆けつけた勇に和を託す。

エクスカイザー 『やはりここは危険か・・・ん？！来たか！！勇！！』

勇 「エクスカイザー！！」

エクスカイザー 『唯の友達が呑み込まれた所を助けた！！しばらく彼女を頼む！！奴の気を引かせる！！』

勇 「ああ！！任せろ！！」

エクスカイザーはジャンプしてBLW 11の気を引かせるために戦闘に入る。その間に勇は和を抱き起こす。

勇 「友達って近所の和ちゃんじゃねーか！！おい！！しかもりしろ！！」

和 「・・・ごほッ！！げほげほ！！」

勇が和を揺さぶって語りかけると、和は、セキを咽ながら意識を取り戻した。

勇 「大丈夫か!？」

和 「ごほ!!ごほ!!……え?!ゆ、勇さん?!」

いつの間にか憧れていた勇に抱かれた状態でいた事に赤面する和。

勇 「目え醒めたか!!よかった!!」

和 「で、でも、何で勇さんが……?!」

勇 「エクスカイザーが和ちゃんを助けてくれたんだ……で、今ここから奴を離れさせる為に闘ってくれている……俺が看病を引き受けたってところか。」

和 「……でも、ありがとうございます。以前も助けてくれましたよね?」

勇 「覚えててくれたのか……ははは、そうだな。前にもあったな。」

和 「勇さん……。」

勇 「ん……?」

和が言いかけたその時、唯達が和に駆け寄る。唯はそのまま和

に抱きついた。

唯 「和ちゃあああん!!」

和 「ゆ、唯!!」

ダダダア・・・がばあッ

和 「ちょ・・・唯・・・苦しい!!」

唯 「あ!!ごめん・・・えへへへでもよかつた、和ちゃん
が助かって!!ありがとう!!勇兄ちゃん!!」

勇 「俺じゃねーって!!エクスカイザーだよ、エクスカイザ
ー!今避難所から奴を離す為に闘ってくれている。」

憂 「エクスカイザー・・・。」

光 「勇者だな・・・エクスカイザー・・・。」

夜の桜ヶ丘に響き渡る轟音。エクスカイザーが触手をかわしな
がらジェットブルーメランを撃ち放って攻撃を加える。

シュシュシュゴオオオオ・・・ドオドオドオガアアア
アン!!

エクスカイザー 『できるだけ引き離さなければ!!』

ヒヒユルルルルウウツツ・・・!!

ドオドオドオガガアアアンツツ!!

触手で破壊される住宅地。一本の触手目掛けてスパイクカッターを見舞う。

エクスカイザー 『はっ!!!』

シュシュシュシュガガガアツ……ズシュシヤシヤシヤアアアン!!!

触手がゴボウを切るように細かく寸断される。更にライオンの口からエネルギー弾を撃ち放つ。

エクスカイザー 『フレーミング・ノウアツ!!!』

ディギユココオオオオオオツツ!!!!

ズギユウドオガアアアアアア!!!

BLW 11 「キュルルツルガアア!!!」

苦しむように叫ぶBLW 11。だが、次の瞬間別の触手がエクスカイザーに襲い掛かった。

ヒュシュルウウ……ドオガアアアアアアアンツ!

!!

エクスカイザー 『ぐあああああ!!!』

そして、吹き飛ばすエクスカイザーの脚をからめとり、避難所の

方面へと投げ飛ばす。

シュルルッルウウウツッ!!

エクスカイザー 『しまったあつ……!!!!』

飛ばされたエクスカイザーが、勇達の近くに落下する。巻き起こった砂煙が一行を襲う。

ズドオオオオオン!!!!

勇 「うお!!」

光 「うひゃああ!!」

唯・和・憂 「きゃああああ!!」

ズズズウウウウウ……

ゆつくりと上体を起こすエクスカイザー。今の衝撃でケガ人が出たのか気にかける。

エクスカイザー 『くつ……す、すまない!!不覚をとつた!!怪我は無いか?!』

勇 「ああ!!みんな無事だ!!今までサンキューな!!」

エクスカイザー 『一応は離れてくれたが時間の問題だ。一気に決めるぞ勇!!』

和 「勇さん……。」

勇の意志とキングエクスカイザーの意志が融合。キングエクスカイザーの両眼に光が灯る。

ヴィギンツ……!!

キングエクスカイザー 『融合巨大合体、キングエクスカイザー……!!』

一方、急遽冴島の通信によって戦線離脱を余儀なくされたM・P・D・BRAVEと旋風寺勇者特急隊が多摩市の対岸側、府中市の中学に設置されたBLWクイーン対策本部に集結していた。

今回ばかりは自衛隊も規模を上げて全面協力の形をとっていた。通信装甲車の部隊やヘリが集結している。

対策本部のテント内から冴島が出てくる。そして面前の勇者部隊に重要な報告を伝達する。

冴島 「ここに諸君らを戦線からあえて離脱させてまで集結させた理由として、今回の事件にあたって、陸上自衛隊との連携作戦を執る事となった事、本日を持って、M・P・D・BRAVEと旋風寺勇者特急隊を一つの特急部隊として結成する事になった事を報告するためだ！」

マイトガイン 『なんだと?!』

ジエイデッカー 『我々の部隊と旋風寺特急隊が?!』

舞人 (以前から極秘裏に話が進んでいたが、その時が今日になるとはな・・・ついに勇者達が一つになるときが来たんだな・・・)

吉崎 「私達の部隊は今後どうなるの?!」

葉山 「解体ツスか?!」

冴島 「・・・それ以外にも戦闘の態勢の立て直し等を兼ねてではあるが、今後今回のような大規模の巨大生物災害に対応する為に、専門の特殊部隊を創設する必要性が生まれた。ここに対特殊生物戦闘部隊、ブレイヴ・フォースの設立を宣言する!! 諸君らの勇敢なる意志に期待する次第だ!! 尚、正式な拠点の設置は後日追って報告するつもりだ。」

マイトガイン 『ブレイヴ・フォース・・・!!』

ジエイデッカー 『今までは各組織が各々に行動をしていたが、これから我々は一つの部隊として動いていくんだな!』

マイトガイン 『ファイバードやエクスカイザーも加盟するのだろうか? エクスカイザーはジエイデッカーのチームの別働隊だったが彼は違うからな・・・。』

ジエイデッカー 『そのことなら冴島警視總監の事だ・・・行動面の配慮した上で考えていらっしやるだろう。』

新たな部隊の設立の宣言。正に勇者の力が一つになる時が来たのだ。時を同じくして、キングエクスカイザーが正義の鉄槌を下そうとしていた。

ズギヤシャアアアアンツツ!!!

カイザーソードで斬り払われるBLW 11の触手。本体にもカイザーソードの斬撃が見舞われる。

キングエクスカイザー 『しゃあああああ!』

ズダシャギヤアアアアアアアツツ!!!

BLW 11 「キュルルルルウウウウ!!!」

苦し紛れに残りの触手を伸ばし、キングエクスカイザーに襲い掛かる。だが、たった一振りの薙ぎで全てが寸断される。

ヒュゴオオオツ・・・ズギヤアアアアアアアツツ!!!

触手を吹っ飛ばすと、キングエクスカイザーは止めの体制に入る。片腕でカイザーソードをかざす。

キングエクスカイザー 『サンダアアアア・チャージアアアアアツツ!!!』

ヴィギユアアアツ!!

ライオンの口内から、サンダーエネルギーがカイザーソードの刀身に撃ち出される。片手で握り締めたカイザーソードを天にかざ

す。

キングエクスカイザー 『……サンダアアア・フラアアアアアッシユツ!!!』

ヴィギユガアアアアアアアアアッ!!!

サンダーエネルギーの刃が空に向かって奔る。そして一気にB
LW 11に向かって振り下ろす。同時に産卵器官も斬り裂く。

キングエクスカイザー 『はああああああ!!!』

ズドオギャシャアアアアアアアアアガアアアアアアッ

ッ!!!

振り下ろされたサンダーエネルギーの刃が斬り続け、大爆発を引き起こさせた。

ギギギユゴガアアアアアアアア……ドオズギャドオ
ドオドオドオガアアアア!!!

爆炎をバツクにキングエクスカイザーはカイザーソードを収容し、胸のライオンが勝利の雄叫びを上げた。

グオゴゴゴオオオンッ!!!

勇士朗の待つ所へと再び舞い戻るキングエクスカイザー。勇は漣を1人にさせないために唯達をこの場に連れてきた。お互いの無事を分かち合う漣と唯達。

漣 「唯に和、それに憂ちゃんも無事だったんだあ。」

唯 「漣ちゃんああん！！恐かったんだよお！！」

憂 「ご無事でよかったですね！！」

和 「ホントよかった！一時はどうなるかと思っただけど……」

「

漣 「私もなんだ……ホント危なかったんだよ……」

勇士朗と光も互いの無事を称える。

勇士朗 「光、なによりだな。」

光 「ああ、ホントだぜ……蓮や俊達は？」

勇士朗 「さつき電話してみた。二人とも無事だったよ。他の軽音部のみんなも。」

そしてタイミングを見計らって勇は勇士朗の肩を叩く。

勇 「……で、上手く告げたのか？」

勇士朗 「……はい！！もう、大丈夫っすよ！！」

光 「告れたって……漣ちゃんにか？！」

勇士朗 「ああ！！」

光 「やったな！！おめでとさん！！闘いが終わったらなんか
おごれよな！！」

勇士朗 「そういうお前もな！！」

拳と拳を軽くぶつけ合う勇士朗と光。 溇の方も盛り上がって
いた。

憂 「おめでとすごいです！！」

唯 「ホントに？！告白されたの？！溇ちゃん！！」

和 「いいなあ・・・溇・・・」

溇 「あはは、和もがんばれ！！あの人なんでしょ？」

溇が勇に振り向く。和は若干赤面した。

和 「ま、まあね・・・」

この光景を微笑ましく見続けるキングエクスカイザー。その時、
キングエクスカイザーは、地球に降り立って以来のブレイブ宇宙警
察機構からの通信をキャッチした。

キングエクスカイザー 『む・・・これは宇宙警察機構から
の通信！！』

ブレイブ星人 「こちら宇宙警察機構！！エクスカイザー並び
にファイバードのサポートビークルユニットが完成した！！これで

今後のデストリアンとの戦闘が楽になるだろう。状況はどうだ？」

キングエクスカイザー 「現在、地球人が生み出した生体兵器の大規模な事件に直面している！！今の報告、ありがたく頂戴する！！これでグレート化が可能になるわけだな？」

ブレイブ星人 「ああ！！こちらの方で双方の異次元ドックにストックしておく！！今しばらくかかるが、ファイバードにも伝えておいてくれ。武運を！！グットラック！！」

キングエクスカイザー 「グットラック！！」

キングエクスカイザーは通信を終えると、恋バナで盛り上がる勇士朗達を見下ろす。

一時の安らぎだ。今後は更なる激戦が予想されるだけにより安らぎ感が強くなる。

この間にも産卵器官の損傷をもともせず、BLWクイーンは活動し続けていた。

BLWクイーン 「クケケケアッ！！」

つづく

次回予告

新たに新結成を宣言されたブレイヴ・フォース。メンテナンスを受けながら超AI勇者の面々が顔を改めて会わせる。そこへさわ子

に後押しされた要が着任。冴島は未だ罪悪感を懐く要に大器な一面を改めてみせる。一方でグレンラガンはBLW群と単身闘い続ける。そんな中、再び勇士朗達の前にデストリアンが襲来するのだった。

次回、新生太陽の勇者 ファイバード・サーガ 第42話 「カオス・メテオ」

混沌に更なる混沌が渦巻くか。

第41話 「危険からの逃避」(後書き)

感想・意見、お待ちしております。

第42話 「カオス・メテオ」

多摩市の対岸側の府中市に対策本部が設置された。警官隊や自衛隊の隊員達が各々の任務に追われて動いている。

高い光度のライトが照らされた府中市の中学校のグラウンドには、ジェイテッカー、マイトガインとそのサポートロボットが集結していた。

新たに結成されたブレイヴ・フォー。現段階ではカタチのみであるが、冴島は、ゆくゆくは専用の拠点を決めるつもりでいた。

冴島 「こうして見ていると魂が奮い立つ！！ロボットが集結するとカッコイイの一言では納まらんっ！！」

藤堂 「旦那、のんきな事言ってる場合じゃあないですよ。向こう岸じゃあBLWが群れでうごめいているんですから……。」

冴島 「ゴホンっ！解っている！ところで整備班は配置できたのか？」

藤堂 「もう万全ですよ。今、全ロボットにメンテナンスを施す準備に入っています。今にメンテナンスラインが組みあがり、持久戦に備えて万全体制になってもらわないと……。」

冴島 「うむ……それに今回の一件において、自衛隊と共

闘戦を行なう。どうやら自衛隊も二足歩行ロボットの部隊を編成したそうだ。」

藤堂 「話には聞いていましたが・・・」

立川の陸上自衛隊駐屯地にて、対特殊生物対策部隊の二足歩行ロボットが搬入されていた。

開発コードネーム、ヘルダイバー。正式名は対特殊生物陸戦兵器・ヘルトルーパー。

装備は右腕に装備された、90mmチェーンガンと接近戦のコンバットナイフのみである。ジエイデツカーやレイバースとは違い、量産部隊として運用される事を前提した機体であるため、コストダウンを図られているのだ。

さらにはあえて有人機として直接パイロットが操縦する機構になつており、いわばガンダムのMSモビルスーツに迫る機構を有したロボットでもある。

搬入状況に対特殊生物対策部隊長、高島に報告する部下の自衛隊員。双方共に専用のヘルメットとゴーグル、戦闘スーツを装着している。

自衛隊員 「搬入作業、間もなく完了いたします!!」

高島 「了解だ。この出撃が、10年以上前の自衛隊の汚名を正規に返上するモノと私は考える。間もなくミーティングを開始する。部隊の者たちを集結させる!」

自衛隊員 「は！！」

府中市の中学のグラウンドで各勇者ロボット達にメンテナンスが施される。CPUユニットにチェッカーを接続して異常個所を割り出すメカニック達。別のメカニック達はエネルギー充電や、ジョイント部のグリスアップ、各武器の点検を行なう。

マイトガイン 『しばらくは休息できるな。無論私は機械故に疲れはしないが、舞人はしばらく休んだ方がいい。いずれまた戦闘になる……。』

舞人 「そうだな。しばらく持久戦が続いたからな。そうさせてもらうよ……すまないな、マイトガイン。」

マイトガイン 『気にするな。ゆっくり休んでくれ……。』
歩きながらマイトガインに手を上げてサインする舞人。

片隅にあつたテント内で寝転がる舞人。紬にメールを打とうとするも途中で考え込んで断念した。

舞人 「やっぱ……直接声を伝えなきゃ！！！」

電話に切り替え、紬に繋ぐ舞人。するとたった1コールで紬が出た。

紬 「舞人君?!」

感じからしてずっと手元にケータイを持っていたのだろう。それだけ想ってくれているだけでも舞人は心強く想った。

舞人 「随分出るのが速かったね？ひよっとしてずっと俺からの電話を待っていてくれたのかな？」

紬 「うん！どうしてわかったの？」

舞人 「ものの1コールで出てくれれば解るさ！でもそれだけ俺の事を想っていてくれてありがとう！！紬さん！！」

紬 「ずっと心配してたからそう言ってくれと凄く嬉しいッ！まだ当分帰れないの？」

舞人 「ああ・・・だが、おれ自身は明日の朝には帰りたい・・・この忌まわしい長い夜を終わらせてね・・・帰ったら思いっきり甘えていいかな？」

紬 「もう！舞人君たら・・・いいよ？甘えても。思いつきり私が可愛がつてあげるから！」

舞人 「はははは！楽しみにしてるよ！！それと、今度またデートに行こう！！この闘いが終われば少なくともBLWの事件は終わる・・・。」

紬 「少しは平和になるかな？」

舞人 「地下から化け物が出てくる事はなくなると思う。その時は思い切つて外を歩けるよ！！」

紬 「でも、空から降ってくる怪物はまだなんでしょ？」

舞人 「そうだな・・・デストリアンに関しては何も・・・
今はとにかくBLWの駆逐だ!!」

紬 「頑張つて・・・必ず帰ってきて・・・じゃなきゃ甘え
させないよ?」

舞人 「俺だつて君に甘えたいよ・・・だから必ず帰るつて!
」

テントの中でケータイ越しに、紬とストロベリートークをする
舞人。その外ではロボット同士の会話がはずむ。

フレアダイバー 「君たちがレイバーズか!これまでの共闘に
感謝する!」

ショットレイバー 「ああ!こちらこそな!まだまだこれから
だが・・・。」

フレアダイバー 「確かにな。向こう岸にはBLWの群れ共が
数多く跋扈している。」

ガンレイバー 「しかし、こうしてあんた達と話すのは初めて
だよな?」

ストライクボンバー 「それもそうだな。これからは同じチー
ムとして活動できるようだからな!改めてよろしく!ストライクボ
ンバーだ!!ちなみにバトルアップ時の名はバスターボンバーだ!
」

ガンレイバー 「俺はガンレイバーだ!ハンドガン系の射撃と

格闘が俺の戦闘スタイルだ。」

フレアダイバー 「フレアダイバーだ！重火器射撃による攻撃とマイトガインの援護をしている！」

ショットレイバー 「ショットレイバー。同じく射撃による援護が得意だ。」

サポートロボットのメンバーが各々に会話する中、整備員は作業に追われていた。

整備員A 「バスターボンバーのランチャーの状態、チェックしておけ！」

整備員B 「レイバースのエネルギーガン、エネルギーランチャー共に状態チェック完了！エネルギー充電開始しました！！！」

整備員C 「Jバスターは回収！新武装のJマックス・キャノンのセットアップとエネルギーチェック急げ！！！」

整備員D 「メンテナンススレーンの準備完了！」

臨時用のメンテナンススレーンのフレームがクレーン車と4機のブロッケンによって組み上げられた。

尚、ブロッケンは有人機として運用されていた。組みあがったレーンを藤堂が確認すると、マイクで超A Iロボット達に叫んだ。

藤堂 「お！メンテナンススレーンが組みあがったみたいだな・・・
おーい！！お前らメンテナンススレーンについてくれ！！！」

マイトガイン 『どうやらメンテナンスの準備ができたみたいだな……。』

ジエイデッカー 『そのようだ……。』

各超AI勇者達は、各レーンに就いてメンテナンスが施される。その最中、ジエイデッカーは隊長である要の事を想う。

ジエイデッカー () 隊長……さわ子さんと無事でのるうか……?) ()

要を1人の男としてその場を後にしたジエイデッカー。その後の安否が気になっていたのだ。

その時だった。中学校のグラウンド内に一台の覆面パトカーが到着した。そのパトカーからは、要とさわ子が出てくる。要はさわ子の手を繋ぎながら肩を並べて対策本部内に向かう。

ジエイデッカー 『ん?!隊長……?!』

要 「……さわちゃん。」

さわ子 「何?」

要 「本当にいいの?俺が傍にいなくても……。」

さわ子 「うん……今、あなたのすべき行動は私の保身なんかじゃない。ジエイデッカーやレイナ達を隊長として指揮してあげるべきよ……確かにさっきまではパニックだったけど、もう

大丈夫だから……。」

要 「……すまない……!!」

この時、さわ子とすべき任務に対してある意味矛盾にも似た自責の念を感じていた。さわ子の傍に居て上げられない事、プライベートを優先してしまった事……任務を後にしてしまった選択に責任を感じていたのだ。無論これはジェイテッカーの人的な配慮であって、誰も責任はないのだが。

さわ子 「何謝ってるのよ……気にする事ないわよ……私だってワガママ言えばもっといたい。けど誠人君には他に待ったり必要としている人がいる……特に今はこんな状況だからね。」

要 「さわちゃん……。」

さわ子の為にと想っていた要が、逆にさわ子に後押しされる。

さわ子 「ほら、もっと速く歩く！」

要 「あ、ああ……。」

そして要は冴島の許へと赴く。さわ子は入り口付近で立ち止まる。

さわ子 「さ、要隊長！」

ぱんつと要の背中を後押しするさわ子。意を決して対策本部テント内に入る要。

要 「失礼します!!本日のこのような事態に送られて着任したことをこの場を借りて謝罪致します!!」

一時の敬礼の後、深々と頭を下げる要。だが、冴島は頭を上げるよう命じた。

冴島 「要君・・・頭を上げたまえ・・・」

要 「はっ・・・」

冴島 「話はジエイデッカーから聞いている・・・彼女の傍に居てあげたらしいな。」

要 「申し訳ありません・・・!!!!」

目を強く瞑って更に謝罪する要。だが、事は杞憂に終わる。

冴島 「いいや!!!!すばらしい!!漢だ!!!!要君!!!!」

要 「ええ?!!」

目が点になる要。この時、冴島の器の大きさが計り知れなかつた事を思い出した。

冴島 「私にも妻がいるが・・・おそらく私も同じような目に遭ったら君と同じ行動をとるだろう!!!!なに!!!!人として、漢として当然の事だつ!!!!気にするな!!!!」

要 「冴島警視總監・・・!!!!」

冴島の大器さを嘯み締め、歡喜に震える要。その直後、要に冴島はブレイヴ・フォースの結成について通達した。

冴島 「ゴホン！まだ君には伝えていなかったな。尚、本日付をもってM・P・D・BRAVEと、旋風寺特急隊を統合し、新たに対特殊生物対策チーム、ブレイヴ・フォースを結成した。厳密に言えばその事を宣言したのだが・・・そして、君の今までの功績を考え、その隊長に任命する！！いいかね？！」

要 「え？！じ、自分をですか？！」

冴島 「ああ！これまでの君の功績は非常に優秀だった。それに部下からの信頼も厚い・・・上に立つものとして、十分な人格者でもある！！よって君を隊長に任命する・・・ちなみに私は総司令官だ。」

要 「ありがとうございます！！冴島警視總監殿・・・ですがその事とは別に一つ質問があるのですが・・・。」

冴島 「なにかね？」

要 「ファイバードやエクスカイザーも任命されるんですか？」

冴島 「ああ、無論だ！！ただし、民間人故に普段の生活を優先する。これまで同様有事の際に現場へ出向いてもらう事にする。尚、ファイバードの火鳥君は、私直々の特命によって来年度より正規の隊員として内定した！！君の部下として指導の方を頼むぞ？」

要 「そうなんですか？！」

冴島 「ああ！よろしくたのんだぞ！」

要 「はっ！」

再び要がテントの外に出ると、さわ子が待っていてくれた。

さわ子 「どうだった？」

要 「さわちゃん……はははっ、俺の考え過ぎだったみたいだ。それどころか、新たに結成されたチームの隊長に任命されたよー！」

さわ子 「ホントに！？よかったじゃない！」

要 「うん！責任は重くはなるけど……それ相応にやりがいはある！」

要はさわ子を連れてメンテナンスレーンへと向かった。メンテナンスを受けていたジェイデッカーの許へ着く要。

ジェイデッカー 『隊長……！それにさわ子さん！何故ここへ?!』

すると要よりも先にさわ子がジェイデッカーを見上げながら口を開いた。

さわ子 「私がここへ来るように言ったのよ。」

ジェイデッカー 『さわ子さんが?!』

さわ子 「私の事よりも、今闘ってるみんなのところに行ってあげてね……って……それと……あ、これは誠人君が言うべきことね……ほら、さっき任命されたんでしょ？」

要 「あ、ああ……ジエイデッカー……いや、ここにいる超A I戦士達に告ぐ！俺は、新たに結成されたブレイヴ・フォースの隊長に任命された！その隊長という役柄に恥じぬよう努力する！！今後ともよろしく頼む！！」

ジエイデッカー 「あなたが隊長であれば、何も言う事はありません！！要隊長、おめでとうございます！！」

ガンレイバー 「いよっ！隊長！！あんたが大将！！」

ショットレイバー 「あなたがやはり隊長という言葉に相応しいです！！」

従来からの部下達が要を称える。旋風寺特急隊のメンバーも間を置いて要を受け入れる。

フレアダイバー 「……我々の方からもよろしく！」

バスターボンバー 「あんたはいい人そうだな！！よろしくな！！」

マイトガイン 「舞人以外の隊長……だが、感じるオーラは似たものがある！よろしく頼む！！」

要 「みんな……。」

一振りの回し蹴りで3体のBLW 03を吹っ飛ばす。そこから飛び掛ってBLW 02の頭部の脳天にドリルをブチ込む。

聡 「……うをらああああ!!!!」

グレンラガン 『ドリルツ……ゲイザアアアアアアアアア！』

ズドオラグシャガガガガズシャドオオオオツツ!!!

左腕をかざし、BLW 01が群れる箇所へ向ける。手首両端のドリルがミサイルのように打ち出される。

聡 「ドリル・ショットツ!!!」

ズドオオオオツツ……ドギヤゴオオ!!!

2体が碎け散る。ドリルが撃ち放たれた部分からドリルが生み出される。そして次々と連発し、マシンガン並みの速度に速射されていく。

ズドオドオドオドドドドドドドドドドドドドドドドドドドドドドド

オオオオオオ……!!!!

ズガギャットドオドオシユガゴドオドオドオドオガガガガガズズズズズズウドオオ!!!

多数のBLW 01が木端微塵になった。背後からBLW 02群が攻撃をかける。

ズパパパパコオオオツ！！　ズズズズウウウ
ンツ！！！！

聡 「ぐあ・・・！！」

斃しても次々と襲い来るBLW群。まだクイーンまでは辿り着けない。

聡 「斃しても次々と・・・！！」

グレンラガン 『気合と根性だ！！守りたいものをイメージしろ！！！！』

聡 「守りたいものを・・・イメージ・・・！！」

聡は闘いながら脳内に守りたい存在をイメージする。當哉。琢磨。両親。弟の勝汰。そして姉の律・・・それらのイメージを目に焼きつけ、BLW 02の群れに突貫する。

聡 「・・・當哉・・・琢磨・・・父ちゃん、母ちゃん・・・勝汰・・・姉ちゃん・・・うをおおおおおおおおおお
おおおおおお！！！！」

気迫の叫び声を上げながら聡は必殺技を繰り出す。高速回転する右拳ドリルによる激しい連続烈拳が唸る。

ズツドアアアアツ！！！！

グレンラガン 『連牙烈拳！！！！』

ギユギイイイ・・・ズギユオドオドオドオドオギヤガ
ガガガガガアアアアアッ！！！！

肉体がブっ飛びながら破砕されていくBLW 02達。グレン
ラガンと聡の勢いは止まる事をしなかった。グレンラガンは、混沌
を突き進む。

一方、勇士朗と勇も戦場へと赴こうとしていた。そんな中で漣
は、近所であるにもかかわらず、今まで勇となかなか接点が無かつ
た和の後押しをする。耳元で漣がささやく。

漣 (ほら、和っ。何かアプローチしなきゃ！)

和 (で、でも・・・何をしたらいいのか解らないし・・・)

漣 (思った事言えばいいと思うよ・・・)

和 (うん・・・でもそういう漣だってズルズル来たじゃない。
い。)

漣 (でも、私も色々話したり遊んだりしてきたから・・・)

和は、深呼吸して勇に話しかける。

和 「あ、あの、ホントに何度も助けてもらってありがとうご
ざいます・・・それに、勇さんは凄いですね。あんな風に戦える
なんて・・・。」

勇 「お？お、おお。まあ、あれは融合合体って言うんだけどなっ。以前に和ちゃんと唯を助けた時に初めてそれで戦ったんだ。」

和 「恐くは・・・なかつたんですか？」

勇 「恐いとか恐くないとかの時限じゃネーナ・・・大切なモンを奪い去ろうとするアイツらが許せなかった・・・正直ブチのめしたかつたんだ。そのぐらいデストリアンが憎かった。増してや今はこんな状況・・・余慶に震え立つ！！」

和 「強いんですね・・・勇さんは。」

勇 「いやっそ、そんなことねーよ！エクスカイザーに融合させてもらってるだけだしなー。」

和 「そんな・・・謙遜しなくてもいいんですよ？」

そんな二人の会話に唯が実にKYなまでに口を挟んだ。

唯 「和ちゃん、よかつたね！勇兄ちゃんところうして話せて！」

和 「ちょ・・・唯！！」

漣 「唯は空気読め！！」

憂 「お姉ちゃん・・・。」

その唯の発言がきっかけで流石に勇も和の気持ちを察してしま
う。

勇 「え？お？う？おおお？！」

勇士郎 「あゝ……………」

唯 「ほえ？？」

光 「それは言っちゃダメ……………」

唯の肩にポンと手を置く光。

和 (ああ…………恋って…………バレたら終わりよね…………
…………?)

その時だった。突如、勇士郎とキングエクスカイザーはデストリアンの接近を察知した。

勇士郎&キングエクスカイザー 「……………デストリアン
っ…………！」

漣 「ええ？！」

勇 「こんな時にか？！」

冴島達にもこの情報が行き届く。だが、今現在超AI戦士達がメンテナンス中の事もあり、ファイバードとエクスカイザーに託す。

冴島 「何？！デストリアンの隕石を捉えた？！」

警官 「はい！！たった今、NASAからの情報通達がありま

した!!」

冴島 「……だが、今現在我々はBLWで手が一杯の状況だ!!今は彼らに託すしかない!!」

警官 「彼ら……!?!」

冴島 「エクスカイザーとファイバードだ!!」

上空から迫り来る隕石が空中で爆発する。降り注ぐ残骸。

ズドオゴオオオオオオオオオオオオオオオ!!

女子一同 「きゃあああ!!」

勇士朗は直ぐに澪をかばう。光も唯を抱いてかばった。

勇士朗 「澪!!」

光 「唯ちゃん!!」

勇 「っ!!」

勇も咄嗟に和と憂をかばった。和は勇のこの行動に驚くと共に胸がドキドキするのを感じた。

和 (勇さん……?!でも……なんだか嬉しい……)

更にその彼らをキングエクスカイザーがかばった。

キングエクスカイザー 『ここにいる者達は傷つけはさせん！』

地上に落下する新たなデストリアン。中央に巨大な一つの目を持ったクラゲのような頭部の中央からは強靱なカギ爪を持った脚が二本生えている。さらに触覚、触手の先端にはクリアグリーンの球体がついている。大きさはファイバードやキングエクスカイザーよりもかなり大きい。

D 24 「ギギギギイイイ！！！！」

一声上げると、街の方へ触手と触角を向ける。そして破壊光戦を放った。爆砕する街並み。

ウツ・・・
キユギユキユギユウギユギユウギユウギユウウウウウ

ズギヤドドオドオドオドオドオドオドオドオドオガガガア
アアアアアアアツ！！！！

勇 「くそツ・・・のヤロウ！！！！」

キングエクスカイザー 『二人掛りで挑むのがいいだろう！！』
勇！！！！』

勇 「ああ・・・和ちゃん！！闘いが終わったらどっか行こうな！！！！」

和 「え・・・は、はい！！！！」

澁 「勇士朗……!!」

ファイバード 『澁……!!』

つづく

次回予告

新たに飛来したデストリアン。それは今までの種を凌駕する存在だった。かつて無い苦戦を強いられるファイバードとキングエクスカイザー。一方でグレンラガンも奮闘に奮闘を重ねる。

圧倒的な強さに窮地に追い込まれたファイバードの姿に胸を痛めた澁はエールソングを歌う行動に出る。それとほぼ同時にファイバードの新たな力のカギも誕生。二つのチカラがファイバードに奇跡を起こす。

次回、新生太陽の勇者 ファイバード・サーガ 第43話 「最強武装合体」

そのチカラはまさに最強の勇者か……。

第42話 「カオス・メテオ」(後書き)

感想・意見、お待ちしております。

第43話 「最強武装合体」

キングエクスカイザーが、空中で飛行する4機のUFOを追う。その姿は一般的なUFOではなく、「劇場版・機動戦士ガンダム00」に登場した小型のELSのような未来的なフォルムの戦闘機だ。だが色はオレンジ色に光り輝いている。

キングエクスカイザー 「こいつら……デストリアンと何か関係あるのか?!?!」

デストリアンの出現において、未確認飛行物体が同時に現れたのは今回が初めてであった。4機のUFOはUターンしながらキングエクスカイザーにレーザーを放ち始めた。

キュファイイイ……ズヴィギイインツ!! ズヴィギイン、ズヴィギイイイン!!

4機が一斉にキングエクスカイザーを攻撃する。

ズドオギャー!! ドオゴオ!! ズドオオ!!

直撃するも、キングエクスカイザーの強靭な装甲にはビクともしなかった。加速しながらキングエクスカイザーは、1機をカイザーソードで薙ぎ払う。

キングエクスカイザー 「おおおおお!!」

もはや成す術がないことを悟ったのか、U F Oは急速離脱して一気に成層圏へと飛んでいった。

キングエクスカイザーはこれを更に追おうとする。だが、中からエクスカイザーが勇に現状を優先するように促した。現時点ではB L Wが深刻なのだ。

エクスカイザー（勇！気持ちは解るが、今は深追いするよりも、B L Wと出現したデストリアンの駆逐が優先だ！）

勇（……そうだな……じゃあ、アイツらは一体何なんだ？！）

エクスカイザー（何処かの星の知的生命体であることは確かだ。それも好戦的な……！）

勇（好戦的ねえ……ま、いずれにせよ上等だ！！何星人か知らんが次ぎ来たら正体の皮を剥いでやるぜ！！）

一方、ファイバード。絶え間なく破壊光戦を撃ちつづけるD 24の集中砲火にフレイムフィールドで対抗し続けていた。フィールドの表面上で爆発が連続で響き続ける。

ビギユオオオドオドオドオドオドオドオドオドオドオドオドオドオドオオオオオ……！！！！

ファイバード『このままじゃ防戦一方だ……透達は逃げ切れたか……?!!!』

後方を確認するファイバード。今度こそ十分な安全距離に逃げ切れた事を確認した。

ファイバード 『……………いくぜツ!!』

ズツ…………ドオオオオツツ!!!

ファイバードは、フレイムフィールドを解除し、フットバーニアを駆使してD 24に向かって飛び立つ。右手にフレイムソードを握り締めて突貫していく。後方でこの光景を漣や光達が見守る。

光 「お！反撃か?!」

漣 「勇士朗…………みんなの為に…………」

いつの間にか勇士朗を呼び捨てにしている漣。だが、その眼差しは憂いに満ちていた。漣は、D 24をこれまでに無い不安を覚えさせる相手と感じていた。

和 「あ！勇さんだ!!」

同時タイミングで降下してきたキングエクスカイザー。右手にかざしながらD 24に斬り掛かろうとしていた。

キングエクスカイザー 『だあああああ!!』

唸りを上げながらカイザーソードが揮われる。だが、次の瞬間に太い触手が2体の勇者を弾き飛ばした。

ギユギユフオツツ…………ドオツドオガアアアアアア

ツッ!!!

ファイバード 「あああああ!!!」

キングエクスカイザー 「何いつ!!!?」

更にはその状態から触手の先端を勇者達に向ける。近距離から撃ち放たれる破壊光戦。

ヴィギユギユウドオドオドオオオオオオツツ!

!!

ズズズズウウウウウウウウツツ!!!

ファイバード&キングエクスカイザー 「!!!!!!」

直撃を食らい、叫ぶ間も無く更に吹き飛ばされた。建造物を崩しながら地面にポディーが叩きつけられるファイバードとキングエクスカイザー。

ズズドオガドオオオオオツツ!!!

澪 「勇士朗!!!」

和 「勇さん!!!」

唯&憂 「勇兄ちゃん!!!」

光 「直撃だぞ!?!」

戦が突き進んできた。

ヴィギュギュウギュギュウドオオオオオオオ！！！！

ファイバード&キングエクスカイザー 『な ？！！』

ドオギャゴオオオオオオオオオオオオオオオオオツツ！！！！

再度吹き飛ばされるファイバードとキングエクスカイザー。吹き飛ばされた2体によって街の被害が拡大してしまう。

弄んでいるかのように一声叫ぶD 24。夜の街に響き渡る。

D 24 「キユキユキユキヨキキキイイイツ！！！！」

いつもの武装合体をしたファイバードや、キングエクスカイザーならば、このタイミングで止めを刺しにいていた。だが、今回ばかりは必殺技を繰り出させる猶予を与えてはくれない。

漣はこの状況を危惧する。

漣 「……………いつもならばこんなに苦戦しないのに……………！！」

和 「いつもなら……………？それだけ相手が強くなっている事……………？！！」

漣 「そうとしか考えられないよ……………勇士朗や勇さんでも齒が立たない相手なんだよ！！！！」

唯 「勇兄ちゃん・・・大丈夫なの??」

憂 「お願い・・・勝つてっ!!」

光 「勇士朗・・・!!」

一方でBLWと爆闘し続けるグレンラガンも疲労の色が見え始めていた。アームドリルのナックルでBLW 03を吹き飛ばすものの、息が切れ始めていた。

聡 「うおおおおお!!」

ズドオルギヤアアアアン!!

聡 「はあ・・・はあ・・・はあ・・・」

グレンラガン 『大丈夫か?!聡!!』

聡 「ああ・・・このぐらい、ドウって事ねーよ!!おりゃあああああ!!」

ドオギヤアアアアンツツ!!

だが、本人は強がりを見せていた。修行したとはいえまだ成長途中の中学生の身体には酷なものであった。それに追い討ちをかけるかのように、地下よりBLW 02群が姿を現す。攻撃しながらグレンラガンに攻め入る。

聡 「ちツ!!切が・・・ねーよ・・・」

高島 「それで我々はどう行動すればいいのだ？」

冴島 「自衛隊には、選定した穴の周囲の各ポイントに降下してもらい、周囲のBLWの戦闘及び駆逐を一任する。それによって多少なり群れが分散し、彼れらの突破口が作りやすくなる。空中から直接攻め込まないのは、穴へ出向けばたちまちにクイーンの餌食となる為だ……。とにかくブレイヴ・フォースチームが突撃しやすい環境を作ってもらおうと思う。」

高島 「……随分と安い作業だな。」

冴島 「何か不服でもあるのかな？」

高島 「せめて、私のチームだけでもよき花を飾りたいのでな……。」

冴島 「……。」

思い上がりな一面を見せた高島。自衛官の傲慢たるものか。冴島は半ば哀れな感情を懷いた。

この状況下において自分たちの手柄を欲するのかと。

外では、要とさわ子が寄り添いながらコーヒーを飲んでいた。

この光景を吉崎が羨む。

吉崎 「はぁ……。サワチャン彼氏ができて羨ましいな……。しかも隊長だけだ。」

葉山 「友達なんですよ？行かなくていいんですか？」

吉崎 「ばか！！空気読みなさい！！今行ったら明らかに邪魔でしょ？」

葉山 「そ、そうっすね！！」

コーヒーを飲みつつ、さわ子と手を重ね合わせる要。さわ子も肩を寄せて手を握る。

さわ子 「ふふ・・・あんな強がった事言つてて結局はこうなるのよね。」

要 「はははは・・・ズ・・・別に虚勢を張らなくてもいいんだ。素直でいてくれれば。」

さわ子 「ふふ 今の私って素直に見える？」

要 「思いつきりね。」

さわ子 「正解 まだ誠人君とこうしていたい・・・けどもう時期、出撃するんでしょ？」

要 「まだもう少し掛かるみたいだ。その時間までいてあげるさ。」

さわ子 「なんでこんな世界になっちゃったんだろう・・・去年の今頃はスゴイ平和だったのに。」

砕かれた日常の平和。今思えばデストリアンの襲来が発端だった。だが、今引き起こっている大きな事態は地球外からの来訪者な

どではなく、人類が生み出してしまった生体兵器によるものだ。

要 「皮肉だな。人が創った生体兵器によって、こうした事態を招いてしまっている……。」

さわ子 「あの子達……大丈夫かな？」

生徒達の安否が心配になるさわ子。その視線先の向こうでは、ファイバードとキングエクスカイザーが窮地に立たされていた。

ズヴィドオドオドオドオドオドオドオドオドオオオオオ・

・

ズズズズズズウウウウウツツ!!!

ファイバード 『があああああ!!!』

キングエクスカイザー 『ぐうつ……ううつうつ!!!』

止まないD 24の破壊光戦。吹き飛ぶファイバード。攻撃を浴び続け、いよいよ装甲が損傷し始めたキングエクスカイザー。D 24はこれまでに無い程の強さを誇っていた。

ファイバード 『クソっ!!!だが、この後方には遷達がいる!!!俺は好きな存在を守る!!!』

立ち上がりながらフレイムソードを振り払い、気合を入れ直すファイバード。

キングエクスカイザー 『これ以上唯達を危険な目に遭わせる

わけにはいかないんでな!!」

ギユドオドオオオオオオオ・・・

カイザーソードの切先をD 24に向けるキングエクスカイザー。2体は怯む事無く守るべき存在を守る為に一斉にD 24に斬り掛かる。

キユゴコオオオオオオオオオオツ・・・・・・ズドオド
オギヤアアアアアアアアアア!!!

触覚から放たれた破壊光弾によってファイバードとキングエクスカイザーは高威力の攻撃に圧倒されてしまう。この状況下の中、突然エリザベスを持って漣は唯に叫んだ。

漣 「唯!!ギータ準備!!」

唯 「ふえ???!」

漣 「私達にできる最高の事をする!!勇士朗、言ってたよ。私の存在が・・・・大切な存在を想えば力になるって・・・・『太陽の翼』のフレーズわかるな?」

唯 「う、うん!!よし!!出番だギータ!!」

自分達にできるエルソング。エクスカイザーへのエルソングもあるが、やはりここはできたばかりの彼氏を想って漣は、「太陽の翼」を選んだのだ。

二人は演奏を開始する。奇しくもそれと同時にタイミングで宇宙警察機構本部では、カイザージェットよりも先にファイアーシャトルがロールアウトされた。異次元ドックへの転送操作が行なわれていた。

ブレイブ星人A 「ファイアーシャトル、ロールアウト完了！
これよりファイバードの異次元ドックへと転送します！」

ブレイブ星人B 「了解！転送開始っ……………
……………ファイアーシャトル、ファイバードの異次元ドックへの転送を確認！ロールアウト作業及び転送作業、完了しました
！」

ブレイブ星人エンジニア 「よし！！後はカイザージェットの最終調整だな！！これを転送すればエクスカイザーは爆発的に強くなるぞ……………！！！」

そしてファイバードこと勇士朗の耳に澪の歌声が流れてきた。
横浜での戦いの時のように。

ファイバード 「澪が歌ってくれている……………あの時の歌を……………！！！」

自然と奮い立つファイバード。ボロボロになりつつも立ち上がる。ようやく繋がった二人の想いは以前よりも強力なエナジーを生み出していた。

澪は歌う。想いが、エールがチカラに変わるように。その歌声がファイバードの全身全霊にしみこんでいく。オーラ状のモノが浮

かび上がり始め、驚くべき事にD 24の強力なまでの攻撃をシャットアウトしていった。

ファイバード 『漣……!!』

漣 (勇士朗……!!)

その時、勇士朗の中のファイバードがファイアーシャトルがストックされた事を察知した。その事が勇士朗にも伝わる。

ファイバードの意志 (勇士朗!! たった今私の異次元ドック内に開発中だったファイアーシャトルが転送されたようだ!! 今すぐに召喚して最強武装合体を実行するぞ!!)

勇士朗 (最強武装合体?!!!……よっしゃああっ!!
!!)

そしてファイバードはありったけのエネルギーを空に撃ち放つ。

ファイバード 『デストリアン……見るがいい!! これが正義と……漣の想いのチカラだつ!!!! ファイアーシャトルオオオオオオオオオオオオオオオオ!!』

撃ち放たれたエネルギーの先からファイアーシャトルが召喚される。機体には4門の砲塔が確認できる。ファイアーシャトルは、ファイバードに突き進みながら変形を開始する。機首部が変形を開始し始めたのをきっかけに、次々と各箇所が変形・分離していく。

ファイバード 『ブレスター・パージッ!!』

フレームブレスターがファイバードから分離する。同時に両肩のアーマーと両腕、両脚の一部のアーマーがパージされ、アーマーが消える。その部分へと分離したファイアーシャトルのパーツが次々と合体していく。

機首部のパーツが両脚に、両肩、両腕に新たな黒光りするアーマーが、両肩に合体したアーマーにもう一つ同じアーマーが重なる。

そしてウイング部が前面に装備される。頭部に赤い光が灯り、これまでとは一新したフォルムの頭部に変形する。炎のエネルギーが胸部に注がれ、フェニックスの紋章が浮かび上がる。

新たな太陽の翼と4門のバーニングキャノンを肩に装備した姿は正に「最強武装合体」の名にふさわしい。そして名を叫ぶ。

グレートファイバード 『最強武装合体っ!!グレートファイバードッッ!!!!』

漣 (勇士朗……!!!!)

この出来事に漣達は圧巻する。だがそれでも止める事無く歌い続けた。

光 「ぐ……グレートファイバード……!!!!」

和 「すごい……。」

唯 「ぐれーとふぁいばーど???」

憂 「スペースシャトルと合体しちゃった……。」

キングエクスカイザーも初めてグレート化を目にした。いよいよ反撃の狼煙が上がったことを確認した。

キングエクスカイザー 『あれが・・・グレート化!! グレートファイバード!!!!』

D 24は全ての触手の先端を空中に浮き続けるグレートファイバードに向けた。一斉に発射される破壊光戦。撃ち出される破壊光は全てグレートファイバードに直撃した。

ヴィギユギユウギユウドオオオオオオオオオオオオ
ツツツ!!!!!!

ズズズズズズズズウウウウウウウウツツ・・・
!!!!!!

漣 (あぁっ・・・!!!!)

歌い続ける中、またもや痛々しい姿を見ると思った漣。だが、爆炎の中からは、全くといっていい程無傷のグレートファイバードが姿を見せた。そして左手にフレイムエネルギーを形成して上空へと投げる。するとシールドと合体した状態でフレイムソードよりも大きいフレイムプレスターを模した剣が召喚された。だがツバと持ち手部分のみで剣の刀身はない。

グレートファイバード 『バーニングソードツツ!!!!』

バーニングソードを右手に握り締めてシールドから取り外すと、フレイムプレスターを模した剣のツバのレンズにフレイムエネルギー

ーが輝き出す。そして刀身を形成していく……紅蓮の炎が具現化したような巨大な実体剣の刀身が形成された。

D 24 「キュギユルルルルグググウウウツツ!!」

キュフィイイイ……ヴィギユギウギユギウギ
ユギユウドオオオオツツ!!!

怯む事無くD 24は破壊光戦を撃つ。この刹那、グレートフアイバードは、シールドをかざす。

グレートフアイバード 『バーニングシールドツツ!!!』

ギウドオシユギユキウドオアアアアアアアア……

かざされたバーニングシールドのクリアグリーンのレンズ部分に破壊光戦の全エネルギーが吸収される。だが、それだけに止まらず、威力を倍返しにして吸収したエネルギーを打ち出す。

グレートフアイバード 『リフレクトシユートツツ!!!』

ヴィギユツドオオオオオオオオオオオオオオオオオツツツ

!!!

ズドオヴァギャドオオオオオオオオオオオツツツ!!!

D 24 「クギユデイギユギウギユグググウウツツツ!!!」

向かって左半分のクラゲのような頭部に直撃し、爆発と共に肉

漣 「ふう……あれが、グレートファイバード……
勇士郎の新たな力……。」

唯 「すつごく強かったね！！漣ちゃん！！」

漣 「そうだな。ふふっ、スゴイ彼氏ができたんだなあ……
私。」

光 「滅茶苦茶に強くなっちまいやがった……！！！！」

和 「一時はどうなるかと思ったけど……よかった……。」

キングエクスカイザーが着地したグレートファイバードに歩み
寄る。

キングエクスカイザー 「勇士郎……。」

グレートファイバード 「勇さん！！このチカラがあれば、B
LWの群れを一気に殲滅できますよ！！！」

キングエクスカイザー 「……だな！！どうやら俺の方に
もグレート化できるモンがあるらしい……そいつが異次元ドック
に転送されれば俺もできるそうだ……。」

グレートファイバード 「そうですか……！！！」

キングエクスカイザー 「なんならこのまま多摩市へ突き進ん
でいいぜ！！BLWが相手なら問題ねーからな！！！」

ブレイヴ・フォースと自衛隊によるBLW殲滅作戦が刻々と近づいていた。さわ子の許を離れオペレーションミーティングに入る要。立川から飛び立つ陸自の輸送機。メンテナンスを終え、更なる戦いに備える超AI勇者達。闘い続ける聡とグレンラガン……それぞれの状況下の中、それぞれの戦士達がBLWクイーン殲滅に向けて動き出していた。

BLWクイーンはそれを待ち続けるかのように静かに呼吸を続ける……。

つづく

次回予告

ついに爆誕したグレートファイバード。そのチカラは絶大なるモノだった。これに乗じてグレートエクスカイザーも爆誕生する。それぞれの想い人に見送られながらBLWクイーンを目指す。そしてブレイヴフォースの面々も自衛隊と共に攻撃を開始した。闘い続けていたグレンラガンもいよいよ窮地を迎える。だがその時、大いなる力がグレンラガンに迫った。

次回、新生太陽の勇者 ファイバード・サーガ 第44話 「邂逅する勇者達」

3大勇者がいよいよ邂逅する。

第43話 「最強武装合体」(後書き)

大幅なアレンジを加えたグレートファイバード・・・いかがでしたでしょうか？ 感想・意見お待ちしております。

第44話 「邂逅する勇者達」

雄々しくそびえるグレートファイバードとキングエクスカイザ
ー。 溇達が2体の足許に駆け寄る。

溇 「勇士朗！」

グレートファイバード 『溇・・・また歌ってくれたおかげ
で窮地を脱することができた！ありがとう！！』

溇 「あんな状態で私にできる事ってやっぱり歌しかないから
・・・。」

グレートファイバード 『・・・確かにこのチカラはファイ
アーシャトルとの最強武装合体によるものだ・・・けどそれにプ
ラスされて溇の歌声から得られるパワーがより俺を強くしてくれてい
る気がする！！なんかこう・・・上手く言葉ではいえないけど、
解るんだ！！！！』

勇士朗曰く、実際に想定されていたグレート化のスペックを遥
かに凌駕していた。溇の声が与えたパワーが影響している事は十分
に言えた。

溇 「勇士朗・・・。」

以前の溇ならば謙遜に謙遜を重ねていただろう。だが、今は素直にコトを受け入れられた。自分が歌い始めて、ファイバードがパワーを宿し始めたのを実際に目の当たりにしていたからだ。

改めて溇は自分の存在がどれ程勇士朗に影響しているかが解かった。

溇 「勇士朗。行かなきゃ行けないんだよね？多摩市に……」

グレートファイバード 『ああ！一刻も早くあの生体兵器の元凶を駆逐しなきゃいけない！！』

溇 「私……桜高で皆と一緒に待ってるから！」

グレートファイバード 『必ず戻るよ！！溇！！』

二人のやりとりにも経つてもいらなくなった和がキングエクスカイザーと融合している勇に叫んだ。

和 「あ、あの！！私、楽しみにしてます！！みんなで遊びに行くって言ってた事！！」

キングエクスカイザー 『和ちゃん……そうだな！俺も楽しみにしてるぜ！！また後でな！！じゃ、行こうか！！勇士朗！！』

グレートファイバード 『そうっすね！行きましょう！！』

この時既に勇の中で心境が変化しつつあった。唯のKYな一言で和の気持ちを察した為だ。少なくとも自分の事を密かに想ってい

てくれている事実を直感していた。

グレートファイバードと、キングエクスカイザーが多摩市方面を見たその時、エクスカイザーが異次元ドックにカイザージェットがストックされた事を察知した。

エクスカイザー (勇!!カイザージェットが私の異次元ドックに転送された!!これで我々もグレート化する事ができる!!)

勇 (マジか?!じゃあ、邪魔が無い今の内に合体といこうか?!)

エクスカイザー (・・・そうだな!!この向こうでは数多くの敵がいるだろうから・・・ここで合体していくぞ!!勇!!)

グレートファイバードが飛び発とうとした矢先、キングエクスカイザーが引き止めた。

キングエクスカイザー 『チョット待った!どうやら俺のほうもグレート化が可能になったみたいだ・・・この場で合体していく!!』

グレートファイバード 『ここですか?!』

キングエクスカイザー 『ああ!!邪魔が居ない今のうちにな!!それじゃ、せつかくだ!!和達にグレートエクスカイザーのお披露目といこうじゃないか・・・!!』

和 「え?!」

勇は確かに「和達」と表現する。和は少しだけでも自分の気持ちが届き始めたように感じた。

勇 「いくぜ!!カイザーアア・・・ジエエエエエエツツツ!!!」

勇士朗のファイアージェット召喚時をあやかったかのようなアクセントで、カイザージェットを召喚するキングエクスカイザー。撃ち放たれたエネルギーの先から、カイザージェットが高速で飛行しながら現れる。キングエクスカイザーまで突き進む機体。その間に先ほどのファイアーシャトルのように機体が各パーツに分離する。

同時にキングエクスカイザーのアーマーの一部がパージされていく。背に機首部分が、アーマーがパージされた両肩、両腕、両脚の部分にカイザージェットのパーツが合体していく。

紅い光りを放ちながら胸のライオンもより攻撃的なフォルムに変化。ヘッドユニットも赤い光を放ちながらフォルムが一新された。

グレートエクスカイザー 『超越合体!!グレートエクスカイザーツツ!!!』

光 「うひょー!!!超カッケーっ!!!」

男心を掴むカッコよさに叫ぶ光。迫力の大きさに唯と憂もその横で驚きを隠せないでいる。

唯 「ふおおおおおお!!エクちゃんが更に合体しちゃった

あああー!!」

憂 「勇兄ちゃん……エクスカイザー……!!」

漣がそつと和の肩に手を置く。振り向く和。うなづく漣。二人はもう一度2大勇者の雄々しく立つ姿を見上げた。

グレートエクスカイザー 『じゃあ、和ちゃん!約束通り、闘い明けに遊びに連れてってやるからな!ま、まあ、場所が場所だからな……気に入ってくれるかはわかんねーケド!』

和 「?……はい!」

勇の言葉の最後の部分が何の事か解らない和。それでも笑顔で答える。勇は自分が身を投じているもう一つの闘いの世界を見せようと思っていた。

もう一つの闘う場所……即ち峠のステージだ。走り屋でもある勇は、和に自分の走っているところを見せてあげたいという想いが芽生えたのだ。

グレートファイバード 『漣……俺からも……』

漣 「どうしたの?」

グレートファイバード 『闘いが終わったら……今度付き合った記念のデートに行こう!俺、ずっと夢に見ていたんだ。一目惚れしたあの日からずっと……』

光 「熱いねー!!ひゅーひゅー!!」

唯 「いよっ!! 漣ちゃあああん!!」

漣 「な・・・ちよ、ちよっといくらなんでもみんなの前で
恥ずかしいよ!! そういう事は誰もいないところで言つてよ!!」

顔を赤くして極度に恥ずかしがる漣。だが態度の反面嬉しそう
だった。

グレートファイバード 『ご、ごめん、ついアツくなっちゃっ
て。でもマジでデート行こう!!』

漣 「う、うん。じゃ、待ってるから! 必ず・・・戻ってきて
よね?」

グレートファイバード 『ああ!! 必ずっ!!』

再度戻ってきてという漣。それに勇士朗はもう一度答えた。

グレートファイバードとグレートエクスカイザーはエネルギー
を帯びながら上昇していき、多摩市方面へと飛び発つ。巻き起こる
風が激しく吹き、漣と和の髪がなびく。

風が止むと、和は、ぽつりとつぶやく。

和 「私・・・少しは距離縮められたのかな。」

漣 「多分。あんな風に言ってくれたのはいい感じだと思う。
恋愛経験が薄い私が言つのもなんだけど・・・まあ最も影響させた
のは唯のKY発言だったと思うけど。」

唯 「ほえ？」

和 「くすつ。棚から牡丹餅って言うか……でももし本当に想いが通じたのなら……ありがとう、唯。」

唯 「ほえほえく??？」

BLWクイーン対策本部より、いよいよ冴島の総指揮の下オペレーション発動の指令が下される。

出撃していくジエイデッカー、マイトガイン、レイバーズ、バスターボンバー、フレアダイバー、そして要が乗った指揮車両・Jバギー……さわ子は髪をなびかせながら出撃していく勇者たちを見守る。

ジエイデッカーは、新たなビームキャノンのような新兵器を実装している。要はJバギーの走行音の中、通信機を手に緊迫した表情で望む。

舞人はレバーを握ってマイトガインと共に飛び発つ。コックピットには紬と一緒にとった写真が貼られていた。先ほど思い出したかのように、持っていた写真を目に付く場所に貼ったのだ。

多摩市上空。陸上自衛隊の輸送機部隊が到着。そして各所定ポイントに向かう為に輸送機部隊が別れ、散開していく。高島の指揮の中、降下していくパラシュートユニットを装備したヘルトルーパーの部隊……いよいよ殲滅作戦が本格的に発動した。

高島の部隊が地上へと降下する。そして着地と同時にBLWへの攻撃を開始する。

高島 「各機の着地完了を確認！周囲に多数の攻撃目標を確認！これより全機攻撃を開始する！！各機、撃てええッ！！」

ドゥバダダラララアアアアア！！ ドウルドドドド
ドドドドドドドオドウィンドウィン！！

右腕に装備された対特生チエーンガンが唸りを上げながらBLWに弾丸が撃ち込まれていく。各地で巻き起こる銃声。

ヘルトルーパーのコックピット内。モニターに映し出されるBLWに、ロックオンカーソルが点滅する。アラーム音と共にロックオン。パイロットの自衛隊員がコントロールレバーのトリガーを引く。

ドウルルルルルバババババババアツツ！！！！

薬莢を飛ばしながら唸る対特生チエーンガン。弾丸がBLW01を駆逐する。

ドオドオドオドオオオオオンツツ！！

高島 「この任務で自衛隊の汚名を返上させてもらう！！一匹たりとも残さず駆逐しろ！！最終目標はクイーン^{デス}の駆逐だ！！指定エリア内のBLWを駆逐次第、穴^{デス}へ向かえ！！！！」

ヴアララララララララアアアアアアアアアツツ！！！！

レイバーズに護衛される形で進むJバギー。吉崎のオペレーターを基に要が指示を始める。

吉崎 「自衛隊の対特生部隊による攻撃が開始されました！現在、BLWの数は穴の中のものを含めて、400体以上と推定されます！！」

要 「そうか・・・作戦通り周辺のBLWは散開した自衛隊に一任し、俺達はクイーンの駆逐を最終目標とする！！この位置から直線上のBLWの群れを叩き、突破口を開いていく！！戦闘はジェイデッカー、マイトガイン、バスターボンバー、フレアダイバーに一任する！！レイバーズは最小限の戦闘とJバギーの護衛を頼むぞ！！尚、今回からジェイデッカーの武装は、Jマックス・キャノンに切り替わった！！威力は数値上、改良したJバスターを更に上回るそうだ！！思う存分に揮ってくれ！！」

一同 『了解！！』

荒廃してしまった多摩市を突き進むブレイヴ・フォーアの勇者達。マイトガインとジェイデッカーが肩を並べて先陣を切る。

マイトガイン 『まずは我々で景気づけの突破口を開くぞ！！』

ジェイデッカー 『了解だ！！この作戦でBLWを殲滅させる！！』

マイトガインのコックピットでは、舞人が動輪剣のセットアッ

ブ状況を再チェックする。

舞人 「動輪剣、セツトアップ状況確認！オールグリーン！エネルギーチャージ開始！！」

動輪剣の基本エネルギーが充填されていく。続けてジエイデッカーもJマックス・キャノンを構え、Jバギー内で吉崎が、Jマックス・キャノンのセーフティー解除を操作する。

吉崎 「Jマックス・キャノン、セーフティーロック解除！Jマックス・キャノン、アクティブ！」

ジエイデッカー 「セーフティー解除確認！！いくぞ！！舞人、マイトガイン！！」

舞人 「了解だ！！ここからが俺達の反撃の狼煙だ！！」

加速していく2機。バスターボンバー、フレアダイバーもそれに続く。それを後ろから進行しながら見送るレイバース。ガンレイバーが軽く愚痴をこぼす。

ガンレイバー 「行っちゃまったぜ・・・はあ、俺も前線で暴れてえ・・・。」

シヨットレイバー 「これからの任務は隊長の護衛だ！一件地味に思えるが、重要な任務だ！！それに我々は元々補佐の任務が主流だろ！！」

ガンレイバー 「そりゃごもつともで・・・こうなりゃかかって来いよ！！アリモドキ共！！」

巻き起こる煙の中を突き破り、動輪剣を両手持ちで装備してB
LW 03変異体群に斬りかかる。唸る動輪剣が肉体を斬り飛ばし
ていく。

マイトガイン 『……はああああっ！！！』

ズドオオオツ……ザギヤシャツンツ！！ ギヤシャアア
ンツ！！！！ ザガギヤアアンツ！！！！

ジェイデッカー 『Jマックス・キャノン、ファイアツ！！！！』

ヴィギユドオオアアアアアアアアアアアアアアアアツ！！！！

ズギヤシャアアアアアアアアアアアアアアアアツ！！！！ ズズズ
ズズゴゴゴオオオオオオ……

ジェイデッカー 『これほどの威力があるというのか……？
！！確かに、Jバスターよりも強力かもしれん！！』

目を見張る威力に驚愕するジェイデッカー。プラズマ過流がB
LWの群々をかき消した。

続けてJマックス・キャノンをチャージシヨットするジェイデ
ッカー。更なる強力な一撃がBLW群に撃ち込まれる。より強大な
プラズマ過流が突き進む。

ジェイデッカー 『Jマックス・キャノン、チャージシヨット
ツ！！！！！！』

ギユリリイイイイ……ヴィヴァダギユヴァアアアアアアアアアアアツツ!!!

ズギヤシャアアアアアアアアアアアアアアアア……ズ
ヴァギヤドオゴゴオオオ!!!

威力はファイバードのサン・ブラスターに近いものだった。ジ
エイデッカーから直線上のBLW群がかき消えた。

これに続いてバスターボンバーとフレアダイバーも攻撃を開始
する。唸るバスターランチャー。

バスターボンバー 『砕けちまいな!!!バスターランチャー!
』

ディギユウゴオオオオオオオオオオツツ……ギヤ
ズドオヴァギヤアアアアアアツツ!!!

エネルギー光弾がBLW 02と03が固まったエリアに着弾。
爆炎を上げながら爆砕させた。

バスターボンバーは、身体の向きを反転。バスターランチャー
を交えながら両肩のレールキャノンを連発して攻めて行く。

バスターボンバー 『おらおらおらああああ!!!』

ヴィギイン、ヴィヴィギギイン!!! ディギユゴオオオ
!!! ヴィヴィヴィギイン!!! ディギユゴオオオツツ!!! デイ
ギユゴオオオオ!!!

われた腕がグレンラガンを吹き飛ばした。

ドオガゴオオオオオオオツツツ！！！！！

グレンラガン 『ぐおああああああ！！！！』

聡 「がああああああ！！！！」

吹っ飛ばされたグレンラガンの巨体が、建造物を崩壊させていく。根性で立ち上がるグレンラガン。

聡 「この・・・クソ野郎ツ！！！！うおおおお！！！！」

グレンラガン 『聡！！！！』

聡の感情を乗せ、BLW 12に激進していくグレンラガン。だが、予想だにしない素早い動きで、グレンラガンに突進していく。鋭利な角がグレンラガンに直撃してしまう。

ズドオギャゴオオオオオオオオオオオツ！！！！

グレンラガン 『ごくがッ・・・！！！！』

聡 「ぐはッ・・・！！！！」

痛恨のダメージを受けてしまった聡。思いっきり胸部に入ったためか吐血を起こす。もし律がこのような姿を見たら居ても立ってもいられないだろう。

聡 「がふーげほッ！！ぐッ・・・。」

ドオドオドオドオドオドオドオドオドオズズズズズズズ
ウズウウウウウウウウツツ！！！！！！

低空を突き進みながら、BLW 02と03の変異体の群れに
突っ込んでいく。バーニングソードが唸りを上げてBLW群を一振
りで斬り砕く。

グレートファイバード 『バーニングソードツツ！！！！』

ズギヤガガガガガシャアアアツツ……ドオギヤウ
アドオズウウウウツツ！！！！

斬られた刹那に爆発するBLW群。これにBLW群も攻撃態勢
で対向する。一斉に飛び掛ろうとするBLW 03の群れ。

BLW 03 「キュカカカカケエエエエツツ！！！！」

グレートファイバード 『同じ事だ！！しゃあああああああ
ああッ！！！！』

ヒュオン……ザズヴァギヤギヤギヤギヤギヤシャア
アアアツツ！！！！

ドオドオドオギヤガアアアアアアアアアアアアツツ！！！！

瞬時にバーニングソードで斬り裂かれた群れが爆発する。もは
やBLW群は、グレートファイバードを前にしてしまつては、赤子
同然であつた。

っ。

グレンラガン 『お、お前達は?!?!』

聡 「!!!……もしかして……ファイバード?!」

混沌埋めく中、2大勇者達がグレンラガンと初の邂逅を果たす。聡は雰囲気を感じから初めて見るグレートファイバードがファイバードだと直感する。向かい合う3体の勇者達にBLW 12が空気を裂くように咆える。

BLW 12 「キュギュギョオオオオオオ!!!」

グレートエクスカイザー 『何故名を?という前にアイツを駆逐する必要があるな……グレートファイバードはどこぞの勇者を頼むぜ。』

グレートファイバード 『え?!』

自らBLW 12の前に立つグレートエクスカイザー。強烈なまでの勇ましいオーラを放つ。

グレートエクスカイザー 『新たなカイザーソード……受けてみなっつ!!!』

つづく

次回予告

ヘルトルーパー部隊とBLWの群れとの交戦が激化していく。その最中に邂逅する事となった三つの宇宙勇者意志。危機的状況のグレンラガンを救うべく、グレートエクスカイザーは圧倒的な力を揮う。更にグレンラガンを加えてクイーンを目指す。ブレイヴ・フォースの超AIチームもBLWクイーンを目指し突き進んだ。そして激戦を駆け抜けた超AI勇者チームは、その先でBLWクイーンと遂に対峙するのだった。

次回、新生太陽の勇者 ファイバード・サーガ 第45話 「対峙する元凶」

忌まわしい存在が勇者達にそびえる・・・。

第45話 「対峙する元凶」

自衛隊の特殊部隊が多摩市内で展開する。各戦闘エリアでヘルトルーパー各機が右腕をかざし、装備されたチェーンガンを撃ち放つ。

ドウバララララララララララアア！！ ドウルルルルルルルルルウウツ！！

ドウダダダダダダドオオオオ！！

対特殊生物用の弾丸が、BLW 03に撃ち込まれていく。ジワジワと表面の肉を撃ち砕いていく。

BLW 02 「キュクケケアアツ・・・。」

BLW 02の1体が息絶え駆逐される。唸るチェーンガンが前方のBLW 02群に撃ち込まれていく。

ドウバラララララララドウルルルルルルルルルウウウツツツ！！！！

ドオドオドオドオオオオオオツツ！！！！

BLW 02群も応戦する。確かにヘルトルーパーの部隊は攻

撃の手を緩めないものの、勇者ロボに比べ、怒涛の勢いが足らなかった。そのためかBLW群に反撃の隙を作ってしまう。

一体のBLW 02が大口を空けて溶解弾を撃ち放つ。

ビュドオオオッ！！

ヴァチャアアアンッ！！

1機のヘルトルーパーのコックピット部に直撃する。装甲が瞬間に溶けだした。コックピットが露になる。更にそこへ溶解弾が撃ち込まれパイロットは即死。ヘルトルーパーの上半身も、もげる様に崩れた。

自衛隊パイロット 「1機やられた！！クソッ！！攻撃の手を緩めるなあっ！！」

前方の2体のBLW 02の頭部に集中砲火を浴びせる。頭部がボロボロに分解する。

ドウドウドウバララララララアアアッ！！！！

ドオドオドオオオオオッ！！

2体を駆逐したその直後にBLW 03の一体が1機のヘルトルーパーに飛び掛る。

ドオガシヤアアアンッ！！！！

道路に押し付けられるように倒れこむ1機のヘルトルーパー。

その上から狂ったように攻撃を加えるBLW 03。ヘルトルーパーの腕や胸部が破壊されていく。

バキヤアアン！！ ガシャガアアアンツ！！ ガガキヤアアアン！！

そのBLW 03に両サイドからヘルトルーパーが至近距離射撃で駆逐する。

ドウバララララララアアアアアツ！！！！

ドオドオドオドツズズウウウ！！

別のポイント。一斉射撃が行なわれる中、BLW 01が次々と駆逐されていく。

そこにBLW 03の群れが現れた。そこにも一斉射撃が向けられる。

ドドウドウドウドウルルルルルルルウウウウウウウ！！！！

ドオドオドオドオドオズズズズズズズズズズズウウウウ

！！！！

次々と撃ち倒されていく群れ。だがその部隊の側面からBLW 02群が生体砲で砲撃をかけた。

ドオドオドオドオドオパパパパパパパパパパシューウン！！

ドオパパパパパパアア・・・

ズズズズズドオドオオオオオオオオオ！！！！

発光弾のようなエネルギー弾の直撃を受けるヘルトルーパーの部隊。機体が次々と破壊される。

またあるポイントではBLW 03がカギ爪を揮いながら1機のヘルトルーパーに襲い掛かる。カギ爪が胸部に直撃し、コックピットごと破壊される。

ズガギヤアアア！！　ズドオオオツ！！！！

そのBLWの背後からヘルトルーパーが零距离射撃でチェーンガンを発砲する。

ヴオドウルルルルルルドオオオオオツツ！！

更に別のポイント。既に撃破されてしまったヘルトルーパーの骸が数機倒れている。ヘルトルーパー部隊の一斉射撃の放火が唸る。

ドウルルルルルルルツルルルウウウウ！！　ドウルルルルルルルルウウウウ！！

高島機もこのポイントで指揮していた。レバーを押し込んで機体を前進させる高島。ゴーグルにモニターが反射する。

高島　「このまま一斉射撃で全身しつつ、各個体を駆逐！！チェーンを目指せ！！」

その時、危険を知らせるアラームが高島機のコックピット内に響く。

高島 「?!」

上空からBLW 03が飛び掛ってきたのだ。咄嗟の判断で機体をこれから回避させる。

地響きを上げて着地するBLW 03。高島機は、左手に対特生コンバットナイフを握り締め、BLW 03に斬り掛かる。

ヴィギユシユウンツッ!!

吹っ飛ぶ首。直ぐにかざされるレフトアーム。チェーンガンが接近しつつあったBLW 02の頭部に目掛けて火を吹く。

ドウルルルルルルルルルルウウウツッ!!

ドオドオドオドオオオオオオ!!

高島 「各機、油断をすれば死だ!! 周囲360度に全神経を配れ!!」

そう言い放ちながら、トリガーを引く高島。モニター越しにチェーンガンの火が反射する。

周囲でヘルトルーパーとBLW群の攻防が巻き起こる中、グレートエクスカイザーがBLW 12に攻撃をかける。

グレートエクスカイザー 『カイザーソードツッ!!』

電撃音と共にグレートエクスカイザーの背部の機首部から光りの球体が撃ち出された。それが雷いかすちとなってグレートエクスカイザーに落ちようとする。

右手をかざすグレートエクスカイザー。雷いかすちと共に落ちて来たカイザーソードをグレートエクスカイザーが手にする。更に左手にサウダーエネルギーを発生させ、カイザーソードを両手で握り締めた。

ヴィキュアアアアアアアアアツ……！！！！

光りを放ちながらカイザーソードが変化、更なる大剣へと変貌を遂げる。

グレートカイザーソード……正に究極の剣。長い刀身が常にサウダーエネルギーを放っていた。

勇（スゲ……これが……。）

エクスカイザー（グレートエクスカイザーの新たな力……グレートカイザーソードだ！！）

グレートカイザーソードを構える。バリバリとエネルギーが四散する。ぐつと踏み込むと、あえてサウダーフラッシュはせずにそのまま斬りかかりにいった。

ギユドオアアアアアアアアアアツ！！！！

グレートカイザーソードを振りかぶりながら加速していくグレートエクスカイザー。BLW 12は角から雷撃を放って、迫り来

るグレートエクスカイザーに撃つ。だが、その攻撃は逆に更なるエネルギーに転換される。

グレートエクスカイザー 『エネルギーの提供・・・あり難く受け取っておく！！おおおおおおおおおおおおっ！！！！！！』

ギユグオオオオオオオオオオ・・・ディギヤシャアアアアアアアアアアンツ！！！！！！

揮われたグレートカイザーソードがBLW 12を斜めに寸断。巨体が崩れ、分断した斬り口が爆発する。

ドオディギヤゴオアアアアアアアアアアアアアアアアアンツッ！！！！

グレンラガン 『これは・・・すげえ！！』

圧巻を隠せないグレンラガン。揃って聡も思わずたじろいてしまっ。

聡 「マジで強えええ・・・！！！！」

グレートファイバード 『チャージアップせずにあの威力・・・！！！！』

グレートファイバードも同じ感情を懐く。無論2体の強さに大差はないのだが、グレートエクスカイザーのほうが若干上をいつていたような感覚を覚えたのだ。

そして改めて3体の勇者が向かい合う。事情を聞かされたグレ

ートエクスカイザーは修復光線を放ち、グレンラガンと聡を元の体
力と状態に戻す。

グレンラガン 『すまねえな！！助かったぜ！！』

聡 「すげー・・・超楽になった感じた！！」

グレートファイバード 『それで、お前達は一体・・・??』

グレンラガン 『俺の名はグレンラガン！！ドリルで天を突き
抜けるグレンラガンだ！！元々はエネルギーを持った金属生命体だ
が、先祖がこの星に落としていったもう一つの身体と融合している。
俺自身は宇宙格闘家で、故郷の星では負け知らずだ！！あっちにも
グレンっていう別の身体があつて、そいつと今、合体している状態
だ。ちなみに身体の名は「ガンメンファイター」と総称されている
！！もつともこの星で言っても特に何も意味は無いが・・・。』

グレンラガン・・・もといラガンの実態が明らかになった。フ
アイバードやエクスカイザーが宇宙警備隊・警察であるならば、ラ
ガンは宇宙格闘家だったのだ。

聡 「そこんこ、俺も初耳だぞ！！」

グレンラガン 『だろつな！！言い忘れてたからな！！ちなみ
に俺は先祖の落とした身体を捜すがてらに更なる強さを求めてさす
らっていたのだ！！』

聡 「それも初耳だ！！」

グレンラガン 『で、俺に乗ってるこいつは、この星で出会っ

たかけがえの無い相棒、聡だ!!」

聡 「田井中聡!!よろしく!!ひよっとして・・・もしかして・・・テレビでよく見るファイバードなのか?!」

グレートファイバードこと、勇士朗もしかしてと思った。「田井中」と言ってた為だ。それよりも先に何故公にされていないはずのファイバードの名を知っていたのかが気になった。

グレートファイバード 「まあ・・・な。何故その名を知っているんだ?」

聡 「ねーちゃんから聞かされたんだ。友達にファイバードがいるって。」

勇士朗は直感した。やはり律の弟だったという事に。

グレートファイバード 「え?!やっぱり律ってコの弟だったのか?!」

聡 「ああ、そうだよ。俺のねーちゃんの名前は律だ。」

グレートエクスカイザー 「ってことは唯の友達の弟か・・・なんか・・・世間狭いな。勇士朗は唯の友達の澁ちゃんの彼氏で、俺が唯の従兄でこの聡がグレンラガンに乗ってる上にまた唯の友達の律ってコの弟と来た!!」

聡 「え・・・澁ねーちゃんの彼氏がファイバード?!!それに、このロボットの従妹がねーちゃんの友達で・・・ええ?」

ややこしいつながりに混乱する聡。中学生ながら世間の狭さを感じた。

グレートファイバード 『まあ、みんなのそれぞれの絆が一つに繋がっていたってことで……。』

グレートエクスカイザー 『上手く言ってシメタな!!』

闘いの空気が一時的に治まったところで改めて3大勇者は改めてクイーンがいる方角を睨む。

グレートファイバード 『この向こうに元凶がいる……!!』

グレンラガン 『さあ、ぶっ飛ばしに行くか!!』

聡 「ああ!!」

グレートエクスカイザー 『いくぜ!!宇宙3大勇者の出陣だっ!!!!!!』

ヘルトルーパー部隊が戦闘を繰り広げている事もあり、プレイヴ・フォースが相手にするBLWの数は予想よりも少なかった。だが、それでも数は凄まじい。

バスターボンバーがバスターランチャーでBLW 03変異体群を吹き飛ばし、フレアダイバーが全火力を持ってBLW 02群を駆逐していく。

バスターボンバー 『バスターランチャーッ！！！！』

デイギヤゴオオオオツツ………ズヴァドウガ
ギヤグオゴオオオオツツ！！！！

フレアダイバー 『フルシューティングッ！！！！』

ヴィドウルルルルヴァゴドウルルルルヴァゴダアド
オドオドオドオオオ！！！！

レイバースも「バギー」を守りながら射撃を続ける。

ヴィガンッ！！ ヴィガンッ！！ ヴィガン、ヴィガン

！！

ガンレイバー 『ちくしょーが！！ちつともへらねー！！』

デイギユガアアン！！ デイギユガアアアン！！ デイギ
ユガン、デイギユガアアンッ！！

ショットレイバー 『だが、これでも予想より少ない数だ！！』

「バギー」内で緊迫した状況が支配する。轟音が響き渡る中、要
は指示を出す。

要 『バスターボンバー、フレアダイバーはレイバースをサポ
ートしつつ攻撃を続けてくれ！！この状況ではレイバースだけでは
キツイ！！ジエイデッカー、マイトゲインはこのまま突き進め！！
守っていたらどんどん追い込まれる！！攻め続けるんだ！！』

する。

フレアダイバー 『粉碎いいいいッ!!!!!!』

ヴァドウルルルルルルヴォヴォヴォヴォオドオドオド
オドドドドドドオオオツッ!!!!

「マックス・キャノン」をチャージシヨットするジエイデッカー。
エネルギー過流が群れを呑み込む。

ジエイデッカー 『道を・・・切り開くッ!!!!!!』

ヴィヴィヴィイイイ・・・ズドオヴァギユヴァアアアア
アアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアア

舞人 「マイトガイン、突っ込むぞ!!!」

マイトガイン 『ああッ!!!!!! 面前の群れを撃砕するッ!!!!!!』

ドオオオオオオオオツ・・・・・・

バックバックから青白い炎を吹き出してBLWの群れに突っ込
むマイトガイン。突き進みながら動輪剣が縦横無尽に揮われる。

舞人 「突攻!!!!!! 連激斬ッ!!!!!!」

ザギヤシユツ、ザガギヤ、ザガシヤン、ザヴァガアアツ、
ギヤシヤ、ズギヤシヤン、ズヴァドオオ、ザザギヤア、ズガシヤン。
・・・ザズドオオオオオオオオオツ!!!!!!

次々に寸断されていくBLW群。最後に強烈な突きでBLW
02を撃砕した。

それぞれのチカラを揮い、BLWを撃破していく。奮闘を続ける内に、チームはクイーンの巣窟付近に達していた。その背後にはBLWの骸が転がる。周囲ではヘルトルーパーの部隊の戦闘音が鳴り響く。

吉崎 「隊長!!クイーンまでの距離が200メートルになりました!!」

要 「そうか!!穴の状況はどうだ?!ジェイデッカー!!」

ジェイデッカーはズームアイ機能でクイーンの潜む穴の状況を赤外線で分析する。すると跋扈する群れの中央部に巨大なクイーンの姿が映し出された。

ジェイデッカー 『クイーンを確認・・・周囲には更にBLWの群れが存在しています。』

映像がJバギー内に転送される。予想以上の数とクイーンの大きさに驚愕する要と吉崎。

要 「こ、これは・・・!!」

吉崎 「このまま戦闘に移行できませんね・・・。」

要 「ああ!!いくら武装強化したジェイデッカーやマイトガンでもこの数は・・・。」

想像以上の状況に怖気づくような感覚に見舞われる要。その時舞人がいい意味合いでの反論をした。

舞人 「要隊長！！何を怖気づいているんだ！！俺達はいかなるモノにも屈指はしない！！」

マイトガイン 『そうとも！！我々は奴らと闘える力がある！！』

要 「舞人……。」

舞人 「俺達は、ブレイヴ・フォース！！選ばれた勇者達の存在だ！！！」

要は目を閉じ冷静になろうとする。ここで判断を間違えれば責任は大きい。だが、今攻めなければさらに被害が広がる。その時、さわ子の微笑む姿のイメージが浮かんだ。

要は目を見開き決心する。市民の為、守りたい人の為に。

要 「……よし！！ジエデッカー、マイトガイン！！持てる力をもってクイーンを殲滅しろ！！バスターボンバー、フレアダイバーは後方から支援攻撃だ！！レイバースはここで待機！！引き続き護衛を頼む！！！」

一同 『了解ッ！！！！』

マイトガイン、ジエデッカーが先頭で広大な穴の中に飛び込んでいく。穴の中の地表はほとんどが建造物の瓦礫だった。所々に市民の変わり果てた遺体が見えたりもする。その市民たちに報いる

為に勇者達が突き進む。

ジエイデッカー 『くらええええッ！！！！！』

ヴィギュヴァアアアアアアアア！！！！ ヴィギュヴァアアアアアアアア！！！！

ズズズズシャゲオゴオオオオオオッ！！！！ ズギユウギヤアアアアアアアア！！！！

「マックス・キャノンのビームがBLW群をかき消す。その後方よりフレアダイバーの援護射撃が唸る。

フレアダイバー 『支援するッ、ジエイデッカー！！！！』

ドウヴァルルルルルルルルヴォドルルルルルルヴォドルルルルヴォヴォオオ！！！！

マイトガインが動輪剣を揮って突き進む。

マイトガイン 『でやあああああ！！！！』

ズガアアアアアアアアッ！！！！ ズシャアアンツッ！！！！
ザストオオオオンツッ！！！！

舞人 「マイトガイン、前方右だっ！！！！」

飛び掛る3体のBLW 03。マイトガインは思いっきりこれを叩き伏せるように薙ぎ払う。

マイトガイン 『はあああああああ！！！』

！！
ディギヤズドオドオドオギャシャアアアアアアアアツツ！

前方より砲撃しながら突き進んでくるBLW 02群。これに向かってバスターボンバーが、レールキャノンを変えてバスターラUNCHャーを連発する。

バスターボンバー 『援護いくぜ！！！！』

ヴィギギギギギイイイン、ディギユゴオオオオ、ヴィギギギギイン、ディギユゴオオオオツ、ディギギギギイイイン、ディギユゴ、ディギユゴオオオオツ！！！！

ズズズズズズズウディギヤドオグゴゴゴゴゴゴオオオオオ！！！ズズズズズドオドオドオドオドオドオオオオオオオオオオオオオオオオオオ！！！！

BLW 02の群れが巻き起こる激しい爆炎にかき消えていく。

攻め込んだ勇者達に察したクイーンがいよいよ動き出す。穴の外壁に突っ込んでいた産卵管をズルズルと戻し始める。

BLWクイーン 「クキュルルルル・・・。」

ズジュルルルルゴゴゴ・・・ズチュルルルゴゴゴツ・・・
ジュゴゴツッ！

産卵管はコードリールがコードを自動で縮めるかのような動き

でシロアリの女王のような巨大な長い体の中へと収まっていった。
その産卵管は左右合わせて12本あった。

そして背中中の10門の生体砲身が持ち上がり、マイトガインや
ジエイデッカーに向けられる。

BLWクイーン 「キユクケアアツ・・・!!!」

ヴィギユヴドオドオドオドオドオドオドオドオドオドオドオドオドオ
オオオオオオオオオオ!!!

一斉に放たれたビームが突き進む。だが、マイトガインやジエイ
デッカー達の上をかすめ、背後の外壁に直撃。巨大な爆炎が巻き
起こる。

ズギヤドオヴァギヤアアアアアアアアアアアアアアアアア

!!!!!!

待機していたレイバーズや「バギー」にも振動が伝わる。

ガンレイバー 「な、なんだあ?!!」

ショットレイバー 「クイーンの攻撃かもしれん!!!」

ガンレイバー 「マジ?!!あの爆炎・・・シャレにならん
ぜ!!!」

吉崎 「く、クイーンが高熱源を放ちました!!!この攻撃で地
表が更に崩壊したようです!!!」

要 「クイーンめ!!」

葉山 「この場所、やばくないスか?!?!」

要 「ジエイデッカーやマイトガイン達は最前線で闘っているんだ!!俺達がここを動く訳には行かない!!!!」

葉山 「そうっスよね・!!!!」

外壁はかなり抉れてさらに地表が崩壊していた。

舞人 「な・!!!!??」

マイトガイン 『これがクイーンのか・・・?!!!』

ジエイデッカー 『なんて威力だ!!』

バスターボンバー 『すげえ・・・!!!!』

フレアダイバー 『中つたらただでは済まないな・・・!!!!』

この時、超Aエロボット達は初めて戦慄した。容赦なく前方からBLWの群れが攻め入る。前進してくるBLW 01と02の群れ。走りながら飛び掛ってくるBLW 03。そしてクイーンも砲撃を始める。

ヴィギユドオオオオオオオ!!!! ヴィギユドオ
ドオドオオオオ!!!!

ズドオドオドオドオドオオオオ!!!! ギャズズ

ズズズズズウウウウ!!!

飛び交うクイーンの攻撃を回避しつつ戦う勇者ロボット達。マイトガインに飛び掛ったBLW 03を動輪剣で薙ぎ払うと、再び連撃斬りでマイトガインは闘っていく。

マイトガイン 『はあッ!!!』

ザギヤアアアアアッ!!!

舞人 「このままクイーンまで俺達は突っ込む!!!」

マイトガイン 『おおおおおお!!!』

ザアッ、ギャンッ、ザギヤシュ、ズヴァギャッ、ズドオシュウッ、ザシュガアアアッ!!!

ジェイデッカーも低空をホバリングしながら「マックス・キヤノン」を撃ち放つ。

ジェイデッカー 『クイーンは我々が駆逐するッ!!!』

ヴィギユウヴァアアアア!!! ヴィギユウヴァ、ヴィギユウヴァ、ヴィギユウヴァアアア!!!

対策本部。さわ子はテントの中でケータイを眺めていた。要と撮ったツーショットだ。彼の事を思いながら帰りを待つ。

さわ子 「誠人君……!!!」

思わず心配の余りうずくまってしまふ。しばらくすると、1人の警官がさわ子を気遣った。

警官 「どうされました？具合悪いんですか？」

さわ子 「え?!あ、ああ大丈夫です!」

警官 「要警部の彼女さんでいらっしやいますよね?やっぱり心配なんですね?警部のことが。」

さわ子 「……はい……。」

警官 「自分、以前要警部と同じ部署に所属してまして、結構世話になったんです。自分もいつかあの人のような警官になりたいと常に思っています……。」

さわ子 「以前からも信頼が厚かったんですね……誠人君。」

警官 「はい!あの人の事です。根拠は抽象的ですが、絶対に帰ってくる確信があります!安心して要警部を信じて待つてください!それが今のあなたができる最善の事ですよ!」

さわ子 「ありがとうございます……。」

さわ子は、改めて要が人望が厚い人間だと言うコトを少しだけ知った。夜空を見上げるさわ子。

琴吹邸。遠くで闘う舞人を想う絢。夜空を見上げながら広大なベランダで星を見上げている。

絀 「舞人君……。」

その時、後ろから琴吹家に仕える執事、斉藤が気にかかる。

斉藤 「絀お嬢様、ここに居られては風邪を引いてしまいますよ……。」

絀 「斉藤……。」

それでも再び絀は夜空を見上げる。

斉藤 「絀お嬢様が舞人様を気にかける気持ちはよくわかります。今、舞人様は私たち市民の為に最前線で闘っていらつしやることでしょう……想い人が戦地に赴く事は胸が締め付けられるほどの想いがあります。」

絀 「……。」

斉藤 「自ら勇者を名乗り、若干17歳にして旋風寺を背負い、かつ最前線に立たれる方……それほどまでの大器な方が絀お嬢様を残して逝こうとは思いませんでしょう。今は舞人様の帰りを祈って待つ……それが絀お嬢様のできることでございます。さ、せめてお部屋の中へ……お嬢様……。」

絀 「……わかつたわ……。」

絀は振り返り、家の中へと戻る。少し冷えた身体を温めるためにシャワーを浴びる絀。降りかかるシャワーの中、絀は舞人の名を口にする。

絶望が勇気を追い込む。

第45話 「対峙する元凶」(後書き)

感想・意見お待ちしております。

ジエイデッカー 『くっ……照準が……!!!!』

その時、バスターボンバーのバスターランチャーの砲弾がBLW 02群に向かって撃ち込まれる。

ディギユウゴオオオオ……ズヴァドオギャグ
オゴオオオオ!!!!

ジエイデッカー 『バスターボンバー……!!!!』

バスターボンバー 『マイトガインと共にクイーンを討て!!
!俺とフレアダイバーが後方支援一辺倒で貫く!!!!』

ディギユグオオオオツ!!!! ディギユグオオオ!
!! ディギユゴオオオツ!!!!

フレアダイバー 『行け!!!ジエイデッカー!!!マイトガ
イン!!!』

ヴァドウルルルルルルルルルルルルルルルルルルルルルル
ウウウヴァグオゴドゥヴァグドウルルルルヴァグドオオ、ヴァドウ
ルルルルルルルルルルルルルルルルルルルルルルルルルルルル
ウウウウ
ヴァララララララアアアアツツ!!!!

フレアダイバーの全火器の弾速が速くなり、BLWの群れを圧倒していく。だが、この間にもBLWの後方にある卵が次々と孵化
新たなBLW群が生まれ始める。

ガアアアアアアアツツ!!!

バスターボンバー&フレアダイバー 『ぐはああああああつ
つっ……!!!!』

BLWクイーンは口を開き、吹き飛ばされたバスターボンバー
とフレアダイバーに向かって破壊光戦を撃ち放つ。

BLWクイーン 「キユクケケエエエ……。」

ギユヴァアアアアアアアアアアアツツ!!!!

ズズズドオドオドオドオドオドオオオオオオオオオオオツツ

ツ!!!!

バスターボンバー&フレアダイバー 『っ
!!!!!!』

爆発に吹き飛ばされた2機が外壁に激突。そのまま崩れ落ちた。
装甲面が損傷し、激しい傷が目立っていた。ボディをきしませな
がら起き上がるようにする。

バスターボンバー 『こ、コイツが……女王だったのかっ……
!!!!!!』

フレアダイバー 『強すぎる……デストリアンレベルだぞ……
!!!!!!』

周囲にはBLWの群れが未だにBLWクイーンを守るように点
在する。背後からは波のように新たなBLWが押し寄せる。

陸自パイロット 「我々の部隊はこのまま“デン”へ向かいますか？」

高島 「そうだ。だが、進行しながら散開している部隊と合流していく!」

ヘルトルーパー部隊は、「デン」を指して進行しはじめる。

一方で待機していたJバギー内は、深刻な状況下の中にあつた。

吉崎 「ジエイデッカー、マイトガイン、共に損傷率約50%
・ ・ ・バスターボンバー、フレアダイバー共に損傷率約60%
・ ・ ・これ以上戦闘を続ければ・ ・ ・!」

要は険しい表情で指示を出す。その声は震えていた。恐怖からの震えではなく、自分の判断が誤っていたかもしれないという悔しさからだつた。

要 「・ ・ ・舞人、そして超AIロボット達・ ・ ・直ちに離脱するんだ!!!これは命令だ・ ・ ・!」

その命令を聞いた舞人達はいくら命令とはいえ、ここまで来たのだからという想い故にあえて反発した。

舞人 「いいや!!引けないね・ ・ ・!」

要 「舞人・ ・ ・!」

マイトガイン 「せつかくですが・ ・ ・ここまで来たんです

！！舞人の言うとおり、引くわけには行きません！！！！」

要 「舞人、マイトガイン！！もうよせ！！これ以上突っ込めば本当に死んでしまうぞ！！！！」

ジェイデッカーもあえてここは舞人やマイトガインの意見に賛同する。

ジェイデッカー 「私も同意見です……マイトガインと……」

要 「ジェイデッカー！！」

ジェイデッカー 「確かに我々がこれ以上闘い続ければ危険です。ですがそれは覚悟の上！！今直面しているのは、今年多くの一般人の犠牲者を出した元凶……我々が今、ここで食い止めなければいつ食い止めるんです？！！」

要 「！！！！」

要は自分達が命がけで市民の為に最前線で闘っているという認識を思い起こされた。最近では責任に囚われる事が確かに多く見られた。バスターボンバー達も意見した。

バスターボンバー 「俺達は……後方支援しなきゃいけないんでね……！！！！」

フレアダイバー 「任務ですから……！！！！」

要は目を閉じて再び見開くと、改めて命令を下す。

要 「よし！！全機、体制を整え再度攻撃を加える！！！」

舞人 「そうこなくちやな！！！」

この判断に吉崎が危惧する。余りにも無謀な命令だからだ。それこそ責任が問われかねない。

吉崎 「隊長……！！それは危険すぎます！！！」

葉山 「そうつすよ！！いくらなんでも……！！！」

要 「俺達は常に彼らと共に闘っているんだ！！彼らの熱いスピリットを汲んであげなくてどうするんだ！！今一度俺は部下達を信じる！！！」

吉崎 「隊長……。」

そして、再び立ち上がった勇者達が攻める。一直線上にマイトガンとジェイデッカーが駆け抜け、その左右からバスターボンバーとフレアダイバーが共に駆け抜けながら援護射撃をし続ける。

ドオオオオオオオオオオ……！！！！

ディギユゴオオオオオ！！！！ ヴィギギギツギギギギン

ツ！！ ヴィギギギツギギギン！！

ドウヴァルルルルルルヴァヴァヴァゴオッドウヴ
アルルルルルルウウウ……

左右に渡って飛び交う援護射撃の攻撃によってBLWの群れが撃破されていく。

ジエイデッカーはその中をJマックス・キャノンを撃ちながら突き進む。

ジエイデッカー 「おおおおお!!!」

ヴイドオヴァアアアアアアッ!!! ヴギユヴァアアアアアアアアッ!!!

マイトガインは突きの構えのまま動輪剣でBLW群を突き砕きながら爆進する。スラスターから大出力の炎が吹き出て行く。

ドオオオオオオオオオオ・・・ズディギャガガゴゴゴゴゴゴガガガガギャシャアアア!!!

舞人 「このまま一気に懐へ突っ込む!!!」

マイトガイン 「でやああああああああ!!!」

クイーンがビームを放つ。だが、高速で前進しているために命中せずに、地表を爆発させていく。

4機が一丸となってBLWクイーンに向かって突き進む。あたかもボーリングのボールがピンを吹き飛ばす時のようにBLWの群れを撃破していく。

ジエイデッカーが飛び立っていく。突き進むマイトガイン。

吉崎 「Jマックス・キャノン、バースト・モードのエネルギー
― 充填率、98. . . . 125. . . . 170. . . . 204. .
. . . .」

高速でエネルギーが充填される。そして使用範囲内の限界数値
に達した。

吉崎 「Jマックス・キャノンエネルギー充填率、265%！
！これ以上はレッドゾーンよー！！」

ジエイデッカー 『了解！！Jマックス・キャノンバースト、
ファイアアアアアッ！！！！！！』

ギユヴァルヴァシュヴァアアアアアアアアアアアアアアアアアア
アアアアアアアアッ！！！！！！

超高エネルギーのプラズマ過流がBLWクインに向かって撃
ち出される。それにマイトガインも続く。システム・ライザー発動
時の超必殺技が発動する。

舞人 「真っ向！！！！電撃斬つつ！！！！！！」

マイトガイン 『はあああああああああああああああああああ
あああつつつ！！！！！！』

渾身の勢いで振り下ろされる電撃斬。二つの超高エネルギーが
BLWクインの忌まわしい巨体に炸裂する。

ズゾヴァギャシュザガガガヴァシュヴァギャアアアア

応じたかのように、眼下にいた全てのBLWが変異体へと進化する。

BLWデビル 「ギユキユギユアアアアアアアアアアアア！！」

そのBLWこそ、BLWクイーンが最後に生み残していた最強体のBLWだった。容姿からして悪魔にふさわしい。

この状況を見ていたヘルトルーパー部隊の隊長、高島が全機に通達する。

高島 「この状況を全部隊に通達しろ！！残りの部隊でデンに現れた新たなBLWを完全に駆逐する！！」

陸自パイロット 「はッ！」

各ポイントで展開していた全てのヘルトルーパーの部隊が動きを見せた。全機が一斉に戦闘を蜂起して、「デン」へと向かい始める。

グレートファイバードとグレートエクスカイザーも空中を駆け抜けながら飛ぶ。それに並行するようにグレンラガンが走る。

今、正に一連のBLW事件の元凶との最後の決戦が始まろうとしている。

つづく

次回予告

ようやくBLW事件の元凶を駆逐した。だが、BLWクイーン
の真下には更なる元凶が潜んでいた。ヘルトルーパーの部隊が突入
するも、デビルBLWが変貌させたBLW群を前に圧倒される。そ
の状況下へ向かうグレートファイバード達。マイトガイン、ジエイ
デッカー達も再度絶望へと立ち向かう。だが、圧倒的な強さを持つ
てデビルBLWは、超AI勇者達を追い詰める。

次回、新生太陽の勇者 ファイバード・サーガ 第47話
「熾烈極めし激闘」

絶望が漂う時、待ち望んだ力が飛び込む。

第46話 「現れし悪魔」(後書き)

感想・意見、お待ちしております。

第47話 「熾烈極めし激闘」

BLWデビルに向かい、一斉にヘルトルーパーの部隊が突撃する。

高島 「全機、突入せよ!!!」

集結しきつたヘルトルーパーの部隊が一斉に突撃する。駆動音が重なり重なって「デン」に響き渡る。それに対向するかのように変異体と化したBLW群がヘルトルーパー部隊へ向かって進行し始める。

BLW群 「クケケケケアアアア!!!」

だが、数的には6と4。勢力面でヘルトルーパーの部隊が押されていた。

帰還途中だったブレイヴ・フォーsteamにもBLW群が迫る。覚悟を決めて舞人が先陣を切って迎撃する。

舞人 「く……もうこうなったら攻めるしかない!!!」

舞人は、動輪剣の残りエネルギーを最大限に抽出。マイトガイんが動輪剣を構える。

マイトガイん 「舞人……もしもの時は私を捨てて脱出しろ

！！舞人にはお嬢様が待っている！！」

舞人 「何を言っているんだ？！！俺はマイトガインを捨てて逃げはしない！！俺達は一心同体だ！！！」

マイトガイン 「だが、私はロボット・・・超Aエーダさ
え生きていれば再び甦る・・・だが、舞人は人間だ・・・
・もしもの事があれば、亡くなったご両親にも、恋人であるお嬢様に
申し訳が立たない・・・。」

舞人 「マイトガイン、俺達は勇者だつ！！攻めるぞ！！！」

マイトガイン 「舞人・・・そうだな！！我々は死な
ない！！！」

ジェイデッカー 「そうだ・・・我々はもう引き下がらん！
！！」

この行動に隊長である要は待ったをかけた。余りにも無謀だったからだ。

要 「お前達！！撤退だ！！撤退するんだ！！今のお前
たちの状態じゃ、確実にやられる！！！」

既に慢心創意状態の超Aエーチーム。要は、必至に撤退命令を呼びかけた。

ジェイデッカー 「隊長・・・やはり我々がやらなければなら
ないんです・・・おそらく自衛隊のロボット部隊だけではどうな
るか・・・私は察しています。」

要 「そうかといって今のまま闘うのは余りにも無謀だ!!!
せめて体勢を立て直して……。」

ジエイデッカー 「戻っている間にも奴らは攻めてきます……
そうなれば隊長達にも危険が及ぶでしょう……攻めこそが最大の
防御。以前隊長もおっしやっていたではありませんか!!!ならば我
々は攻める事をここに選択します!!!それに……必ず彼らが
来てくれます!!!」

バスターボンバー 「おう!!!」

フレアダイバー 「攻めましょう!!!」

要 「ふふふふ……はははははは!!!今日のお前達には完全
に一杯食わされた!!!こうなったら全ての責任は俺が取る!!!
命令だ……守ったら負ける!!!攻めろ!!!」

一同 「了解!!!」

今夜二度三度の部下の反論。だが、悪い意味合いでは決してな
かった。全ては関東エリア市民の明日を守る為の行動だ。ファイバ
ード達の到着を信じて超AI勇者達が再度絶望に挑む。

吉崎は、Jマックス・キャノンのモードを通常に切り替える。
だが、先ほどのバーストモードの影響が大きかった為、吉崎はジエ
イデッカーに使用可能な弾数を教える。

吉崎 「ジエイデッカー、聞こえる? Jマックス・キャノンは
さっきのバーストモードで十分な冷却条件が必要な!!!その状態

グアツ……ドオギャガアアアア!!! スガンズガ
ンツ……

BLW 03変異体に飛びつかれ地面に倒れる1機。気違いの
ように暴れる変異体のBLW 03にバラバラにされる。

後方からBLW 02の変異体群が砲撃しながら攻める。

デイデイイデイギュゴゴゴゴゴオオオオツツ……
・ズズズズズズズズウ……

撃ち碎かれるヘルトルーパーの部隊。さらに凶暴化したBLW
01の無数の群れが群がり、溶解液で装甲を溶かして破壊してい
く。もはやヘルトルーパー部隊には成す術がない。

高島 「なんということだ……くツ、こうなれば小型の個体
だけでも確実に撃破しろオオ!!!」

高島の指示に従い、地表へと射撃を開始する。地面を走るBL
W 01が駆逐されていく。

ドドウルルルルルルルルルルルウウウウウウツツ

!!!!

バババドオドオドオドオドオギャガアアアアツツ!!!!

高島 「何としても我々の手柄にしたいのだ……!!!!!!奴だ
けは……!!!!!!」

対策本部。 1人の警官が冴島に現状を告げる。

警官 「冴島警視總監、失礼します！！現在の戦況なのですが、ブレイヴフォーsteamがクイーンとの戦闘を展開し、クイーンを撃破したようです！！」

冴島 「何?!!では、これで一連の事件は……。」

警官 「しかし……撃破されたクイーンの内部より新たな巨大BLWが出現!!!同時に周囲にいたBLWの群れの全てが変異体と化し、現在、自衛隊の部隊と交戦中です!!!!」

冴島 「肝心のブレイヴ・フォーのロボット達は……!!」
「？」

警官 「戦闘を続行……見ている側としては背水の陣のようだったと……!!!!」

背水の陣……即ち再起不能覚悟で事に挑んでいく様である。ヘリから見ていた警官にはそう捉えていたのだろう。

冴島 「だが、信じるしかない……彼らしかないのだ。この状況を打破できるのは!!!それに、まだ彼らもいる!!!」

警官 「彼ら……ですか……???」

冴島 「ファイバードとエクスカイザーだ。情報によれば穴の周囲で戦闘してくれているようだ。だが現状を聞けばまだ穴へは到達していないようだな……とにかく希望は、希はあるのだ!

ズガシユウウウウウンッッ!!!

渾身の一撃が胸部に炸裂。だが、巨大な肩から生えている腕が伸び、巨大な3本の爪でマイトガインを捉える。

ガキイイイインッッ!!!

マイトガイン 『しまった・・・!!!』

舞人 「くッ!!!マイトガイン!!!」

強力な握力で握り潰そうとするデビルBLW。機体がきしむ音が響く。

ギギギギギイイイ・・・

マイトガイン 『ぐおおおお・・・!!!』

舞人 「マイトガイン!!!くそ!!!」

コックピットに響く非常アラーム音。更にその状態から地表に押し付けるようにして叩きつける。

ズドオガアアアアアンッッ!!!

舞人&マイトガイン 『ぐあああああああ!!!』

デビルBLWはマイトガインを地表に押し込みつつ、胸部の生体砲身から破壊光を放つ。まるでサン・ブラスターの様だった。突

バジジジジジイイイツツツ!!! ボボボウウウンツツ!!!

四発目のパンチが痛恨の一撃となり、機体が激しくスパークし、小爆発を起こした。これによりコクピット内部も影響を受け、モーターのガラス類が破碎。舞人の身体に突き刺さる。激痛と衝撃のあまりに気を取り戻す。

舞人 「がッ……ああ……!!!」

スクラップのように投げられるマイトガイン。仰向けの状態で地表に落下した。

ズズズウウウウツツ!!!

スパークを起こしながらマイトガインは力を振り絞って舞人に語りかける。その口調は明らかに開発段階の初期状態の口調に近かった。

マイトガイン 「ま……ま……い……ト……逃げ
ろ……ツムギ……ジヨウが……か……かな……シ
ム……。」

舞人 「マイト……ガインツ……つむぎ……さん……
……!!!」

張られていた袖とのツーショット写真を震える手で手に取る舞人。そしてそれを額にあてる。

要 「ジエイデッカー……マイトガイン……舞人……
……!?!?!」

葉山 「夜空が赤っぽくなってますよ……。」

吉崎 「あれだけの戦闘がまだ続いてる……。」

要 「今の状況では安否がわからない……もどかしい限り
だっ……!?!」

闘い続ける部下を想う要。その時だった。要達は別の轟音が近づいてくる事がわかった。

ショットレイバー 『この音は……!?!!』

キユゴオオオオオオオオオオオオオオオオオオ!

ズドオガンズドオガンズドオガン……ドオオオ
オオオオツ!?!?!

グレートファイバードとグレートエクスカイザーが要の頭上低空を横切った。更にグレンラガンが助走をつけながら激しいジャンプをキメて穴を目指していく。

巻き起こる風の中、要はその勇士たちの背中を見つめ続けた。

要 「……ついに、信じていた勇者達が来てくれた様だな!?!?!」

グレートファイバードの目線上にBLWの変異体の群れが映る。

グレートファイバード 「遂に辿り着いた……ここに遷を苦しめた元凶がいる……絶対に駆逐する!!!俺達が、勇者だッッ!!!!!!」

グレートエクスカイザー 「いくぜえええええええええええ!!」

聡&グレンラガン 「おおおおおおお!!!」

グオツとツバーニングソードを揮って突っ込んでいくグレートファイバード。グレートエクスカイザーも同時に、グレートカイザーソードをかざして突き進む。怒涛の火炎と雷撃が絶望を切り裂き、グレンラガンのドリルが唸りを上げて砕きに行く……。

ギユゴアアアアアアアアアアアアアアアアア……

グレートファイバードが低空を駆け抜け突き進む。ヘルトルーパーの1人のパイロットがこれに驚愕する。もう1人のパイロットはそれが噂の勇者だと察した。

パイロットA 「なんだ?!あのロボット?!?!」

パイロットB 「あれが、勇者なのか?!?!」

高速で低空を駆け抜けながら、バーニングソードでBLW群を立て続けに斬り続けるグレートファイバード。斬られたBLWが、ドミノを倒すかのような連なる爆発を起こしていく。

ズギヤドオギョルルルドオオオオオオオオオオオオツツ！

！！

粉碎される2体の変異体BLW 03。遂に待ち望んだ勇者達の真の反撃が始まるうとしていた。

つづく

次回予告

少年・少女達はそれぞれの想いを胸に星空の下待ち続ける。想いの向こうで業火のごとし激戦が繰り広げられる。再度立ち上がり、向かっていく超AI勇者達。そこに宇宙そらのエネルギーを賭した勇者達が突撃。遂に悪魔と激突する。連なる勇気を悪魔にブチ込んでいく勇者達。最終局面を向かえたデンの中で、2大超勇者がグレート・ギャザウェイ・アタックを発動する。

次回、新生太陽の勇者 ファイバード・サーガ 第48話 「
星空の下の夜明け」

二つの大いなる力は闇を打ち消し、人々の心に朝を呼ぶ。

第47話 「熾烈極めし激闘」(後書き)

感想・意見お待ちしております。次回はBLWとの最終決戦という
こともあり、行数拡大で掲載いたします。

第48話 「星空の下の夜明け」(前書き)

本来予定していた話数を大幅に超えてしまいました。今回の話で
いよいよBLW決着となります。それではBLWとの最後の激突・
・ご覧ください。

第48話 「星空の下の夜明け」

桜高体育館。関東に発令された特別警戒宣言により多くの住民が避難していた。運動場においても避難した住民たちがいる。その片隅で桜高メンバーと桜工メンバーが星空を見上げていた。蓮がボソッと呟く。

蓮 「戦い・・・まだ続いてんのか？」

ワンセグで生中継を膝を抱えながら見ていた律が答える。聡を心配する気持ちが表情に表れている。

律 「まだ・・・続いているみたい・・・。」

蓮 「どうした？やっぱ、聡が心配か？」

蓮は何気に、普段よりテンションが低い律の表情から心境を読み取っていた。

律 「うん・・・もしもの事があつたらどうしよう・・・蓮・・・。」

蓮 「きつと大丈夫だって！！あいつなら。グレナラガンも強いしな！！」

律 「結局、なんだかんだでみんなが色んなカタチで巻き込まれてる。澪も、唯も、ムギも、梓も……連達も……私らが何したって言うんだ!!!」

確かにそうだった。律いわく、皆が色々な形でBLWに巻き込まれていた。誰も何も罪はない。

全てはケミカル・コーポレーションが巻き起こした理不尽な事態に他ならなかった。

その時、律は闘う聡のグレンラガンを確認する。弟が確認できただけでもホッとした様子を見せる。

律 「聡だ!!!聡が闘ってる!!!それに、勇士朗達も!!!」

蓮 「見せてくれ……マジだ!!!しかも何かカタチが変わってるぞ!!!前よりも更にカッコイぞ!!!」

このやり取りに、俊、涼達も律のケータイに集まり、顔を近づけた。

涼 「マジッス……ソードにシールド……すげーカッコイイ!!!」

俊 「おおお!!!フォームが変わっている!!!」

既に間近で見てきた光は、ドヤ顔で2体の名前を言った。

光 「グレートファイバードとグレートエクスカイザーだ!!!」

！さつき間近で戦闘見てきたけど、超激強かったぜ！！！！あれはフアイバード以上に熱い！！！！」

俊 「マジかよ?!?!」

涼 「いいなー……。」

勇士朗達は男子勢からしてみれば友人（涼からしてみれば先輩だが）ながらヒーローのような存在だった。はしゃぎ始める男子勢を見る梓。男心の謎を漣に問う。

梓 「どうして男の人ってああもロボットに熱くなるんでしょ
うか……??」

漣 「さーなー……でも、間近にすると心が震えるのは確かだな。」

和 「そうね……でも男の子が心震わすものとはまた違うのよね……何ていうのかな……自分達の為に闘ってくれる、守ってくれる姿勢に惹かれるっていうか……。」

漣 「うん！それだよ！！それに増してや好きな人がそのロボットならなお更だよな？」

和 「そうそう!」

姫子 「好きな人か……彼氏の涼も部屋に行くときロボットとか飾ってあるの。あの5人の人たちが戦うやつなんだけど。」

梓 「それって……幼稚園の時、男子がよく レンジャ

「「」つことか言って遊んでた類の……。」

姫子 「そうそれ。なんとかレンジャーとか好きなの！あのコ
！」

梓 「あの……高校生の彼氏としてどうなんですか??それ
??。」

梓は「いい歳してそれは……。」といわんばかりの口調で姫子
に問う。だが、姫子はサラッと難なく答えた。

姫子 「アタシは、全然気にしてないよ。本人が好きならそれ
でいいんだし……私は涼のそんな子供っぽいところも前部受け入
れてるの。カワイイしさ。」

梓 「そういうものなんですか??。」

姫子 「好き好かないは自由だけど、偏見を持っていたら上手
く付き合えないんじゃないかしら。その人が好きなものは好きなん
だし……無理に否定してもよくないよ。」

梓 「成る程……勉強になります……！」

漣 「あははは、梓ももつと人を見る器を広げないとな！」

梓 「そうですね。でも、大きな声で言えないですけど、やっ
ぱり私はその……俊さんの事好きです……。」

和が優しく諭す。母親のようなオーラを感じさせる。

和 「それはそれで梓ちゃんが素直な気持ちで頑張ればいいのよ。恋愛は十人十色。十あれば十の形がある……決して一つのパターンで考えるものじゃないのよ。」

梓 「和先輩……。」

それを聞いていた唯が思い出したように言い放つ。

唯 「そーだよッ!! 思い出した!! 澪ちゃん、勇士朗君に告白されてさつき付き合い始めたばかりなんだよ!!!」

澪 「唯……!!!」

それを知った律、梓、姫子がそれぞれの反応する。ちなみに男子勢は光のコシヨコシヨ話で知っていた。

律 「な、なにーーーー!!!? 私を差し置いてえ!!!」

梓 「そうなんですか!?! おめでとうございます!?!」

姫子 「ええ?! 何て言われたの?!!?」

皆からある意味責められる澪。和がくすつと笑った。

和 「くすつ……ふふふつ。」

澪 「うう……どうした?和?」

和 「いつもの雰囲気になって……何か安心したの。」

漚 「和……そうだな。時間的には今日の放課後以来なんだけど、なんだか長い時間殺伐とした中にいたような感じがする……」

和 「それだけ嫌な空気の中にいたって事ね……」

確かに和曰く、いつもの和む雰囲気は帰ってきてくれたのだ。時間的には一晩の半分の時間だ。だが、それ以上に感じていた。それだけBLWの引き起こした事態は混沌としていたのだ。

漚 「でも、嫌な空気も今に終わりそうな気がする。もう時期に勇士朗達がここへ戻って来てくれる！！そんな気がするの！！」

和 「そうすれば勇さんも戻ってきてくれるの……」

とりあえず、聡の無事を確認できた律も同じ気持ちを抱く。あと少しで最愛の弟が戻ってくる……そんな気がして已まなかった。

律 「聡……」

多摩市方面の夜空に顔を持ち上げる漚。その想いの先に勇者旋風が駆け抜ける。

ギョゴオオオオオオオオオオオオオオ！！

低空を駆け抜けるグレートファイバード。一斉にそれに振り向くBLW群。咆哮をしながら襲い掛かるうとする。

その一方でグレートエクスカイザーがグレートカイザーソードを揮う。

グレートエクスカイザー 『はあああああああッッ！！！！』

ズギヤザザザアアアアアアアンツ・・・ツドオオオオオオオオオオオッッ！！！！

長身の刀身が多数を葬る。ザンツと構えを治すと自らグレートカイザーソードを突き出しながら群れに突き進む。実に圧倒的だ。

ドオオオオオオオオオオオオオオオオオッッ！！！！

ズギヤガガドオドオドオドオズギヤシャシャシャギヤアアアアアアアッッ！！！！

グレートエクスカイザーの重量を乗せた刀身が変異体BLW群を突き砕く。両脚でスライドしながら着地すると、背後から飛び掛つてきた変異体BLW 03の群れをグレートカイザーソードで吹き飛ばした。斬り砕かれながら一気に爆発を起こす。

変異体BLW 03群 「クククケケケエエエエ！！！！」

グレートエクスカイザー 『はあああつつつ・・・！！！！！！！！』

ディギヤズドオオオオオオオオオオオオオオオオオオッッ

！！！！！！

もう一方でグレンラガンが爆闘する。ドリルを唸らせながら烈火のごときラッシュを繰り返す。

グレンラガン 『だりやあああああッッッ！！！！』

聡 「おらおらおらおらおらおらおらおらあああ！！！！！」

ズギユドオドオドオドオドオドオドオドオドオドオガガガッガガガガガガガガアア！！！！

前にいた変異体BLW 03の群れが次々と碎かれる。そしてジャンプし、BLW 02の変異体に狙いを定めて一気に高速回転するドリルを突き下ろす。

聡 「ドオリルツ……ゲイザアアアアアアアアアアッッ！！！！」

ギユオオオオオオオオオツ、ズグシュドオギユルルルガアアアアアアッ！！！！

粉碎される変異体BLW 02の巨体。周囲のBLW 01の変異体群も衝撃波で粉碎される。

周囲から攻め入るBLW群。グレンラガンはあらゆる格闘攻撃で撃破していく。

BLW群 「カカカカカカアアアアアアアッッ！！！！！」

グレンラガン 『無駄無駄無駄無駄アアアア！！！！見せてやれ！！！！聡！！！！』

部フレンズ

燃え盛る炎に照らされる3大宇宙勇者達。低空を浮遊しながら
ジエイデッカー達の前に着地した。

ジエイデッカー 「ファイバード・・・なのか?!?!」

グレートファイバード 「ああ・・・ブレイブ宇宙警察機構か
ら譲渡されたユニットと合体した。コイツが元凶なんだな?」

ジエイデッカー 「元凶のクイーンは我々が駆逐した・・・
コイツは元凶が生み残していた最悪な種だ!!!」

デビルBLWを睨むグレートファイバード。バーニングソード
をデビルBLWに向けてかざす。

グレートファイバード 「・・・とにかく、こいつらのせいで
今まで罪もない人々が犠牲になった・・・残された人たちの悲しみ
は計り知れない・・・澁も危険な目にさらされた・・・これ以上
の悲しみを止める為、デストリアンの前に貴様らを潰すッ!!!」

デビルBLW 「カギユギユウクククウウウ!!!」

グレートファイバードの言葉に反応するかのように咆えるデビ
ルBLW。気色の悪い音をたてながら身体を変異させていく。

ゴゴゴゴゴゴギユギユウギユゴッ・・・ボゴゴゴゴゴ
ゴッ・・・ゴゴゴゴッ!!!

更に巨大化し、強靭な脚が四足になり上半身と下半身を繋ぐ部

ヴィギユウルヴァゴガアアアアアアアアアアアアアアアアアア
ツツ！！！！！

舞人 「うおおおおおお！！！特攻！！！直撃突きっ！！！！」

ドオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオ
ンツツ！！！！！！

ズゴヴァドオゴオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオ
ツ！！！！！！！！

デビルBLW 「ギユギギギツ……………！！！！」

動輪剣がデビルBLWの右脚の関節部に突き刺さると同時に、
Jマックス・キャノンのビーム過流が左肩半分直撃。左肩の左半
分が消し飛んだ。舞人は残りの力を振り絞ってエネルギーパー
ジさせる。

舞人 「エネルギー……………パージツ……………！！！！」

キュアアアアア……………ドオゴヴァアアアアアアアアア
アアンツツ！！！！

爆発する右脚。それでも残りの3本の強靱な脚で持ちこたえる。

そして、エネルギー制御の許容を超えたJマックス・キャ
ノンが爆発した。

ドオゴゴオオオオオン！！！！

ジェイデッカー 『くおおおお！！！！』

肩の巨腕でマイトガインを一殴りで吹き飛ばし、胸部の生体砲身のビームをジェイデッカーに向かって撃ち放つデビルBLW。まだ尚反撃する力を有していた。

ズガギヤアアアアアアアアアンツツ！！！！

舞人 「絀・・・さんツ・・・！！！！」

マイトガイン 『・・・がハ・・・！！！！』

ビギユドオオオオオオオオオオオツツ！！！！

ズヴァギャガアアアアアアアアアアアアアアア！！！！

！！

ジェイデッカー 『うおおおおおお！！！！』

正面の地表に直撃したビームが凄まじい爆発を起こしてジェイデッカーを吹っ飛ばした。

グレートファイバード 『マイトガイン！！！！ジェイデッカー

！！！！』

その時、拮抗していた力に変化が生じる。グレートファイバードのパワーが、浮き上がるオーラと共に強くなっていく。次の瞬間、一気にバーニングソードが掴まれていたデビルBLWの手を、腕こ

と一刀両断する。爆発するデビルBLWの左腕。

グレートファイバード 「はあああ……あああああ
ああああああっ！！！！！！」

ズギヤザギヤガガアアアアアンツツ……ズヴ
アギヤアアアアアツツ！！！！！！

デビルBLW 「カカカカカギヤガツ！！！！」

激痛に咆哮しながらもう一つの腕でグレートファイバードに殴
りかかる。

ゴオツ……ゴオガアアアアアンツ！！！！

グレートファイバード 「チイツ……！！！！！！」

バーニングシールドでこれを受け止めながら反動で引き下がる。
だが、ダメージは無いに等しい。

苦し紛れに最大出力の生体砲身のエネルギー砲を撃つデビルB
LW。後方に待機していたヘルトルパーの部隊を巻き込みながらグ
レートファイバードの真下に巨大なエネルギー過流が爆進する。

デビルBLW 「ゲゲゲゲギョガアアアアアアアアアアアアアア
！！！！！！」

ヴオドオヴァゴドオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオ
オオオオオオオ……ズギヤドオドオドオ
シヤアアアアアアア……！！！！！！

長時間に及んだBLW群との戦闘がようやく終幕を迎えた。凄まじい激戦を終えた勇者達が対策本部へと帰還する。

激しい損傷の為、Jトランスポーターに収容されるマイトガン。かろうじて全員無事の帰還を報告する要。一同が敬礼する。

その光景を微笑ましく思う部下達。その後、病院へと搬送される舞人。その最中に紬に連絡を取る。

舞人からの連絡を待っていた紬が1コールでケータイに出た。紬の表情は、涙が滲んだ笑顔を浮かべる。

激戦地跡に降下する自衛隊の回収・救援部隊。生き残ったヘルトルーパー部隊が廃墟を進む中、1人の自衛隊員が振り返り、デンのある方を見つめる。散っていった者達を思う目なのか、戦闘終了に浸る目なのかは定かではない。

その上空を飛ぶ取材班のヘリコプター。テレビ中継においても事態の収拾を報道する。

そして宇宙勇者達と冴島を始めとした警察官、自衛官達が対面する。冴島は彼らの勇ましさ、に歓喜を隠せず1人突っ走っている。啞然とする宇宙勇者達。この光景に要も笑みをこぼす。さわ子と吉崎、葉山は苦笑いで済みます。

帰還の約束の地、桜高の運動場。待っていた湊達の前にファイアージェットが舞い降りる。更に向こう側からエクスGTが帰還の景気づけにドリフトしながら入ってきた。ラガンも聡を頭に寄せ、走りながら帰還する。

駆け寄る漣達。勇士朗、勇もハツチを開いて出てきた。勇に駆け寄る唯と憂、そして和。勇は従妹二人の頭を撫でる。和も一歩間をおきながら「おかえりなさい」を口にした。勇は照れくさそうに答えている。

ラガンの頭から飛び降りる聡。すると駆け寄った律が一発ビンタをした。弟を想つての姉弟愛のムチだろう。律は、ビンタをしてすぐに聡を抱きしめた。その光景を見ていた蓮はニツと笑って勇士朗を出迎えに行く。

光、蓮、俊、梓、涼、姫子、そして漣が勇士朗を出迎える。皆にグッドサインを出す勇士朗。すると漣が駆け出し、勇士朗の正面に立ち止まる。

満天の星空の下、漣は顔を赤くして満面の笑みで「おかえり」を言った。

漣 「おかえり・・・勇士朗・・・。」

勇士朗 「ああ、ただいま！」

勇士朗は漣の「おかえり」にようやく実感ができた。BLWとの闘いが終わったという事を。だがそれに反比例してデストリアンとの闘いが新たな状況下に入った可能性も感じていた。それでも今はこの勝利の余韻に浸る。それぞれの大切な存在達の無事を実感しながら・・・。

つづく

次回予告

訪れた日常の日。あれから三週間たった。勇姿朗と漣は、恋人同士という新たな視点での日々を送る。エクスカイザーは、全国各地から訪れるボランティアの人々と共に多摩市及び周辺の復興支援を手伝う。マイトガインやジェイデッカーも集中修理とパワーアップの為にオーバーホールを行っていた。

そんな日々の中、桜高と桜工のマラソン大会が開かれる。だがその最中、唯が行方不明となってしまう。唯を探す漣達。そのとき、異星から着たりし未知なる悪が迫る。

次回、新生太陽の勇者 ファイバード・サーガ 第49話
「与えられしダグテクター」

光達が勇者となる……。

第48話 「星空の下の夜明け」(後書き)

長らく続いたBLWとの闘いがようやく集結しました。とはいえ、物語の中では一晩の出来事ですが……。五人の勇者達から見た後日談の特別編も掲載予定ですのでよろしく願います。

感想・意見お待ちしております。

「BLW最終決戦後日談・特別篇1」（前書き）

BLWとの最終決戦後の後日談です。特別篇1では勇士朗と勇のそれぞれの視点で後日談を描きました。

それではどうぞ！

「BLW最終決戦後日談・特別篇1」

BLW最終決戦後　～勇士朗ビジョン～

BLWとの激戦が終わった。

激戦の果てに生まれたBLWによる犠牲者は大震災レベルの人数に相当した。俺はそれでも多くの人たちの為に戦った……いや、「闘った」という文字の方がいいかもしれない。

だが、デストリアンとの闘いはまだ決着の兆しすら見えていない。新たな展開はせいぜい謎の地球外知的生命体からんできてるくらいだった。けど、今はとにかく仲間達と、そしてやっと付き合うことができた漣と勝利を勝ち取った事の余韻に浸りたい。

闘いが集結しても尚、翌朝の早朝まで警戒宣言が解かれなかった。多分念を押してたんだろう。

まだ9月下旬。夜は少し暑かった。配られたシート一枚をはおってブルーシートの上でみんなで寝ていた。ああいう光景を見ると改めて「仲間」ってのが実感できた。

俺は漣と一緒にならんで寝ていた。ぶっちゃけ嬉しすぎて闘いの疲れもどっかにぶっとんだ。

その時、漣がごろっと寝返りをうって俺のところに寄り添うよ

うに来る。

体が固まった。伝わってくる澁の体温がなんともいえない。やっぱ人って温かい。ぶっっちゃけスゲー嬉しい。好きなコとこうしていられることのシチュエーションは生まれて初めてだった。

ファイバードが俺の中で話しかける。ファイバードはたまに話しかけてくる。

ファイバード（嬉しいんだな・・・勇士朗。）

勇士朗（ああ、スゲー嬉しいよ。好きなヒトとこうしていられるのはさ。）

ファイバード（私は、改めて彼女の持っているプラスエネルギーがスゴイと思い知らされた。）

プラスエネルギー。文字通り「陽」のエネルギーだ。以前、ファイバードから聞かされたことのあるパワーだ。それが澁をはじめとした、桜高軽音部のメンバーの音楽から生み出されるようだ。勿論澁達以外にも他にそういうエナジーを生み出せる地球人はいるよ。うだが……。

勇士朗（ホントだよ。いつも窮地に立たされた時に助けられる。何だかんだで、守るつもりが守ってもらっちゃってるんだな。）

ファイバード（ははははははっ。彼女達、あるいは勇士朗が思う澁の想いが私が本来持つプラスエネルギーと共鳴したものがパワーの正体だ。だがそれだけでは説明がつかない事が今回起こって

いる。))

勇士朗 (なんだ??)

ファイバード (おそらく付き合えたことによって君たちの想いが一層強くなったのだろう。プラスエネルギーが具現化したんだ。デストリアンの攻撃を跳ね返すような。。。))

あの時だ。俺が激しい攻撃の中、漣の歌声を聴いてパワーがみなぎってきた時の事だ。無意識の内に全身からオーラが立ち昇っていた。

ファイバード (更にそのエネルギーで召喚させたファイアーシャトルに莫大な影響を与えた。結果、本来のグレート化をさらに上回る能力を発揮できたんだ。))

勇士朗 (そうなのか。。。!!!!)

改めて漣がスゴイ存在と思った。そして感謝の気持ちも芽生える。思えば俺が漣に一目惚れしていなければ、今頃全く違う展開になっていたんだろう。高1の時に出向いた桜高の学園祭が今に繋がっている事が奇跡に思えた。

漣 「ん。。。おかえり。。。勇士朗。。。」

漣が寝言を言う。俺の夢を見てくれているみたいだ。

夜が明ける。本当の意味で夜明けを迎えた。街に太陽の日差しが照らされる。漣の寝顔にも太陽が照らされていた。

夜明けが赤く燃えるように俺は走り続ける。漣の彼氏として、
ファイバードとして……。

次の日。学校帰りに約束どおりに「付き合った記念」のデート
に行く。

俺は桜高の校門まで出向いた。やっぱり男から迎えにいったほ
うがいい。俺の持論だけど。

愛用ベース・エリザベスを背負った漣が、校門の近くでキョロ
キョロしながら俺を探していた。そして目が合うと満面の笑みで手
を振ってくれた。やっぱり……綺麗で可愛い。

俺は漣の正面まで軽く駆け出す。

勇士朗 「ごめん、まった？」

漣 「ううん。私もさっき部活が終わったばかりだからさ……
」。

勇士朗 「そっか……。」

彼女は恥ずかしがり屋だ。顔を赤くしながら何度も俺と視線を
合わせてはそらす。

そんな仕草もまた可愛いかった。

漣 「それじゃ……いこうか、記念デート……」

一般的には付き合った日数の日や半年、1年を迎えた記念にデートするのが記念日デートだ。

だが、俺と澪の場合は違った。付き合うことができた事自体に對しての記念だった。なにせ思い返せば命がけの日々が多々あった気がする。お互いにそれらの危険を乗り越えた上で付き合っている。

なんだか本当に運命を感じる。

桜ヶ丘の街を歩く俺達二人。歩いていると市内の所々にデストリアンやBLWが残した爪痕が見受けられる。それを見た澪がぼつりと言った。

澪 「あちこち壊れてる場所がまだあるよね……。」

勇士朗 「うん。どれもこれも、破壊生物がつけた爪痕。」

フラッシュバックする闘いの日々。勿論デストリアンとの戦いはまだこれからだ。でもとりあえず、BLWという種の巨大生物との闘いは終わったんだ。

澪 「変な話になっちゃうけど、私達が直接知り合う事ができたのって皮肉な事にその破壊生物のおかげでもあるよね？」

本人の言うとおり変な話だ。でもそう考えてみれば確かにそうだった。だが、過去の繋がりをとやかく考えるより今があれば俺はよかった。

勇士朗 「まあ、考えようによってはそうかもしれないけど、

とやかく過去を考えるより俺は今があればいいよ。陰陽全ての流れの繋がりがあって今がある……ってね。」

漣 「いい事言うなあ……そうだな！いまがあればそれでいいな！」

俺達は、相模大野駅周辺を周る。ここには、以前からも俺達は学校帰りに寄り道したりしていた。

ショッピングしたり、カラオケに行ったり、食事したり、ゲーセンも行けたり結構遊べる。最も高校生の俺達じゃ遊べる時間は限られるけど。

ゲーセンで漣が気に入ったカメのヌイグルミをゲットする為にクレーンゲームをする。

結構トライして1000が軽く消える。1800円かけて取った。

勇士郎 「よっしゃー……やっと取れた！はい！カメちゃん！」

漣 「やった！ありがとう！でも結構お金使っちゃったよね？大丈夫なの？」

勇士郎 「うん！余裕、余裕！！！」

実は警視庁の冴島さんから、特別貢献感謝の気持ちとして現金20万円を贈呈されていた。高校生の俺としては、気が遠くなる金額だった。命が掛かった行動に対する冴島さんからの感謝の自腹金

だ。来年の今頃は俺の上司になってるんだよな・・・冴島さん。

他にもギターマニアや太鼓の達人、シューティングゲームとか色々遊んだ。

もちろん、プリクラも・・・。

その後はカフェに立ち寄る。ここで俺は復活祭の時に出してもらったお茶を思い出す。

勇士朗 「そういえば復活祭の時、お茶出してもらったよな・・・。」

漣 「そういえばそんな事あったよね。軽音部のお茶、おいしかったでしょ?」

勇士朗 「うん、また飲んでみたいんだけどな・・・学園祭の時にまた飲ませてもらおうかな。」

漣 「そうだよ! そうだ、そうだ!」

何かを思い出したように漣は言った。一体なんだ、なんだ???

漣 「今年の学園祭、クラスでロミオとジュリエットの劇やる事に決まったんだ!」

勇士朗 「へえ! 誰が主役やるの?」

漣 「実はさ・・・クラスの投票で私と律になったんだあ・・・どうしよう!」

勇士朗 「どうしようって……凄いじゃん！みんなから認められてるってことじゃんか！！」

漣 「凄くなんかないよぉ！！恥ずかしくて出来ないよ！！」

勇士朗 「恥ずかしがり屋なのはわかる。だけど、漣はその、可愛いし、容姿端麗だし、自信を持ってもいいと思うよ。恥ずかしいのって自信がないからそうなっちゃうんじゃないの？」

漣 「ううっ……！」

なんだろ。もどかしい。何て言ってあげればいいんだ……
そうだ！！

勇士朗 「恥ずかしいとか言いながらさ、何だかんだで乗り越えてこれてるじゃん。歌だってライブの時にいいカンジで歌えてたし、何といってもさ、俺とこうして付き合ってる時点である程度の恥ずかしさの壁越えてるんじゃない？」

漣 「そりゃ、今でも勇士朗といると恥ずかしい気持ちはあるよ。あ、私の感情的な意味でね！けど、やっぱり劇だけは別物なんだあ……。」

うーん……どうしよう？俺は結局カフェではまた話題を変えてあげる事しかできなかった。

それにしても、学園祭か……。去年のあの出来事から今年が経とうとしているんだな。

デストリアンが初めて俺達の目の前に現れたあの日のことが改めて甦る。今思えば当時の漣はひどく傷ついていた。それが今となつてはこんなにも明るさを取り戻してくれた。

ファイバードがいなければこんなカタチにはなっていなかっただろう。恐らく、今でも傷ついたままだったんだろうな……。

その日の帰りかけ、俺は光達とよく来る高台の山へ漣と一緒に来ていた。夕暮れの空が東から蒼く染まっていく。

漣がその光景を見て呟き始める。歌詞のフレーズのようなようだ。

勇士朗 「何それ？新しい歌詞浮かんだ？」

漣 「うん。蒼空のモノログ……今浮かんだんだ。」

勇士朗 「漣ってスゴいな。この光景見てすぐに歌詞が浮かんだんだろ？」

漣は笑って謙遜する。

漣 「凄くなんかないよ。ただ浮かんだ歌詞呟いただけだから……。」

勇士朗 「そこがまたスゴいんだって！さっき言おうとしたけどさ。自信、もっと持っていていいと思うよ。漣は、漣自身が思ってるよりずっとスゴいんだ。ベースだって、歌だって、歌詞だって才能持ってる……なら、演技の才能が隠れ潜んでいてもおかしくない！その才能をさ、みんなに思い知らせてやる！！っていうくらいに思えばいいんじゃないかな？」

漣 「勇士郎……。」

じつと俺を見つめる漣。漣程じゃないが、逆に俺が恥ずかしくなる。

勇士郎 「ま、まあ……それでもダメって言うならしょうがないけど……。」

漣 「わかった。勇士郎がそこまで言ってくれるなら私も頑張ろうと思う。」

勇士郎 「漣……！」

漣 「やってみるよ……ロミオの役。明日からでも律とさ……！」

漣に俺の気持ち伝わってくれた。しばらく空を見つめ続けた後にごろんと二人で寝転がった。

漣の手が横に来る。俺はさりげなく手を握った。

漣 「あ……くすつ……。」

漣はくすつと笑って嬉しそうに手を握り返してきた。もちろん、スゲー嬉しい。

こんな事を思いながら蒼空の下にいる俺こそ、蒼空のモノローグだった。多分、漣も自分のモノローグを作っているんだろう……。

久しぶりに感じる安らぎを俺は噛み締めていた。

BLW最終決戦後　〈勇ビジョン〉

BLWとの対決は俺達が蹴りをつけた。グレートエクスカイザーとなったあの一夜の激戦が嘘だったように翌週の週末を迎える。

この日、俺は従妹の唯とその親友である近所の和ちゃんを連れて俺の夜の世界へ向かう。

夜の世界って言ったって、やらしいもんじゃない。アツく滾るビートが唸る峠のステージだ。

この前約束しちまったからな。和ちゃんと。

どうやら俺に気がある感じってのがこの前わかった。唯のKY発言のおかげだ。

女子高生とはいえ、和ちゃんはどこか大人びた雰囲気を持っていた。故に意識し始めたら俺も彼女の事が気になりだしていた。こんな事、会社の連れなんかには言えたモンじゃない。

とりあえず二人を乗せて出発する。出る間に憂が見送ってくれた。

憂　「それじゃ、勇兄ちゃん、くれぐれも事故っちゃダメだよ？」

勇 「なーに、事故りやしないって！何せエクスカイザーがいるしな！」

エクスカイザー 『とはいえ、山道では勇の言うとおりにしているんだ。過信は禁物だ。』

勇 「オーライ、解ってるって！じゃ言ってくるぜ！！留守番ヨロシク！！」

普段はエクスカイザーと共にしている俺のエクスGTだが、峠では100%俺のコントロールで走らせている。エクスカイザーの力に頼らずに走る。最もな心情だ。

唯 「それじゃあ〜行ってくるよ憂〜。」

和 「じゃあね、憂。」

エクスカイザー 『行って来る！！』

憂 「いってらっしゃーい！！」

家を出発した俺は、唯の彼氏、光の家に向かった。話を聞くと、どうやらクルマが結構好きらしい。

それに峠に行くからには男連れは1人でもいてくれた方が心強い。

光を乗せると、相模原市を南下。南西にある峠のステージ、尾柄山を目指す。その途中、コンビニへ立ち寄ってちょっとした飲食

料を買う。これもまた醍醐味の一種だ。光が用を足しにしている間にある程度の軽食を買う。

和 「本当にいいんですか？なんか本当、色々と申し訳ありません・・・。」

勇 「ああ、遠慮すんな！俺のおごりだ！」

勿論、俺が全部おごる。どこか遠慮がちな和ちゃん。そういう控えめなところもまた彼女らしい。

唯 「デザートツ、デザートツ！」

唯は相変わらずデザート系のものばかり買っている。和ちゃんとは対照的に容赦ない。買い物カゴの中にどんどんデザートを入れていく。

勇 「おいおい、どんだけ買ってるんだよ・・・。」

唯 「だって食べたいんだもん・・・いいでしょ？」

勇 「確かにいいと言ったけどな・・・。」

いいとは言ったが、いくらなんでも太るぞ。そう思った矢先だった。

和 「唯、いくらなんでも買い過ぎよ。夜にこんなに食べたら太るわよ？」

さすがというべきか、ナイスフォロー。長年の唯の保護者(?)

をやってるだけある。ま、俺も一応は従兄という保護者なのだが・
。

唯 「私太らないから大丈夫だよ、和ちゃあくん。」

和 「それでも少しは遠慮しなさいって！」

唯 「ふえくん。」

和ちゃんのおかげもあって少し減った。とまあそれはそうと今日は腕の見せ所だ。正直気になる子にカッコイイトコを見せたくなってしまうのが男の性^{さが}ってもんだ。

光が用を足したコンビニを出てしばらく走ると、峠道にいよいよ突入だ。エクスカイザーにいつものように手出し無用を促す。

勇 「さーて・・・エクスカイザー、ここからは手出しは無用な！本来のエクスGTの性能で走りたいからな！！」

エクスカイザー 『ああ、解っている。くれぐれも無茶のないようにな。』

勇 「ああー!!」

光 「おお!!いよいよっすね!!!!」

俺は少し流す程度のペースで走る。だが、一般車からしてみればスピードはかなり出ている。もちろんこんな状況下だ。彼女達にも気遣う。

勇 「大丈夫？恐くはない？」

和 「あ……大丈夫ですよ。」

唯 「すごいスピードッ！！ジェットコースターみたい！！」

おいおい……この程度のスピード領域じゃとてもジェットコースターじゃないぜ。

光 「ここの峠って結構道狭いじゃないスか。やっぱり先行後追い型式ですか??」

勇 「そうだな。あとはタイムアタックでタイムを競い合ってるカンジだ。」

光 「マジで走るときはどのくらいのスピードレンジなんですか?!」

勇 「これよりはもつと出てる。人を乗せるときは本気で攻め込んだりはしないけどな。」

頂上に着くといつものメンバーがいた。ランエボ5とGCインプレッサ、EKシビッククタイプR、スカイラインR34GTターボがアイドリングしながら停車していた。

俺はいつものようにあいさつに行く。EVO5乗りの早川、インプの水沢、シビックの立石、R34の杉島……皆、俺の走り屋仲間のクルマだ。

勇 「よッー!」

早川 「お！勇じゃねーか！」

水沢 「ようー！」

立石 「おおっす！」

杉島 「ういッ！今日は結構連れてきたな。しかも花二つ！」

勇 「ああ、一度来て見たいってな・・・俺の従妹とその彼氏と友達だ！」

唯 「は、はじめまして、唯ですっ！いつも勇兄ちゃんがお世話してます！」

お世話になってますだろ・・・唯。

光 「はじめまして！！光です！！走り屋のクルマが大スキツス！！後で乗つけてください！！！」

光はさつきからテンションがあがりっぱだ。好きなら当然か・・ちなみにさつきから光が右手に着けているブレスレットが気になつていたが、実はこれ、エクスカイザーが支給（？）したダグテクターという戦闘用のブレスレットだそうだ。光もまた闘える力を持つようになったんだな・・・。

和 「和です・・・はじめまして・・・。」

和ちゃんは不慣れな環境化にいる為か緊張している様子だった。夜の山の中に来るなんて早々ないからな。走りに関心のある奴じゃ

ないと・・・。

一通り自己紹介を終えると、しばらく地べたに座りながら色々話す。マシンの事、テクニック、コースの攻め方、それ以外の世間話とか・・・その間にも皆打ち解けてくる。

早川 「はー・・・長い事話しまくっちゃったな・・・じゃ、景気付けに走るか!!！」

EVO5乗りの早川が言い出した。確かにそろそろ本題と行くっていう空気だった。光がインプの水沢にナビシートに乗せてもらえるよう申し出た。

光 「乗せてもらっていいですか?!インプが大好きなんスヨ!!！」

水沢 「OK!ナビシートに乗りな!!」

大喜びで乗り込む光。なんか一昔前の自分を見ているような気分だ。とりあえず光が乗った以上、ここには俺と和ちゃんと唯だけになる。当然俺は走らない。4台のエキゾーストがこだまする。「けいおん!!」ならぬ「ばくおん!!!!」だ。

ヴォン、ヴォヴォン!! ヴォヴォヴォヴァゴオオオオオオオ!! ヴォヴォヴォヴォオオ!!

4台が間隔をあげながら走り込みを開始した。聞いているだけでも鳥肌が立つ。マシン達が出て行った直後、和ちゃんが呟いた。

和 「こうして見るとなんか、スゴイ迫力ですね・・・それ

に初めは正直、場所的に恐かったけど、みんなと話している内にそういつた意識もなくなつて・・・それにみんないい人達みたいで・・・」

お！悪い感じじゃないみたいだな！

勇 「そつか！俺正直、不安だったんだ。」

和 「え？」

勇 「いや、ココに和ちゃんを連れて来たのは俺が言い出しっぺだったしさ・・・それでもし嫌な思いとかしちゃったら悪かったなつてな・・・。」

和 「そんな・・・それよりもむしろ嬉しかったです。まさか勇さんの方から誘ってくれるなんて思つてもいませんでしたから。」

勇 「そつか・・・。」

・・・正直、唯があらさまに和ちゃんが俺に気があるように言つてからだ。俺自身も意識しちまつて、カツコイイトコ見せたくなつた。だが、そんな事いきなり言えたモンじゃない。

すると唯が俺に擦り寄つてきた。身内だけあつて何も意識はしない。ただ仕草はカワイイ。

唯 「勇にいちゃあゝん、光君がわたしをおいていつちやつたよ〜。」

勇 「しょうがねーな・・・よしよし。」

唯 「ふもふもー。」

ああーカワイイ、カワイイ。無論、リラックマがカワイイのと同じ感覚のカワイイだ。

あ、しまった。俺とした事が。和ちゃんヤキモチやいてたりは・・・。

和 「ホント、唯に一言でも言っていけばよかったのに・・・。」

・・・してないようだ。唯を気遣ってくれている。でもまー、走りが好きならそうなつちまうのが走り屋予備軍の性^{さが}だ。デビューすれば割かし落ち着いてくるがな。

しばらくするとすぐにメンバーが折り返してきた。そしてもう一度Uターンして走り込みを始める。どうやらショートコースみたいだな。そんな時間が掛かっていない。この峠のコースはショートコースとロングコースの二つがある。俺はロングが好みだが・・・。

その後、メンバーも戻って、いよいよ俺が出走する。いい走りをナビシートに座る和ちゃんに見せるぜ。やっぱり緊張しているよ。うだった。

勇 「恐かったら言ってもいいぞ？すぐにゆっくり走るからさ。」

和 「あ、はい・・・じくっ・・・。」

BGM スーパーユーロビート P A W E R O F
S A U N D

俺は何度かアクセルを吹かす。タコメーターも連動して回る。水温、油温、油圧、OK。ブーストもバッチリだな・・・1速へシフトを入れる。

ヴォウン！！ ヴォヴォヴォウン！！ ヴォン、ヴォン！！

勇 「いくぜ・・・エクストと平沢勇の出陣だっ！！！」

そしてクラッチを繋ぐ。エクストはエンジンを唸らせて加速していく。

ヴォオオオオ、ギユガッ！！ ヴォオオオオオオオオオ！！

！！

2速へシフトアップ。2速をキープしつつ、初めの左コーナーに突っ込む。

キュココカッ！

若干スキール音を鳴らしながらクリッピングポイントを締めて立ち上がる。すぐに右コーナーが待ち構える。カーブミラーで対向車の有無を確認しながらインベタで攻める。

そしたらアクセル全開で立ち上がる。

ヴァゴガアアアアア！！

緩やかな左コーナー。ここはチョイッとステアを動かしてRにそって走る。そしてレイトブレーキング!!へアピンを攻めながら、下りの4連コーナーを抜けていく。

ドオンッ!! ギュヒュキツ、ゴガフアアアア・・・ギユガ、ヴォヴォヴォオオオ!!

きつめのRが連続する。横から来るGがたまらん。そこをクリアすると短いパーシャル区間だ。そしてすぐに3連へアピン。手前からブレーキングして十分な加重を前に乗せる。アクセルをコントロールしながら突っ込んで立ち上がって、また突っ込む。

そこから上りのセクションをアクセル全開で立ち上がって駆け上がる。そしてまた2連コーナーを抜け、ストレートを駆ける。

ヴォツガアアアアアアアアア!!

すぐに手前からレイトブレーキング!! 左コーナーのRに沿ってアクセルを8割開かせて走る。

ドオン・・・ヴォヴォヴォヴァアアアア!!

そして待ち構える3連へアピン。ブレーキングを駆使しながら攻めては立ち上がる。ココを抜ければへアピンコーナーは、ストレートの先の一つだ。

ギユカカカ!! ギユツカ、ゴキユカ、ガガガア・・・
ヴォオオオオオオオオオ!!

ブレーキング!!

和 「……スゴイっていう言葉しか出てこない……。あと、勇さんの横顔が、その……。」

そのつて、なんだ??

和 「凄くカッコよかったです！特に眼差しとか……。」

勇 「そ、そうか?!」

眼差しか……。よくあの状況下で見れたな……。つていうか本日のミツシヨンクリアー……。なんてなっ！カッコイイ姿って見もえらえた事は嬉しい限りだ。照れくさげな表情からして嘘を言っていない事がわかる。

和 「こういつた世界があるんですね……。ホント凄かった！それじゃ、帰りもカッコイイ顔みせてください！」

まさか和ちゃん自ら攻めながら折り返す事を希望してくるとは……。なら、要望に応えようじゃないか!!

勇 「オーライっ!!じゃ……。いくぜ!!」

ヴオヴオヴオヴオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオ

!!!!

尾柄山にエキゾーストノートが響き渡る。この日の夜の出来事が俺と和ちゃんの中を少し縮ませることが出来た……。と思う。俺はそう思いたい。多分本人もそう思っているだろう。

改めて思った……。和ちゃん、いいカンジだったな。

E
N
D

「BLW最終決戦後日談・特別篇1」（後書き）

特別篇2は舞人、要、聡の各視点での後日談になります。感想・意見、お待ちしております。

「BLW最終決戦後日談・特別篇2」（前書き）

引き続き、特別篇。今回は舞人、要、聡の視点での描写です。

「BLW最終決戦後日談・特別篇2」

BLW最終決戦後 〔舞人ビュー〕

多くの犠牲と損害をもたらしたBLW事件は、壮絶な激戦の末に集結した。

BLWのクイーンは斃せた。だが、予想外の大ボスが潜んでいた。あいつは厄介だった。

何せこの旋風寺舞人とマイトガインを窮地に追いやった奴だ。今までの中で最強の敵だった。

満身創痍で帰投した俺はすぐに病院へと搬送された。俺とマイトガインは相当なダメージを受けていた。はっきり言って、マイトガインは大破に近かった。

あれから一週間と半分・・・今のところは目立った事件は起きていない。あの激戦の一夜が嘘のような日々が続いている。俺もあと少しで復帰できそうだ。

俺は病室の窓から外を眺める。じっとしているのはどちらかといえは性に合わない。だが改めて平和な街並みを見ると心が和む。あの街の中で多くの人々が生活している。

俺は旋風寺を引っ張りながら、ブレイヴ・フォースの一員とし

て闘い続けるつもりだ。もっともブレイヴ・フォーはまだ戦うチームが決まっただけでまだ組織としての稼動にはまだ時間が掛かるようだ。

俺が街を見ながらモノローグに浸っているその時だった。

紬 「わっ！！」

舞人 「っ???!」

俺は思わずビクツとなった。俺を驚かせたのは俺のマイハニーである紬さんだった。まったく、紬さん、おちゃめな悪戯をするもんだ。

けど、俺が搬送されて入院した直後、彼女は本当に俺の怪我に対して哀しんでくれていた。

彼女は、はんべそ状態だった。はんべそをかきながら俺の傷を心配してくれる姿を見た俺は思った。

どれ程俺のことを心配してくれていたのか。どれ程俺の事を想ってくれていたのかと。

ありがとう、紬さん。

これこそが俺にとっての勝利に感じた。俺も闘いながら紬さんのことを想っていたからな。

その後、彼女は朝まで俺に寄り添ってくれた。

絀 「びつくりした？へへへへ〜！」

舞人 「そりゃあ、びつくりしたよ！ははははは！」

絀 「お見舞いに来たよ！はい、お花！」

舞人 「ありがとう！絀さん……いい香りだ！絀さんの分身のように綺麗でふわっとした感じの花達だよ。」

絀 「うふふふっ、もう、舞人君たら！」

絀さんがくれた花は音楽を奏でるかのようなとてもいい香りを出す。言うなれば絀さんそのものだ……実に愛しいよ。

絀さんは俺の幼なじみでもある。昔はよく遊んだものだ。いや、遊んでくれたというべきかな。イツコ上のお姉さんだからな。

旋風寺家と琴吹家は異業企業ながらお互いの祖父の時代から親交が深かった。爺ちゃん同士が親友同士だったようだ。亡くなった俺の親父も現KOTOBUKI社長とも仲がよかった。

そして孫の代にあたる俺達二人は、めでたく恋人同士となっている。まさに運命とでも言うのかな。

付き合い始めてあと数ヶ月で一年になる。早いものだ。

絀さんは、花を飾ってくれた上に、紅茶の準備までしてくれている。彼女はよく部活でお茶を淹れているそうだ。

絀さんは紅茶を淹れつつ、話かけてくれる。

絀 「怪我の具合はどう？もうすぐに退院できそうなの？」

舞人 「うん。あと少しで退院できそうだ！でも、退院したらしたらで仕事如山積みなんだろうなあ。．．．ああ、今考えただけでも憂鬱になる。」

絀 「舞人君！一大企業の社長がそんなこと言っちゃだめよ！復帰したら頑張らなきゃ！うん！」

舞人 「う．．．。」

頭では勿論わかっているさ。帰れば今回の事後処理を初めに、色々な書類や会議に携わらなければならぬんだ。それに、ブレイヴ・フォースの一員としての準備もある。

絀 「はい、ダーズリン。」

目の前に絀さんが淹れてくれたダーズリンが置かれる。すでにいい香りがする。

舞人 「ありがとう．．．ズ．．．うーん！香りもいいし、味もいい！」

流石に毎日学校でお茶を淹れているだけある。癒されるよ。

絀 「そうだ！舞人君、今年の桜高文化祭はこれそうなのかな？」

舞人 「そうか！もうそんな次期か！絀さんは今年で最後だか

ら何にが何でも行くよー!!」

絀 「ありがとう！絶対見に来てね。私達は今年最後のライブなんだから！」

そういえば俺は、去年のゲリラライブ以降彼女達の歌を聴いていない・・・彼女達の歌か・・・。

舞人 「絀さん、音楽の活動はこれからもしていくんだよね？」

絀 「もちろん！できればみんなと同じ大学に行って・・・これからも続けて行きたいって思ってるの。だってみんなと約束した目標があるんだもの・・・武道館に行くって！一年のときに言った言葉だけどね・・・。」

そうか・・・おじさんはなんていうんだろうか・・・と思った矢先、それに応えるように絀さんは続けた。

絀 「お父さんは、できれば女社長になってもらいたかったみたいだけど、私のやりたい道を進んでいって言ってくれたよ。」

舞人 「ふふ、おじさんらしいや。俺もあまり聴いてあげる事ができていなかったからな。もっと絀さんたちの音楽を聴きたいんだ。」

絀 「じゃあ、アカペラだけど『ハニー・スウィート・ティールタイム』歌ってあげる。私がヴォーカルを担当してる歌なんだあ！曲も私が作ったのー。」

舞人 「へえっ！是非聞かせて欲しいな！」

紬さんは昔から歌やピアノが上手かった。よく聞かせてもらって見入った事を思い出した。

彼女は髪を一回かき上げながら、アカペラでその歌を歌い出した。

ハニー・スウィート・ティータイム アカペラVer

久しぶりに俺は彼女の歌声を聞かせてもらう。好きな女性むすめの歌声はやはり心地がいい。

癒される・・・俺はダージリンの味を堪能しつつ、彼女の歌声に浸る。

その歌声はBLWでの傷を癒していくかのような柔らかく、ふんわりしたメロディーだった。

俺は聴き入る・・・あの幼き日々の頃のように。

しばらくの間俺はずっと浸っていた。二人の時の流れに身を委ねるように。

歌いきった紬さん。俺は拍手する。

舞人 「紬さん、やっぱり歌が上手いね！すっかり癒されたよ。」

紬 「そう？よかったあ！病は気からって言うもんね！」

舞人 「あ、いや、病じゃないけど……。」

紬 「あ、そつか！へへへ……ねえ？カーテン閉めていい？」

舞人 「え？ああ。」

すると突然、紬さんは俺の周りにカーテンをかけた。

紬さんはベットに腰をかけたかと思うと、そこから俺の上に乗って抱きしめてきた。なるほど……その為にわざわざカーテンを……フフ……見かけによらず大胆だな……。

紬 「舞人君……。」

舞人 「紬さん……。」

俺達は抱き合いながらキスを何度もした。紬さんは何度も俺を抱きしめてくる。

舞人 「紬さん……好きだよ……。」

紬 「舞人君……愛してる……。」

舞人 「……退院したらまたデートに行こう……続きはその時に……。」

紬 「うん……そうだ……。」

舞人 「なに？紬さん？」

紬 「今度はマイトガインのお見舞いに行かない？」

舞人 「そうだな・・・今度一緒に出向こう！」

マイトガインは現在、警視庁管轄のロボット整備工場で大幅な修理を受けている。修理も兼ねたパワーアップのプロジェクトだ。時間はまだ掛かるようだ。

マイトガインが生まれ変わったその時、また俺は嵐を呼ぶ勇者となって復活するさ・・・まだデストリアンとの闘いは終わっていないのだから・・・。

BLW最終決戦後 〈要ビュー〉

闘いは壮絶を極めた。多くの犠牲も出た。だが、俺達は確かに帰還できたんだ。そして勝利した。

まだ夜中だ。だがBLWの夜は明けた。それは確かだ。

ライトが煌々と照らされる対策本部で俺達は帰還を宣言した。

要 「冴島警視総監殿！！我々ブレイヴ・フォー스는全機・全員帰還しましたー！！」

俺は警視総監に帰還できたことへの感謝の気持ちをこめて敬礼する。部下の吉崎、葉山も同時に敬礼をした。

冴島 「うむ!!!命がけの壮大な任務、よく成し遂げた!!!」

要 「ありがとうございます!!!総監のお言葉、心に沁みます!!!」

冴島 「ところで要君、やはり後ろの見慣れぬロボット達は・
・ファイバードとエクスカイザーなのかね!!!?それにドリルロボ
ット・・・!!!」

俺の後ろには、マイトガインを抱えたジエイデッカー、レイバ
ーズ、ストライクボンバー、フレアドライバー、そしてこの闘いに真
の勝利を導いた2大グレート勇者とグレンラガンがいた。

要 「はい!グレートファイバードとグレートエクスカイザー、
グレンラガンです!!!彼らの協力があつてこそ成し遂げる事のでき
た任務でした!!!」

冴島警視総監は、身を震わせながらロボット症候群を発症(?)
した。

冴島 「オオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオ
!!!!!!なんとカッコイイのだっ!!!!!!」

この方はアツイロボットにある意味でめっぽう弱い。いや、色
々な意味で強くなるという方が相応しい表現かもしれない。

冴島 「グレート!!!まさにグレートダアア!!!その翼
!!!肩のキャノン砲!!!胸のライオンが唸る!!!イカス!!!
!超絶だあああ!!!そしてそしてえ!!!グレン何とかのドリ
ルウ!!!男、いや漢だあああ!!!うおおおおおおお!!!

！！！！！」

要 「あははは……。」

流石にここまで壊れてしまうと苦笑いを出さずには入られない。左右を振り向くと吉崎と葉山が頭を抱えながら呆れてしまっているようにも思えた。こちらを見ていたさわちゃんも苦笑いしていた。

後ろで当の本人たちも実に素直な表現で口走る。だが、グレートファイバードの勇士朗君は流石に来年からの上司にそんな事は言えないようだ。

グレートエクスカイザー 「なんだ、このおっさん……。」

グレートエクスカイザーは現在、勇という青年と融合している為、口調が彼のものとなっていた。

グレンラガン 「はっははははは！！熱いオヤジじゃないか！！！！」

聡 「大人気ねーな……。」

グレートファイバード 「………冴島さん?????」

冴島警視總監の壊れっぷりを見て少し戸惑ってしまっているようだ。俺はグレートファイバードに振り向き、一言言ってやることにする。

要 「勇士朗君！警視總監殿は心が、器が計り知れない方だ。アツイモノに関する感性も人知を超えているんだ。」

グレートファイバード 『はぁ……。』

要 「今日は本当に助かった!!!三人共、感謝する!!!」

彼らがいなければ正直、俺達の敗北に終わっていたか、事態が長引く事となっていただろう。改めて俺は宇宙の力というもの思い知らされた。

だが、こうしてもいられない。帰還できたとはいえ、マイトガイとパイロットの舞人が激しい怪我を負っている。俺は駆けつけながら指示を出した。

要 「警視總監、マイトガイとパイロットの舞人が危険な状態の為、すぐに処置に移ります!!!」

冴島 「うおおおおおおお……ん??う、うむ!!!」

マイトガイをJトランスポーターに載せる作業が始まる。舞人も病院へと搬送されていった。

命には別状はないようだったが、かなりの怪我をしていた。見送った俺は次の仕事に入ろうとした。

さわ子 「誠君!!!」

突然だった。俺の名を叫ぶ声。声のほうに振り向くと、走ってくるさわちゃんの姿があった。

がばっ！

さわ子 「誠君・・・！！よかった・・・よかったあ・・・。」

彼女は半分泣きながら俺に抱きついてくれた。俺もそれに応えて抱きしめる。先ほどからずっとこつちを窺っていたからな。早く俺のところに行きたい一心だったんだろう。

要 「さわちゃん・・・！！ああ！！待たせたね！！」

俺は、ぎゅっと抱きしめてくれるさわちゃんから、ありったけの温もりを感じた。

この時、俺はやっと勝利の実感が湧いた。待っていてくれた存在を改めて認識した為だろうか。

そんな理屈はどうでもいい。さわちゃんが待っていてくれた。それだけで十分に嬉しい。

抱き合っていた手を互いの方に添える。俺はここで初めてタダイマを言った

要 「ただいま・・・。」

さわ子 「おかえり・・・。」

ふとさわちゃんの向こうを見ると、もじもじして佇んでいる吉崎の姿があった。

そうか・・・二人は高校の時の友人同士・・・俺がさわちゃ

んと付き合えたのもそうだった縁があったからこそだ……。

そういえばココへ来てまだ彼女達は会話をしていない。おそらく、吉崎が俺達を気遣ってくれていたんだろう。

俺が向こうに気を向けているとその向こうにさわちゃんも視線を向けた。

さわ子 「……レイナ……。」

要 「……彼女もまた命がけだった……せつかくだ、彼女ともしばらく一緒にいるといい。」

さわ子 「うん！」

さわちゃんは、一度俺に振り向いて再び駆け出す。さわちゃんと吉崎はお互いの無事を称えあいながらはしゃいでいた。まるで高校生のように戻ったように。

葉山 「いいんすか？隊長？もっと一緒にいたかったんじゃ……。」

ゆつくりと歩み寄ってきた葉山。空気を呼んで離れたトコにいてくれていたみたいだ。

要 「いや、久々に友達同士会えたんだ。吉崎も色々と話したかったんだろうしな。」

葉山 「ちゃんと気いつかってるんすねー。さすがっすー！」

要 「まあな。さ、俺達は怪我の手当てを終えてから次の仕事に移るぞ。」

葉山 「そうっすね!」

まだまだ俺達のやらなければいけない仕事はまだある。その時だった。

冴島 「いや、君たちはもういい。」

冴島警視総監が歩み寄る。だがもういいとは一体……。

冴島 「もう十分に今夜は闘ってくれた。命がけの戦場だったはずだ。今夜はゆっくり休め!!」

要 「警視総監、しかし!!」

冴島 「彼らもそう言ってくれている。」

冴島警視総監が指を指す方向を向くと、中破状態のジエイデッカーとレイバースがいた。

ジエイデッカー 『後は我々に任せてください!戦闘以外ならばできます!!』

ガンレイバー 『俺達ロボットは、疲れないっすからね!』

ショットレイバー 『隊長たちはここでご休憩を取ってください!』

要 「お前達……。」

俺は、本当にいい部下を持った。人間とロボットの違いはあれど、確かに絆というものがそこにあった。改めてそう感じさせられた。

テントの中で俺はコーヒーをすすりながらこれまでの戦闘を想う。

改めて想えば、BLWと呼称された彼らもまた、罪なき被害者だった。誘拐されたあげく、非人道な生物実験の題材にされてしまったのだ。その結果があればどの悲劇に繋がってしまった。

皮肉に皮肉が連鎖する。摘発されたケミカルコーポレーションの裁判がこれから忙しくなるだろう。

そう、今回の事件の黒幕は、ケミカルコーポレーションだった。
・ 極端に言えば人類が真の元凶だったのだ。

だが、デストリアンとの戦いはまだ続く……俺は戦い続ける。
・ ・・これからも……。

BLW最終決戦後 〈聡ビュー〉

バシンっ!!

聡 「つ……！！！」

俺は闘いから帰ってきて早々にねーちゃんに叩かれた。いきなり何すんだって言おうとした。

律 「聡い……！！！」

けど、ビンタされていきなり抱きつかれた。分けわかんなかった。

律 「ずっと心配してたんだぞ！！飛び出たきり帰ってこなかったから……！！！」

聡 「ねーちゃん……。」

さらにぎゅっと俺を抱きしめる。ねーちゃんは涙ぐんでいた。そこまで心配してくれてたんだな、ねーちゃん。

聡 「く、苦しいって、ねーちゃん……！！！」

律 「何処行つたかはわかっていたさ。あんな事態が起きていたんだからな。けどな、行動する事も大事だけどな、心配してくれている人の身にもなれよ……！！！」

聡 「……ごめん、ねーちゃん。」

ありがとな、ねーちゃん。俺、初めて感謝って気持ちが生え
たよ。

律 「よく帰ったな……。」

ねーちゃんは俺の頭をなでてくれた。なんだか久々に甘えたく
なつた。

聡 「あとでさ……帰ったら……。」

律 「？」

聡 「いや、なんでも……。」

言えるわけがない。溲ねーちゃん達や、蓮にーちゃんがいる前
で甘えたいだなんて……。

ラガン 『漢^{おとし}なら……本音を言え!!聡!!!!』

いきなり背後からラガンが言い放つた。何言ってるんだよ?!
言えねーよ!!!

聡 「はあ?!!!いえねーって!!!!」

こんなこと言ったらみんなに笑われる!!!だめだ!!!

ラガン 『さあ!!!ねーちゃんに存分に甘えろおお!!!!気
合ダアアア!!!!』

聡 「なんでばれてんだよ!!!!てか、気合カンケーねーし!
!!!!」

あ……違う言い方で言っちゃった。

クスクス笑いが起こる。うあー・・・はずかしつ。

聡 「うううっ・・・。」

俺は恥ずかしさの余り固まった。そしたらねーちゃんがまた抱きしめてくれた。

律 「ごうか？聡！」

聡 「うー！なにもここで・・・恥ずかしいぜー！」

律 「最近じゃあ、勝汰ばっかにかまっていたからなあ・・・寂しかったか？」

聡 「何言ってるんだ？！ていうか勝汰は？」

ねーちゃんは腕をほどいた。あー、恥ずかしかった。

律 「体育館で父さん達といるぞ。」

そういえばこっちは大丈夫だったのか？？

聡 「そつか。こっちは何も出なかったの??？」

律 「街の方に一体と唯ん家の近くにも一体现れたみたい。けど全部あの二人がやっつけたみたいだけだね。」

ねーちゃんが顔を向ける方に、共闘した勇士朗さんと勇さん、エクスカイザーがいた。

俺はずっと闘い続けていた。危ない時もあった。それを救ってくれたのがあの人たちだった。

グレンラガンにも言われた。あの強さを目標に強くなれって。確かに一緒に闘っていてスゲー強いと思った。

まだ闘ったことは無いけど、テレビで出ていたデストリアンていう奴らともこれから闘って行くんだろう。俺には闘う力があるんだ……。

みんなを守る為の力が……。

END

「BLW最終決戦後日談・特別篇2」（後書き）

特別篇いかがでしたでしょうか？人物からの視点の描写は、初の試みでした。これからも時間があれば、特別篇を加えていこうと予定しています。

感想・意見、お待ちしております。

第49話 「与えられしダゲテクター」

多くの犠牲者を出した多摩市・バイオ生物災害終結より3週間
余りが過ぎ去ろうとしていた。

いつものように登校する勇士朗。激戦の事を、グレートファイ
バードになった事を思い出しながら朝の日差しの中を歩く。

勇士朗 (俺・・・グレートファイバードになって闘ったん
だな。)

広げた右の手の平を見つめる。激戦の映像が脳内にフラッシュ
バックする。

その時、ケータイが鳴った。溇から朝のメールが届いたのだ。

勇士朗 「そっか・・・俺、溇ちゃん・・・いや、溇と付き
合うことも出来たんだよな。」

長きに渡る恋心の成就に未だに実感が湧かない。言い換えれば、
それほど溇の存在は雲の上だったのだ。だが今、まさに自分の彼女
としての溇がいる。想いを切り替える。もう両思いなのだ。すぐ
にメールを返す勇士朗。

メールを打つ勇士朗に蓮が背後から勇士朗の肩にドンと手を叩

く。

蓮 「おつす!! 勇士朗!!」

勇士朗 「ういー。蓮か。」

蓮 「おおっ、おおっ! 朝っぱらから漣ちゃんとメールか?」

勇士朗 「ま、まあな! 本当、今でも正直付き合っている事が実感しない!」

蓮 「そりゃ、よーござんすな。」

ほぼ同時刻。エリザベスを背負った登校途中の漣に、勇士朗からの返信のメールが届く。

漣 (あ! 返ってきた!)

想いを馳せながらまたメールを打ち返す。ずっと漣を想い続けていてくれた勇士朗と付き合えていることに、この上ない喜びを感じていた。

漣 「勇士朗・・・ふふ」

その時、後ろから律がやってきた。漣にとってのいつもの朝だ。

律 「おっはよーっ! 漣!」

漣 「ああ、おはよう。」

律 「で、どーなのさ？ 勇士朗君とは？！」

すぐに律はニヤケながら勇士朗とのカンジについて突っ込んでくる。

漣 「う、うるさいなー！ 朝から早々ー！」

律 「だって気になるじゃん！ 漣にとって初めての彼氏なんだからさー！！」

漣 「別に・・・まだ最初だからそんな急な展開なんてないぞ。ただデートは行ったけどな。」

デートという言葉に反応し、律はさらに漣をからかう。

律 「おおっ！！ 何処まで行ったの？？ キスはしたのかねえ？？？ それとも更にそのさ・・・。」

ゴンッ！

漣の鉄拳が律の頭上に炸裂。コブが発生する。これもまたいつものコトだった。

漣 「だ・か・らっ！！ 急な展開なんて無いって言ったろ！！」

律 「いたいなー、ちょっとからかっただけじゃんかー。」

漣 「まったく・・・手は・・・繋いだよ。結構温かった・・・。」

何だかんだで顔を赤くして言う澪。

律 「なんだ、展開あったじゃん。でも……いつかは勇士朗君、澪にボコボコにされちゃうのかな……。」

澪 「何を言ってるんだよ！そんな事、勇士朗にできないよ！」

律 「そーかねー??でも、勇士朗君が澪の凶暴な性格わかったら嫌われちゃうかもな。」

澪 「う……でも、きつとそんな事しない。私があつたとしても、勇士朗は受け入れてくれるんだと思う。」

澪の脳裏に今までの付き合い以前の記憶が流れる。楽しかった時の事、切なかった時の事、危険にさらされた時の事。

澪は勇士朗から、初めての彼氏にして運命的な感覚を感じていた。これまで乗り越えてきた日々を思い返せば、そう感じてならなかった。

律 「それはチョット買いかぶり過ぎ……っていつか考え過ぎー！」

澪 「それだけ信じてるんだよ。それはそうと、律はどうなんだ??蓮君と!!」

今度は律に攻撃が行く。赤くして否定する。

律 「な、なんでそこで蓮が出て来るんだよう!!あいつは力

チューシャ同盟だようっ!!」

漣 「そうか? 顔が赤くなってるぞ?」

律 「うっさいわい!!」

激戦地となった多摩市。日本・世界各地からの復興支援活動が行なわれていた。

毎日のようにエクスカイザーは勇の勤務時間中、修復光線を撃ち続けながら復興支援に積極的に参加していた。修復光線を撃ち放つエクスカイザー。

エクスカイザー 「修復光線!!」

撃ち出された修復光線が崩れ去っていた瓦礫を元の形に形成していく。だが、被害の規模は膨大なものだ。いくら修復光線とは言えど、効果が生かされる範囲には限度があった。故に修復に時間が掛かってた。それでもエクスカイザーは少しずつ、少しずつ街を復興させていくつもりだ。

エクスカイザー 「損害の規模は激しいものだ・・・だが、こうした少しずつの行動が確実な復興へと繋がる!!」

エクスカイザー以外にも周囲では至るところにシヨベルカーやブルドーザーの後任次世代機ともいえるロボット達が作業に当たっている。超AIは持つておらず、人による操作や、リモートコントロールによって行なわれている。

BLWの大災害以降、一部にしか出回っていなかったロボット重機が、関東エリアを中心に一気に普及し始めたのだ。

マニピュレーターアームを伸ばし、瓦礫を撤去していく。撤去された瓦礫は、廃棄物運搬車のバケットへと積み込まれる。

その中でエクスカイザーの行動は実に目立った。エクスカイザーを見ていた1人のボランティア作業員が撃ちだされる修復光線を不思議そうに見ていた。当然といえば当然だ。

作業員 「しっかし・・・なんなんだ??? という原理でのロボットはあんな光線撃てているんだ???」

たまたまエクスカイザーと目が合う。

エクスカイザー 「???何か・・・??」

作業員 「い、いや別に。ただスゲー光線だなつてな。」

エクスカイザー 「これは壊れたものを修復できる光線ですからね。こちらの方は私に任せてください。お互い頑張りましょう！」

作業員 「そ、そうだな！はははは・・・スゲーロボットだ・・・。」

別の場所では少しの修理で済んだレイバーズが、お得意の瓦礫撤去に貢献する。

ガンレイバー 「ああ・・・久しぶりだなー瓦礫撤去。ほい

ほいほいつと……。」

スムーズに廃棄物運搬車に瓦礫を入れていくガンレイバー。シヨットレイバーはヘルトルーパーの残骸を撤去している。パイロットの亡骸はない。恐らく脱出したのだろう。

シヨットレイバー 「しかし、ひどい有様だ。一晩でこれほどの状況になってしまおうとは。」

その場所は「デン」のすぐ近くだった。崩れ落ちた穴を見るシヨットレイバー。

シヨットレイバー 「ここで激戦が繰り広げられたんだな……。」

想いをその情景に馳せるシヨットレイバー。穴の内部では自衛隊の救援活動部隊が、BLWの残骸撤去にあたっている。

シヨットレイバーは桜高での事件の時もこうして瓦礫の撤去活動をしていた事を思い出した。

シヨットレイバー 「デストリアンの事件の時もこうして瓦礫の撤去に当たっていたな。あれから1年近くになるのか。早いものだな。」

デストリアンが多発するようになり始めて1年近くが経つ。新たにわかった事はなんだかの地球外知的生物が絡んでいる事が確定した事だった。

だが、今はデストリアンの前に復興作業が最優先事項となって

いた。ロボット達も含め……。

現在、急ピッチでジェイデッカーのカスタマイズ作業が藤堂技術顧問の指示の下、立川の整備工場で行なわれていた。

現場の見学に要と舞人が合同で視察に訪れていた。藤堂から進行状況の説明を受ける要。作業ドック内では、ジェイデッカーのボディーの上半身が大幅にオーバーホールされている。

藤堂 「現在、ジェイデッカーには新たなジェネレーターを取り付けのオーバーホール作業を行なっている。武装面も、新たなジェネレーターとリンクさせる為の調整している所だ。」

要 「完成にはどのくらいの時間が？」

藤堂 「そうだなあ……まだ目途は立っていないが、一ヶ月以上は見えておいてくれ。形が完成しても調整に時間が掛かる場合がある。」

要 「そうですね……。」

隣の整備ドックでは、マイトガンもオーバーホールを受けていた。だが、ジェイデッカーよりも遥かに深刻な損傷を負っていた為、ほとんどのパーツが解体されていた。

舞人は要同様、整備担当者より説明を受ける。

整備担当者 「現在、新たなフレームの取替え作業が終了した所です。グレートジェネレーターの完成にはまだ目途がついていません。マイトガインの構造を造り直すのは容易ではありませんが、必ず完成させますよ！」

舞人 「是非ともお願いします。今後の闘いにおいてこのグレート化計画は成功させたい!!!」

整備担当者 「尽力します!!!設計図もご覧になられますか？」

舞人 「もちろん!」

近くにあつたデータベースを操作する整備担当者。モニターにグレート化されたマイトガインの設計図が映し出される。

要 「これが、グレートマイトガイン……。」

整備担当者 「直接このデザインに設計してしまうか、合体方式を取り入れるか現在検討中です。あとマイトガインの超AIの方はKOTOBUKIの機密課に調整・管理をお願いします。」

舞人 「了解だ。そちらの方も見て行きたい!見学はできるのか?」

整備担当者 「もちろんです。ご案内致します。」

整備担当者に案内されながら、二人は歩を進める。そして要は歩きながら舞人にブレイヴ・フォースについて話し始めた。

要 「舞人。今、俺達の基地では今まで公開していなかった基

地施設を解禁した。そつちも見ていくか？」

舞人 「公開していなかった基地施設？」

要 「ああ。どうやら10年前から設置されていたらしい。当時はジェイデッカーの量産を検討していたそうだが、結局それはなかった為にずっと未使用のまま残っていたのさ。その施設に、冴島警視總監が目をつけてブレイヴフォースの結成に至ったんだ。さらに厳密に言つと、バラバラに行動しているロボットたちを一つのチームに出来ないのだからって議論したのがはじまりなんだがな。」

舞人 「冴島さん……。」

要 「俺も一昨日見させてもらったが、かなりいい施設だ。地下からのエレベーターゲート式のドックになっている。その他にも基地内の地面が射出式の滑走路になっていたりこれまで知らされていなかった施設を色々と見せてもらった。俺も正直……驚いた！」

舞人 「是非、見せてください！要さん！」

一方で、M・P・D・BRAVEの本部基地では、ブレイヴ・フォースの基地の拠点とする為、今まで解禁されていなかった基地施設の解禁準備が行なわれていた。

つい先ほど要が言っていたものだ。

解禁される基地の地下ドックは、ロボットやビーグルが10機

は納まるスペースが優にあった。その他、指令兼管理施設、カタパルト方式の滑走路、エレベーター方式の出撃用のレーン等がある。

冴島が改めて案内役として出向いていた。警察関係者や軍の関係者が視察に訪れている。

冴島 「みなさん、ここが結成されたブレイヴ・フォースの拠点となる基地です。まだ稼働はしていませんが、今後、警察、軍、エンジニア、はたまた科学者等色々な各分野からの人員を編成し組織として稼働させていく方針でいます。」

1人の軍関係者が質問する。

軍関係者A 「人員はいつ編成されるんですか？」

冴島 「人員に関しては近日中に編成して行こうと思っています。戦闘に関する要員は編成済みです。」

それに続いて警察関係者も質問する。

警察関係者A 「組織の管理は、警視庁で行なうんでしょうか？」

冴島 「司令官は警視総監の私が勤めることになっていますが、管理は国の管轄となります。」

軍関係者B 「目的は、特殊巨大生物災害への対策なんですよ？ 仮に異星人が侵略に来たとしてもそちらに対応しますか？」

冴島 「対応します。それらも対象となっています。」

警察関係者B 「ロボットによる凶悪犯罪については??」

「 冴島 「そちらはジエイデッカーのチームで基本的に対応します。」

警察関係者C 「旋風寺のロボットは民間で管理されていますが、そちらもここで管理されるんですか??」

冴島 「ええ。ですが、管理というよりは我々が責任持つて預かるカタチです。私は、市民を守るロボット達が一つの組織のチームとして稼働したほうがよいものと考えます。同じ志を持つもの同士なのですから。」

色々と来る質問に答えていく冴島。同時刻、上部では施設の機材等の搬入作業が行なわれていた。

作業員に混じって葉山と吉崎も作業に追われる。

葉山 「急がしいつたらありゃしない〜!!」

吉崎 「つべこべ言わずに作業する!!ほら!しっかり!!」

葉山 「うへ〜い!!」

だらけた返事の葉山に対して吉崎が叱咤する。

吉崎 「葉山!!なんだその返事は!!」

葉山 「ひいっ!!すいません!!」

激戦後、久々に夫婦漫才を見せる二人。無論そんな意識はしていないのだが。

その日の夜。一つの光りが、相模原市に落ちていく。だが、隕石ではない。オレンジ色に光る物体が、桜ヶ丘近辺の小さな山に墜ちて消える。

だが、轟音のような音は何一つしなかった。

この時、漣を送っていた勇士朗はデストリアンが飛来した時のような感覚を覚えた。だがその感覚は持続せずに消えた。

勇士朗 「……………?!なんだ??今の感覚??」

漣 「どうしたの?」

勇士朗 「ん?うん……………デストリアンが来たと思ったら、途中でその感覚が消えた……………そんな事今までなかったというのに……………」

漣 「……………で、でも今は何ともないんでしょ?」

勇士朗 「だといいんだけど……………」

漣 「そういえばさ、最近クラスのオカルト研究部のコが言っていたんだけど、ココの最近、街でUFO見るんだって。オレンジに光っててカーテンを閉めるように消えちゃったんだってさ。」

澗からその事を聞いて、ピンと来るものがあつた。勇が交戦した謎のUFOの事を思い出したのだ。

勇士朗 「UFO・・・そういえば、この前の時にエクスカイザーの勇さんが、UFOと戦闘していた・・・デストリアンと何かあるのかも!!」

澗 「いくら宇宙から来るっていつても、全部がソレだとは言えないんじゃない?」

勇士朗 「うーん・・・ひっかかるな・・・。」

その次の日の桜ヶ丘。桜工ではマラソン大会があり、野郎共がゾロゾロと道を走る。蓮がかつたるそうに走る中、勇士朗と光、俊はガチンコに燃え上がっていた。

蓮 「てきとーに走って済みますか。しかしアイツラ・・・何ガチンコになつてやがんだよ。」

勇士朗と光、俊は、持久走が得意であつた。更にいえばレース系のものが好きであり、苦では決してないのだ。

勇士朗 (っし・・・この区間はこのくらいのペースで・・・)

光 (おっしゃああ・・・勇士朗に食いついていけている!!
!プロテインと専用ソウルのおかげで例年よりいい順位にいけそう

エクスカイザー 「何?!」

光 「俺・・・思ったんだ。あんな状況に唯ちゃん達がさらされてるのに、俺は何も出来ないのかって!!!俺も戦う力つてのが欲しいっ!!!なあ!!!エクスカイザー!!!何か方法はないのか?!!あつたら教えてくれ!!!」

唯 「光君・・・。」

光のその言葉に俊や蓮も賛同した。

俊 「俺も密かにそう思っていた。俺も前に危険な目にさらされた。正直ふがいなかった。力があればあの時俺は・・・守りきれていた!!!」

それを聞いた梓は、以前BLWに襲われたときの事だとわかった。

梓 「あの時の事かな・・・?」

蓮 「俺もだ!!!正直、勇士郎が羨ましくも思う。俺も闘いてえ!!!律っちゃんをBLWから守るに、情けないくらい圧倒された事がある!!!」

律も聡が初めて戦ったあの日のことを思い出す。律をかばって死に物狂いだった時の事を。

勇士郎 「蓮・・・。」

律 「蓮……!!」

それにつられてあの頼りない涼までもが名乗り出た。

涼 「お、俺も……姫ちゃん守れるくらいの力が欲しい……!!蓮先輩達の言葉を聞いてて思ったよ!!」

姫子 「涼……。」

エクスカイザーを見つめる彼らの眼差しは真剣そのものだった。そしてエクスカイザーはしばらく思い止まった後に、あるモノを託す。

エクスカイザー 『……そうか。その眼差しからは確かな勇気が見て取れる。よし!!わかった!!その勇気と覚悟があるのならこれを託す!!!!』

エクスカイザーは、腕から4つの光りを彼らに放った。すると腕にはブレスレットが取り付けられていた。

光 「うお!!」

蓮 「こいつは?!」

エクスカイザー 『ダグテクター・ブレスレットだ。本来ならばブレイブ星人の戦闘員が装着するもののだが、それを装着する事で君たちにも「ダグオン」という闘う力を得る事ができる!!』

涼 「ダグオン……ふえ……まるで戦隊ヒーローのようになれるのかな???」

俊 「ダグテクターか……！！！」

エクスカイザー 『必要と思ったとき、「トライ・ダグオン」と叫べば、各々にふさわしい能力のダグテクターを装備できる。』

ダグオンと呼ばれる戦士の力を得た光、蓮、俊、涼。ここへ来て彼らもまた勇者となったのだ。

光 「ダグオンか……やってやるぜっ！！！」

桜工の野郎共が走っている頃、桜高の女子達もマラソン大会で走っていた。しかし、この時ちょっとしたトラブルが起こっていた。マラソンの最中、唯がコースを外れてしまい行方不明となっていたのだ。

澪達も必死で唯を探す。既に市内のちょっとした山の中にいた。

澪 「唯iiiiiiii！！！」

律 「唯、いるのかああああ？！」

紬 「唯ちゃああん！！マラソンが終わったからおしるごが待ってるわよ〜！」

それぞれが叫んで回る。だが、どこからも唯の声や気配が無い。一点に集合する3人。

律 「いたか?!」

澪 「だめだ!どこにもいない……。」

紬 「どこか別の所を探しましょう!」

ゴール地点の桜高運動場。和も梓達からこの事の報告を受けた。

和 「唯が途中で行方が分らなくなった??!」

梓 「はい……途中までは走っていたみたいなんですけど。」

純 「さつき、澪先輩達はその近くを探すって言って……今

探している最中だと……。」

憂 「お姉ちゃん……もしもの事あったらどうしよう……。」

不安がる憂。和はそんな憂を慰める。

和 「憂。唯の事だからきつとどこかでサボってると思うの。」

まあ、そうだったらそうだったで問題だけど……とにかく大丈夫だから心配しないで!」

憂 「うん……。」

だが、憂の心配事は的中していた。唯は謎の異星人に囚われていたのだ。奇しくも澪達が探していた山の中だった。

異星人の容姿は、目や口はなく、半漁人のような耳、黒褐色の関節、そして全身がクリアーレッドの鮮やかな色のものだった。気絶している唯を抱きかかえている。その奥の茂みの中にはUFOが潜む。

そのUFOのカタチは、エクスカイザーが交戦したものと非常に酷似していた。まさに昨夜落下したUFOだった。勇士郎の嫌な感覚は当たっていた。

じつと探し続ける漣達を監視する。更にその奥に10人の同種の異星人がいた。スツと低空を飛行しながら漣達に近づく。

異星人 「%#&*+* '@—¥\$・・・!!!」

彼らの言葉を口にしながら茂みからぬつと姿を現す異星人。

そのすぐ近くを走る勇士郎達。肩を並べて走ってきた勇士郎と光。すると勇士郎が突如としてスピードを緩めて止まった。悲鳴らしき声を聞いたのだ。

光 「勇士郎・・・聞こえたか?!今の悲鳴!!!」

勇士郎 「ああ・・・あっちの山の中だ!!!何か嫌な存在の予感がする!!!」

俊 「勝負は後だ!!!いこうぜ!!!」

後方で走っていた漣が、茂みの方へ行く勇士郎達を見る。

漣 「あれ・・・???何やってんだ??」

急いで駆けつける勇士朗と光、俊。そこには気絶した4人の軽音部メンバーを抱きかかえた謎の異星人の姿があった。怒りを露にする3人。

勇士朗 「漣ッ!!!」

光 「唯ちゃんツ……貴様らああッ!!!」

俊 「そのコ達から離れるおおお!!!」

異星人も数名でこちらに向かってくる。勇士朗は、光りを放出して低空を駆けながら突っ込む。

そして、光と俊は手の甲をかざして叫ぶ。発動するダグテクター・プレスレット。

光・俊 「トライ・ダグオンツッ!!!」

つづく

次回予告

光達は、ダグオンとなって闘う。その力は迫る異星人すら圧倒する。駆けつけた蓮もまたダグオンとなり、唯達を見事に異星人の手から離す。だが、異星人のUFOは突如として舞い上がり、かつて桜高を地獄に陥れたD 02を召喚する。再び生徒達に襲いかかるうとするD 02。その中で姫子が奇しくも餌食とされかけた時、

勇気を纏った涼が立つ。

次回、新生太陽の勇者 ファイバード・サーガ 第50話 「発
動する力」

4人の勇気が、かつての闇を砕く。

第49話 「与えられしダグテクター」（後書き）

・本文中にもあったグレートマイトガイん計画ですが、マイトガイんが予想以上にクシャボコになったために、「いくらなんでもパワーアップしなければいかん!」と思い、当初の予定を変更しました。更に付け加えれば「グレートダッシュ」をユーチューブで聞きまくっていたら熱くなってきてしまった・・・ということでもあります。

意見・感想お待ちしています。

第50話 「発動する力」

ダグテクターが発動し、光と俊はダグテクターを纏う。光には炎を、俊にはターボタイプのダグテクターが装備された。

ファイヤー・コウ 「ファイヤー・コウ!!!」

あたかもフェニックス、あるいは鳳凰を髣髴とさせる戦闘スーツだ。

ターボ・シユン 「ターボ・シユン!!!」

肩に装備された三連マフラーとブルームトリックのボディーカーが印象的なクルマを模した戦闘スーツである。

遂にダグオンという力を得た二人が、軽音部メンバーを助ける為に異星人へと向かっていく。

ダツシユで1体の異星人に迫っていくファイヤー・コウ。腕に炎が発生し始める。

ファイヤー・コウ 「だああああ!!! バアアニングウ・ナツクルツツ!!!」

ズドオドオゴオオツツ!!!

炎を纏った拳が2体の異星人を炎上させながら碎き飛ばす。タ

ーボ・シユンも攻撃に転じる。

ターボ・シユン 「ターボ・ラツシュ!!!!!!」

ドオドオドオドオドオドオガアアアツ!!!!!!

高速で打ち出された拳が3体の異星人の胸部を瞬く間に射抜く。

その後方から勇士郎が低空ダツシュで加速し、とび蹴りで一気に1体の異星人を蹴り飛ばす。

勇士郎 「でやああああああつっ!!!!!!」

ドオツガアアアアアツツ!!!!!!

体が蹴り碎かれた異星人は即死。軽音部メンバーを抱えた異星人だけとなる。じりじりと彼女達を抱えながらUFOの方へと後退していく。

ファイヤー・コウ 「唯ちゃん・・・ツツ!!!!!!」

飛び掛ろうとするファイヤー・コウを、ターボ・シユンが肩に手をかけて止めた。

ターボ・シユン 「待て!!!光!!!うかつに手は出せないぜ!!!!!!」

勇士郎も二人の前に立ち、異星人を睨みつけながらその言葉に賛同する。

勇士朗 「ああ。彼女達を抱えてる以上、迂闊に攻撃できない
！」

ファイヤー・コウ 「くっそ・・・！！！」

その時だった。勇士朗達の後方から、蓮の叫び声が聞こえた。

蓮 「うおおおお！！律っちゃんから離れるやあああああ！！！」

勇士朗 「蓮！！！」

ファイヤー・コウ 「あいつ、いつの間に?!!！」

ターボ・シユン 「バカ!!迂闊に出るな!!！」

彼らの言葉に耳を傾ける事無くダグテクターをかざす蓮。

蓮 「やってやらあ!!!!トライ・ダグオンツツ!!!!！」

蓮のダグテクター・ブレスレットが発動し、メタリックグリーン
のダグテクターに身を包む。射撃戦に特化したモノのようだ。

アーマー・レン 「アーマー・レンツ!!!!！」

アーマー・レンは、両腰に装備されたレールキャノンを前面に
出し、狙いを定める。この行為に更に待ったをかけるターボ・シユ
ン。

ターボ・シユン 「やめろ!!!!!!下手をすれば彼女達に・・・

「……！」

アーマー・レン 「00のロックオンじゃねーけど、狙い撃つ
！！！！レールシューター！！！！」

ディギン、ディギン、ディギン、ディギンツツ！！！！

ドオドオドオドオシュウウンツ！！！！

放った言葉通り、見事に異星人の頭部を狙い撃った。頭部を砕
かれ、斃れこむ異星人。

勇士朗達は、急いで落ちそうになる彼女達を抱きかかえて受け
止めた。

ターボ・シュン 「ふう〜・・・間一髪・・・蓮！！確信はあ
ったのか？！！下手すりゃこの子達に当たっていたかもしれないん
だぜ？！！」

アーマー・レンの迂闊極まりない行動を指摘するターボ・シュ
ン。アーマー・レンは余裕を見せながら答える。

アーマー・レン 「まあ、なきゃあやってないって！！確信は
あったぜ。」

勇士朗 「だけど、蓮が来てくれなければ、俺達は立ち往生の
状態だった。助かった！！」

アーマー・レン 「だろ？」

ターボ・シュン 「はあ〜やれやれ・・・。」

ファイヤー・コウが唯を抱えながらUFOを睨みつける。

ファイヤー・コウ 「あれが、あいつらのUFOかよ・・・
！！よくも唯ちゃん達に手をかけやがったな！！！！」

4人は揃いに揃ってUFOに向かって睨みをキカセた。すると、UFOは浮かび上がって上昇を始めた。

ファイヤー・コウ 「クソッ！！逃げる気か？！！」

アーマー・レン 「撃ち墜としてやるかあ？！！」

逃げ去ろうとするUFO。その時、UFOは真下に向かってリング状の光線を放った。

ピファイファイイイイ・・・

勇士朗 「！！！！この感覚・・・デストリアン？？！！」

勇士朗を突如と見舞うデストリアンの感覚。すると、光線が放たれた場所から去年、桜高を悲劇に陥れたタイプと同じC 02・・・いや、D 02が轟音を上げながら地下より姿を現した。だが、以前のものに比べて大きさは二周りほど小さかった。久々に奇怪な叫び声が響く。

ドオドオドオドオドオゴオオオオオオ！！！！

D 02アナザー 「ミシヤアアアアアアアアアアアッ！

「!!」

勇士朗 「あのデストリアンは・・・?!!!くそ!!!一旦非難だ!!!」

ターボ・シュン 「女の子達を安全な所へ連れて行く!!!いくぞ!!!」

やむを得ず、その場を避難する勇士朗達。桜ヶ丘に再びデストリアンが出現する。だが、今までにない出現パターンであった。同時に確信に迫った。

。。。。
デストリアンは、地球外知的生命体のモノであるということが。。。。

逃げる勇士朗達に容赦なく迫るD 02。あらゆるモノを破壊しながら突き進む。

ドオガガガズズズドオドオオオ。。。。!!!

D 02 「ギユギユウギョギョギョオオオオ!!!」

その最中、走っていた桜工、桜高の両生徒達もこの事態から悲鳴をあげて逃げ出す。

そちらの方を追いかけ始めるD 02。このタイミングを利用して、漣達を道路脇の落ち着ける場所へと下ろした。

勇士朗 「ふう。。。とりあえずココで寝てもらおう。仕方ないけど。。。」

ファイヤー・コウ 「この間にも俺達の高校や、桜高生のみんなが……!!!!」

悲劇は繰り返し返させない……今は力がある。皆、同じ気持ちでいた。

アーマー・レン 「もう、去年の二の舞はゴメンだぜ……!!!!」

ターボ・シユン 「ああ!! 勇士朗、あいつは俺達が食い止める!! その間は彼女達が眼を覚ますまで頼むぜ!!」

勇士朗 「おい!! いくらなんでも……!!!!」

ダグオンチームはその場から走り出す。一方で、桜高の生徒達に紛れて桜工の生徒もD 02に追いかけていた。悲鳴が連なる。

D 02は容赦なく捕食しようと襲い掛かる。その中で一人の女子生徒が転んでしまう。

あろう事が、その女子生徒は姫子だった。

姫子 「いったあい……うっう……」

怯える表情で振り返ると、そこには去年の悲劇の元凶がいた。彼女の中で去年の映像がフラッシュバックする。

姫子 「ああ……ああ……いや、いやあああああ!!」

！」

ばかあつ・・・っとイソギンチャク状の口を開けて迫る。その時だった。姫子の目の前に1人の少年が立つ。

姫子 「え?!?!」

姫子はその後姿からすぐに察した。彼氏の涼だと言うコトを。彼もまた桜工生なのだ。マラソン大会が重ならなければありえない奇跡だった。

涼 「姫ちゃんは、ボクが守るっつ!!!トライ・ダグオンツ!!!!」

ダグテクター・ブレスレット発動。鋭利なクリスタルアーマーを装備した、白き氷の戦士の力のダグテクターが涼を包んだ。

ウイング・リョウ 「ウイング・リョウ!!!!!!」

速攻で技を繰り出すウイング・リョウ。鋭利な無数の氷矢が撃ち放たれる。

ウイング・リョウ 「フリーズン・ブリザード!!!!!!」

フュギュゴオオオオオオオオ!!!!!!

ザガガガガガガアアアアアアア!!!!!!

D 02アナザー 「ギュシャシャシャシャアアアア!!!!!!」

!!!!!!」

無数の氷の矢が身体に突き刺さり、もがき苦しむD 02。す
ぐにウイング・リヨウは倒れている姫子を抱きかかえその場を飛び
立つ。

姫子 「涼・・・涼・・・!!!」

涼に抱きしめるようにしがみつくと姫子。震える声で泣いていた。
恐怖から逃れたことで一気に感情が表に出たのだろう。

ウイング・リヨウ 「姫ちゃん・・・今は安全な所へ行こう！
」

姫子 「うん・・・!!」

普段とは全く逆の構図となっていた。涼は今までとは正反対の
ようになっっていた。

勇士郎がデストリアンと闘うダグオンチームを見ていると気絶
していた澁達が目を覚ました。

澁 「ん・・・あ、あれ??私、今まで・・・あれ??」

目をこすりながら澁は勇士郎に顔を向けた。

勇士郎 「澁!よかった!!意識が戻った!!」

律 「んん・・・よく寝たな・・・ってなんでこんなと

「ここに?？」

唯 「ふあゝ……あれれれ?」

紬 「あれ??私のミルクティーがない……。」

まるで何事もなかったかのように起き上がる彼女達。むしろ寝入っていた感じた。というより意図的に気絶する経緯の記憶を消されているようにも見受けられた。

漣 「唯を探していた所まではわかるんだけど……。」

勇士朗 「悪い夢を見ていた……と言いたいところだけど、夢じゃない。異星人に連れ去られようとしていたんだ。そこを俊達がダグオンになって助けたんだ。」

律 「マジで!!?つてか異星人?!!!」

唯 「そういえば変な人に腕を掴まれたような、ないような……。」

勇士朗 「それに、奴らはアレを出現させた。」

暴れるD 02に首を向けた勇士朗。ダグオンチームが決死の攻撃にあたっている。漣達もつられて首を向けた。

漣 「え?」

律 「げげ!!またでやがったのか?!!!」

唯 「ふおおお!!あのときの怪物が暴れてるう!!!」

絀 「そんな・・・また・・・。」

漣達の瞳に映るD 02。その時、漣の心の奥にあつた忌まわしい記憶が甦つてしまふ。あの日の悲劇を・・・。

漣 「あ・・・ああ・・・いやあああああ!!!」

頭を抱えながら発狂する漣。彼女の悲鳴に勇士朗は一瞬気が動転する。

勇士朗 「漣?!」

律 「きつとあの時の事が甦ってしまったんだ!!アレが桜高を襲つた奴と同じ奴だから!!!」

勇士朗は漣の心の傷の事を思い起こさせられた。彼女はデスクリアンによつて精神的な深い傷を負つた。だが、今までの日々の中でそれは浄化されてきたと思つていた。

勇士朗 「そうか・・・視覚的刺激から消えかけていた心の傷が再び・・・漣・・・!!」

勇士朗は怯える漣をそつと抱き寄せる。漣は勇士朗にしがみつく。

律 「勇士朗、しばらく漣の傍にいてあげてくれ!彼氏のあんたといればきつと平常心に戻るはずだから!!!」

勇士朗 「もちろん、そのつもりだ!! 漣・・・大丈夫だ・・・大丈夫!!」

漣 「あう・・・うううう・・・。」

勇士朗に漣の震える体の感覚が伝わってくる。

その時・・・

シユタン!!

絀 「きゃ!!!?!」

律 「おわああ?!?! なんだああ?!?!」

唯 「今度は仮面の人がきたあ!!?! っていうか姫子ちゃん抱えてるよ、この人!!!?!」

ウイング・リヨウが姫子を抱えたまま勇士朗達のところへと着地したのだ。

勇士朗 「涼!!」

更にかん高いエキゾーストノートがこちらに迫ってくる。遠くからエクスGTが向かってくるのがわかった唯が声を上げる。ぶんぶんと手を振る。

唯 「ああ!! エクちゃんだ!! おーい、エクちゃああああああん!!! ここだよお〜!!」

桜高の運動場では、事態を知った教職員がざわめいていた。その中で何が起こったのか、さわ子に問い質す梓の姿があった。彼女はすでにゴールしていたのだ。

梓 「さわ子先生！！一体何があつたんですかあ？！」

さわ子 「また、例の怪物が出たのよ！！あろうことが私達のマラソンコースの近くでね！！マラソン大会は中止よ！！」

梓 「そんな・・・じゃあ・・・唯先輩達は・・・！！」

憂 「お姉ちゃんはまだ見つからないんですか？！お姉ちゃん
は一体・・・！！！！」

純 「濤先輩達も探しに行つたんですよね？！！」

さわ子に詰め寄る梓達。とにかく落ち着くようなだめる。

さわ子 「無理なのはわかるけど、とにかく落ち着いて！！先生もクルマで探しに行くから！！とにかくあなた達はここで待機して下さい！！」

さわ子は走り出し、他の教員と共に探しに出向く。

さわ子 （誠君・・・来れないのかな・・・無理よね・・・ジ
エイデッカーは修理中っていつていたから・・・じゃあ・・・あの
コがいてくれれば・・・！！！！）

勇士郎がいてくれればきつと大丈夫。勇士郎がファイバードになる所を初めて見たときの光景を思い浮かべながら、そうさわ子は信じた。和も同じような事を考えていた。

和（勇さん・・・あ、今仕事中止じゃ無理か・・・ならせめてエクスカイザーが来てくれれば。）

奇しくも勇士郎の許にエクスカイザーとウイング・リョウが合流する。

零達に乗せたエクスカイザーが学校に向けて発進しようとしていた。

エクスカイザー 『彼女達は私が学校へ送り届ける！！勇士郎達はデストリアンを！！』

勇士郎 「はい！！涼、いくぞ！！」

ウイング・リョウ 「はい！！先輩！！」

D 02と戦闘を繰り広げるダグオンチーム。D 02の複数の細い脚が伸びて、ダグオンチームに襲い掛かる。

フユヒユドオドオドオドオ！！！！

ダグオンチーム 「がああああ！！！！」

ドオガアア・・・ズザザザシャアアア・・・

D 02アナザー 「グギユギユウギユシヤアアア!!!」

そこへファイヤー・コウが止めの一撃を加えるために、必殺技を繰り出す。体が燃え上がりオレンジのオーラが立つ。

ファイヤー・コウ 「止めだ!!!いくぜ!!!ライトニング・フェニックス!!!」

文字通りフェニックスに変形し、炎を纏いながらウィング・リヨウが加えたダメーシポイント目掛け高速で突っ込む。

ギユゴオオオオオオ・・・ヴァゴオオオオオオオ・・・

!!!!

ファイヤー・コウ 「でやあああああああ!!!」

ズドオガゴヴァアアアアアアアアア・・・

炎の弾丸となったファイヤー・コウがD 02を突き抜ける。その部分から炎が噴出し、炎上爆発する。

ゴゴゴオオオオオオオオオオオ・・・ズヴァドオドオドオドオガアアアアアアア!!!

チームの許へ舞い降りるファイヤー・コウ。爆発するD 02を見続けるダグオンチーム。確かに勝利したのだ。忌まわしい存在に対して。

ウィング・リヨウ 「俺達、勝ったんですね!!!」

アーマー・レン 「ああ！！ついに俺達も勇士朗みたいになれたわけだ！！」

ファイヤー・コウ 「これで・・・唯ちゃんを守っていける！！」

勝利の余韻に浸る3人にターボ・シユンが忠告を促す。

ターボ・シユン 「だが、俺達のチームワークがあつてこそその勝利だ。異星人ならともかく、デストリアンに対してはまず勝つことが困難な相手だ。俺達は4人で一つの勇者だ。それを忘れんなよな。」

ファイヤー・コウ 「ああ・・・っていうか、なんで俺がターボじゃねーんだ？クルマ好きなのにさー！！」

アーマー・レン 「多分、交換しても無理そうなカンジするぜ。俺だって、ファイバードチックなお前が羨ましいぜ！！文句言つてんなー！！」

ファイヤー・コウ 「なにい！！意地でもクルマダア！！」

ターボ・シユン 「だああああ！！言ってる傍からチーム乱してんじゃねー！！」

たちまちぎゃーぎゃー騒ぎ出す3人。ウイング・リョウが止めに入るも空しく終わる。

ウイング・リョウ 「あ、まずはおちつきましょー・・・。」

アーマー・レン 「うっさい!!引っ込め!!」

ウィング・リョウ 「あああ〜チームがああ〜・・・姫ちゃん助けて〜。」

先ほどの戦闘が嘘のようにいつものメンバーに戻る。この光景を勇士朗は微笑ましく見ていた。

勇士朗 「俺が出るまでもなかったか・・・ダグオンか・・・あいつらも遂に勇者になったんだなあ・・・あ!!!」

勇士朗はマラソン大会の途中だった事を思い出す。即行でダグオンチームに呼びかけた。魔王・山田にサボりと認識されたら殺されるからだ。

勇士朗 「おい!!俺達まだマラソン大会途中だぞ!!早く戻らねーと魔王にぶち殺される!!」

ダグオンチーム 「・・・ヤベーじゃん・・・ぎゃああああああ!!!」

山田が校庭でオーラを放っていた。

山田 「なにがあるーとうちの学校のマラソン大会は中止にならない・・・あいつらサボりやがったなあ・・・。」

つづく

次回予告

ダグオンとなった光達は、初陣の末勝利する。その戦闘の事後処理に同行した舞人は、要から勇士朗の通う学校が近くだと聞き、学校に訪問する。勇士朗達はここへ来てようやく舞人と初対面を果たした。

別の日の放課後、澪とデートに赴く中、勇士朗の前に再びあのUFOが現れる。別行動をとっていた光達の前にもUFOが出現し、デストリアンを投下したのだった。

次回、新生太陽の勇者 ファイバード・サーガ 第51話 「異星人再来」

異星よりの悪意が再び・・・

第51話 「異星人再来」 (前書き)

再び、親サイト様から忠告を受ける発言を感想返信の際にしてしまいました。この場を借りてお詫び申し上げます。

それでは改めて本編をどうぞ。

第51話 「異星人再来」

ダグオンチームは見事なチームワークでデストリアン1対を駆逐する事に成功した。

デストリアンの出現の報告を受け、要達と舞人、相模原警察署の警官たちが事後処理に赴く。

周囲には関係者以外立ち入り禁止を設けて作業が進められる。

要 「悪いな、舞人。施設の見学が中止になってしまった。」

舞人 「いいんですよ、要さん。それよりも今回から自衛隊が参加し始めたんですね？」

周囲を見回した舞人。今回より、自衛隊の部隊も事後処理任務に参加し始めていた。BLW最終決戦での行動が評価され、散っていた高島の思惑通りに、かつての汚名を返上したのだ。

要 「ああ、今回から自衛隊が参加してくれる事となった。というよりソレが本来のカタチなんだがな。」

舞人 「かつて現れた最初のデストリアンの駆逐の為に多数の市民を犠牲にさせた・・・そのことがあって以降、かつてない非難をあびた自衛隊は、対策権を警視庁をはじめ各警察組織に譲渡した・

「……ですよね？」

要 「ああ。極めて異例といわれた事態だった。だが、今回はまた別の意味で異例の事態が起こったんだ。」

舞人 「どういうことですか？」

要 「目撃者によれば、デストリアンは隕石ではなく、UFOの光線から現れたそうだ。」

異例の出現パターン。同時にデストリアンの謎の一角が見え始めていたことを物語る。

舞人 「UFOが??!ということは一連のデストリアンばかり……。」

要 「ソレを聞いて俺は以前、科警研でもらったコメントを思い出した。デストリアンの体が、地球外の細胞組織によって成り立っているって事をな。」

舞人 「悪の異星人によるもの……!!!!ならば尚更、奴らを断じて許せない!!!」

要 「それと、今回デストリアンを撃破したのは、ファイバードでもエクスカイザーでもない、4人のヒーローだったそうだ。」

舞人 「ヒーロー……それはそれで興味があるな。」

要はこの時、近隣に勇士朗の通う桜ヶ丘工業高校があることを思い出した。

要 「そうだ！ここだけの話だが、この近くにある桜ヶ丘工業高校には、ファイバードの勇士朗という少年が通っている。よかつたら会って来たらどうだ？彼もまたブレイヴ・フォースの一員として来年度から正式に隊員になる予定だ。」

舞人 「そうなんですか？！それは是非とも会ってみたい！！前は面識なく、そのまま病院へ行ってしまったからね。午後の予定は変更させてもらおうかな！！」

その日の昼、舞人は、桜ヶ丘工業高校を訪れた。校内放送で勇士朗の名が呼び出された。

校内放送 「火鳥勇士朗君、火鳥勇士朗君、至急校長室まで来てください。火鳥……。」

教室内でたむろっていた蓮が美味い棒をかじりながら勇士朗に突っ込む。

蓮 「お前なんかやったのか??」

勇士朗 「何もやってねーよ！！いったいなんだあ??」

俊 「ひょっとしたらトンでもない呼び出しかもな!」

この時点で俊の読みはほぼ当たっていた。だが旋風寺舞人の呼び出しというのは知るよしもない。

光 「でも、今回確かに何もやってないよな。俺達美味しいトコ持ってたし!!」

光に痛いトコを突かれる勇士朗。内心「う……」「という気分になった。

勇士朗 「……………別に手柄の為に闘ってるわけじゃねーし……………!!」

俊 「なんだ？その間は？」

勇士朗 「とにかくいつてくらあ……………」

疑問符を抱えながら校長室に入る勇士朗。

勇士朗 「失礼します！」

校長室に入ると校長と舞人が面談していた。

校長 「……………そうですね、しかしすごいですね……………まだ17でしょちよ……………あ！来ましたよ、彼が火鳥君です！」

勇士朗 「え……………??」

勇士朗が視線をずらすと、そこには舞人の姿があった。テレビや雑誌で見る舞人そのものだった。

勇士朗 「マイトガインの、旋風寺舞人……………!!!」

舞人 「初めまして！旋風寺舞人です!!」

勇士朗 「こつちこそ初めまして、火鳥勇士朗だ。」

二人が自己紹介しあうと、校長は席を外した。二人は向かい合
い、改めて談話を始める。

舞人 「警視庁の要さんから、君がファイバードだと窺ったも
のだからこちらへ出向いたんだ。」

勇士朗 「要さんが？」

舞人 「ああ。今、要さんは先程のデストリアン事件の事後処
理に赴いていてね。その現場に同伴させてもらっていた時に聞かさ
れたんだ。戦場では何度が共闘した事はあるけど、実際に会ったこ
とがなかったからね。お互いの環境が違うという事もあるんだろう
ケド……。」

出されていたお茶をすすると、舞人は改めてこの前のBLW最
終決戦の勝利を称える。

舞人 「この前のBLWとの決戦の時は本当に助かった。今改
めて礼を言うと共に、勝利を称え合いたい。いままでの戦闘貢献に
感謝したい！」

勇士朗 「そんな……俺は、自分のすべき使命だと思って、
守りたい人を守りたい為に闘ったに過ぎない。自分でもあそこまで
闘う事になるとは初めから思っていなかったから……。」

舞人 「謙遜しなくても……俺は正直スゴイと思っている。
もし、君たちがいなければBLWに敗北していたかもしれない……」

ところで、今回のデストリアンの件はどうみる？」

勇士朗 「異星人によるなんだかの偵察だと思う。実際に俺達はそれらしき異星人と戦った。今日の午前中に。」

舞人 「なんだって?! 実際に戦ったというのか?!」

勇士朗は先ほどの戦闘の一部始終を舞人に話した。驚愕の事態が起こりつつあると言つコト悟る。

勇士朗 「ああ・・・デストリアンが異星人の手先、いや、もしかしたら異星版のBLWなのは間違いなさそうだ。」

舞人 「思った以上に深刻なようだな・・・できれば、そのダグオンチームの人たちにも会ってみたい。いいかな？」

勇士朗 「ああ、その方がいいと思う。」

改めて、光達4人が呼び出された。お互いに握手しあつ。

光 「まさか、旋風寺コンツェルンの旋風寺舞人が直々に来るなんてなあ! 俺、早瀬光!」

蓮 「俺は伊橋蓮!! よろしくな!!」

俊 「俺は三島俊。」

涼 「川田涼・・・君とタメだよ。よろしく!」

舞人 「改めて、旋風寺舞人だ。勇士朗君から聞かせてもらっ

たよ。正義の貢献、ありがとう!!」

光 「いやあくそれほどでも……。」

俊 「調子にノンな!!」

蓮 「でも、ここが男女共学じゃなくてよかったな。」

舞人 「え？それは何故？」

俊 「野郎学校だからさ、誰も舞人に興味ねーんだ。逆に女子高だったら女子がきゃーきゃー言って駆け寄ってくるぜ……ま、そっちの方がサイコーか……。」

舞人 「女子高!？」

蓮 「お？女子高に反応した!!!!」

光 「今からでもいつてみたらどう？きゃーきゃー言われるよ。」

顔色が変わる舞人。光達は、男子特有の反応かと思った。だが、違っていた。

舞人 「いや、そうじゃない。さっき勇士朗君から聞かされたが、桜高の軽音部のコ達を君達が助けたんだよね？」

俊 「ああ、軽音部の女子達とは友達だしな。もっとも兼彼氏もいるが……。」

舞人 「そうか・・・助けてくれてありがとう！！実は、その軽音部の1人、琴吹紬さんとは幼なじみで、彼女でもあるんだ！」

光 「なにいいいい??!!」

蓮 「ムギちゃんど?!!!」

俊 「社長令嬢とは聞いたことがあるが、まさか旋風寺と繋がっていたとは・・・!!!!」

別の日。勇士朗はいつものように桜高の校門近くで漚と待ち合わせて帰りを待っていた。その間に光と俊とで今回の一件について語る。

勇士朗 「結局あの後、UFOは何処かへ消えちまっていたな。偵察に来ていたとしか俺は思えないな・・・。」

俊 「今回ばかりは隕石じゃなく直に地下から現れた。それもUFOからの光線によってだ。あらかじめそこの一箇所に放ってあったかのように・・・。」

勇士朗 「いずれにしろ、異星人の暗躍が裏にあったことだけは事実だ。デストリアンとの闘いが新たな展開を見せてきているのかもな・・・。」

光 「新たな展開か・・・俺達も俺達で、闘う力が手に入ったしな!!まだぶっちゃけ実感湧かないけどな・・・勇士朗はどん

な覚悟でファイバードと融合したんだ？今更だけど。」

勇士朗 「ん？そうだな・・・やっぱりデストリアンが許せなかった気持ちがダントツだった。とにかくブチのめしたい一心だった。覚悟とかはその後についてきたな・・・みんなを守るってな。」

光 「俺達も同じ気持ちだ。やっぱり好きな人が出来ると人生観変わるな。」

俊 「いや、変わりすぎだろっ、俺達っ。」

そうこうしている内に漣が校門か出てきた。律、唯、紬、梓も一緒に出てきた。

漣 「あ！勇士朗！待ったあ？」

手を振りながら勇士朗に呼びかける漣。

勇士朗 「ああ、大丈夫！勇者について語っていたところだったから！」

漣 「ぶっ・・・何それ？？それよりもどこいこう？」

その時、ときめいた口調で紬が言い放つ。デジカメを手に・・・。

紬 「これから新鮮なお二人のデートが見られるのね？」

漣 「ムギ・・・それでその手に持ったデジカメは何??？」

紬 「秘密です！うふふふ。」

律 「ムギ・・・ほどほどにしとけよ。そんじゃあ、お二人の邪魔しちやいけないから私らは別行動だ！！」

紬 「ええ、二人のデート見たかったのに。」

律 「だから見てどうするとうんだ??お前は??」

梓 「ムギ先輩・・・。」

そのときの、ムギの携帯が鳴り響く。舞人からの呼び出しだった。

紬 「もしもし・・・うん・・・うんうん・・・じゃあ今からいくわ。まってて!!」

ピツとケータイをしまつと、紬は申し訳なさそうにメンバーから外れる。

紬 「ごめんなさい、急に予定入ってしまったって行けなくなつたわ。皆さんで楽しんできて!!」

律 「そつか・・・ムギもホント忙しいなー・・・わかった、じゃまた明日な!!」

紬 「はい！ではみなさん、今日はこの辺で!!」

紬が、メンバーから外れた後、律の提案によってそのまま別行動することとなった。勇士朗は漣、光と俊は律たちと行動する。勇

士朗と漣は街へ向かって歩く。

勇士朗 「劇の練習の方は上手くいつてる？」

漣 「台詞覚えるのが大変かなあ・・・今日も律と練習してきたけど、まだきこちなさが出ちゃうんだあ・・・。」

勇士朗 「ん・・・?!そうになると軽音部の練習はどうしてるの？両立??？」

漣 「そうなの。その両立がちょっと大変かな。どっちも今年で最後だから・・・。」

勇士朗 「そつか・・・今日はお疲れ様、漣！」

漣 「ありがとう。それで最初の話に戻るけど、今日は何処行くっ?？」

勇士朗 「近場で済まそつか。漣も疲れているし。」

漣 「そんな気を使ってくれなくてもいいよ!あとさ・・・。」

勇士朗 「ん?？」

漣 「手・・・繋ぐ?？」

勇士朗は恥ずかしがりつつも積極的な漣に内心驚く。もちろん勇士朗はOKする。

勇士朗 「うん・・・。」

手を繋ぐ二人。二人の指先同士が重なり合う。伝わる体温にお互いドキドキしている。

漣 「私、商店街に行きたいかも。」

勇士朗 「え？ちょっと歩くけどいいの？」

漣 「うん。」

漣はあえて長い距離のデートコースを選んだ。少しでも長く勇士朗といたい為だ。

勇士朗 「あつたかいね・・・漣の手。」

漣 「そつ、そう？前、唯にね、手のあつたかい人は心が冷たいつて言われたことあるんだけど勇士朗はどう思う？」

勇士朗 「全然そんなの勘ヶーないと思うよ。俺は漣が冷たいコだなんて思ったことないし。」

漣 「ありがとう。ちょっとホツとした。ずっと気なっちゃっていたから。」

勇士朗 （この温もり・・・失いたくはない・・・でも、来年からは離れ離れになる。もしもの事があつた時、守りきれるんだろうか？）

勇士朗は来年から離れ離れになることに憂いを感じていた。その時だった。漣が空のほうに指を差した。

漣 「ねえ・・・あれ、UFOじゃない?？」

勇士朗 「UFO?!?!」

光り輝く2機のUFO。勇士朗は何か嫌な予感を覚えていた。次の瞬間、ほんの一瞬ほどマイナスエネルギーを感じ取った。

その方向へと振り向く勇士朗。すると更にもう1機が勇士朗の斜め背後に現れていた。

着陸するUFO。両方角に何度も首を向ける勇士朗。

漣 「うそ・・・!!もしかして、アレが・・・!!!!」

勇士朗 「漣達を拉致しようとした異星人のUFOだ!!くっ・
一度に3機・・・!!!!」

どう行動するのかわからないUFO。その時、例の異星人が低空を浮遊しながら現れた。異星人の数は6体。その後方には未知なるUFOが待機する。

すぐに勇士朗の背中に隠れる漣。繋いでいた手は勇士朗のブレザーを握り締めている。こままでは守るうにも戦えない。勇士朗は漣を下がらせる。

勇士朗 「下がってて・・・すぐにケリをつける!!」

漣 「わかった・・・。」

ぐつと拳を構える勇士朗。エネルギーを放出し、周囲の空気が
ブワツとなる。

ギュゴアアツ・・・！！！！

漣 「きゃっ！！」

なびくスカートを抑える漣。異星人は勇士郎めがけ迫った。

ゴツ・・・！！！！

その頃、光や俊達は蓮や涼がバイトしているコンビニに立ち寄
っていた。今日は姫子もいて三人が揃っていた。涼は品物を整理し
ている。

蓮 「・・・じゃあ、今頃二人でラブラブしてるってか！」

律 「そ！漣にとって初彼だしなあ！私はあえて二人つきりに
した方がいいと思っただのさー。」

姫子 「上手くいくといいよね。あの二人。」

ほほを人差し指でかきながら、律が恥ずかしそうに言う。

律 「あのさ、蓮。バイト終わった後暇か？」

蓮 「え？おお・・・あ！ハンバーグってか！！」

律 「な、なんでわかるんだよ!!」

その会話を聞いて姫子が興味津々に突っ込む。

姫子 「ハンバーグ・・・って何？律、ひよっとして蓮君に作ってあげてるの?！」

律 「えあ・・・まあ、この前助けてくれた礼にだあ・・・。」

あさつての方向を向きながら照れ隠しする律。姫子は更に突っ込む。

姫子 「がんば！律!!」

律 「勘違いすんな!!カチューシャ同盟だい!!」

蓮 「そそそそそ!!どどめい、ど同盟!!」

顔を赤くして否定する二人。蓮は動揺しまくって激しくどもっている。

姫子 「蓮君、超動揺してるじゃない・・・友達以上恋人未満・・・ってやつ?」

蓮 「あああもっつ・・・あ!お客さん待たせてる!!」

律 「邪魔したな!また後でな!!」

蓮 「おう・・・お待たせしましたあ!次の方どうぞ!!」

コンビニの外ではそれぞれが買ったものを食べながら光、唯、梓、俊で座っていた。唯は例によってデザートを食べまくっている。

唯 「おいしーねー、光君、あずにゃん！」

光 「そうだねー。唯ちゃんと食べてると尚おいしー！」

唯 「もう！光君たらー！！！」

いつものようにいちやつき出す二人。梓が後輩ながら注意を促す。俊も梓と同意見を出す。

梓 「べたべたしすぎです。少しは、わきまえてくださいよ。

コンビニの目の前なんですから。」

俊 「そうだけ。もうちょっと空気を読んでだなー…………。」

ドオガアアアアアアアン！！！！

突如と響く轟音。道路の向こうの方だ。その上空にはUFOが飛んでいた。

梓 「一体なんですか?!あのUFO!!！」

俊 「唯ちゃん達をさらった奴だ…………にしても轟音の主はどこだ!?!?」

光 「あれだ!!！」

紅の指差す方向には気色の悪いアリのようなD 05がいた。以前服数体で現れたタイプのものだ。

D 05 「ギギギギギ!!!」

計4体のD 05が道路を跋扈し、行き来るクルマを破壊。液体を飛ばしながら動き回る。

液体がかかった市民は次々にぶくぶく膨らんで破裂する。

ボバアアン!!!

梓 「いやああ!!!」

唯 「.....」

目を覆う梓。ボー然としてしまう唯。律もこの光景を見てしま
う。

律 「またかよ.....いい加減にしるよな!!!」

律の中で恐怖よりも怒りの感情の方が高ぶる。もうたくさんだと言わんばかりだ。ぐっと歯軋りする律。

店内の蓮と涼も姫子に後を任せて飛び出す。

蓮 「いくぜ!!!涼!!!姫ちゃん!!!後は頼む!!!」

涼 「ういっす!!!」

姫子 「あ、ちよつと!」

ドアの前にいた律の前に飛び出る。

蓮 「律っちゃん!!下がってる!!俺達が戦う!!」

律 「蓮!!」

思わず勢いで梓を抱き寄せる俊。光も唯をかばうように前にズイと出る。唯が光にしがみつく。

俊 「梓、大丈夫か?!立てるか?!」

梓 「は、はい・・・なんとか・・・。」

光 「唯ちゃん!!下がって・・・って、唯ちゃん・・・。」

唯 「光君・・・怖いよ・・・。」

光 「大丈夫。俺が守る!!見てくれ!!」

光は、うなずきながら唯をそっと下がらせる。唯もうなずいて下がる。

俊 「梓、とにかく三人で下がれ!!俺達がなんとかする!!」

梓 「え・・・??」

涙をつるわせる梓の瞳に立ち上がった俊の背中が映る。4人が

一斉に並び、手の甲をかざす。

俊 「いくぜっつっ!! 準備はいいか?!?!」

蓮 「おうよ!?!?!」

涼 「はいっす!?!?!」

光 「唯ちゃんはあ……絶対に守るっつ!?!?!」

4人 「トライツ……ダグオンツツ!?!?!」

ダグテクター・ブレスレットが一斉に輝き出し、ダグテクターが発動する。

守るべきものを守る為に、斃すべきものを斃す為に……。

つづく

次回予告

漣を守る為に異星人と交戦する勇士朗。怒りに満ちた勇士朗は瞬く間に異星人を蹴散らす。だが、UFOは更に従来のデストリアンを投下する。一方でダグオンチームも唯達や市民の為に戦う。ダグオンチームにエールを送る唯達。エールが高校生勇者達を奮い立たせる。

投下された4体のデストリアンに対し、勇士朗はファイバードに成るべく、戦闘に向かおうとする。そんな勇士朗を漣は、素

の口調で送り出す。勇士朗はそれにグッドサインで答え、ファイアー
ジェットを召喚するのだった。

次回、新生太陽の勇者 ファイバード・サーガ 第51話 「三
連撃の炎」

再びフレイムソードが唸りを上げる。

第51話 「異星人再来」(後書き)

・感想・意見、お待ちしております。

第52話 「三連撃の炎」

迫る異星人。瞬時に勇士朗は漣に迫る異星人に拳を叩き込む。

勇士朗 「おおおお！！！」

ズドオオオオッ！！！！ バツキャラガアアアン！！！！

吹っ飛ばされた異星人が回転しながら近隣の家の塀を砕きながらぶち当たって即死する。

2体が勇士朗の間を捕る。両サイドから拳が打ち込まれる。

ドオドオガアア！！

勇士朗 「くっ……！！！！！」

思ったよりも重いパンチ。これを両腕で受け止める。そしてこれを弾き返して拳を素早く2体に打ち込んだ。

勇士朗 「はああああッッ！！！！しゃっ……！！！！！」

ドオドオンッ！！！！

胸部が陥没された状態で吹っ飛ぶ異星人。次の迫る異星人には
回し蹴りで対向する。

勇士朗 「せやああああ!!」

ズドオガアアア!!

異星人の頭が、ありえない方向にひん曲がって吹っ飛ぶ。

残り2体が急接近する。勇士朗は自ら飛び掛かる。

そしてアッパーを食らわし、6体目の頭を鷲掴みにして、地面
にたたきつけた。

ドオガアアツ!!!

勇士朗 「こんのお、クソヤローツ!!!」

ガツ・・・ズガギヤアアアアンツツ!!!

体をピクつかせた後に息絶えた。異星人達が全滅すると、UF
Oが浮上し始める。

漣 「UFOがつ・・・!!」

勇士朗 「また逃げる気か・・・!!」

勇士郎がそう思った矢先、UFOから「何か」が数個放たれた。
地上に落下した後に、その方向へと向かってあの時放った光線を放
つ。

すると、その場所からD 02が2体とD 03が2体出現した。

D 02 「ミシヤアアアア!!!」

D 03 「ボオオオオオ!!!」

漣 「また・・・こんなことが・・・どうして?!」

容赦なく二人のデートのひと時が、街がハカイされる。勇士朗の怒りはレッドゾーンへと突入する。

勇士朗 「デストリアン・・・!!?!?しかも以前現れたタイプがまた?!?!いい加減にしゃがれってんだっつ!!!」

漣 「勇士朗・・・もういやだよこんなの・・・。」

勇士朗 「漣、一旦離れるぞ。このままじゃ確実に巻き込んでしまう・・・!!」

漣 「うん・・・。」

一方、ダグオンチームも戦闘に入る。一斉に発動させたダグテクターで一斉に変身する4人。

ファイヤー・コウ 「ファイヤー・コウ!!!」

ターボ・シユン 「ターボ・シユン!!」

アーマー・レン 「アーマー・レン!!」

ウイング・リョウ 「ウイング・リョウ!!」

全員の変身が完了する。後ろで唯達が驚きを隠せずにいた。

律 「うおおお・・・マジで変身しちゃったよ・・・。」

唯 「わお!!光君かっこいい!!」

梓 「すごい!!」

それぞれが守るべきものの為に戦いに行く。当然、唯達以外の市民の為に。

ターボ・シユンがダツシユしながら1体のD 05に突っ込んでいく。撃ち出される破砕液をかわしながら一瞬で懐に入り込み、ターボ・ラツシユを打ちかます。

ビュビュドオツ!! ビュビュビュビュドオオツ!!

ターボ・シユン 「あた中らねえよっ・・・ターボ・ラツシユッ!!」

ドオドオドオドオドオガアアアア!!

D 05A 「ギギギ!!」

凄まじく俊敏なパンチがD 05を吹っ飛ばす。

アーマー・レン 「レール・シューターッ！！！」

デイギン、デイギン、デイギン、デイギン！！！！

ドオドオドオドオギャガアアアアッッ！！！！

D 05B 「ギギャッ！！！」

高速で撃ち出されたレールガンが直撃。爆炎が直弾部に起こる。

ウイング・リョウ 「フリーズン・サーベル！！！」

ウイング・リョウの手首からクリスタルのサーベルが形成され

る。D 05に飛び掛っていくウイング・リョウ。

ウイング・リョウ 「せやああああ！！！！」

ザギャガンッッ！！！！

D 05C 「ギャギャギイ！！！」

鋭利なフリーズン・サーベルがD 05の身体を斬り裂く。

ファイヤー・コウ 「ファイヤー・マグナムッ！！！！」

ギユドオオオオオオッッ！！！！

前に打ち出した拳から、炎の弾丸が撃ち出される。

ドオギャゴオオオオオオオ！！！！

D 05D 「ギギギギギョ！！！！」

直弾した部分が激しく炎上する。それぞれの能力で果敢に立ち向かう高校生勇者達。唯達もエールを送る。

唯 「うおおおお！！光君、もつとやっちやえー！！そこだあ
ああ！！ほら、あずにゃんもエール送ってあげなきゃ！！溇ちゃん
言ってたよ、私達のエールが力になるんだって！！！！」

梓 「え、あ……しゅ、俊さん、がんばってくださいあああ
い！！！！」

律 「蓮！！いいぞ、ぶっ放せええ！！！！」

梓は、恥ずかしそうに、律は気合十分でエールを送る。すると
コンビニから姫子も出てきてエールを送り始めた。

姫子 「涼君、ガンバアアアア！！！！」

律 「お！！姫子もエールに参戦かあ？！！」

姫子 「ふふ せっかく戦ってくれてるんだからね、涼が……
涼、ファイトオオオオ！！！！」

律 「へへへ……よっし！！蓮！！！！もつとやっちまいな
ああああ！！！！！！」

戦闘を繰り広げながら、エールに気づくダグオンチーム。

アーマー・レン 「へへへ!!!応援してくれてらあ!!!」

デイガン、デイガン、デイガン、デイガン、デイガンッ

!!!!

ウイング・リョウ 「姫ちゃん……うおおお!!!」

ザグシュウウンッ!!!

ターボ・シュン 「梓……!!!はあああ!!!」

ドオドオドオドオドオズドオガアアアアン!!!

ファイヤー・コウ 「唯ちゃんトランザムッ、起動!!!シ

ユートオオオオ!!!」

ドオガゴオオオオオオンッ!!!

ターボ・シュン 「なに言っただ!!!?バカか!!!恥ずかしいわ!!!!」

エールを送られ昂ぶるダグオンチームの闘志。漣の唄のみならず、直接送るエールにもプラスエネルギーの効果があるかのようだった。

ダグオンの力は予想以上の効果を発揮していた。タイミングを見計らって、4人は一斉に必殺技を繰り出す。

ターボ・シユン 「・・・たたく光のやつは・・・さあ、いくぜ
！！ターボ・ブレイカーッ！！！！」

ジジッジジッジジイイッ！！ ギュルルガッヴオヴ
オヴオヴオゴオオオオオ！！！！

スパークするエネルギーを発生させながら、足のホイールをハ
ーフスピンさせながら体ごと全開で突っ込んでいく。まるで全速力
のレーシングカーが激突するかのようについにD 05を砕き散らせた。

ドズガドオドオオオオオオオオオ！！！！

アーマー・レン 「アームズ・ブラストッ！！！！」

ディギギギギギギギギギ、ドオドオドオドオドオドオドオ
シュウウウウッ！！！！

レールシューターが連射され、ショルダーハッチからミサイル
が一斉発射される。木端微塵になるD 05。

ズディガガガドオドオドオドオゴオオオオオッ！！！！

ウイング・リヨウ 「フリーズン・ブリザードッ！！！！」

無数の氷の矢が撃ちだされ、一斉にD 05の体を射抜く。直
撃を食らい続けたD 05は、全身がズタボロになり絶命する。

ヒュゴオオオオオオオオ・・・ズガガガガガガガギヤ
ガガアアアアアッ！！！！

ターボ・シユンが指差す方向には、UFOが監視するかのよう
に浮遊していた。

アーマー・レン 「撃ち墜とすか?!?!」

その時だった。新たにUFOから肉の塊らしきものがポトポト
と投下された。

それは、道路に落下。脳みそや心臓、イボ、腸等がぐちゃぐち
やになって一つに固まったようなものだった。UFOは移動しながら
それらを投下していく。

ファイヤー・コウ 「なんだありやあ?!?!気色悪いな!!!!」

ターボ・シユン 「油断するなよ・・・どう動くか判らない!
!みんな、構えろ!!!!!!」

ターボ・シユンの指示で皆が次なる戦闘に備える。

唯 「うつつ。今落ちたの、なんなの・・・??気持ち悪いよ
」。

梓 「ホントです。君が悪いですね・・・うつつ見てるだけで
吐き気が・・・。」

律 「うひゃ・・・嫌な予感がするぜ。」

姫子 「本気で気色悪いっ・・・・・・・・!!!!!!」

余りにもものグロテスクな塊に怖気を覚える女子達。その時、塊

から昆虫の脚のようなものが生え始めて、次々と立ち上がる。そして、縦に楕円形の形をした口が開き、気味悪い声を上げ出す。

D 25群 「ギユギユギユウウウ!!!」

一方で、安全な場所と思われる場所に漣を避難させると、勇士朗は遠方で暴れているデストリアンを睨み返す。怒りの眼光が4体のデストリアンに向けられた。

勇士朗 「デストリアン……!!!」

漣 (さあ、エリザベス……出番だよ!!)

漣はエリザベスを取り出して、肩にかけた。エリザベスを撫でると、勇士朗を送り出す。

漣 「勇士朗、行って来い！」

ここへ来て勇士朗に対して初めて普段の口調が出た。心の中で「あ……」と思ってしまう。気合余って素の部分が出てしまったのだろう。

だが、勇士朗は気にはせずに、笑みでグッドサインを出す。そして軽くジャンプして、低空を駆け出した。

ギユアツ……シユゴオオオオオオオオオ……

低空を駆けながら、勇士朗はファイアージェットを召喚する。

勇士朗 「ファイアアアアアア・ジエエエエエエエエエエ
ツツ！！！」

光りが放たれ、上空からファイアージェットが舞い降りる。各部分が変形して行き、ファイバードの姿となつて、着地する。フェニックスのオーラを纏いながらそのまま加速していく勇士朗。光球と化してファイバードの胸に飛び込む。

ライトグリーンの目が光ると、腕を上空へかざし、エネルギーを打ち出す。フレイム・ブレスターが召喚される。

ファイバード 『フレイム・ブレスター！！！！』

フレイム・ブレスターが合体。ヘッドユニットとフェイスガードが装備され、フレイムキャノンが折りたたまれる。そして、サンライサーのレンズにフェニックスの紋章が浮かんだ。

ファイバード 『武装合体、ファイバードツツ！！！！』

ファイバードの方向へ向くデストリアン達。上空にはUFOが監視するようにホバリングしている。

ファイバード 『デストリアン！！！！このファイバードが貴様たちを駆逐する！！！！幾多の破壊行為、絶対に許すわけにはいかないぜツツ！！！！』

背中からフレイムソードを取り出し、切先を向ける。そして薙

ファイバード 『……っ！！！！』

拮抗する刃。ファイバードは一瞬の間を突いて、刃を捌く。叩き斬るように加えられる袈裟斬りの一刀。

ギギギギギギギギ……

ファイバード 『はあああっっ！！！！』

キャインツ、ズザギヤアアアアンツ！！！！

D 03A 「ボゴオオオオオオオオオオッ！！！！」

頭部が若干寸断され、斬り口から炎が燃え上がる。痛みにもがき苦しむD 03。その横から突進するかのよう鎌をかざして、もう一体のD 03が突っ込んでくる。一気に振られる鎌。

D 03B 「ボボボゴゴオオオオオ！！！！」

フユギユアアアン……ガギヤガアアアアンツ！！！！

だが、フレイムソードでこれを斬り弾く。尚もD 03は縦横無尽に鎌を振るう。しかしファイバードは既に太刀筋を見切っていた。

D 03B 「ボボボゴゴオオオオオ！！！！」

ファイバード 「無駄だ……！！！！」

ギャガアンツ、ギャキン、シャキュキン、ディカンツ、ガ
コアアンツッ！！

何度も鎌を振るうが、全ての斬撃をフレイムソードで弾き返す。
そして次に鎌が揮われた刹那、薙ぎ払われたフレイムソードの一刀
が腕を斬り飛ばす。

ザシャアアアアツッ！！！！

D 03 「ボボボボゴオオオツッ！！！！」

その時、ファイバードの背後を捕っていたD 02のもう一体
が再び口を開けながらファイバードに襲い掛かる。

D 02B 「ミシャシャアアアアア！！！！」

ファイバード 『ちいッ！！！！』

ドオアアアアアアツッ！！！！

ファイバードはフットバーニアでジャンプしてこれをかわした。
D 02はD 03と激突。纏れ合うように倒れこむ。

ドオゴガアアアアツッ！！

D 02B 「ミシャシャシャシャシャ！！！！」

D 03B 「ボボオオオオオオツッ！！！！」

ファイバードは、着地して体制を整える。

ファイバード 『次は貴様らだあああああ!!!』

ギユゴオオオオオオ!

体の向きを変え、後方にいるもう一組のD 02と03にエネルギーの球体を帯びながら突き進み始める。スライドするようにファイバードは高速で前進していく。

渾身の力を籠めた燃え滾るフレイムソードで、2体を同時に叩き斬る。

ファイバード 『フレイム・・・スラアアアアアアッシユツツツツ!!!』

ズザギヤギヤドオギヤシユウウウウウウウッツツ!

!!

2体の斬り口から暴れるように炎が噴出し、2体を爆発させた。

ギユゴオオゴゴゴゴオオオオオ・・・デイギヤドオギユガドオガギヤアアアン!!!!ズガガドオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオ!!!

UFOは危険を察したのか、移動を始めた。だが、ファイバードは見逃さなかった。更にチャージアップを持续させて飛び立つ。

ファイバード 『これだけのことをしておいて逃がすかよ!!』

!!

・ ・ ・ また戦いになっちゃって。ホントはもっとデートしたかったよな？」

漣 「なんで勇士郎が謝るんだ？悪いのは宇宙人とデストリアンの奴らだ。あ．．．。」

またしても素の口調が出てしまう漣。いけないといわんばかりに口を押さえた。

ファイバード 「漣．．．漣の方こそ気にする必要なんかない。それが君の素の口調ならそれでいいんだ．．．。」

漣 「勇士郎．．．ふふっ、そうだな！」

ファイバード 「．．．！！やつら、また放ちやがった！！」

漣 「え?!」

漣がファイバードの視線の向こうへと首を向けると、新たな大型のデストリアンが投下されていた。

夕方の街に巨大なシルエットが浮かぶ．．．。それは羽を広げたガのようなシルエットだった。だが、肉は分厚く羽からは攻撃用の触手が連続で連なっている。

漣 「なんて、大きさなんだ．．．！！！！」

ファイバード 『行ってくる!!!!!!』

ドオオオオオオオオオオツッ！！！！

澪は巻き起こる風の中、再び飛び立ったファイバードを見送った。

つづく

次回予告

街では、再びデストリアンが多発出現を開始した。その報告を受け、要達が出撃し、舞人も勇者特急隊を出撃させる。一方で和を迎えに行った勇とエクスカイザーもこの状況下に遭遇。ダグオンチームも新たに投下されたオートマトンタイプのデストリアンに苦戦を強いられる。ファイバードもまた、新たに現れたデストリアンに果敢に立ち向かう。だが、流星弾雨のごとしビームがファイバードを苦戦に追い込む……。

次回、新生太陽の勇者 ファイバード・サーガ 第53話 「黄昏の攻防戦」

守るべきものの為の苦しみが勇者の覚悟。

第52話 「三連撃の炎」(後書き)

意見・感想お待ちしています。

第53話 「黄昏の攻防戦」

マイトガインは現在、生まれ変わる為の大規模なオーバーホールが行なわれている。その現場見学に舞人が、紬を招待していた。先ほどの電話は、この電話だったのだ。会える時間が調度今日となったために、舞人は紬を誘ったのだ。

バラバラに解体されてオーバーホールを受けているマイトガインを見て、哀れむ気持ちを懐く紬。

以前、直接乗せてもらったこともあり、マイトガインに対して情が芽生えていた。

紬 「マイトガイン・・・バラバラにされちゃってかわいそう・・・まだ直らないの？」

舞人 「ああ、かなりの損傷だったからね。けれど、現在推進中のグレート化計画が完了すれば、マイトガインは今までよりも遙かにパワーアップする見込みなんだ。それまでは今しばらく辛抱してもらおうしかないな・・・。」

紬 「そう・・・はやく元気になるといいな。あの時はホント凄かったなあ・・・。」

舞人 「あの時・・・？」

紬 「夏休みに恐い怪物達に襲われたとき！舞人君が私をマイトガインに乗せてくれたじゃない！」

舞人 「ああ！！あの時のことか！！あの時は、俺の急な判断で乗せてしまった。」

紬 「そのおかげでもエキサイティングな経験ができたわ。今度は新しいマイトガインでデートがしてみたい！」

舞人 「そうだね。その時また呼ぼう！グレートマイトガインと一緒にデートだ！！」

紬 「うん！」

その時、旋風寺のエージェントが舞人の耳元で緊急の知らせを告げる。無論、デストリアンとUFOの事である。

旋風寺エージェント 「失礼します！舞人様・・・。」

舞人 「なんだって？！！だが、マイトガインもジエイデッカも修理中ときている・・・バスターボンバーとフレアダイバーの修理の状況は？！」

マイトガインとは別に他の勇者特急の2機は、旋風寺の基地においてカスタム修理を受けていた。

ストライクボンバーは正式にバスターボンバーへとカスタマイズされ、フレアダイバーには高出力で使い勝手のよい、アクセラレ

ートガンが実装されていた。

旋風寺エージエント 「つい先ほど修理・調整等が一通り完了したとの報告を受けました。そして更にジェット勇者・轟龍もロールアウトが完了したとの情報が・・・。」

舞人 「轟龍が?! そうか!! 了解した・・・ん? 着信だ!!」

さらに、舞人のケータイに要からの着信が入る。直ぐにケータイを取り出して電話に出る舞人。

舞人 「もしもし! 要さん?!」

要 「舞人! デストリアンとUFOに関して情報は行っていると思うが、現在、ファイバードと4人の戦士がデストリアンと戦闘をしている! エクスカイザーからも現地へ向かっているという連絡があった! 時期に加勢に来てくれるだろう。舞人はまだ整備工場にいるのか?」

舞人 「ええ!! これから修理が完了した勇者特急2機と新たなジェット勇者を向かわせます!! 要さんはどうするんですか?」

要 「少しでも加勢する為に、レイバーズと現場へ向かっている所だ。もう、俺達は一つのチームなんだ!!」

舞人 「そうですね!! では現地で勇者特急隊をよろしく!!」

要 「ああ!! 了解だ!!」

要はJトランスポーターにレイバーズを搭載して現地に向かう。

格納フロアではガンレイバーとショットレイバーが仰向けで搭載されている。

ガンレイバー 「ジエイデッカーがいなくても、俺達にできる事だってあるからな!!」

ショットレイバー 「どんなタイプのデストリアンかは判らないが、斃さずとも援護する事はできるからな。」

スラスター音を高鳴らせ、Jトランスポーターは現地へと飛んでいく。舞人も復活した2機の勇者特急を向かわせる。

舞人 「バスターボンバー、フレアダイバー!!スクランブルだっ!!!!場所は相模原市南区!!超特急で向かってくれ!!!!」

バスターボンバー&フレアダイバー 「了解!!!!」

武装を施されたトレーラー特急とコマンド特急のレーンハッチが開く。旋風寺の基地から2機の勇者特急が出撃。ロコモライザー同様、上昇しながら空中を飛んでいく。今回から空中航行機能も追加されたのだ。

そして、別のレーンハッチからは、ジェット機形態の轟龍が発進する。マイトガンと同等の性能を持った、新たな超AI搭載型のロボットだ。黒光りするボディーが際立つ。

舞人 「そして、轟龍!!新たな勇者の勇姿!!存分に見せてやれ!!!!頼むぞ!!!!」

轟龍 「任務了解……!!!!」

相模原市を目指して飛び立っていく轟龍。飛び立っていく勇者特急と勇者ジェット。新たな勇者旋風の前触れのようなだった。

一方、桜ヶ丘がある相模原市・南区では新たに現れた大型デストリアンが進撃していた。別の箇所では、D 02、D 03が数体が投下され破壊行為を続けている。さらにもう一箇所では別の大型デストリアンが投下されていた。

人々が逃げ惑う中、嘲笑するかのようにつき進むデストリアン達。

初期の頃の同時多発出現を彷彿とさせる出来事だった。新たに投下されたデストリアンを追いかけるように走るエクスカイザー。勇がステアリングを握る。その隣には、和が乗っていた。

学校帰りの和を勇が迎えにいていたのだ。それからしばらくした後にこの事態に見舞われていた。

勇も勇士朗同様、和にデストリアンの事件に巻き込んでしまった事を謝る。

勇 「BLWの次はいよいよデストリアンの反乱かあ?!いやつてくれるじゃねーか!!!ちくしょう・・・またこんな状況下に巻き込んだしまった・・・ごめんな!!」

和 「なんで勇さんが謝るんですか?悪いのはあの怪物たちのせいですよ?確かに唯も私も色々巻き込まれてますけど、勇さんやエクスカイザーは関係ないと思います。」

勇 「そつか？俺の考え過ぎってか？！」

エクスカイザー 『勇！どこか安全な場所に彼女を下ろして、
奴の近くまで行くぞ！！』

勇 「了解！！それで大丈夫か？！和ちゃん！！」

和 「・・・はい！ん・・・？！！」

ふと窓の向こうを見ると、憂と純が走っていた。和はパワーウ
ィンドーを開けてすぐに呼び止める。

和 「憂いい！！こつちこつちいい！！」

和の呼びかける声が、憂に届く。その方向へと振り向く憂。

憂 「え・・・？！あ！勇兄ちゃんとエクスカイザー！！和ち
ゃんも？！」

純 「なんで和先輩がエクスカイザーに・・・？！」

事情を説明しづらかった為か憂はごまかすようにして走るよう
促した。

憂 「あ・・・えーとね・・・とにかく乗ろう！！走るよ、純
！！」

純 「う、うん！！」

一方、D 25が投下されたエリアでは決死の攻防戦が展開する。活動を開始した多数のD 25は無差別に口から伸縮する触手を伸ばして人々を捕食し始める。ダグオンチームも守りきれずに苦戦する。

ターボ・シユン 「くそ!!!こつも一斉に活動を開始されては・
・・!!!」

ドオドオドガアアッ!!!

ターボラツシユで一体を吹っ飛ばすも、後方では通行人に手をかけて捕食しているD 25の姿があった。それに向かってアーマ
ー・レンが狙い撃つ。

アーマー・レン 「チックショウ!!!手がまわらね!!!」

デイガンツ、デイガンツ・・・ドオドオオオッ!!!

一組の高校生カップルに襲い掛かるD 25。触手が伸びて迫る。

カップル 「わああああ!!!」

ウイング・リョウ 「でやああああ!!!」

ザシユクウウンツ!!!

間一髪で、ウイング・リョウが斬りこんで、D 25を破断した。

ウイング・リョウ 「この場所からとにかく離れて!!」

カップルは素早くうなずきながらその場から駆け出す。その時、唯の悲鳴が響き渡った。

唯 「いやあああああ!!!!」

律 「ゆいゆいゆい!!!!」

梓 「イヤア!!唯せんぱあああいつ!!!!」

姫子 「唯ちゃんツ!!!!」

触手に捕られ引きずり込まれようとされていた。これに対し怒りを滾らせたファイヤー・コウが割って突入する。

ファイヤー・コウ 「やるおおおおおツツ!!!!」

開口している口と、唯を捕らえている触手の間に入り、触手の管を握り締めて力任せに引きちぎる。

ファイヤー・コウ 「くそつたれえええええツツ!!!!」

ガツ……ツギギギ、ブチイイイイツ!!!!

D 25 「ギユギユグウツツ!!!!」

間髪いれずに、怒りをこめたバーニング・ナックルが見舞われる。炎を賭した拳が気色悪いボディーを炎砕する。

ファイヤー・コウ 「バアアアアアアニング・ナツクルツツ！！！！」

ギユグオドオガアアアアアアンツツ！！！

肉塊が木端微塵になつて燃え砕かれる。ファイヤー・コウはへたりこんでしまった唯に駆け寄つて、触手を引き剥がす。

ファイヤー・コウ 「この・・・よくもツ・・・唯ちゃんを・・・よしツ、取れた！！唯ちゃん！！怪我は??！」

唯 「・・・う・・・うん・・・光君、ありがとう・・・ちょっとすりむいて痛いだけだよ。」

唯の声は恐怖で震えていた。抱きしめてあげたかったが、それどころではいられない状況だった。

別の箇所から新たな悲鳴が飛び交う。D 25が、唯似のOLを呑み込もうと触手を縮めているところだった。

OL 「あああああ！！！」

ファイヤー・コウ 「くツ・・・！！！」

ターボ・シュン 「任せろっつ！！！」

ヴォギユオオオオオツツ！！！！

ここからでは間に合う位置ではなかった。だがその時、ターボ・シュンが持ち前のスピードで一気にD 25へと接近する。ファイ

ヤー・コウ同様、割って入り触手を腕力で引きちぎる。

ターボ・シユン 「でやあああッ！……！」

ブチャギイイイッ！……！

D 25 「ギユギョゴギイイイ！……！」

倒れこむOLをかばうように立つターボ・シユン。一声かけ、避難を促す。そしてグロテスクなボディーにターボラッシユの連打を高速で打ち込む。

ターボ・シユン 「お姉さん……ここにはせつかくの美人も汚れかねません。せめて、後ろのコンビニの中へ逃げてくださーい！……！」

OL 「は、はい……！」

ターボ・シユン 「行ったな……っしやああッ、ターボラアアアアアッシユッ！……！」

ドオドオドオドオドオドオドオゴガアアアッ！……！

体の至る箇所が陥没して吹っ飛ばされた。その傍らアーマー・レンがレールシューターをマシンガンモードに切り替えてぶっ放す。

アーマー・レン 「マシーナリー・シューター！……！」

ディディガガガガディダダダダダアアアッ！……！

！……！

ターボ・シュン 「くそっ!!!手が回りきらないのかっつ!
!!なんて・・・不甲斐無いんだ・・・俺達は!!!!」

その頃、ファイバードは独りでD 26へと立ち向かう。D
26は不気味に空中を浮遊しながら進行する。その姿は、「機動新
世紀ガンダムX」に登場したMA、モビルアーマーパトウーリアのようなシルエツ
トのようでもある。フットバーニアがファイバードを上昇させてい
く。

ファイバード 『一気に懐に飛び込んで叩くッ!!!!』

ドオアアアアアアアツ・・・

フレイムソードを振りかぶって接近する。だが、ファイバード
狙って羽から生えた触手が攻撃を開始する。触手が縦横無尽に動い
て襲い掛かる。

ビュルルルルドオオオオ!!! ビュビュドオドオドオオ
オオオオオツッ!!!!

ドオドオドオガガアアアアツ!!!!

ファイバード 『ぐおあああああアツ!!!!』

ダメージを受けて吹き飛ばされるファイバード。そこへ更に胸
部目掛けて触手の先端が直撃する。

ズガドオオオオオオツッ!!!!

ファイバード 『がッ……!!!』

ファイバードの周囲を統べる触手が、先端から過粒子砲のような火線が撃ち出す。上方からの攻撃を直に受け、更なるダメージがファイバードを襲う。

ヴィヴィヴィヴィヴィヴィギユイイイイイイイイ
ツツツ!!!!!!

ズギャギャガガガアアアアアアアツツ!!!!!!

ファイバード 『ぐごおおお……おお……おツツ!!!!!!』

白煙を全身から上げて地表に落下し、住宅街を破壊してしまう。
この光景を見ていた漣が叫ぶ。

漣 「勇士朗ッ!!!!!!」

容赦なくD 26は攻撃を続ける。ファイバードと眼下の街に過粒子砲を雨のように撃ち注ぐ。

ヴィヴィヴィヴィヴィヴィギユイイイイイ……ギャ
ズドオヴァギャガゴオオツ!!!!!!

一瞬で火の海となる街並み。またしても街に災厄が広がっていき、平穏を取り戻したかのように見えた時間が脆くも崩れ去っていく。

D 26 「ギユキユキキイイイ!!!!!!」

有線式のビーム砲のような触手を伸ばし、破壊の限りをつくす
D 26。ファイバードは、頭上を過ぎ去っていくD 26を睨む。

ファイバード 『くつ・・・これ以上先は・・・いかせ・・・
ないっつ！！！』

ジャキンツ！！ ヴィギユドオドオアアアア！！ ド
オドオドオドオドオドオドオドオドオドオドオドオドオドオドオド
ゴゴゴオオオオオツツ！！！！

震える体を起こしていくファイバード。フレイムキャノンを展開し、フレアミサイルと同時に撃ち放つ。オレンジの二つの火線と、夥しい数のミサイルがD 26の広がる両翼に向かって直撃する。

ギヤドオドオゴオオオ、ズズズズズドオドオドオドオド
オオオオオオオオツツ！！！！

表面が爆発に包まれる。するとD 26は体を反転させ、体と共に触手を全てファイバードに向けた。そして一斉に過粒子砲が撃ちだされる。

ヴィヴィヴィヴィヴィヴィヴィヴィヴィヴィヴィヴィ
イイイイイッ！！！！

ファイバード 『フレイム・フィールドツツ！！！！』

咄嗟にファイバードはフレイム・フィールドでこれに応戦する。フィールド表面に降り注ぐ夥しい量のビーム。激しい衝撃が内部に振動する。

ズズズズツズズズズズズズズズズズズズズズウウウウ
ウツツ！！！！！

ファイバード 『ぐつ……凄まじい衝撃だ……っ！！！！』

攻撃をくらう毎に地面に脚をめり込ませていく。防戦一辺倒を強いられるファイバード。

ファイバード 『おそらく、コイツが今回のメインだ！！今までの奴らは雑魚に過ぎない……強力過ぎる……！！！！』

澪は歌を止め、呆然とこの光景に見入ってしまった。はつと我に帰る澪。

澪 「……はっ！私ったら何をポーっとしてるんだ！勇士郎のために歌わなきゃ！！」

改めてエリザベスを構えなおして歌を届けようとする澪。今度は勇士郎が好きな「ふでペン」のフレーズを奏で始めた。

一方、勇は和達を下ろすと、進撃するD 27に向かってエクスカイザーと共に走り出す。進撃するD 27は、スベスベ肌の一つ目ジャミラのような容姿だ。口は裂けて、牙が見えている。ただ歩くだけで十分な破壊行為が行なわれていた。

ズズズズドオオオオオオオオオオオ！！！！

踏みつけられる建造物群。当然の事ながら中にいた人々は即死だった。一步、一步が凶器の沙汰と言ってもいい程である。

市民達が逃げ惑う中、鋭利な爪が生えた五指の巨大な手で人々を驚掴みにしてさらう。この時点で既に圧迫死している人々が多々いた。

容赦なく口へと入れ込む。周囲に咀嚼音が響き渡る。

ガシユグシユジャグシユジャグシユ・・・

その大きさは、80メートルは優にあつた。この巨体を追いかけるエクスカイザー。

エクスカイザー 『勇！！今までのデストリアンの中でもかなりの大きさだ！！激しい激戦をすれば瞬く間に街は廃墟と化すだろう！！！！』

勇 「だろうな・・・あんなデカイのと激しくやり合ったら間違いなく街が終わる！！となればここは、一撃必殺に賭けるしかねえ！！！！」

エクスカイザー 『ああ！！その通りだ！！一刻の猶予もない、ここで降りるんだ！！融合合体するぞ！！！！』

勇 「オーライっ！！！！」

駅のターミナルで進撃していくD 27を見つめる和達。恐怖を紛らわすために、憂と純は和に体を寄せ合っている。

純 「また、夏休みの時みたいになるの……?! てか、なんなのよ!!! あの大きさは!!!?」

憂 「和ちゃん……怖いよ……そういえばお姉ちゃん達も街の方に行ってるんだよね? お姉ちゃんが心配だよ……。」

和は手で憂の頭を撫でて抱き寄せる。

和 「大丈夫よ……きっと彼氏の光君と一緒にいると思うから。彼、戦う力を手に入れたみたいだからね……それに、あの怪物も勇さんとエクスカイザーが倒してくれるわ。心配は無いわよ。」

憂 「和ちゃん……。」

純 「和先輩……。」

和 「いつもこういつた危険な状況を、あの人達は打破して助けてくれる……その力を信じて……待って……見守り続ける。それが私達に出来る事よ。その想いだけでも勇さんにとっては力になる……勇さんがそう言った。」

憂 「勇兄ちゃん……エクスカイザー……あ!!!」

純 「何、あの光り?!」

和 「勇さんとエクスカイザーだわ!!!」

その時、3人は光りの光線が空に放たれる瞬間を見た。エクスカイザーがキングローダーを召喚したのだ。エクスカイザーは、ド

ツキングモードに変形したキングローダーの中へと飛び込む。

エクスカイザー 「とうっ………フォーム・ア
ツプツッ!!!」

ハッチが閉じられ、ライオンのフェイスが胸部に浮かび、キングエクスカイザーの口許にフェイスガードが装備される。腕をかざし、更にカイザージェットを召喚する。

キングエクスカイザー 「カイザアアアアジエエエエエ
ト!!!」

エネルギーを撃ちはなつた先からカイザージェットが高速で飛来する。キングエクスカイザー目掛けて突き進むカイザージェット。その状態で各パーツが変形・分離を開始し、キングエクスカイザーに向かう。

キングエクスカイザーの両肩、両腕、両脚のアーマーがパージされ、カイザージェットのパーツが合体していく。胸部のライオンも攻撃的なフォームに変化し、赤い光りを放ちながらヘッドユニットも攻撃的に一新する。

そして勇が前に立ち、叫ぶ。

勇 「カイザー・フュージョンツッ!!!」

額から放たれる光線に吸い寄せられるように浮上して一体化する勇。

グレートエクスカイザー 「超越融合合体ツッ!!!グレートエ

クスカイザーツッ！！！！』

D 27に向かって飛び立つグレートエクスカイザー。人々を蹂躪し続けている巨悪に、神に近かりし力を持った正義のイカズチが突き進む。

一方で、ダグオンチームは辛くもD 25を駆逐することに成功していた。残るUFOが尚もダグオンチームを監視するようにホバリングしていた。

ファイヤー・コウ 「残るはあいつだけか！！」

ターボ・シュン 「ずっと奴はこの状況を監視してたみたいだな。逃げられる前に一気に破壊するぞ！！」

ヴィギユイイイイイツ！！

ダグオンチーム 「おうつ！！！！」

ドオオオオオオオオオツッ！！！！

UFOがレーザーを放ち、ダグオンチーム目掛け攻撃を敢行してきた。飛び上がってこれをかわす4人。これを合図代わりに一斉に攻撃をUFOに集中させていく。

ターボ・シュン 「ブレイク・ホイールツ！！！！」

シュシュゴツ……ヴィヴィギユイイイイ……ゴゴ

ファイヤー・コウ 「俊・・・蓮・・・。」

俊は責任を感じていた。自分達が闘える力を有していながら犠牲者を目の前で出してしまった事に。

苦い勝利の空気が4人を満たしていた。

つづく

次回予告

ファイバードとエクスカイザー、ダグオンチームが戦闘を繰り広げている頃、別のポイントに投下されたデストリアンが複数で破壊行為を行っていた。姿勢を改めて立ち向かうヘルトルーパー部隊は無残にも追い込まれていく。その状況下へ加勢するレイバース。辛うじて一体を仕留めるものの、レイバースも窮地に立たされてしまう。その最中、新たなメンバー・轟龍を加えた旋風寺の勇者達が到着するのだった。

次回、新生太陽の勇者 ファイバード・サーガ 第54話 「
新生の旋風寺勇者」

轟くは勝利の轟音か。

第53話 「黄昏の攻防戦」(後書き)

感想・意見、お待ちしております。

第54話 「新生の旋風寺勇者」

ファイバードやダグオンチームが戦闘を繰り広げている頃、別の離れたポイントに投下されたデストリアン・D 02と03が破壊行為を続けていた。二種類あわせて6体が縦横無尽に暴れている。

この場所へ自衛隊のヘルトルーパー部隊が到着。輸送機から6機が投下され、各機が攻撃準備の体制に入る。

ヘルトルーパー・パイロット 「これより、目標の攻撃に移る！！各機、戦闘準備！！」

パイロット達は一斉にデストリアンをロックオンする。足止めの的な行為であるのは覚悟の上だった。

ヘルトルーパー・パイロット 「あの日・・・俺は、いや、俺達は見させてもらった！！勇者たちの戦いを！！それが、国民を守る行為の本来の姿勢を我々に思い起こさせてくれた！！」

10年以上の間、特殊生物の対策権を放棄してきた自衛隊が、勇者達の戦いから本来の姿勢を学んだのだ。

ヘルトルーパー・パイロット 「各機、チェーングン・・・ファイアーッッ！！！！」

ヘルトルーパー・パイロット 「やはり、押されるか……！
！」

ダダダダララララアアア！！

トリガーを握る手が震える。自衛隊員といえども人間。恐怖は確実にメンタルを削る。その間にも仲間の機体が次々と撃破されていく。

ヘルトルーパー・パイロット 「くそっ……ダメなのかア？
?!」

前方の仲間の機体にD 03の鎌が突き刺さった。突き刺さった部分が爆発する。

ボボボオウウウンッッ！！！！

D 03 「ボオオオオオオッッ！！！！」

ヘルトルーパー・パイロット 「クリーチャー……いや、デ
ストリアン！！！！お前らは何の為に……！！！！」

D 02が鎌首を持ち上げたその時、上空からレイバースが投
下される。パラシュートユニットを外して、道路へと着地する。

レイバース 『レイバース、只今現地に到着！！！！』

後方にJトランスポーターが垂直に着陸する。ハッチからJバ
ギーが飛び出し、レイバースの足元に急停車する。要がイヤーマイ

クを手に取り、指揮を始める。

要 「駆逐までは考えるな!!!レイバース、まずは自衛隊員の人命優先だ!!!かまえろ!!!」

ガンレイバー 『あいよおっつ!!!』

ショットレイバー 『目標、ロックオンッ!!!』

要 「撃てッ!!!」

要の合図と共に、レイバースは一斉にエネルギーガンとエネルギーランチャーを撃ち始める。

ビガン、ビガン、ビガン、ビガンッ!!!

ディギゴオオン、ディギゴ、ディギゴ、ディギゴオオオオンッ!!!

撃ち放たれたエネルギー弾がデストリアンに直撃していく。

ズドオドオガギャガゴガアアアンッ!!!

デストリアン群 「ボボオオオミシャシャゴボオオオオ!!!」

二種類の声が混じった叫び声が響く。その間に後退しながら離脱する2機のヘルトルーパー。

ヘルトルーパー・パイロット 「くッ……すまん!!!恩に切

らせてもらおう!!」

吉崎 「ヘルトルーパー、離脱確認!! デストリアンの数、6
体!! データ照合・・・一種はC 03と同種のもの判明!!」

要 「同種・・・それが複数も・・・どういうことだ？」

葉山 「確か、今回の奴らはUFOから現れたんすよね?! も
しかして、あいつらは量産的なものじゃないんすかね?!」

要 「かもしれない・・・レイバース、油断はするなよ!!
今は俺達に出来る事を尽力するんだ!! いいな!!?」

レイバース 『了解!!!!』

ビガアアンツ!! ビガアン、ビガアン、ビガアアン!!!!

ディギゴオオオン、ディギゴオオオン、ディギゴオオオ
ン!!!!

ズガギヤガガゴオオオンツ!!!!

初陣時の時とは違い、武装の威力も格段に上がっていた。足止
めには十分なまでのものがあつた。それでもD 03が先陣をきつ
て向かってくる。

要 「射撃を奴らの頭部に集中させる!! どんな生物も頭部は
急所だ!!」

ガンレイバー 『頭部か・・・。』

ショットレイバー 『了解！！頭部に射撃を集中させてみます
！！』

ビガン、ビガン、ビガン、ビガアアアンツ！！

！！！！
ディゴオオオン、ディゴオオオン、ディゴオオオン

射撃を頭部に集中させていく。すると、ちょうど大口を開けた
D 03の口内にエネルギー弾が直撃した。外は頑丈でも内部はも
ろい。

ディギユドオガゴオオオオン！！

口内と後頭部から爆炎を噴出して絶命。後ろに巨体が倒れこん
だ。

ズウウン・・・

ガンレイバー 『よっしゃああ！！！！』

ショットレイバー 『油断するな！！来るぞ！！』

D 02がレイバースに向かって素早い動きで大口を空けなが
ら突っ込んでくる。射撃では防ぎ切れないと判断したガンレイバー
は、Jバギーをかばう為に真っ向から受け止める。

ガンレイバー 『やらせねーよ！！！！』

ガゴオオオオオンツッ！！！！ ググググググ・・・

ショットレイバー 『ガンレイバー！！！！！！』

要 「無茶はよせ！！ガンレイバー！！！！」

D 02の顎を掴んで進行を防ごうとするガンレイバー。要の中でガンレイバーが腕を切断された時のことが過ぎる。

ガンレイバー 『こうも・・・しなければ、防ぎきれませんよ・・・』
ショットレイバー・・・俺が止めてるうちに何処でもいいから撃てえ！！！！！！』

ショットレイバー 『側面だ！！！！』

デイゴオオオン、デイゴオオオン！！！！

ドオドオガアアアンツッ！！！！

D 02 「ミシャシャシャアアアア！！！！」

側面に撃ち放たれたエネルギーランチャーの弾丸がダメージを与える。だが次の瞬間、一瞬ガンレイバーから退いて、体当たりでガンレイバーを吹っ飛ばす。

ドオガアアアアンツッ！！！！

ガンレイバー 『ぐああああああ！！！！』

ショットレイバー 『ガンレイバー！！！！！！くそ！！！！！！』

ショットレイバーが構えたその時、長い尾を振りながら尾の先端のクワガタ状の突起物でショットレイバーを斬り飛ばす。

ギユゴアツ・・・ザギヤアアンツツ!!!

ショットレイバー 『あああああ!!!』

要 「ショットレイバー!!!」

吉崎 「ショットレイバー、胸部にダメージ!! 装甲部が寸断されました!! 内部機器にも異常が発生しました!!!」

要 「何?! なんてことだ・・・やはり、ジエイデッカーがいなければ・・・判断を誤ったか?!」

Jバギーが丸腰になる。正面ではみちゅみちゅとイソギンチャク状の顎を動かしながらD 02が鎌首を持ち上げる。絶体絶命の危機的状况。それでもガンレイバーは立ち上がり、掴みかかりに行った。

ガンレイバー 『うおおお!!!』

ガシイイイツツ!!!

D 02 「ミシャアアアアア!!!」

勇猛果敢にしがみつくガンレイバー。D 02は暴れながら振りほどこうとする。周囲では4体のデストリアンが破壊行為を続ける。そして崩れ落ちるように倒れこむショットレイバー。

その時、吉崎が接近する機影を捉えた。

吉崎 「これは・・・!?!?隊長!!援軍が来ました!!トレ
ーラー特急とコマンド特急、そして轟龍が来ました!!!!」

要 「そうか・・・!!!!」

要の表情に歓喜の表情が満ち溢れる。空中から駆けつけた各機
がモードチェンジを開始する。

バスターボンバー 『チエエエエンジンツ・・・..
スターボンバー!!!!』

フレアダイバー 『チエエエエンジンツ・・・..
レアダイバー!!!!』

轟龍 『ジェットエンジンジ・・・..
!!!!』

変形した3機が着地する。要は駆けつけた3機に早速通信で指
令を出す。

要 「新生勇者特急・・・来てくれたんだな!!!!ブレイヴ・
フォースの隊長を勤める要だ!!!!早速攻撃をかけてもらいたい!!
!!バスターボンバーとフレアダイバーは他の4体の駆逐を、轟龍
はガンレイバーの援軍、及びD 02の駆逐をたのむ!!!!」

バスターボンバー&フレアダイバー 『了解!!!!』

フルバーストのゼロ距離射撃技が炸裂。D 02は激しく分解された。

そして轟龍は、低空を加速しながら左腕を高速で回転させてD 02に突っ込む。

轟龍 『トルネード・ナックル……!!!!』

グオゴオオオオオオオ……ギユドオガゴオオオオオオンツッ!!!

D 02 「ミシャシャアアアアアアアアツッ!!!」

ガンレイバー 『ぐああああ!!!!』

ズガガガゴオオオオオン!!!

しがみついていたガンレイバーもろともD 02が吹っ飛ぶ。道路にしりもちをついたガンレイバーの所に着地する轟龍。ガンレイバーがクレームの一言を飛ばす。

ガンレイバー 『いつてーな!!俺もろともフツ飛ばしてんじやねー!!!!だいたいお前は一体なんだ?!!!!』

轟龍 『悪く思うな……それよりも下がれ。貴様では足手まといだ……』

ガンレイバー 『なにイ?!』

そう言うと、轟龍は右手に握り締めていたバスターキャノンの

銃口をD 02に向けた。その時だった。吹っ飛ばされ崩れこんでいたD 02が、不気味な音を立てはじめ、見る見るうちに巨大化する。

ギュゴゴゴゴ・・・ボゴゴゴ・・・グギギギギギギゴゴゴゴゴゴツツ・・・

ガンレイバー 『なんだなんだあああ?!?!』

やがて、両端から生えていた触手状の腕が強力な豪腕に変貌する。その姿は、以前ソウルに出現したD 08だった。だが、オリジナルのD 08に比べると一、二周り小さく、目は一つの状態だった。

D 08アナザー 『ゴオオオオオオオオオオ!!!!』

吉崎 「高エネルギー反応上昇!! D 02がD 08に変貌しました!!!!」

要 「なんだって?!!! D 08はD 02の進化した型のやつだったのか?!!!」

D 02が変貌したD 08に対して、轟龍は不敵な姿勢を崩さなかった。

轟龍 『・・・おもしろい!!!!』

強烈な豪腕のパンチが繰り出され、道路や建造物を破壊する。上昇しながらバスターキャノンを撃つ轟龍。

ドオゴガアアアアアアンツッ!!!

轟龍 『正確な狙いだ・・・だが!』

ズドオヴァアアアアアア!!!
ズドオヴァア、ズドオヴァアアアアア!!!

ズズズドオグオゴオオオオオオオオオオ!!!

小規模だが、高出力のビーム過流が撃ちだされ、D 08に直撃する。

D 08アナザー 「ゴギョオオオオオオオ・・・ガ
ゴオオオオオ!!!」

倒れ込みながら呻き苦しむD 08。直撃部は肉を若干破壊していた。だが、すぐにまた起き上がり、多数ある豪腕を揮って轟龍を攻撃する。

D 08アナザー 「ゴゴオオオオオオオツッ!!!」

轟龍は機動力を活かしてこれらをかわしていく。

轟龍 『フン・・・。』

だが、次の瞬間、強烈な拳が轟龍を直撃した。

ドオゴガアアアアアアアアツッ!!!

轟龍 『つ・・・!!!くつ・・・!!!』

させる。その間に苦しみの咆哮を上げたかにも見えた。

轟龍の面前に爆炎が立ち昇る。その光景を目にした轟龍は一言
呟いた。

轟龍 『悪く思っな……。一発は一発だ……。』

要は「バギー内で轟龍の実力に感激にも似た気持ちに満たされて
いた。

要 (これが轟龍……。なんて心強いやつなんだ……。!)

その時、吉崎が現在の状況を報告した。要は吉崎の声ではっと
我に帰った。

吉崎 「隊長、この近辺のデストリアンの駆逐は完了しました
!!残るは2体と1機のUFOになります!!」

要 「……。他の2体とは誰が戦っているんだ?！」

吉崎 「映像ダウンロード……。巨大蛾タイプはファイ
バードが、巨大二足歩行タイプはエクスカイザーが戦ってくれてい
ます!!あと、エクスカイザーからは先ほど、支援無用と言われま
した。ですがファイバードは苦戦を強いられているようだとの情報
が入っています……。!」

要 「そうか!!ならば、エクスカイザーの方は彼の実力を信
じよう!!轟龍、バスターボンバー、フレアダイバーはファイバー
ドの援護に向かってくれ!!」

バスターボンバー 『了解だぜ!!!』

フレアダイバー 『了解しました!!!直ちに向かいます!!!』

轟龍 『新たな任務を受諾した。これよりファイバードの援護に向かう……!!!』

要が指示を下した頃、ファイバードは防戦を強いられ続けていた。

ファイバード 『くそ……エネルギーを……撃ち放てない……!!!』

フィールド越しからの攻撃に地面に少しずつ食い込んでいく。更には溇の歌声の力が発揮されなかった。

溇 (どうして……?!いつもの力はどうしたの?!勇士朗……!!!)

つづく

次回予告

溇の歌声の力がファイバードに発揮されなかった。それはフィールドを張っていることが原因のようだった。デストリアンの攻撃が容赦なく降り注ぐ。別の箇所では、大型の二足歩行デストリアンとグレートエクスカイザーが激突する。和達は少し離れた場所から見守る。そして防戦で一杯のファイバードを嘲笑するかのよう

歌い続けていた澗へ異星人の魔の手が忍び寄る。

次回、新生太陽の勇者 ファイバード・サーガ 第55話
炎と雷の爆発」

災厄に怒りを賭して・・・。

第54話 「新生の旋風寺勇者」(後書き)

感想・意見、お待ちしております。

第55話 「炎と雷の爆発」

ファイバードは聴こえてくる溍の「ふでペン」のメロディーを聴きながらD 26の攻撃を耐え続けていた。集中豪雨のようなビーム攻撃がD 26の両翼から伸ばされた触手から放たれていく。

ヴィヴィヴィヴィヴィヴィヴィギユギユウギユウウウ・・・
ドオドオドオドオオオオオ・・・

フレ임フィールドを展開している分、溍の歌から得られるエナジーが半減してしまう状態が起こっていた。

ファイバード 「くそ！！せつかくのエナジーが半減してしまっている・・・！！フィールドを張り続けているせいか？！！けど・・・これを解けば同時に大ダメージを受ける・・・！！！！」

黄昏時に響き渡る轟音。ファイバードは、絶え続けるか、大ダメージを受けてからのエナジーに賭けるかの選択肢が交錯する。

溍は「ふでペン」を歌い続けている。歌詞のとおり、愛を籠めて。

溍 （勇士朗・・・お願い！！また、私の歌の力でやっつけて！！！！）

奏でられる溼の歌声とエリザベスの音色は、フィールドを張り続けている限り、エナジーは空しく半減したままだ。

ファイバード 『くツ……デストリアン……!!!!』

衝撃が積み重なり、プレスのようにファイバードに重圧をかけていくD 26。ファイバードの脚が更に地中へと埋まっていく。

ドオドオドオドオドオドオドオドオドオオオオオオオ・

・

D 26 「キキキイイイイツツ!!!」

ファイバードが耐え続ける頃、グレートエクスカイザーとD 27が街で激突する。上昇しながらグレートエクスカイザーは、進攻するD 27の背後から両肩のグレートキャノンを撃ち放つ。

ドオオオオオ……ズドドオヴァアアア!! ズドドオ、ズドドオ、ズドドオヴァア!!!

D 27の巨体に直撃し、直撃部が爆発していく。相当な威力を有している為か、巨体の脚がドスンとぐらつく。

D 27 「ガグググガアアツツ……!!!!」

グレートエクスカイザーは空中旋回しながら正面へと回る。そして真つ向からグレートカイザーブラストを撃ち放った。

D 27。だが、その攻撃は軽々とかわされた。

グオオオオン・・・！！

シュギユンツ・・・！！！！

グレートエクスカイザー 『あたらねーよ！！！！』

その状態でグレートエクスカイザーは、反転しながらグレートキャノンを数発撃ちこんで着地体制に入る。

ドドオオオオオ！！！！ ドドオオオ、ドドオオオオオ！！

！！！！ ドドオオオオオ！！！！

ズズズズドドドオオオオオオオオオオオオオオオオオツツ！！

！！！！

D 27 「ガガガグウウウウウウ・・・！！！！」

身体に巻き起こる爆発に、今度は呻くような低い声を上げるD 27。その間にグレートエクスカイザーは、着地してカイザーソードを召喚する。

ゴオオオオオ・・・ズウウウウン・・・

グレートエクスカイザー 『カイザーソードツツ！！！！』

背部の機首部分からサンダーエネルギーが撃ち放たれ、落雷と共にカイザーソードがグレートエクスカイザーの手に渡る。カイザーソードを手に取ると、左手をかざしてサンダーエネルギーを発生

させた。

グレートエクスカイザー 『はあああああ……グレート
カイザーソオオオドッツ！！！！』

両手でカイザーソードを握り締め、カイザーソードに左手のサ
ンダーエネルギーを融合させる。

ギユカアアアアアアアアアアアツ……

激しい光と共にカイザーソードはグレートカイザーソードへと
変貌を遂げる。巨大な刀身からはサンダーエネルギーが常にスパ
クしている。

ザンツとグレートカイザーソードの切先をD 27に向ける。

D 27 「カキヤカアアアアア……！！！！」

見計らったかのように、大口を空けながら光弾砲のようなもの
を放つD 27。

コオオオ……ギユドオゴオオオオオオオオオオオオオオ

！！！！

ズドオガギャガドオオオオオオオオオオオオオオオオオオオ
オオオオオ！！！！

光弾砲は、グレートエクスカイザーに直撃。この光景を和、憂、
純が駅のターミナルから見守る。

憂 「今度はどっちも止まっちゃった・・・?!?!」

純 「どうして一気にいかないの？」

和 「もしかしたら、間合いを読んでるのかも・・・怪物でも頭は切れるタイプかもしれないわ。」

純 「間合いつて・・・。」

和 「このこう着状態、ちょっと続くかもね。」

和いわく、こう着状態へと入る2体。街中の人々と夕日が見守る中、巨神と巨体が互いに拮抗する空気を作り出していた。

D 26に防戦を強いられるファイバードに漣はエールソングを歌い続けていた。だが、その漣に異星人のUFOが接近する。

不穏な気配を感じた漣は、歌うのをやめ、恐る恐る背後へと振り向く。そこには異星人のUFOが浮遊していた。

漣 「UFO・・・まさか?!?!」

UFOから漣に向かって異星人が2体降下してくる。恐怖に包まれる漣。

漣 「え???何?!ウソ・・・ホントに・・・!!!!!!やだっ・・・!!!!!!」

異星人A 「@・) % # ' \$ " & ") + * > — || ……!!」

意味不明な言語を口にしながら接近する。後ろへ引き下がる溇じりじりと接近する異星人。

溇 「く……来るな!!誰があんた達なんか……!!!!」

異星人の腕が伸び、溇が手にしていたエリザベスを取り上げる。

溇 「ああつ……か、返せ!!それは一番大事な……!!」

驚掴みにしたエリザベスを不思議そうに分析する異星人。何かに気づいたかのように意味不明な言葉を叫ぶ異星人。次の瞬間、異星人はエリザベスのネックを握力で握り潰してしまった。

異星人A 「@* ……-||><>>#%\$”||!!!!」

バキイツ!!!

溇 「え……いやああ!!エリザベスウウ!!!!」

分身ともいえる大事なエリザベスが破壊されてしまった。溇は悲痛な気持ち之余儀なくされる。更にもう一方の異星人は溇の両肩に強い握力で掴みかかり、額を押し付けるように溇のおでこに頭を押し付ける。溇の何かを分析しているようだった。

溇 「うあツ……いたいツツ!!!いやあああ……や

めろおおお……！！！！！！」

異星人B 「『@「:.*#”%&&~—@……。」

何かを呟くと、異星人はそのまま漣をUFOに連行するように浮上し始める。

漣 「やだやだやだ！！助けて、勇士朗！！勇士朗おおお
おおおお！！！！」

涙を滲ませながら抵抗して勇士朗の名を叫ぶ漣。ファイバードは嫌な気配を感じその方向を見た。UFOと浮上していく異星人と漣が映った。抜け出したくても抜け出せない状況に怒りと悔しさが過ぎる。

ファイバード 『あいつら……くそおおお……！！！！！！』

その時だった。雨のような攻撃が爆発と共に止んだ。

ドオドオガアアアアアアン！！！！

D 26 「キュキャキキイイイイイ……！！！！！！」

ファイバードが、周囲を見渡すと勇者特急隊の姿があった。

ファイバード 『あれは勇者特急隊！！？』

ズシンと構えて参上するバスターボンバーとフレアダイバー。
銃口からは白煙が上がっている。

バスターボンバー 『ファイバード！！援軍に加勢するぜ！！』

フレアダイバー 『さあ、早く離脱を！！』

コオオ・・・ディギウドオオオオオオオ！！

ドウヴァダララララララドオドオドオドオドオドオ
ドオオオオオ！！

一斉に射撃を開始するバスターボンバーとフレアダイバー。D
26の身体に着弾していく。

ズズズズドオドオドオドオゴオオオオオオオオオツツ！

！！

空中では轟龍がバスターキャノンを撃ち放つ。D 26の表面
が爆発する。

轟龍 『ターゲット・・・ロック・オン！！！！』

ギユヴァアアアアアアアアア！！ ズドオギヤゴ
オオオオオオオ！！

D 26 「キユキユキキイイイイイツツ！！！！」

ファイバード 『みんな・・・感謝する！！でやああっ！！！！』

この手を逃す他ないと確信したファイバードは、UFO目掛け
てフルスピードでフットブースターダッシュする。

ドオツゴオオオオオオオオオオ!!!

ファイバード 『溇おおおおおお!!!』

溇を連行しようとしていた異星人が振り返ると、怒涛の勢いで加速してくるファイバードを感知した。溇の表情は恐怖から一気に涙を含んだ笑顔に変わる。

溇 「勇士朗!!!」

異星人B 「 ‘ @ 『 ¥ - # \$ % & ’ > < * ☆ ∥ ∽ — ¥ !!!! 」

ギョドオアアアアアアアア...

ファイバードは溇と異星人の頭上を駆け抜け、一気に連れ帰り先のUFOをフレームソードで叩き斬った。

ファイバード 『でやああああああ!!!』

ズザギヤアアアアアアアアンツツツ!!! ド
オツゴガギヤガアアアアア!!!

溇 「きゃッ!!!」

異星人 「 * ‘ @ - - ^ ^ # ” % !!!!!! 」

溇とエリザベスを離し、その場を慌てて離脱する異星人。振り返ったファイバードは、落下する溇とエリザベスに急いで左手を差し伸べに行く。

澪 「っ
！！！」

ファイバード 『澪！！！！』

ファイバードの左手の中に目を瞑って縮こまっていた澪とエリザベスが納まった。ファイバードは、そっと地面に手の甲を置いた。

ファイバード 『澪、怪我はなかったか？！！何かされなかったか？！！』

澪 「スゴイ接近された・・・ホント恐かった・・・それに、私のエリザベスが・・・」

ファイバード 『え？！』

異星人の握力によって、エリザベスのネックと弦が破壊されてしまっていた。自分の分身のように愛着が籠ったベースがこのようになり、澪は哀しい表情を浮かべ始めた。同時にファイバードの怒りのボルテージが更に上がる。

ファイバード 『許せねえっっ！！！！澪の大切なベースを・・・！！！！』

異星人の二人は、高速で空中を駆け抜けながらD 26を目指す。ファイバードはそこから飛び立ち、異星人を追尾する。大きさの違いからあつという間に異星人を捉える。

ファイバード 『でやあああああああ！！！！』

フュゴオオオオオオ!!! ザズズシュウドオオオオオオオオオ...

怒り任せに揮われるフレイムソードが異星人を切断しながら蒸発させた。その場でフレイムソードを収容すると、ファイバードは、D 26を睨みながらファイアーシャトルを召喚する。

ファイバード 『ファイアアアア... シャトオオオオオオ
ルッッ!!!』

BGM 「グレートファイバード」

撃ち放たれたエネルギーの先から、ファイアーシャトルが召喚され、ファイバード目掛けて飛んでくる。機首が真つ二つに割れ、各部分が分離・変形していく。

ファイバード 『ブレスター・パアアアアジッ!!!』

フレイムブレスターがパージされ、何処へと飛び去っていく。同時に両肩、両腕、両脚のアーマーがパージされ、その部分にファイアーシャトルのパーツが次々と合体していく。

そして胸部にウイング周りのパーツが合体。ファイバードの頭部も赤に一瞬輝き、一新されたヘッドユニットが形成される。胸にフレイムエネルギーが注がれ、フェニックスの紋章が浮かぶ。

グレートファイバード 『最強武装合体... グレエエエト
ファイツバアアアドッッ!!!』

グレートファイバードが、D 26の前について降臨。勇者特

の前に降り立つ。

ギュゴオオアアアアツツ！！！！

そしてバーニングシールドを召喚し、左手にグリップを握り締めめた。

グレートファイバード 『バアアアニング・シールドツツ！！！！』

漣をかばうようにグレートファイバードは夥しいビームを一身に受け止めた。爆風が巻き起こり、激しく漣の髪がなびく。

ズドオドオドオドオドオドオゴゴゴアアアアアアアアアアアアツツ！！！！

漣 「っ……勇士朗……！！！！」

爆風が治まると、漣は乱れた髪をかきあげながら、雄々しく浮かぶグレートファイバードの背中を見上げる。グレートファイバードは、漣の無事を確認するかのように僅かに振り向いて、再び正面を向く。

グレートファイバード 『よし……漣は無事だっ……リフレクト・シュートツツ！！！！』

バーニングシールドのクリアレンズ部に吸収されたビームエネルギーを倍返しで撃ちだす。一線にかつとぶエネルギーがD 26の右翼に直撃し、激しい爆発と共に肉を吹き飛ばして大穴を空けた。

ザベスを持っていた。

漣 「おかえり……勇士朗……ねえ、エリザベスどうすれ
ばいい？私……うっ……うっ……このコが一番の大切な宝
物だったのに……！！！」

涙を浮かべて悲しむ漣。だが、勇士朗は自信を持って彼女を元
気付ける。

勇士朗 「大丈夫！！直るから安心して……って言っても
俺じゃ治せないんだけどね……。エクスカイザー先輩なら治せる
んだ。ほら、前に漣が危険だった時にもやってくれた修復光線だよ。」

漣 「シュウフクコウセン……？？あ、あのときの……。」

勇士朗 「いま、勇さんに電話してみるから、どこかで待ち合
わせしよう。」

そして、待ち合わせ場所で合流し、エクスカイザーがヘッドラ
イトから修復光線を撃ち出し、瞬く間にエリザベスを元通りに修復
した。一緒に来ていた和も笑いながら肩に手を置く。憂と純はその
スゴサに驚いてる様子だった。

純 「すごっ……どうなってんの？！！！」

憂 「ホントだよね！どう、家の自慢の家族。」

純 「一家に一台欲しい……。」

和 「よかったわね、漣。これで部活に何の支障もないわね。」

漣 「うん！これで何の心配事もなく寝れるよ……あ、エクスカイザー……さん、ありがとうございました！」

エリザベスを持ちながらエクスカイザーに会釈する漣。エクスカイザーも笑いながら答えた。

エクスカイザー 『はははは！誰にも大切なものがあるからね。当然の事をしたただけだ。素晴らしい演奏をこれからも続けていくんだよ。』

漣 「はい！」

その向こうで今回の一見について勇がタバコを吹かしながら勇士朗と語る。

勇 「……ふう……しかし、漣ちゃんのベースを壊したとなると……やっぱり彼女たちになんだかの理由があるのか？」

勇士朗 「多分。俺が思うにプラスエネルギーが関係しているんじゃないかって思います。憶測っすけどね。」

勇 「ま、とりあえずこっちにきていた異星人ヤロー共は駆逐できたって事で！」

勇士朗 「またいつ来るかわかりませんがね……お互いに闘っていきましょう！！俺はこれからも街の人々と漣を守り続けたい！！！」

第55話 「炎と雷の爆発」(後書き)

感想・意見お待ちしております。次回からは「化物語」から千石撫子が聡のヒロインとして登場します。

第56話 「撫子・スネイク・聡」(前書き)

化物語から撫子が聡のヒロインとして登場します。それではどうぞ。

第56話 「撫子・スネイク・聡」

戦闘を終えたダグオンチーム一行は、苦い勝利を引き摺ったまま田井中家に集まっていた。

律は、キッチンでハンバーグを作っている。居間には、おいしいそうな匂いが立ち込める。

俊 「はぁ……。」

その中で深いため息を漏らす俊。自分達が戦っているながら手が回りきれず、戦闘中に犠牲者を出させてしまった事への責任を感じてのものだった。梓がそんな落ち込み気味の俊に気をかける。

梓 「俊さん、気にしすぎです。別に俊さん達が悪いわけじゃないですよ。むしろみんなの為に勇ましく闘ってくれていましたよ……。」

俊 「梓……。」

梓のその言葉に俊は癒される感覚を感じる。梓は唯達にも意見を促す。

梓 「唯先輩達もそう思いますよね？」

唯 「うん！俊君たちが悪いわけないよ！！光君だって頑張っ
て私の事守ってくれたし！！」

光 「いや〜・・・それほどでも・・・。」

でれつとにやける光。蓮がKYさに突っ込む。

蓮 「お前はもう少し深く考えろつての！！」

涼 「先輩、彼女達の言うとおりです。確かに目の前で守りき
れずに守りたい人たちが死んでしまったのは悔しいコトですし、つ
らい所だと思えます。でも、いつまでも深くネガティブに考えてい
てはよくないって思えます。」

蓮 「お前にしちゃあ随分と大した事いうな・・・ああ？！」

涼 「ぴいっ！！」

細い眼で涼にメンチをきる蓮。すつとビビッた涼をかばいなが
ら姫子が口を出す。

姫子 「蓮君、なんだからしくないよ。いつもの蓮君ならそん
なツンケンしてる人じゃないのに。」

蓮 「な、なんだよ、姫ちゃん。」

眼をじつと合わせ続ける蓮と姫子。視線と視線がぶつかり合う。

蓮 「クヤシーンだよチクショー！！！！」

この空気に耐え切れなかったのか、蓮は感情を爆発させるように両手を上げながらグーンと寝転んだ。

蓮 「だああああ!!!!くやしー、ふがいねー、ムカつく、な
さけねー、チクショー!!!」

ぎゃーぎゃー言いながらごろごろと左右に転がる蓮。たじつと
なる姫子と涼。

姫子 「こゝ、これもこれで蓮君らしくない……。」

涼 「先輩……。」

この光景を見ながら唯もテーブルの上でクテンとしながら一言
つぶやいた。

唯 「なんだか男の子になった律っちゃんみたい……。」

光 「そう……???」

それを聞いた蓮が、ぱつと起きて唯に叫ぶ。

蓮 「なにいいいい!!?!俺が律っちゃんだとお?!?!」

唯 「ひ!ごめんしゃい!?!」

光の後ろに隠れるように蓮にビビッてしまう唯。光が軽く怒る。

光 「蓮!俺の唯ちゃんに怒鳴るな!?!」

蓮 「何が「俺の唯ちゃん」だ！！それに怒鳴ったわけじゃねーし！！！！バカカップルが！！！！」

光 「んだとおお！！？お前、いくら苦い勝利になったからって周りに当り散らすなよな！！！！」

立ち上がる光。一気にコトがエスカレートしていく。蓮も立ち上がって二人が更にぶつかり合う。

蓮 「当り散らしてねー！！！！」

光 「既にしてるっつーの！！！！カチューシャヤロウ！！！！」

蓮 「っ……てめっ……俺と律っちゃんのトレードマ―クバカにしたな！！！！」

光 「お前だってバカカップルじゃねーか！！！！」

蓮 「な、ばっ、てめっ、いつ俺と律っちゃんがカップルになったんじゃい？！！どーめーダー！！！！どどどーめー！！！！」

光 「ドモってんじゃねー！！意識してんじゃねーか！！！！」

蓮 「んだらかつ……#%\$&*っつー！！！！」

舌をかんでもかく蓮。二人がぎゃーぎゃーやりあう中でも俊は再び落ち込んでいた。

光 「ぎゃははは！！！！ばーか！！！！ばーか！！！！」

蓮 「……………ついで……………言わせておけば
アアアアア!!!」

バンツツ!!!

その時、姫子が強くテーブルを叩いた。びくつとなる光と蓮。

姫子 「あなた達、ここでケンカなんて始めないでよ!!!せつ
かくの勇者がみつともないよ!!!第一チームが乱れたらいけない
じゃないの?!あなたたちは!!!」

梓 「そうですね、二人とも!!!律先輩がせつかく助けてくれ
た感謝の気持ちでハンバーグ作ってくれてるんですよ?!嫌な空
気をわざわざ作らなくてもいいじゃないですか?!」

光 「あう……………」

蓮 「つ……………」

女は強し。二人の一言で光と蓮は黙ってしまった。唯も光の袖
を引っ張ってなだめる。

唯 「光君、とりあえず落ち着こうよ?ね?」

光 「う、うん。」

唯バカの光は素直にちよこんと座り込み、蓮はどかんと座り込
んだ。そこへ律がハンバーグを持ってやってきた。持っていた2品
をテーブルに置くと、律は光と蓮にまだある分を運ぶよう促す。

律 「できあがったぞ、ハンバーグ！聞いてたぞー、会話ッ！蓮、光、あんたらは料理運ぶの手伝いな！」

光 「ええ?!」

蓮 「なにい?!」

律 「和を乱したバツ！何か文句ある？」

光・蓮 「……ありません。」

やはり女は強し。もつともな意見だった。渋々立ち上がり、光と蓮は料理を運び始めた。

そして気を取り直してみんなで律の作った料理をご馳走になる。

一同 「いったただきまーす！」

もぐもぐとハンバーグを食べ始める。

姫子 「わ!……おいしい!」

梓 「ホント、おいしいです！律先輩にもこんなセンスあったんですね！」

唯 「んん……おいしい！さすが律っちゃん！」

涼 「すっげーうまいっス!!」

俊 「おお……!!」

光 「うまつー!!」

律 「ふふんっ、どんなもんよ?!」

律が自慢げにドヤ顔をしてみせる。ちら見で蓮の方へ視線をずらす律。

蓮 「うん、マズイ!」

ゴンッ!

蓮 「いててて!お約束やってみたかったただけだ!!美味しいよ!!美味しい!!」

律 「まったく……。」

光 (もう付き合った方がイイじゃないのか?この二人……)

そして食事しながら語らいはじめる。そのうちに先ほどまでの空気は無くなっていた。俊も普段のテンションに戻りつつあった。

俊 「それにしても、お前ら女子達の前でみっともねーケンカおっ始めんなよな!」

蓮 「しょーがねーだろ……もぐもぐ……。」

俊のテンションの変動に気づいた梓。一声かけずにはいられなかった。

梓 「俊さん、なんか雰囲気はまた元に戻って来ましたね。」

俊 「そっか？ありがとな。みんなと飯食っていたらなんかまた元気が出てきたみたいだ。梓の言うとおり俺達はよくやったんだと思う。」

梓 「俊さん・・・そうですね、そのいきですよっ！」

ほがらかに笑みを浮かべる梓。小さな食事は辛酸を舐めさせられた勇者達を瞬く間に回復させていった。

食事を一通り済ませると、律は蓮と光に洗い上げをさせながらおかゆを作る。

光 「おかゆ？」

律 「ああ。今、聡が風邪ひいてるんだ。」

蓮 「・・・どうりでグレンラガンが出てこなかったなと思ったらそうだったのか・・・。」

律 「多分、この前の闘いの疲れが出ちゃったんだと思う。あの子もずっと無理してたみたいだったから・・・。」

蓮 「勝汰は？」

律 「この所ずっと買ってもらったスパロボやってるよ。私もやりたいんだけどさ・・・。やっぱ姉としてガマンしてなきゃな・・・。」

蓮 「スパロボねえ・・・そうだ！ラガンはどうしてるんだ？庭か？」

光 「庭？」

蓮 「ああ。グレンラガンの頭のラガンは普段、律っちゃんの家
の庭に住んでるんだ。」

光 「あんなロボットの頭が住んでて近所の人達は何も言わな
いの！？」

律 「あんな化け物が降って来たり、マイトガインやジエイデ
ッカーがあるくらいだからなー。はじめはちょっとだけ騒がれたけ
ど、今は何ともないよ。ラガンは大あくびしながら寝てるんじゃない
い？」

庭では律曰く、ラガンが大あくびをかきながら寝ていた。

光 「へー・・・。」

てきぱきとおかゆを作ると律は聡の部屋にむかった。

数日後。聡は回復し、再び学校へ赴く。登校中、琢磨と當哉が
後ろから肩を叩いてきた。二人ともいつもよりもテンションが高め
だった。

琢磨 「よっ！！聡！！！」

當哉 「おおつす!!!元気になつたか?!聡!!!」

聡 「いつてーな〜・・・病み上がりなんだからよ〜。それに朝っぱらからなんでそんなにテンションが高いんだよ??」

二人はにやつとしながら、その理由を話した。

當哉 「へへへ・・・聞いて驚くな!!!休んでたお前はしらねーかも知れねーケド、今日、転校生が俺達のクラスにやって来るんだよ!!!!しかも噂によると女の子らしいぜ!!!!」

思つても見ない朗報に聡の病み上がりのテンションが吹っ飛ぶ。

聡 「マジか?!!!」

琢磨 「ああ!!!もう、今から超楽しみだぜ!!!!」

聡達が教室へ足を運ぶと、あちこちでその話題が飛び交つていた。

男子A 「チラッと見た奴の話だとなんかスゲー可愛かつたって話だぜ!!!」

男子B 「まじかよ?!超楽しみじゃん!!!」

女子A 「どんな子なのかな〜。みんな仲良くしてあげようよ!」

女子B 「そつだね〜。」

やがてHRが始まり、担任がやってきた。

担任 「えー、では朝のHRを始めます。それじゃ、話はみんな聞いていると思うが、今日から新しくこのクラスに加わる転校生を紹介します。では・・・もういいよ、入ってきて。うん。」

担任の合図と共に転校生の少女が入ってきた。唯くらのシヨートヘアの可愛い美少女だ。男子勢がおおと言わんばかりになる。

転校生 「は、初めまして・・・。」

すると少女はチヨークを手にとって名前を書き始めた。そこには「千石撫子」と表記された。

千石撫子 「千石撫子です。前の学校からお父さんの仕事の都合で転校して来ました。えと・・・その・・・みんなよろしくお願ひします。」

恥ずかしそうに言う撫子という少女この瞬間、聡は言いようのない感覚に見舞われた。いわゆる一目惚れという感覚に陥った。

担任 「それじゃ、千石さんはその席へ座ってください。」

事もあるうか聡の隣に来た。好きな女子の横の席というのは言いようの無い幸運だ。聡は内心信じられない気持ちで一杯だった。

撫子が隣に座ると彼女に見入ってしまう。目を合わせた彼女は、恥ずかしそうに言った。

撫子 「よ、よろしく……。」「

聡 「お、おう……。よろしく）やっべー！！！！なんだこのドキドキ感は???!）！」

聡も顔を真っ赤にして恥ずかしがっていた。

聡 （なに恥ずかしがってたんだよ、俺は！！！！）

昼休み。クラスの女子達が撫子と早速机をくつつけて食事をする。

女子A 「それじゃ、向こうの友達とは急に離れ離れになっちゃったんだ。」

撫子 「うん……。」「

女子B 「かわいそう。じゃあこっちに来る時は寂しかったでしょ?」「

撫子 「そ、そうだね……。ずっと住んでいたところだったから……。」「

女子C 「これからはよろしくね。」

撫子 「うん。ありがとう……。」「

その日の放課後、一応、学級委員でもある琢磨が校内を案内して回る。無論、聡と當哉も同行していた。聡はそわそわしていた。

當哉 「聡、なんかさつきから様子が変だぞ？みよーにおちつきねーっつーか……。」

聡 「そ、そうかよ。てかなんで俺達も校内回ってんだよ？」

當哉 「お前がついていくって言ったじゃねーかよ！」

聡 「え？そーだっけ?!」

聡はとぼけたふりをしてみせた。本心は彼女の事が気かりでならなかったのだ。當哉がそれを見抜き、聡の耳許でささやく。

當哉 （おまえさ……ひよつとして惚れたのか？あの子に？）

聡 （なんでわかるんだよ!!??）

當哉 （わかるぜっつーに。やめとけ、やめとけ!!クラス中の男子勢が狙っている。）

聡 （なんだよそれ……お前もか??）

當哉 （俺は、違うぜ。俺は3年の先輩が好きだ!）

聡 （……。）

そうこうしている内に一通りの案内が終わった。

琢磨 「……これでまあ一通りは案内したかな？またなん

か判らない事があつたら聞いてくれればいいよ。」

撫子 「ありがとう。」

琢磨 「あと、最近じゃこの街の周辺でやたらと巨大生物災害が起こつてるけど、もしもの時はこいつに助けをお願いするといひよー！」

撫子 「え？」

親指で聡を指す琢磨。突然彼女に注目されて焦る聡。

聡 「いいい?!」

撫子 「どういうことなの?」

琢磨 「こいつは、グレンラガンって言うロボットに乗って怪物連中と戦うことが出来るんだよ。もっとも知ってるのは俺達だけだけど！」

撫子 「へえ・・・そうなんだ・・・うっ・・・。」

突然、撫子は体調を崩したかのような変調を見せた。

聡 「え?!大丈夫?!」

撫子 「う、うん・・・平気だよ。チョット疲れてるだけだから。」

そうはいうものの明らかに苦しげにも思える様子だった。冷汗

が滲み出ている。

琢磨 「それじゃ今日の所はもう早く帰ろう。いこうぜ。」

聡はそんな撫子が気がかりになってならなかった。

帰宅後、撫子の事をラガンに話す。どうやらラガンの星にも男女というものはあるらしいということが判った。

ラガン 「そうか、そうか！！その女の子に惚れてしまったわけだ！！青春じゃないか！！」

聡 「ああ。って、ラガンにも恋愛経験あんのかよ？！」

ラガン 「ああ！！結構あるぞ！！俺達の種族にも男女はあるからな！！」

聡 （余り想像したくないっていうか、想像できなーナ・・・）

ラガン 「聡！！漢なら、勇者ならその恋、貫き通せ！！俺も応援するぞ！！！」

そこへ律がハンバーグを持ってきた。

律 「ほーい、あんたの好物のハンバーグ出来たから持ってきたぞー。」

ラガン 『これは、これは、おねーさん！！ごちになります！
！！』

律 「何の話してたんだ？」

聡とラガン 『漢の話しっ！』

聡とラガンがグッドサインを出し合ってニヤつく。

律 「おとこ・・・??それよりも聡、あんたは病み上がりなんだから早く家ん中入んな！」

聡 「ほーい。」

数時間後、すっかり夜も更けた頃、近所の羅顔神社の隣にある廃神社で、撫子が1人で不穏な行動をしていた。白い蛇を何体も殺し、なんだかの儀式をしている。

撫子は、息を切らしながら懐中電灯で分厚い本を照らす。体中に冷汗が出ている状態だった。

撫子 「はあ、はあ・・・この蛇の呪い・・・今夜中になんとかしないと・・・！！！！」

廃神社の壁に蛇を串刺しにして押し付けるとなんだかの呪文のようなものを唱え始めた。呪文を唱え終わると撫子は、独り言でこの街に来た本当の理由を呟いた。

撫子 「私は・・・ほんとは・・・前の学校のクラスの子に呪いをかけられたから、この街に逃げるように転校したんだ・・・うううっ・・・ああー!!」

苦しげな表情を浮かべる撫子。彼女は掛けられた蛇の呪いを解く為の儀式をしていたのだ。次の瞬間だった。「何か」が撫子を締め付け始めた。

ギギギギ・・・!!

撫子 「うあうっ・・・ああああっ・・・はああああ・・・!!!!」

悲痛な悲鳴をあげながら苦しみ始める撫子。「何か」は容赦なくキヤシヤな体を締め付けていく。

呪ったものを執拗なまでに苦しめ、やがては絞め殺す・・・どっとういう経緯でこのような呪いが及んだのかは定かではないが、子供のする行為としては行き過ぎたものだった。

誰もいない境内で悲鳴がこだまする。境内の階段を下った向かいの通りには、近所のコンビニへ行くこうとしていた田井中姉弟が歩いていた。

律 「勝汰の分の夜食も買ってくださいー。」

聡 「ああ・・・ん・・・?!」

律 「んー？どうした？聡。」

聡 「今、神社の方から悲鳴みたいなのが……。」

律 「悲鳴……?」

次の瞬間も悲鳴のようなものが聞こえた。それは律にもわかった。行動派の律は早速向かおうと試みる。

律 「……本当だ!!行ってみようぜ、聡!!」

聡 「おう!!」

田井中姉弟が境内に向かう階段を駆け上がっていく。近づくと、悲鳴の大きさが増していく。

明らかに何かに苦しんでいるような声だった。二人が辿り着くと、撫子の身体から見え隠れする巨大な白い大蛇が暗闇で光りながら立ち昇っていくものを垣間見た。

ドオドオドオドオオオオオオオ!!

律 「なんだ、ありゃああ?!蛇?!!!」

聡 「倒れている子は一体……うおっ!!」

ゴッ……!!

波動的な風圧が、律と聡を押しとめる。この瞬間に見え隠れする大蛇は、撫子から完全に剥離し、境内の木をなぎ倒しまくりながら暴れる。これに巻き込まれた撫子が吹っ飛ばされて宙を舞う。

聡 「やべえ!!!!」

聡は走って撫子が落下する前に受け止める。この時聡は、隙間から照らされる月明かりによって初めて撫子であることに気づいた。

聡 「撫子ちゃん?!?!」

この瞬間、聡は言いようのない気持ちに支配された。気を失っている恋した子を抱きかかえながら聡は、大蛇に怒りの眼光を向ける。

聡 「わけわかんねー・・・なんで、今日、好きになっちまった子がこんなめに遭ってんだ!?!?」

夜の街中の山に現れた大蛇は、完全に実体化していた。とぐろを巻きながら、聡の方へと見下ろすように鎌首を持ち上げる。

蛇怪 「シャアアアアアアア・・・!!!!」

聡 「やるしかねー・・・そして、絶対えに許さねえ・・・!!!!」

怒りのシグナルが聡に灯った。

つづく

次回予告

呪いが具現化した蛇怪は、撫子に牙をむく。聡が彼女を間一髪で助けると、律に撫子を託して闘いに身を投じる。闘いの中へ再び身を投じる聡に憂いを懐きながらも律は見守った。グレンラガンに乗って月下の中、聡は撫子を守りたい想いと、蛇怪に対する怒りを賭して撫子を苦しめた呪いの元凶と激突する。

次回、新生太陽の勇者 ファイバード・サーガ 第57話 「月下の激突」

その呪い、砕き散らせ！！グレンラガン！！！！

第56話 「撫子・スネイク・聡」(後書き)

感想・意見お待ちします。

第57話 「月下の激突」(前書き)

年が明けました。今年もよろしくお願いします。
それでは本編をどうぞ・・・。

ラガン 「おっしゃあああああ！！！！」

地下を突き破ってラガンが登場した。廃神社の斜面に着地するとラガンは事情を聞く。

ラガン 「一体なんだアレは?!?!」

聡 「へびって言う動物の化け物だ！！！！しかも、妖怪っぽい！！！！」

ラガン 「ヨウカイ???なんだそれは??」

聡 「ザックリ言えばエネルギー生命体的一种みたいなもんだ！！！！てか説明してる時間ないぜ、ラガン！！！！」

ラガン 「そうだな、御託はいらねえなっつ！！！！出るおおおおお！！！！グレエエエエエ！！！！」

額からエネルギーを撃ち放って、グレンを召喚する。グレンの口が開き、聡が中へと飛び込む。

聡 「でやあああっつ！！！！」

コックピットの空間へと入る聡。続けてラガンが飛び立ち、下半身をドリルモードにしてグレンの頭上に突き刺さって合体する。

ラガン 「だりゃあああ！！！！」

合体すると、強靱な腕、脚が飛び出して巨大化する。ラガンの

頭部に三日月状の飾りが形成される。

ラガン 『フォーム・アアアアップツツ！！！』

コックピット内では全体にわたって外の映像が映し出される。
夜だけあって、夜景が広がる。

そして、ブレイブ・トレースシステムが作動する。聡とグレン
ラガンの動きが同調する。

聡 「グレン、ブレイブ・トレース！！！」

気迫を撃ち飛ばしながらグレンラガンが大地に立つ。

グレンラガン 『ドリル度胸合体、グレンラガンツツ！！！』

グレンラガンは神社のある山からジャンプし、蛇怪の背後に着
地した。

グレンラガン 『とああああっ！！！』

聡 「でりゃああああ！！！！」

ズガアアアアンツツツ！！！！

後方から響き渡る轟音に、蛇怪はすぐに振り向いた。牙を見せ
つけながら開口し、威嚇する。

蛇怪 「シャアアアアアア！！！！」

グレンラガンは蛇怪に向かって指を刺し、聡が怒りを吐き捨てる。

聡 「ぶつちゃけ何がなんだかわかんねーケド、お前が撫子ちゃんを苦しめていたのは確かだ!!!それがどういうコトかっつのを教えてやるっつ!!!俺の恋路に割って入ったコトを後悔させてやるぜ、ヘビ野朗っつ!!!俺が撫子ちゃんを守るッッ!!!」

グレンラガン 「そうだっ!!!その勢いと度胸だ!!!聡いっつ!!!好きな子を守れえ!!!」

街中に聡とグレンラガンの声が鳴り響く。最後の余分な一言、二言を聞いた律が、撫子を抱えながら弟の恥じっぷりに突っ込む。

律 「……一言、二言余分だっつーの……恥ずかしいったらありやしない……」

律の腕の中で気を失っている撫子。月明かりに照らされる彼女を見つめながら疑問符を交えて律が呟いた。

律 「……この子が聡の惚れた子か……あいつにも春が来たんだな……それにしても、なんでこの子からあんなのが……??!」

再びグレンラガンに視線を向ける律。月下の中、ファイティングポーズで構えるグレンラガン。次の瞬間、二つの巨体が激突する。

蛇怪が、先制攻撃に出る。牙をむき出してグレンラガンに襲い掛かる。だが、グレンラガンはかわす事無く、右の拳を蛇怪の頭部に打ち込む。

律 「聴い!!!」

蛇怪は嘔みついたままグレンラガンを持ち上げる。

グレンラガン 『ぐおおお・・・!!!』

そして後方に体をそらし、一気に前に起き上がってグレンラガンを離す。地面に叩きつけられる。

ドオズガガドオオオオツツ!!!

聡 「がああああ!!!」

グレンラガン 『グホオオオツ・・・!!!』

蛇怪は開口しながら、高速で連続に嘔みつき続ける。

ガブシッ、ガシユン、ガガシユン、ガシユンツッ!! ガシユンツッ!!

グレンラガン 『ぐツ・・・こいつツ・・・!!!』

聡 「があ!!!」

攻撃され続けるグレンラガン。撫子を膝枕したまま律は届く事のない叫びを上げる。

律 「もう、やめてくれ!!!聴が、聴が苦しんでるじゃないかっつ!!!やめてくれっ!!!」

次の瞬間、グレンラガンの背後を捉え、体ごと牙をむき出して飛び掛る。

シウドオオオオン・・・・・・・・ガギャアアツツ！！！！

グレンラガン 『くそっ・・・・・・・・！！！！』

両腕をクロスさせてガードするグレンラガン。攻撃は続く。

この光景を悲痛な想いで見守り続ける律の腕の中で撫子が意識を取り戻した。

撫子 「ん・・・・・・・・。」

ゆっくりと眼を開ける撫子。彼女の変化に律は直ぐに気づいた。

律 「意識が戻った・・・・・・・・！！」

撫子 「あ・・・・・・・・あの・・・・・・・・誰ですか??」

律 「あ？ああ、聡の姉だ！！律ってんだ、よろしくな！！」

撫子 「聡君の・・・・・・・・?!一体どうして・・・・・・・・?!」

律 「手身近に言うとな、あのへびの化けもんに襲われていたあなたを聡のやつが助けたんだ。そこで、今聡がそいつと戦ってくれてるよ。」

グレンラガンの方へと向く撫子。蛇怪の攻撃は続いている。

撫子 「あれが……聡君?!」

律 「ああ……アレに乗って戦ってる。もっとも姉の私は気が気じゃないけどな!」

撫子の脳裏に、琢磨達が言っていた事が浮かぶ。

撫子 「あれが……グレンラガン……。」

やがて蛇怪はグレンラガンにとぐるを巻き、強烈なまでに締め付け始めた。

ギギギギギギギギ……グググググウウウ……

聡 「ぐおおおおつ……!」

グレンラガン 『ぐがあああ……!』

律 「ああ……!聡!」

撫子 「聡君!」

襲い掛かる苦痛。だが、ギリギリと締め付ければ締め付ける程に聡の怒りは震え立っていく。

聡 「こんな……苦しみを……撫子ちゃんに……与えていたのか……ちくしょうが……絶対えに……ゆる……さね……!」

た。

聡 「おらあああああ!!!」

両手で驚掴み、地面に蛇怪の身体を叩きつける。すると、蛇怪も怒りのボルテージが上がったのか赤紫のオーラを発しながら空中に浮かぶ。禍々しい眼光をグレンラガンに睨みつける。だが、聡は動じる事無くアーム・ドリルを右手に発動させる。

BGM 「燃え上がれ闘志 忌まわしき宿命を越えて」

聡 「やられる前にやってやんぜツツ!!!アーム・ドリルツツ!!!」

グレンラガン 『はあああああつっ!!!』

大型のドリルが形成され、高速回転を始める。だがその時、蛇怪の口から紫の火炎放射が放たれる。

ヴィギユアアアアアアアアツツ!!!!

聡 「ぐおっ……ヤロウツ!!!」

グレンラガン 『フンツ!!!』

前にアーム・ドリルを突き出すグレンラガン。蛇怪の火炎を回転するドリルが吸い込んでいく。ドリルに炎が纏われる。そのままドリルをかざしながら必殺技を敢行する。

!!

この光景を眼にして、律はホツと胸を撫で下ろし、撫子は口を両手で押さえたまま、色々な意味で信じられないという気持ちで一杯だった。

律 「まったく……はらはらさせてくれるよ……。」

撫子 「……すじい!!!!」

律は撫子に顔を向け、自慢気に言ってみせた。無論内心は聡を心配する気持ちで一杯だった。

律 「どうだ？私の自慢の弟は？」

撫子 「え?!」

律 「あ、えーと……そのだな……。」

突然の律の言葉に戸惑う撫子。律も勢いを余って言ってしまったことにあせった。だが、その後に撫子は恥かし気にゆっくりと喋り出した。

撫子 「……すごかったです……それに……こんな私のことを守ってくれて、嬉かったです……。」

律 「そっか……それを聞いたらあいつもきつと喜ぶな。」

撫子 「……。」

二人は夜風に吹かれながら、燃え上がる炎の前に立つグレンラガンの勇士を見続けた。

戦闘に一応の一段落が着き、聡がラガンと共に駆け出して律と撫子の待つ廃神社へと走る。

駆けつけると、既に二人は既に廃神社の入口付近に立っていた。律は腕組みし、撫子は両手を胸元で重ねて待っていた。

聡 「・・・意識が戻ったんだな!!」

ラガン 『ああ!! そのようだな!!!!』

聡とラガンは二人の許まで来て止まる。

聡 「撫子ちゃん!! 意識が戻ってよかった!!!!」

撫子 「聡君・・・見てたよ、戦ってくれているところ・・・」

聡 「そ、そっか・・・。」

撫子 「本当にありがとう・・・!! もし、聡君がいなかったら今頃私は・・・!!」

聡 「撫子ちゃん・・・。」

その時、ラガンが余計な口を挟んだ。

ラガン 『さあ、抱きしめろ!! 聡!!!!』

聡 「いいいい??！」

撫子 「ふえっ??？」

顔を真つ赤にする二人。律が石をぶつけてラガンにツツこんだ。

律 「あほつたれいつっ!!！」

ゴン!

ラガン 『あたっ!!!!』

撫子は、生まれて初めて見るラガンに不思議そうな視線を送る。

聡 「つたく、何言い出すんだよ?!?!いきなりそんな展開になるわけないだろ!!!!」

ラガン 『男は、いや、漢はだまって恋愛だ!!!!恋を貫けええええ聡いいいい!!!!』

聡 「わー!!!!わー!!!!わー!!!!」

撫子 「ええと・・・その・・・えーと・・・。」

顔を赤くして困り果ててしまう撫子。とりあえず律がこの場を収めた。

律 「まったく・・・聡!ラガン!!もうそろそろ警察とかが駆けつける頃だ。めんどくさい事になる前にこの場を離れるぞ。」

それに、撫子ちゃんを送ってってあげなきゃな!！」

聡&ラガン 『はい……。』

律 「それじゃいこうか？撫子ちゃん!！」

撫子 「は、はい!！」

律が撫子を連れて歩き始めると、聡は再びラガンとガーガー言い合いながら歩き出す。

聡 「言ってる事がめちゃくちゃだぜえええ!!ラガンのバカヤロウ!!!!!」

ラガン 『漢はだまって本音でアツタツクだつーの!!!!』

撫子はちらつと聡に振り返る。それは、彼を意識した視線だった。ラガンがああ言ってしまったては無理は無いが。

撫子 (聡君……。)

千石撫子・転校初日。この街に来た事で彼女の運命は大きく影響を受けようとしていた。

つづく

次回予告

昏下がりの桜ヶ丘で、異星人が放った新たなオートマトンタイ

プのデストリアンと交戦するダグオンチーム。一方の町田市においても、ファイバードが量産化されたと思われるD 03と交戦する。

戦闘を終えた勇士朗達は、公園でたむろいながら文化祭に向けて忙しい軽音部に協力できるとして作詞提供を発案する。そして放課後ティータムとの日々がまた進展するのだった。

次回、新生太陽の勇者 ファイバード・サーガ 第58話 「進展する放課後」

戦いの後に柔らかな時間が流れる・・・。

第57話 「月下の激突」(後書き)

感想・意見お待ちします。

第58話 「進展する放課後」

昏下がりの午後。桜ヶ丘の一角で戦闘が巻き起こる。異星人が新たに送り込んだオートマトンタイプのデストリアン複数体とダグオンチームが戦闘を繰り返していた。

人間の身体からツルが無数に生えたようなデストリアンだ。ツルに捕らわれ、体液を吸われた犠牲者の遺体が幾つかあった。

D 28 「……!!!」

鳴き声を一切発生させずに、一体のD 28がツルを伸ばしてターボ・シユンに攻撃をかける。真っ直ぐにターボ・シユンの頭を狙う。

ビュシユルルルウウウツツ!!!

ターボ・シユン 「中るかよ!!!」

ドオズガアアツツ!!!

頭をよけながらツルをかわし、拳をD 28の溝打ちに打ち込む。そして前屈みになったD 28に向かって足首のホイールを高速回転させながら蹴り技で吹き飛ばす。

ターボ・シュン 「キック・ブレイカーッ！！！」

ギユイイイイ・・・ドオズガアアアアンツッ！！！！

上半身と下半身が分断しながら吹っ飛ぶ。その向こうでアーマ
ー・レンが射撃しながら下校途中の中学生達を死守する。

ディギン、ディギン、ディギンッ！！ ディギン、ディギ
ン、ディディディギンツッ！！！！

ドオドオドオドオオオオツッ！！！！

レール弾でD 28の身体が粉碎されていく。その隙に後方を
向いてアーマー・レンは中学生達に叫んだ。

アーマー・レン 「俺が相手している間に逃げろ！！早くっつ
！！！！」

うなずきながら駆け出す中学生達。逃げ切るのを確認したアー
マー・レンは再び正面に向いて、両腰のレールシューターをマシー
ナリーモードにする。

アーマー・レン 「マシーナリーシューターッ！！！！」

ディディディディリギギギギギイイイイイ・・・！！！！！！

ディダダダグアツ、ズギヤドドドドドガアアツッ！！！！
ズディドオゴガドオオオツッ！！！！

蜂の巣にされ、バラバラに分解されるD 28。一方、ウィン

グ・リヨウは、フリーズンブレードを駆使して連続で敵を斬り刻む。

ウイング・リヨウ 「はああああっっ!!!」

ザダシュウウウンツッ!! ザヴァンツッ!! スザギヤ
アアンツッ!! スデイガッ!!

ファイヤー・コウは、D 28の集合体と交戦していた。人の形は止めておらず、ツルの塊から多数の腕と脚が生えたようので、不気味さをより高めていた。

ツルがドシュドシュと伸び、ファイヤー・コウに襲い掛かる。

ファイヤー・コウ 「うおおお?!?!なんなんだよコイツラ!!!いきなり合体しやがって!!!」

飛び上がったのは着地してかわしていく。その最中にファイヤー・マグナムを撃ち放つ。

ファイヤー・コウ 「ファイヤー・マグナムツッ!!!」

ギウドオゴオオオオオオオオオオツツ!!!

ズドオガアアアアアアアアンツッ!!!

着弾部が爆発し、D 28はぐらつく。だが次の瞬間、攻撃をかわすタイミングをミスったファイヤー・コウは、触手に捕らわれてしまう。

ギョルルルガシイイツッ!!!

ファイヤー・コウ 「しまった……ぐおおおおあああ！
！」

ギギギギイイ……！！！！

強いパワーで締め付けられるファイヤー・コウ。だが、ダグテクターのおかげで体液を吸収される事はないようだ。更に締め付けられていくファイヤー・コウ。

ファイヤー・コウ 「ぐおおおお……コンチクショー……
！！！！」

その時、駆逐し終えた三人が、ファイヤー・コウの所へと集結し、各自で援護攻撃を加える。

ターボ・シユン 「ブレイク・ホイールツツ！！！！」

シユオツ………ギユイイイイイイ………ズガ
ガガガガドオオオオツ！！！！

ニードルタイヤを投げつけるターボ・シユン。打撃部がえぐれていく。

アーマー・レン 「ホーミングミサイルランチャーツツ！！！！」

ドオドオドオドオドオドオシユウウウウツツ！！！！

ドオドオドドドドドオドオドガギヤズズズズウウウウ

ウウウンツツ！！！！

中距離のマイナスエネルギーを感知するミサイルが両肩から撃ち出され、D 28 集合体に直撃していく。

ウイング・リヨウ 「ウイングスラッシュャーッッ!!!」

ギユオオンツ・・・・ズダシュバアアアアアアアアンツッ!!!

高速で飛ぶウイング・リヨウ。右肩のクリスタルウイングでファイヤー・コウを掴んでいた腕をつけ根から切断した。斬りおとされた腕から離れるとその状態から必殺技をブチかます。

ファイヤー・コウ 「・・・おっし!! ナイスだ涼!!! ライトニング・フェニックスッ!!!」

ギユグオオオオオオオオオオ・・・ズグオドオガズズドオオオオオオオオオ!!!

フェニックスと化したファイヤー・コウが電光石火の如くD 28を貫く。焼き碎かれて爆発するD 28。

爆発をバツクに着地するファイヤー・コウ。それぞれが向き合
い、グッドサインを出す。時を同じくしてファイバードは、町田市に投下された4体のD 03と交戦していた。1体にファイバードのフレイムソードが揮われ、横一線に頭部が斬り飛ばされる。

ファイバード 『でやああああああっ!!!』

ズガシュバシャアアアアアアンツッ!!!

ズギユウヴォアアアアアアンツッ!!!

斬り飛ばされると同時に小規模爆発を起こして燃え上がる。

D 03 「ボオオオオオツッ!!!」

崩れ落ちたD 03の向こうから、別の個体たちが鋭利な鎌を振りかざしてファイバードに猛進してくる。ファイバードも自ら突っ込んで行く。

ファイバードは振り下ろされた鎌をフレイムソードで弾き返し、更にフレイムソードの刀身で面前のD 03を叩き斬った。

ファイバード 『はあっつ……!!!!』

ギヤイイイイインツ……ズダギヤシャアアアアアアンツッ!!!

ヴァギユゴオオオオオオツ……!!!!

切断面が崩れ落ちて燃え上がる。もう2体がジャンプして上から叩き斬ろうとする。これを直ぐにスライドしてかわし、道路のコンクリートを破壊させる。

ズガギヤアアアアアアンツッ!!!

鎌が地面に深く突き刺さって抜けられない状態に陥る。この期を逃す事無く、ファイバードはフレイムソードをチャージアップさせた。

律「っちゃん。」

勇士朗「しばらくここで暇潰したら桜高いところぜ。俺達も歌詞作りに協力しようじゃん！」

涼「いいですね！それ！」

その頃、漣達三年生はロミオとジュリエットの劇の練習をしていた。台詞読みの練習だ。絢が脚本を書く係りとなっている為に、監督さながらに漣と律にダメだしする。

漣「おお・・・ど、どうしたんだい・・・じゅりえっとっ！」

絢「漣ちゃん、カット！恥ずかしがっちゃダメ！」

漣「ううっ・・・。」

律「あぁ〜ロミオ、あなたにどうしてもあいたくて・・・。」

「

絢「はい！カット！律っちゃん、棒読みすぎ！」

律「な〜ムギ、ひよっとしてただカットって言いたいだけじゃないだろなー？」

絢「・・・えへ〜、ばれちゃった？」

律「おまえなー・・・。」

だが実際に普段からボーイツシユな律には、ジユリエット役は
敵しいものがあつた。漣も、以前彼氏である勇士朗に励まされたが、
未だに持ち前の恥ずかしさが抜けていなかつた。

唯も唯で木の役に徹していた。ずっと固まつたまま静止する練
習だ。実は簡単なようで難しい。装飾を作りながら和と姫子が見て
いる。

和 「唯、簡単なものほど実は難しいのよ？木の役だからって
気を抜いちゃダメよ？」

唯 「うん！わかつてる！」

姫子 「でもかれこれ30分はずつとこのままよね？なんかス
ゴイよ、唯！」

和 「唯は、一度集中すればスゴイコなのよ。」

姫子 「へ〜。。。。」

部活に切り替えていつもの部室でティータイムをする漣達。律
が疲れきつた顔でダージリンをすすする。

律 「はあく疲れた。。。ずず。。。。」

漣 「ほんと。。。ところで劇とは別に新曲の歌詞作りは進

んでるのか？」

律 「発案者の私は……何もつくってましえーん」

漣 「おい、発案者！！梓はどうなんだ？」

梓 「私は書いている最中なんですけど、やっぱり難しいです。そこをいくと漣先輩の歌詞作りのセンスはすごいと思いますよ。」

漣 「そ、そうか？私は歌詞を作るのは好きだけど、センスが
いいとかは思えないな。」

律 「確かに……。漣の書いた歌詞、読んだだけだと歯が浮く
に浮いてむずがゆくなるからな。」

ゴン！

律 「いたいなーっ！！勇士朗に言っちゃっぞー！！！」

漣 「な？！なんで勇士朗が出て来るんだよ！！！」

律 「漣はすぐ暴力する」なのよっつてな！」

漣 「律うー！！！」

梓 （確かに、歌詞にメルヘンなところあるかもしれないけど・
。。。）

そのとき、梓はティーカップやら壁やら部室の至る所に可愛気

なシールが張られていることに気づいた。

梓 「なんか、色んな所に妙なシールが張られているんですけど……。」

唯 「かわいいでしょ？今、マイブームなんだあ。」

梓 「……みつともありませんから剥がしてくださいよ。」

唯 「ふえええ〜あずにゃんのいけずーっ。」

紬がケーキを持ってくる。今日は可愛い苺の乗ったケーキだった。

紬 「みんな、今日のケーキよ。」

人数分のケーキが配られ、机の上に置かれていく。いつものようにはしゃぐ唯。

唯 「やったあ！ケーキッ、ケーキッ！」

嬉しそうにケーキを口にすると満面の笑みを浮かべる。

唯 「おいし〜……やっぱりムギちゃんのケーキは最高だよ！」

紬 「そう？よかった〜……あ、そうだ！ちょっと待ってて。」

紬は思い出したかのようにカバンが置いてある椅子の方へと向

かう。

戻ってきた紬は、歌詞と曲が書かれたフリーペーパーを手にしていた。

紬 「私、新しい曲を作ったの！みんなで見てみて！」

早速、ティータイムをしながら歌詞を拝見する一同。

梓 「いい歌詞です！この曲を入れましょうよ！」

漣 「そうだな！早速、この曲だけでも練習しようよ！な？！」

律 「よしッ、そんじゃあムギの作ったこの曲採用して練習始めるかー！！」

紬 「よかったあ！私この曲作るのにがんばったんだあ〜！」

練習を始める放課後ティータイムのメンバー。音楽室に五つの楽器のメロディーが鳴り始める。

一方、聡は撫子を連れて桜ヶ丘を琢磨達と周っていた。

聡 「それでー……ここが商店街！これで俺達の行動範囲内の桜ヶ丘は案内できたかな！」

撫子 「街を案内してくれてありがとう！聡君！」

聡 「え?!あ、いや……。」

蛇怪の呪いから解き放たれて以降、撫子は別人のように明るい少女になっていた。全てはヘビの呪いによるものが影響していたのだろう。

笑顔の撫子に感謝され、デレッとなる聡。横から當哉がどすつとつつこみを入れる。

どすつ!

聡 「いつて!!なんだよ、當哉!!」

當哉 (急に仲良くなり始めやがって!!一体何があったんだあ!?)

聡の耳元に小声でひがみ度MAXなことを言ってくる當哉。

聡 (なにひがんでんだ?!別に何もねーよ!!)

當哉 (もったいぶるなあ!!)

聡 (だああああ!!うっさいなっつ!!)

撫子 「……??」

二人の妙なやり取りに「?」となる撫子。聡は、幾らツレとはいえこればかりは言えなかった。

数日前

聡 「呪い?!?!」

撫子 「うん・・・前の学校のクラスのコにかけられたの・・・」

聡 「な、なんでそんな・・・。」

撫子 「私を好きだった男の子がいたんだけど、そのコが友達の好きな男の子だったから私は告白されても断ったんだ・・・だけど、その男の子がフラレタ腹いせにへビの呪いを・・・!!!!」

聡 「なんだそれ?!?!腹いせだなんて・・・!!!!」

撫子 「更に、その男の子は、私に根も葉もないコトを言ってるクラスのコ達にイジメを促して・・・それで居場所を奪われた私は、無理言っって街を離れることにしたの・・・。」

聡 「性根からしてイカレテルぜ!!!!そいつ、絶対に許せないっつ!!!!!!」

撫子 「聡君・・・この事はクラスのみんなには内緒にして欲しいの・・・。」

聡 「ああ!!!!わかったっつ!!!!!!」

その為に聡は本当の事を言えなかった。あえて聡は口に出して事を收拾させようと試みた。

聡 「ああ、もう!こんなコトでひがむなんてらしくないぜ、

當哉！それに、お前はニコ上の先輩が好きなんだろう？！」

當哉 「あああ！！！それ、言うな！！！！」

琢磨 「はぁ・・・みつともないぜ、當哉！」

當哉 「すっかりワルモンじゃんっ！！俺！！！」

撫子 「くすくすっ・・・なんか二人とも面白いなあっ。」

聡&當哉 「え？！えへへへへへ。」

勇士朗達は、桜高の入校許可証を取って半ばサプライズ的に軽音部の部室に向かっていた。無論、通常では男子高校生がいるはずがない為、通りすぎる女子たちの視線があちこちから刺さる。

光 「今まで思いつかなかったけど、こういう方法があったんだな〜！」

蓮 「許可とりや入校できたんだな。う・・・にしても・・・視線がイテー・・・。」

俊 「ま、しょうがねーな。俺達男だからな。」

涼 「そうつすねー・・・けど、先輩達の去年の行動あって滞り無く入れさせてもらえたんすからね！すごいっス！他の女子高だったら入れさせてもらえないっスよ。」

勇士朗 「そうだな。あれからもうじき1年経つんだな……」

勇士朗は、初めてファイバードになって闘った時のことを思い起こす。デストリアンが憎い思いと遷を守りたい、桜高の生徒を守りたい想いでに闘ったあの日を。

俊 「あの時に俺達もダグオンになっていたら、もっと勇士朗のサポートや、桜高の生徒達を守ることが出来たんだろうな……思い返すともどかしいな。」

蓮 「確かになあ……例えると、スーパーサイヤ人4のゴジータならブロリー楽勝だったのになあって思うみたいな！」

俊 「それ、女子の前で言っても解らんとと思うぞ……。」

一方、一通りの練習をし終えた軽音部のメンバー。一息つける為に、紬がお茶を淹れに行く。

ジャツジャツジャツジャアアアアン……

律 「ふうー……これで一通りの練習は済んだな。やりたらないところとかはまた後で練習しよう！連続でやっても集中力切れちゃうからな！ムギ、お茶あー！」

唯 「やったあ！お茶、おつ茶あー！」

紬 「そうね！ここで一息つけましょ！それじゃあ、お茶淹れてくるわねー！」

にこやかにお茶を淹れにいく紬。漣は梓にそれでもいいか聞く。梓はお茶よりも練習派である為だ。

漣 「梓はどうする？どうしても練習続けたいなら私はつきあ
うよ。」

梓 「え？じゃあ、お願いします！まだ納得いかないところがあ
って、キリが悪いんで……。」

漣 「そっか！じゃあ、私達は続けるか！」

二人は練習を続け、律達はティータイムに浸る。

律 「梓はがんばりやだなあ……ずず……。」

紬 「そうねえ……二人ともお茶は後で入れるっ？」

漣 「そうだな！私達の方は後でいいよ。」

紬 「それじゃ、後で淹れるわねえ。さてと、お菓子、お菓子
！」

紬がお菓子の用意をした時、部室の扉が開き、勇士朗達が入っ
てきた。当然一同は驚く。

蓮 「おいしいいっす！」

光 「桜工ダグオン部惨状！！いや、参上！！！」

俊 「おまえな……。」

女子達 「ええええ?!?!」

事情を聞かされた女子一同。急な来客に漣達も結局はティータイムを始める。

漣 「ずず……そっか、それでわざわざ来てくれたんだ!」

勇士朗 「うん!練習と劇とじゃ、歌詞作りが大変だと思っ
ね。歌詞作りなら俺達にも協力できそうだったからさ。」

梓 「ありがとうございます!なんか、ホント悪いですね……。」

俊 「なーに、いいってことよ!」

紬は予備のティーカップを出して男子たちの分を淹れ、人数分を配る。

紬 「お茶淹れたからよかつたらどうぞ。お菓子もあるわよ!」

光 「やつほー!!軽音部のお茶とお菓子!」

涼 「いただきます!」

蓮 「復活祭以来だぜ!!!いただきます……ずずず……あちゃあああ!!!」

急に叫び出す蓮。熱かったようだ。律が呆れたように突っ込む。

律 「おいおい、ちつとは落ち着いて飲めって……。」

紬 「ごめんなさい！熱かった?！」

蓮 「いーって！いーって！大丈夫ッ！」

漣 「はははは……勇士朗、それじゃあ、早速歌詞書いてみる?フリーペーパーなら私が持つてるからさ……。」

勇士朗 「うん、さんきゅ！」

フリーペーパーを漣に渡され思いついた歌詞を書き始める。だが、いざやってみると思い通りに進まなかった。とりあえず書いてみた歌詞を音読してみせる。

光 「恥ずかしいな……えと……君ってかわいい。かわい
いからいつも癒される。その髪、その瞳、その声……好きだよ
……唯ちゃん!！」

俊 「だああああ!!お前、彼女の名前を歌詞に出すなよ!
!!始めはいい感じだったのによ。」

唯 「そうだよ。恥ずかしいよ光君ッ!学園祭で歌う曲な
んだから!！」

光 「うう……ゴメン、唯ちゃん……くすん。」

唯のとなりにしゅんとなつてちょこんと座る光。続いて蓮が歌詞を音読する。

蓮 「この想い。熱く、激しく、燃え盛る……。俺はお前の為に戦う。守りたいから。それから力チューシャを取ってみせてくれ……。俺はそんなお前の姿を見たい。」

律 (え?!何?!私に言ってるの?!なんか「冬の日」とかぶるな……。)

紬 「ええ?!ひよつとして蓮君……!!」

蓮の歌詞が余りにも律を意識した歌詞になっていた。紬も瞳を輝かせて期待する。だが、蓮は誤魔化す為か突拍子もない歌詞をぶっこんできた。

蓮 「その姿を見りゃ百人力!!いくぜ、爆熱・ゴットフィンガーッッ!!!」

男子勢と律はずっこけ、女子勢は目が点、もしくは「?」になった。早速俊が突っ込む。

俊 「なんでそこでGガンダムが出てくるんだッ?!」

蓮 「いやあ……。ま、のりで……。」

結局の所上手くはかどらなかったが、勇士朗達は放課後ティールタイム演奏を聞かせてもらえることとなった。「ふわふわ時間」「ふでペン」「カーレーのちライス」「ぴゅあぴゅあはーと」「ハニースウィート・ティータイム」「五月雨20ラブ」「Don、t

say" lazy"」等彼女たちの今まで作った楽曲たちが奏でられた。

勇士朗達は彼女達のメロディーを堪能しきった。拍手する勇士朗達。

澪達も今までの練習の中で一番いい感じに演奏できていた気がした。

澪（なんか、今までの練習で一番いい感じに演奏できた感じがする・・・勇士郎がきてくれたおかげかな。）

勇士朗達にとって彼女達の音楽がプラスパワーになるのと同様、澪達にとっても勇士朗達の存在は大きいものとなっていた。

学園祭に向けて、勇士朗達も放課後ティータイムに違った形で参加する日々が始まった。

つづく

次回予告

勇士朗達は、放課後ティータイムと歌詞作りの時間を送る。語らいながら彼女たちの曲を聴きながら柔らかな時間が流れていく。その日々の最中、その時間を破壊するかのように桜高の音楽室に異星人が侵入する。同時に運動場と街にデストリアンが現れた。応戦する勇士朗達。運動場に現れたデストリアンにダグオンチームが挑むものの、苦戦を余儀なくされる。そんな中、光は連絡をとったエクスカイザーから隠された力を知らされるのだった。

次回、新生太陽の勇者 ファイバード・サーガ 第59話
「

シャイニング・ダグオン」

これがダグオンチームの真価か・・・。

第58話 「進展する放課後」(後書き)

感想・意見お待ちします。

第59話 「シャイニング・ダグオン」(前書き)

ここから登場するシャイニング・ダグオンは、OVA版のファイナルダグオンをモチーフに作ったオリジナルダグオンです。それでは本編をどうぞ。

第59話 「シャイニング・ダグオン」

勇士朗達は、桜高に入校して以降、ちよくちよく顔を出すようになった。最もデストリアンの事件で生徒の避難誘導に貢献した顔が効いていると言う事もあって可能なことだった。

勇士朗達は、歌詞を書くことに専念する。

光 「難しい……。」

蓮 「べへらあ……。」

俊 「むむむ……。」

涼 「わかんない……。」

眉間にしわを寄せて考え込む4人。無論、勇士朗も悩んでいた。隣から漣が顔を覗かせる。

漣 「どんな感じ？」

勇士朗 「うーん……思ったより難しいよ。思いっころにも思いつかない……。」

漣 「そっか……じゃあ、チヨット待ってて。」

漣はカバンからフリーペーパーを取り出し、自分が書いた歌詞を勇士朗に手渡した。

勇士朗 「え？もう歌詞できてるじゃん！」

漣 「ああ、それはボツにされちゃったやつなんだけど、参考までにしてくれればいいかなって……。」

勇士朗は歌詞に目を通してみる。そこにはとつてもメルヘンなタイトルと歌詞が書かれていた。

勇士朗 「ええと……ペンギンのダンスダンスダンス！クルクル回るペンギンのように愛らしい……。」

読んでいるだけで歯が浮いてきそうな歌詞が連なる。いくら好きな彼女が作った歌詞とはいえ、勇士朗はムズかゆくなってきた。さらに他の歌詞を見てみる。

勇士朗 「甘いにおいのする森で小鳥さんとおしゃべり……ぐおっ。」

漣 「……勇士朗もやっぱりその歌詞ダメ……か……。」

勇士朗は心底のむずがゆさが口に出してしまった。しゅんとなつてしまう漣。しまったと思った。

勇士朗 「え?! あ、いや、その……可愛い歌詞だと思うけど……。」

テンパる勇士朗に律が横から助言する。

律 「はつきり言っただけやんなー、勇士朗！まあ、漣がそういう動物シリーズの歌詞に走ったときは、大概スランプに陥っているときなんだ。」

勇士朗 「スランプ……。」

漣 「うう……そうなんだ……。」

軽く涙を流す漣。そんな表情の漣も可愛いと勇士朗は思った。

勇士朗 「そっか……でも、誰だってスランプするときはあるさ。俺だって、光達だって。それに今まで漣は数多くの歌詞を手がけてきたじゃん。すぐに抜け出せるさ。」

漣 「ふえ?!そ、そっかなあ……。」

勇士朗が励ますと、とたんに漣は恥ずかしがるように喜ぶ。

律 「喜んでる、喜んでる。」

漣 「う、うるさいな!。」

光 「さすが彼氏だなあ……唯ちゃんは、どんな歌詞作ってた?。」

唯 「見てみる?ごはんはおかずって曲なんだけど……。」

光 「どれどれー……おおおうー！唯ちゃんらしくて独創的だぜー！」

唯 「いやあ〜それほどでも〜……。」

光 「ご褒美にみかんだ、みかん〜。」

みかんを2個もって、唯のほっぺたに押し当てる光。みかんでぐりぐりする。

唯 「ふもももも〜……。」

このやり取りに俊と梓が突っ込みを入れる。

俊 「ご褒美ってなんだよ？！てか、いちやつく為に來てるんじゃないーだろ？歌詞書け、歌詞！！」

梓 「そうですね！二人とも！唯先輩、練習の続きしますよ！」

光&唯 「ふあ〜い……。」

教室に鳴り響く「ぴゅあぴゅあはーと」。それを聞きながら勇士朗達は歌詞作りにはげむ。

勇士朗はシャーペンを置いて歌う漣に振り返る。そしてそのまま見惚れてしまった。漣が歌詞を書きながら呟く。

漣 「放課後ティータイムってさ……こうやって改めて聞くとスゲーって思うな。」

俊 「ああ、個性豊かな彼女達が一度音楽を奏できれば一つにまとまる・・・彼女達同士だからこそ可能なことなんだと俺は思うぜ。」

涼 「そーっすよねー・・・それにみんな可愛いし。」

蓮 「そこはカンケー無いだろうがっ!!！」

涼 「ひゃい!!でも・・・そんな彼女達をもっと見習わないといけないっすね・・・。」

光 「ああ、なんたつて俺達も4人で一つのダグオンだからな

!!！」

勇士朗 (漣・・・。)

俊 「おーい・・・勇士朗、彼女に見惚れてるなよ・・・。」

勇士朗 「え?!あ、ああ、悪い!!！」

別の日の学校帰り。勇士朗は漣の家に初めてお邪魔していた。漣はベースの弦を張替えをしていた。隣でまじまじと見る勇士朗。

漣 「な、なんかそうまじまじ見られると、恥ずかしいよ・・・。」

。」

勇士朗 「え?!あ、ああ、ゴメン。こんな繊細なこと俺にはできないからつい見入っちゃった。」

漣 「くすっ……昨日学校で張り替えていこうかなって思っていたけど、つい忘れちゃって……」

漣は、繊細な手つきで作業していく。勇士朗にとってそんなそつが無い面も漣に惹かれる理由の一つだ。その時、漣は心境を語り始めた。

漣 「今年の学園祭……今年で私達が最後っていうのもあるんだけど、去年亡くなっていたコたちの為にも絶対成功させなきゃって思えるんだ……」

勇士朗 「漣……」

作業しながら漣は続ける。

漣 「今年はそのコ達の鎮魂の為にも歌おうって……思ってるんだ……勇士朗に助けられた命だから……生かせるもらった自分達ができる精一杯の事をしたい……」

勇士朗は漣の固い想いに考えさせられた。ここに至るまでにどれ程の人々が巨大生物災害の犠牲になったのだろうと。確かに闘える力はある。守るべきものを守る力はある。だが、守りきれなかった命も多々ある。本当に自分は勇者としてやってこれているのかとさえ思えてしまった。

わずかにネガティブに考えていってしまいそうになったその時、

漣が手を止めて勇士朗を見た。

漣 「本当にありがとう、勇士朗。去年のことを思うとこうしていられるのが嘘みたいだ。」

勇士朗 「え?。」

漣 「まさかこうして男の子と付き合えてるだなんて夢にも思っていなかったから・・・それもずっと私を好きでいてくれた男の子と・・・。」

ネガティブな気持ちは一気に吹き飛んだ。絃の張替えが終わると、ベットの上に座って、窓越しに見える夕日を眺める。

漣 「なんだか、こうしているといい歌詞が浮かんできそうだな・・・それに夕日みてる癒されるんだよねあ。」

勇士朗 「そうだよなあ・・・俺もこういう景色は好きだ。けど、歌詞のイメージは湧いても言葉に表現するのが難しい・・・。」

漣 「私の場合、一度スランプからでることができたら、どんどん進むんだけどな・・・。」

しばらくの間、じつと黄昏の暮れていく空を見続ける二人。その最中、勇士朗と漣はふと顔を合わせてしまう。

勇士朗と漣の鼓動が高鳴っていく。目を瞑る漣。勇士朗も目を瞑った。近づく二人の唇。そして二人は夕日に照らされながらゆっくりと、静かにキスをした。

次の日の放課後。劇の練習を終えた漣達はいつものように練習していた。勇士朗達は紅茶をすすりながら歌詞を考作する。

勇士朗と漣はちらちらと顔を赤くしながら互いに目を合わせて意識しあう。昨日のキスの余韻がまだ残っているようだった。

その時だった。ふと窓を見た梓が悲鳴を上げた。

梓 「きゃああ?!?!」

律 「なんだ?!どうしたんだ……うおお?!?!」

紬 「アレは何?!?!」

怯える梓の視線先の窓ガラスには異星人が張り付いていた。窓ガラスを割って数体の異星人が侵入する。

ガシヤアアアン!!

女子達 「きゃああああ?!?!」

勇士朗達はすぐに立ち上がる。真つ先に光りを放って勇士朗は異星人に突っ込む。

勇士朗 「漣達に手え出すんじゃねえ?!?!」

ダツ……ドオツガアアツツ!!!!

とび蹴りが炸裂し、窓の外へと1体の異星人が吹っ飛ばされる。光たちも一斉に女子達の前に立つ。

バツと一斉に腕をかざし、ダグテクターを発動させた。

光 「唯ちゃん達には指も爪も触れさせないぜ!!!」

俊 「いくぞっ・・・!!!」

4人 「トライ・ダグオンツッ!!!」

キュアアアアアアアアアアツ!!!

異星人 「* ') ||) & % \$ # ! ! ! !」

梓 「いやあああ!!!」

ダグオンに変身した4人は一斉に異星人にアタックする。梓に掴みかかるうとした異星人の面前を一瞬で捕るターボ・シユン。怒りのターボラツシユが炸裂する。

ターボ・シユン 「でえやあああっ!!!」

ドドドオドオドオドドドドドオオツツ・・・ズド

オガアアアアツ!!!

瞬時にパンチを10発叩き込んで異星人を吹っ飛ばすターボ・シユン。異星人は壁を突き破って、外に落下する。頭部から落下し、絶命する。

アーマー・レン 「砕け散れええっ!!!」

激痛にうごめきながら苦しむ異星人に、怒涛の拳をブチかましたファイヤー・コウ。燃え砕かれた異星人の身体が外へと吹っ飛ばされていく。

ファイヤー・コウ 「ったく……クソ地球外ヤロー共め……！！！！大丈夫？唯ちゃん？！」

唯 「うん、ありがとう……。」

怯えるように唯は、ファイヤー・コウの背中に寄り添う。その時、校内の運動場と街の方に同型で色違いの新たなデストリアンが出現した。ゴツイ岩のような身体にイソギンチャクのような頭部と腕がついたようなタイプだ。運動場に現れたD 29 鳴き声が響き渡る。

D 29 A 「キユギギギギキイイイイツ！！！」

出現を促したUFOはすぐに上空へと上昇し、瞬間移動したかのように消えた。音楽室の壁に空いた穴からその光景を見る5人。勇士朗は指示を出して飛び出す。

勇士朗 「俺は、街に現れたヤツを叩く！！光達は、キツイかもしれないケド、学校のヤツを頼むぜ！！！」

ファイヤー・コウ 「ああ！！！！任せな！！！」

ターボ・シュン 「急ぐぞつ、部活をしていたコ達が危ないっつ……！！！」

勇士朗 「とおあああつ!!!」

光りの球体と化した勇士朗がファイバードの胸部に飛び込む。目に光りが灯り、ファイバードに勇士朗の意識が融合する。

ファイバード 『チエエエエエンジツ!!ファイツバアアアア
ドツツ!!!』

ファイバードは、フットバーニアで身体を上昇させると、D29Bのいる方面へと飛び立つ。

一方、ダグオンチームはD29の巨体に苦戦する。大きく揮われた触手がダグオンチームの4人を吹っ飛ばす。

ドオガアアアアアアアアア!!!

ダグオンチーム 「ぐああああああ!!!」

地面に叩きつけられるダグオンチーム。だが怯む事無く己の技を信じて技を撃ち放つ。

ターボ・シュン 「怯むなっつ!!!己の信じる技を同時に叩き込むんだ!!!」

ファイヤー・コウ 「おっしゃああ!!!フェニックス・マゲナムツツ!!!」

「キュイイイイイイツツ!!!」

スカイザーに直接聞いてみるか!!」

エクスカイザーに直接通信をとるファイヤー・コウ。通信を受けたエクスカイザーは現場に向かう途中だった。

エクスカイザー 「私は今、現場に向かっている所だ!! どうしたんだ?!」

ファイヤー・コウ 「デストリアンに力を合わせて攻撃しても全く歯が立たない!! どうすりゃいいんだ?!」

エクスカイザーは、路上に止まった。あえて現場に行くのを止め、ダグオンチームにその場を托そうとしたのだ。そして大いなる助言をする。

エクスカイザー 「そうか・・・ならば、4人のダグテクター・ブレスレットのエネルギーを一点に撃ち放つんだ。その場所からはシャイニング・ダグオンを召喚される!! そして4人が同時にそれと融合合体すれば、闘う力が完成するんだ!!」

ファイヤー・コウ 「なんだって?! 何で始めから教えてくれなかつたんだ?!」

エクスカイザー 「4人の息が合わなければ出来ないからさ。だが、今の君たちにならできるはずだ・・・!!」

それを聞いていたターボ・シユン達も互いに目を合わせてうなずき合う。そして、一旦その場から退避し、D 29から離れた運動場の中央へと集まる。

ズゾゾゾゾゾゾオオオオ・・・

向かってくるD 02にフレイムキャノンを撃ち放つ。

ファイバード 『フレイムキャノンッッ！！！！』

ヴィギユアアアアア、ヴィヴィギユアアアアアアッ

！！！！

ドオズドオオオオオオオオオッッ！！！！

フレイムエネルギーの火線がD 02を後方へと吹っ飛ばす。

ファイバードはフレイムソードを取り出す。

ファイバード 『フレイムソードッッ！！！！』

D 29にそのまま突っ込んでいくファイバード。両腕からイソギンチャク状の触手が伸びる。

ビュロロドオドオドオオオオオオオッッ！！！！

ファイバード 『せやああああッッ！！！！』

ズバシャアアアアアアアアアッッ！！！！

触手を一気に斬り払う。そのまま懐に飛び込み斬り掛かった。

ファイバード 『でやああああああ！！！！』

ファイバード 『こいつら・・・!!!!?』

高校生勇者達は、二つの場所で宇宙の災厄と対峙し合う。両者ともある意味で初めての災厄を相手にする。

シャイニング・ダグオン 『いくぜええつつ!!!!』

つづく

次回予告

シャイニング・ダグオンとなったダグオンチームは、再び桜高に出現したデストリアンと激突する。だが、不意をつかれ苦戦する。一方のファイバードもD 02と合体したD 29に思いもよらぬ苦戦を強いられ、猛攻を受けながら大きくダメージを受けてしまう。そんな彼らに、シンプルにエールを送る放課後ティータイム。彼女達の声援が勇者の魂に炎を着火させる。

次回、新生太陽の勇者 ファイバード・サーガ 第60話 「
エール・トゥー・アタック」

絆の力が炎を起こすか。

第59話 「シャイニング・ダグオン」(後書き)

感想・意見お待ちしています。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6034t/>

新生太陽の勇者 ファイバード・サーガ～破壊生命体襲来～

2012年1月5日00時53分発行